

加茂岩倉遺跡

本 編



2002年 3月

島根県教育委員会
加茂町教育委員会

題字：島根県知事 澄出信義



加茂岩倉遺跡出土銅鐸群



加茂岩倉遺跡出土銅鐃群



嘉泰平錠2式銅鐃群



同范銅鐸（左：1号鐸、右：26号鐸）



鋳型の袖修（左：1号鐸、右：26号鐸）



同范銅鐸（左から：22号鐸、19号鐸、太田黒田鐸、4号鐸、7号鐸）



同范銅鐸（左：5号鐸、右：氣比2号鐸）



同范銅鐸（左から6号鐸、9号鐸、辰馬419号鐸）



同范銅鐸（左：15号鐸、右：伝淡路鐸）



同范銅鐸（左：17号鐸、右：上牧鐸）



同范銅鐘（左から伝陶器鐘、21号鐘、気比4号鐘＜複製＞、伝福井鐘）



同范銅鐘（左：30号鐘、右：3号鐘）



同范銅鐘（左：14号鐘、右：33号鐘）



同范銅鐘 (左から 31号鐘、32号鐘、34号鐘、上原敷鐘、桜ヶ丘3号鐘)



同范銅鐘 (左から 24号鐘、38号鐘、39号鐘)

序

荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡、出雲大社境内遺跡と次々に続いた大発見は、島根県が古代文化に特色をもつ県であることを全国に印象づけました。

特に、平成8年10月に発見された加茂岩倉遺跡は、全国最多の39個もの銅鐸が出土したことや、個性豊かな絵画銅鐸が含まれていたことで全国的な話題となりました。折しも、平成9年に貴重な島根の文化遺産を広く紹介する「古代出雲文化展」を開催したところ、45万人もの来場者を得ることができたのも、この銅鐸の発見があったからにはほかなりません。

このたび、加茂岩倉遺跡の報告書が、発掘調査・銅鐸調査の内容を総合的にまとめて発刊されることになりましたことは、誠に喜びにたえません。本書が古代出雲、ひいては日本の古代社会を解明することに寄与し、地域文化振興の契機になることを心から期待するものであります。

島根県では、特色ある古代文化を全国に発信し、積極的に活用していくため、「歴史民俗博物館」と「古代文化研究センター」(仮称)の建設準備を進めているところです。加茂岩倉遺跡は、その中でも荒神谷遺跡、出雲大社境内遺跡と並び重要な位置を占めており、本書の刊行によって基礎的な資料が整備され、建設される歴史民俗博物館と古代文化研究センターの内容がより豊かなものになることを願ってやみません。

終わりに、この事業を実施するにあたり御尽力いただきました関係各位に深く感謝の意を表します。

平成14年3月

島根県知事
澄田信義

発刊にあたって

平成8年10月14日、加茂岩倉遺跡で出土した39個もの銅鐸は、一遺跡としては全国最多出土の記録を塗り替える大発見でした。これは荒神谷遺跡で発見された銅劍358本、銅矛16本、銅鐸6個とともに弥生時代の出雲が青銅器大国であったことを、全国に印象づけました。この発見は研究者だけでなく、広く県民の関心を呼び、郷土の歴史・文化を見直すことで、古代文化活用の機運を高める役割を果たしました。

加茂岩倉遺跡は、その重要性から平成11年に国指定史跡、銅鐸は重要文化財に指定されました。現在、文化庁では銅鐸の保存修理事業が実施されており、加茂町では史跡整備事業が進められています。遺跡と銅鐸を地域の財産として活用するためにも、調査で明らかになった事実をいち早く提供することは重要です。

本書は、平成8～9年度にかけて加茂町教育委員会が行った発掘調査と、平成9～13年度にわたって島根県教育委員会が加茂町教育委員会と共同で実施した銅鐸調査の結果をまとめたものです。加茂岩倉遺跡と出土した銅鐸はもちろん、各地に分布する兄弟銅鐸や自然科学的調査などを総合的に盛り込んだ内容となっています。今後の青銅器や弥生時代社会の研究における基礎資料であると同時に、教育・普及の面におきましても、より豊かな歴史像の構築に寄与できることを期待しています。

最後に、調査や本書の作成に関し多大なる御指導・御協力を賜りました文化庁・奈良文化財研究所・京都国立博物館・加茂町教育委員会をはじめ関係各位に衷心よりお礼申し上げます。

平成14年3月

島根県教育委員会教育長

山崎 悠雄

発刊にあたって

加茂岩倉遺跡から2000年もの時を超えて姿を現した39個の銅鐸群。この古代弥生びとからの贈り物は、現代に生きる私たち加茂町民に深い感動を与え、また大いなる誇りを持たせてくれました。そして、人々を興奮の渦に巻き込んだあの衝撃の発見から5年、ここに遺跡の発掘調査と銅鐸調査の成果を総合的にまとめた報告書が刊行されますことは誠に喜びに絶えません。

この間、加茂岩倉遺跡は国の史跡に指定され、加茂町では、文化庁・島根県教育委員会の協力を得ながら史跡の整備を進めてまいりました。そして21世紀の扉を開いた2001年春、遺跡は銅鐸が発見された時の状況に復原され、興奮の再現と新たな感動を呼び起こしております。この時期における本書の刊行は、まさに新世紀の門出に大きな華を添え、本格的な遺跡の活用に更なる弾みをつけるものと言えるでしょう。遺跡を有する町としましては、遺跡と出土銅鐸の一体的な活用を図るべく、今後も努力していく所存です。

本書が、青銅器文化や弥生社会研究の進展に大きく寄与することを確信しつつ、最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行まで多大なるご指導・ご協力を賜りました関係者の皆様方、文化庁・奈良文化財研究所・京都国立博物館・島根県教育委員会を始めとする関係諸機関に心より篤く御礼申し上げます。

平成14年3月

加茂町長
速水雄一

発刊にあたって

平成8年10月14日、加茂岩倉遺跡から出土した39個の銅鐸は、荒神谷遺跡からの全国最多数358本の銅剣出土と並ぶ大発見でした。それは2000年の時を超えて多くの人々を古代ロマンへと誘う、まさに「弥生青銅器の国・出雲」を象徴する出来事であったと言えます。そして、この大量の銅鐸群は、私ども加茂町民に多くの出会いと感動をもたらせ、新しい文化を創造させるエネルギーとなりました。「遊学の郷・加茂」にふさわしい、神々からの贈り物となつたのです。

平成13年10月14日、加茂町は銅鐸出土5周年を迎える、「加茂岩倉銅鐸火柱祭り」で銅鐸の出土を祝うとともに、燃え上がる炎を前にして、加茂岩倉遺跡・銅鐸への思いを新たにすることができました。5年の月日の流れは、「故きを尋ね、新しきを知る」絶好の機会・手段であり、「遊学」の実践につながるものでした。

こうした中にあって、関係諸機関の協力を得ながら、発掘調査・史跡整備、そして島根県教育委員会との共同による銅鐸調査等を経て、その集大成とも言える報告書をここに刊行できることは、この上ない喜びであります。本書が、広く青銅器文化・弥生社会の研究に寄与する資料となり、また、多くの考古学・古代史ファンに更なる夢とロマンを届けるものとなりますよう願っております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行まで、多大なるご指導を賜りました文化庁・奈良文化財研究所・京都国立博物館・島根県教育委員会をはじめ、お世話になりました関係各位に衷心より篤く御礼申し上げます。

平成14年3月

加茂町教育委員会教育長
土江博昭

例　　言

1. 本書は島根県大原郡加茂町大字岩倉字南ヶ廻837-28他に所在する加茂岩倉遺跡の発掘調査報告書本編である。
2. 本書は加茂町教育委員会が1996（平成8）年度・1997（平成9）年度に国庫補助事業として実施した発掘調査、及び島根県教育委員会が1997（平成9）年度から2001（平成13）年度に行なった加茂岩倉遺跡出土銅鐸調査事業の報告書である。それぞれの調査関係者は次頁の調査組織のとおりである。
3. 本書は、本編、図版編、写真図版編（1）、写真図版編（2）の四分冊で構成されている。
4. 加茂岩倉遺跡は、1999（平成11）年1月14日付けで国指定史跡、出土した銅鐸は1999（平成11）年6月7日付けで国指定重要文化財となっている。
5. 発掘調査に際しては、土地所有者の方々、地元岩倉自治会、夜間警備に携わっていただいた方々から終始多大な協力を得た。また、発掘調査から本書の刊行に至るまで文化庁、奈良文化財研究所、京都国立博物館をはじめ、関係諸機関から多人な御指導・御協力を頂いた。記して深甚の謝意を表したい。
6. 採図中の方位は、測量法による第Ⅲ座標系の軸方位である。
7. 本書に掲載した遺跡分布図は建設省国土地理院、地質図は通商産業省工業技術院地質調査所が発行したものと作成し、遺跡周辺の地形図は加茂町農林課のものを使用した。
8. 本書の執筆者並びに執筆分担は、日次と各項目の末尾に明記した。第6章自然科学的調査では島根大学総合理工学部山内靖喜教授、（株）地球科学研究所、奈良文化財研究所肥塙隆保遺物処理研究室長・高妻洋成主任研究官、第7章考察では安来市教育委員会文化振興課三宅博士主査より玉稿を頂いた。また、京都国立博物館難波洋三考古室長には銅鐸発見以来終始懇切丁寧なる御指導を賜った。とりわけ本書における同範関係・鑄掛け・補刻をはじめとする銅鐸の調査研究結果の多くは、難波洋三氏の研究成果によるものである。記して深甚の謝意を表したい。
9. 本書の英文要約は九州大学大学院溝口孝司助教授に翻訳をお願いした。
10. 本書に掲載した図面は、調査員・調査補助員が分担して作成した。拓本については難波洋三氏に依頼して採取した。また、写真的撮影については、調査員の他、牛飼茂・杉本和樹氏に依頼した。軟X線写真・実体顕微鏡写真は島根県埋蔵文化財調査センターにおいて撮影したが、一部は奈良文化財研究所で撮影されたものを用いている。X線CT写真は奈良文化財研究所で撮影を行った。
11. 本書の編集は、各執筆者の協力を得ながら角田徳幸・山崎修が行った。

調査組織

【発掘調査】

1996（平成8）年度

調査主体 加茂町教育委員会

調査指導 文化庁記念物課、井上洋一（東京国立博物館先史室長）、岩永省三（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部主任研究官）、小川富士雄（福岡大学文学部教授）、久野雄一郎（奈良県立橿原考古学研究所指導研究員）、肥塚隆保（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室長）、近藤喬一（山口大学人文学部教授）、佐原眞（国立歴史民俗博物館副館長）、沢出正昭（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、難波洋三（京都国立博物館考古室長）、西村康（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター測量研究室長）、速水保孝（元島根県立図書館長）、春成秀爾（国立歴史民俗博物館教授）、町田章（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長）、島根県文化財保護審議会委員）、村上隆（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官）、森浩一（同志社大学文学部教授）、渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）

事務局 速水雄一（加茂町長）、矢内高太郎（加茂町助役）、土江博昭（加茂町教育委員会教育長）、岸本邦夫（同教育次長）、杉原顯道（同社会教育指導員）

調査員 吾郷和宏（加茂町教育委員会社会教育主事）、蓮岡法暉（島根県文化財保護指導委員）、勝部昭（島根県教育庁文化財課長）、宍道正年（島根県埋蔵文化財調査センター長、同古代文化センター長）、松本岩雄（島根県古代文化センター主幹）、西尾克己（島根県教育庁文化財課主幹）、広江耕史（同文化財保護主事）、岩橋孝典（同主事）、熱田貴保（島根県埋蔵文化財調査センター文化財保護主事）、錦田剛志（同主事）

調査補助員 北島大輔（明治大学大学院生）、東山信治（新潟大学研究生）、松尾充晶（京都大学研究生）

調査参加 佐藤綾子（島根県埋蔵文化財調査センター臨時職員）、中村慶子（同）、落部未知架、錦織敬夫、中林明正、庄司陽吉、井上進、石原隆文、杉原朋光、青木信子、高山和枝、平井末美

写真撮影 牛嶋茂（奈良国立文化財研究所）、楠本真紀子（写房楠華堂）

基準点測量 ワールド航測コンサルタント（株）

銅鐸出土状況写真測量 アジア航測（株）

青銅器探査 応用地質（株）

記録ビデオ （有）ビデオ・プレス

1997（平成9）年度

調査主体 加茂町教育委員会

調査指導 文化庁記念物課、井上洋一（東京国立博物館先史室長）、岩永省三（奈良国立文化財

研究所平城宮跡発掘調査部主任研究官)、小出富士雄(福岡大学文学部教授)、久野雄一郎(奈良県立橿原考古学研究所指導研究員)、近藤喬一(山口大学人文学部教授)、佐原眞(国立歴史民俗博物館副館長)、沢田正昭(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長)、田中義昭(島根大学法文学部教授)、難波洋三(京都国立博物館考古室長)、速水保孝(元島根県立図書館長)、春成秀爾(国立歴史民俗博物館教授)、町田章(奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長・島根県文化財保護審議会委員)、森浩一(同志社大学文学部教授)、山内靖喜(島根大学総合理工学部教授)、渡邊貞幸(島根大学法文学部教授)

事務局 速水雄一(加茂町長)、矢内高太郎(加茂町助役)、土江博昭(加茂町教育委員会教育長)、岸本邦大(同教育次長)、杉原顯道(同社会教育指導員)

調査員 吾郷和宏(加茂町教育委員会社会教育主事)

調査補助員 北島大輔(明治大学大学院生)

調査参加 落部未知葉、錦織敬夫、中林明正、庄司陽吉、三島歎、松浦孝夫、多田納富栄、常松孝基、三島昌了、小島裕美、永瀬邦枝

遺構写真測量 アジア航測(株)

放射性炭素年代測定(株) 地球科学研究所

【銅鐸調査】

1997(平成9)年度

調査主体 島根県教育委員会

調査指導 難波洋三(京都国立博物館考古室長)、山内靖喜(島根大学総合理工学部教授)

事務局 勝部昭(島根県教育庁文化財課長)、島地徳郎(同課長補佐)、西尾克己(同主幹)、岩橋孝典(同主事)、宍道正年(島根県埋蔵文化財調査センター長)、古崎藏治(同課長補佐)、渋谷昌宏(同主事)

調査員 熊田貴保(同文化財保護主事)、角田徳幸(同)、錦田剛志(同主事)

銅鐸写真測量 アジア航測(株)

記録ビデオ(株)エムシー・スクエア

1998(平成10)年度

調査主体 島根県教育委員会

調査指導 岩谷省三(奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部主任研究官)、沢田正昭(奈良県立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長)、田中義昭(島根大学法文学部教授)、難波洋三(京都国立博物館考古室長)、渡邊貞幸(島根大学法文学部教授)

調査指導 井上洋一(東京国立博物館先史室長)、肥塚隆保(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室長)、佐原眞(国立歴史民俗博物館館長)、春成秀爾(国立歴史民俗博物館教授)、三木文雄(元東京国立博物館考古課長)

事務局 勝部昭(島根県教育庁文化財課長)、島地徳郎(同課長補佐)、西尾克己(同主幹)、ト部吉博(島根県古代文化センター課長補佐)、宍道正年(島根県埋蔵文化財調査セ

ンター長)、秋山実(同課長補佐)、松本岩雄(同課長補佐)、足立克己(同調査第3係長)、川崎崇(同企画調整係主事)

調査員 角田徳幸(同文化財保護主事)、吾郷和宏(加茂町教育委員会文化財係長)

調査補助員 佐藤綾子(島根県埋蔵文化財調査センター臨時職員)、野津旭(同)、北島大輔(明治大学大学院生)

写真撮影 牛嶋茂(奈良国立文化財研究所)、杉本和樹(西大寺フォト)

銅錚写真測量 アジア航測(株)、(株)バスコ

記録ビデオ (株)エムシー・スクエア

1999(平成11)年度

調査主体 島根県教育委員会

調査指導 岩永省三(奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部主任研究官)、沢田正昭(奈良委員会委員)、
国立文化財研究所埋蔵文化財センター長)、田中義昭(島根県文化財保護審議会委員)、
難波洋三(京都国立博物館考古室長)、渡邊貞幸(島根大学法文学部教授)

調査指導 肥塙隆保(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室長)、森田稔(文化庁美術工芸課文化財調査官)、山内靖喜(島根大学総合理工学部教授)

事務局 勝部昭(島根県教育庁文化財課長)、小田時通(同課長補佐)、足立克己(同主幹)、
卜部吉博(島根県古代文化センター課長補佐)、宍道正年(島根県教育厅埋蔵文化財
調査センター所長)、秋山実(同総務課長)、松本岩雄(同調査課長)、西尾克己(同
調査第2係長)、今岡宏(同総務係長)、川崎崇(同主事)

調査員 角田徳幸(同文化財保護主事)、山崎修(加茂町教育委員会文化財係主任主事)

調査補助員 佐藤綾子(島根県教育厅埋蔵文化財調査センター臨時職員)、松山智弘(同)、澤田正
明(同)、北島大輔(明治大学大学院生)

写真撮影 牛嶋茂(奈良国立文化財研究所)、杉本和樹(西大寺フォト)

銅錚写真測量 (株)バスコ

記録ビデオ (株)エムシー・スクエア

2000(平成12)年度

調査主体 島根県教育委員会

調査指導 岩永省三(前奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部主任研究官・現九州大学総合
研究博物館教授)、肥塙隆保(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究
室長)、田中義昭(島根県文化財保護審議会委員)、難波洋三(京都国立博物館考古
室長)、渡邊貞幸(島根大学法文学部教授)

調査指導 三宅博士(安来市教育委員会文化振興課主査)、森田稔(文化庁美術工芸課文化財調
査官・現文化庁文化財部美術学芸課文化財調査官)、山内靖喜(島根大学総合理工学
部教授)

事務局 勝部昭(島根県教育庁文化財課長)、小田時通(同課長補佐)、足立克己(同主幹)、
卜部吉博(島根県古代文化センター課長補佐)、宍道正年(島根県教育厅埋蔵文化財

調査センター所長)、内田融(同総務課長)、松本岩雄(同調査課長)、広江耕史(同
調査第6係長)、今岡宏(同総務係長)、川崎崇(同主事)
調査員 角田徳幸(同文化財保護主事)、山崎修(加茂町教育委員会文化財係主任主事)
調査補助員 佐藤綾子(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター臨時職員)、松山智弘(同)、澤田正
明(同)、北島大輔(明治大学大学院生)
整理作業 金津まり子、堀江五十鈴
写真撮影 牛嶋茂(奈良国立文化財研究所)、杉本和樹(西大寺フォト)
銅鐸写真測量 (株)バスコ
拓本裏打ち 藤枝春月

【報告書作成】

2001(平成13)年度

調査主体 島根県教育委員会

事務局 勝部昭(島根県教育庁参事)、藤原 弘(文化財課課長補佐)、足立克己(同主幹)、
宍道正年(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長)、内田融(同総務課長)、松本
岩雄(同調査第1課長)、柳浦俊一(同調査第2係長)、今岡宏(同総務係長)、渡辺
紀子(同)安達真理子(同主事)

調査員 角田徳幸(同文化財保護主事)、山崎修(加茂町教育委員会文化財係主任主事)

【銅鐸調査協力機関・協力者】

大阪市立美術館、神戸市立博物館、京都国立博物館、静岡市立登呂博物館、静岡天満宮、島根県
立博物館、島根県立八雲立つ風土記の丘資料館、島根大学法文学部考古学研究室、財団法人辰馬考
古資料館、津山市立津山郷土博物館、東京国立博物館、鳥取県立博物館、奈良文化財研究所、文化
庁、本興寺、明治人学考古学博物館、野洲町立歴史民俗資料館(銅鐸博物館)、和歌山市立博物館
天羽利夫、魚島純一、大塚初重、大野左千夫、角建一、岸本浩忠、黒沢浩、鈴木巖大、高井梯三
郎、辻本与志一、中野宥、平泉為造、平野芳英、古川与志継、古谷毅、松浦宥一郎、松林宏典、三
浦成雄、三木文雄、凌哲夫、守屋雅史、矢野健一、和田浩

本編 目次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	(吾郷和宏)	1
第2節 調査経過		3
1. 1996(平成8)年度の発掘調査・銅鐸調査	(吾郷和宏・角田徳幸)	3
2. 1997(平成9)年度の発掘調査・銅鐸調査	(吾郷和宏・角田徳幸)	5
3. 1998(平成10)年度の銅鐸調査	(角田徳幸)	6
4. 1999(平成11)年度の銅鐸調査		7
5. 2000(平成12)年度の銅鐸調査		7

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理・地質的環境	(山内靖喜・角田徳幸)	10
第2節 歴史的環境	(吾郷和宏・角田徳幸)	11
1. 加茂町周辺の遺跡		11
2. 出雲地域の主な弥生時代遺跡		13

第3章 遺構の調査

第1節 発見時の状況	(吾郷和宏・熟田貴保)	16
第2節 青銅器探査	(吾郷和宏・熟田貴保)	17
第3節 銅鐸埋納坑の調査	(吾郷和宏・熟田貴保)	18
1. 銅鐸埋納坑(SK1)		18
2. 銅鐸の埋納及び埋土		19
第4節 銅鐸埋納坑周辺の調査	(吾郷和宏)	21
1. 2号土坑(SK2)		21
2. 3号土坑(SK3)		23
第5節 丘陵上の調査	(吾郷和宏)	23
1. 郡遺構		23
2. 落とし穴状土坑(SK4)		24

第4章 銅鐸埋納状況の調査

第1節 入れ子銅鐸	(角田徳幸)	25
1. 2(3)号鐸		25
2. 5(6)号鐸		27
3. 8(9)号鐸		29
4. 11(12)号鐸		31
5. 13(14)号鐸		33

6. 15 (16) 号鐸	35
7. 18 (19) 号鐸	37
8. 26 (27) 号鐸	40
9. 29 (30) 号鐸	42
10. 31 (39) 号鐸	44
11. 32 (33) 号鐸	45
12. 35 (36) 号鐸	47
13. 37 (38) 号鐸	49
第2節 土付き銅鐸	(角田徳幸) 51
1. 1 (4) 号鐸	51
2. 28 (7) 号鐸	53
3. 10号鐸	55
4. 17号鐸	57
5. 20号鐸	58
6. 21号鐸	59
7. 22号鐸	61
8. 23号鐸	62
9. 24号鐸	63
10. 25号鐸	64
11. 34号鐸	65

第5章 銅鐸の調査

第1節 銅鐸各部の名称	(角田徳幸・山崎 修) 67
第2節 加茂岩倉遺跡出土銅鐸	71
1. 1号鐸	(角田徳幸) 71
2. 2号鐸	(山崎 修) 75
3. 3号鐸	(山崎 修) 80
4. 4号鐸	(角田徳幸) 83
5. 5号鐸	(角田徳幸) 86
6. 6号鐸	(山崎 修) 90
7. 7号鐸	(角田徳幸) 93
8. 8号鐸	(角田徳幸) 96
9. 9号鐸	(山崎 修) 100
10. 10号鐸	(角田徳幸) 104
11. 11号鐸	(松山智弘) 109
12. 12号鐸	(山崎 修) 113
13. 13号鐸	(角田徳幸) 117
14. 14号鐸	(角田徳幸) 120

15. 15号鐸	(松山智弘)	122
16. 16号鐸	(山崎修)	127
17. 17号鐸	(角田徳幸)	130
18. 18号鐸	(山崎修)	132
19. 19号鐸	(角田徳幸)	136
20. 20号鐸	(山崎修)	139
21. 21号鐸	(山崎修)	143
22. 22号鐸	(角田徳幸)	147
23. 23号鐸	(山崎修)	150
24. 24号鐸	(角田徳幸)	154
25. 25号鐸	(角田徳幸)	157
26. 26号鐸	(角田徳幸)	159
27. 27号鐸	(山崎修)	163
28. 28号鐸	(松山智弘)	165
29. 29号鐸	(山崎修)	169
30. 30号鐸	(山崎修)	173
31. 31号鐸	(北島大輔)	175
32. 32号鐸	(北島大輔)	179
33. 33号鐸	(角田徳幸)	183
34. 34号鐸	(北島大輔)	186
35. 35号鐸	(山崎修)	190
36. 36号鐸	(北島大輔)	195
37. 37号鐸	(松山智弘)	198
38. 38号鐸	(角田徳幸)	202
39. 39号鐸	(角田徳幸)	205

第3節 同範銅鐸

1. 上屋敷鐸	(北島大輔)	208
2. 下坂鐸	(角田徳幸)	212
3. 念仏塚鐸	(山崎修)	215
4. 気比2号鐸	(角田徳幸)	219
5. 気比4号鐸	(山崎修)	223
6. 桜ヶ丘3号鐸	(北島大輔)	228
7. 伝淡路鐸(本興寺藏)	(松山智弘)	232
8. 川島神後鐸	(松山智弘)	236
9. 伝陶器鐸	(北島大輔)	240
10. 上牧鐸	(角田徳幸)	245
11. 太田黒田鐸	(角田徳幸)	248
12. 伝福井鐸(明大1号鐸)	(北島大輔)	251

13. 辰馬419号鐸(角田徳幸)	255
-------------	-------------	-----

第6章 自然科学的調査

第1節 銅鐸埋納坑及び銅鐸付着土砂の分析(山内靖喜)	262
第2節 出土炭化物 ¹⁴ C年代測定(地球科学研究所)	267
第3節 10号鐸ならびに33号鐸に付着する赤色顔料の同定(肥塚隆保・高妻洋成)	270

第7章 考 察

第1節 旧地形と遺跡の形成過程(北島大輔)	276
1. 旧地形と平坦面の復原	276
2. SK 1 (銅鐸埋納坑) と SK 2	278
3. 平坦面の埋没過程	282
第2節 銅鐸埋納状況の復原(角田徳幸)	283
1. 銅鐸の配列状況と埋納順序	283
2. 銅鐸に付着した土から見た配列状況の復原	284
3. 銅鐸埋納方法の特徴	287
第3節 銅鐸の検討(角田徳幸)	292
1. 型式分類	292
2. 同范銅鐸	297
3. 鑄掛け	307
4. 補刻	307
5. 鰐の刻み	308
6. 赤色顔料	308
第4節 「×」の刻印(三宅博士)	310
1. 「×」刻印の観察	310
2. 加茂岩倉遺跡出土銅鐸と荒神谷遺跡出土銅劍の「×」印について	316

第8章 総 括(松本岩雄)	320
---------	-------------	-----

英文要約(溝口孝司)	327
------	-------------	-----

挿 図 目 次

第1図 加茂岩倉遺跡と周辺の地形	1	第34図 1号鐸上付着状況実測図	51
第2図 加茂岩倉遺跡と周辺の地質	10	第35図 4号鐸上付着状況実測図	52
第3図 加茂町の古代遺跡	12	第36図 28号鐸上付着状況実測図	54
第4図 出雲の主な弥生遺跡と前期占墾	14	第37図 7号鐸上付着状況実測図	55
第5図 銅鐸発見時の状況	16	第38図 10号鐸土付着状況実測図	56
第6図 銅鐸出土地点と青銅器探査の結果		第39図 17号鐸土付着状況実測図	57
	17	第40図 20号鐸土付着状況実測図	58
第7図 1号庄痕（5号鐸正痕）折影	20	第41図 21号鐸土付着状況実測図	60
第8図 銅鐸埋納坑（SK1）と2号土坑		第42図 22号鐸土付着状況実測図	61
（SK2）の位置関係	22	第43図 23号鐸上付着状況実測図	62
第9図 第3郭出土土器実測図	24	第44図 24号鐸上付着状況実測図	64
第10図 2（3）号鐸入れ子状況実測図	25	第45図 25号鐸上付着状況実測図	65
第11図 3号鐸土付着状況実測図	26	第46図 34号鐸上付着状況実測図	66
第12図 5号鐸上付着状況実測図	27	第47図 銅鐸各部の名称	68
第13図 6号鐸上付着状況実測図	28	第48図 鋸齒文・縫衫文・連続渦文の名称	69
第14図 8号鐸上付着状況実測図	30	第49図 1号鐸の鑄造状態	73
第15図 9号鐸上付着状況実測図	31	第50図 1号鐸の研磨状態	74
第16図 11（12）号鐸入れ子状況実測図	32	第51図 2号鐸A面土区流木文の復原	77
第17図 12号鐸土付着状況実測図	33	第52図 2号鐸の鑄造状態	79
第18図 13（14）号鐸入れ子状況実測図	34	第53図 3号鐸の鑄造状態	82
第19図 14号鐸土付着状況実測図	35	第54図 4号鐸の鑄造状態	85
第20図 15（16）号鐸入れ子状況実測図	36	第55図 5号鐸の鑄造状態（外側）	88
第21図 16号鐸上付着状況実測図	37	第56図 5号鐸の鑄造状態（内側）	89
第22図 18号鐸土付着状況実測図	38	第57図 6号鐸の鑄造状態	92
第23図 19号鐸土付着状況実測図	39	第58図 7号鐸の鑄造状態	95
第24図 26号鐸土付着状況実測図	40	第59図 8号鐸の鑄造状態	99
第25図 27号鐸土付着状況実測図	41	第60図 8号鐸の研磨状態	100
第26図 29号鐸上等付着状況実測図	42	第61図 9号鐸の鑄造状態	103
第27図 30号鐸上等付着状況実測図	43	第62図 10号鐸の鑄造状態	107
第28図 31（39）号鐸入れ子状況実測図	44	第63図 10号鐸の研磨状態及び赤色顔料の付着位置	108
第29図 32号鐸土付着状況実測図	46		
第30図 35（36）号鐸入れ子状況実測図	47	第64図 11号鐸の鑄造状態	112
第31図 36号鐸土付着状況実測図	48	第65図 12号鐸の鑄造状態	116
第32図 37号鐸上付着状況実測図	49	第66図 13号鐸の鑄造状態	119
第33図 38号鐸上付着状況実測図	50	第67図 14号鐸の鑄造状態	122

第68図	15号鐸流水文の復原	124	第106図	下坂鐸の铸造状態	214
第69図	15号鐸の铸造状態	126	第107図	念佛塚鐸の铸造状態	218
第70図	16号鐸の铸造状態	129	第108図	気比2号鐸の铸造状態(外面)	221
第71図	17号鐸の铸造状態	132	第109図	気比2号鐸の铸造状態(内面)	222
第72図	18号鐸斜格子文の施文单位	134	第110図	気比4号鐸の铸造状態(外面)	226
第73図	19号鐸の铸造状態	138	第111図	気比4号鐸の铸造状態(内面)	227
第74図	20号鐸の铸造状態	141	第112図	桜ヶ丘3号鐸の铸造状態(外面)	230
第75図	20号鐸の研磨状態	142	第113図	桜ヶ丘3号鐸の铸造状態(内面)	231
第76図	21号鐸の铸造状態	146	第114図	伝淡路鐸の铸造状態	235
第77図	22号鐸の铸造状態	149	第115図	川島神後鐸の铸造状態	239
第78図	23号鐸斜格子文の施文单位	152	第116図	伝陶器鐸の铸造状態(外面)	244
第79図	23号鐸の铸造状態	153	第117図	伝陶器鐸の铸造状態(内面)	245
第80図	24号鐸の铸造状態	156	第118図	上牧鐸の铸造状態	247
第81図	25号鐸の铸造状態	158	第119図	太田畠田鐸の铸造状態	250
第82図	26号鐸の铸造状態	161	第120図	太田畠田鐸石舌炎測図	251
第83図	26号鐸の研磨状態	162	第121図	伝福井鐸の铸造状態(外面)	254
第84図	27号鐸の铸造状態	165	第122図	伝福井鐸の铸造状態(内面)	255
第85図	28号鐸の铸造状態	168	第123図	辰馬419鐸の铸造状態	257
第86図	29号鐸の铸造状態	171	第124図	10号鐸A点の元素分析	273
第87図	29号鐸の研磨状態	172	第125図	10号鐸A点のX線回折分析	273
第88図	30号鐸の铸造状態	175	第126図	レーザーラマン分光分析法による 赤色顔料の分析	274
第89図	31号鐸の铸造状態(外面)	178	第127図	加茂岩倉遺跡の立地	276
第90図	31号鐸の铸造状態(内面)	179	第128図	平坦面の復原	277
第91図	32号鐸の铸造状態(外面)	182	第129図	銅鐸発見時の景観	280
第92図	32号鐸の铸造状態(内面)	183	第130図	銅鐸埋納時の景観(推定図)	280
第93図	33号鐸の铸造状態	185	第131図	原位置における銅鐸の傾き 想定図(1)	285
第94図	34号鐸の铸造状態(外面)	188	第132図	原位置における銅鐸の傾き 想定図(2)	286
第95図	34号鐸の铸造状態(内面)	189	第133図	銅鐸の配列状況復原図	287
第96図	35号鐸斜格子文の施文单位	192	第134図	原位置における銅鐸の傾き 想定図(3)	290
第97図	35号鐸の铸造状態	194	第135図	加茂岩倉遺跡出土銅鐸の型式構成	295~296
第98図	36号鐸の铸造状態(外面)	197	第136図	加茂岩倉遺跡出土銅鐸と 同範銅鐸の分布	298
第99図	36号鐸の铸造状態(内面)	198	第137図	加茂岩倉遺跡出土銅鐸の	
第100図	網代文模式図	199			
第101図	37号鐸の铸造状態	201			
第102図	38号鐸の铸造状態	204			
第103図	39号鐸の铸造状態	206			
第104図	上屋敷鐸の铸造状態(外面)	210			
第105図	上屋敷鐸の铸造状態(内面)	211			

同范関係(1)	299~300	第147図 22号鐸タガネ打ち込み順序	313
第138図 加茂岩倉遺跡出土銅鐸の		第148図 23号鐸タガネ打ち込み順序	313
同范関係(2)	301~302	第149図 26号鐸タガネ打ち込み順序	314
第139図 銅舞舞型持の比較	304	第150図 28号鐸タガネ打ち込み順序	314
第140図 タガネ打ち込み方法模式図(1)	310	第151図 31号鐸タガネ打ち込み順序	314
第141図 タガネ打ち込み方法模式図(2)	311	第152図 32号鐸タガネ打ち込み順序	315
第142図 1号鐸タガネ打ち込み順序	311	第153図 35号鐸タガネ打ち込み順序	315
第143図 5号鐸タガネ打ち込み順序	311	第154図 36号鐸タガネ打ち込み順序	315
第144図 11号鐸タガネ打ち込み順序	312	第155図 38号鐸タガネ打ち込み順序	315
第145図 13号鐸タガネ打ち込み順序	312	第156図 荒神谷遺跡出土銅劍の「X」印	316
第146図 18号鐸タガネ打ち込み順序	313	第157図 加茂岩倉遺跡出土銅鐸の絵画	323

表 目 次

第1表 加茂岩倉銅鐸と同范銅鐸		第5表 銅鐸の原位置における傾き	284
A面B面対照表	70	第6表 埋納状況が明らかな銅鐸出土遺跡	289
第2表 銅鐸各部位の比率計測表	260	第7表 加茂岩倉遺跡	
第3表 X線回折分析表	266	出土銅鐸一覧表	305~306
第4表 加茂岩倉遺跡より出土した炭化材 の放射性炭素年代測定結果	269	第8表 加茂岩倉遺跡出土銅鐸における 鉛掛け・補刻一覧表	309

写 真 目 次

写真1 6号鐸外面土付着状況	262	写真6 組成・元素分析測定装置による分析	271
写真2 土砂剥ぎ取りの軟X線写真	264	写真7 レーザーラマン分析装置による分析	271
写真3 銅鐸埋納坑(SK1)とSK2の			
互層試料	265	写真8 赤色顔料の実体顕微鏡による観察	272
写真4 10号鐸の分析位置	271		
写真5 33号鐸の分析位置	271		

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

加茂岩倉遺跡は、1996（平成8）年10月14日午前10時頃、加茂町ふるさと農道整備事業大竹岩倉地区農道整備工事の工事中に銅鐸の出土によって偶然に発見された。作業員が法面工事のため重機で丘陵斜面を掘削していた際、重機のバケットの中に土砂と一緒に数個の銅鐸があるのを見つけていたのである⁽¹⁾。正午前、知らせを受けた加茂町教育委員会では職員が現地へ急行し、掘り出された大量の銅鐸とまだ土中に埋まつたままの状態の銅鐸を確認、作業の即時中止と遺跡の現状を変更することのないよう指示した。

加茂町教育委員会では、午後1時前、島根県教育庁文化財課へ銅鐸が発見された旨を連絡するとともに、現地に職員の派遣を要請した。県からは勝部昭文化財課長を始め、文化財課・埋蔵文化財調査センター・古代文化センターの職員が駆けつけ、現地にて対応を協議した。そして、埋まつたままの状態の銅鐸と遺構を保護するため、日没までビニールシートによる仮覆屋を設置。銅鐸発見状況の聞き取りや現状の写真撮影等を行って、既に掘り出された銅鐸を現地から搬出し、町文化ホールに移送・保管した。

掘り出された銅鐸には、重機により大破したものや鉢（吊り手）が欠損したものもあったが、半



現地での対応協議



第1図 加茂岩倉遺跡と周辺の地形



加茂岩倉遺跡と命名

分以上は完形であり、大きな銅鐸の中に小さな銅鐸を納めた、いわゆる「入れ子」の状態のものもあった。確認された銅鐸の数は、掘り出された銅鐸が27個、銅鐸発見の際に重機の撤削によりできたバケット坑の北側に鱗を立てた埋納状態の銅鐸が2個、南側には倒れた状態で鱗と桟の部分を覗かせている銅鐸が2個と、総数31個を数え、土中に埋まつたままの銅鐸は、この時点で計4個が確認された。

同日午後6時、町文化ホールで緊急の記者発表を行い、銅鐸発見のニュースは町とマスコミを通じて全国に伝えられた。翌15日、銅鐸出土土地は町名と大字名を探って「加茂岩倉遺跡」と命名。県文化財課の指導・協力を得て、遺跡の保全と調査や見学のための周辺整備に努めた。特に、遺跡の警備には役場職員ほか多くの方々の協力を受け、12月末まで24時間体制で警備に当たった。

連日の報道等により加茂岩倉遺跡が全国的に注目される中、18日には遺跡周辺の住民に対して遺跡を公開した。そして翌19日には遺跡の現地説明会を実施、併せて、既に取り上げられていた27個の銅鐸について一般公開を行った。銅鐸の公開会場となった町文化ホールや遺跡では、県内はもとより全国各地から訪れた人々が長蛇の列をなし、遺跡と出土銅鐸への関心の高さを一層浮き彫りにした。なお、27個の出土銅鐸は、町内には保管に適した施設がないため、この一般公開終了後、松江市打田町の島根県埋蔵文化財調査センターへ移送した。

その間、加茂町教育委員会は、発掘調査体制や予算等について県文化財課と協議を重ねた。また、10月24日には、文化庁文化財保護部記念物課や奈良国立文化財研究所などの諸機関、学界を代表する諸氏に調査指導を依頼して調査指導会を開催し、指導会では、遺跡と銅鐸の調査方法等について指導を受けた。

これを受けて、11月1日から加茂町教育委員会を調査主体として発掘調査を行うこととなり、一方、出土した銅鐸の調査は島根県教育委員会が県埋蔵文化財調査センターにおいて発掘調査と併行して実施することになった。

(吾郷和宏)



一般公開 食い入るように見つめる人々と見学者の行列

第2節 調査経過

1. 1996(平成8)年度の発掘調査・銅鐸調査

発掘調査にあたっては、まず平板測量で遺跡の現状を測量し、この地形図をもとに不定形の残丘状に残った地形に沿って任意に調査区設定用の方眼を組んだ。11月6日には、銅鐸の埋納範囲を予測するため、金属探知及び電磁探査による青銅器探査を実施した。これにより、現状で確認されている銅鐸以外に、破片等の小さな金属遺物が埋まっていると見られる箇所が確認された。また、南側の銅鐸周辺では金属反応を示す範囲にやや広がりがあったが、北側の埋納状態の銅鐸周辺は金属反応が銅鐸部分に限られ、ここに新たな銅鐸が存在する可能性は低いという探査結果を得た。

丘陵斜面は掘削工事による堆土に覆われていたが、丘陵の原地形検出と銅鐸の破片を探取するため、堆土を除去しながら施設作業を実施した。12月末までに堆土の約7割を除去し、部位のわかるものから米粒大のものまで百数十点の破片を探取した。なお、坑内外において土器等の遺物は出土しなかった。

施設周辺の調査は、足場を組んで覆屋を設置した上で、バケット坑南側の残丘部分から始めた。11月21日、青銅器探査の結果どおり、工事により搅乱を受けた土砂の中から入れ子

状態の銅鐸1組2個を新たに発見した。また、確認されていた銅鐸2個も各々が入れ子状態と判明し、銅鐸の総数は38個となった^②。これら搅乱土中にあった3組6個の銅鐸は翌22日に取り上げた。

搅乱土を除去していくと、西側や南側の斜面側には僅かに表上に残存していることがわかった。銅鐸埋納坑(SK1)の掘り方を検出し、土壤をサンプリングしながら埋納坑内の調査を進めた。青銅器探査の結果によって判明していたとおり、埋納坑内には埋納状態で発見されたもの以外に銅鐸は遺存していないかったが、銅鐸の痕跡(压痕)を3ヶ所検出した。うち1ヶ所は5号鐸のものと同定できた。

埋納坑周辺は写真測量により図化した。銅鐸の保存状態は比較的良好であったが、錫部などに脆弱な部位が認められたためアクリル樹脂を塗布した。さらに銅鐸の压痕も土で乾燥して崩れる怖れ

があるためアクリル樹脂の塗布を行った。また、压痕は配列状況を知る上で貴重な資料であるため型取を行った。

12月21日には、佐原寅・春成秀爾・難波洋三氏の指導を受けて銅鐸の配列状況の復原を試み、埋納坑の大きさが概ね2×1m程度であることも推定できた。12月30日、埋納坑内の銅鐸の取り上げを行い、その際に31号鐸も入れ子になっていることが判明して銅鐸の総数は39個となった。



施設作業



施設保護と調査用の覆屋



銅鐸の配列復原作業

年明けからは埋納坑下部の調査を進めた。埋納坑以外の遺構としては土坑（SK 2）1つが検出されたが、覆屋の支柱をこの上に設置していたため、限られた範囲しか調査できなかった。

1月17日には埋納坑の調査を終え、遺構部分に砂を敷き詰めた上、土囊により埋め戻した。排土部分と新たに検出した土坑（SK 2）の調査及び遺跡全体の地形測量は平成9年度に実施することとした。

一方、出土した銅鐸の調査は、10月28日から3月14日までの間、難波洋三氏の指導のもと、県埋蔵文化調査センターにおいて実施した⁽³⁾。工事によって取り出された銅鐸の配列状況、入れ子の関係を推定するため、銅鐸の内外面に残された土の付着状況を観察し、観察を終えたものから順次外面のクリーニングを実施した。

この時点では、銅鐸の型式は菱環紐2～外縁付紐1（I-2～II-1）式が1個、外縁付紐1（II-1）式が13個、外縁付紐2（II-2）

式が9個、外縁付紐2～扁平紐1（II-2～III-1）式が2個、扁平紐2（III-2）式が6個、扁平紐2～突線紐1（III-2～IV-1）式が3個となり、入れ子状態のままで確認できない小さな銅鐸もII-1式であることが推定されていた。また、同範関係については15個8組あることが判明しており、他地域のものでは太田黒田鐸（和歌山県）、辰馬419号鐸、川島神後鐸（徳島県）、上牧鐸（奈良県）、気比2・4号鐸（兵庫県）、伝陶器鐸（大阪府）、伝福井鐸、上屋敷鐸（鳥取県）、桜ヶ丘3号鐸（兵庫県）との関係が明らかになっていた。

出土した39個の銅鐸は、1997（平成9）年度開催の古代出雲文化展に出品されることが決定し、1月から3月まで奈良国立文化財研究所において仮補強等の保存処置が行われた。



難波洋三氏による銅鐸調査



銅鐸外表面のクリーニング

2. 1997(平成9)年度の発掘調査・銅鐸調査

平成9年度は、5月12日より土坑(SK2)など遺構部分の調査、丘陵斜面を覆っている堆土の除去と篠掛け作業を始めた。7月4日には堆土調査を完了したが、新たに銅鐸破片の採取はなく、土坑(SK2)上の搅乱土中から破片1片が採集されるにとどまった。

土坑(SK2)部分の調査は、前年度の測量基準点をそのまま用い、まず上層観察用の畦を設定した。さらに重機によって搅乱された土砂を除去し、土坑の検出を行った。既に、重機によって標高138m前後の高さまで水平に削られており、土坑の北辺や北西部では地山の花崗岩風化土がかなり深く掘り込まれた箇所もあった。そのため、土坑の北西部は当初別の土坑かとも見られたが、土層観察をしながら埋土を掘り進めた結果、銅鐸埋納坑と同様オーバーハングした掘り方になっていることが確認された。搅乱は土坑の底面まで及んでいなかったため、規模はほぼ確認できた。

土坑の埋土については土壤のサンプリングをしながら掘り進めた。埋土内には豆粒大の木炭が散在して見られたので、この木炭と前年度の調査で銅鐸埋納坑外南側において採取された木炭については¹⁴C年代測定を業務委託して実施した。また、埋土は互層状になっていたため、土層の剥ぎ取り保存を行い、土層観察用の畦は保存のためそのまま残した。

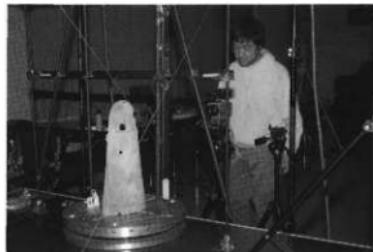
その他の遺構としては銅鐸埋納坑南西1.6mで土坑(SK3)を検出したが、重機によりかなり搅乱を受けていた。また、土坑(SK2)周辺でいくつかの小ピットが確認されたが、その性格を決定できるものではなかった。8月30日、埋め戻していた銅鐸埋納坑を再び掘り上げて遺構全体の写真測量を行い埋納坑周辺の調査を終えた。銅鐸埋納坑と土坑内は砂と土甕で埋め戻しを行った。

銅鐸出土土地北側丘陵上については、踏査により尾根上に人工的な平坦面が見られることから、雑木の伐採・地形測量を行った後、トレンチによる試掘調査を11月6日から12月25日の間に実施した。ここでは中世の山城跡と思われる郭を確認し、土師質土器が出土した。

その他に落とし穴(SK4・5)と見られる遺構も検出したが、銅鐸と関連する遺構については確認することができなかった。

銅鐸の調査は、古代山雲文化展への出品のため一時休止となったが、次年度以降予定している調査の本格着手に備え、合間を縫って銅鐸の写真測量を業者に委託して実施した。写真測量は実測図を正確かつ迅速に作成することを目的としたもので、試験的に1・22・29・34号鐸の計4個を抽出して行った。写真測量の方法は、望遠レンズを付けた写真機で銅鐸から距離を置いて撮影を行い、これをコンピュータで編集・補正して1:1の歪みのない画像を得ようとするものである。写真は1個体につきA面・B面・A右側面・A左側面・上面・下面の計6面を撮影した。

(吾郷和宏・角田徳幸)



銅鐸の写真測量

3. 1998（平成10）年度の銅鐸調査

本格的な銅鐸調査は3年計画で、4年目に報告書を印刷・刊行することを目標に進められた。調査を実施するにあたっては、県内外の弥生時代・青銅器・保存科学の研究者からなる「加茂岩倉遺跡出土銅鐸調査指導委員会」を組織した。委員会では、銅鐸調査の方法・調査結果の検討・入れ子銅鐸の取り出し方法・自然科学分野の調査など、調査の各局面に応じた問題について協議して頂き、その結果を実際の調査に反映させるよう努めた。

銅鐸の調査は、まず、入れ子状態や土の付いた状態など、銅鐸の埋納状態を示すと見られる現状について実測図を作成するとともに、写真による記録を取り、その上で土の除去を行って銅鐸そのものの実測図・写真・拓本などを作成した。銅鐸の実測図は、写真測量で得られた画像を基にして、写真では文様が見えない部分や范傷などの特徴を実際に計測する方法で作成した。

平成10年度の段階では、入れ子状態の銅鐸がまだ5組残っていた。これらについては調査指導委員会や奈良国立文化財研究所の指導で、現状の複製品を作製するとともに、銅鐸内部の土を剥ぎ取り保存した上ですべて取り出すこととした。

平成10年10月13～14日には2（3）号鐸と35（36）号鐸の2組、平成11年1月25～28日には11（12）号鐸・13（14）号鐸・15（16）号鐸の3組について内部の銅鐸を取り出した。その結果、内部に納められていた銅鐸はすべてⅡ-1式で、3号鐸と30号鐸、14号鐸と33号鐸、36号鐸と念仏塚鐸（岡山県）が同范であることも確認された。また、銅鐸内部に土が詰まつたままのもの（19号鐸・33号鐸・38号鐸・39号鐸）については、平成11年3月8～10日に土の剥ぎ取り保存を行い、土砂を取り出した。なお、13号鐸と下坂鐸（鳥取県）、15号鐸と伝淡路鐸（兵庫県）でも同范関係が判明した。



加茂岩倉遺跡出土銅鐸調査指導委員会



銅鐸内部に詰まつた土の剥ぎ取り作業



土砂の取り出し作業



入れ子銅鐸の抜き取り作業

4. 1999（平成11）年度の銅鐸調査

前年度に引き続き、銅鐸の実測・写真撮影・拓本の採取など基礎的な資料の作成作業を行った。銅鐸内部に土が詰まっているものについては、平成11年8月9～10日に7号鐸・27号鐸の土の剥ぎ取り保存を行って土砂を取り出した。また、外面に土が付着していた小さい銅鐸については、それが埋納時の状況を示すと思われることから複製品を作製し、実測図や写真等の記録を取った上で除去作業を行った。この時点で、取り除くことが必要な土はすべて除去することができ、加茂岩倉銅鐸の全容がほぼ明らかになった。

このうち、25号鐸は紐の幅が狭いことからI-2式に遡るとも考えられていたが、外縁にも鏽から続く銘文があることが判明し、II-1式であることが確認された。また、24号鐸・38号鐸・39号鐸の同范関係も明らかになった。

一方、他地域に分布する同范銅鐸については13個存在することがわかつっていたが、これらも加茂岩倉銅鐸と同様に写真測量・実測図作成・写真撮影を行い、可能なものは拓本採取を行うこととなった。平成11年度に調査した同范銅鐸は、伝福井鐸（明治大学考古学博物館）、上牧鐸（静岡市立登呂博物館）、上屋敷鐸（京都国立博物館）、伝陶器鐸（大阪市立美術館）、川島神後鐸・辰馬419号鐸（辰馬考古資料館）の6個である。

なお、平成11年度から国の事業として加茂岩倉銅鐸の保存修理事業が開始され、調査が終了した1号鐸・8号鐸・17号鐸・26号鐸の計4個が奈良国立文化財研究所に送られた。

5. 2000（平成12）年度の銅鐸調査

前年度に引き続き、銅鐸の実測・写真撮影・拓本の採取など基礎的な資料の作成作業を行うとともに、図面の浄書や原稿執筆など報告書作成作業に入った。

銅鐸の鋳掛けなど、鋳造後の補修については軟X線写真撮影による構造調査を行った。その結果、39個のうち、半数近い17個で鋳掛けがあることを確認した。時期ごとに見ると、II-1式では19個のうち4個、II-2式では9個のうち8個、II-2～III-1式では2個のうち2個、III-2～IV-1式では9個のうち3個である。銅鐸の鋳掛けはII-2式以降増えると考えられているが、こうした傾向が再確認されるとともに、II-1式に既に凹形の足掛り孔を持つものがあることが初めて判明するなどの成果があった。

一方、同范銅鐸については、念佛塚鐸（津市立津山郷土博物館）、下坂鐸（鳥取県立博物館）、桜ヶ丘3号鐸（神戸市立博物館）、伝淡路鐸（本興寺）、太田黒田鐸（和歌山市立博物館）、氣比2・4号鐸（東京国立博物館）の計7個について調査を行った。このうち、氣比2・4号鐸については「博物館所蔵の考古資料相互活用促進事業」により、鳥取県立博物館で借り受けて調査した。

なお、国の事業として行われている加茂岩倉銅鐸の保存修理事業には10号鐸・11号鐸・20号鐸・23号鐸・29号鐸・37号鐸の計6個を出すこととなり、奈良国立文化財研究所に送られた。

（角田徳幸）



銅鐸の実測作業

註

- (1) 発見者小田竜歲氏からの聞き取りによれば、この丘陵斜面の掘削は10月10日に着手し、11日には上から5mに最上段の法面ステップを完成させて2段目の法画作業を始めた。掘削した土は斜面下へ落としていた。翌・土・日曜は作業を休み、14日の朝、斜面下の堆土の中にプラスチックのバケツの口のようなものがあることに気付いたが、あまり気に留めず掘削作業に入った。そして、10時頃重機のバケットの中に数個の銅鐸が入っているのに気づいて作業を中止、斜面下を覗くと下の水田や道路に多数の銅鐸が転げ落ちていたという。それらを水田の畦に並べ、バケットの中の銅鐸を取り出して丘陵斜面の片側に寄せ置き(図版3-1)、会社に連絡を取った。発見の一報は請負業者を通じて発注元の町農林課へ、正午前に町教育委員会に連絡が入った。
- (2) 10月24日の指導会の際、既に取り上げた銅鐸のうちの1個と遺跡にある29号鐸とに各々入れ子があることが判明して総数33個。10月26日には持ち帰られていた銅鐸1個の届け出があり総数は34個になった。
- (3) 銅鐸の番号は個体確認の経緯がまちまちであり便宜的に番号を付した。結果、大きさ、入れ子関係等を反映させるなど整合性を持たせることができなかった。個体番号は、発見当日に現地から採取したものを1~28号鐸、原位置を保つ入れ子の2組4個体を29、30、31、39号鐸、搜査土中から出土の3組6個体を32、33、35、36、37、38号鐸とした。また、届け出のあった1個については31号鐸とした。
- なお、入れ子の組み合わせは、例えば2号鐸の中に3号鐸が入っていれば、2(3)と標記し、小形鐸を()に書きとした。

加茂岩倉遺跡関係年表

1996(平成8)年

- 10月14日 島根県加茂町岩倉地内で農道建設工事中に31個の銅鐸が出土
15日 町名及び大字名から銅鐸出土地を「加茂岩倉遺跡」と命名
18日 遺跡周辺住民への遺跡公開
19日 現地説明会開催・出土銅鐸一般公開【加茂町文化ホール・ラメール】(約9,000人)
公演後、出土銅鐸27個を島根県埋蔵文化財窓口センターへ輸送
24日 加茂岩倉遺跡発掘調査指導会
26日 見学台設置・一般公開開始
28日 出土銅鐸調査開始【島根県埋蔵文化財調査センター】
11月1日 加茂岩倉遺跡第1次発掘調査開始(~11月17日)
6日 金属探知・電磁探査による青銅器探査
17日 遺構保護・発掘調査用の覆屋が完成
21日 銅鐸配列状況復元(佐原眞・春成秀爾・難波洋三氏による)
23日 前日に取り上げた銅鐸6個を一般公開【加茂町文化ホール・ラメール】
30日 緊急公開シンポジウム統一・古代玉襷は存在したか「銅鐸出土の加茂岩倉遺跡は何を語る」—開催【加茂町文化ホール・ラメール】
(主催:加茂町・古代山陰文化展実行委員会・山陰中央新報社)
12月30日 銅鐸出土個数確定(総数39個/中型20個、小型19個)

1997(平成9)年

- 1月9日 仮保存処理のため銅鐸39個のうち12個を奈良国立文化財研究所へ輸送
20日 銅鐸シンポジウム・大量出土した山陰銅鐸の謎を探る—開催【島根県民会館】
(主催:加茂町・古代出雲文化展実行委員会・朝日新聞社)
4月6日 銅鐸39個・一般公開【加茂町文化ホール・ラメール】(約3,000人)
26日 古代出雲文化展 東京会場 開催(~6月8日 入館者81,109人)
5月10日 シンポジウム「弥生青銅器の国・出去~大量出土青銅器のメッセージ」開催
【東京 有楽町マリオン朝日新聞記念会館】
14日 加茂岩倉遺跡第2次発掘調査開始(~12月25日)
20日 「文化財を活かしたモデル地域」選定(出雲市・加茂町・斐川町)

- 7月3日 加茂岩倉遺跡整備構想検討委員会発足
 5日 古代出雲文化展 烏根会場 開催（～8.24 入館者296,878人）
 10月18日 加茂岩倉遺跡銅鐸出土1周年記念事業開催
 11月 文化財を活かしたモデル地域づくり推進計画「古代出雲王国の里」構想を文化庁・建設省に提出
 18日 古代出雲文化展 大阪会場 開催（～12.21 入館者65,793人）
 12月16日 加茂岩倉遺跡整備構想検討委員会より整備構想の答申
- 1998（平成10）年
 5月26日 加茂岩倉遺跡整備基本計画策定委員会発足
 28日 国際金屬歴史会議 銅シンポジウム開催【加茂町文化ホール・ラメール】
 6月16日 文化財を活かしたまちづくり委員会発足（加茂町）
 7月23日 第1回加茂岩倉遺跡出土銅鐸調査指導委員会
 8月12日 加茂岩倉遺跡国史跡指定申請
 10月13日 第2回加茂岩倉遺跡出土銅鐸調査指導委員会
 16日 文化財保護審議会 加茂岩倉遺跡の国史跡指定を答申
 24日 滋賀県野洲町銅鐸博物館開館10周年記念事業銅鐸サミット＆シンポジウム「銅鐸のまち宣言」
 （島根県加茂町・斐川町・静岡県緑江町・滋賀県野洲町）
 25日 加茂岩倉遺跡銅鐸出土2周年記念事業（B S S共催）開催
- 1999（平成11）年
 1月11日 加茂岩倉遺跡整備基本計画策定委員会より整備基本計画の答申
 14日 加茂岩倉遺跡史跡指定官報告示
 3月1日 「加茂岩倉遺跡出土銅鐸一括」国保有通知（市保記第26号）
 4月16日 文化財保護審議会 加茂岩倉遺跡出土銅鐸の重要文化財指定を答申
 6月7日 「加茂岩倉遺跡出土銅鐸一括」重要文化財指定官報告示
 15日 第3回加茂岩倉遺跡出土銅鐸調査指導委員会
 7月4日 加茂岩倉遺跡銅鐸出土3周年記念式典
 10月14日 加茂岩倉遺跡銅鐸出土3周年記念式典
 第2回全国銅鐸サミット記念事業 銅鐸展示「もっとも展」開催
 （～10.24入館者1,600人）【加茂町文化ホール・ラメール】
 23日 第2回全国銅鐸サミット「銅鐸と子ども達」開催
 24日 古代出雲王国の里「第1回古代出雲王国まつり」開催
 観光新聞移動支局開設記念「古代出雲シンポジウム」開催
 12月31日 2000年カウントダウン特別イベント「加茂岩倉銅鐸火柱祭り」開催
- 2000（平成12）年
 2月22日 第4回加茂岩倉遺跡出土銅鐸調査指導委員会
 8月19日 古代出雲王国の里「第3回古代出雲王国まつり」開催（～8.20）
 7月14日 第5回加茂岩倉遺跡出土銅鐸調査指導委員会
- 2001（平成13）年
 2月22日 第6回加茂岩倉遺跡出土銅鐸調査指導委員会
 3月 加茂岩倉遺跡遺構復元模型設置工事竣工
 8月18日 全国大学生考古学キャンプ 第1回「古代出雲学講座」開催（～8.21）
 19日 古代出雲王国の里「第3回古代出雲王国まつり」開催（～8.20）
 21日 全国大学生考古学キャンプ「古代出雲学講座」記念事業
 一般公開シンポジウム「古代出雲と九州」開催【加茂町文化ホール・ラメール】
 10月13日 加茂岩倉銅鐸出土5周年事業開催（～10.14）
- 2002（平成14）年
 3月29日 加茂岩倉遺跡发掘調査報告書刊行

第2章 遺跡の位置と環境

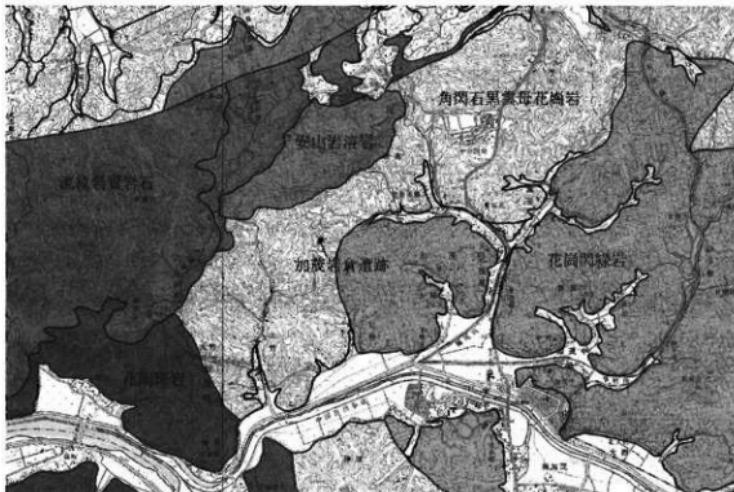
第1節 地理・地質的環境

加茂岩倉遺跡は、島根県大原郡加茂町大字岩倉字南ヶ廻837-28他に所在する。

岩倉地区は、1871（明治5）年の太政官布告では岩倉村、1889（明治22）年の町村制施行では他の村と合わせて屋裏村とされたところである。また、1934（昭和9）年には屋裏村、旧加茂町、神原村が合併して加茂町に編入され今日に至っている（加茂町1984）。

加茂町は東西6.4km・南北6.8kmほどの広さで、町の中央をほぼ東西に斐伊川の支流である赤川が貫流する。町の北西部には斐川町の高瀬山（標高280m）から岩倉大山（282.5m）へと200～250m程の山々が連なり中起伏山地が形成されている。これに対し、町の南部や北東部には比較的緩やかな50～100m程の丘陵地が広がっている。山や丘陵は赤川とその支流によって開析されることで、いくつもの谷底平野が形成されており、赤川流域を中心として盆地状の景観を呈している。また、赤川沿いには砂礫段丘が形成されているほか、谷底平野には自然堤防が見られ、主要な集落が営まれている（島根県1972）。

加茂岩倉遺跡は、加茂町の北西部、赤川の支流猪尾川を通り、さらに岩倉本郷の谷を流れる岩倉川を約1.7km入った幅20m程の狭長な谷の最奥部にある。周囲の地形は中起伏山地に分類され、標高は138m、谷底からの比高は約18mである。銅鐸が埋納されていた地点は尾根より少し下がった丘陵斜面で、谷底からは見上げるような急斜面にあるが、出土地からの眺望はあまり良くなく、東方の谷間から隣町の大東町・宍道町境の馬鞍山辺りを僅かに見ることができるだけである。丘陵下の谷部は山からの湧水が流れしており、現在では水田として利用されている。



第2図 加茂岩倉遺跡と周辺の地質（1：50,000）

加茂岩倉遺跡周辺の山地には、古第三紀の花崗岩と花崗閃綠岩が分布する。遺跡が所在する谷からその西方の城平山にかけての地域には角閃石黒雲母花崗岩（鶴花崗岩）が、その東側で大岩より下流の岩倉川南側には花崗閃綠岩（大東花崗閃綠岩）がそれぞれ幅広く分布する。黒雲母花崗岩は石英・正長石・斜長石・黒雲母・角閃石を主な鉱物とし、遺跡が所在する谷底に露出しているが、風化作用によって「真砂」と呼ばれるように砂状になっている。花崗閃綠岩は斜長石・石英・正長石・黒雲母・角閃石からなり、この付近では花崗岩より粗粒である。花崗閃綠岩も真砂状に風化している。

一方、岩倉川北岸には岩倉大山から西南西に延びる尾根が岩倉川に平行しており、その稜線上には新第三紀中新世の安山岩溶岩が花崗岩を不整合に覆って分布する。遺跡が所在する谷の入口にある「大岩」や権現（矢張神社跡）の「大岩」はこの安山岩が転落してきたものである。また、西側の高瀬山から伊経山に至る地域には新第三紀中新世の流紋岩質岩石（流紋岩溶岩、流紋岩火碎岩）、その南に古第三紀花崗斑岩が広がっている（通商産業省1991）。 (山内靖喜・角田徳幸)

第2節 歴史的環境

1. 加茂町周辺の遺跡

加茂町内においては、縄文時代の遺跡は明らかになっていないが、磨製石斧や磨石が採集された遺跡があり、その存在が予想される。遺跡が確認されているのは、弥生時代後期以降の墳墓が中心で、集落遺跡は現在までのところ発見されていない。しかし、神原神社古墳の背後の丘陵にある神原正面遺跡群B区では平坦面の斜面より弥生時代中期中葉の土器が出土しており（加茂町教育委員会1988）、今後調査が進めば、その様相が明らかになってくるものと思われる。

神原正面遺跡は、尾根上に営まれた弥生時代後期から古墳時代前期にかけての墳墓群で、1982(昭和57)年の発掘調査の後、遺跡のほとんどは公園造成のため消滅した。C区では弥生時代後期の円形台状墓1基と方形台状墓3基が確認されている。円形台状墓は径25mで、上面に多数の土壙墓があり、東側の土壙では長さ3.1m・幅0.6mの箱形木棺の痕跡が見られた。方形台状墓は尾根を切断して削り出したもので、それぞれ2~4基の主体部を持っており、中には箱式石棺を持つものもあった。E地区では大小10基の方墳が確認されている。これらは一辺6~10m前後のもので、墳頂部に1または2基の墓壙を持つ。このうち、5号墳はやや大きく12×17mの規模を有し、7基の主体部のうち、中心には箱形木棺を置いたものと推定されている（加茂町1984）。

神原神社古墳は、出雲地方最古級の前期古墳として知られている。1972(昭和47)年に赤川の河川改修に伴い、神原神社の社殿下にあったこの古墳の発掘調査が行われ、現在は石室のみが移築されている。一辺30×26m・高さ6.9mの方墳で、割竹形木棺を置いた長さ5.8mの狭長な竪穴式石室を埋葬施設とする。景初三年銘三角縁神獸鏡をはじめ、素環頭大刀・鉄劍・鐵鎌などの武器や、鉄製鍔先・鉄鑿・鉄鎌・鉄斧などの農具が副葬されていた（加茂町1984・蓮岡1972）。

土井・砂遺跡では、方墳6基、土器棺1基、土器蓋石棺墓1基が調査されている。このうち、1号墳は一辺10mの方墳で2基の主体部を有しており、第2主体部の割竹形木棺北側から破碎された内行花文鏡が検出されている（島根県教育委員会2001a）。

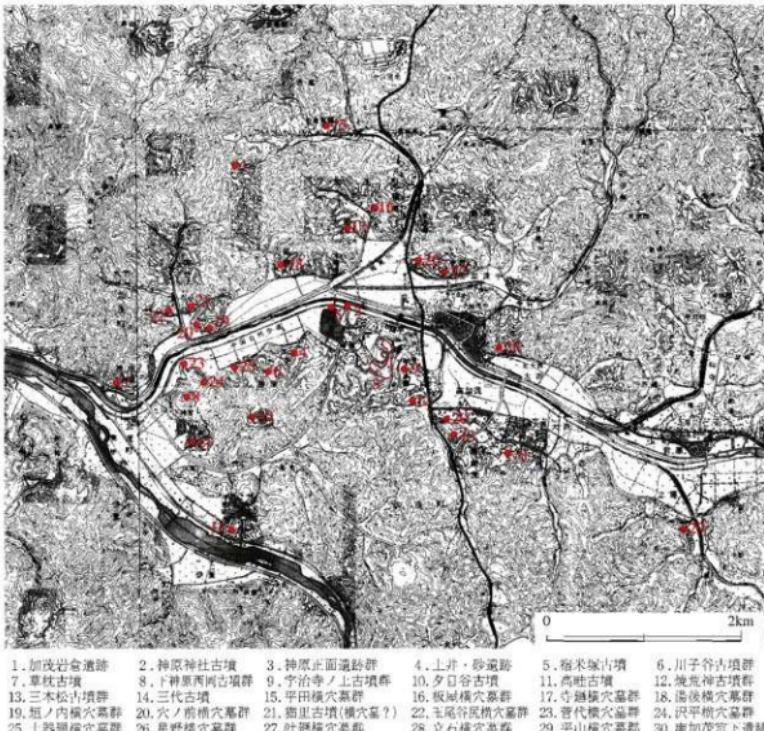
斐伊中山古墳群（大原郡木次町）は、丘陵上に営まれた16基の古墳群より構成されるもので、7

基が調査されている。このうち、2号墳第IV主体は粘土床の上に割竹形木棺をもつたもので、墓域には環を入れた排水溝が接続しており、鳥文鏡と刀子が出土している（木次町教育委員会1993）。

松本古墳群（飯石郡三刀屋町）は、古墳時代前期に繼起的に造られた2基の前方後方墳を中心とするものである。規模は1号墳が全長50m、3号墳が全長52mで、1962（昭和37）年に発掘調査が行われた1号墳では2基の粘土椁が確認されており、第1主体からは獸面鏡と鉄劍・刀子などが出土している。また、3号墳は未調査であるが、前方部がバチ形に開く形態をもつことから1号墳に先行するものである可能性が指摘されている（鳥根県教育委員会1963・出雲考古学研究会1991）。

上野1号墳（八束郡宍道町）は、径約40mの大形円墳で、「大和北部型」とされる鰐付円筒埴輪が確認されている。第1主体は粘土椁に割竹形木棺を納めたもので、斜縁二神二獸鏡・鉄劍・鉄槍・玉類などが出土している（島根県教育委員会2001b）。

古墳時代後期になると、遺跡の数はかなり増加し、古墳や横穴墓が多数築造されている。このうち、三代古墳は横穴式石室を内部主体としたと考えられるものであるが、須恵器類・鉄斧の他、金銅装環頭大刀が出土している（加茂町1984）。



第3図 加茂町の古代遺跡（1:50,000）

横穴墓としては、平出横穴墓群、玉尾谷尻横穴墓群、穴ノ前横穴墓群、寺廻横穴墓群、星野横穴墓群、叶廻横穴墓群、平山横穴墓群、湯後横穴墓群、土井・砂横穴墓群などがあり、湯後2号横穴墓のように家形石棺を内蔵したものも見られる（島根県教育委員会2001a）。

奈良時代になると、現在のところ顯著な遺跡は見当たらないが、733（天平5）年に編纂された『出雲国風土記』によると、加茂岩倉遺跡周辺は大原郡神原郷あるいは屋代郷にあたる。加茂義成氏の比定によれば、岩倉地区は屋代郷に比定され（加藤1981）、遺跡は神原との境にあたる場所である。神原郷の記述には、「所造天下大神の神御財積み置き給いし処なれば、神財郷と謂うべきを、今の人猶誤りで神原郷と云ふのみ」とあり、その地名伝承の記述との関連に興味が持たれる。また屋代郷は「所造天大神の祭立て射たまひし処なり。故、矢代と云ふ」とあり、岩倉の鎮守神の「矢櫃神社」は、矢櫃の神の社の意で「矢代」の矢を掌る神という意味ではないかとされる。岩倉は「磐座」、つまり神が降りてくる岩、神が宿る岩とされるが、先述したように矢櫃神社跡地には、磐座を思われる御神体とされていた大岩があり信仰の対象となっている（写真図版24-2）。また、谷入口の対岸丘陵にも金鶏伝承を持つ大岩も存在する（写真図版24-1）。

2. 出雲地域の主な弥生時代遺跡

出雲地域で青銅器が出土した遺跡としては、加茂岩倉遺跡の北にある大黒山、高瀬山からなる山々を挟んで僅か北西3.4kmのところに所在する荒神谷遺跡（簸川郡斐川町）が挙げられる。1984（昭和59）年、簸川南地区広域農道建設予定地内の試掘調査で発見されたもので、これまでの銅劍出土総数を上回る358本の銅劍が確認された。銅劍埋納坑は丘陵斜面に設けられており、埋納状況は銅劍の刃を上下に立てた状態で4列に整然と並べられていた。銅劍はいずれも中細形c類に属するもので、その圧倒的な数などからこの地域で製作されたものと考えられている。

翌1985（昭和60）年にも、銅劍出土地から僅か東へ7mの地点で、銅鐸6個と銅矛16本が同じ埋納坑から出土した。埋納状況は銅鐸は鉛に向かい合わせに錐を立てた状態で、銅鉢は錐と袋部が交互になるように置き刃部を立てた状態であった。銅鐸は菱環鉢1式の5号鐸、菱環鉢2式～外縁付鉢1式の4号鐸、外縁付鉢1式の2・3・6号鐸、幅出型銅鐸にも通じる特徴を持った1号鐸よりなり、1号鐸を除き畿内で製作されたものと考えられている。また、2号鐸は京都府梅ヶ畠4号鐸⁽¹⁾、3号鐸は島根県伝脇町鐸と同范関係にあることも明らかになっている。銅矛は中細形銅矛2本と中広形銅矛14本よりなり、いずれも北部九州で製作されたものである。4・7～10・13・15号銅矛には綾杉状の研ぎ分けがあり、佐賀平野東部付近の中広形銅矛との共通性も指摘されている（島根県教育委員会1996）。

志谷奥遺跡（八束郡鹿島町）では、1973（昭和48）年に銅鐸2個と銅劍6本が発見された。その後の調査により、埋納状況は銅鐸の鉛・銅劍の錐を下にして倒立した状態であったと推定されている。銅鐸は1号鐸が外縁付鉢2式、2号鐸が扁平鉢式、銅劍は中細形c類に属するものである（鹿島町教育委員会1976）。

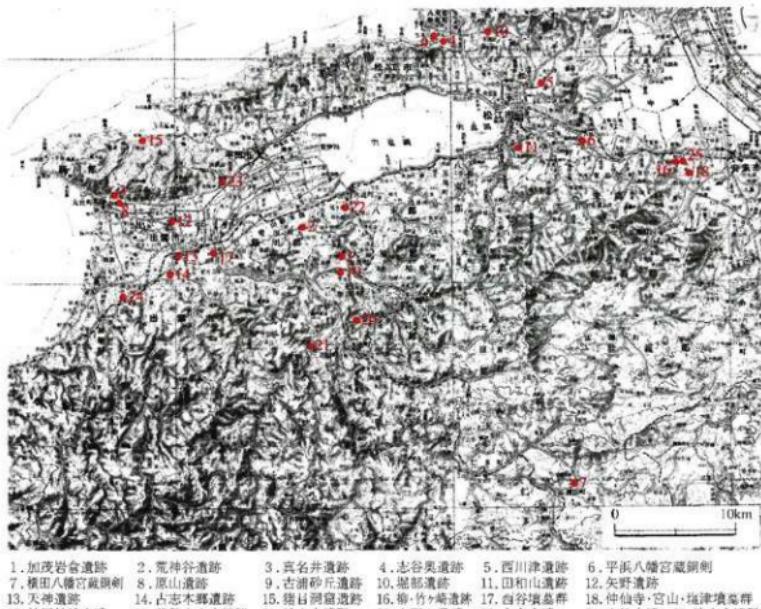
西川津遺跡（松江市西川津町）では、1997（平成9）年に朝酌川河川改修に伴う発掘調査によって銅鐸鐸身の破片が1点出土している。銅鐸は横型流水文で、外縁付鉢2式または扁平鉢1式と推定されている（島根県教育委員会1999）。

真名井遺跡（簸川郡大社町）では、1665（寛文5）年に命主神社背後の大石の下から銅戈（中細

形b類)と硬玉製勾玉が出土している(近藤1966)。「命主社神器出現之記」及び「御造當日記」によれば、寛文5年8月8日、同9月13日、寛文6年4月6日、同4月7日に青銅利器が発見されており、現存するものは寛文5年9月13日に発見されたものである。

この他に出土地は確定できないが伝世されているものとして、伝島根県出土銅鐸(八雲本陣記念財団蔵)、伝熊野出土銅鐸(八東郡八重村)、伝木次町出土銅鐸(大原郡木次町)、平浜八幡宮藏銅劍(推定地:松江市竹矢町)、横田八幡宮藏銅劍(推定地:仁多郡横田町)、伝島根県出土銅劍(農元国氏旧蔵)が知られる。このうち、伝島根県出土銅鐸(八雲本陣記念財団蔵)は、御邪文銅鐸とも呼ばれる福田型銅鐸であるが、佐賀県吉野ヶ里遺跡で出土した福田型銅鐸と同範であることが明らかになっている⁽²⁾。また、伝木次町出土銅鐸は三対耳四区製姿櫻文銅鐸で、畿内北部で製作されたものと考えられている(難波1991)。

集落遺跡は加茂岩倉遺跡や荒神谷遺跡周辺では現在発見されていないが、出雲平野には、同時代の集落遺跡が数多く見られる。斐伊川と神戸川の堆積作用によってできた川沿いの自然堤防上に営まれた集落で、原山遺跡(籠川郡大社町)、矢野遺跡・天神遺跡・古志本郷遺跡(出雲市)などの拠点的な大集落が知られている。このうち、原山遺跡や矢野遺跡は弥生時代前期から続く集落であるが、弥生時代中期前半までの遺跡は出雲平野では比較的少ない。一方、中期中葉になると、それまでの拠点集落に加えて、天神遺跡や古志本郷遺跡のような新たな拠点集落が突然現れ、後期にかけて周辺に多数の子村を成立させ農業集団を形成するという展開を見せる(田中1996)。



第4図 出雲の主な弥生時代遺跡と前期古墳 (1 : 400,000)

出雲平野周辺の墳墓遺跡としては、まず、弥生時代前期の配石墓群をもつ原山遺跡、猪目洞窟遺跡（平田市）が挙げられる。このうち、猪目洞窟遺跡は弥生時代前期から古墳時代後期末頃までの15体以上の人骨が検出されているが、第14号人骨（男性）は右手にゴホウウラ製貝輪6個をはめており、腹部に弥生時代中期後葉の壺を置いていた（大谷・大國・池田1949）。

弥生時代後期後半になると、斐伊川下流西岸の丘陵上には6基以上の四隅突出型墳丘墓を含む西谷墳墓群（出雲市大津町）が築造される。島根大学により発掘調査が行われた西谷3号墓は40×30mの規模をもつ四隅突出型墳丘墓で、墳丘斜面に貼石、裾には列石を巡らしている。中心となる埋葬施設は「木棺・木棺」の重構造を持ち、棺底には朱が一面に敷かれている。第1主体・第4主体には鉄剣・ガラス製異形勾玉・管玉が副葬されていた。また、墓壇上の供獻土器の中には吉備系の特殊土器や北陸系統とも考えられる土器が含まれており、吉備地域等との交流が注目される（田中・渡邊ほか1992）。

註

- (1) 難波洋三氏の調査成果による。
- (2) 佐賀県教育委員会記者発表資料による。

【参考文献】

- 出雲考古学研究会 1991 「松本古墳群」「古代の山雲を考える」 7
 大谷従二・大國一雄・池田次郎 1949 「出雲国猪目洞穴遺跡概報」「人類学雑誌」 第61巻1号 東京人類学会
 鹿島町教育委員会 1976 「志谷奥遺跡—銅剣・銅鐸出土地—」
 加藤義成 1981 「修訂出雲国風土記参究」 今井書店
 加茂町 1984 「加茂町誌」
 加茂町教育委員会 1988 「神原地区分布調査報告」
 木次町教育委員会 1993 「斐伊中山古墳群—西支群—」
 近藤 正 1966 「島根県下の青銅器について」「島根県文化財調査報告」第2集 島根県教育委員会
 島根県 1972 「土地分類基本調査—忠原・今市—」
 島根県教育委員会 1963 「松本古墳調査報告」
 島根県教育委員会 1996 「出雲神庭荒神谷遺跡」
 島根県教育委員会 1999 「西川津遺跡IV」
 島根県教育委員会 2001a 「湯の奥遺跡、登安寺遺跡、湯後遺跡、土井・砂遺跡」
 島根県教育委員会 2001b 「上野遺跡、竹ノ崎遺跡」
 田中義昭・渡邊貞幸ほか 1992 「山陰地方における弥生墳丘墓の研究」 島根大学考古学研究室
 田中義昭 1996 「中海・宍道満岸西部域における農耕社会の展開」「出雲神庭荒神谷遺跡」 島根県教育委員会
 通商産業省工業技術院地質調査所 1991 「1:50,000地質図 今市」
 難波洋三 1991 「同范銅鐸2例」「辰馬考古資料館考古学研究紀要」2辰馬考古資料館
 連岡法章 1972 「島根県加茂町神原神社古墳出土の景初三年鐵是作重列式神獸鏡」「考古学雑誌」第58卷3号 日本考古学会
 山本 清 1973 「猪目洞窟遺物包含層について」「島根県文化財調査報告」第8集 島根県教育委員会

第3章 遺構の調査

第1節 発見時の状況

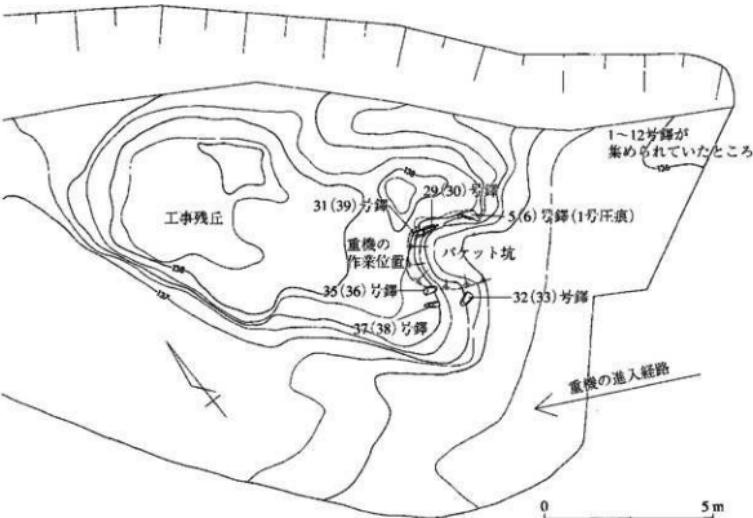
銅鐸発見直後の状況は、丘陵端部が標高136m付近まで既に掘削されており、丘陵尾根筋に当たる部分が8.0×15.0m・高さ約2.0mの不整形な残丘となっていた。現地は全体に重機により搅乱され、二次的に堆積した白色の真砂土に覆われており、掘削は表土から基盤層の真砂土（花崗岩風化層）に達しているようであった（第5図）。

残丘の南東側中央には、重機が最後に土砂を掬い上げた幅約1.5mの窪み（バケット坑）ができておらず、そのバケット坑北側断面には、鉢に向かい合わせにした銅鐸が2個（29・31号鐸）、東側にやや離れて、鉢から鐸身上半の残る銅鐸片面の圧痕（1号圧痕）が1ヶ所残されていた。これらは重機によって銅鐸埋納坑が西側から垂直に切られたことを示しており、その横断面が露出しているように見えた。断面の下側には基盤層となる真砂土があったことから埋納坑の底面が確認でき、銅鐸と圧痕周辺の土は残丘上面を覆っている真砂土とは異なり埋納坑の埋土と考えられた。

銅鐸と銅鐸圧痕は、ほぼ同一レベルに鉢を立てて並んでいる点で共通していることから、原位置を保っているものと思われた。バケット坑南側には、銅鐸の鉢（35号鐸）と裾（32号鐸）の部分が露出していたが、想定できる銅鐸の軸線とその傾きに規則性がない上、相互に高低差もあったため、重機により掘り上げられ原位置を失ったものであると考えられた。

なお、現場の東端隅には、1～12号鐸が集めて置かれており、丘陵斜面下では13～28号鐸が工事作業員により採集されていた。

（吉郷和宏・黒田貴保）



第5図 銅鐸発見時の状況

第2節 青銅器探査

銅鐸埋納坑以外に金属遺物が存在しないかどうか基礎的な資料を得ることを目的に、金属探知器および電磁探査器（浅部電磁探査装置EM-38〔Geonics社製〕）による青銅器探査を実施した。探査は余良国立文化財研究所西村康室長の指導を得て、神庭荒神谷遺跡など全国各地の遺跡で埋蔵文化財探査の実績をもつ応用地質㈱に委託して行った。探査範囲は銅鐸出土地周辺約9×15mの範囲で、事前に発掘調査用に組んだ1m方眼を利用して測点を設定した⁽¹⁾。特に銅鐸の周辺については25cm方眼を組んで測点を求めた。結果は次のとおりである（第6図）。

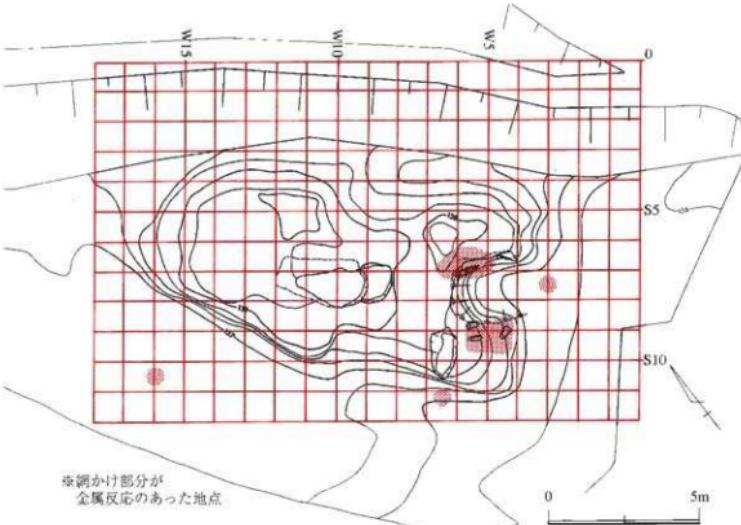
①探査時点で確認されている銅鐸については、金属探知および電磁探査器によって金属反応が得られた。

②バケット坑北側の埋納状態を保つ銅鐸2個の周辺（測点S7-W6付近）では、金属反応を示す範囲が全般的に銅鐸周辺に限られる。したがって、確認されている銅鐸の北側にさらに新たな銅鐸が存在する可能性は低い。

③バケット坑南側の倒れた状態の銅鐸2個の周辺（測点S9-W5付近）では、金属反応を示す範囲が②の埋納状態の銅鐸周辺に比べてやや広がりを見せており、銅鐸分布の広がる可能性が考えられる。ただし、埋納状態の銅鐸に比べて銅鐸が倒れている影響により金属反応がやや広めになるとも考えられる。

④その他、周辺の計3ヶ所で金属反応が認められ、小さな金属遺物（銅鐸ならば小破片）の存在する可能性が考えられる。

以上の結果から、確認されている銅鐸の他に、新たな銅鐸が埋納されている範囲が存在する可能性は低いものと考えられた。
 （吾郷和宏・熱田貴保）



第6図 銅鐸出土地点と青銅器探査の結果

第3節 銅鐸埋納坑の調査

農道工事により銅鐸埋納坑の大半は失われており、その本来の形状、規模を推定するにはかなり困難が伴うものと思われた。調査は、まず工事によって搅乱された土砂を除去し、重機掘削を免れた本来の面を露出させた。その後、銅鐸埋納坑の輪郭を検出し、埋納坑内の土層観察の後、銅鐸を取り上げ、さらに埋納坑下部の確認という順序で行うこととした。

銅鐸埋納坑調査に先立ちバケット坑南側の遺存状況の確認を行った。土層観察のベルトを残し掘り下げたところ、残丘頂部に向かってスロープ状に立ち上がる地山面上に真砂土や粘質土ブロックが二次的に斜面堆積していることがわかった。この搅乱土中からはそれぞれ入れ子になった32号鐸・35(36)号鐸・37(38)号鐸、計3組6個体が出土し、銅鐸の圧痕を留める埋納坑の埋土ブロックも若干確認された。搅乱土を除去すると残丘の上から重機が掘削した状況が明瞭に現れ、改変前の原地形が全く失われていることが判明した。

1. 銅鐸埋納坑 (SK1)

立地 埋納坑は南に張り出す急峻な尾根の先端部に近い南東斜面に位置する。工事前の地形図を見ると埋納坑付近は標高136m～139m付近にわたって緩傾斜をなしており、立木伐採後の写真からも緩斜面の存在が確認できる（写真図版2-1）。埋納坑の西側では地山の花崗岩風化土を削平した平坦面が造り出されており、工事前の原地形にある程度それが反映されていたと見られる。

規模・形状 埋納坑は長方形を呈していたと思われるが、坑の北辺と西辺の一部しか遺存しておらず、全体の規模等は不明である。残存する北辺は埋納坑底面で長さ1.81m・西辺は0.8m、埋納坑上面で北辺1.75m・西辺0.5mであった。埋納坑は基盤層の柔らかい花崗岩風化土（真砂土）を掘り込んでおり、底面は凹凸が著しい。深さは北西隅で最深0.41m、工事による削平を免れた2・3号圧痕付近で約0.3mである。工事による改変を考慮しても全体に浅い土坑と見られる。

特徴 埋納坑の掘削で特徴的なのは、壁面を横掘りし袋状を呈する点である。埋納坑壁面下付近の埋土中に壁面が剥落したような地山ブロックの堆積は見られず、意識的な掘削方法と判断した。

土坑北辺の横断面を見ると、東側の1号圧痕付近では袋状を呈する。袋状の壁と凹凸の著しい埋納坑底面との境は不明瞭で（図版5-i-j・k-l・m-n断面）、壁面には左下がりの掘削痕が認められた（図版6）。一方、西側の29号鐸付近では、壁面が直線的に立ち上がり僅かにやや内傾する程度である。掘削痕は不明瞭であったが、底面との境界は比較的判別しやすかった（図版5-g-h断面）。この相違は29号鐸と1号圧痕の中間点付近を境にしているが、埋土に掘り返した形跡が認められなかった。そのため、壁面の様相の違いは埋納坑壁の掘削・整形の処理の差と考えられる。掘削工程に先後関係を想定するならば、29号鐸付近から1号圧痕付近へと埋納坑を拡張した結果、壁と底面の処理に相違が生じた可能性もある。ただし拡張以前の埋納坑平面形を推測する手がかりは得られなかつたので、その修正の程度などについては明らかにできていない。

西壁の遺存状態は必ずしも良くなかったが、埋納坑の北西隅から2号圧痕にかけて壁面はオーバーハングしていた。注目すべき点は、内傾する壁面からさらに0.2m横掘りした砲弾状の穴が掘られ、ここに31号鐸が納められていたことである。この横掘り穴は、31号鐸の鉢の形状に合わせたかのような形状を呈するほか、埋納坑底面には当初の壁面の下端と思われる段差が僅かに残っていた。

そのため、西壁を一旦削除した後、31号鐸を配置する段階で拡張した可能性が考えられる。

2・3号圧痕部分では壁の上半を欠き、それより南側の状況も不明である。ただし、2・3号圧痕を検出する以前には、地山と同じ花崗岩風化土の土塊が銅鐸圧痕の直上に乗っていた。この土塊は2・3号圧痕に密着していた銅鐸が重機によって掘られた際に、土坑の天井部が崩落したものである可能性があり、西壁も袋状を呈していたのかもしれない。

埋納坑の東辺・南辺は全く遺存していなかったため形状等は不明であるが、遺存部分が平坦面の奥寄りであることを考慮すれば、壁面の内傾は北辺と西辺のみの特徴であった可能性もある。

2. 銅鐸の埋納及び埋土

銅鐸の配列 埋納坑内には、原位置を保ち各々入れ子になった29(30)号鐸・31(39)号鐸の計2組4個の銅鐸が残っており、銅鐸埋納の痕跡を留める圧痕も3ヶ所で確認された(図版4)。鉢を西に向ける31号鐸と鉢を東に向ける29号鐸は、互いに鉢を接して向かい合わせて置かれていた。両鐸の長軸は北側壁とほぼ平行し、壁との約0.3mの間には銅鐸の埋納を思わせる痕跡は見あたらなかった。

1号圧痕は29号鐸から東に0.65mの位置にあり、鉢を北側壁に向け埋納坑の主軸に対し斜行するように置かれていた。29号鐸と1号圧痕の間に銅鐸を埋納した痕跡は確認できなかった。また、31号鐸の南側の埋納坑壁に接して鉢の圧痕が2ヶ所(北から2号圧痕・3号圧痕)あり、2つとも鉢を東に向かって置かれていたことがわかった。

銅鐸・銅鐸圧痕の検出状況 29号鐸は、鉢に人面を鋲出した六区製婆櫛文銅鐸で、上方に向く鱗及び鉢の一部は工事掘削により破損していた。鉢をS-80°-Eに向け、僅かに北側に傾くものの、顔のあるB面を南にしてほぼ垂直に鱗を立てていた。また、上方の鱗側縁を水平にし、下に向く鱗下端を支点として鉢を起こすように置かれている。一見不安定とも思える姿勢だが、鱗下端から鉢に向かって盛り上げた瓦層が銅鐸下面を支えていることから、意図的に据えたものと判断した。29号鐸の入れ子は四区製婆櫛文の30号鐸で、鱗を北に倒した状態で内包されていた。

31号鐸は、区流文で、鉢をN-70°-Wに向け、菱環の頂部に「X」刻線を持つB面を北にしており、鱗は北側に約45°傾けて下面をほぼ水平にして置かれていた。先述した狭い横掘り穴に鉢を押し込むように納められており、横穴の大きさからすると、31号鐸は当初から鱗を傾けた状態で埋納されたと考えられる。埋納状況を平面的に見ると、鉢から身の型持孔までが横掘りの穴に納まり、全体では銅鐸上部が埋納坑壁に隠れていたことになる。また、A面に向かって右側の鐸身上半の型持孔は親指大ほどの小石で塞がれていたが、型持孔から土砂が流入しないように、人為的に置かれたものかどうかは明らかでない。また、入れ子の39号鐸は四区製婆櫛文銅鐸で、鱗を北に倒した状態で内包されていた。

1号圧痕は重機掘削の直後、銅鐸が抜け落ちたものである。鐸身片面の大半を良好に残し、表面には緑青が付着していた。工事の掘削が上方の鱗側縁まで及び、端部には破片が残っていた。鐸身に当たる面には部分的に流文の条線も認められ、菱環の隆起部分も明瞭であった(写真図版10-1)。1号圧痕を遺した銅鐸の同定は、圧痕の計測値・流文の特徴・破損の状態を手がかりに候補になる銅鐸を選んだ。そして圧痕の拓本(第7図)と銅鐸流文の比較検討を経て、最終的に候補となった2つの銅鐸を圧痕に当てた結果、5号鐸の痕跡であることが確定した。圧痕から復元

できる5号鐸の埋置状況は鋸をN-33°-Wに置き、菱環に「×」の刻線があるB面を北側壁に向け、鋸を北に約40°傾けていた。上方の鱗側縫は水平で29号鐸のそれとレベルがほぼ揃うが、銅鐸の大きさや鐸の傾きを考慮しても埋納坑底面には接地してはいなかったと見られる。5号鐸の表面を見るとA面鱗身の左側に砂礫を混じえた濃緑色の鉛が固着している。鐸を原位置に戻してみるとこの部分が西側に最も張り出す位置に当たることから、5号鐸の隣にあった銅鐸が並列し、互いに身を接する位置関係にあった可能性がある。5号鐸は入れ子状態のまま掘り出されており、内包する四区複縫櫛文の6号鐸は、鋸を北に倒して納められていた。

2号圧痕は鋸下端から裾の痕跡を留め、これに対応する反対面の裾下端部の鉛も壇面に残っていた。鋸から裾下端の圧痕が埋納坑壁に食い込むように遺存していたことから、裾を壇に押しつけるように銅鐸を置いたことがわかる。圧痕面の北端は31号鐸身に達しており、この部分に銅鐸の本体を覆う鉛とは異なる濃青色の筋が固着していたことから、2号圧痕を遺した銅鐸は31号鐸と身を接して置かれていたと考えられる。圧痕表面には粉状の鉛が付着していたが、下辺横帯の文様等は確認できず、現場において個体の同定はできなかった。

3号圧痕は2号圧痕の南側にあり、鋸下端から裾の痕跡を留めていた。対応する反対面の裾の痕跡は工事掘削により消失するが、鋸下端が壇に食い込むように残存するため、この銅鐸も壇に裾を押しつけて据えられたようである。また、2号圧痕との位置関係から互いに身を接して置かれていたようである。表面には鉛が付着するが、個体を同定する手がかりは得られなかった。

埋土 埋納坑内の埋土には二次的な掘り返しや銅鐸を被覆する構造物等の痕跡は認められず、暗褐色粘質土と黄褐色砂質土が互層状に堆積していた。ともに丘陵周辺で見られる土と同質であったが、意図的に使い分けたと考えられる。29号鐸・31号鐸の上方では埋納坑外の平坦面から延びる茶



第7図 1号圧痕（5号鐸圧痕）拓影

褐色粘質土が掘り方と埋土を覆っていた。平坦面上のこの土中から炭化物が若干出土したが、散在した分布を示し焼土は確認できなかった。埋納坑内の互層状埋土は全体として壁から銅鐸に向かって下がるように傾斜しているが、場所によってその様相は異なる。31号鐸と1号圧痕付近では、粘質土・砂質土とも厚みを持ち、比較的単純な様相を示す（図版5-e-f・i-j・k-l・m-n断面）。ただし、31号鐸直下では空隙が生じていた（図版5-e-f断面）。

一方、29号鐸の周囲を見ると、銅鐸の下面では土層は水平で、それより上方では壁から延びる薄い粘質土が銅鐸側面を支えるように厚みを持って終わっている（図版5-g-h断面）。互層の数も31号鐸、5号鐸（1号圧痕）周辺より多く、これら2つの銅鐸に比べ29号鐸がより丁寧に埋置されたことが窺えた。埋納坑内を調査した限り29・31・5号鐸を置くための共通する据え付け面ではなく、少なくともこの3鐸は埋納坑の完成後、順次埋納されたようである。（吾郷和宏・熱出貴保）

第4節 銅鐸埋納坑周辺の調査

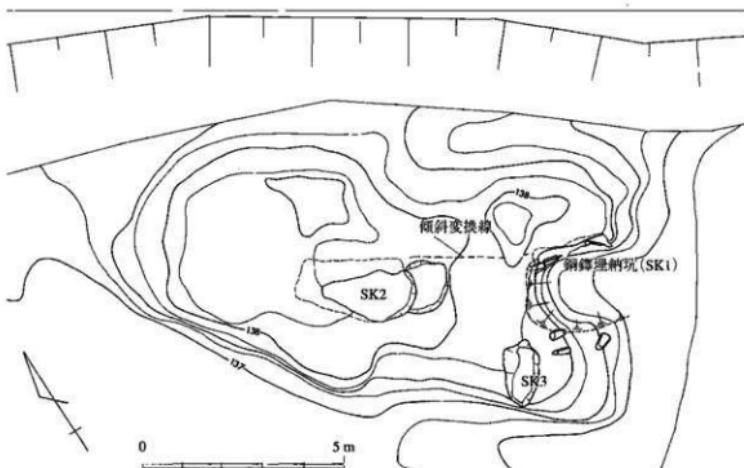
1. 2号土坑（SK2）

立地 2号土坑（SK2）は銅鐸埋納坑（SK1）から西2.5m、残丘のほぼ中央部に当たる位置で検出された。SK1とSK2の間では重機による削平が地山の花崗岩風化土まで及んでおらず、搅乱土を除去すると茶褐色粘質土が薄く堆積して残っていた。そして、茶褐色粘質土の下には地山平坦面が造り出されており、SK2からSK1に向かって緩やかに傾斜する。平坦面はちょうどSK1の北辺とSK2の北辺を結ぶ線の付近で丘陵北側の丘陵基部に向かう傾斜が変換するため、この辺りで丘陵上方に斜面が立ち上がっていたと考えられる（第8図・図版7）。

形状・規模 SK2は北西側で重機による削平を受けているが、損傷は少なく全体像がほぼ確認できた（図版8・9）。土坑は地山の花崗岩風化土を掘り込んで造られており、不整形な隅丸長方形を呈する。規模は坑の上面で2.4m×1.3m、底面で3.0m×1.6m、深さ0.45mを測る。

土坑の掘削で特徴的なのは壁面をオーバーハングさせている点である。丘陵基部側に当たる坑の北側から北西側にかけては、北側で約40cm前後、北西部の最も深いところで約80cm程度横掘りし、土坑断面は上面よりも底面が広い袋状を呈している。この掘削方法は銅鐸埋納坑にも見られた特徴である。また、横掘り部分とその他の部分では底面の傾斜が異なるため、豊穴を掘った後に壁面を横掘りしたものと見られる。土坑の北辺は掘り方の輪郭を僅かに残す以外は重機による掘削を受け、北西側はこの袋状になった天井部が重機の掘削により失われていた。そのため、当初北西部は別の土坑とも見られたので、かなり細かく畦を設定して土層観察を行ないながら埋土を掘り進めた。しかし、埋土に切り合ひ関係は認められず、土層が連続していることや、横掘りした土坑の天井部が北側から北西側に統くこと、土坑底面の北辺もほぼ一直線に繋がることなどから、横掘りした土坑の天井部が重機によって削り取られた跡と考えられ、1つの七坑であると判断された。土坑の東側から南東側にかけては上端より下端が狭く一般的な土坑の掘り方と見られるが、さらにその東側に0.4×0.5m、深さ0.2mの方形状の土坑が付随するような形で二段掘り状になっている。

埋土 土坑上面は標高138m前後の高さまで重機により削平されていたため、土坑埋土や地山平坦面の上を覆う茶褐色粘質土層は確認できない。土坑内には赤褐色粘質土と黄褐色砂質土が互層状にはほぼ水平に堆積していた。銅鐸埋納坑内の埋土も暗褐色粘質土と黄褐色砂質土の互層になってお



第8図 銅鐸埋納坑（SK1）と2号土坑（SK2）の位置関係

り共通する特徴である。色調は銅鐸埋納坑の暗褐色粘質土の方が土坑の赤褐色粘質土より多少暗い印象を受ける。ただし、肉眼観察では土坑埋土が銅鐸埋納坑と同様に丘陵周辺で見られる土と同質のように見られた。土層観察からは掘り返しを受けた痕跡は認められず、土坑東側に付随する土坑まで埋土が連続し、部分的には横掘りした土坑の奥にまでこの2色の土の互層が見られた。互層が最も顕著な中央部分では、厚さ0.5~1.5cmの赤褐色粘質土層と3.0~10.0cmの黄褐色砂質土層がそれぞれ交互に6~7層堆積していた。

この互層が自然に形成されたか人為的なものかであるが、自然堆積によりできたとすれば、土坑が埋まるのにはかなりの時間を要する。その際には互層間に腐食土を挟んだり、砂粒の粒子に大小の変化が見られると考えられるが、そうした状況は認められなかった。おそらく意図的に2色の土を使い分け、交互に丁寧に積んで埋めたと考えられる。ただし、土層断面の観察や互層を面的に剥がしながら調査を行ったが、層を突き固めたような痕跡までは確認できなかった。なお、土坑内の埋土は銅鐸埋納坑の調査と同様に、縦・横・深さを10cm間隔で土壤のサンプリングを行ったため、面的調査は部分的にしか実施できていない。

埋土内には豆粒大の炭化物が散在して見られたが、有機質の土壤などは確認されなかった。また、遺物も全く出土しなかった。中央の土層観察帶ベルト内は発掘を行っていないので遺物が存在する可能性は否定できないが、金属探査でもこの周囲において金属反応はなく、地ドレーダーによる透視でも埋蔵物の反応はなかった。なお、SK2周辺では小ピットがいくつか検出されたが、穴の形状も不整形であり、柱穴などその性格を決定できる状況ではなかった。

2. 3号土坑 (SK 3)

銅鐸埋納坑 (SK 1) の南西約1.6mでは3号土坑 (SK 3) が検出された。土坑の平面形は不整な長方形状を呈しており、規模は長さが1.5m・幅は0.75m・底面の長さ1.4m・幅は0.1~0.4mを測り、深さは0.55mである。重機による掘削は土坑の底面までは達していなかったものの、かなり深いところまで及んでおり、残存する埋土は上層に暗黄褐色土が、下層に黄褐色土が堆積していた。SK 3周辺ではSK 1やSK 2を覆う茶褐色土層が搅乱により失われており、これらに伴う遺構かどうかは不明である。土坑内からは遺物は出土していない。

(呂郷和宏)

第5節 丘陵上の調査

銅鐸出土土地の上方の丘陵上には1/1000の地形図や踏査によって平坦地が存在することが確認された。雑草木の伐採後の地形観察では、平坦地は北西から南東方向に延びる丘陵尾根の自然地形に沿って3段に削平地形が連なり、丘陵先端北東斜面にも一段低い位置に平坦面が確認され、山城を形成する郭遺構と考えられた(図版11)。また、本丘陵の北東には、同じ山塊から西に派生する丘陵上に3段5連の郭をもつ大谷城跡(現在は消滅)が所在することから(蓮岡1983)、大谷城跡を形成する一連の郭遺構と思われる。しかし、この削平地に銅鐸埋納に関連する遺構が残存する可能性も考えられるので、丘陵先端部に位置する第3郭について地形測量を行ない、幅1mのトレンチを尾根に沿って中央に1本、尾根に直行するトレンチを2本設定して試掘調査を行なった。

1. 郭遺構

第1郭は標高約154.3~155mの丘陵尾根上にあるもので、長さは27.0m・幅は3.5~6.0mと細長い平坦面である。第2郭とは約1.2mの段差がある。

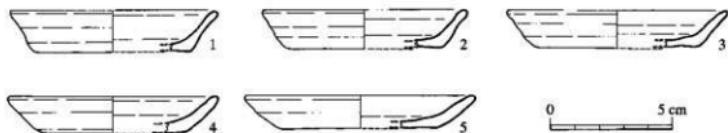
第2郭は第1郭と第3郭の間にあり、長さ3.0m・幅5.5mの小規模な半円状の平坦面である。

第3郭は標高約152mの丘陵突端部に位置し、長さ24.0m、先端側で幅8.0m、奥側で幅4.0mの細長い平坦面である。基本的な土層の層序は、表土の下に暗黄褐色土層、その下は赤褐色粘質土(真砂土)の地山となっている。丘陵突端部では暗黄褐色土層の下に赤褐色粘質土が見られ、地山を削平した土を盛土して平坦面を広げているのが確認された。郭中央部に当たるT-3・T-4の表土及び暗黄褐色土層中には炭化物が混在する個所があり、数十点の土師質土器細片が出土した。しかし、郭に伴う建物遺構などは確認できなかった。

第4郭は、第3郭の突端北東側の約2.0m下にある郭で、長さ4.0m、幅6.0~8.0mの小規模な台形状の平坦面である。

出土遺物は、第3郭の表土及び暗黄褐色土層中から出土した土師質土器のみである。細片であるがいすれも浅い小皿と見られる。このうち、実測が可能であった5点を掲載する(第9図)。

1はT-4より出土したもので、口径8.4cm、底径6.4cm、器高1.7cmを測る。体部は短く逆「ハ」の字状に立ち上がり、口縁端部がやや外反する。底部の切離しは回転糸切りによる。胎土は微砂粒を少量含み、淡黄灰色を呈する。2はT-4より出土し、口径8.3cm、底径6.3cm、器高1.6cmを測る。体部は短く逆「ハ」の字状に立ち上がり、口縁端部がやや外反する。底部の切離しは回転糸切りによる。胎土は微砂粒を含み、淡黄褐色を呈する。3はT-4より出土し、口径9.0cm、底径6.7



第9図 第3郭出土土器実測図

cm、器高1.5cmを測る。体部は短く逆「ハ」の字状に立ち上がり、口縁端部がやや外反する。底部の切離しは不明である。胎土は微砂粒を含み、淡黄橙色を呈する。4はT-4より出土したもので、口径8.6cm、底径6.0cm、器高1.5cmを測る。体部は短く逆「ハ」の字状にやや内湾気味に立ち上がる。底部の切離しは不明である。胎土は微砂粒を多く含み、淡橙色を呈する。5はT-3より出土したもので、口径9.4cm、底径6.6cm、器高1.3cmを測る。体部は短く逆「ハ」の字状にやや内湾気味に立ち上がる。底部の切離しは不明である。胎土は微砂粒を含み、淡橙褐色を呈する。

一方、近接する大谷城跡については、昭和57年に行われた発掘調査により、口径9.0cm前後、高さ1~1.5cmの土師質土器の小皿や中国製の陶磁器、古鏡が出土している。このうち土師質土器は本調査により出土した土師質土器と非常に類似していることから、ほぼ同時代のものと見られ、今回調査した郭遺構については、同一丘陵上に所在するという立地状況などを勘案すると、大谷城跡を構成する郭群の一部と考えられる。なお、大谷城跡は出城的なもので、出土した陶磁器から16世紀後半に位置付けられ、文献等から宍道氏に由来する遺構とみられている。

2. 落とし穴状土坑 (SK 4)

第3郭北西側では、2基の土坑 (SK 4・5) が検出された (図版12)。

4号土坑 (SK 4) は尾根筋にあたる標高151.6mで検出した。長さ1.5m、幅0.8mのほぼ長方形を呈し、床面までの深さは1.0mを測る。土坑はほぼ垂直またはややオーバーハングさせて掘られる。床面のはば中央には長さ0.6m、幅0.5m、深さ0.6m、のピットが真下に向けて掘削され、埋土には黄褐色土が堆積する。出土遺物はないが、形態から縄文時代の落とし穴と考えられる。

なお、5号土坑 (SK 5) については、長さ2.0m、幅0.7m以上、深さ0.8mを測るが、完掘していないので詳細については不明である。

(吾郷和宏)

註

(1) 基準点をS 0 W 0 とし、1m間隔で南側にS 1・S 2…、西側にW 1・W 2…と呼称、埋納坑付近は29号錸の主軸とほぼ重なるS 6-W 3とS 7.5-W 8とを結ぶ線を基準線として調査区を設定した。

【参考文献】

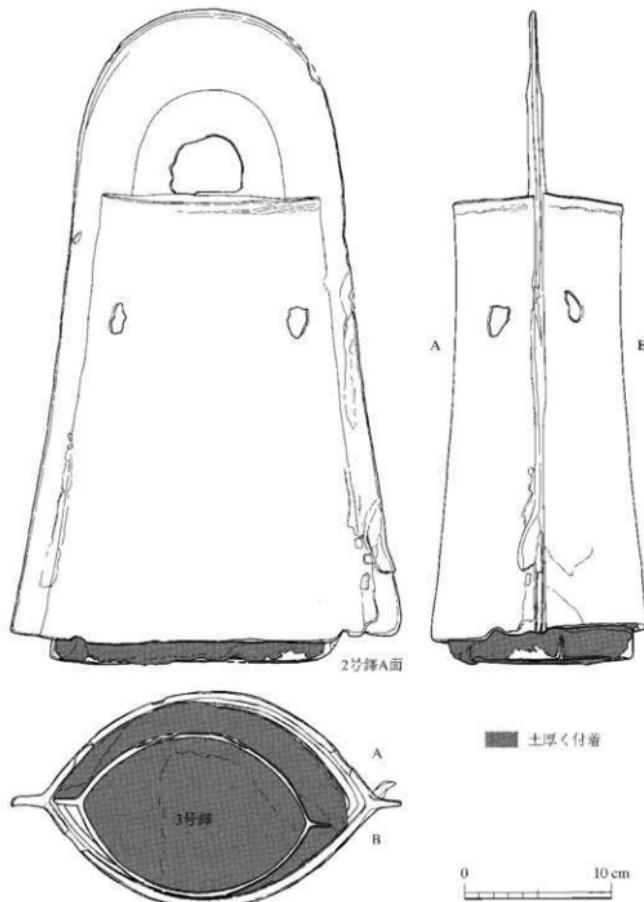
連同法障 1983 「加茂・大谷城跡」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第X集 島根県教育委員会

第4章 銅鐸埋納状況の調査

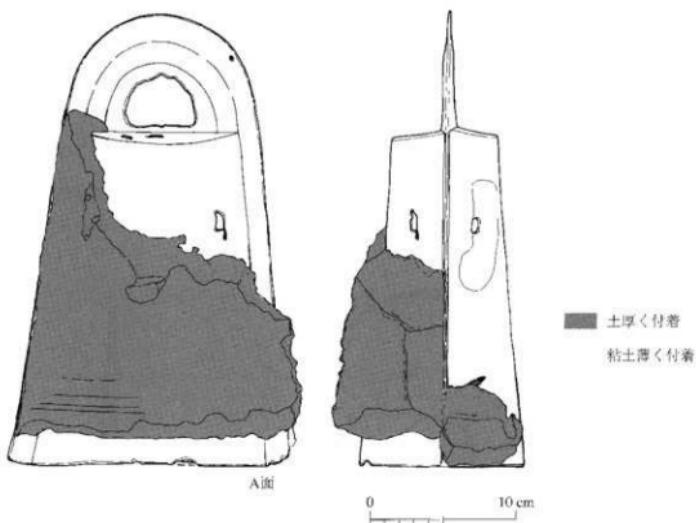
第1節 入れ子銅鐸

1, 2 (3) 号鐸 [写真図版33・39・383~385]

出土状況等 2 (3) 号鐸は重機により掘り返されており、発見された時には既に原位置を失っていた。発見場所は埋納坑より東側に 5m 離れた地点で、1号鐸、4号鐸、5 (6) 号鐸、7号鐸、



第10図 2 (3) 号鐸入れ子状況実測図



第11図 3号鐸上付着状況実測図

8（9）号鐸、10号鐸、11（12）号鐸とともにまとめて置かれていた。

2（3）号鐸は入れ子状態のままで出土しており、1998（平成10）年10月13～14日に内部の土砂を剥ぎ取り保存した上で、取り出し作業を行っている。

入れ子の状況等 2号鐸のA面側から見ると3号鐸は2号鐸鐸身左側に寄っており、裾から見ると2号鐸B面側に3号鐸が接するという位置関係となる。これは2号鐸がA面右側の鰐を上にし、B面側に傾いていたことを示しており、A面右側の鰐が一部が重機と接触して変形しているのは、これに対応しているものと見られる。また、鰐が鉢側にめくれるように破損していることから、原位置では裾を重機に対し外向き、すなわち東向きにしていたことが考えられる。

裾の関係は、内側の3号鐸の裾が2号鐸の裾よりも1～1.5cm程度出た状態であった。

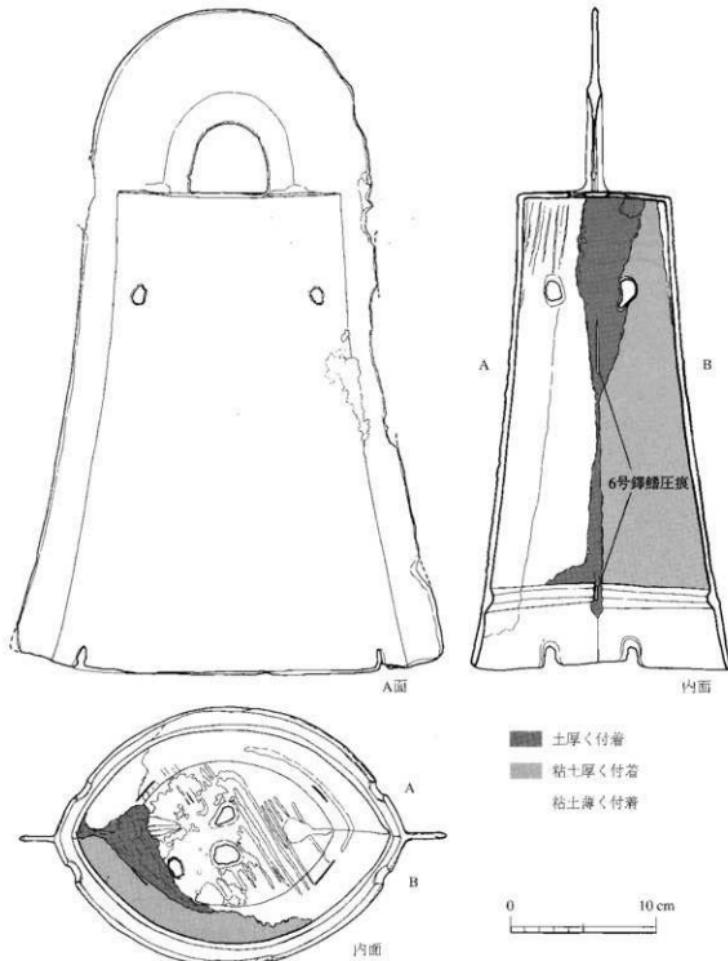
内部の土 2（3）号鐸内部の土は、裾部から見ると3号鐸には一杯に詰まっているが、原位置では上側になる2号鐸A面右側鰐付近や、下側になるB面右側の鰐付近に隙間が見られる。また、X線CT写真（図版383～385）では、2・3号鐸とも埋まっていた際の上部舞側に大きな空隙ができており、2号鐸と3号鐸が接する下側部分や鐸身型持孔付近にもやや隙間が認められる。

3号鐸外面の土 原位置では上側になるA面右上の鰐から舞にかけてはあまり土が付かず、細かい粘土が薄く付いており、これがX線CT写真的空隙に対応するものと見られる。また、下側となる鐸身左側を中心に裾付近では全体に厚く土砂が付いており、2号鐸と接する部分では表面に薄く広く縁寄せが付着している他、内面突帯の圧痕も残っていた。B面側は2号鐸と接するような位置にあったため、裾部以外ではあまり土は厚く付着しておらず、全体に薄く粘土が付着している状態であった。また、原位置では上になる鐸身左上の型持孔付近は粘土もあまり付いていなかった。

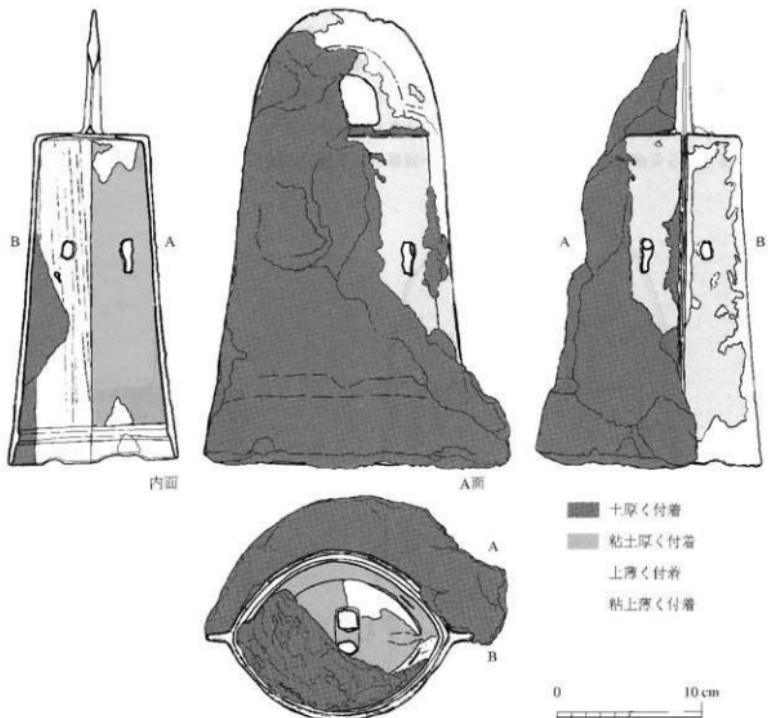
2. 5 (6) 号鐸 [写真図版50・51・56-2・58・62-2]

出土状況等 5 (6) 号鐸は重機により掘り返されており、発見された時には既に原位置を失っていた。発見場所は、埋納坑より東側に5m離れた地点で1号鐸、2 (3) 号鐸、4号鐸、7号鐸、8 (9) 号鐸、10号鐸、11 (12) 号鐸とともにまとめて置かれていた。

その後、銅鐸埋納坑に残っていた銅鐸の抜け落ちた痕跡のうち、銅鐸上半分の状況がよくわかる1号圧痕が5号鐸の圧痕であることが拓本や観察による検討の結果判明した。圧痕から復原できる



第12図 5号鐸土付着状況実測図



第13図 6号鐸土付着状況実測図

埋納状況は、紐を北西方向（N-33°W）に向け、B面を埋納坑北壁側に置く。また、A面右側を上に鰐を立てた姿勢をとっているが、埋納坑北壁（B面）側に傾いている。

5・6号鐸は入れ子状態のままで出土しているが、1996（平成8）年11月の段階で6号鐸の取り出しが行われている。

入れ子の状況 外側の5号鐸A面側から見ると6号鐸は5号鐸鐸身左側に寄っており、裾から見ると5号鐸B面側に6号鐸が接するという位置関係となる。これは5号鐸がA面右側の鰐を上にして、鰐を上下方向に立てた状態で埋められていたことに対応しており、5号鐸A面右側の一部が破損しているのは、埋納坑上部が削平された際の損傷と見られる。

据の位置関係は、5（6）号鐸の据がほぼ揃っていた。

5号鐸内面の土 5号鐸内面の土は、埋納されていた時点で下側になっていたA面左側の内面縫から舞にかけて上が厚く付着した部分が認められ、その一部には6号鐸の鰐圧痕も僅かに残っている。また、原位置における下半部には粘土が付着しているのに対し、上半部には土が付着していないことから、上半部には隙間があったものと見られる。

舞にはB面側からA面側に下がるように粘土が縞状に薄く付着している。これは銅錆が原位置にあった際、内部に水が溜まり、水位が上下したために付いたものと思われ、その傾きからB面側に鱗が33°傾いていたことが想定される。

なお、原位置では上半分にあたるA面右側の内面に粘土が薄く垂れたように付着しているが、これは錆身に空いている穴から粘土が染み出したものである。

6号錆の土 5号錆から取り出した後の6号錆外面の土は、A面側に厚く付いている。土は幅から錆方向に下がるように付着しており、5号錆の内面突帯に当たっていた部分にはその圧痕が残っている。原位置では上側になる錆身型持孔から錆付近は土は薄く付く程度であり、隙間があったものと見られる。B面は5号錆に接していたため土の付着は少なく、下半分に粘土が薄く付着し、上半分には土が薄く付く程度であった。

内面の土は下側になるB面側からA面左側に傾斜するように厚く残っている。土上面の傾斜は5号錆の傾きに対応しているものと見られるが、発見時には既に上半部が空洞になっていたことから、内部にはあまり土が入っていないかったものと見られる。

舞とA面右側には粘土が早く付いているが、B面左側は粘土が薄く付いている。B面左側の粘土は内面の錆付近に縞状に付いており、内部に水が溜まっていたことがわかる。

3. 8(9)号錆 [写真図版68・73-2・75・79-2]

出土状況等 8(9)号錆は重機により掘り返されており、発見された時には既に原位置を失っていた。発見場所は埋納坑より東側に5m離れた地点で、1号錆、2(3)号錆、4号錆、5(6)号錆、7号錆、10号錆、11(12)号錆とともにまとめて置かれていた。

8(9)号錆は入れ子状態のままで出土しているが、1996(平成8)年10月に発見された時点では、内部の9号錆が半ば抜けかけており、内部に土はあまり入っていないかった。

入れ子の状況 8・9号錆は発見時の経緯から、入れ子の状況に判然としない点がある。しかし、8号錆内面、9号錆外面の土の付着状況からすると、8号錆はA面右側の鱗を上とし、9号錆はB面右側の鱗を下とし、鱗を上下に立てて埋納されていたことが想定される。また、9号錆B面が8号錆A面に接していたことから、8号錆A面側に傾いていたものと思われる。

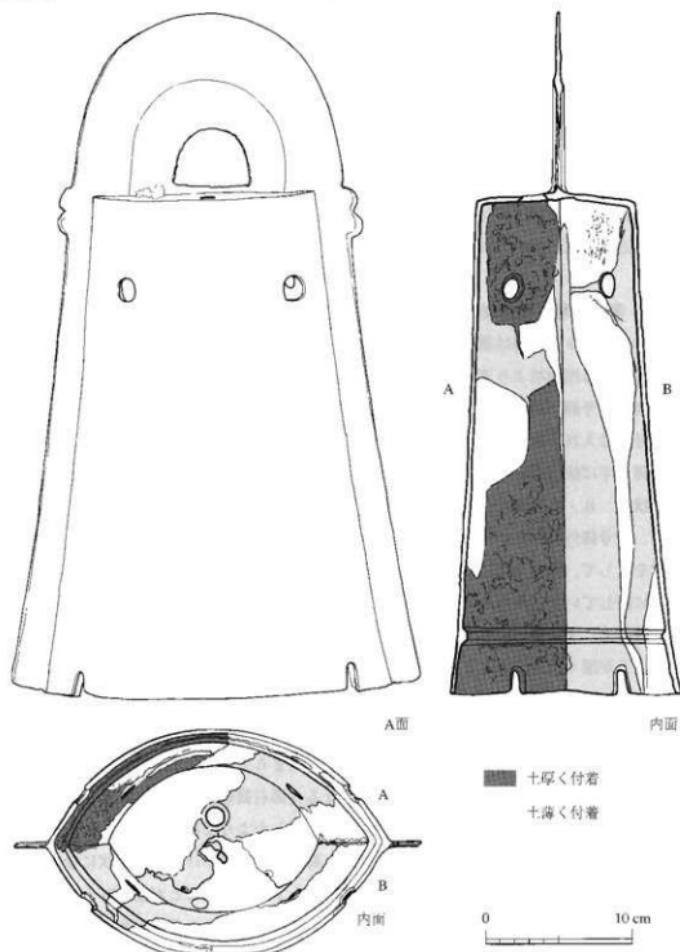
8号錆内面の土 8号錆内面の土は、原位置では下側になっていたA面左側の内面稜から錆身中央部にかけて土が厚く付着したところが認められる。B面側や舞、A面左側には部分的に土が薄く付着している程度で、土が付着していないところもかなり見られることから、上側には空隙があつたものと思われる。

付着している土は総じて少なく、8(9)号錆間にあまり土が入っていない可能性がある。

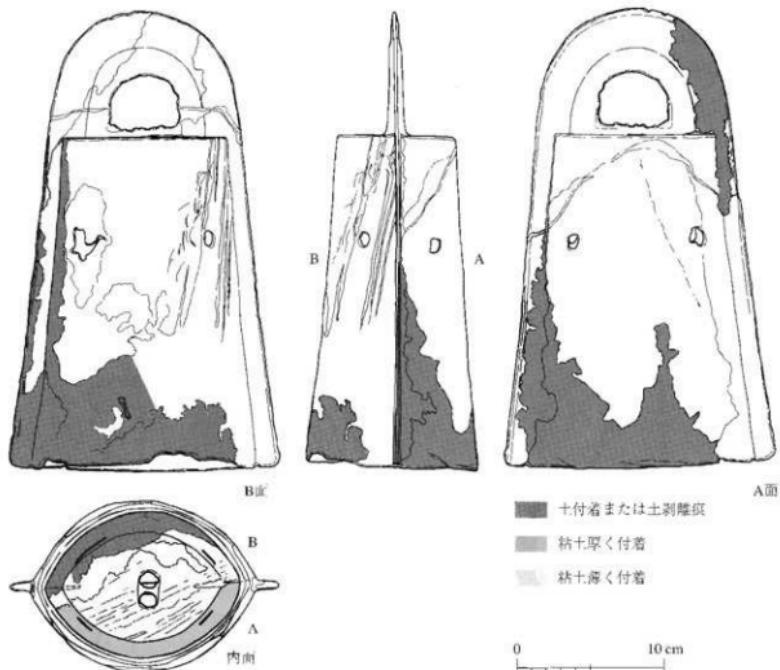
9号錆の土 9号錆外面には、原位置では下側になるA面右側錆付近、B面左側鱗から両面の裾部を中心とし土が厚く付着、もしくは付着していた土が剥離したような痕跡がある。また、上側となるB面右側を中心とし土が付着しており、舞から錆身中央部にかけて一部縞状になっていることから、8号錆と9号錆の間に水が溜まり、その水位が上下していたことが窺われる。

A面錆身中央部、B面錆身中央から錆にかけては土が付着していない部分がある。前者は原位置では上側に当たることから8号錆との間に空隙があつたためと思われる。後者は下側に当たる9号錆と接していたことによるものと見られ、錆身左型持孔付近や錆の一部に群青色の鱗が出ている。

内面の土は、原位置では下側となるB面側を中心に土が厚く付着または土の剥離痕が認められる。上側になるA面側には厚く粘土が付着しており、舞からB面右側にかけては粘土が薄く付着している。舞に付着する粘土はB面側からA面側に下がるように瘤状になっていることから、内部に水が溜まり、その水位が下していたものと思われる。その傾きは鱗がB面側に65°傾いていたことを示しており、9号錆は鱗を立ててはいるが、かなり寝た状態に近い姿勢をとっていたことがわかる。このことはA・B両面の中央部に広く土の付着していない部分があることとも対応しているものと思われる。



第14図 8号錆土付着状況実測図



第15図 9号錆土付着状況実測図

4. 11 (12) 号錆 [写真図版87・94・389~391]

出土状況等 11 (12) 号錆は重機により掘り返されており、発見された時には既に原位置を失っていた。発見場所は埋納坑より東側に5m離れた地点で、1号錆、2 (3) 号錆、4号錆、5 (6) 号錆、7号錆、8 (9) 号錆、10号錆とともにまとめて置かれていた。

重機による搅乱のため遺存状態は悪く、外側の11号錆は錆身・鉢とも大きく損傷、内側の12号錆も鉢の一部が破損しており、外から入れ子の12号錆が見えるほどの状態になっていた。

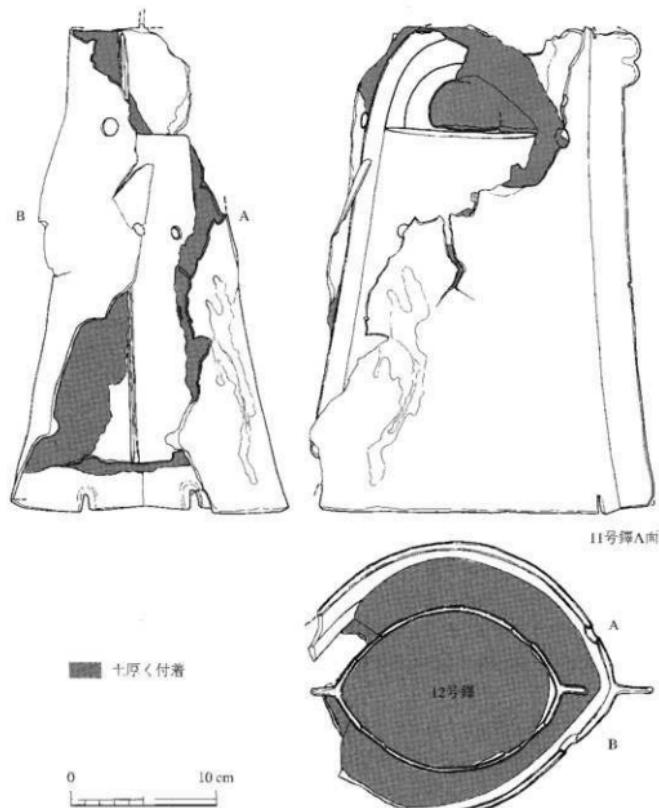
これらは11号錆が大きく変形したことと、内側の12号錆と入れ子状態のままで出土しており、1999(平成11)年1月25~28日に内部土砂の剥ぎ取り保存をした上で、12号錆の取り出し作業を行っている。

入れ子の状況 11号錆A面側から見ると12号錆は11号錆錆身右側に寄っており、鉢から見ると12号錆が11号錆のややB面側に寄るという位置関係となる。これは11号錆A面左側を上にして、錆を立てた状態で埋められていたことを示しており、12号錆の位置からするとB面側に少し傾いていたことが想定される。11号錆A面左側の鱗は、重機と接触したことにより大きく損傷しており、こちらを上にした埋納姿勢に対応するものと見られる。

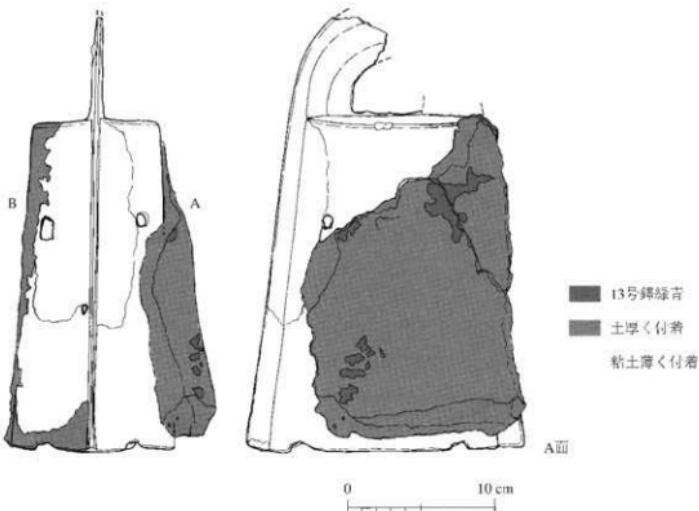
鋸の位置関係は、外側の11号鋸柄より12号鋸柄が3cmほど入ったところにあり、破損のため不明だが12号鋸の鉤が11号鋸内面には接していたことが考えられる。

内部の土 11(12)号鋸内部の土は、柄から見ると破損部分を除いて一杯に詰まっている。また、X線CT写真（図版389～391）を見ると両者ともよく土が詰まっているが、原位置では上になる12号鋸A面左側の内面舞付近や、下になる11号鋸と12号鋸間の一部には空隙が認められる。

12号鋸外面の土 重機による損傷が大きかったため埋納状況を示すような土の残り方はしていない。原位置では下側になるA面右側を中心とし土が厚く付いており、表面には11号鋸と接していたことによりその縁部が付着している。また、12号鋸の表面には粘土が薄く付着しているが、埋められていた時は上になっていたA面左側部及びB面右側部付近では粘土の付かない部分も一部認められた。



第16図 11(12)号鋸入れ子状況実測図



第17図 12号錆土付着状況実測図

5. 13(14)号鐸 [写真図版99・105・392~394]

出土状況等 13(14)号鐸は重機により掘り返されており、発見された時には既に原位置を失っていた。発見場所は埋納坑のある丘陵斜面下である。

重機による搅乱のため遺存状態は悪く、外側の13号鐸は錆、鐸身A面右側・B面左側が鱗から舞にかけて斜めに破損しており、内側の14号鐸も錆の一部が壊れている。13号鐸の破片を接合した後、損傷状況を見ると、舞が上にめぐれ上がるよう曲がっており、重機の爪に対し銅鐸の裾は外向きの位置にあったことが想定される。

これらは13号鐸B面錆身の一部が変形していることで、内側の14号鐸と入れ子状態のままで出土しており、1999(平成11)年1月25~28日に内部土砂の剥ぎ取り保存をした上で、14号鐸の取り出し作業を行っている。

入れ子の状況 13号鐸A面側から見ると、14号鐸は13号鐸錆身左側に寄っており、裾から見ると14号鐸が13号鐸のA面側に寄るという位置関係となる。これは13号鐸A面右側を上にして鱗を立てた状態で埋められていたことを示しており、14号鐸の位置からするとA面側に傾いていたことが想定される。13号鐸A面右側の鱗から舞にかけては重機と接触したことにより大きく損傷しており、こちらを上にした埋納姿勢に対応するものと見られる。

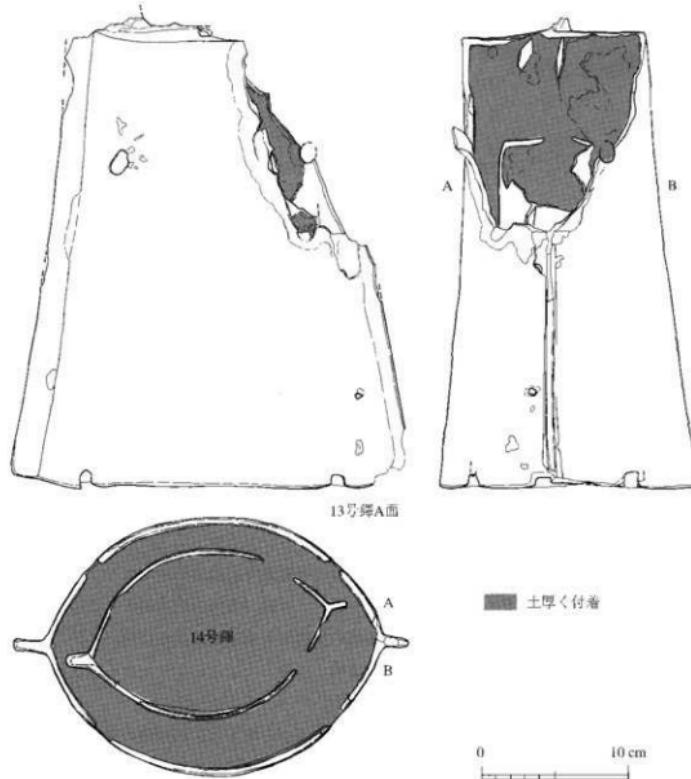
重機による損傷を受けた13号鐸A面右側の舞付近を側面から見ると、14号鐸の菱環が断面となつて13号鐸舞内面に接する位置に観察でき、裾の位置は外側の13号鐸の裾より内側の14号鐸が0.5~1.0cm程度入っている。

内部の土 13(14)号鐸内部の土は、裾から見ると両方とも一杯に詰まっている。重機による損

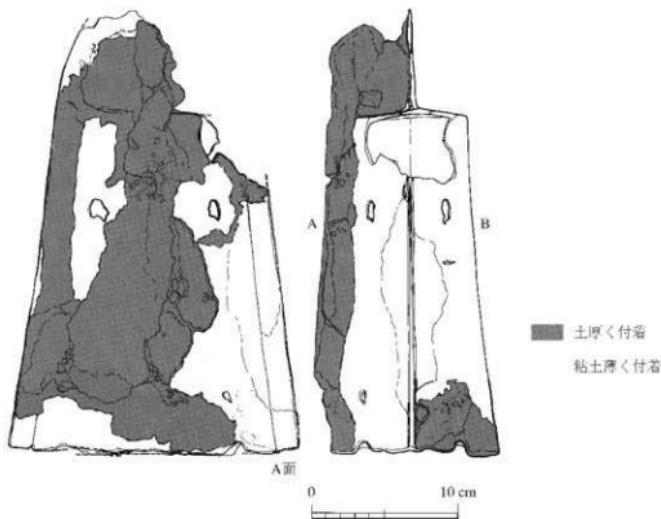
傷を受けた13号鐸A面右側の舞付近を側面から見ると、内部の14号鐸との間の土に破損した銅鐸破片の一部がめり込んでいる。

X線CT写真(図版392~394)では両者ともよく土が詰まっているが、原位置では上になる13(14)号鐸A面右側の舞付近が重機による損傷を受けており、本来この部分に空隙があったかどうかは不明である。また、14号鐸の内部と舞外面に接する位置には小石があることが確認できる。

14号鐸外面の土 13号鐸から取り出した14号鐸の土の付着状況は、全体に粘土が薄く付着しており、A面の鋒や鐸身左側の部分を中心に厚く土が付着していた。土は埋納状況を示すような残り方はしていないが、原位置では上側になるA面右側鋒、B面左側鋒付け根付近を中心に粘土が付かない部分が認められた。



第18図 13(14)号鐸入れ子状況実測図



第19図 14号鐸上付着状況実測図

6. 15 (16) 号鐸 [写真図版110・116・395~397]

出土状況等 15 (16) 号鐸は重機により掘り返されており、発見された時には既に原位置を失っていた。発見場所は埋納坑のある丘陵斜面下である。

重機による搅乱のため遺存状態は悪く、外側の15号鐸は錘やA面右側の裾に損傷があるのをはじめ、B面中央から右側にかけて重機の爪が入り大きく陥没している。また、内側の16号鐸も15号鐸B面からの陥没によりB面鐸身が大きく破損し、舞が割れている。

これらは15号鐸が大きく変形したこと、入れ子状態のまま出土しており、1999（平成11）年1月25~28日に内部土砂の剥ぎ取り保存をした上で、16号鐸の取り出しを行っている。

入れ子の状況等 15号鐸B面側から見ると16号鐸は15号鐸錘身右側に寄っており、裾から見ると16号鐸が15号鐸のB面側に傾くという位置関係となる。これは15号鐸B面左側縁を上にし、B面側に傾いた状態で埋められていたことを示している。

原位置にあった時点の上下関係をこのように考えると、15号鐸A面右側の裾が重機との接触により損傷しているのは、こうした埋納姿勢に対応している。また、裾がめくれ上がるよう割れることから、銅鐸の裾は重機に対し外向き、すなわち裾が東向きであったことが想定される。

一方、B面錘身中央から右側の大きな損傷は原位置では下側に当たる部分に受けている。これは銅鐸が掘り返される際、重機の爪が下から突き上げるように接触したか、掘り返された後、二次的に損傷したことを示している。

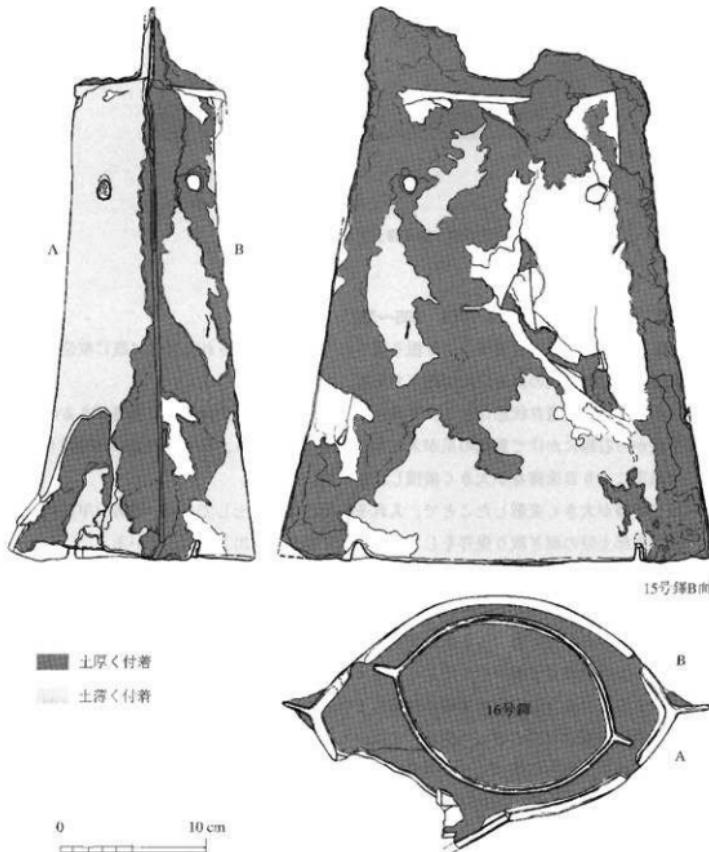
銅鐸の裾の位置は、15号鐸に対し16号鐸がやや傾いており、0~0.6cm程度入っている。

内部の土 15 (16) 号鐸内部の土は、鏡から見ると両方とも一杯に詰まっている。15号鐸内面の

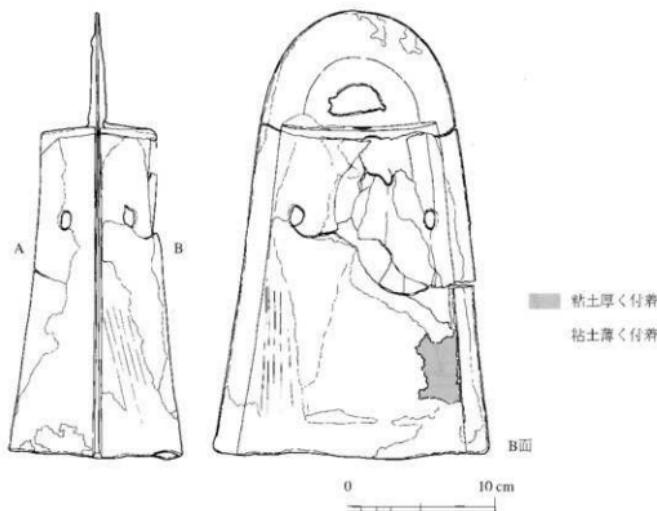
上は原位置では上になるA面右側内面接付近に薄く粘土が付着し、空隙があったことが窺われる部分があり、これから復原すると鋸をB面側に40°傾けた状態であったことが想定される。

X線CT写真（図版395～397）では、15号鋸の内部で16号鋸が大きく壊れていることが確認でき、原位置では上側になる部分に空隙が見られるところもある。

16号鋸外面の土 15号鋸から取り出した後の上の付着状況は、全体に粘土が薄く付着しており、原位置では下になるB面右側鱗や裾の一部に粘土の付着しない部分が認められた。また、原位置では上になるB面鋸身左側の一部には粘土が薄く縞状に付着したところがあり、これを水平にすると、原位置では上側のB面左側鋸が鉢側に傾斜する形で埋納されていたと思われる。



第20図 15(16)号鋸入れ子状況実測図



第21図 16号鐸付着状況実測図

7. 18(19)号鐸 [写真図版125・126・131-2・134・398~400]

出土状況等 18(19)号鐸は重機により掘り返されており、発見された時には既に原位置を失っていた。発見場所は埋納坑のある丘陵斜面下である。

重機による攪乱のため、外側の18号鐸B面右側、A面左側の鐸身と鰐に損傷があり、内側の19号鐸B面右側鰐にも欠損がある。

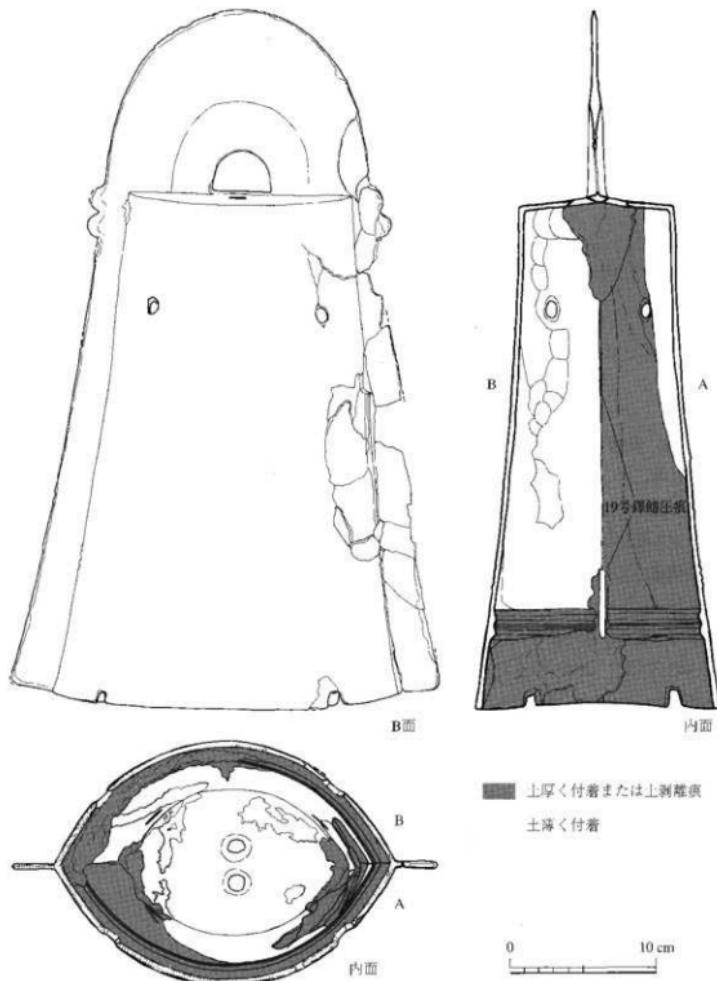
これらは入れ子のまま出土しているが、1996（平成8）年10月に発見された時点では、既に内側の19号鐸が半ば抜けかけており、18号鐸の内部には土があまり入っていないかった。19号鐸内部には土が詰まっていたが、1999（平成11）年3月8日～10日に剥ぎ取り保存をした上で取り出している。

入れ子の状況等 18(19)号鐸は発見時の経緯から、入れ子の状況に不明な点がある。しかし、18号鐸内面、19号鐸外面の上の付着状況から、18号鐸はB面右側の鰐、19号鐸もB面右側の鰐を上にして、鰐を上下に立てた状態であったことが想定される。18号鐸・19号鐸ともB面右側が損傷しているのはこうした埋納姿勢に対応するものと考えられ、鋼鐸の損傷状況からすると、裾が重機に對し内向き、すなわち西向きであったと思われる。

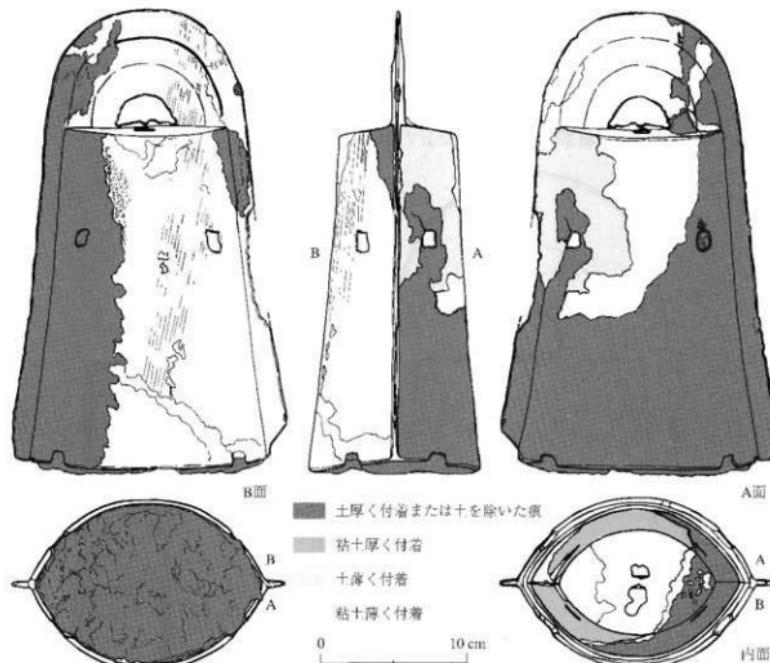
18号鐸内面の土 18号鐸内部の土は、原位置では下側であったB面左側の舞、A面右側の舞から裾全体に土が厚く付着、もしくは付着していた土が剥離した痕跡が認められる。また、B面左側の舞や内面突帯の部分には19号鐸鰐の圧痕が残っていた。

舞やB面、A面左側には粘土が薄く付いている。このうち、舞には原位置では下側になる部分に筋状に粘土が剥げ青緑色の鉛が見える部分があり、これが埋まっていた時の水平を示すとすれば、B面側に鰐を9°傾けた状態で埋納されていたことが想定される。

19号鏃の土 19号鏃の外面には、原位置では下側になるA面右側の舞付近から裾にかけて斜めに、またB面左側の舞から裾にかけて土が取れた痕跡がある。その他の部分には粘土が薄く付着しているが、B面には鉢から鏃身にかけて粘土が瘤状になっており、左型持孔右上付近には粘土が左上方に垂れたような痕跡を残している。これらは内部に水が溜まった際に残ったものと見られ、横から見ると鉢側に全体に傾き、B面左側の鏃端部が水平に近くなるような状態で埋められていたことが



第22図 18号鏃土付着状況実測図



第23図 19号鉄土付着状況実測図

考えられる。

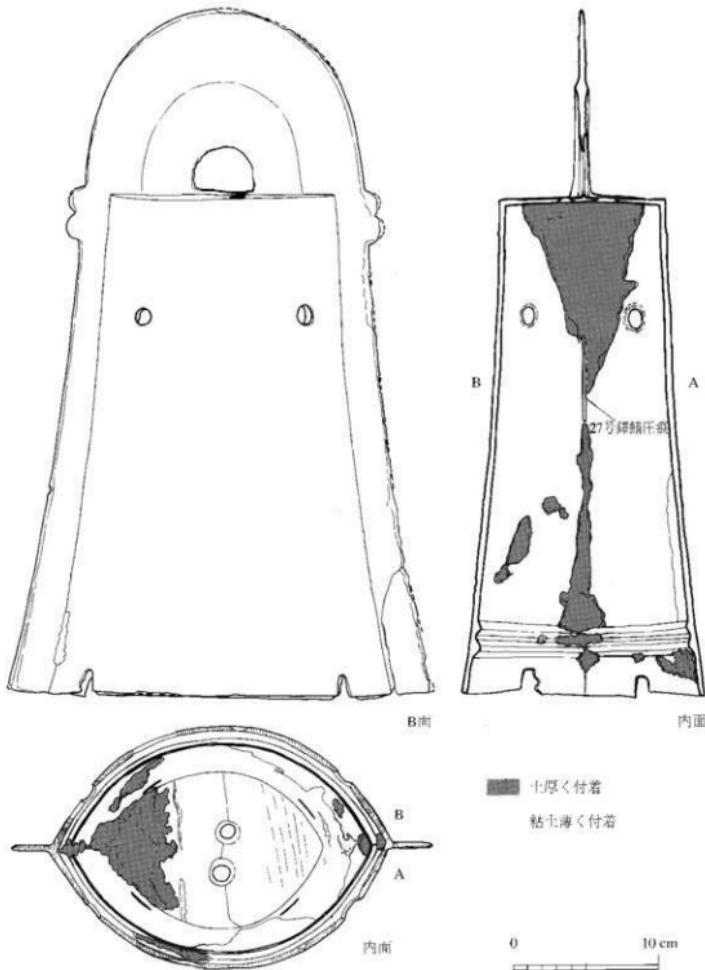
X線CT写真（図版398～400）で内部様子を見ると、裾の部分には土が一杯に結まっているが、内面突帯から内側には大きな空隙ができる。土は裾から舞にかけて序々に薄くなるように入つておらず、この上に結まっていた土が次的に動いたと見られる土が乗っている。これは原位置にあった時点で、雨水の作用により飛持孔から土や粘土分が抜けていく過程で生じたとも考えられるが、重機による移動も受けており断定できない。

土を取り出した後の内面の状況は、原位置では下側になるA面右側とB面左側の舞から裾にかけて厚く付いた土を除いた痕跡がある。その他の部分には粘土が付いており、これがX線CT写真的空隙に対応しているものと見られることから、原位置にあった時点から内部に大きな空隙があったことは確かである。また、厚く土が付いていたところと粘土の境目に当たる部分には筋状に土の付かないところが見られ、これが水の溜まった痕跡であり原位置では水平であったとすると、B面側に22°傾いていたことが想定される。

8. 26 (27) 号鐸 [写真図版176・181・2・183]

出土状況等 26(27)号鐸は重機により掘り返されており、発見された時には既に原位置を失っていた。遺存状況は26号鐸B面右側縁に若干損傷がある程度で、比較的良好である。

これらは入れ子のまま出土しているが、1996（平成8）年10月に発見された時点で既に内側の27号鐸が半ば抜かれた状態であった。27号鐸内部には土が舞側に半分詰まっていたが、1999（平成11）年8月9日～10日に剥ぎ取り保存をした上で取り出している。



第24図 26号鐸土付着状況実測図

入れ子の状況 26(27)号鉢は発見時の経緯から、入れ子の状況に不明な点がある。しかし、26号鉢内部、27号鉢の土の付着状況から、26号鉢はB面右側の鰐、27号鉢はA面右側の鰐を上にして、鰐を上下に立てた状態で埋められていたことが想定される。26号鉢B面右側鰐の損傷はこうした埋納姿勢に対応するものと考えられる。

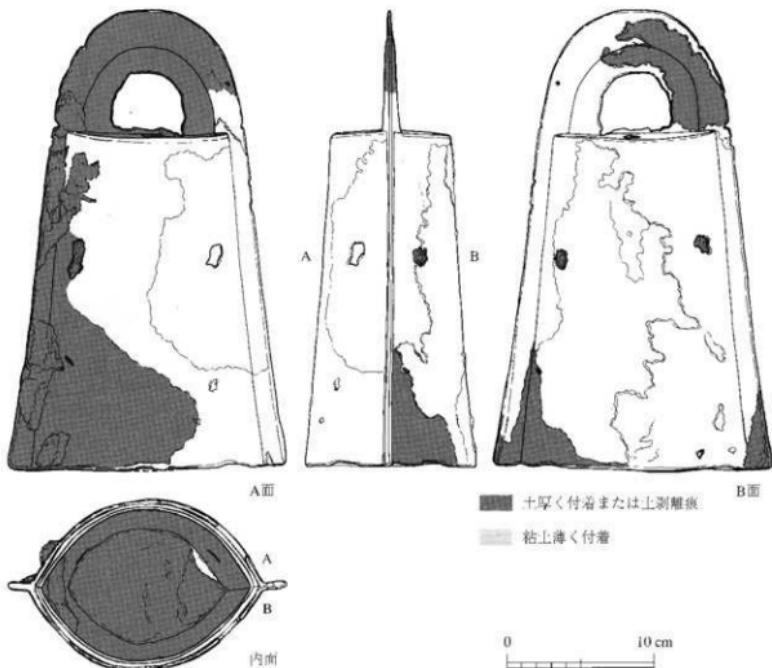
26号鉢内部の土 26号鉢内部の土は、原位置では下側にあたるB面左側舞、A面右側舞から稜付近に土が厚く付着しており、一部に27号鉢の鰐圧痕が残る。

舞には粘土がB面側にやや傾斜して薄く綿状に付着していることから、これを水平とすればB面側に鰐を10°傾けた状態で埋納されていたことが想定される。

原位置では上側となるA面左、B面右側には土の付かない部分が認められることから、内側の27号鉢との間に空隙があったものと思われる。

27号鉢の土 27号鉢の外面には、原位置では下側になるA面左側から鰐、B面鰐右側に土が厚く付着、または取れた痕跡が見られる。上側になるA面右型持孔周辺やB面左側にはあまり土が付かない部分があり、その他の部分には粘土が薄く付着している。

内部の状況は、土が舞側に半分詰まっていたが、原位置では上側になるA面右側型持孔付近に僅かながら空隙が認められた。

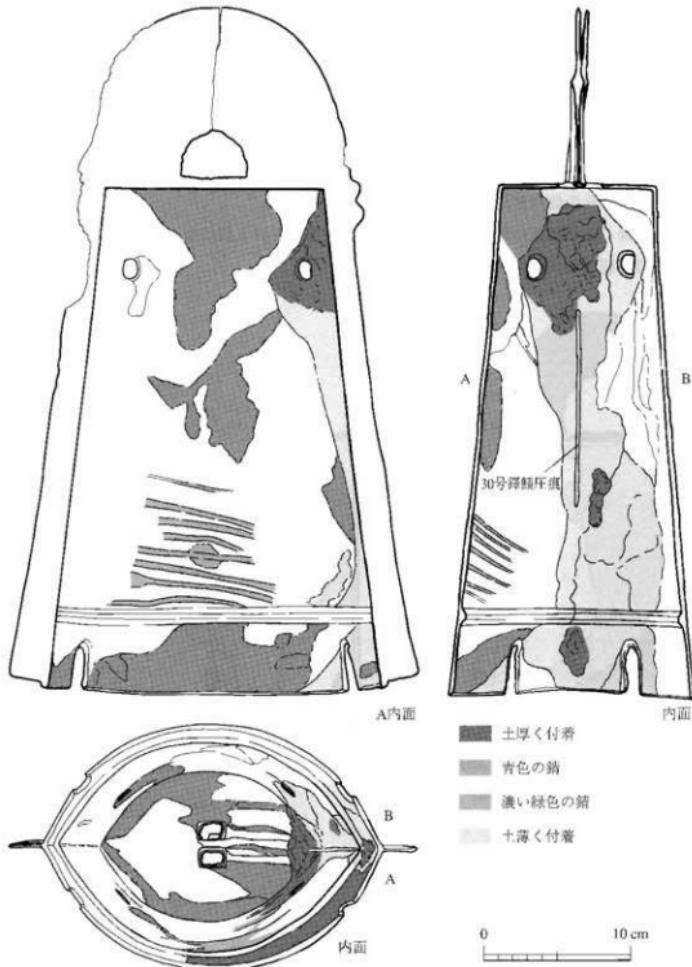


第25図 27号鉢土付着状況実測図

9. 29 (30) 号鐸 [写真図版195・200-2]

出土状況等 29(30)号鐸は原位置で発見されたものである。銅鐸埋納坑北辺と平行に置かれており、隣り合う31(39)号鐸と複合わせとなっていた。鍔は東方向(S-80°-E)、A面を埋納坑北壁側に置き、B面左側の鋸を上にして、鋸を上下方向に立てた状態で埋められていた。

29(30)号鐸は入れ子のまま出土しているが、1997(平成9)年2月の段階で30号鐸の取り出しが行われている。



第26図 29号鐸土等付着状況実測図

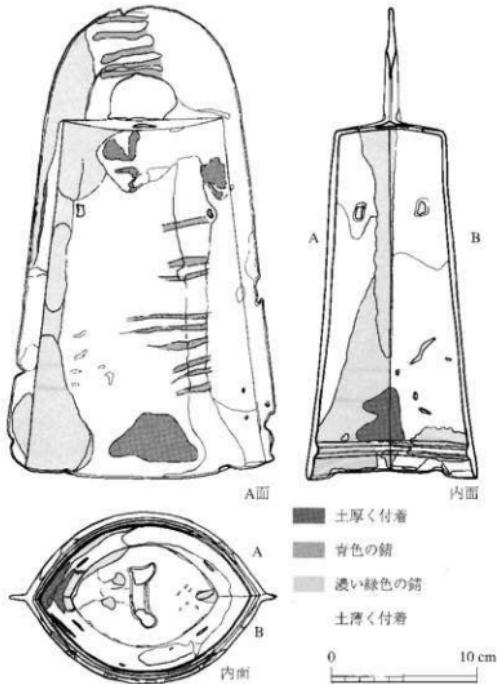
入れ子の状況 29号鐸のB面側から見ると、30号鐸は原位置では下側である29号鐸鐸身右側に寄っている。また、裾から見ると30号鐸は29号鐸A面に接しており、銅鐸裡納坑北壁側に傾いている。裾の位置関係は29号鐸・30号鐸ともほぼ揃っている。

29号鐸内面 29号鐸内部の土は、原位置では下側にあるB面右側舞、A面左側舞から後付近に土が付着しており、一部に30号鐸の跡圧痕が残る。全体に土があまり付いていないことから、入っていた土の量は少なかったものと見られる。

また、舞や鐸身A面を中心には青色の鏽が顕著である。内面突帯の上付近には濃い緑色の鏽が縮状に見られ、触ると僅かに凹凸がある。

30号鐸 29号鐸から取り出した後の土の付着状況は、原位置では下側となるB面右側に厚く土が付いており、29号鐸内面突帯の圧痕も一部に見られる。上半は土があまり付着しておらず、29号鐸との間に空隙があったと思われる。また、A面では29号鐸A内面に見られた青色の鏽や縞状の濃い緑色の鏽が鉢や鐸身右側に見られ、これに接していた部分と考えられる。

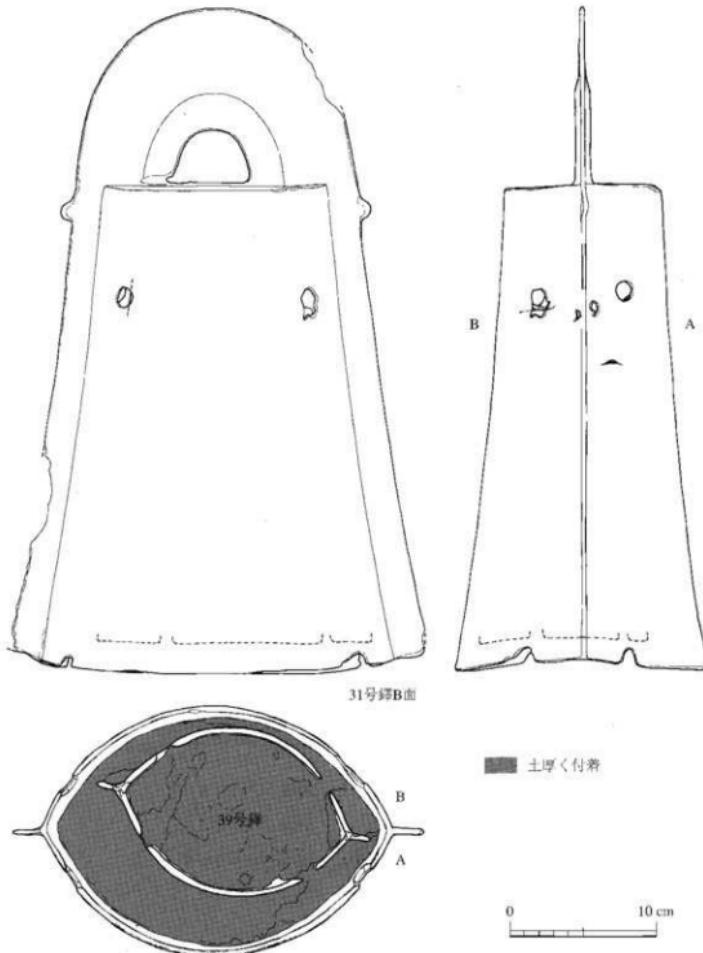
内面は現場で取り上げられた時点から裾の上半に空隙が見られた。土の付着状況は、原位置では下槽になるA面左側の後付近に見られる程度で、全体にあまり土が付いておらず、大きな空隙があったものと思われる。



第27図 30号鐸土等付着状況実測図

10. 31 (39) 号鐸 [写真図版206・211-2・401~403]

出土状況等 31 (39) 号鐸は原位置で発見されたもので、銅鐸埋納坑北辺と平行に置かれていた。隣り合う29 (30) 号鐸と組合わせになっており、鉦は西方向 (N=70°-W)、B面を埋納坑北壁側へ向けていた。埋納姿勢はB面左側の鰐を上にしており、鰐をB面側に約45°傾けた状態であった。31 (39) 号鐸は入れ子のまま出土しているが、1997（平成9）年3月の段階で39号鐸の取り出し



第28図 31 (39) 号鐸入れ子状況実測図

が行われている。また、39号鐸内部の土は、1999（平成11）年3月8日～10日に剥ぎ取り保存した上で取り出している。

入れ子の状況 31号鐸のB面側から見ると、39号鐸は原位置では下側である31号鐸鐸身右側に寄っている。また、裾から見ると39号鐸は31号鐸B面に接しており、原位置で31号鐸B面が銅鐸埋納坑北壁側に大きく傾いていたことに対応するものと見られる。

裾の位置関係は31号鐸より39号鐸1.5～1.8cmほど程度入っており、X線CT写真では31号鐸の舞内面に39号鐸の鉢が接している。

内部の土 31（39）号鐸内部の土は裾から見ると一杯に詰まっているが、身型持孔付近はどの孔からも内部の39号鐸が見えるほど大きな空隙ができている。

X線CT写真（図版401～403）では31号鐸内面の上半部に大きな空隙があり、原位置では下側になる39号鐸との間に土が入らない隙間がある。39号鐸にも原位置では上側になる内面上半部に大きな空隙があり、舞型持孔に向かって斜めに土が詰まっているのが観察できる。

11. 32（33）号鐸 [写真図版213・214・219-2・221]

出土状況等 32（33）号鐸は重機により掘り返されており、発見された時には既に原位置を失っていた。発見場所は銅鐸埋納坑横の搅乱された部分で、35（36）号鐸、37（38）号鐸とともに二次堆積土の中に横たわっていた。

遺存状況は搅乱土中の出土にも拘わらず良好で、鋒端部に若干の損傷がある程度である。

32（33）号鐸は入れ子のまま出土しているが、1996（平成8）年11月の段階で33号鐸の取り出しが行われている。また、33号鐸内部の土は、1999（平成11）年3月8日～10日に剥ぎ取り保存した上で取り出している。

入れ子の状況 32号鐸のB面側から見ると、33号鐸は32号鐸の鐸身右側に寄っている。また、裾から見ると33号鐸は32号鐸B面には接するという位置関係となる。これは32号鐸B面左側の鉢を上にして、鉢を上下方向に立てた状態で埋納されていたことを示しており、33号鐸の位置からすると32号鐸B面側に傾いていたことが想定される。

また、裾の位置関係は判然としないが、両者がほぼ揃うか、32号鐸より33号鐸の裾が若干入る程度であったと見られる。

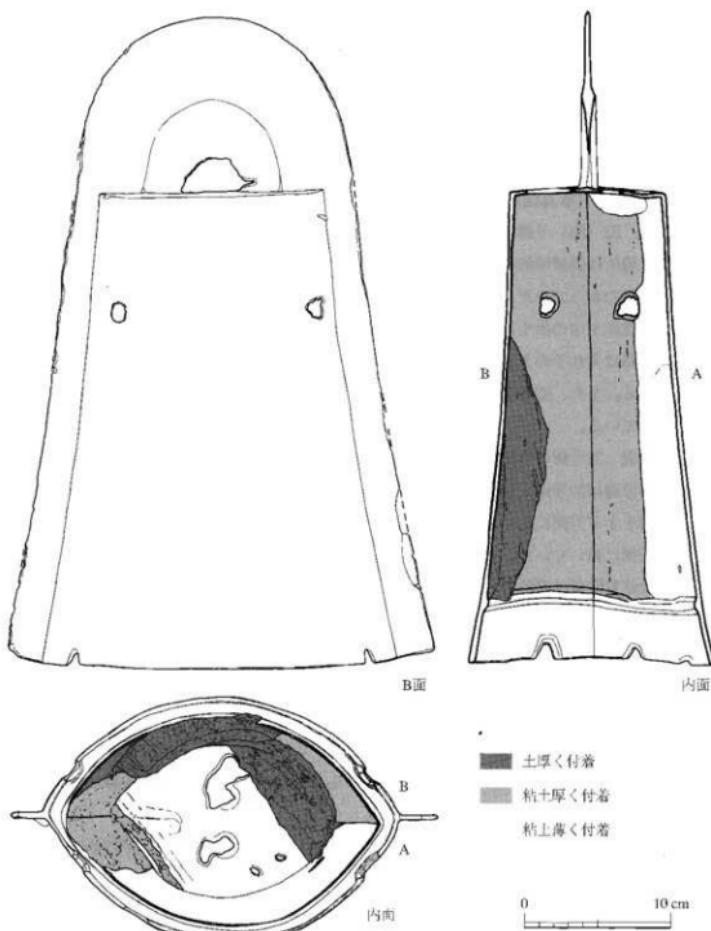
32号鐸内面の土 32号鐸内面の土は、原位置では下側にあたるB面舞中央からA面左側にかけて斜めに厚く残っており、この土と舞全体に付く薄い粘土との境には同じ傾斜で緑色の鮮やかな鉢が見られる。また、原位置では上になるA面舞右側には土や鉢が付着せず赤茶色を呈する部分が斜め方向に見られ、その下の粘土も薄い縞状になっている。これは先の緑色の鉢の傾斜と対応しており、両者が原位置での水平を示しているものと考えられることから、32号鐸の埋納姿勢はB面側に鉢が32°倒れていたと推定される。

B面中央部に付着する厚い土には内側の33号鐸鐸身の圧痕が残っている。その他は舞とA面側に粘土が薄く付いており、原位置では上になるB面左側、A面右側稜付近には粘土が厚く付着し、ひび割れ状になっている。

33号鐸の土 32号鐸から取り出した後の土の付着状況は、原位置では上側となるA面右側から裾に斜めに厚く土が付着しており、32号鐸の内面突起の圧痕も一部に見られる。A面右側の鉢や鐸身

上半部には粘土が付着しており、32号鐸との間に空隙があったものと見られる。B面は裾や鐸身左側に土が厚く付着もしくは取れた痕跡があり、原位置では下側になる鐸身右側や鰭に粘土が薄く付着している。粘土の一部には流れたような痕跡を示す部分もあり、32号鐸との間に隙間があったと考えられる。

内部の土の状況は、原位置では上側になるA面鐸身右側型持孔内には空隙があるが、その他の身型持孔には土が詰まっており、上側の鐸身上半部に空隙があったものと見られる。

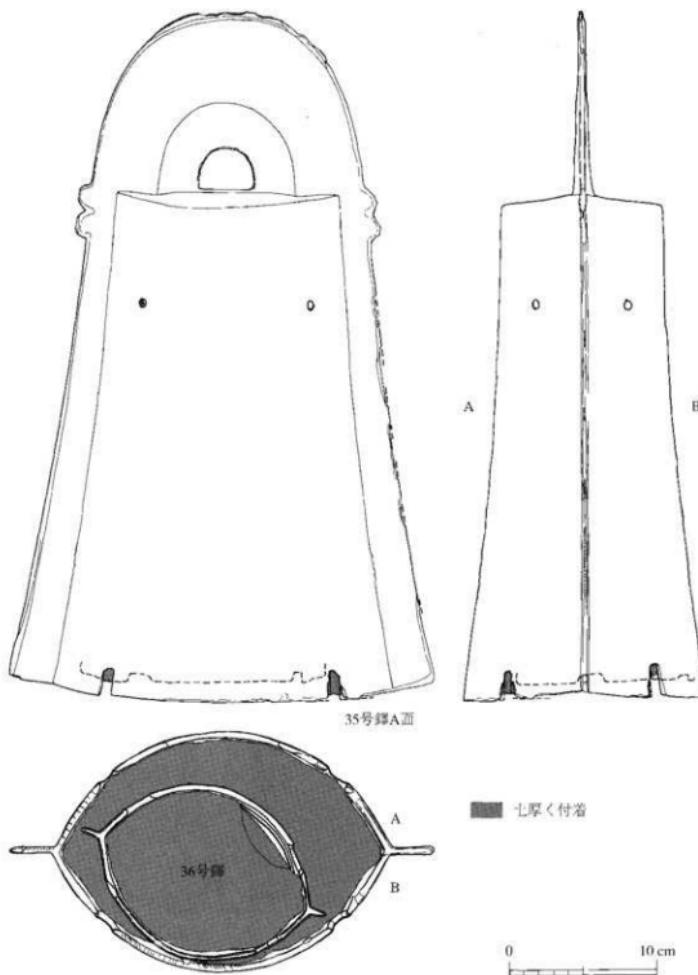


第29図 32号鐸土付着状況実測図

12. 35 (36) 号鐸 [写真図版234・235・240-2・243・404・405]

出土状況等 35 (36) 号鐸は重機により掘り返されており、発見された時には既に原位置を失っていた。発見場所は銅鐸埋納坑横の搅乱された部分で、32 (33) 号鐸、37 (38) 号鐸とともに二次堆積土の中に横たわっていた。

35 (36) 号鐸は入れ子のまま出土しているが、1998（平成10）年10月13日～14日に内部の土を剥



第30図 35 (36) 号鐸入れ子状況実測図

ぎ取り保存した上で、36号錐の取り出し作業を行っている。

入れ子の状況 35号錐のA面側から見ると内部の36号錐は35号錐錐身左側に寄っており、掘から見ると36号錐は35号錐B面に接するという位置関係となる。これは原位置では35号錐A面右側の鱗を上にして、B面側に傾いた状態で埋められていたことを示しており、35号錐A面右側鱗端部に僅かながら損傷があるのは、こうした埋納姿勢に対応しているものと思われる。

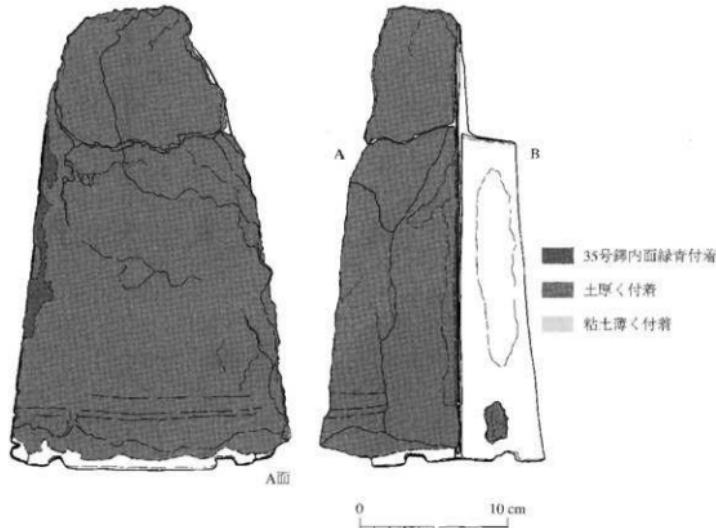
また、掘の位置関係は35号錐より36号錐の掘が1.2cm程度入っている。

内部の土 原位置では上側になる35号錐A面右、B面左の錐身型持孔の内部には空隙がある。この部分の内面の土の付着状況を見ると、薄く付着した粘土が織状になっており、これを基に復原するとB面側に鱗を38°傾けた状態で埋納されていたことが考えられる。

掘から見ると35号錐の内部には土が一杯に詰まっているが、36号錐は原位置では上側になる部分に隙間が認められる。

X線CT写真（図版404・405）では、35・36号錐とも原位置では上側になる錐内面付近に空隙があり、錐身中央部から錐型持孔付近にかけて土が斜めに入っていることがわかる。また、原位置では下側になる35号錐と36号錐の間に隙間が見られる。

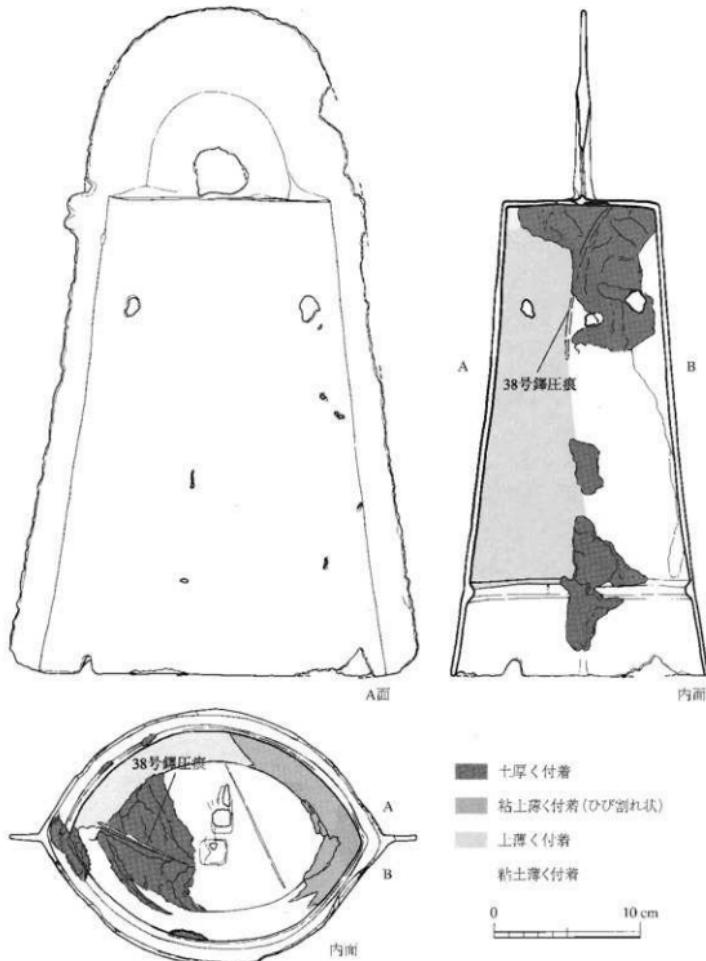
36号錐外面の土 35号錐から取り出した後の土の付着状況は、A面では全体に土が厚く付いているが、鉢右側に土の窪んだ部分があり、これが外から見た際の35号錐A面右型持孔内の空隙に対応するものと見られる。また、掘から3.5cmのところには土の外面に35号錐内面突帯の圧痕があり、原位置では下側になる左側鱗付近の土の表面には35号錐の縁膏が付いている。B面は全体に薄く粘土が見られるが、錐身左型持孔付近には土の付かない部分がある。



第31図 36号錐土付着状況実測図

13. 37 (38) 号鐸 [写真図版248・253-2・255]

出土状況等 37 (38) 号鐸は重機により掘り返されており、発見された時には既に原位置を失っていた。発見場所は銅鐸埋納坑横の搅乱された部分で、32 (33) 号鐸、35 (36) 号鐸とともに二次堆積土の中に横たわっていた。37 (38) 号鐸は入れ子のまま出土しているが、1996（平成8）年11月に38号鐸の取り出し作業をしており、38号鐸内部の土は1999（平成11）年3月8～10日に剥ぎ取り保存した上で取り出している。

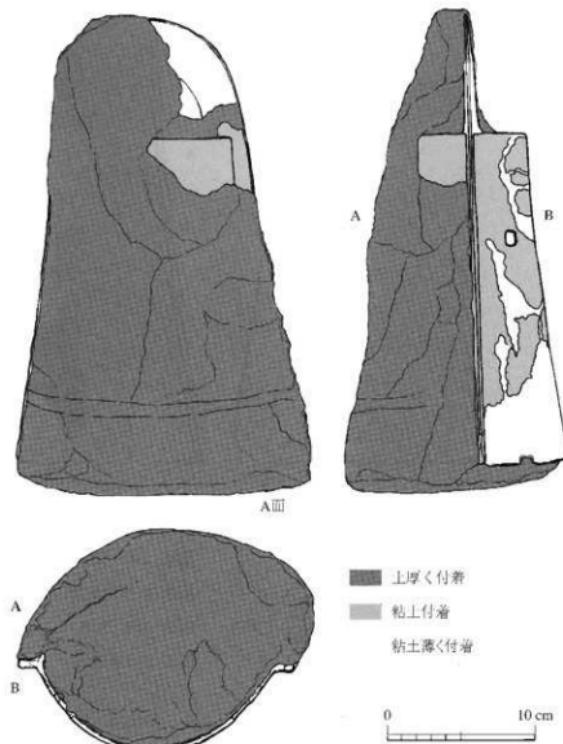


第32図 37号鐸付着状況実測図

入れ子の状況 37号鐸のA面側から見ると内部の38号鐸は37号鐸鐸身左側に寄っており、鋸から見ると38号鐸は37号鐸B面に接するという位置関係となる。これは37号鐸A面右側の鰐を上にして、鰐を上下方向に立てた状態で埋納されていたことを示しており、38号鐸の位置からすると37号鐸B面側に傾いていたことが想定される。37号鐸A面右側鰐端部に損傷があるのは、こうした埋納姿勢に対応しているものと思われる。

37号鐸内面の土 原位置では下側になるA面左、B面右舞付近に厚く土が残っており、その上にB面側に傾いて38号鐸の鉢圧痕が見られる。舞には薄く粘土が付くが一部に縞状になっている部分があり、これが原位置での水平を示すとすれば、B面側に鰐を26°傾けた状態で埋められていたことが想定される。

38号鐸外面の土 A面には土が厚く付いているが、鉢・舞右側に土があまり付かない部分があり、原位置では空隙になっていたものと見られる。土の下端から5.5cmのところには37号鐸内面突堤の圧痕がある。また、B面には鋸を除いて土はあまり付いておらず、粘土が見られる。（角田徳幸）

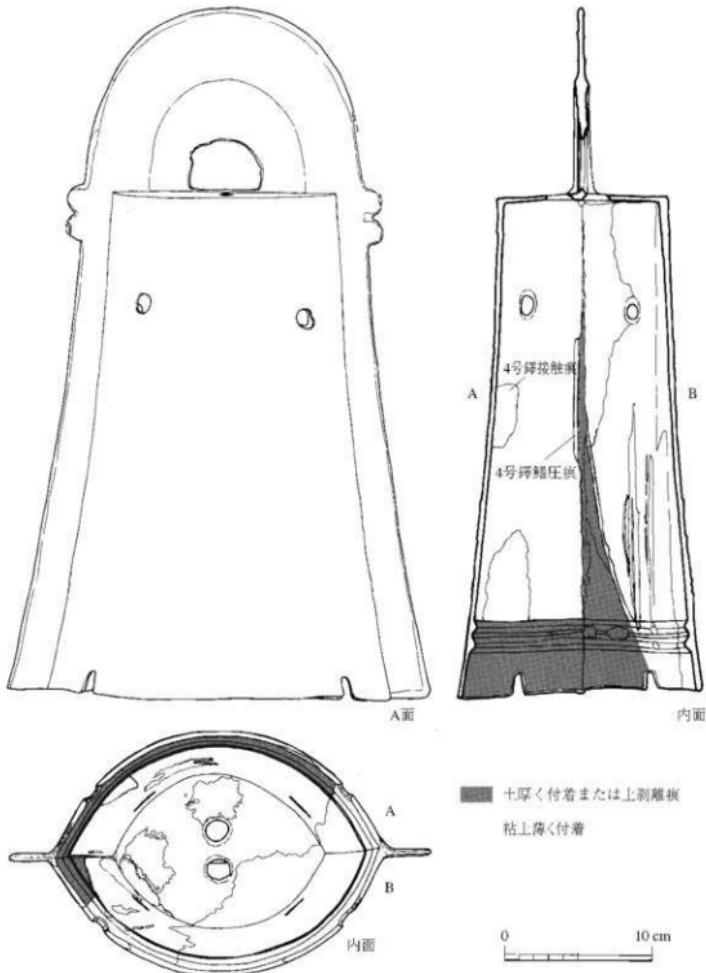


第33図 38号鐸上付着状況実測図

第2節 土付き銅鐸

1. 1 (4) 号鐸 [写真図版26・31 - 2・45]

出土状況等 1号鐸と4号鐸は重機により掘り返されており、発見された時には既に原位置を失っていた。発見場所は埋納坑より東側に5m離れた地点で、5(6)号鐸、7号鐸、8(9)号鐸、10号鐸、11(12)号鐸とともにまとめて置かれていた。



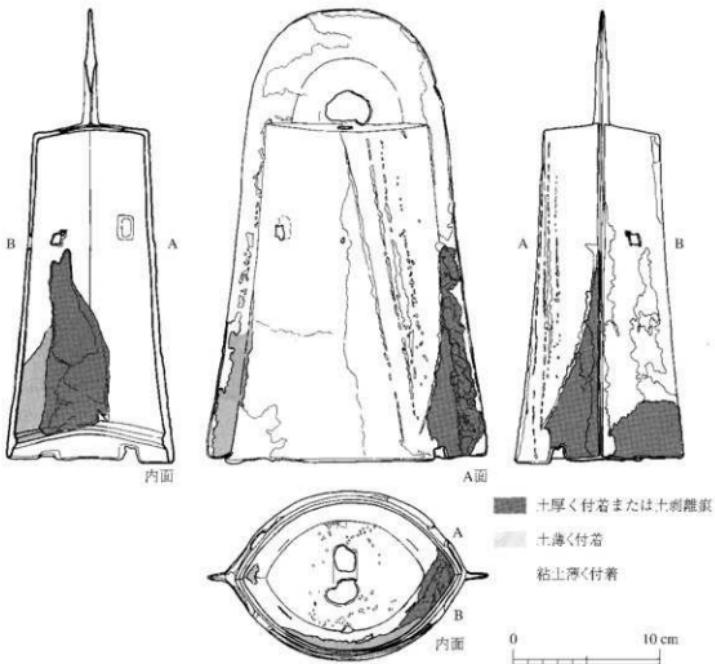
第34図 1号鐸付着状況実測図

1号鐸と4号鐸は別々に発見されているが、後述するように土や粘土の付着状況などから、原位置にあった時点では入れ子であったと考えられる。

1号鐸内面の土 A面左側内面縫から裾にかけて土が厚く付着、もしくは土が剥離した痕跡があり、入れ子銅鐸の錆圧痕も見られることから、原位置ではA面左側縫を下にして錆を立てた状態で埋められていたことが想定される。B面右側の裾から内面縫にかけては斜めに土が剥離した痕跡があり、周囲の粘土との境目には筋状に土が付かず綠青が見える。

裾から見ると、原位置では上側になるB面左側からA面右側内面縫付近に土が付かない部分があり、空隙があったと考えられる。これより下には薄い粘土が付着しているが、A面中央部には入れ子銅鐸と接触していたため土の付かなかった部分があり、B面右側には縫状に粘土が剥離し綠青が見える部分もある。總じて土の付かない部分や粘土が薄く付く部分が広く、本来内部にはあまり土が入っていないかったと見られる。また、想定される空隙の位置や入れ子銅鐸の接触痕からするとA面側に傾いた状態で埋納されていたことが考えられる。

4号鐸の土 A面左側には土が付いておらず右側裾から縫付近にかけて土が厚く付着もしくは取れた痕跡がある。縫端部はA面右側は土が付着せず鮮やかな綠青が出ており、大形鐸と接していた



第35図 4号鐸土付着状況実測図

と見られるのに対し、左側には土が付いている。また、内面はA面右側縫付近からB面左側に厚く土が付いており、その他は薄く粘土が付着している。これらのことから原位置ではA面左側を上にして鰐を立てた状態であったと思われる。

A面右側裾から鰐付近に斜めに土が剥離した痕跡があり、周囲の粘土との境には筋状に緑青が出た部分がある。鐸身右側には薄く粘土が付いているが、裾から舞にかけて粘土が縞状になっている部分がある。これらは1号鐸B内面右側裾から縫に斜めに見られる土や、縞状に粘土が剥離し緑青が見える部分のあり方と一致している。また、4号鐸A面左側には土が付いていないが、1号鐸B内面左側にも土が付いていない点も一致する。以上の点から、1号鐸と4号鐸は入れ子であり、1号鐸B面側に4号鐸A面が入る形で埋められていたものと考えられる。

A面右側の縞状になった薄い粘土は、内部に溜まった水の水位が上昇したことによって生じたものと見られる。これが埋納時の水平を示すと考えると、横から見て紐側に傾斜するような形で埋納されていたことが想定される。

B面は裾にやや厚く土が付着する部分があるが、鐸身中央部にはあまり土が付いておらず、外側の1号鐸A面内面中央部に残る入れ子銅鐸との接触痕に対応する。また、鐸身右側から鰐・紐にかけて粘土が付着し、ひび割れ状になっている。

2. 28(7)号鐸 [写真図版63・67-2・188・193-2・386~389]

出土状況等 7号鐸と28号鐸は重機により掘り返されており、発見された時には既に原位置を失っていた。7号鐸の発見場所は埋納坑より東側に5m離れた地点で、1号鐸、4号鐸、5(6)号鐸、8(9)号鐸、10号鐸、11(12)号鐸とともにまとめて置かれていた。

7号鐸と28号鐸は別々に発見されているが、後述するように鐸の付着状況などから、原位置にあった時点では入れ子であったと考えられる。

7号鐸は内部に土が詰まった状態で出土しているが、1999(平成11)年8月9日~10日に内部の土を剥ぎ取り保存した上で取り出している。

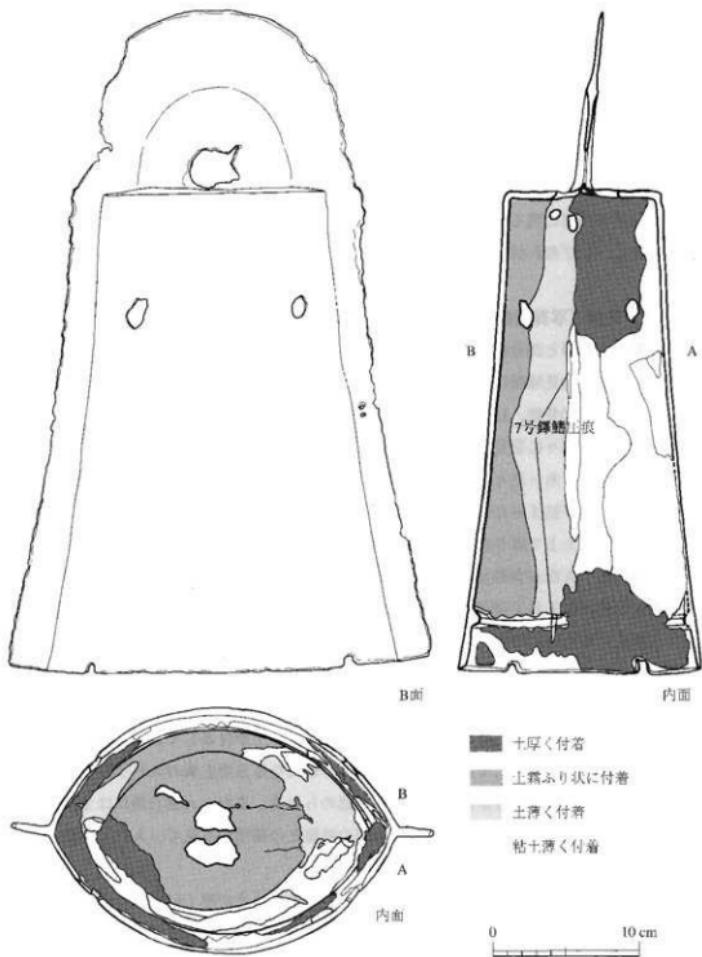
28号鐸内面の土 A面右側舞付近、及びA面右裾、B面左裾に比較的厚く土が付着している。B面左側内面縫付近には入れ子銅鐸の鰐圧痕も見られることから、原位置ではB面右側鰐を上にして鰐を立てた状態で埋められていたことが想定される。また、A面中央部には土があまり付かず、入れ子銅鐸との接觸痕である青銹が出ており、A面側に接する位置に入れ子銅鐸があったと考えられる点からA面側に鰐を傾けていたと思われる。

裾から見ると、原位置では上側になるB面右側などに薄く土が付着しており、舞からB面中央にかけては霜降り状に土が付着している。原位置では下側になるB面左側の入れ子銅鐸鰐の痕跡がある付近には、土が付かない部分が内面縫に沿って認められる。また、A面右側には土が薄く付いた部分が筋状に認められ、B面左側の入れ子銅鐸鰐の痕跡との関係から見て、入れ子銅鐸の上側の鰐の位置に当たるものと見られる。

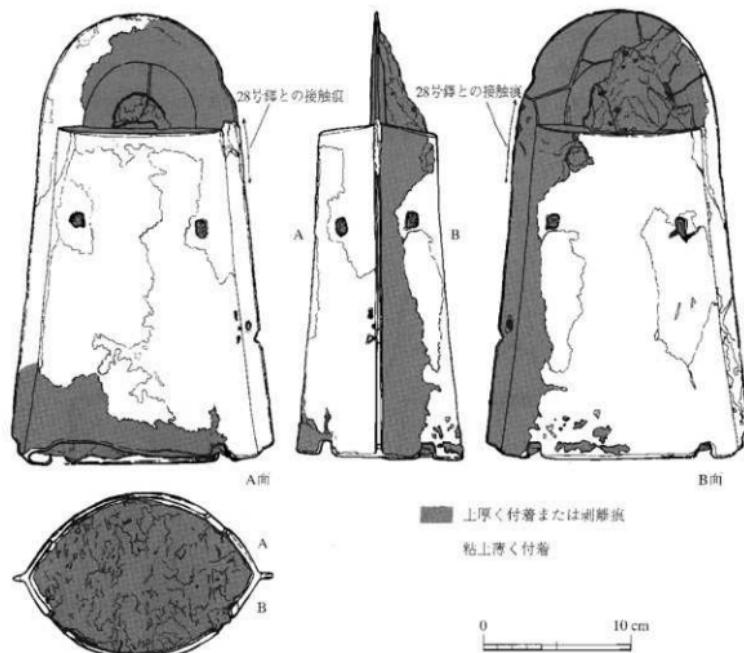
7号鐸の土 A面鋸右側と裾左側、B面鋸と左側鰐付近には土が厚く付着または剥離した痕跡がある。A面右側には薄く粘土が付着しているが、左側はあまり土が付いておらず鐸身中央付近には青銹が見られる。A面左側の土の付かない部分は、本来土が付いていたものが取れた可能性もある。また、A面左上の舞から鰐にかけて薄い粘土が筋状に斜めに見られることから、これより上、

つまり鉸左側の薄く粘土が付着している付近には人形鐸との間に空隙があったとも考えられる。A面右側鐸舞付近には大形鐸との接触痕が盛り上がるよう付いている。B面側は鐸身型持孔下付近と右側の鐸に土の付かない部分がある。これらの点から見て、原位置ではA面左側の鐸を上にして埋められていたことが考えられる。

A面右側鐸舞付近の大形鐸との接触痕はプロンズ病状の青と緑の鏽になっており、こうした鏽は28号鐸以外では認められないことから、7号鐸と28号鐸が入れ子であったことが想定できる。



第36図 28号鐸土付着状況実測図



第37図 7号鐸土付着状況実測図

また、7号鐸A面鐸身中央の青銅は、28号鐸A面鐸身内面の青銅に対応していることから接していと見られ、両者はA面にはA面が入るようにして入れ子になっていたと思われる。

内部の土は鐸身型持孔で見るとA・B両面ともしっかりと詰まっている。X線CT写真（図版386～388）によると、鐸身一杯に土が詰まっており、舞付近には小石が入っていることも観察できる。

3. 10号鐸 [写真図版80・85-2]

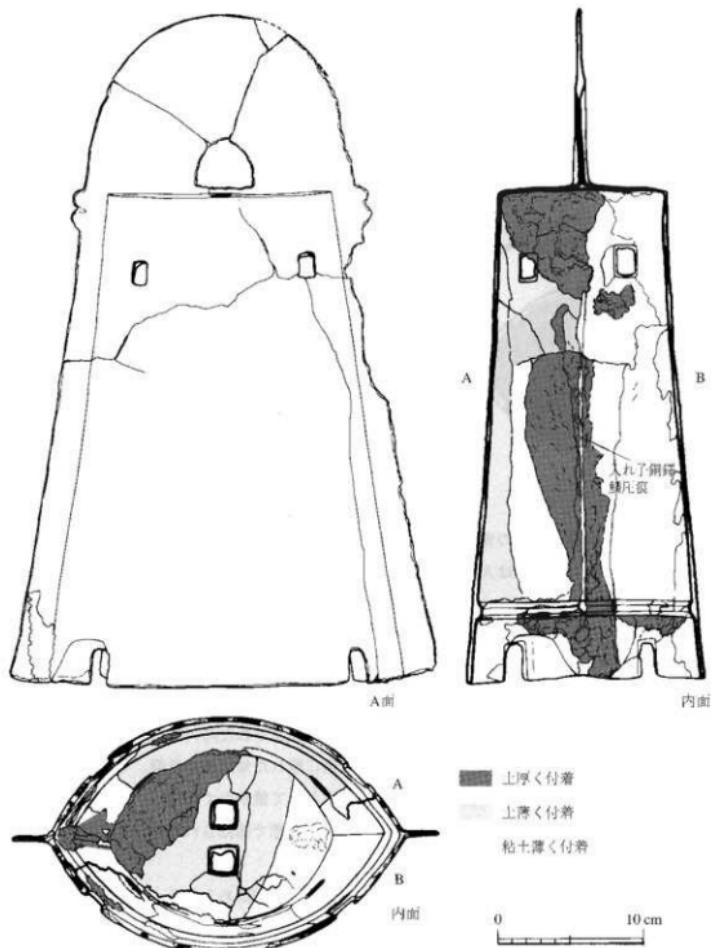
出土状況等 10号鐸は重機により掘り返されており、発見された時には既に原位置を失っていた。発見場所は埋納坑のある丘陵斜面で、埋納坑より東側に離れた地点に1号鐸、4号鐸、5(6)号鐸、7号鐸、8(9)号鐸、11(12)号鐸とともにまとめて置かれていた。

重機による搅乱のため、鉢や鐸身が割れており破片の状態で確認されたが、接合の結果、A面右縁の一部と鉢を除いてほぼ完形に復原されている。

内面の土 A内面左側舞から稜、柄にかけて厚く土の付着が認められる。B内面右側には内面稜に向かって粘土が垂れるように付着している。舞部分の土の表面には入れ子銅鐸のものと思われる円い鋸が付いており、稜から内面突帯付近の土の上には鐸の圧痕が見られる。これらのことから、現在ではどの銅鐸と組み合うかは不明と言わざるを得ないが、本来10号鐸も入れ子になっていたり、

A面右側縫を上にして縫を立てた状態で埋納されていたことが想定される。

裾から見ると、原位置では上側になるA面右側・B面左側内面に土がほとんど付かないところがある。これは本来空隙があったことを示しており、B面からA面側に斜めに傾斜していることからA面側に縫を傾けていたことが考えられる。また、A面側中央部内面突堤の上は表面が剥離し、入れ子銅鏃に接していた痕跡を留めており、A面側に接する位置に入れ子銅鏃が傾いて入っていたものと思われる。



第38図 10号鏃土付着状況実測図

4. 17号鐸 [写真図版124-2]

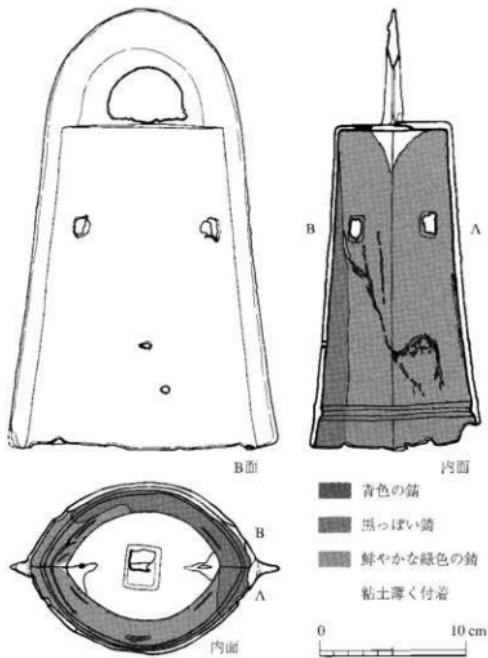
出土状況等 17号鐸は重機により掘り返されており、発見された時には既に原位置を失っていた。発見場所は埋納坑のある丘陵斜面下である。

遺存状況は重機による搅乱を受けていたにもかかわらず良好であるが、付着していた土はほとんど落とされている。これは農道工事関係者が銅鐸を発見した際に、工事会社に持ち帰るために水田の水で洗ったためで、この銅鐸が会社に持ち込まれたことが加茂岩倉遺跡発見の端緒となった。

内面の土・鉛 発見時に洗われたため土は外面には残っておらず、内面には舞付近に土が薄く付着している程度である。

外面はA面は全体に文様が鮮明であり青鉛は出でていないが、B面は鐸身中央と右縁に青鉛、全体に縫青が出ており、文様が見にくくなっている。

内面はB面右側とA面左側後付近に黒っぽい鉛が見られるのに対し、B面左側とA面には鮮やかな緑色の鉛と一部に青鉛が出ている。原位置では後者が空隙になっており、前者の上には土が厚く入っていたことを想定させるものである。外面の鉛の状況と合わせると、B面左側の鉛を上とし、B面側に鉛をやや傾けた状態で埋納されていたことが想定される。



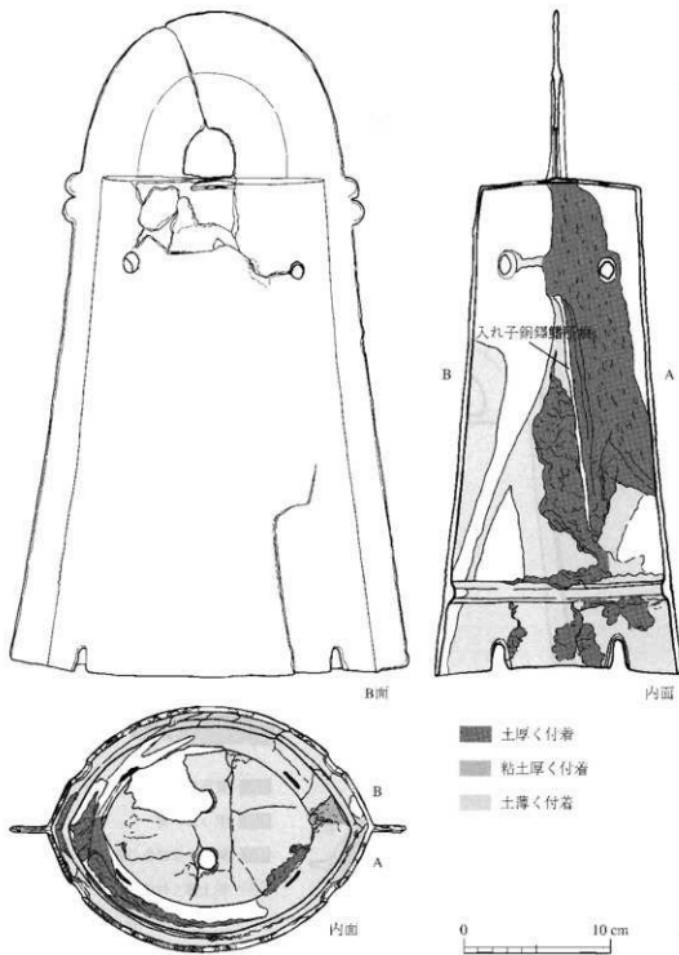
第39図 17号鐸土付着状況実測図

5. 20号鐸 [写真図版139・144-2]

出土状況等 20号鐸は重機により掘り返されており、発見された時には既に原位置を失っていた。発見場所は埋納坑のある丘陵斜面下である。

遺存状況は比較的良好であるが、重機による擾乱を受けたため鉢とB面間に割れがあり、B面舞付近にも損傷がある。

内面の土 A面右側とB面左側内面棱付近を中心に土が厚く付着している。A面右側の土は銅鐸



第40図 20号鐸上付着状況実測図

に沿って厚みがあり、入れ子銅鐸が接していたと思われる。また、内面稜付近の土の上には入れ子銅鐸の鱗が乗っていたと見られる筋状になった痕跡がA面側から中央に向かってやや斜め方向に付いている。

これらの点からすると、現在ではどの銅鐸と組み合うかは不明と言わざるを得ないが、本来20号鐸も小さい銅鐸と入れ子になっており、B面右側の鱗を上にして鱗を立てた状態で埋納されていたことが想定される。入れ子銅鐸の傾きについては、鱗の圧痕が20号鐸A内面右側から中央部に付いていることからB面側に傾いていたものと思われ、20号鐸内面稜に対し、裾をA面側にやや振る位置に入っていたことが考えられる。

裾から見ると、原位置では上側になると考えられるB面右側内面稜付近に粘土が厚く付着しており、乾燥のため鱗状にひび割れしていることから、この部分に空隙があったとも考えられる。これより下側は、A面右側とB面左側内面稜付近部分に土が厚く付くのを除いて、土が薄く付着する程度である。

20号鐸当体の傾きについては、土が厚く付着する部分がA面側に偏っている点や入れ子銅鐸の傾き、また、やや厚く粘土が付着し空隙になっていたと見られる部分がB面側に寄っていることから見て、B面側に鱗が傾いていたと考えられる。

6. 21号鐸 [写真図版145・150-2]

出土状況等 21号鐸は重機により掘り返されており、発見された時には既に原位置を失っていた。発見場所は埋納坑のある丘陵斜面下である。

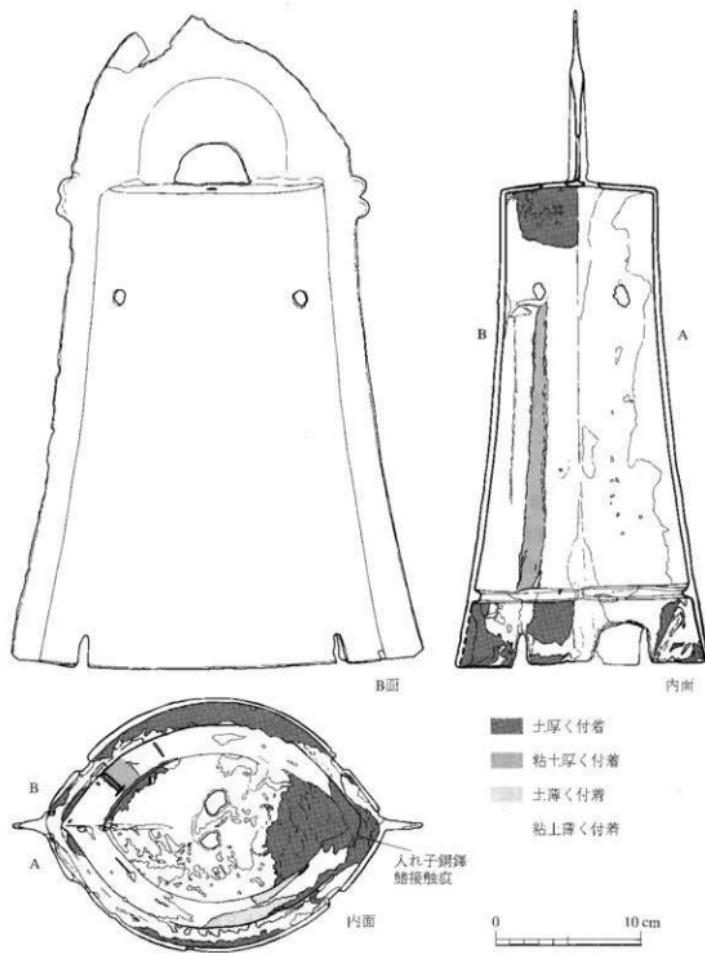
遺存状況は比較的良好であるが、重機による搅乱を受けたため鉢に欠損があり、A面裾にも一部損傷がある。

内面の土 A面左側とB面右側の舞内面、内面稜付近を中心土が厚く付着しており、B面裾にも土が厚く残る部分がある。内面稜と、ややA面寄りの内面突帯上には、僅かに入れ子銅鐸が当たったような痕跡がある。また、B内面右側の薄く粘土が付着する部分には、B面右側の稜方向に向かって、粘土が垂れたような痕跡が認められる。

これらの点からすると、現在ではどの銅鐸と組み合うかは不明と言わざるを得ないが、21号鐸も小さい銅鐸と本来入れ子になっており、B面左側の鱗を上にして鱗を立てた状態で埋納されていたことが想定される。また、入れ子銅鐸はその鱗が当たった痕跡よりすると、21号鐸内面稜に対し、裾をA面によりやや振っていたものと思われる。

裾から見ると、原位置では下側になると考えられるA面左側とB面右側の舞内面、内面稜付近を中心に土が厚く付着している。A面左側内面は土の付着が比較的少なく縁背が見えるのに対し、A面右側内面とB面には粘土が薄く付いている。また、舞は原位置では上側になる部分に薄く粘土が付着している。

B内面左側には粘土がやや厚く付着する部分が内面突帯から舞方向に向かって直線的に2条認められ、内面稜寄りのものには乾燥によってひびが入っている。こうした痕跡は入れ子銅鐸であることが推定される28(7)号鐸にもあり、28号鐸内面で、内側の7号鐸上側の鱗に接する位置に見られた。これは、21号鐸でも下側のA面左側内面突帯付近の入れ子銅鐸の鱗が当たった痕跡に対応するところにあり、入れ子銅鐸の鱗の位置を示すとも考えられることから、入れ子銅鐸はB面側に傾



第41図 21号鐘土付着状況実測図

いていたことが想定できる。

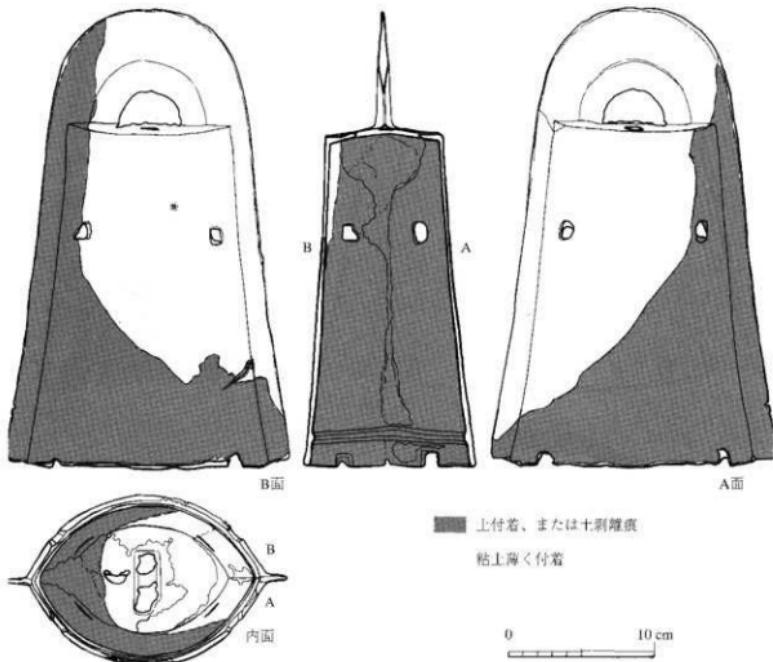
21号鐘の原位置での傾きについては、入れ子銅鐸がB面側に傾いていたと考えられることから、鐘をB面側に傾けていた可能性が高いと考えられる。また、A面左側内面に土の付着が比較的少なく緑苔が見えていることは、こちら側に少しでも隙間があったことを窺わせ、先の推定と一致するが、その他に明確な根拠がないので、ここでは可能性を指摘するに留めたい。

7. 22号鋸 [写真図版152・156-2]

出土状況等 22号鋸は重機により掘り返されており、発見された時には既に原位置を失っていた。発見場所は埋納坑のある丘陵斜面下である。重機による搅乱を受けてはいたが、損傷は見られず遺存状況は良好である。

外面の土 A面鏃頭左側から舞右側、B面右側鏃頭から鋸左側にかけて斜め方向に、付いていた土が取れた痕跡が認められる。現状ではA面鋸にはあまり土が付着していないが、A面鏃身左側、B面鋸や鏃身右側には粘土が薄く付着している。土が取れた痕跡より見ると、A面右・B面左側が原位置では下になっていたことが窺われる。

内面の土 A面右側舞、B面左側舞付近から内面縫にかけて土が厚く付着しており、外面に見られる土が取れた痕跡と合わせて考えると、A面右側の鏃を下にして、鏃を立てた状態で埋納されていたことが想定される。鋸から見ると、舞は上半部にはあまり土が付かず緑青が見えており、原位置にあった時点ではこの部分に空隙があったと考えられる。また、舞の土が残る部分からA・B両面の縫にかけ厚く付いた土が取れた痕跡があり、A面側に多く土が入っていたと見られることから、原位置では鏃をA面側に傾けていたことが想定される。

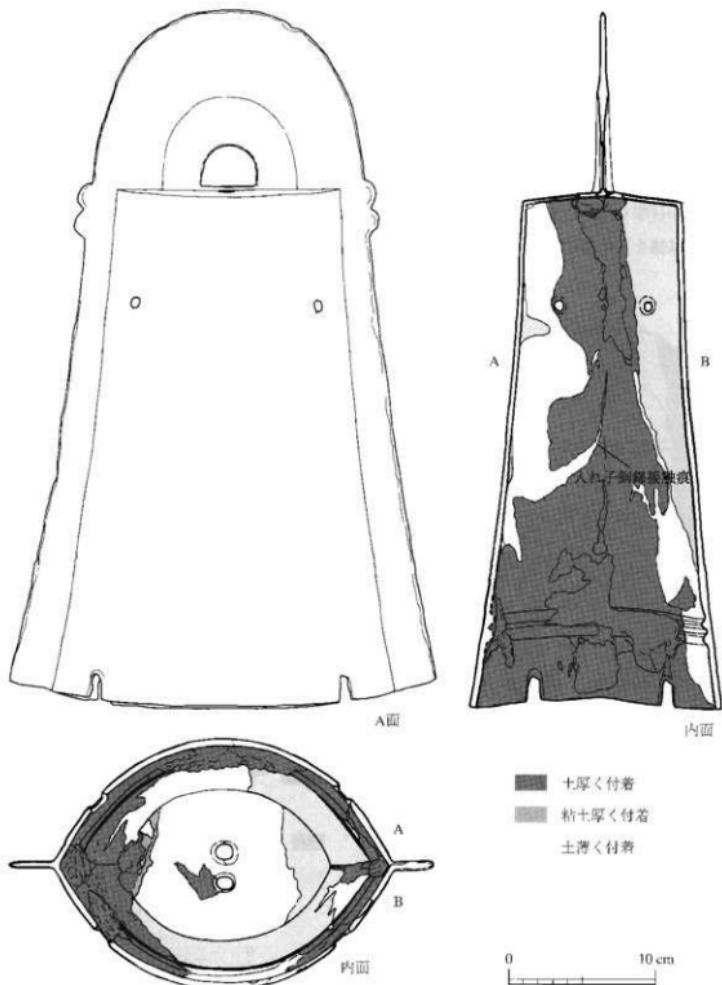


第42図 22号鋸土付着状況実測図

8. 23号鐸 [写真図版157・162-2]

出土状況等 23号鐸は重機によって掘り返されており、発見された時には既に原位置を失っていた。重機による搅乱を受けているが、損傷は見られず遺存状況は良好である。

内面の土 A面左側、B面右側内面縁付近に土が厚く付着しており、縫内面付近にも土が残っている。また、A面左側内面縁中央付近には内部に入っていたと考えられる銅鐸との接触痕が筋状に



第43図 23号鐸土付着状況実測図

僅かに認められる。

これらの点からすると、現在ではどの銅鐸と組み合うかは不明と言わざるを得ないが、本来23号鐸も小さい銅鐸と入れ子になっており、A面右側の鱗を上にして、鱗を立てた状態で埋納されていたことが想定される。

概から見ると、舞内面には土が厚く付く部分に接して、A面側からB面側に斜めに粘土が厚く筋状についているところがある。これが内部に水が溜まつた痕跡であり、原位置にあった時点の水平を示しているとすると、A面側に鱗を16°傾けた姿勢であったことが考えられる。

A面右側内面やB内面、舞の一部には土が薄く付いているが、総じて土の付着は少なく、これも二次的に付いたものである可能性がある。舞に付着している筋状の粘土がかなり低い位置にあることを考え合わせると、原位置にあった時点でも内部に土が詰まった状態ではなく、入れ子銅鐸との間に空隙があったことも考えられる。

9. 24号鐸 [写真図版165・169-2]

出土状況等 24号鐸は重機によって振り返されており、発見された時には既に原位置を失っている。重機による搅乱を受けているが、損傷は見られず遺存状況は良好である。

外面の土 A面右側の鱗に土が厚く残っており、裾付近では外側の銅鐸と接していたと思われる部分が面になっている。鐸身右側下半には土が剥離した痕跡があり、鐸身中央から舞右側にかけて斜めに地の緑青が見える部分が筋状についているが、これより右側の粘土が薄く付いた部分にも本来は厚く土が付いていたものと思われる。B面は左側鱗と鉢左側、鐸身下半を中心として土が付着している。

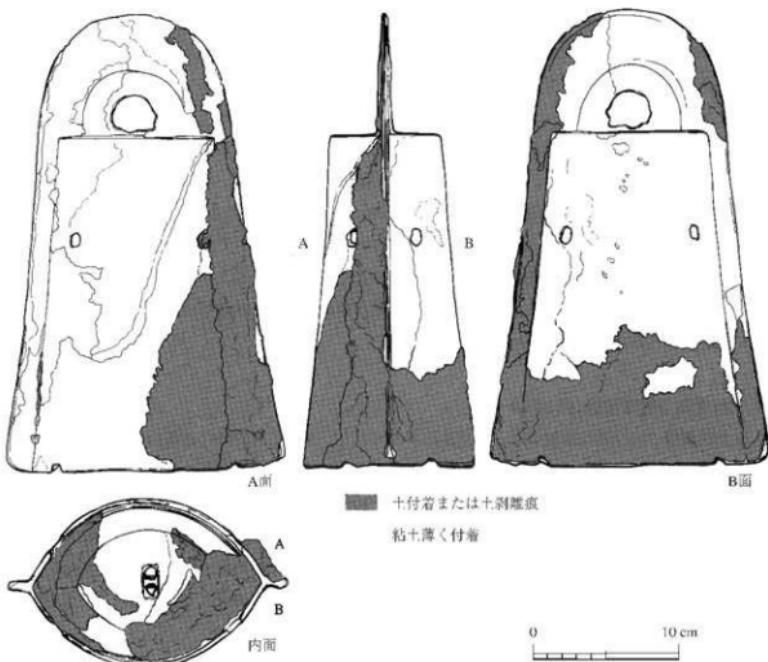
A面左側鐸身と鱗の一部と、B面左側鐸身鱗寄りと鉢の一部には土が付かない部分があるが、その他の部分には粘土が薄く付いている。

これらの点からすると、A面左側の鱗を上にして、鱗を立てた状態で埋納されていたことが想定される。また、A面鐸身裾から舞方向に斜めに厚く土の付着が見られることは、原位置では上側に当たるA面左側鐸身上半や鉢付近では外側の銅鐸との間に空隙があったことも考えられ、A面左側鐸身と鱗の一部にある土の付かない部分と対応する。B面左側鐸身鱗寄りの土が付かない部分は、他の入れ子銅鐸でも原位置では下側となる鱗などに土が付かないものがあることから、やはり埋納姿勢に応じたものと思われる。

内面の土 裾から見ると、原位置では下側になるB面左側、A面右側の内面縫付近にかけて斜めに土が厚く付着している。また、A面左側、B面右側の裾から内面縫、舞の一部にかけても土の付着が見られる。

舞は土が厚く付く部分に接してB面からA面に傾斜するように粘土が薄く付着している部分があり、それから上半は比較的土が付いていない。これが原位置での水平を示すとすれば、A面左側の鱗をややB面側に傾けた形で埋納されていたことが想定される。

また、原位置では上側となるA面やB面右側の一部、舞には、あまり土が付かない部分があり、内部に土が一杯に入らず空隙があったものと思われる。A面に土が付かないところが多い点は、B面側にやや傾いた状態で埋められていたことに対応するとも考えられる。



第44図 24号銅土付着状況実測図

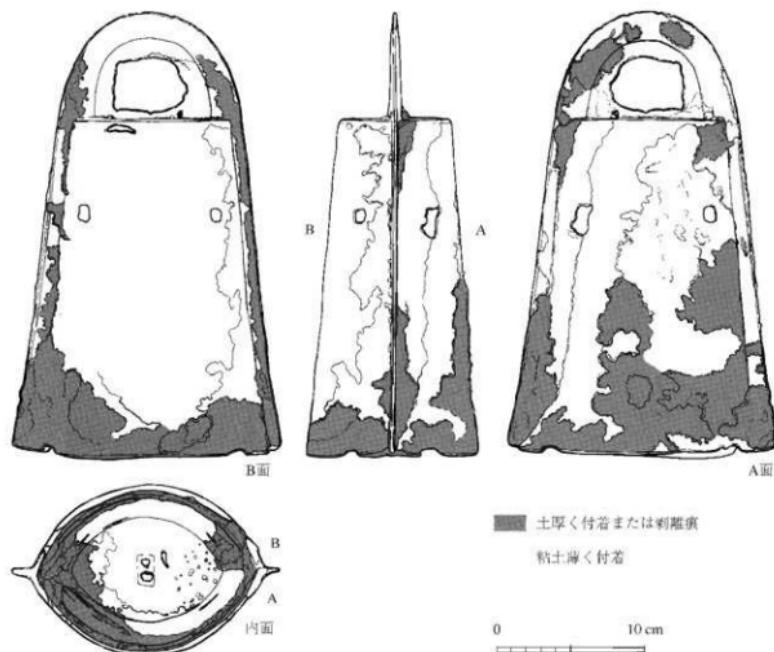
10. 25号鐸 [写真図版170・174-2]

出土状況等 25号鐸は重機によって掘り返されており、発見された時には既に原位置を失っていた。重機による搅乱を受けているが、損傷は見られず遺存状況は良好である。

外面の土 A面は鐸身右側と裾部、B面は左右の鐸と裾部に土が厚く付着、または取れた痕跡がある。A面は鐸身左側、B面は鐸身右側の鐸に接する部分に土が付かず緑青が見える部分があり、その他の部分は粘土が薄く付着している。

内面の土 裾から見ると、A面右側からB面左側の内面稜付近にかけて土が厚く付着、または剥離した痕跡が認められる。裾部は全体に土が付いているが、B面右側の内面稜付近にも土がやや厚く付着している部分がある。A面左側、B面中央付近には粘土が薄く付着している。舞はA面から見て右側の土が取れた痕跡に接して緑青の見える部分があり、それより左側には薄く粘土が付着している。

これらの点からすると、A面左側の鐸を上にして鐸を立てた状態で埋納されていたことが想定される。また、内面の土が厚く付く部分がA面側に偏っていることから、A面左側の鐸をややA面側に傾けていたものと考えられる。内面には粘土が薄く付き、原位置では下側になる土の付く部分に接して土が付かないところがある点を見ると、内部に空隙があったものと思われる。



第45図 25号鐸土付着状況実測図

11. 34号鐸 [写真図版231-2]

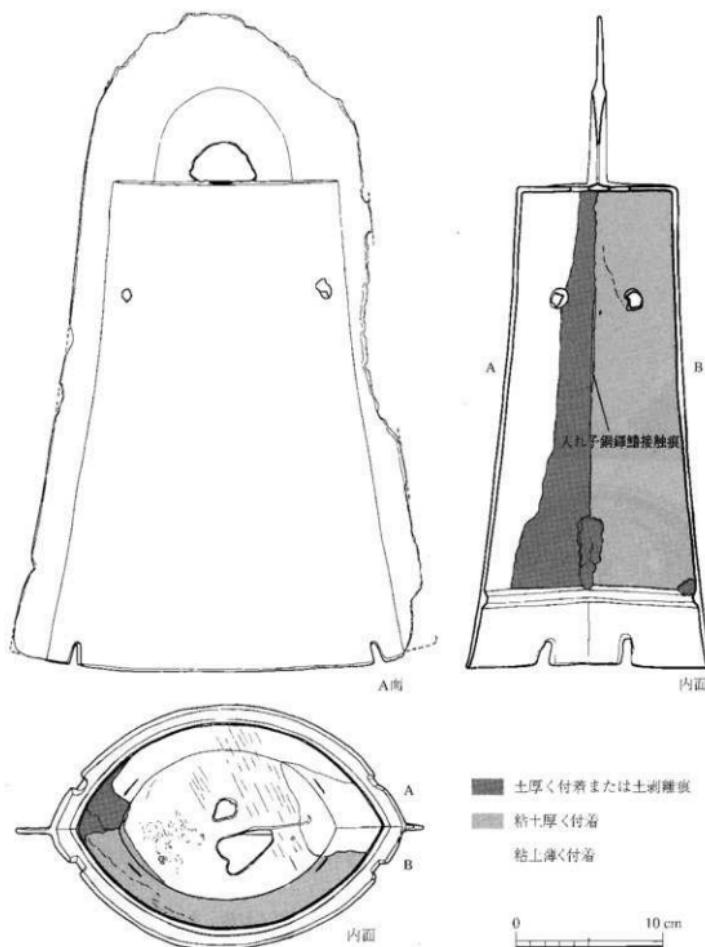
出土状況等 34号鐸は、加茂岩倉遺跡発見から12日後、1996（平成8）年10月26日に届け出があり、存在が明らかになったものである。

遺存状況はA面の鐸から鉢にかけて欠損があるものの比較的良好であるが、付着していた土は発見者によりかなり落されていた。

内面の土 据から見ると、A面は左側内面稜付近に土が厚く付着、または取れた痕跡があり、内面稜の一部には内部に入っていた入れ子銅鐸の鐸が接していたと思われる痕がある。A面右側、B面左側の内面稜付近から舞の一部にかけては土が付着せず、緑青の見える部分がある。その他のA面中央部から舞には薄く、B面には厚く粘土が付いており、B面右側の粘土は乾燥してひび割れになっていた。

これらの点からすると、現在ではどの銅鐸と組み合うかは不明であるが、34号鐸も本来小形の銅鐸と入れ子になっており、A面右側の鐸を上にして鐸を立てた状態で埋納されていたことが想定される。A面右側の鐸から鉢にかけて重機による損傷があるのは、こうした埋納姿勢に対応しているものと思われる。

A面右側、B面左側の内面稜付近から舞の一部にかけての緑青が見える部分は、内部に空隙があ



第46図 34号鐸土付着状況実測図

ったことを示している。これはA面右側の鰐に平行して裾まで続いており、原位置における上側、つまりA面右側の鰐が水平になるように埋められていたことを窺わせる。

また、空隙部分に接して舞からA面にかけて見られる薄く縞状になった粘土は、内部に水が溜まり水位が上下したことを示している。これを水平として推定すると、原位置ではA面右側の鰐をB面側に24°傾けていたことが考えられる。
(角田徳幸)

第5章 銅鐸の調査

第1節 銅鐸各部の名称

銅鐸各部の名称は、型式によって異なる点があるため、外縁付鉢1式・外縁付鉢2式・扁平鉢1式・扁平鉢2式にそれぞれ分けて設定することとし、第47図のとおりとする。

鉢 鉢は大別すると外縁、菱環、内縁に分けられる。外縁は文様が分割される場合には、外側から外縁第1文様帯・外縁第2文様帯と呼ぶ。菱環は鉢の厚肉部を指し、中央の稜を挟んで外側を外斜面、内側を内斜面とする。

内縁は菱環文様帯（綾杉文帯）の成立により菱環と区分する。すなわち、外縁付鉢2式の段階では菱環外斜面・内斜面は複数の文様帯に分割されているが、扁平鉢1式の段階になると菱環の稜内外に綾杉文が施され1つの菱環文様帯が構成される。これ以降、菱環文様帯を挟んで外側を外縁、内側を内縁と呼ぶこととする（難波1986）。

鐸身 鐸身の形態は、身の反りについては外反率、舞の形態については扁平率で示した。外反率は、舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100で求めたもので、鐸身に反りがなければ0%になり、反りが強ければ数値が増加する。舞の扁平率は舞短径÷舞長径×100で求めたもので、正円であれば100%になり、扁平なものほど数値は減少する。

鐸身の文様は、袈裟襷文と流水文に分けられる。袈裟襷文は四区と六区に分けられるが、横帯は上から順に第1・第2・第3・第4、縱帶は左縱帶・中縱帶・右縱帶とする。また、これらによって区画される部位は、四区袈裟襷文では上段を上左区・上右区、下段を下左区・下右区、六区袈裟襷文では上段を上左区・上右区、中段を中左区・中右区、下段を下左区・下右区と呼称する。

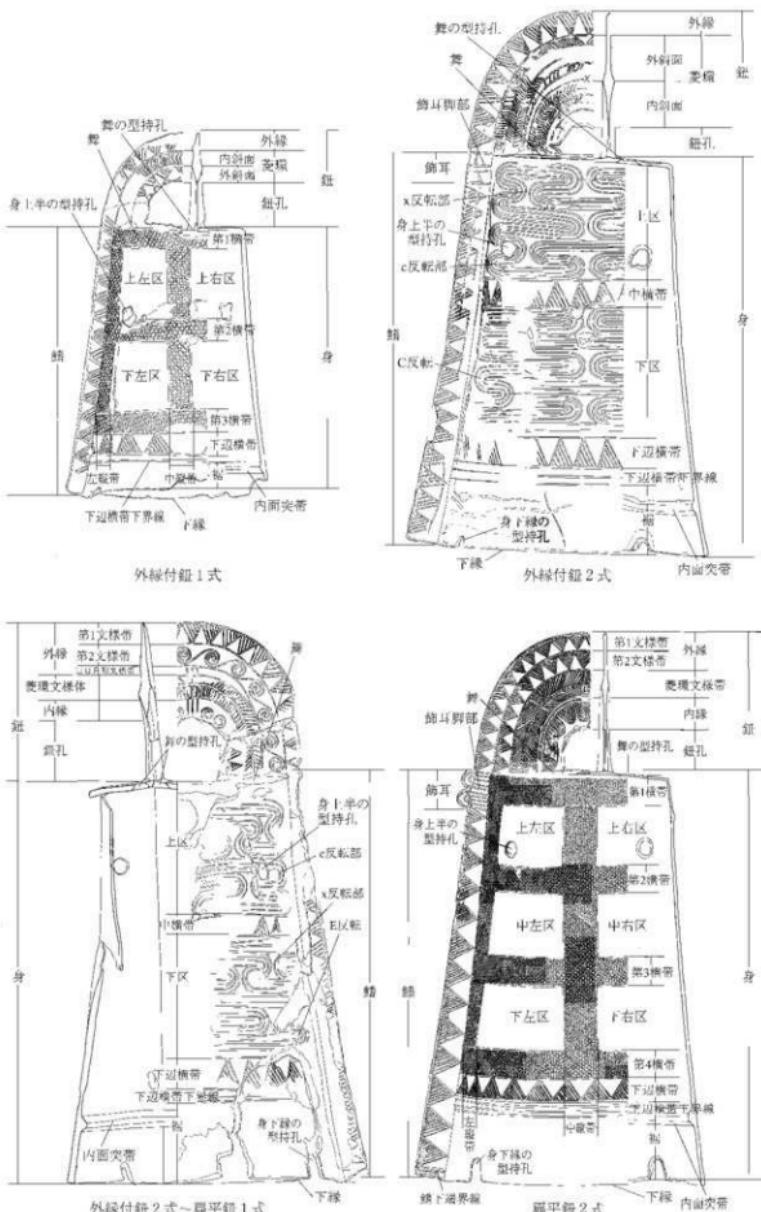
流水文は横帯によって一区と三区に分けられるが、横帯が複数である場合は上から順に第1・第2とする。横帯によって区画される部位は、一区流水文では上区・下区とし、二区流水文では上区・中区・下区と呼称するものとする。

流水文の反転には上下段の直行部に間隔があくC反転と、上段の直行部最下端の線が下段直行部最上端の線と共通するE反転がある。反転部には流水文の左右の端にc字状または逆c字状に表れるc反転部と、左右一对の反転部よりなるx反転部がある。流水文はc反転部の数とx反転部の配置を変えることで多様な文様構成を示す。流水文の直行部を段と呼べば、段の数とc反転部の数は一致することになるので、例えば8段構成で7つのx反転部をもつものは8c7xと表記するものとする（佐原1972）。

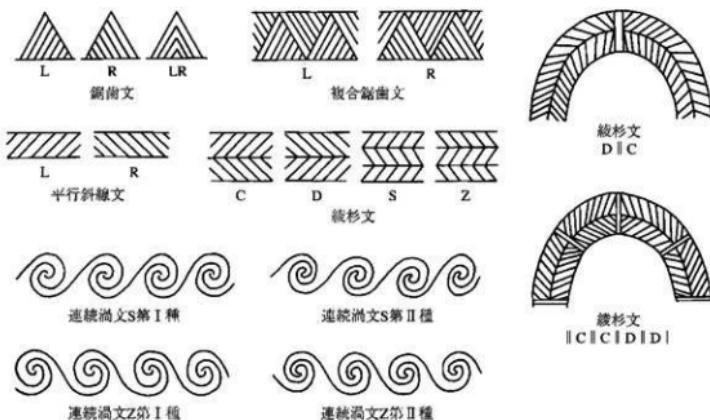
鐸身文様帯の下端に配される横帯は下辺横帯とし、下辺横帯下端を画す界線を含めその下に見られる界線を下辺横帯下界線とする。下辺横帯下界線より鐸身下縁までを裾とする。

鋸齒文・綾杉文・連続渦文 鋸齒文は充填される平行斜線文が左下がりのものをL、右下がりのものをRとし、左右対称に平行斜線文が入るものとLRとする。鉢や鑓に鋸齒文が用いられる場合、頂部を鉢孔もしくは鐸身側に向けるものを内向、これとは反対に向けるものを外向とする。

綾杉文は平行斜線文Lを上にRを下として一帯にしたものとC、平行斜線文Rを上にLを下にしたものとDとする。菱環文様帯では綾杉文CとDを左右対称に置き、その間に2条または3条の直線文を入れるものがあるが、綾杉文と直線文の配列状況はD||C、||C||C||D||Dなどと列



第47図 銅鐸各部の名称



第48図 細齒文・綾杉文・連續渦文の名称

挙して表記するものとする。

連續渦文は右上がりに展開するものをS、左上がりのものをZとする。また、隣接する単位文の端部が連結しないものをI種、連結するものをII種と呼ぶ（町田・佐原1968）。

A面・B面 加茂岩倉銅鐸は、出土後にA面・B面という名称が順次付けられており、「加茂岩倉遺跡発掘調査概報」1で既に発表されている。同范関係の調査が進んだ現在では、同じ文様を持つ面に同じ名称を付けることが好ましいが、名称を変更することで混乱が生じるとも考えられるので、本報告書では敢えて変更していない。他地域の同范銅鐸についても、基本的には既に使われている名称を用いた。しかし、発見が古くA面・B面の区別が明確でないものについて、加茂岩倉銅鐸の名称に揃えたものもある。

同范銅鐸でA・B面が異なるものは次のとおりである。

1号鐸のA面は26号鐸のB面に対応する。これらは同范関係が判明する前にA・B面を設定したものである。

4号鐸・7号鐸・19号鐸・太田黒出鐸のA面は22号鐸のB面に対応する。太田黒出鐸についてはA面・B面の区別が既になされており（森田1994）、それに従った。22号鐸については同范関係の判明以前にA・B面が設定されていたため、他の銅鐸の面とは描っていない。

5号鐸と同范関係にある気比2号鐸は、加茂岩倉銅鐸出土以前にA・B面が設定されている（東京国立博物館1981・井上1982）。これにより5号鐸のA面は気比2号鐸のB面に対応する。

6号鐸のA面は9号鐸・辰馬419号鐸のB面に対応する。辰馬419号鐸はA・B面の設定がなされていないため、9号鐸との同范関係が判明した時点で面を合わせた。6号鐸は5号鐸の入れ子であったため、5号鐸の面に合わせてA・B面を設定している。その結果、同范関係が判明した時点で面を揃えることはできなかった。

14号鐸のA面は33号鐸のB面に対応する。14号鐸・33号鐸の同范関係は「概報」の刊行後に判明したものである。

21号鐸・伝陶器鐸のA面は氣比4号鐸・伝福井鐸（明大1号鐸）のB面に対応する。伝陶器鐸については、第1横帶にシカ列を持つ面をA面に設定しているようにも思われたが（大阪府泉州考古資料館1986）、A・B面が明確に示されていないため21号鐸に合わせた。氣比4号鐸については既にA・B面が設定されており（東京国立博物館1981・井上1982）、伝福井鐸についてもA・B面が示されていたため（井上1982）、それに従った。

24・39号鐸のA面は38号鐸のB面に対応する。24号鐸・39号鐸・38号鐸の同範関係は『概報』の刊行後に判明したものである。それぞれのA・B面は既に定められていたため、揃えることはできなかった。

31号鐸・桜ヶ丘3号鐸のA面は32号鐸・34号鐸・上屋敷鐸のB面に対応する。桜ヶ丘3号鐸は既にA・B面が設定されており（兵庫県教育委員会1966・1969）、上屋敷鐸については特にA・B面の区別はなされておらず、32・34号鐸に合わせて設定した。

以上の対応関係を含め、全ての同範銅鐸についてA面・B面の関係は第1表のとおりである。

（角田徳幸・山崎修）

第1表 加茂岩倉銅鐸と同範銅鐸A面B面对照表

1号鐸A面—26号鐸B面
1号鐸B面—26号鐸A面
3号鐸A面—30号鐸A面
3号鐸B面—30号鐸B面
4号鐸A面—7号鐸A面—19号鐸A面—22号鐸B面—太田黒田鐸A面
4号鐸B面—7号鐸B面—19号鐸B面—22号鐸A面—太田黒田鐸B面
5号鐸A面—氣比2号鐸B面
5号鐸B面—氣比2号鐸A面
6号鐸A面—9号鐸B面—辰馬419号鐸B面
6号鐸B面—9号鐸A面—辰馬419号鐸A面
11号鐸A面—川島神後鐸A面
11号鐸B面—川島神後鐸B面
13号鐸A面—下坂鐸A面
13号鐸B面—下坂鐸B面
14号鐸A面—33号鐸B面
14号鐸B面—33号鐸A面
15号鐸A面—伝淡路鐸A面
15号鐸B面—伝淡路鐸B面
17号鐸A面—上牧鐸A面
17号鐸B面—上牧鐸B面
21号鐸A面—氣比4号鐸B面—伝福井鐸B面—伝陶器鐸A面
21号鐸B面—氣比4号鐸A面—伝福井鐸A面—伝陶器鐸B面
24号鐸A面—38号鐸B面—39号鐸A面
24号鐸B面—38号鐸A面—39号鐸B面
31号鐸A面—32号鐸B面—34号鐸B面—桜ヶ丘3号鐸A面—上屋敷鐸B面
31号鐸B面—32号鐸A面—34号鐸A面—桜ヶ丘3号鐸B面—上屋敷鐸A面
36号鐸A面—念仏塚鐸A面
36号鐸B面—念仏塚鐸B面

第2節 加茂岩倉遺跡出土銅鐸

1. 1号鐸 [図版13~20・写真図版27~32・269~271]

型式 扁平錘2式

文様構成 四区袈裟襷文

同范銅鐸 加茂岩倉26号鐸

法量	総高	47.0cm	最大幅	28.7cm	重量	5.85kg
----	----	--------	-----	--------	----	--------

舞長径(A面)	14.9cm	舞長径(B面)	14.9cm	舞短径	11.6cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

裾長径(A面)	23.3cm	裾長径(B面)	13.0cm	裾短径	16.6cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

錘 菱環と外縁・内縁よりなる扁平錘である。大きさはA面で高さ12.5cm、B面で高さ12.7cm、幅は18.8cmである。錘孔の高さは3.4cm、幅4.8cmを測る。菱環はA面で幅2.7~3.1cm、B面で2.5~3.0cm、厚さは中央部で0.9cm・右端1.3cm・左端で1.4cmである。菱環後顶部の位置はA面がB面に対し0.2cm程度高くズれている。

外縁は2つの文様帶で構成されており、外縁第1文様帶はA面で幅1.5~1.7cm、B面で幅1.6~1.8cm、厚さ0.35~0.4cmで、外縁第2文様帶はA面で幅0.8~1.7cm、B面で幅1.0~1.6cm、厚さ0.35~0.5cmである。内縁は幅1.0~1.3cm、厚さ0.5~0.65cmである。錘孔部は内縁より1段低くバリ状になっており、錘脚状に残る舞面部分を含めて端部には研磨痕が残っている。

文様は内縁を除きA・B両面ともほぼ同じ構成である。A面は錘等により文様があまり鮮明でない部分があるが、外縁第1・第2文様帶とも内向する鋸歯文Rを入れている。第1文様帶の右端に半鋸歯文の輪郭線のように斜めに1条の線が入っており、第2文様帶の左端に鋸歯文しが1ヶ所ある。第2文様帶右端から5つ分の鋸歯文は下辺が1.0cm前後で、他の鋸歯文の下辺が1.6~2.0cmあるのに対し小さい。

菱環文様帶は中央部に3条の界線を入れ左右に対向する綾杉文を施したD III Cである。内縁は外縁と同様に内向する鋸歯文Rが入っているが錘脚に近い部分には見られず、中央部のものは鋸歯文の先端が欠けている。

B面も外縁は第1・第2文様帶とも内向する鋸歯文Rが施されているが、第1文様帶中央部には鋸歯文間に条線が充填された部分が1ヶ所ある。第1文様帶の右端に半鋸歯文の輪郭線のように斜めに1条の線が入っており、第2文様帶の左端にも同様な斜線が1条見られる。菱環文様帶は中央部に3条の界線を入れ左右に対向する綾杉文を施したD III Cである。内縁は3条の界線が平行に施された重圓文になっている。

錘身 高さはA面34.5cm、B面33.9cm、厚さは0.3cmである。身は舞から裾部にかけてやや外反し、その外反率(舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100)はA面側で1.75% (0.6÷34.25×100)、B面側で1.93% (0.65÷33.6×100)である。

A面の文様は四区袈裟襷文で、横帶が縦帶に優先するものである。各区の大きさは上左区が上辺6.0cm・下辺6.2cm・高さ7.4cm、上右区が上辺5.7cm・下辺6.4cm・高さ7.4cm、下左区が上辺6.5cm・下辺7.1cm・高さ8.2cm、下右区が上辺6.4cm・下辺7.3cm・高さ8.2cmである。第1・第2横帶は幅2.4cm、第3横帶は幅2.5cm、左上縦帶が幅2.5cm、左下・中下・中下縦帶が幅2.8cm、右上・右下縦帶が幅2.7cmである。袈裟襷文内には斜格子文が充填されているが、錘身左半部は錘等により不鮮明

な部分がある。第2横帯には右側には右上縦帯の界線とは少し食い違うが、斜格子内に縦線が入っている。また、下辺横帯は幅2.9cmで、鋸齒文Rが施されている。下辺横帯下界線は3条である。

B面の文様も四区袈裟搏文である。各区の大きさは上左区が上辺5.8cm・下辺6.2cm・高さ7.4cm、上右区が上辺5.9cm・下辺6.5cm・高さ7.4cm、下左区が上辺6.5cm・下辺7.2cm・高さ8.3cm、下右区が上辺6.7cm・下辺7.4cm・高さ8.2cmである。第1・第2横帯は幅2.4cm、第3横帯は幅2.5cm、左上・左下縦帯が幅2.6cm、中上・中下・右上・右下縦帯が幅2.7cmである。第3横帯には中下縦帯・右下縦帯の界線が斜格子内に突き抜けている部分がある。また、下辺横帯は幅3.0cmで、鋸齒文Rが施されている。下辺横帯下界線は3条である。

据端部は、A面とB面左側が内傾する面をなしており、この部分とB面右端部持孔付近には研磨痕が認められる。これに対し、B面中央部と右側の端部は丸みを帯びており、研磨痕等は認められない。

舞 舞はアーモンド形を呈しており、舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）はA・B両面とも同様で、77.9%（ $11.6 \div 14.9 \times 100$ ）である。舞の高さはA・B両面ともほぼ揃っており、中央に高さ0.3cmほどの鈎脚壁状のバリがある。また、舞面が傾斜する肩下がりは、A面0.4cm・B面0.3cmである。

鑓 幅はA面の左飾耳に接する部分で1.8cm・左裾2.7cm・右飾耳の部分で1.75cm・右裾2.7cm、B面は左飾耳部分で1.9cm・左裾3.2cm・右飾耳部分で2.1cm・右裾2.5cmである。文様はA・B両面とも内向する鋸齒文Rであるが、B面左上の飾耳との間に半鋸齒文状に1条の線が入り、これから数えて3番目と4番目の鋸齒文が重複している。また、僅かではあるが、A面左下端の鋸齒文に接して斜めに1条の線が立ち上がっているのが見える。

飾耳は半円形で、脚部を持つものが2個1組で左右に付いている。飾耳頭部はやや厚くなっている。端部にかけて斜面を持つ。飾耳脚の中央にはこれを上に分割するように条線が入っており、B面の飾耳には左側上段に綾杉文D、右側上段に綾杉文Cが充填されている。

内面突帯 2条突帯である。裾からの高さ2.6~3.3cmのところに、上段で幅0.9cm・高さ0.3cm、下段で幅1.1cm・高さ0.4cmの突帯が巡っている。横断面形は頂部が丸みを帯びた三角形または台形状を呈するが、使用に伴う磨滅はそれほど顕著ではない。

型持 舞に2個、鐸身上半にはA・B両面とも2個ずつ、據部にもA・B両面とも2個ずつの計10個の型持がある。

舞の型持孔は内面より見ると、A面側が円形、B面側が不整な椭円形を呈している。大きさは前者が径2.0cm、後者が長径2.0cm・短径1.8cmを測る。

鐸身上半の型持孔はA・B両面とも左上区または右上区の下半にあり、ともに円形を呈している。A面左の型持孔は内面では高さ2.1cm・幅1.8cm、右は高さ2.1cm・幅1.9cmで、B面左の型持孔は内面では高さ2.0cm・幅1.8cm、右は高さ1.8cm・幅1.8cmである。

据部の型持は内面から見ると頂部が丸みを帯びた台形状を呈しており、A面左は高さ1.7cm・幅1.5cm、右は高さ1.8cm・幅1.3cmである。B面左は高さ1.9cm・幅1.4cm、右は高さ1.4cm・幅1.2cmである。

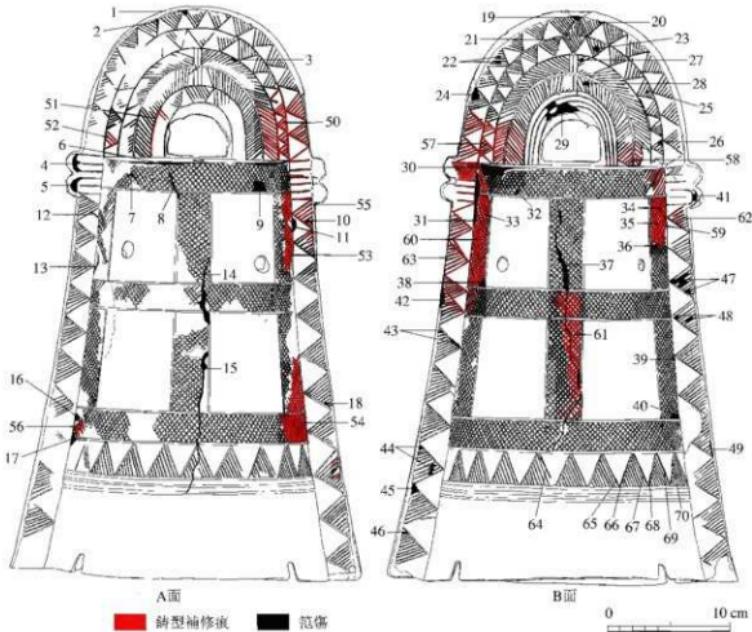
錫上がり 錫上がりは良好で、湯回り不良に伴う欠孔や表面が窪む「ひき」は見られない。また、軟X線写真によれば、舞のB面側や鐸身B面の左側などに厚さの薄い部分が認められるが、気泡状

の鬆は少なく、鑄上がりは良好である。

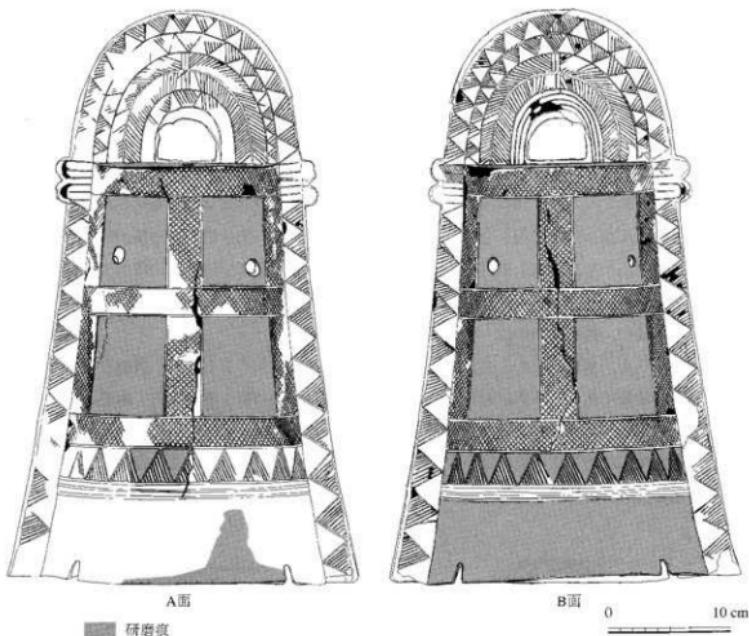
範傷 A・B両面とも鉢・鑄身にかなりの数の範傷が認められる。A面は鋸等に覆われ細かな範傷の観察が行いにくいが、鉢では鋸齒文内の1・2や綾杉文内の3に見られる。鑄身中央部には比較的大きなものがあり、8が第1横帯中央部、14が中上縦帯から第2横帯、15は14に続く位置にあり中下縦帯から第3横帯・下辺横帯を貫いている。また、9のように斜格子文内が潰れたようにやや盛り上がるものもある。鑄は左飾耳の頭部の4・5や、鋸齒文内の10・18などがある。

B面は鉢の鋸齒文内の19~26や綾杉文内の27・28にあり、内線重圓文の条線間の29にも見られる。鑄身中央部にはA面と同様に大きな範傷37があり、中上縦帯から第3横帯まで傷が大きく繋がっている。第1横帯左上の30、第1横帯左から左上縦帯の鑄に接する部分の31は比較的大きな盛り上がりがあり、32~36・38~40のように斜格子文内の一帯が潰れたような範傷もある。また、鑄には右飾耳の頭部の41や、鋸齒文内の42~49などに範傷がある。

鉄型の補修 A・B両面とも、文様の描き直しや表面の盛り上りなどから、鉄型を補修したと見られる部分が顕著である。A面は鉢脚付近の50・51・52、鑄身の第1横帯・右上縦帯の53、第3横帯・右下縦帯の54、右飾耳から右鉢上部の55にある。このうち53・54は鉄型に本来彫られていた斜格子文と補修後の斜格子文に食い違いが見られるのははじめ、55の上から2段目の鋸齒文には内部の条線に食い違いがあり、鋸等により不鮮明ながら第3横帯左の56にも斜格子文の食い違いがある。



第49図 1号鐸の铸造状態



第50図 1号鐸の研磨状態

また、50の外縁第2文様帶内の鋸歯文は5つあるが、同范銅鐸である26号鐸の同じ箇所では4つしかないことから、鋳型の補修によって描き直された際に鋸歯文の数が増えたことが明らかである。

B面は鋸脚付近に57・58、鐸身の左上縦帯・第1・第2横帯左の60、第1横帯右と右上縦帯の59、第2横帯から中下縦帯の61、左鰭上半部の63がある。このうち、59の第1横帯右側部分は斜格子文にならず、平行斜線文Lで補修されている。61は範傷37の上を補修したもので斜格子文が不整合になっており、途切れている縦帯界線の一部は引き直されていない。また、63は鰭耳側に半鋸歯文状に線を斜めに入れてから鋸歯文を描き直したために、鋳型に本来刻まれていた鋸歯文と重複したものと見られ、62は鋸歯文内の条線が不整合になっている。

研磨・補刻 A・B両面とも舞面、袈裟襟文内の上左区・上右区・下左区・下右区、下辺横帯の鋸歯文間、及び縫に研磨を加えており、光沢を持っている。また、B面下辺横帯にある一部の鋸歯文には輪郭線を縁取るよう細い陰刻線（64～70）が見られる。

「X」の刻線 A面錐菱環文様帶の頂部、中央界線部分やや左寄りに、タガネ様の工具で鋳造後に刻まれた「X」の刻線がある。

（角田徳幸）

2. 2号鐸 [図版21~28・写真図版34~38・272~274]

型式 外縁付鉢2式

文様構成 上区流水文

法	量	総 高	43.5cm	最大幅	26.6cm	重 量	5.98kg
		舞長径(A面)	14.8cm	舞長径(B面)	14.7cm	舞短径	11.4cm
		裾長径(A面)	22.8cm	裾長径(B面)	22.9cm	裾短径	14.8cm

鉢 菱環と外縁からなる外縁付鉢である。高さはA面が12.3cm、B面が12.6cm、幅は18.25cmを測る。鉢高差によってA面頂部付近には段が生じている。鉢孔の高さは3.9cm・幅4.8cmを測る。菱環の幅は、一部に文様や界線が不鮮明のため計測できないところがあるが、A面中央で3.5cm、右端で2.3cm、B面中央で3.7cm、右端で2.1cmである。菱環稜部の厚さは中央部で0.9cm、A面を基準とすると左端鉢脚部1.2cm・右端鉢脚部1.15cmを測る。

鉢の文様は、A面とB面では全く異なっている。A面には、幅1.7cmの外縁に右上がりの連続渦文Sが施されており、菱環の外斜面には、外に向むかう鋸歯文と右上がりの連続渦文Sの2つの文様が並ぶ。鋸歯文は基本的にはLRであるが、一部にRも見られる。渦文は、いずれも隣接する単位文の端部が連結しない第1種である。また、内斜面には双頭渦文を基調とした文様が施されており、中央より右側には、他の渦文とは異質の渦巻文や蕨手状の文様も見える。

B面の外縁には内向むかう鋸歯文Rが充填されている。外縁の幅は2.0cmで、鉢の頂部と左右両端部との差はほとんどない。菱環の外斜面には綾杉文と三日月形状の文様が配置され、この2つの文様の間には1本の条線が施されている。綾杉文は軸線を持ち、中央部を境に對向する。左側が綾杉文C、右側が綾杉文Dである。三日月形状の文様は、綾杉文と菱環の隙間を埋める方法として施されたもので、三日月形状の文様の中には1本の条線が入っている。

内斜面には、中央部に蕨手状の文様が配置され、これを境にして対向する連続渦文が施されている。蕨手状の文様より左側は右上がりの連続渦文S、右側は左上がりの連続渦文Zで、いずれも中央部へと延びて行くが、連続渦文の巻き方向と隣接する蕨手状の文様では巻き方向が逆になっている。文様の一部が不鮮明であるため、蕨手文と連続渦文がどのように接するのかはわからない。

鐸身 高さはA面で30.3cm、B面で29.8cmである。厚さはA面で0.3~0.45cm、B面で0.7~0.75cmを測り、全体的にB面が厚く、ほぼ同じ大きさの銅鐸と比べてもかなり重い。側面から見ると外反しており、その外反率(舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100)は、A面が1.85%(0.55÷29.8×100)、B面が2.23%(0.65÷29.2×100)である。

A面の文様は、中央に横帯を配した二区流水文である。文様は、鋸や磨滅、剥離等のため全体的に判然としない。流水文の直行部1段の条数は5本で、上段の直行部下端の条線と下段直行部上端の条線を共有するE反転の流水文と見られる。

上区流水文は、文様帯の上端から右側下端にかけての部位や左右端の反転部など、かなりの部分で文様を確認することができない。流水文の直行部を確実に押さええることができるには、文様帯の左側下端から上へ7段の範囲である。この間の幅は7.4~7.7cmで、1段の幅は概ね1.1cm程度と見られる。これは、現状で確認できる流水文直行部1段の幅が1.0~1.3cmであることと符合する。鐸身上端から文様帯の下端までの幅を計測すると11.4cmであることから、上区は全体として10段構成の文様帯であると見てほぼ間違いない。10段という偶数の直行部を持つとすれば、各段の左右両端

部は、相接する2段の直行部を1単位としたc反転部を形成しているものと見られる。

下区流水文は、左上半及び下半中央部の文様が極めて不鮮明である。ただ、右端に8段の直行部と4つのc反転部、下半部に辛うじて4つのx反転部が認められ、これらの位置関係から、下区流水文は8つのc反転部と7つのx反転部を持つ8c7xの構成をとるものと見られる。

鐸身文様帯の下端にある下辺横帯は、幅が2.2~2.3cmで、横帯内にはLRの鋸齒文が充填されている。下辺横帯下界線は3条で、1~3条目までの間隔は1.3~1.4cmである。

鐸身B面は、表面の広い範囲に剥離が見られ、磨滅も著しい。文様は左上半の一部及び右下半の一部に観察できる程度である。左右両端のc反転部が見えないため断定はできないが、鐸身上部の型持孔の直下に流水文が施されない部分があることから、この部分に横帯を持つ二区流水文であると見られる。

上区流水文様帯には、鐸身中央より左側で4つのx反転部が確認できる。このx反転部と、現状で観察できる流水文の直行部との位置関係から、上区流水文は8つのc反転部と7つのx反転部を持つ8c7xの構成をとるものと見られる（第51図⑧）。

下区流水文は、右下端部付近にx反転部とおぼしき部分が見られるが、そのほかには、流水文の直行部が僅かに観察されるのみで、文様構成は全くつかめないのが実状である。また、下辺横帯やその下界線についても観察することはできない。

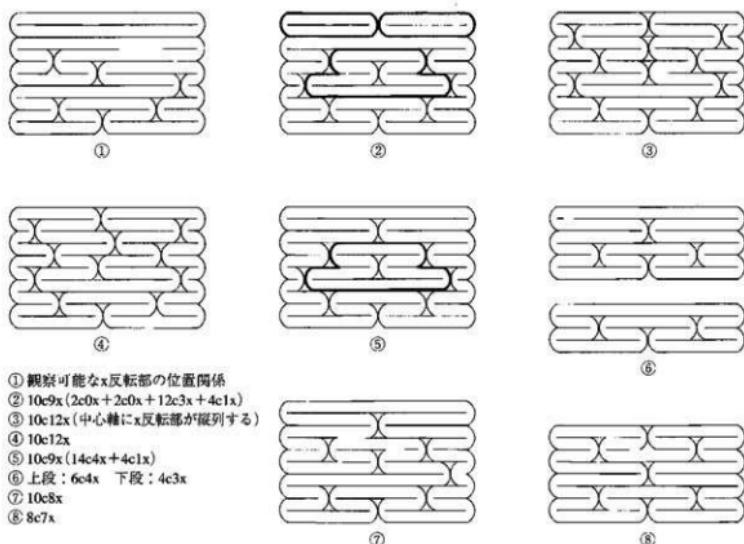
A面上区流水文の復原 下区の流水文が、8c7xという横型流水文の典型的な文様構成をとることから、上区流水文が系統の違う縦型流水文になるとは考えにくい。したがって、上区は横型流水文の範疇で復原するのが妥当と思われる。そこで、10段構成の横型流水文という前提により上区の文様構成を考えてみる。

まずx反転部の位置関係を確認すると、4~5段目左側・5~6段目中央付近・6~7段目右側・8~9段目左側・8~9段目右側・9~10段目中央付近にあることがわかる。中央付近にある2つのx反転部は、いずれも中心軸に対してやや左側に位置し、右側6~7段目のx反転部は錯までの距離が非常に短く、両端のc反転部に極めて接近した位置にある（第51図①）。また、8~9段目右側の反転部は、文様が流れたためか、やや下方へズレているように観察される。

x反転部がある一定の規則性を持って配置されているとすれば、x反転部が8~9段目で左右対称に配置されているように、4~5段目左側・6~7段目右側・8~9段目左側のx反転部と線対称の位置関係を持つx反転部の存在が想定される。また、中心軸付近にある2つのx反転部が2段隔てて配置されていることから、1~2段目中央にx反転部が配置された可能性もある。

ただ、1~2段目中央にx反転部を配置すると、全体としては10c9xの構成でありながら、ひと続きの流水文とならず、2c0x+2c0x+12c3x+4c1xという4つの単位文に分かれることになる（第51図②）。しかも、4c1xの単位文は12c3xの単位文に囲まれるような文様になる。これを避けるためには、まず2~3段目に左右対称のx反転部を配置し、さらに3~4段目中央付近にx反転部を1つ配置する必要がある。これによって、全体としては10c12xの構成をとる横型流水文が完成する（第51図③）。

しかし、これには中心軸付近に3つのx反転部が縦に重なるという問題が残る。銅鐸の流水文にはx反転部をできるだけ隔段配置するような配慮があるとされ（佐原1972）、2つのx反転部が縦列する例はあっても、このように3つのx反転部が重なり合った類例はない。このことを考慮に



第51図 2号縄A面上の流文の復原

入れると、3～4段目中央付近にはx反転部を配置し難いが、ここで注意しなければならないのは5～6段目、9～10段目にあるx反転部が、中心軸よりやや左側に位置していることである。この微妙なズレが、3つのx反転部を継列配置にしないための配慮によるものであるならば、この10c12xの流文も全く可能性がないとは言えない（第51図④）。

次に、1～2段目中央ではなく2～3段目中央にx反転部を配置した場合を考えてみると、全体としては10c9xの構成をとる14c4x + 4c1xの流文となる（第51図⑤）。やはりこの場合でも、4c1xの単位文が14c4xの単位文に囲まれてしまうという問題が生じるが、この10c9xの流文は、よく見ると6c4xの流文と4c3xの流文が6～7段目のx反転部によって繋ぎ合わされたような構成になっていることがわかる（第51図⑥）。この6c4xは、8c7xの上もしくは下2段、4c3xは8c7xの上もしくは下4段を省略したもので、文様のパターンは、いずれも8c7x横型流文の系譜であると言ってよい（第51図⑧）。

ただ、4c1xが14c4xの単位文に囲まれることについては、こうした類例がないので慎重にならざるを得ない。6～7段目右側のx反転部は現状で確認できるため、確実に存在するものとして認識する必要があるが、これと線対称に復原配置した左側のx反転部については再考の余地があると思われる。もし、6～7段目左側にx反転部が存在しないとすると、6～7段目右側のx反転部によって6c4xと4c3xの2つの単位文を単純に連結した10c8xの構成をとる横型流文となる（第51図⑦）。

10c9x（第51図⑤）、10c8x（第51図⑦）の復原案にも若干の問題点はあるが、下区の8c

7 x 流水文との関係を考慮すると、10c 12x（第50図④）の復原案より妥当性が高いと言える。現状においては、この2案を最も可能性のある復原案として示しておきたい。

舞 舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）は、A面が77.03%（ $11.4 \div 14.8 \times 100$ ）、B面が77.55%（ $11.4 \div 14.7 \times 100$ ）である。A面とB面では舞の長径に僅かな差があるが、舞面自体に横方向の大きなズレはない。中央には高さ0.2cmのバリが認められる。舞面には、鉢の付け根付近や縁辺部に「ひき」による窪みがある。舞面の傾斜を示す肩下がりはA面で0.8cm、B面で0.9cmである。

鎧 幅はA面の左肩で1.9cm・左裾2.1cm、やや欠損している右肩は現況で1.6cm・右裾1.0cm、B面は、左肩が現況で1.7cm・左裾1.8cm、右肩で1.8cm・右裾2.1cmである。文様はA面左肩部に2条の直線文が見え、B面では下半部に内向する鋸歯文の一部が僅かに認められるが、その他の部位については、割れや剥離、磨滅等によってほとんど確認することができない。A面を基準にした際の左鎧端部は、整形・研磨を施した痕跡として面をなしているが、A面とB面が斜めにズれているために、この鎧端部の面もB面側へ向けて傾斜している。

内面突帯 鎧端部からの距離が、A面では2.5~2.7cm、B面では1.5~2.5cmの部位に、幅0.8~0.9cm、高さ0.3~0.4cmの突帯が1条、さらに同じく裾からの距離が、A面では4.0~4.1cm、B面では2.8~3.5cmのところに、幅0.8~1.0cm、高さ0.3~0.4cmの突帯が1条、計2条の突帯が巡っている。断面の形状は、鎧に近い部位が丸みを帯びた台形もしくは蒲鉾形、両面の中央付近では上辺が裾端部に向かってやや傾斜する台形状を呈している。

型持 舞にはA・B面に1つずつ、鐸身上半にはA・B面それぞれに2つずつ、裾にはA面に2つ、B面に1つの型持孔がある。

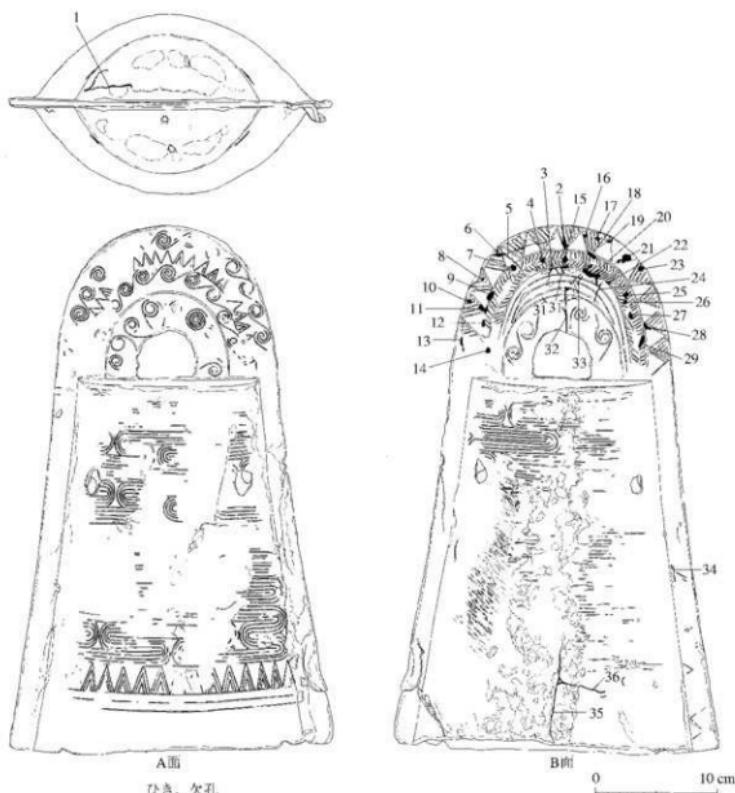
舞の型持孔は、外面から見るとA面に直径0.5cmの小穴が空いているに過ぎないが、B面は貫通する穴とならなかっただけで、内面には両面に不整な闊丸長方形の窪みが認められる。内面観察による型持痕の大きさは、A面が長辺1.8cm・短辺1.3cm、B面が長辺1.7cm・短辺1.4cmである。

鐸身下半の型持孔は、A・B面の左右とも上区流水文の7~8段目にある。内面を見ると部分的に型持の形状を留めるところがあるものの、いずれも不整な橢円形状を呈している。型持周辺で湯回りが悪かったために孔が大きくなつたものと見られる。内面観察による型持痕の大きさは、A面左側が高さ1.7~2.3cm・幅1.7~1.8cm、右側が高さ1.7~2.0cm・幅1.7~1.8cm、B面左側は高さ2.1cm・幅1.3~1.7cm、右側が高さ1.8~2.3cm・幅1.7~2.1cmである。

裾の型持孔は、頂部がやや丸みを帯びた台形状を呈しており、内面から見るとその頂部が内面から外面に向かって傾斜している。内面における型持痕の大きさは、A面左が高さ0.9cm・幅1.8cm、右が高さ0.8cm・幅1.8cm、B面右が高さ0.5cm・幅1.5cmである。鎧からの距離はA面左側が3.1cmで、その他は概ね2.3~2.4cmの位置にある。B面左側の裾端部には、鎧から2.9cmのところに型持孔の痕跡と見られる僅かな食い込みが認められる。こうした残存状況の違いは、裾端部における切断位置の差に起因するものと見られる。

鉢型の食い違い A面とB面では斜めにややズレが生じている。鉢の頂部では、A面がB面よりも僅かに下がって段となっている。舞面を見ると、A面の左肩に対してB面の右肩が僅かに高く、逆にB面の左肩に対してA面の右肩が低い。このズレは鐸身の下部へ向かって徐々に大きくなり、裾端部では0.4cm程度の差となっている。

鉢上がり 湯回りが悪いため、鋳造時に欠孔が生じたところは、舞のB面に1ヶ所認められる。



第52図 2号鐸の鋳造状態

また、鐸身には、器壁が厚いために辛うじて貫通する穴とはならなかつた窪みが数ヶ所認められる。軟X線調査によると、鐸身のみならず鉢や鰭にも多数の穴が空いており、概して鋳上がりは良くなかったものと見られる。

表面が窪む「ひき」は、舞面では鉢の付け根や縁辺部、鐸身では上端部や鰭の付け根、内面突帯の付け根付近に見られる。

範傷 B面の舞に1ヶ所、鉢に29ヶ所、鐸身に3ヶ所、鰭に1ヶ所の範傷が認められる。

1は舞の縁辺部から「V」状に延びる傷で、鉢に沿ってやや長く延びる。2・8・10・16・17・20・21・23は外縁鋸歯文の平行斜線間にある傷で、21を除けば比較的小なものである。鋸歯文内の6・13は鋸歯文を横断するように延びており、5は外縁から菱環外斜面にかけて延びる。9・12・18・28は外縁と菱環の界線付近にある膨らみで、11のように外縁の鋸歯文に続くものもある。菱環外斜面の4・7・14・15・22・25・27・31は、綾杉文の平行斜線間や軸線上の膨らみで、20・29の

ようやく大きくなつた傷もある。3・24・30・33は菱環外斜面を縦断するように延びるやや細い傷で、32はやや太くなつて内斜面にまで及ぶ。鈴の付け根付近に認められる34は、縫状に延びるやや細い傷である。35は裾の端部から中心軸に沿つて細く延びる傷で、36へと分岐する。

A面では範傷が認められないにもかかわらず、B面ではかなり進行した傷が目立つ。未発見ながらも、同範銅鋤の存在する可能性はかなり高いと言える。

(山崎 修)

3. 3号鋤 [図版29~33・写真図版40~44・275~277]

型式 外縁付鉢1式

文様構成 四区袈裟棒文

同範銅鋤 加茂岩倉30号鋤

法量	総高	31.1cm	最大幅	19.1cm	重量	2.02kg
舞長径(A面)	10.8cm		舞長径(B面)	11.1cm	舞短径	7.6cm
鈴長径(A面)	16.2cm		鈴長径(B面)	16.0cm	鈴短径	11.4cm

鉢 菱環と外縁からなる外縁付鉢である。高さはA面が8.0cm、B面が7.55cmで、幅はA面13.35cm、B面13.3cmである。鉢孔の高さは3.55cm・幅4.8cmを測る。菱環の幅は、A面の左端が3.1cm・右端が2.9cm、B面の中央が2.8cm・左端3.0cm・右端が3.1cmである。菱環稜部の厚さは、A面を基準とした場合、中央で0.7cm・左端鉢脚部1.0cm・右端鉢脚部0.9cmである。

文様は鎧や磨滅等により不明瞭な部分が多い。僅かに観察できる部分から判断すると、外縁にはA・B面とも内向する鋸歯文Lが充填されているものと見られる。外縁の幅は、A面左端が1.4cm・右端1.25cm、B面中央が1.3cm・左端1.15cm・右端1.25cmである。

菱環の外斜面には、A・B面のいずれも右端付近に内向する鋸歯文Rが認められる。鋸歯文の頂点が外斜面をほぼ二分したところに位置していることから、これに対向する鋸歯文が施文されている可能性が高い。内斜面の文様は、B面右端の内斜面内側にR方向の平行斜線文が認められ、綾杉文Cが施されているものと見られる。ただ、一部でL方向の平行斜線文が微かに重なり合っているように見えるため断定はできない。A面では菱環内斜面の文様を確認することができない。

鐸身 高さはA面が23.4cm、B面が23.6cmである。厚さは0.25~0.3cmで、A・B面でほとんど差がない。側面から見ると鐸身は舞から裾にかけて僅かに外反し、その外反率(舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100)はA面が0.9% (0.2÷22.1×100)、B面が0.7% (0.15÷22.4×100)である。

A・B面の主文様は、左右及び中央の縦帯と3つの横帯によって鐸身を区画した四区袈裟棒文である。縦・横帯には斜格子文が充填され、界線及び斜格子文は横帯が縦帯に優先する。斜格子の傾斜角は横帯に比べ縦帯の方が緩やかである。鎧や磨滅により、A面は中縦帯や第2・第3横帯の一部で、B面では第1・第2横帯中央付近や中下縦帯から第3横帯右半部にかけて文様や界線が小鮮明となっている。

縦・横帯の幅は、A面の第1横帯が2.2cm、第2横帯が2.15cm、第3横帯が2.2cm、左上縦帯2.1cm・左下縦帯2.1cm・右上縦帯2.1cm・右下縦帯2.1cmである。B面は第2横帯が2.1cm、第2横帯が2.1cm、第3横帯が2.3cmで、左上縦帯1.9cm・左下縦帯2.05~2.1cm・中上縦帯2.1cm・中下縦帯2.15

～2.2cm・右上縦帯2.15cm・右下縦帯2.1cmである。A面の第1横帯下界線は、中央の縦帯と接する辺りがやや太くなっている。

縦・横帯によって区画された各区の計測値は、A面上左区が上辺4.1cm・下辺4.4cm・高さ4.8cm、上右区が高さ4.6～4.7cm、下左区が上辺4.5cm・下辺5.3cm・高さ5.5cm、下右区が高さ5.4～5.5cm、B面上左区が上辺3.9cm・下辺4.3cm・高さ4.7cm、上右区が上辺4.1cm・下辺4.3cm・高さ4.7cm、下左区が上辺4.5cm・高さ5.4cm、下右区が高さ5.5cmである。

下辺横帯はA・B面ともに幅が2.2cmで、いずれも横帯内には鋸歯文Rが施されている。鋸歯文はA面ではほとんど確認できるが、B面では左寄りの1単位と、そのほかに僅かな痕跡が辛うじて観察される程度である。下辺横帯下界線は3条で、1～3条目までの間隔は、A面が0.75cm、B面が0.7cmである。

舞 舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）は、A面が70.37%（ $7.6 \div 10.8 \times 100$ ）、B面が68.47%（ $7.6 \div 11.1 \times 100$ ）である。A面とB面では上・下にズレがあり、両面間に0.4cmの段差が生じている。内型との兼ね合いで両面のズレはそのまま厚さの違いとなり、A面に比べB面がかなり厚くなっている。舞面の傾斜を示す肩下がりは、A面が0.7cm、B面が0.8cmである。

轄 A・B面とともに、鉢の外縁から連続する鋸歯文Lが施されている。A面左側では文様を確認することができないが、同じように内向する鋸歯文Lが鉢へと続くものと見られる。轄は、A面の左肩1.4cm・左裾1.7cm・右肩1.25cm・右裾1.6cm、B面の左肩1.15cm・左裾1.6cm・右肩1.25cm・右裾1.7cmである。

内面突帯 轄端部から0.8～1.5cmのところに、幅0.8cm・高さ0.2～0.3cmの突帯が1条巡っている。断面は頂部が丸みを帯びた台形もしくは三角形状を呈しており、全体的に磨滅した様子が窺える。B面の轄には内面突帯部分を含めた大きな鋲掛けの跡があり、その部分は内外面とも貼り付けをしたようにやや盛り上がっている。

型持 舞に1つ、轄身上半にはA・B両面にそれぞれ2つずつ型持の痕跡が認められる。

舞の型持孔は、外面から見るとA面に1つの孔が認められるが、内面では型持痕が両面にまたがる不整な長方形を呈しており、型持は1山であったことがわかる。舞がA・B面で上下にズれたことによってB面側が厚くなり、B面では貫通する孔とならなかったものと見られる。内面における型持痕の長辺は4.1cm、短辺は1.1～1.7cmである。

轄身上半の型持孔は、A・B面とも第2横帯と左右上縦帯の交点付近にある。A面左側及びB面右側の型持孔は、その一部が縦帯と重なっており、その他の孔は左右上縦帯の内側界線に接している。A面右側の型持孔がやや崩れた長方形を呈しているほかは概ね梢円形で、孔の大きさは、A面左が高さ1.0cm・幅0.9cm、右が高さ1.45cm・幅0.9cm、B面左が高さ1.1cm・幅0.9cm、右が高さ0.8cm・幅1.05cmである。

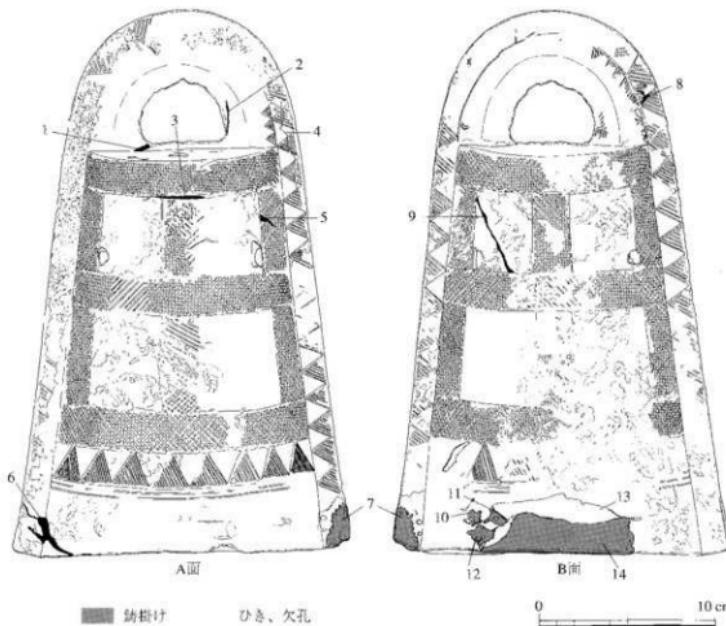
鋲型の食い違い 鉢の頂部や端部、轄の端部を観察する限りでは、A面とB面には鋲型のズレは認められない。ただ、舞面はB面側が0.4cm程度高くなっている、両面の間に段差が生じている。これは、もともと鋲型に彫り込まれた舞面の傾斜角に違いがあったためと見られ、外型の組み合わせに起因するズレではないと考えられる。轄部を観察すると、内型が僅かにB面側へ傾斜していた形跡が認められる。

轄上がり 湯向りが悪く、铸造時に欠孔が生じたところは、鉢に1ヶ所、舞に2ヶ所、A面轄身

に1ヶ所、B面鐸身に3ヶ所認められる。A面鐸身の欠孔は上部右型持孔の直下にあり、型持孔と繋がっている。軟X線調査によると、器内には鋳造時の気泡が壁となって多数空いており、鋳掛けを施した部位も各所に見受けられる。「ひき」は舞の縁に沿った部分や鉢の付け根に当たる内面、そのほかに内面突帯の付け根付近に認められる。このように鋳造欠陥が顕著であることから、鋳上がりはあまり良くなかったものと見られる。

范傷 現状で確認できる范傷は、A面向の鉢に1ヶ所、舞にかけての部位に1ヶ所、鐸身に1ヶ所、B面向の鉢に1ヶ所、鐸身に1ヶ所である。

1は鉢孔から舞面にかけて延びる盛り上がりである。范傷ではなく、鋳造時に生じた皺の可能性もある。2は鉢孔から菱環内斜面にかけて延びる細長い傷で、5は綫帯の斜格子文間に生じた膨らみである。6は鐸身から鋸に延びるやや太い范傷で、僅かに盛り上がっている。3は第1横帯の下界線が他の界線と比べてやや太くなっている部位である。同范鐸とされる30号鐸と共に通の特徴を持つ。8は錐南文の先端部がやや太くなり、文様がヨレようになった部位に延びている。B面上左区内に見える9は、左綫帯の界線から第2横帯の上界線にかけて延びる范傷である。6や9など、范傷としては大きなものが見受けられることから、この銅鐸より以前に同じ鋳型で作られた銅鐸の存在が考えられる。4は鉢から鋸にかけて延びるもので、これを境にして段をなしている。これにつ



第53図 3号鐸の鋳造状態

いては、範物ではなく鋳造時の鍼と見ることもできる。

鉢掛け 表面観察及び軸X線調査によって、鋸に1ヶ所、B面の鉢身裾に4ヶ所の鉢掛けが確認できる。鋸の裾部に施された7は、半円状の突起をいくつか削り出した足掛りを持つ。また、やや離れた部位にも小孔を穿って、これを覆うように実際の欠損部よりも広めに鉢掛けを施している。

B面鉢身裾の10~12は、内面突帯の「ひき」によって生じた欠孔を埋めるように鉢掛けしたものである。14は裾の欠損部を補ったものと見られるが、表面には13の範囲まで膨らんでおり、実際に11・12にまで及ぶ、広い範囲に鉢掛けが施されたものと見られる。欠損部と補鈎部分の境には細かな小孔が多数確認でき、これを足掛りとして鉢掛け部分を外れにくくしたものと思われる。

(山崎 修)

4. 4号鐸 [図版34~38・写真図版46~49・278~280]

型式 外縁付鉢1式

文様構成 四区袈裟襷文

同范銅鐸 加茂岩倉7号鐸・加茂岩倉19号鐸・加茂岩倉22号鐸・太田黒田鐸

法量	総高	31.1cm	最大幅	19.1cm	重量	2.26kg
----	----	--------	-----	--------	----	--------

舞長径(A面)	10.9cm	舞長径(B面)	11.0cm	舞短径	7.9cm
---------	--------	---------	--------	-----	-------

裾長径(A面)	15.3cm	裾長径(B面)	16.1cm	裾短径	11.4cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

鉢 菱環と外縁よりなる外縁付鉢である。高さは7.8cm・幅13.4cm・鉢孔の高さは2.0cm・幅3.1cmを測る。菱環はA面で幅3.3~3.7cm、B面で幅3.1~3.3cm・厚さは中央部で0.75cm・右端0.95cm・左端1.0cmである。外縁は菱環との境が不明な部分もあるが、A面で幅1.3~1.7cm、B面で幅1.3~2.0cm・厚さは中央部で0.3~0.35cmである。鉢孔部は菱環内斜面の界線より0.2~0.7cm程度はみ出しが、バリ状になっている。

文様は全体に判然としないところが多い。A面は外縁中央部を中心に内向する鋸歯文Rが見られる。中央部の鋸歯文は下辺0.8cmで、周辺の鋸歯文下辺が1.5cm前後あるに比べて小さくなっている。菱環については、外斜面を分割するように綾杉文の輪線と思われるものが見られ、内斜面は中央部付近に外向する鋸歯文の輪郭が僅かに観察できる。

B面は外縁に内向する鋸歯文Rが見られる。菱環外斜面はこれを分割するように綾杉文の輪線があり、中央部付近には右側に平行斜線文R、左側にLの斜線が向き合うように観察できる。同范銅鐸である太田黒田鐸などと合わせ検討すると、本来は外斜面中央部には右側に綾杉文D、左側に綾杉文Cが対向して配されているものと思われる。内斜面には中央部付近に外向する鋸歯文の輪郭が僅かに見られる。

鉢身 高さはA面23.3cm、B面22.7cm、厚さは0.4cmである。身は舞から裾部にかけてやや外反する。その外反率(舞・裾縫からの最深値÷舞から裾の長さ×100)はA面側で1.55% (0.35÷22.6×100)、B面側で1.58% (0.35÷22.2×100)である。

A面の文様は、四区袈裟襷文で横帯が縦帯に優先するものである。文様は不明な部分が多く、中上縦帯・中下縦帯・右下縦帯は見えず、他にも一部が観察できる程度である。第1横帯は幅1.9cm、第2横帯は幅2.1cm、第3横帯は幅2.4cm、左上縦帯は幅1.85cm、左下縦帯は幅1.9cm、右上縦帯は

幅1.9cmである。横帯間の高さは第1横帯と第2横帯間が6.1~6.2cm、第2横帯と第3横帯間が5.7~5.8cmである。横帯・縦帯の中には斜格子文が充填されているが、現状ではその一部が見える程度である。左右の縦帯と鰐の間には界線が入っている。左下区内左上方には「I」字様の文様とも思われるものの一部が僅かに観察できる。また、下辺横帯は幅1.8cmであることはわかるが、内部の文様などは不明である。

B面の文様は、四区袈裟襟文で横帯が縦帯に優先するものである。文様はA面に比べるとよく観察できるが、中上縦帯は見えない。第1横帯は幅1.7cm、第2横帯は幅1.7cm、第3横帯は幅2.4cm、左上縦帯は幅2.0cm、左下縦帯は幅2.0cm、右上縦帯は幅1.9cm、右下縦帯は幅2.0cmである。横帯間の高さは第1横帯と第2横帯間が5.9~6.0cm、第2横帯と第3横帯間が5.7~5.9cmである。各区の大きさは右下区のみわかり、上辺4.8cm・下辺5.1cm・高さ5.7cmである。横帯・縦帯の中には斜格子文が充填されているが、鐸身中央部を中心に文様の見えない部分がかなりある。左右の縦帯と鰐の間には界線が入っている。また、下辺横帯は幅1.9cmであるが、右側に僅かに鋸歯文の輪郭がわかる程度である。下辺横帯下界線は2条が観察できる。

柄端部は、A面及びB面左側の一部は外傾する面をなしているが、その他のB面端部は丸みを帯びており鋲放ちの可能性がある。また、A面左・B面右側の鋲端部には、やや突出するような膨らみがある。

舞 舞はアーモンド形を呈しており、舞の扁平率(舞短径÷舞長径×100)は、A面が72.5% (7.9÷10.9×100)、Bは71.8% (7.9:11.0×100)である。舞の中央部には高さ0.2cm程の低い鉢脚壁状のバリがある。また、舞面が傾斜する肩下がりはA面が0.3cm、B面は0.5cmである。

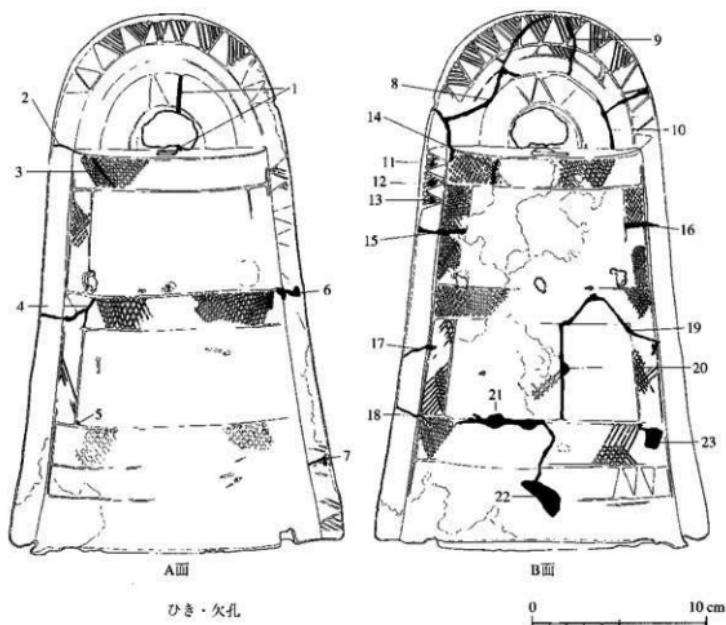
鰐 幅はA面で左肩1.3cm・左裾1.5cm・右肩1.2cm・右裾1.4cm、B面は左肩1.2cm・左裾1.5cm・右肩1.25cm・右裾1.6cmである。文様は見えない部分が多いが、A面右側肩部付近と裾に鋸歯文L、B面は左側肩部付近に鋸歯文Rが見られる。

内面突帯 補からの高さ0.8~1.1cmのところに、幅0.9~1.0cm・高さ0.2cmの突帯が1条巡っている。横断面形は台形を呈しており、突帶上面は平坦面をなすが、使用に伴う磨滅はそれほど顕著ではない。

型持 舞に1個、鐸身上半にはA・B両面とも2個ずつ、裾部にもA・B両面とも2個ずつの計9個の型持がある。舞の型持孔は一山である。内面より見るとA面側は隅部の一部がわかるが、B面側は湯回りが悪く端部は不明である。向長辺の形状よりすれば本来は長方形を呈していたと考えられ、長さは不明であるが、幅は1.6cmである。型持中央部には鉢脚壁状のバリがある。

鐸身上半の型持孔はA面では第2横帯より僅かに高い位置にあり、B面では第2横帯に接する位置にある。A面左の型持孔は湯回りが悪く不整形であるが、内面では上側の端部のみわかり、幅1.3cmで隅丸方形を呈していたと思われる。右側は湯が回ったため貫通しておらず、内面が隅丸長方形に窪み、高さ1.6cm・幅1.3cmである。B面左の型持孔は内面では現状で高さ1.3cm・幅1.2cm、右側も高さ1.3cm・幅1.2cmでほぼ方形であるが、ともに湯回りが悪く不整形である。

裾部の型持は、A面右が高さ1.2cm・幅1.9cmを測り、横長の長方形を呈している。左側は湯が回ったことによって貫通していないが、内面に高さ0.8cm・幅1.7cmの長方形の窪みがある。B面は左右とも内面上側に型持の上辺が窪みとして残っている。左は高さ0.6cm・幅1.6cm・右は高さ0.7cm・幅1.7cmである。



第54図 4号鉢の鋳造状態

鋳上がり 湯回りが悪く欠孔として残ったところは、A面に鐸身に小さいものが4ヶ所、B面では鐸身中央に大きいものが1ヶ所、小さいものが2ヶ所である。

表面が窪む「ひき」は舞はA面に3ヶ所、B面に2ヶ所認められるが、その他は比較的少なく、B面鐸身左側や右側縁の一部に見られる程度である。また、軟X線写真によれば、鐸身B面の上半部などに厚さが薄い部分が認められる他、比較的細かい気泡状の懸も見られる。

范傷 A・B両面とも多数認められる。A面は鋲等により細かい范傷は観察しにくいが、鉢は環内斜面に縦方向に延びる范傷1があり、これより延びると思われるものが鈕脚壁状のパリ右端部にも認められる。鐸身には3が第1横帯、4が第2横帯左から縁、6が第2横帯右から縁、5が左下区隅部にある。縁は鐸身から続く4・6の他に、左肩部に2、右側下方の鋸歯文にかかるように7が見られる。

B面は大きな范傷が多い。鉢には鈕脚左側から頂部まで延びる8や外縁の鋸歯文から菱環に至る9・10がある。鐸身には中央部から下半に大きな范傷が多く、右下縦帯から第2横帯に延びる19と中下縦帯右界線の20、第3横帯上界線の21と下辺横帯中央の一部がやや盛り上がる22は一つに繋がっている。また、左右の縦帯から縁に延びる范傷(15~18)も顕著で、第3横帯右には瘤状に盛り上がる23もある。縁には鐸身から延びるもの他に、鋸歯文内には11~13も見られる。(角出徳幸)

5. 5号鋲 [図版39~46・写真図版52~57・281~283]

型式 外縁付鉢2式

文様構成 二区流水文

同范銅鋲 気比2号鋲

法 量	総 高	45.1cm	最大幅	28.9cm	重 量	4.10kg
	舞長径(A面)	14.9cm	舞長径(B面)	14.8cm	舞短径	10.5cm
	裾長径(A面)	24.1cm	裾長径(B面)	24.1cm	裾短径	17.6cm

鉢 菱環と外縁よりなる外縁付鉢である。ただし、鉢の断面形を見ると、外縁から菱環へ緩やかに移行し、菱環部がかなり扁平な印象を受ける。鉢の高さは12.5cm・幅は現状で18.7cm、鉢孔の高さは5.3cm・幅5.2cmを測る。

菱環は幅4.9~5.7cm・厚さは中央部で0.9cm・右端1.2cm・左端で1.2cmであるが、菱環稜頂部の位置はA面がB面に対し0.2cm程度高くズレている。外縁は菱環との境が不明な部分もあるが、A面で幅1.9~2.1cm、B面で幅2.0~2.1cm、厚さは0.25cmである。

文様は鋸等のため判然としないところがある。A面は外縁に内向する鋸歯文Rが巡る。菱環は外斜面左側に綾杉文Dを2段に配し、右側にはこれと対向するように綾杉文Cを2段に入れたものと見られる。内斜面は不明な点があるが、左側に綾杉文D、右側に段を造えて平行斜線文Sが見られる。同范鋲である気比2号鋲を参考にして復原すると、左側に綾杉文Zを置き、右側に向き合うよう綾杉文Sを配したものと見られる。

B面も外縁には内向する鋸歯文を配する。菱環外斜面は左側に綾杉文Cを2段に配し、右側にこれと対向するように綾杉文Dを2段に入れたものと見られる。内斜面は左側に平行斜線文Rが観察できる程度である。

菱環内斜面の端部は鋳造後、かなり研磨されており、鉢孔に接する平行斜線文は大きく削り込まれている。

鋒身 高さはA面32.6cm、B面32.7cm、厚さは0.3~0.4cmである。身は舞から裾部にかけてやや外反し、外反率（舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100）はA面側で1.86%（0.6÷32.1×100）、B面側で1.84%（0.6÷32.5×100）である。

A面の文様は、中央に横帯を配した二区流水文である。流水文は上区・下区とも8段で、8つのc反転部と7つのx反転部をもつ8c7xの構成をとる。流水文の反転は上段直行部最下端の線が下段直行部最上端の線と共に逆するE反転である。流水文は上区は中央部上半、下区中央部下半に文様の不鮮明な部分があり、一部には文様が流れたような状況を示すところもある。

横帯は幅1.6cmで、左側に綾杉文D、右側にこれと向き合う綾杉文Cを配しており、上下の流水文との間に0.6cmほどの間隔があけられている。下辺横帯は幅2.3cmで鋸歯文Rが施されている。下辺横帯下界線は3条である。

B面の文様も中央に横帯を配した二区流水文である。流水文は上区・下区とも8c7xの構成をとり、反転はE反転である。流水文は上区中央部や下区中央の一部や左側に文様の不鮮明な部分があり、下区左下半では一部文様が流れたところがある。

横帯は幅2.0cmで、3本を1単位として少し間をあけながら、綾杉文Zが施されている。上下の流水文との間隔は上側が0.2cm、下側が0.3cmと狭い。下辺横帯は幅2.2cmで、鋸歯文Rの左上に1

線を加えた特殊な鋸歯文で充填されている。下辺横帯下界線は3条である。

施端部は鋤のため不明な点があるが、外傾する面をなしていることから研磨されているものと見られる。また、A面左侧端部との間には研磨により段が付いている。

舞 舞はアーモンド形を呈する。舞の扁平率(舞短径÷舞長径×100)はA面で70.4%($10.5 \div 14.9 \times 100$)、B面で70.9%($10.5 \div 14.8 \times 100$)である。

舞面の高さはA・B両面で顕著な違いはないが、中央部には鈎脚壁状のパリが僅かに認められ、菱環内斜面端部とともに研磨が加えられている。また、舞面が傾斜する肩下がりはA面は0.2cm、B面では0.5cmである。

鎬 幅はA面の左飾耳に接する部分で2.2cm・左裾3.0cm・右肩は残存する部分で2.1cm・右裾2.7cmである。B面は左肩の残存する部分で2.2cm・左裾2.7cm・右飾耳に接する部分で2.2cm・右裾2.9cmである。文様はA・B両面とも内向する鋸歯文Rであるが、B面右上飾耳脚に接する部分は幅が狭く半單位文と見られる。

飾耳は欠損しているが、左右の肩部にその脚となる条線が認められ、2個1組の飾耳があったものと思われる。また、B面右下の鋸歯文底辺には外方向に突出する線が僅かに認められ、脚のない飾耳が削り落とされていることも考えられる。

内面突帯 A面では裾から3.9cm、B面では4.3cmのところに、幅1.3~1.6cm・高さ0.3cmの突帯が1条巡っている。横断面形は丸みを帯びた台形を呈しているが、使用の痕跡はそれほど顕著ではない。

型持 舞のA・B両面に1個ずつ、鋤身上半にはA・B両面とも2個ずつ、裾部にもA・B両面とも2個ずつの計10個の型持がある。

舞の型持孔は、A面がやや整わない隅丸方形状で、内面で長辺2.2cm・短辺1.9cmである。B面は不整な三角形状を呈しており、内面で長辺1.7cm・短辺1.3cmである。

鋤身上半の型持孔は、A・B両面とも上区流文水の下から3段目付近にある。A面の型持孔内面はともに梢円形で周囲にやや突出した稜を持つている。大きさは左が高さ2.3cm・幅2.0cm、右は高さ2.0cm・幅1.6cmである。B面の型持孔内面も梢円形を意図したものと思われ、周囲に稜を持つ部分もあるが不整形になっており、左が高さ2.0cm・幅2.2cm、右が高さ2.5cm・幅1.5cmである。

裾部の型持は、内面から見ると頂部が丸い方形または長方形を呈しており、周囲にやや突出した稜を持つ。A面左は高さ1.7cm・幅1.6cm・右は高さ1.5cm・幅1.5cmである。B面左は高さ2.2cm・幅1.6cm・右は高さ1.7cm・幅1.5cmである。

鋤型の食い違い 鋤型の食い違いはさほど顕著ではないが、B面の鋤上に段が認められ、2mm程度の幅でU型張り状になっており、これに対応するA面鋤上にも僅かに幅が広くなっている。また、既に述べたように菱環直部の位置もA面に対しB面側が0.2cm程高くなっていることから、僅かではあるが、鋤型がややズレた位置で固定されたものと見られる。

鋤上がり 湯回りが悪く欠孔として残ったところは、鋤に1、舞に1、錐に1、A面に4、B面に7ヶ所認められる。また、後述するように鋤掛けが各部位に多数認められ、かなり大きな鋤損じもあることから、鋤上がりはあまり良くなかったものと思われる。

表面が窪む「ひき」は、A・B両面の錐脚や舞面をはじめ、内面突帯に当たる部分の外面、鋤身中央部を中心見られる。内面は、やはり内面突帯や鋤身中央部付近が顕著で、裾まわりにも多く

見られる。

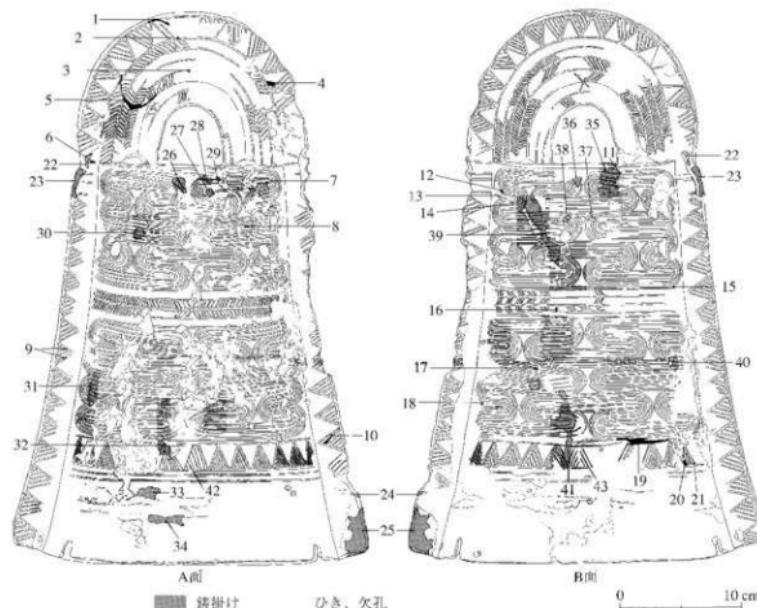
軟X線写真によれば、A面鐸身の中央部などに厚さが薄くなった部分が認められる。また、気泡状の鬆が部位を問わず夥しく入っていることが観察され、特に鉢に見られるものは鬆が渦を巻いているようにも見える。

範傷 範傷はA面では鉢5、鰐3、鐸身2の計10ヶ所に確認できる。このうち1は外縁頂部に延びる範傷で、5は鉢の菱環外斜面にある比較的大きな範傷で段になっている。6は鉢脚の条線が太く盛り上ったものである。鐸身に見られる7・8は流水文の条線間、鰐にある9・10は銅齒文内の条線にある。

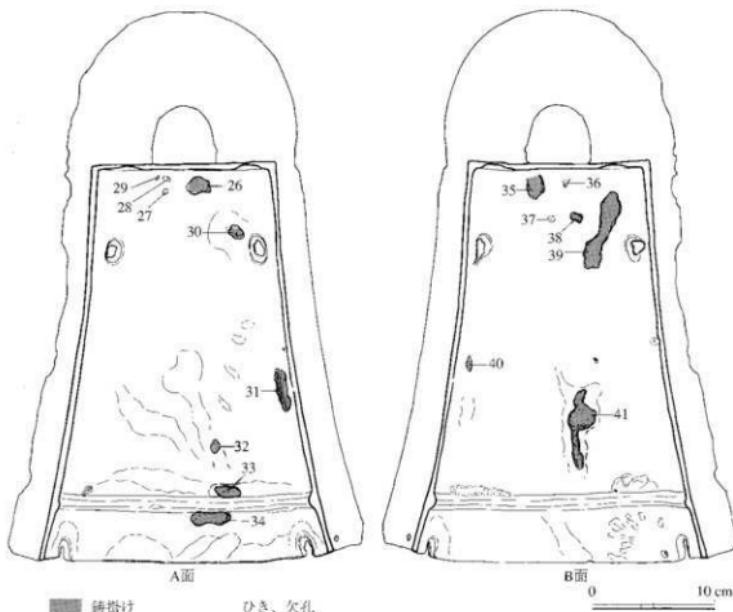
B面は鐸身に10ヶ所確認できる。11~14・17・18は流水文の条線間、15は流水文と中横帶間、16は綾杉文内にある。19は流水文の条線間及び流水文と下辺横帶間にある比較的大きな傷でやや盛り上がっている。20・21は下辺横帶の鰐齒文内の条線間にあるものである。

この他には、B面左鰐の8つの銅齒文の頂部が欠けたようになっている部分がやや盛り上がっており、これが大きな範傷である可能性も考えられる。

鋲掛け 表面観察及び軟X線調査によれば、鋲掛けは鰐に4ヶ所、A面鐸身に9ヶ所、B面鐸身に7ヶ所が認められる。このうち、A面右下鰐端部に見られる23は鰐を「M」字形に削り込んだ足掛りを2つもつもので、その大きさは上が幅1.2cm・深さ0.6~0.8cm、下が幅0.8cm・深さ0.4~0.5cmである。



第55図 5号鐸の鋳造状態（外面）



第56図 5号鐸の鋳造状態（内面）

cmである。これは鉢掛けに接する端部の面積を増やし、外れにくくするためのものである。鉢掛けは鍔の上にも一部掛かるように行われており、僅かに盛り上がっている。その他の鉢掛けには足掛けは認められず、欠孔に外型を当て熔銅を流し込んだだけのものである。ただ、B面鍔右上から鉢外縁にある22・23などのように、欠孔のある部分より広めに鉢掛けすることで外れることを防ごうとしたものもある。

また、鉢掛けを内面から見ると、A面下区左の31や鋤の33・34、B面下区中央の41などには鉢掛けの後、内面に工具による刺突痕が認められる。

補刻 補刻はA面に6ヶ所、B面に5ヶ所が認められる。鉢掛けの後、文様を刻み直すために行われたもの(26・28・29・30・35・38~41)がほとんどであるが、A・B両面の下辺横帯中央部(42・43)の鎧齒文のように文様が不鮮明な部分に行われたものもある。

流木文の補刻は比較的忠実に条線と条線を結ぼうとしているが、35の直行部や41の反転部のように食い違う条線を繋いでしまったものも見受けられる。また、A面下辺横帯中央(42)では周間に忠実に鎧齒文Rを補刻しているが、B面下辺横帯中央(43)には周間に異なる鎧齒文L Rを入れている。

「×」の刻線 B面菱環頂部中央には、鋳造後タガネ様の工具で4回に分けて打ち込まれた「×」の刻線がある。
(角田徳幸)

6. 6号鐸 [図版47~51・写真図版59~62・284]

型式 外縁付鉢1式

文様構成 四区袈裟襷文

同范銅鐸 加茂岩倉9号鐸・辰馬419号鐸

法量	総高	31.4cm	最大幅	18.2cm	重量	2.52kg(上付)
	舞長径(A面)	11.1cm	舞長径(B面)	10.8cm	舞短径	7.6cm
	裾長径(A面)	15.2cm	裾長径(B面)	15.6cm	裾短径	11.7cm

鈕 菱環と外縁からなる外縁付鈕である。高さはA面が8.7cm、B面が8.1cmで、幅は13.1cmである。鉢孔は高さ3.5cm・幅4.6cmを測る。A・B面ともに文様が判然としないところが多く、菱環や外縁の幅を明確に計測できる部位はA面の中央部に限られる。ここでの菱環の幅は2.9cm、外縁が1.6cmである。菱環の幅はA面で概ね2.9~3.1cm、B面で2.5~2.7cm、外縁の幅はA面で1.2~1.6cm、B面で1.25~1.5cmと見られる。菱環後部の厚さは、中央部で0.75cm、左右鈕脚部で1.1cm、外縁の厚さは中央部で0.4cm、左右端部で0.4~0.5cmである。鉢孔下端部にはA・B面間に高さ0.2~0.55cmのバリが観察され、このバリが左右の鉢脚部を繋いでいる。B面ではバリが鉢孔上部に向けて立ち上がる。

外縁の文様はA面・B面ともに内向する鋸歯文で、A面では頂部中央より右に1単位目がL、左に1・2単位がR、3単位目がLとなっている。B面を見てみると、中央部に平行直線文がやや乱れたR鋸歯文が配されている。中央より左1単位目には、僅かながら鋸歯文Rの平行直線文が観察でき、左端部より約4cmのところにも鋸歯文Rが確認できる。中央より右側では鋸歯文の輪郭線がいくつか観察されるが、平行直線文がどの方向に充填されているかはわからない。前述したように、文様はA・B面とも全体的に判然としないところが多く、左右端部では文様が観察できないため、鋸歯文の単位数や配列の規則性は確認できない。

菱環の文様は、A面の中央部付近において観察できるのみで、B面では内・外斜面ともに確認することができない。A面の外斜面は内向する鋸歯文で、中央の鋸歯文では充填された平行直線文がL・Rとならずに、底部から鋸歯文頂部にはほぼ垂直に延びている。この鋸歯文から左に1単位目では鋸歯文しが観察される。菱環内斜面には中央より左側に綾杉文Dの一部が観察できる。右側では鉢孔近くに平行斜線文Rが見られ、中央を境にした左右対称の綾杉文が施されていると見られる。現状で綾杉文の軸線は確認できない。

鐸身 高さはA面が22.3cm、B面が22.8cmで、厚さは0.3~0.5cmである。身は舞から裾部にかけてやや外反し、外反率(舞・裾縫からの最深値÷舞から裾の長さ×100)はA面で1.35% (0.3÷22.3×100)、B面側で0.88% (0.2÷22.8×100)である。

鐸身の文様は、A・B面ともに横帯が縦帯に優先する四区袈裟襷文である。文様は表面を覆う鐸のために判然としないところが多く、A面では上縦帯、B面では第1横帯・中上縦帯・左上縦帯が観察できない。比較的文様が明瞭な部位は、A面の右上縦帯から右下縦帯にかけてと第3横帯及び下辺横帯の右半分、B面の右上縦帯下半から右下縦帯にかけてと、中下縦帯下半及び第3横帯・下辺横帯の右半分で、その他の部位においては、縦・横帯の界線や充填された斜格子文の一部が観察できる程度である。観察可能な部位に限った縦・横帯の幅は、A面の第1横帯が1.7cm、第2横帯が1.9cm、第3横帯が1.95cm、左上縦帯1.7cm・左下縦帯1.8cm・中下縦帯1.7cm・右上縦帯1.6cm・

右下縦帯が1.65cmである。B面では、第2横帯が1.9cm、第3横帯が1.7cm、中下縦帯1.7cm・右上縦帯1.8cm・右下縦帯が1.8cmである。

界線の不明瞭なところが多いため、縦・横帯によって区画された各区の大きさはほとんど計測できない。A面では、上右区が高さ5.8cm、下左区が高さ5.7cm、下右区が上辺5.3cm・高さ5.8cmで、B面では下右区が下辺5.6cm・高さ5.9cmを測るのみである。

縦・横帯に充填された斜格子の傾斜角は、横帯が52~53°に対して縦帯がおよそ30°と、縦帯の方がかなり緩やかでその差は大きい。

下辺横帯はA・B面ともに幅1.8cmで、横帯内には鋸齒文Rが施されている。文様はいずれの面も中央より右側でのみ観察される。下辺横帯下界線はA・B面ともに2条で、条線間の幅はA面が0.4cm、B面が0.3cmである。

鋸端部は、鱗の下端部周辺でやや丸みを帯びながらも面をなしている。切断の痕跡と見られる。

舞 舞はアーモンド形を呈しており、舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）はA面で68.5%（7.6÷11.1×100）、B面で70.4%（7.6：10.8×100）である。A面とB面で舞面のズレは認められない。両面の間には、高さ0.6~0.9cmの鋸脚聳状の高まりになったバリがある。舞面の傾斜を示す肩下がりは、A面0.1cm、B面0.2cmである。

鎧 幅はA面が左肩1.1cm・左裾1.6cm・右肩1.1cm・右裾1.5cm、B面は左肩1.1cm・左裾1.4cm・右肩1.1cm・右裾1.4cmである。文様は内向する鋸齒文であるが、A・B両面とも鎧で見えないと多い。A面は左右ともに鋸齒文L、B面右鎧は下端部1単位のみ鋸齒文Lで、そのほかは鋸齒文Rとなっている。B面左鎧では全く文様が確認できない。

内面突帯 鎧端部から1.4~1.5cmのところに、幅0.9~1.1cm・高さ0.1cmの突帯が1条巡っている。断面は低い台形状を呈しており、突帯上面は面をなしている。使用に伴って磨滅した状況と見られる。

型持 舞に1個、鐸身上半及び裾部にはA・B両面ともそれぞれ2個ずつ、計9個の型持の痕跡が認められる。

舞の型持孔は、外側から見るとA・B面にそれぞれ一つずつの孔として認められるが、内面では型持痕が両面にひと続きとなっている。

A面側はほとんど丸みを持たない方形状を呈し、長辺が同じ幅を保ながら直線的にB面側へ延びている。B面側は一部に土砂が覆っているため、現状では端部の形状が明確ではないが、軟X線透過写真によれば、A面側端部に比べてやや丸みをもつものの、ほぼ方形状を呈していることがわかった。このことから内型には長方形を呈した一山の型持が施されていたと見られる。内面観察による型持痕の大きさは、型持の基部で長辺がおよそ3.3cm、短辺が1.6cm程度である。

鐸身上半の型持孔は、A面では左側が第2横帯と左上縦帯の交点付近、右側が第2横帯上に位置している。舞との距離は左側が6.6cm、右側が7.3cmである。

左側の型持孔は、湯回りが悪かったため左下部に欠孔が生じている。外側から見ると、高さ1.2cm・幅1.2cmの円形で、内面の型持痕は判然としない。右側の型持孔は外側から見ると長方形の孔となっているが、現状は湯回り不良によって型持孔の下辺を失ったもので、大きさは欠孔部を含めて高さ2.4cm、幅1.4cmである。左側と同様、内面には型持の痕跡は認められない。

B面では左側の型持孔周辺で全く文様が見えないため、型持孔の位置を文様との位置関係では示

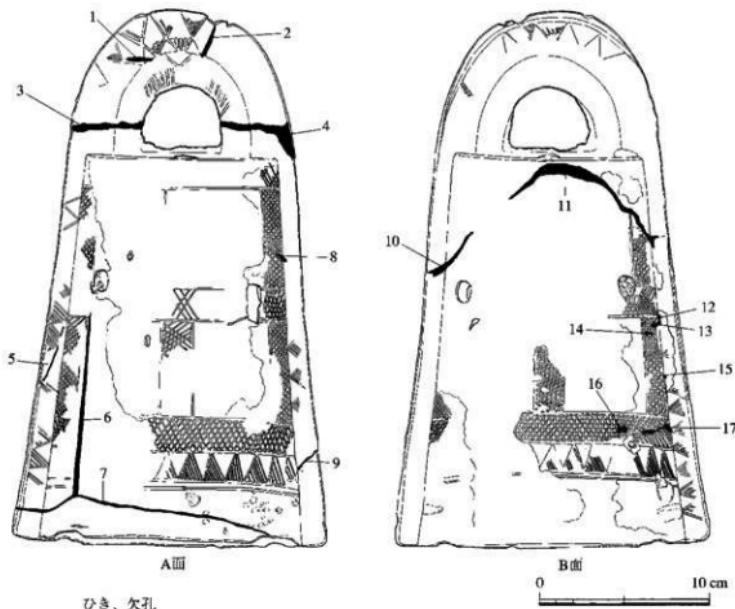
しにくい。舞との距離は左側が7.5cm、右側が6.8cmである。型持孔の鰏までの距離は、左側1.3cm・右側2.1cmで、左側の型持孔がやや左に偏っていることがわかる。右側の孔が上右区から第2横帶上に跨る右上縦帶の左横付近に位置していることから、左側の型持孔は、右側に比べてやや下の舞寄りに位置していると言える。左側の孔は、外面から見ると高さ1.3cm・幅1.2cmのはば円形で、内面の型持痕は不明瞭である。右側の孔は、湯回り不良によって下部に小さな欠孔が生じている。内面に土砂が詰まっているため、現状では型持痕の形状を確認することができない。

裾の型持孔は、A面左側が台形状を呈し、高さ0.4cm・幅2.2cmを測る。右側は湯回りが悪く本来の形状を失っているが、高さ0.3~0.4cm・幅2.0~2.2cm程度の型持孔と見られる。鰏との距離は左側が2.0cmである。内面には明瞭な型持痕が残っていない。

B面は、左側が高さ0.2cm・幅1.6cm、右側は高さ0.3cm・幅2.4cmで、いずれも台形状を呈している。鰏との距離は、左側が1.9cm、右側が概ね1.9cmである。内面には型持痕が残っていない。

鋳型の食い違い 舞面・底部及び横方向からの観察では、A・B面の合わせ方にズレは認められない。ただ、B面では紐の周縁や鰏の端部に段が生じており、これが鋳型の合わせ方によるものでないとすれば、両面の鋳型に彫り込まれた輪郭の大きさそのものに違いがあったのではないかと思われる。

鍛上がり 湯回りが悪く欠孔として残ったところは、身の型持孔下部の欠孔を含めると、A面鍛



第57図 6号鐸の铸造状態

身に4ヶ所、B面錐身に1ヶ所認められる。また、表面が窪む「ひき」は、舞面や鉢の付け根、錐身では内面突帯に当たる部分の外側に顯著である。△面では身の型持孔下部に生じた欠孔から派生した窪みがある。そのほかにB面錐身には気泡状になった小さな窪みがあり、錐の付け根付近にも「ひき」が認められる。

軟X線写真によれば、舞面の窪み部分はかなり薄くなってしまっており、半うじて欠孔にならなかった部位の存在がわかる。また、鉢や錐には鋳造時に生じた気泡が多数の鬆となつて残っている。鉢の気泡鬆は他の部位に比べて大きく著しい。

範傷 錐が覆っているため細かい範傷は観察しにくいが、A・B面ともに大きな範傷が目立つ。1・2は菱環の稜部から外縁にかけて延びる傷で、3・4は鉢の脚部を鉢孔から外縁まで直線的に貫く傷である。4は外縁の部位で大きく広がっている。3・4はいずれも鉢孔端部にまで及んでいることから、錐型の上では3・4が鉢孔部をも貫いて、1本の傷としてつながっていた可能性もある。

5はA面左錐に細く延びるもので、傷としては浅い。6は、左下縦帯に沿って裾部から第2横帯にかけて一直線に延びる傷である。裾部で7に接している。7はA面の錐身裾から左錐の裾部にかけてやや盛り上がって延びる長い傷である。8は△面右上縦帯から錐の付け根にかけての傷で、9は右錐端部から錐身下辺横帯にかけて延びている。

10はB面左錐から上左区に向けて右上がりに延びる傷である。上左区の中央付近では傷が途切れ見えないものの、この傷の延長線上には11があり、第1横帯中央のやや右寄りで大きく弧を描いて右錐の付け根に至る。これらの傷はB面で最も大きく目立つ傷である。12~15は比較的小さな傷で、12は第2横帯下界線が錐の付け根に延びたような傷、14・16は斜格子文の目が潰れてしまったものである。13・15・17は縦・横帯の斜格子文から錐に至る傷である。

1~4・6~11・13・16・17は同範とされる加茂岩倉9号鐸にも見られる傷で、9号鐸の方にこれららの傷の成長が見受けられる。このことから、少なくともこの2つの銅鐸では加茂岩倉6号鐸が先行すると見える。

(山崎 修)

7. 7号鐸 [図版52~56・写真図版64~67・285~287]

型式 外縁付鉢1式

文様構成 四区裂波襷文

同范銅鐸 加茂岩倉1号鐸・加茂岩倉19号鐸・加茂岩倉22号鐸・太田黒田鐸

法量	総高	30.6cm	最大幅	17.7cm	重量	2.00kg
-----------	-----------	--------	------------	--------	-----------	--------

舞長径(A面)	11.0cm	舞長径(B面)	11.1cm	舞短径	7.9cm
---------	--------	---------	--------	-----	-------

裾長径(A面)	15.9cm	裾長径(B面)	16.0cm	裾短径	11.3cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

鉢 菱環と外縁よりなる外縁付鉢である。高さは7.8cm・幅13.4cm、鉢孔の高さは1.9cm・幅3.9cmを測る。菱環はA面で幅3.4~3.9cm、B面で幅3.3~3.7cm・厚さは中央部で0.7cm・左右端0.95cmである。外縁は菱環との境が左右の鉢脚部では不明であるが、中央部ではA面で幅1.6cm、B面で幅1.8cm・厚さは中央部で0.2cm、左端で0.35cm、右端で0.3cmである。鉢孔部はB面では菱環内斜面の界線より0.2~0.4cm程度はみ出しあり、バリ状になっている。

文様は全体に判然としないところが多い。△面は外縁中央部を中心内向する錐齒文Rが見られ

る。中央部の鋸歯文は下辺0.9cmで、周辺の鋸歯文下辺が1.5cm前後あるのに比べて小さくなっている。菱環については、外斜面を分割するように綾杉文の軸線と思われるものが見られるが、内斜面は全く文様を観察することができない。

B面は外縁に内向する鋸歯文Rが見られる。菱環外斜面はこれを分割するように綾杉文の軸線が入り、中央部右側付近に綾杉文Dの一部が観察でき、左側に平行斜線文しが僅かに見られる。同范銅鐸である太出黒出鐸などと合わせ検討すると、本米は外斜面中央部には右側に綾杉文D、左側に綾杉文Cが対向して配されているものと思われる。内斜面には中央部付近に外向する鋸歯文Rの輪郭が僅かに見られる。

鐸身 高さはA面22.3cm、B面22.8cm、厚さは0.3~0.35cmである。身は舞から据部にかけてやや外反し、外反率（舞・据線からの最深値÷舞から据の長さ×100）はA面側で1.6%（0.35÷21.8×100）、B面側で1.8%（0.4÷22.1×100）である。

A面の文様は、四又製綾櫻文で横帯が縦帯に優先するものである。文様は全体に不鮮明で、中上縦帯・右下縦帯は見えず、観察できるものであっても、特に縦帯はその界線が僅かに残る程度である。第1横帯は幅2.0cm、第2横帯は幅1.9cm、第3横帯は幅2.4cm、左上縦帯は幅2.1cm、左下縦帯は幅2.0cm、中下縦帯は幅1.9cm、右上縦帯は幅2.1cmである。横帯間の高さは第1横帯と第2横帯間が6.0cm、第2横帯と第3横帯間が5.7cmである。横帯の中には斜格子文が充填されているが、現状ではかなり見えにくい。左右の縦帯と鰐の間に界線があると思われるが、左上縦帯付近で観察できるに過ぎない。左下又内左上方には「I」字様の文様とも思われるもの一部が僅かに観察できる。また、下辺横帯は幅1.75cmであることはわかるが、内部の文様などは不明である。

B面の文様は、四又製綾櫻文で横帯が縦帯に優先するものである。文様はA面に比べるとよく観察できるが、中上縦帯・右下縦帯は見えない。第1横帯は幅1.6cm、第2横帯は幅1.9cm、第3横帯は幅2.5cm、左上縦帯は幅1.9cm、左下縦帯は幅2.2cm、右上縦帯は幅1.9cmである。横帯間の高さは第1横帯と第2横帯間が5.9cm、第2横帯と第3横帯間が5.8~5.9cmである。横帯・縦帯の中には斜格子文が充填されているが、鐸身中央部や右側など文様の見えない部分がかなりある。左右の縦帯と鰐の間に界線があるが、現状では右縦帯では観察できない。また、下辺横帯は幅1.85cmで、右側に鋸歯文Rが見られる。

据端部はA面右側及びB面は外傾する面をなしているが、A面左側の端部は湯回りが悪く丸みを帯びており、鎔放ちと思われる。

舞 舞はアーモンド形を呈しており、舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）はA面で71.8%（7.9÷11.0×100）、B面で71.2%（7.9÷11.1×100）である。舞の中央部には高さ0.4cm程の鉢脚壁状のバリがある。また、舞面が傾斜する肩下がりはA面が0.4cm、B面は0.6cmである。

鰐 幅はA面で左肩1.2cm・左裾0.9cm・右肩1.15cm・右裾1.1cm、B面は左肩1.3cm・左裾1.1cm・右肩1.2cm・右裾0.9cmである。文様はA・B両面ともほとんど見えないが、B面左側肩部付近に鋸歯文Rが見られる。

内面突帯 据からの高さ1.1~1.7cmのところに、幅0.8~1.4cm・高さ0.1~0.2cmの突帯が1条巡っている。横断面形は稜線の丸い台形状を呈しており、突帯上面は面をなしていることから使用に伴う磨滅と見られる。また、A面中央部の突帯は非常に低くなっているが、これは鎔造時の「ひき」に伴うものである。

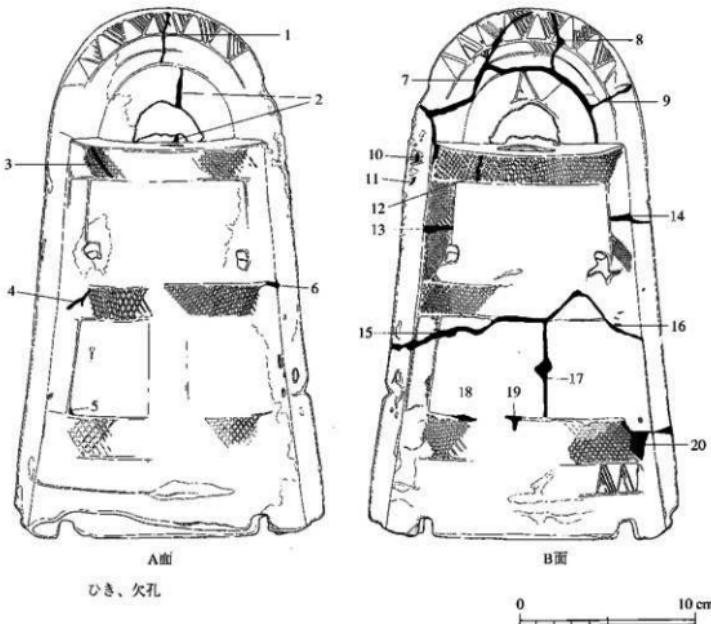
型持 舞に1個、鐸身上半にはA・B両面とも2個ずつ、裾部にもA・B両面とも2個ずつの計9個の型持がある。

舞の型持孔は1山である。内面より見るとA面側は隅部の一部がわかるが、B面側は湯回りが悪く端部は不明である。残っている部分の形状よりすれば本来は長方形状を呈していたと考えられ、長さは不明であるが、幅は2.0cmである。頂持中央部には鈕脚壁状のバリがある。

鐸身上半の型持孔はA・B両面両面とも第2横帶より高い位置にあり、第2横帶との間隔はA面左が1.6cm、右が0.8cm、B面では左が1.2cm、右は不明である。A面左の型持孔は湯回りが悪く不整形であるが、内面では一隅が残っており本来は方形状を呈していたと思われる。現状で高さ1.4cm・幅1.6cmである。右側は内面では隅丸方形状に窪み、高さ1.5cm・幅1.3cmである。B面左の型持孔は内面では高さ1.4cm・幅1.4cmとほぼ方形で、右側は下半の湯回りが悪く不整形で幅1.0cmであることがわかる程度である。

裾部の型持はA面右は内面で高さ1.1cm・幅1.8cmの横長長方形で、左側は湯回りが悪く形状をほとんど留めていない。B面は左が高さ1.3cm・幅2.1cm、右は高さ1.9cm・幅1.3cmで、台形状を呈している。

鋳上がり 湯回りが悪く欠孔として残ったところは、A面は鐸身に小さいものが3ヶ所・右側躰に1ヶ所ある。B面は前述したように舞型持孔部分が大きな欠孔になっており、右側型持孔下も湯



第58図 7号鐸の鋳造状態

回りが悪く不整形になっている。

また、表面が窪む「ひき」は、A・B両面とも舞に浅く大きなものがある。鋸身は内面突帯に当たる部分の外側が窪んでおり、B面は鋸身左側に2ヶ所、中央第2横帯上付近にも1ヶ所「ひき」が見られる。鱗は△面左側に5ヶ所ある他、右側にも3ヶ所窪みがある。B面は左側に4ヶ所、右側に2ヶ所あり、左右ともに鱗付け根の一部に「ひき」がある。△面鉤右側、鱗左側端部と同右側の一部には湯回り不良のため、不整形になっている部分がある。

軟X線写真によれば、A・B両面とも鋸身中央部に厚さが薄い部分が見られ、気泡状の鬆も部位を問わず多数認められる。

危傷 A・B両面とも多数認められる。A面は鱗等により細かい危傷は観察しにくいが、鉤は菱環外斜面の1や内斜面に縦方向に延びる2があり、2より延びると思われるものが鉤脚巣状のバリ右端部にも認められる。鋸身には3が第1横帯、4が第2横帯左、6が第2横帯右界線付近、5が左下区隅部にある。鱗では現状では危傷は観察できない。

B面は大きな危傷が多い。鉤には鉤脚左側から頂部まで延びる7や、外縁の鋸歯文から菱環に至る8・9があり、これらの危傷が1つに繋がってしまっている。鋸身には中央部から下半に大きな危傷が多く、右下縦帯から第2横帯の16と中下縦帯右界線の17、さらには左鱗から左下縦帯・第2横帯右界線へと延びる15は1つに繋がっている。また、第1横帯には12、左上縦帯は13、右上縦帯は14、第3横帯上界線は18・19、同横帯右には瘤状に盛り上がる20などの危傷もあり、このうち14・20は鱗まで達している。この他には、鱗の鋸歯文にも10・11が見られる。 (角田徳幸)

8. 8号鋸 [図版57~64・写真図版69~74・288~290]

型式 扁平鉤2式

文様構成 六区製造博文

法量	総高	46.6cm	最大幅	27.8cm	重量	5.70kg
	舞長径(△面)	15.1cm	舞長径(B面)	14.9cm	舞短径	10.7cm
	裾長径(△面)	23.3cm	裾長径(B面)	23.4cm	裾短径	15.6cm

鉤 菱環と外縁・内縁よりなる扁平鉤である。鉤の大きさは高さ12.3cm・幅18.4cm、鉤孔は高さは3.9cm・幅5.0cmである。菱環はA面中央部で2.8cm・左端2.4cm・右端2.3cm、B面中央部で2.9cm・左端2.4cm・右端2.8cm、厚さは中央部で0.7cm・左端1.0cm・右端1.1cmである。外縁は第1文様帶・第2文様帶に分かれており、第1文様帶はA面で幅1.5~1.7cm、B面で幅1.5~1.9cm、厚さは0.3cmである。第2文様帶は△面で幅1.0~1.3cm、B面で幅0.9~1.5cm、厚さは0.4cmである。内縁はA面で幅0.9~1.3cm、B面で幅0.7~1.3cm、厚さは0.4~0.5cmである。鉤孔部はA面で0.1~0.8cm、B面で0.1~0.3cmの幅で、内縁より一段低くなった甲張りが見られる。

文様は△面では外縁第1文様に内向する鋸歯文R、第2文様帶に外向する鋸歯文Lが見られる。第1文様帶中央部の鋸歯文間には、鋸歯文内の条線と同じ方向である平行斜線文R、その左側には平行斜線文RとLが一部交差するように充填されている。鋸歯文内の条線は一部に鋸歯文の輪郭線よりはみ出したものも見られる。菱環文様帶は中央に2条の界線を入れ、左右に対向する綾杉文を配したD||Cである。内縁は中央にこれを2つに分割するように界線が入り、上段左側に平行斜線

文R、右側に平行斜線文Lが見られる。内縁中央部には菱環から延びる2条の界線が達しており、これと重複するように平行斜線文Rが中央部や右側まで入れられている。また、右側の平行斜線文Lは鉢脚部付近では菱環文様帯より延びる条線と交差し、斜格子文状になっている。

B面は外縁第1文様帯・第2文様帯とも内向する鋸齒文Rが見られる。第2文様帯は中央部の鋸齒文底辺が2.0cm前後あるのに対し、鉢脚に近い部分では左右とも1.2cmと小さくなっている。また、第1文様帯左端、第2文様帯右端には、内部に条線はないが半单位文状に斜線が1条入っている。菱環文様帯は中央に2条の界線を入れ左右に対向する綾杉文を配したD||Cである。内縁は彷彿などもあって文様に乱れがあるが、左側に綾杉文D、右側に綾杉文Cを向かい合うように入れる。

鐸身 高さはA面34.1cm、B面34.4cm、厚さは0.3cmである。身は舞から裾部にかけてやや外反し、外反率（舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100）はA面側で0.89%（0.3÷33.7×100）、B面側で1.79%（0.6÷33.6×100）である。

A面の文様は、六区製姿櫛文で横帯が縦帯に優先するものである。文様は中央部や左側の一部に錯により不鮮明になった部分があるが、よく観察できる。横帯・縦帯の幅は、第1横帯が幅2.3cm、第2横帯は幅2.1cm、第3横帯は幅2.2cm、第4横帯は幅2.3cm、左上縦帯は幅2.2cm、左中縦帯は幅2.2cm、左下縦帯が幅2.2cm、中上縦帯が幅2.2cm、中中縦帯が幅2.2cm、中下縦帯は幅2.4cm、右上縦帯が幅2.1cm、右中縦帯が幅2.2cm、右下縦帯が幅2.4cmである。

各区の大きさ左上区が上辺6.5cm・下辺6.8cm・高さ4.6cm、中左区が上辺6.9cm・下辺7.3cm・高さ5.2cm、下左区が上辺7.7cm・下辺8.2cm・高さ4.6cm、上右区が上辺6.6cm・下辺7.0cm・高さ4.6cm、中右区が上辺7.2cm・下辺7.6cm・高さ5.2cm、下右区が上辺8.0cm・下辺8.4cm・高さ4.7cmである。

横帯・縦帯の中には斜格子文が充填されているが、両者で斜格子文が交差する角度に違いが見られる。また、下辺横帯は幅1.5cmで、鋸齒文Rが入っており、下辺横帯下界線は3条である。

B面の文様は、六区製姿櫛文で横帯が縦帯に優先するものである。文様は全体によく観察でき、横帯・縦帯の幅は、第1横帯が幅1.9cm、第2横帯は幅2.1cm、第3横帯は幅2.2cm、第4横帯は幅2.2cm、左上縦帯は幅2.3cm、左中縦帯は幅2.2cm、左下縦帯が幅2.3cm、中上縦帯が幅2.2cm、中中縦帯が幅2.2cm、中下縦帯は幅2.3cm、右上縦帯が幅2.1cm、右中縦帯が幅2.1cm、右下縦帯が幅2.3cmである。

各区の大きさは、上左区が上辺5.9cm・下辺6.4cm・高さ4.6cm、中左区が上辺6.7cm・下辺7.3cm・高さ5.2cm、下左区が上辺7.6cm・下辺8.3cm・高さ4.7cm、上右区が上辺6.6cm・下辺6.9cm・高さ4.6cm、中右区が上辺7.1cm・下辺7.6cm・高さ5.2cm、下右区が上辺7.8cm・下辺8.3cm・高さ4.7cmである。

横帯・縦帯の中には斜格子文が充填されているが、両者で斜格子文が交差する角度に違いが見られる。また、下辺横帯は幅1.5cmで、鋸齒文Rが入っており、下辺横帯下界線は3条である。

裾端部はA・B両面とも面をなしておらず、裾端部外側には裾を切断した際に使用した工具の痕跡と見られるものが観察できる。端部の研磨痕は土や錯のため不明である。

舞 舞はアーモンド形を呈しており、扁平率（舞短径÷舞長径×100）はA面で70.9%（10.7÷15.1×100）、B面で71.8%（10.7÷14.9×100）である。舞は上面から見ると、左右に0.4cm程のズレがあり、中央部には高さ0.4cm程のバリが認められる。また、舞面が傾斜する肩下がりはA面が0.5cm、

B面は0.9cmである。

鰐 幅はA面で左肩1.7cm・左裾2.5cm・右肩1.9cm・右裾2.0cm、B面は左肩1.6cm・左裾2.2cm・右肩2.1cm・右裾2.3cmである。文様はA・B両面とも銘文Rである。鰐下端部はA面左で0.2~0.6cm、右で0.2~0.3cm、B面は左右とも0.2cm程の甲張りと思われる段を残している。

飾耳は半円形で、脚部を持つものが2個1組で左右に付いている。飾耳の界線はいずれも1条で、飾耳頭部はやや厚くなっている、端部にかけて斜面を持つ。

内面突帯 帽からの高さ3.4~3.5cmのところに、幅0.9~1.2cm・高さ0.3~0.4cmの突帯が1条巡っている。B面中央部にやや盛り上がった部分があるが、横断面形は頂部がやや丸い台形状を呈しており、使用痕はさほど顯著ではない。

型持 舞には後述するように大きな鋲造欠陥があり、A面側で1個のみ確認できる。鐸身上部にはA・B両面とも2倍ずつ、裾部にもA・B両面とも2倍ずつの、現状で計9個の型持が見られる。

舞の型持孔はA面側は内面から見ると径2.0cmのほぼ円形を呈する。B面側にも型持孔様の孔が見られるが、これは鋲掛けの後、型持孔に似せて穿孔されたものである。

鐸身上半の型持孔はA・B両面とも上左区または上右区の下半部にあり、B面左のもののみ第1横帯の上0.8cmのところにあるが、その他は第1横帯には接する位置にある。

A面左の型持孔はほぼ円形を呈しており、高さ1.6cm・幅1.6cmである。A面右側は隅丸方形を呈しており、高さ1.7cm・幅2.0cmである。B面左側の型持孔は湯が回ったため小さくなっている、内面に円形を呈する型持の段を留めている。内面に見られる型持の大きさは高さ2.1cm・幅1.8cmで、外面から型持孔を大きくしようとした加工の痕跡も認められる。B面右側の型持孔はほぼ円形を呈し、高さ1.7cm・幅1.7cmである。

裾部の型持はいずれも頂部が丸みを帯びた長方形を呈しており、A面左側は高さ1.8cm・幅1.5cm、右側は高さ2.0cm・幅1.5cmである。B面左側は高さ1.8cm・幅1.3cm、右側は高さ1.8cm・幅は1.4cmである。

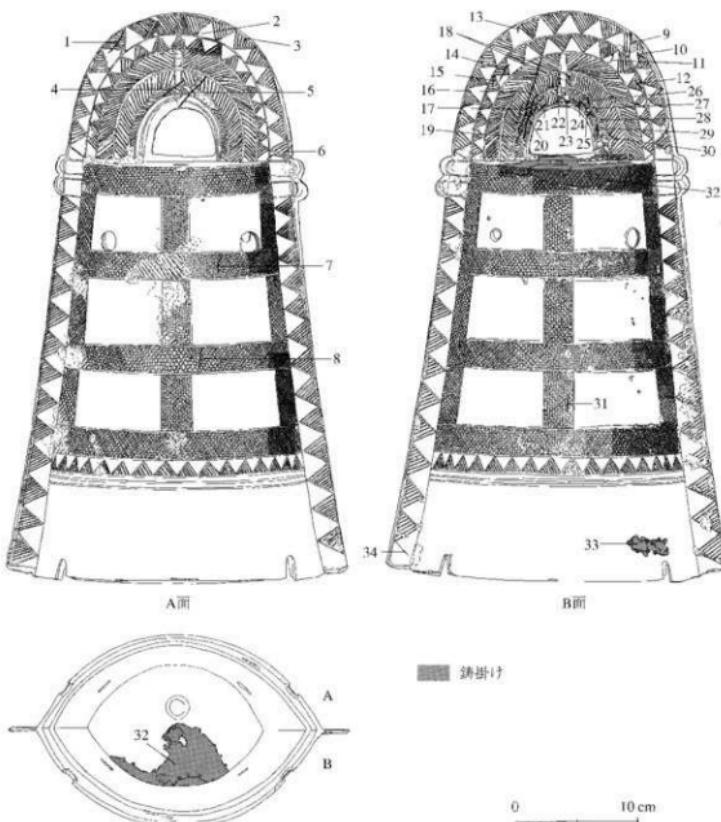
鋲型の食い違い A面右側の飾耳付近が0.3~0.4cmの幅で段になっており、これに対応するようB面右側の飾耳付近にも幅0.3cmの段が認められる。これは前述した舞のズレにも対応しており、鋲型が左右にややズレた位置で固定されていたものと思われる。

鋲上がり 湯回りが悪く欠孔として残ったところは、現状ではほとんど立たず、A面鐸身第1横帯と右上区に小さいものが2ヶ所認められる。B面は第1横帯から舞面にかけて大きな鋲掛けがあり、軟X線写真によれば横行型持の上にも鋲掛けがあることから、鋲造時にはこれらの部分に欠孔があったことがわかる。

また、A面中上縦帯付近やB面鐸身中央部は、文様が全体に丸みを帯び磨滅したようになっているが、軟X線写真を見るとこの付近の厚さが薄くなっていることがわかり、湯回りの関係によるものとも考えられる。気泡状の鬆は比較的少ない。

范傷 A面では鉢の外縁に1~3・6、内縁から菱環文様帯に4・5があり、5は比較的大きな范傷である。鐸身は第2横帯に7、第3横帯に8が見られる。

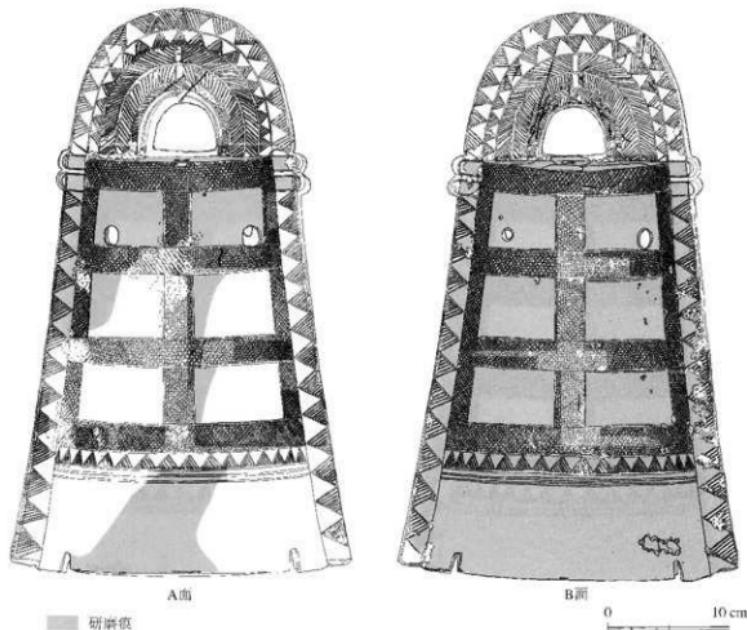
B面では鉢に多く、外縁に9~15、菱環文様帯に16~18・22・30、内縁には20・21・23~29が見られる。これらは小さいものが多いが、16のように菱環文様帯から内縁に至るものも認められる。鐸身には范傷は少なく、中下縦帯に31がある程度である。



第59図 8号鐸の铸造状態

鉛掛け B面のみに認められ、第1横帯から舞にかけての32、右下縁型持上の33がある。32は欠孔の周囲に径0.2cmほどの足掛け孔を設けて鉛掛けを行っている。軟X線写真によれば、一度に欠孔が埋まらなかったためか、その都度足掛け孔を設けながら二度にわたって鉛掛けをしていたことが観察できる。33は軟X線写真によってその存在が明らかになったもので、欠孔の周囲に径0.25cm程の足掛け孔を設けて鉛掛けをしている。やはり、一度には欠孔が埋まらなかったようで、最初の鉛掛けの左右に2ヶ所、足掛けのある鉛掛けが見られる。

補刻・研磨等 鉛掛け32は外面を丁寧に研磨しており、その後、第1横帯に当たる部分に斜格子文を補刻している。B面中下縁帯右側の界線にはこれに沿って際取り状に線刻があり、左縁下端附近には鏡面文に続く位置に陰刻線34が認められる。



第60図 8号鐸の研磨状態

研磨はA面は鋸等により不明な点があるが、舞、袈裟擲文内の上左区・上右区・中左区・中右区・下右区、裾の一部、左鐸の鉢歯文間、飾耳脚部に認められる。B面は研磨の状況がよくわかり、鋸には見られないが、舞、袈裟擲文内の上左区・上右区・中左区・中右区・下左区・下右区、下辺横帯の鉢歯文間、下辺横帯下界線から裾部、舞の鉢歯文間や飾耳脚の内部に研磨が施されており、光沢を持っている。

(角田徳幸)

9. 9号鐸 [図版65~69・写真図版76~79・291~293]

型式 外縁付鉦1式

文様構成 四区袈裟擲文

同范銅鐸 加茂岩倉6号鐸・辰馬419号鐸

法量	総高	31.4cm	最大幅	18.3cm	重量	2.50kg
----	----	--------	-----	--------	----	--------

舞長径(A面)	10.8cm	舞長径(B面)	10.7cm	舞短径	8.0cm
---------	--------	---------	--------	-----	-------

裾長径(A面)	15.5cm	裾長径(B面)	15.2cm	裾短径	11.6cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

鉦 菱環と外縁からなる外縁付鉦である。高さはA面8.7cm、B面8.5cmで、幅はA面13.2cm、B面13.1cmを測る。鉦孔は高さ3.75cm・幅4.6cmである。A・B面ともに文様が判然としないところ

があり、A面の菱環内斜面やB面の菱環外斜面では特に著しい。

菱環の幅はA面中央が2.5cm・左端2.7cm・右端2.5cmで、B面中央が2.8cm・左端2.8cm・右端3.1cmである。菱環後部の厚さは、A面を基準とすると中央部で0.85cm、左端部で1.35cm、右端部で1.4cmを測る。外縁の幅は、A面中央が1.4cm・左端部1.1cm・右端部1.2cmで、B面は菱環との界線が不明瞭なため明確ではないが、最大部位で1.5~1.6cm程度と見られる。外縁の厚さは中央部で0.35cm、左右鉢脚部で0.35cmである。鉢孔下端部にはA・B面間に鉢脚瘤状のバリが観察される。

外縁の文様はA面・B面とともに内向する鋸歯文で、A面では頂部中央及びその右側1単位が平行直線文がやや乱れた鋸歯文R、これより右側4単位は平行直線文がやや乱れた鋸歯文L、その右側最下端1単位がR、頂部中央の左側は鋸歯文Rという配列になっている。

B面を見てみると、中央より左に2単位が鋸歯文R、続く2単位がL、中央より右に5単位が鋸歯文Lという配列が確認できる。外縁における鋸歯文の配列については、A・B面とともに規則性があるとは言えない。

菱環の文様は、A面では菱環外斜面の一部と内斜面において僅かに観察できる。菱環外斜面には内向する鋸歯文が施され、観察可能な8単位のうち、右側鉢脚部より2単位目のみが鋸歯文Lで、あとは全て鋸歯文Rとなっている。菱環内斜面には軸線を持つ綾杉文Cの一部が右側鉢脚部付近で僅かに認められる。

B面では、外斜面に内向する鋸歯文の輪郭線が微かに認められるが、平行斜線文の方向は確認できない。また、菱環内斜面には中央より左側に綾杉文D、右側に綾杉文Cが観察される。中央部で綾杉文の向きが転換していると見られる。現状では綾杉文の軸線を確認することはできない。

鐔身 高さはA面が22.7cm、B面が22.2cmで、厚さは0.35~0.5cmである。身は舞から裾部にかけてやや外反し、外反率（舞・裾縫からの最深箇所・舞から裾の長さ×100）はA面で1.54%（0.35÷22.7×100）、B面側で1.36%（0.3÷22.1×100）である。

鐔身の文様は、A・B面ともに横帯が縦帯に優先する四区製装模文である。表面を覆う錯によって縦・横帯が不明瞭なところがあり、A面では特に上区から第2横帯左半にかけて、B面では第1横帯右半と左右上縦帯、第2横帯から左・右下縦帯にかけての範囲で文様が判然としない。

観察可能な部位で計測した縦・横帯の幅は、A面では第1横帯が1.7~1.8cm、第2横帯が1.8cm、第3横帯が1.6~1.75cmで、中上縦帯が1.7cm、中下縦帯が1.75~1.85cm、右上縦帯は1.9cmである。B面では、第1横帯が1.7cm、第3横帯が1.95cm、左上縦帯が1.7cm、左下縦帯が1.6~1.7cm、中上縦帯が1.8cm、右上縦帯が1.9cmである。縦・横帯に充填された斜格子の傾斜角は、横帯に対して縦帯の方がかなり緩やかでその差は大きい。

界線の不明瞭なところが多いため、縦・横帯によって区画された各区の大きさを計測できる箇所は限られる。A面では、上右区が下辺5.2cm・高さ5.7cm、下左区が高さ5.7cm、下右区が上辺5.2cm・高さ5.7cmで、B面では上左区が上辺4.6cm、上右区が上辺4.4cm、下右区が高さ5.8cmを測るのみである。

下辺横帯はA・B面ともに幅1.8cmで、B面では文様を確認できないが、A面の横帯内には鋸歯文Rが施されている。同範銅鐔とされる加茂岩倉6号鐔と辰馬419号鐔では、両面ともに鋸歯文Rであることから、この加茂岩倉9号鐔B面の下辺横帯にもR方向の鋸歯文が充填されていたと思われる。下辺横帯下界線はA・B面ともに2条で、条線間の幅はいずれも0.4cmである。

裾端部は、型持孔の痕跡や湯が回りきらなかった部位を除いて、広い範囲に切断痕が観察され面をなしている。

舞 舞はアーモンド形を呈しており、舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）はA面で74.1%（8.0÷10.8×100）、B面で74.8%（8.0÷10.7×100）である。A面とB面で舞面のズレはほとんど認められない。両面の間には、高さ0.4～0.8cmの鋸脚歯状になったバリがある。

舞面の傾斜を示す肩下がりはほとんどなく、A面で0.1cmを測るのみで、B面では認められない。

鎧 鎧の幅はA面が左肩1.2cm・左裾1.6cm・右肩1.1cm・右裾1.4cm、B面は左肩1.1cm・左裾1.6cm・右肩0.9cm・右裾1.5cmである。

文様は内向する鋸歯文で、A面では鋸歯文L、B面では鋸歯文Rが鉤の外縁から連続して施されている様子が見て取れる。A面左側は鋸歯文が鱗の下端部まで施されているのが確認できる。B面は文様を確認できる部位が限られ、左肩周辺に鋸歯文の輪郭線が見えるほか、右鎧中央付近に鋸歯文しが2単位観察できるのみである。

内面突帯 裾端部から1.35～1.7cmのところに、幅1.0～1.1cm・高さ0.2～0.3cmの突帯が1条巡っている。断面は低い台形状を呈しており、鎧身中心部では突帯上面が面をなしている。突帯の磨滅状況は使用に伴うものと見てよい。A面では突帯の一部に「ひき」によると見られる窪みが生じている。

型持 舞の型持孔は、外面から見るとA・B面にそれぞれ一つずつの孔となっているが、内面では型持痕が両面にひと続きとなっている。型持痕の短辺は橢円形を呈した孔の形状に沿って丸くなっているが、長辺はほぼ同じ幅を保ちながら直線的にA・B面を跨いでいる。このことから、内型には短辺がやや丸みを帯びた橢円形状、もしくは長方形形状を呈した「山」の型持が施されていたと見られる。内面観察による型持痕の大きさは、型持の基部で長辺が2.7cm、短辺が1.5cm～1.6cmである。

鎧身上半の型持孔は、A面では左右ともに第2横帯と左上縦帯の交点付近に位置し、下端が第2横帯上に掛かっている。舞との距離は左側が6.85cm、右側が6.3cmである。左側の型持孔は、外面から見るとやや不整な隅丸方形で、内面には高さ1.7cm・幅1.4cmの長方形を呈した型持痕がある。右側内面では型持痕の形状をほとんど留めていない。型持孔の大きさは、左側が高さ1.1cm・幅1.1cmで、右側が高さ1.3cm・幅1.4cmである。

B面では、左側の型持孔下端部と上端部の一部に欠孔が生じており、本来の形状を留めていない。これは湯回り不良によるもので、内面においても型持痕の形状が観察できない状況である。ただ、孔の一部に方形状の痕跡が認められることから、ここに型持本来の形状を窺い知ることはできる。右側の型持孔は外面から見ると高さ1.1cm・幅1.1cmのはば円形であるが、内面には高さ1.6cm・幅1.5cmの長方形を呈した型持の痕跡が残っている。

型持孔周辺では文様が見えないため、孔の位置を文様との関係では示しにくいが、左右ともに第2横帯と左上縦帯の交点付近に位置しているものと思われる。舞との距離は左側が概ね6.4cm、右側が6.5cmである。

裾の型持孔は、铸造後の裾端部の切斷によって、その痕跡を留める程度になっている。A面では左右ともにやや窪んだ部分が観察できるに過ぎない。B面は左側で高さ0.2～0.3cm程度の食い込みが確認できるが、右側は湯回り不良によって大きく欠落しており、本来の形状等を知ることはでき

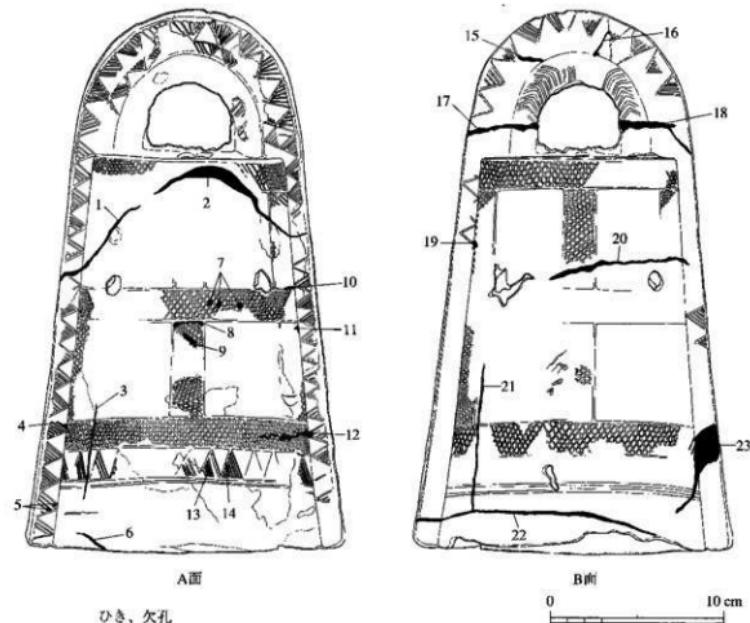
ない。

鋳型の食い違い B面では左鰏の端部に段が生じておらず、舞面・底部を観察すると、A面がB面に対して僅かに右側へズレていることが確認できる。また、A面では錘の周縁にズレが観察されるが、銅鐸を横方向から観察すると、A・B面で舞面の位置に上下のズレは認められない。したがって、これは鋳型の合わせ方によるものでなく、両面の鋳型に彫り込まれた輪郭の大きさそのものに違いがあった可能性を示唆している。

錘上がり 湯回りが悪く欠孔として残ったところは、身の型持孔下部の欠孔を含めると、B面錘身に5ヶ所認められる。表面が瘤む「ひき」は、舞面や鉦の付け根、錘身では内面突帯に当たる部分の外面に見られる。また、A面錘身の右鰏寄りには皺状になった瘤みが認められるほか、底部を観察すると、鰏下端部の付け根と錘身の据漏部との間に瘤みが生じている。

軟X線写真によれば、舞面の瘤み部分やA面の錘身上区、B面の上左区から下左区にかけての範囲がかなり薄くなっている。また、鉦や鰏及び錘身には、鋳造時に生じた気泡が多数の筋となって残っていることがわかる。

范傷 全体的に錘が覆っているため細かい范傷は観察しにくいが、A・B面ともに大きな范傷が認められる。1はB面左鰏端部から上左区を右上がりに延びる長い傷である。上左区の中央付近で



第61図 9号鐸の鋳造状態

は傷が途切れるが、この傷の延長線上には2があり、第1横帯中央のやや右寄りで大きく弧を描いて右鰐の端部に至る。3は下左区の左隅から下辺横帯を貫いて縦に延びる傷で、4は第3横帯横の鰐の付け根から鋸歯文の輪郭線に平行する傷である。5は鋸歯文に充填された平行斜線文間に生じた小さな傷で、6は裾端部から斜めに延びた傷である。7～9・11・12縦・横帯の斜格子文にある傷で、8はA面中下縦帯内で第2横帯に沿って延びている。また12は第3横帯内から右鰐の鋸歯文頂部に至る傷である。10は第2横帯の上界線右端部が膨らんで鰐の付け根に至る。13・14は下辺横帯の鋸歯文内にあり、平行斜線文間に膨らみを持つ。

15・16は菱環の稜部から外縁の鋸歯文にかけて延びる傷で、17・18は鈕の脚部を鉢孔から外縁まで直線的に貫いている。17・18はいずれも鉢孔端部にまで及んでいることから、鋳型の上では17・18が鉢孔部をも貫いて、1本の傷としてつながっていた可能性もある。19は鰐の付け根にあるもので、20はB面上左区の右下隅から右鰐の付け根まで延びる長い傷である。21は下左区から左下縦帯に沿って裾部に延びる傷で、22に至る。22は、B面の鋸身裾右側から左鰐の裾部にかけて緩やかな弧を描きながら延びる大きな傷である。23はB面の右鰐端部から鰐の付け根にかけて大きく膨らみ、さらに鋸身の下辺横帯を貫いて裾部に至っている。

1・2・10・11・15～17・20～23は傷の程度に差があるものの、同範とされる加茂岩倉6号鐸にも見られ、全般的に9号鐸の傷は6号鐸に比べて成長している。このことから、少なくともこの2つの銅鐸では加茂岩倉6号鐸が先行して铸造されたと言える。

(山崎 修)

10. 10号鐸 [図版70～77・写真図版81～86・294～296]

型式 扁平鈕2式

文様構成 六区袈裟擗文

法量	総高	45.8cm	最大幅	28.8cm	重量	3.64kg
----	----	--------	-----	--------	----	--------

舞長径(A面)	15.2cm	舞長径(B面)	15.2cm	舞短径	11.9cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

裾長径(A面)	24.2cm	裾長径(B面)	24.3cm	裾短径	16.0cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

鉢 菱環と外縁・内縁よりなる扁平鉢である。鉢の大きさは高さ11.7cm・幅18.4cm、鉢孔は高さ3.3cm・幅3.9cmである。菱環はA面の中央部で3.0cm・左端2.5cm、B面の中央部で2.6cm・左端2.4cm・右端2.5cm、厚さは中央部で0.7cm・左右端1.1cmである。

外縁は第1文様帯・第2文様帯に分かれており、第1文様帯はA面で幅1.5～1.8cm、B面で幅1.5～1.8cm、厚さは0.2～0.3cmである。第2文様帯はA面で幅1.1～1.9cm、B面で幅1.3～1.8cm、厚さは0.2～0.3cmである。内縁はA面で幅1.2～1.7cm、B面で幅1.3～1.9cm、厚さは0.2～0.3cmである。鉢孔部はA面で0.1～0.4cm、B面で0.2～0.4cmの幅で、内縁の界線よりはみ出した甲張りが見られる。

A面の文様は、外縁第1文様に内向する鋸歯文を置くが、左端から6つが鋸歯文Lし、次の2つが鋸歯文L R、これより右端までが鋸歯文Rになっており、中央やや左寄りの鋸歯文L Rを挟んで左に鋸歯文L、右に鋸歯文Rを対向するように配している。外縁第2文様帯には内向する鋸歯文Rが見られ、左端には内部の条線はないが鋸歯文の半單位文状に斜線が入れられている。鋸歯文は外縁第1・第2文様帯とも中央部では底辺が2.0cm前後あるのに対し、左右の鉢脚付近では底辺1.3～1.5

cm前後と小さくなっている。

菱環文様帯は左右の鉢脚部と文様帯を4つに分割する位置に2条の界線を入れ、その間に左右に対向する綾杉文CとDを配したC||C||D||Dである。内縁は左右の鉢脚部に2条の界線が入るが、内部は基本的に無文である。

B面の文様は、外縁は第1文様帯・第2文様帯とも同じ構成で、内向する鋸歯文Rが見られる。鉢脚部には左右とも界線が2条入り、その上に長半円形をした重圓文がある。菱環文様帯は右鉢脚部と文様帯を4つに分割する位置に対向するように綾杉文を入れたもので、C||D||C||Dである。内縁は中央にカメの絵が見られ、これを挟んで左に鋸歯文R、右に鋸歯文Lを3つずつ向き合うように入れている。

A・B両面とも鋸歯文内の条線や綾杉文の一部に輪郭線よりはみ出したものが見受けられる。

鐸身 高さはA面33.6cm、B面33.6cm、厚さは0.3cmである。身は舞から裾部にかけてやや外反し、外反率（舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100）は、A面側で0.9%（0.3÷33.5×100）、B面側で1.2%（0.4÷33.2×100）である。

A面の文様は、六区製表博文で基本的に横帯が縦帯に優先するものである。横帯・縦帯の幅は、第1横帯が幅2.0cm、第2横帯は幅2.3cm、第3横帯は幅2.0cm、第4横帯は幅2.5cm、左上縦帯は幅2.3cm、左中縦帯は幅2.5cm、左下縦帯が幅2.7cm、中上縦帯が幅2.5cm、中中縦帯が幅2.6cm、中下縦帯は幅2.7cm、右上縦帯が幅2.4cm、右中縦帯が幅2.5cm、右下縦帯が幅2.7cmである。

各区の大きさは、上左区が上辺6.7cm・下辺7.1cm・高さ4.8cm、中左区が上辺7.7cm・下辺7.7cm・高さ5.1cm、下左区が上辺8.0cm・下辺8.5cm・高さ5.5cm、上右区が上辺6.3cm・下辺6.7cm・高さ5.0cm、中右区が上辺7.1cm・下辺7.7cm・高さ5.4cm、下右区が上辺8.0cm・下辺8.8cm・高さ5.6cmである。横帯・縦帯の中には斜格子文が充填されているが、両者で斜格子文が交差する角度に違いが見られ、第4横帯中央部には重圓文が入っている。

下辺横帯は幅1.7cmで鋸歯文Rが入っており、下辺横帯下界線は3条である。

B面の文様は、六区製表博文で基本的に横帯が縦帯に優先するものである。横帯・縦帯の幅は、第1横帯が幅1.9cm、第2横帯は幅2.1cm、第3横帯は幅2.0cm、第4横帯は幅2.5cm、左上縦帯は幅2.3cm、左中縦帯は幅2.5cm、左下縦帯が幅2.9cm、中上縦帯が幅2.5cm、中中縦帯が幅2.7cm、中下縦帯は幅2.7cm、右上縦帯が幅2.4cm、右中縦帯が幅2.6cm、右下縦帯が幅2.6cmである。

各区の大きさは、上左区が上辺6.4cm・下辺6.8cm・高さ4.9cm、中左区が上辺7.0cm・下辺7.6cm・高さ5.4cm、下左区が上辺7.9cm・下辺8.5cm・高さ5.3cm、上右区が上辺6.5cm・下辺6.8cm・高さ4.9cm、中右区が上辺7.1cm・下辺7.8cm・高さ5.5cm、下右区が上辺8.1cm・下辺8.7cm・高さ5.5cmである。横帯・縦帯の中には斜格子文が充填されているが、両者で斜格子文が交差する角度に違いが見られ、第4横帯中央部には重圓文が入っている。

下辺横帯は幅1.8cmであるが、内部の文様構成はやや複雑である。左から列挙すると鋸歯文R3個、長半円形の重圓文2個、鋸歯文R2個、半長円形重圓文2個、鋸歯文R2個、長半円形の重圓文2個、鋸歯文R3個となっており、中央の重圓文を挟んで左右に鋸歯文と重圓文が対称的に配されている。下辺横帯下界線は3条である。

裾端部はA・B両面とも面をなしており、顕著に工具痕が残っている。また、A面裾端部外間にも裾を切断した際に使用した工具の痕跡と見られるものが観察できるほか、A面裾左端持の左右・

右型持右側やB面裾左型持の右側に僅かに突線が見られる。

舞 舞はアーモンド形を呈しており、扁平率（舞短径÷舞長径×100）はA・B両面ともに78.3%（ $11.9 \div 15.2 \times 100$ ）である。舞中央部には高さ0.4cm程のバリが認められ、舞面が傾斜する肩下がりはA面向が0.5cm、B面は0.6cmである。

鰐 幅はA面で左肩1.7cm・左裾2.4cm・右肩1.7cm・右裾2.4cm、B面は左肩1.8cm・左裾2.3cm・右肩1.7cm・右裾2.5cmである。

A面の文様は左右に鋸歯文Rに入るが、右上の飾耳と接する部分には鋸歯文Rの半單位文（内部の条線の角度は飾耳と平行になる）があり、左上の飾耳と接する部分にも半單位文状の輪郭線に入る。また、左側下端の鋸歯文は大部分が鋲掛けによるものであるが、鰐付け板に残る部分では鋸歯文Lの右上に平行斜線Rを2条加えた特殊なものである。鰐下端部は右側には8本の界線が入っており、左側は鋲掛けによるものであるが、同様に8本の界線が鋲出されている。

B面の文様はA面と同様に鋸歯文Rが入っているが、左上飾耳に接する部分にのみ鋸歯文Rの半單位文が見られる。また、右側下端の鋸歯文は下半が鋲掛けによるものであるが、本来鋸歯文Rの条線を持つものは鋲掛けではLの条線が加えられている。鰐下端部界線は左側は7本、右側は鋲掛けによるものであるが8本が鋲出されている。

飾耳は半円形で、脚部を持つものが2個1組で左右に付いている。飾耳の界線はいずれも2条であるが、A面では鈕や鰐の外郭線が飾耳の中を通らないのに対し、B面では飾耳を貫いている。左右とも飾耳頭部はやや厚くなっている、端部にかけて斜面を持つ。

内面突帯 裏からの高さ4.1~4.4cmのところに、幅1.2cm・高さ0.4cmの突帯が1条巡っている。横断面形は台形状を呈しているが、使用痕は顕著ではない。

型持 舞に2個、鐸身上半にはA・B両面とも2個ずつ、柄部にもA・B両面とも2個ずつの計10個の型持が見られる。

舞の型持孔は、内面から見ると、ともにほぼ正方形を呈していることがよく観察できる。A面は長さ1.8cm・幅1.7cm、B面は長さ1.9cm・幅1.8cmである。

鐸身上半の型持孔は、A・B両面とも左上区または右上区、左右の縦帯寄りの位置にある。型持孔は内面から見るといずれも方形を呈しており、A面左の型持孔は高さ2.2cm・幅1.9cm、右側は高さ2.0cm・幅2.0cmである。B面左側の型持孔は高さ2.0cm・幅1.9cm、右側は高さ2.2cm・幅2.0cmである。

柄部の型持は内面から見るといずれも長方形を呈しており、A面左側は高さ2.6cm・幅2.0cm、右側は高さ2.5cm・幅2.0cmである。B面左側は高さ2.5cm・幅2.2cm、右側は高さ2.4cm、幅は2.2cmである。

錫上がり 湯回りが悪く欠孔として残ったところは、現状ではほとんど認められない。しかし、後述するように軌X線写真によれば、A面左鰐下端に1ヶ所、鐸身に2ヶ所、B面舞に1ヶ所鋲掛けが認められることから、鋳造時にはこれらの部分に欠孔があったことがわかる。表面が窪む「ひき」は目立つものはないが、A面右側鈕脚部の舞内面が僅かに窪んでいる。

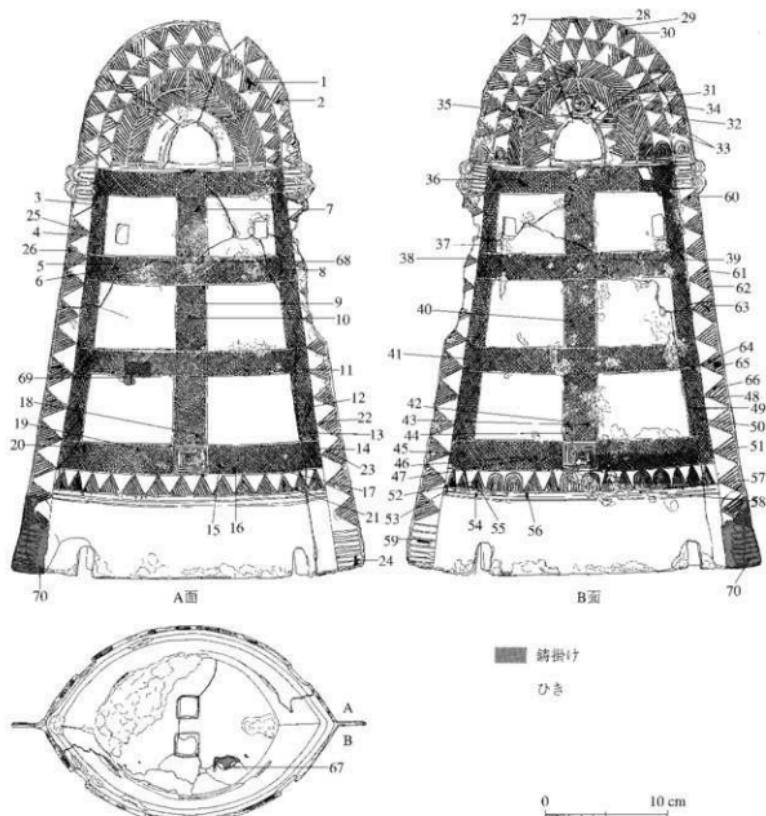
軌X線写真によると、鐸身中央部などは鋳化のための瘤みが激しいが、鋳造時の厚さの不均等や気泡状の鬆は少なく、錫上がりは良好である。

范傷 范傷は斜格子文の欠けなど小さなものがほとんどで、大きなものは認められない。A面で

は鋸の外縁に1・2、鋸身の斜格子文内に3~20、下辺横帯の鋸齒文に21、鑄の鋸齒文内に22・23・25・26、右鋸下端界線に24がある。

B面は鋸の外縁鋸齒文内に27~33、菱環文様帶内に34、内縁の鋸齒文に35、鋸身の斜格子文内の36~51、下辺横帯と下界線に52~58、右鋸齒文内には60~66、左鋸下端界線に59がある。

錫掛け 舞のB面側には不整形な形をした67があり、内面にはやや膨らみがある。A面鋸身には第2横帯中央に68、第3横帯左側の界線下に69があるが、ともに小さい。A面左鋸下端には大きな錫掛け70があり、一度では足らなかったためか2回に分けて行われている。錫掛けに際しては、その都度、径0.2cm程の足掛り孔を錫掛けする部分に接して3個ずつ設けており、文様を刻んだ型を当ててから湯を流し文様を錫出している。



第62図 10号鐸の铸造状態



第63図 10号鐸の研磨状態及び赤色顔料の付着位置

補刻・研磨等 鎏掛け68は外面を丁寧に研磨しており、その後、第2横帯に当たる部分に斜格子文を補刻している。また、A面右上区左界線・左中区下界線、B面左上区左界線・右上区下界線、右下区上界線に沿って隙取り状に線刻が見られる。

研磨は、鉦についてはA・B両面で違いがあり、A面はほとんど磨かれないのに対し、B面では外縁第2文様帶の鋸歯文間の一部など文様帶の中に研磨が認められる。鐸身はA・B両面で同じ部分が研磨されており、舞、袈裟摩文内の上左区・上右区・中左区・中右区・下右区・下左区、下辺横帯の鋸歯文・重圓文間、裾、鰐の鋸歯文間に認められる。研磨の方向は、舞は鰐に平行方向、袈裟摩文の中と裾は縦方向、裾端部は横方向で、研磨により表面が光沢を持っている。

赤色顔料 A面左鰐の下から2個分の鋸歯文内と、その裏側にあるB面右鰐下端界線や一番下の鋸歯文にかかる鎧掛けの足掛り孔内には赤色顔料が付着している。また、B面鉦脚部の数ヶ所及び舞内面の型持孔、鎧掛けの足掛り孔、鐸身B内面左型持孔上端部の一部でも僅かに赤色顔料が観察された。後者は、舞と鐸身内面に貫通する孔の部分にのみ見られることから、本来、舞や鐸身外面に塗られた赤色顔料が付着したものと思われる。このように見ると鉦・鰐・舞・鐸身と、銅鐸全面に赤色顔料が塗られていたことが想定される。

赤色顔料の種類や付着範囲等については第6章第3節「10号鐸ならびに33号鐸に付着する赤色顔料の同定」に譲りたい。

(角田徳幸)

11. 11号鐸 [図版78~86・写真図版88~93・297~299]

型式 外縁付鉢2式

文様構成 二区流水文

同范銅鐸 川島神後鐸

法量	総高	cm	最大幅	28.8cm	重量	4.00kg
	舞長径(A面)	15.5cm	舞長径(B面)	15.4cm	舞短径	9.5cm
	裾長径(A面)	24.3cm	裾長径(B面)	24.1cm	裾短径	18.7cm

鉢 加茂岩倉銅鐸群の中には不時発見のため損傷しているものがあるが、この銅鐸は特にそれが著しく、鉢は身と切り離されており、外縁部も一部破片となっている。

文様構成は菱環と外縁とで構成される外縁付鉢で、高さ12.6cm・幅19.8cmを測る。鉢孔は現状で高さ3.0cm・幅4.2cmを測り、A面左側が広がっており歪な形態をしている。B面鉢孔の左側にはバリ状に薄くなっている部分があり、この直前まで文様があることから、この部分(37)が本来の孔の線と考えると、高さ2.8cm・幅3.8cm程度の半円形の鉢孔が復原でき、鉢孔高の鉢高における比率は22.2%($2.8 \div 12.6 \times 100$)となる。また、菱環稜高(舞から菱環稜頂部までの高さ)はA面7.6cm・B面7.4cmで、鉢高での位置(菱環稜高:鉢高×100)はA面59.8%($7.6 \div 12.7 \times 100$)・B面58.7%($7.4 \div 12.6 \times 100$)となり鉢孔の真中より高い位置にくる。外縁付鉢2式横形流水文の菱環稜頂の位置は真中より高くなることが指摘されているが(難波1991)、本鐸はその中でもより高い位置にあり、外縁付鉢1式と2式の中間にあ。これは本鐸が、鰐の角耳と鋸齒文との関係から、外縁付鉢2式の中でも古相に位置付けられていることと(難波1991)関係する可能性がある。

A面では、外縁が幅2.4cm・厚さ0.3cmを測り、鋸齒文Rのみからなるが、右鰐と接する右端のみやや変形した鋸齒文L+R(10)となっている。これは左鰐から鉢外縁へと連続して鋸齒文Rが入るのに対し、右鰐のみ鋸齒文Lとなり、このL+Rの部分がまさにLとRの鋸齒文のぶつかる部分となる。

菱環は幅5.6~7.5cmで、菱環の文様構成は、外斜面に5帯の平行斜線を組み合わせて綾杉文DCと綾杉文ZSを上下に、内斜面にも綾杉文ZSを配置し、さらにその内側に5条の平行線で6分割された間に重弧文が加えられた文様帶である。この重弧文は全ての間にあったかは不明である。同范の川島神後鐸でも下位の区間はない。また、最も内側の界線は右側の鉢付け根付近で右に流れている。さらに無文の部分があり鉢孔に至る。鉢の幅は、頂部で広く脚部で狭いため、外斜面の綾杉文を頂部で幅広くすることで整合をとっている。

B面は、文様構成や各文様帶の幅等はA面とほぼ共通している。この面の鋸齒文は鋸齒文Rで統一されているが、鉢頂部とその左右の3個は鋸齒文RLとなっている。菱環の文様構成は、外斜面は鋸齒文Rとその左右を平行斜線で埋めた文様帶の内側に、3帯の平行斜線によって綾杉文ZSZSZSを、内斜面にも同様に綾杉文ZSZSZSを配置し、さらに内側には弧状の平行線と3条の界線からなる文様帶がある。右鰐付け根の3条の界線は左側に比べて短いのは、鉢孔が大きくなっていることからもわかるように、湯回り不良によって文様が途中で切れているためである。

B面でも頂部と脚部の幅の違いを、外斜面最外周の文様帶の頂部を鋸齒文に変えて幅広くして解消している。

鐸身 身の部分も破損が著しく13以上の破片になっており、接合箇所の判明しない破片も2点あ

る。それぞれの破片は変形しているものも多く、当然のことながら歪みが著しく固化した状態は本来の形状を示すものではない。

身高はA面33.8cm、B面33.4cmで、厚さ0.2~0.35cmを測る。A面右側側線は本来の形を保っており外反していることから、身は全体に反っていたと思われる。

A面の文様構成は、中央に横帯を配した2区横形流水文である。流水文は上区・下区とも8段構成で、8つのc反転部と7つのx反転部からなる8c7xである。反転部はC反転である。

横帯は幅2.1cmで確認できる部分はいずれも鋸歯文Rを飾る。下辺横帯は流水文下端より0.6cm下に上界線を1条設け、幅2.25cmで鋸歯文Rを飾る。下辺横帯の下には3条の下界線がある。

B面もA面と同様の文様構成をとる。下区がA面に比較して上下に広くなっている。このため流水文下端の条線に下辺横帯鋸歯文の頂角が接しており、A面のように間隔が空いていない。最下のx反転部のみ左右のC反転下端線を繋いでいることから(64)、流水文下端の条線が下辺横帯上界線も兼ねることになっている。

下区の右端最下段の反転部と左端下2段の反転部は下方に引かれており、右端では下辺横帯の鋸歯文が重なってスタンプされている(61)。これは流水文がスタンプされ、下方に引かれた後に下辺横帯が鋳出されたことによる。また、下辺横帯下端線はほとんど鋳出されておらず、3本とも補刻されている。

舞 舞の損傷は特にひどくA面左半分はめくれ上がっており、B面も内側にめり込み、鉛掛けされた部分はそのままの形で抜けている。

鉢の根元には大きな铸造欠陥があり、铸造直後は舞の半分近くは穴が空いていたことになる。鉢とは、鉢脚間の僅かな部分と外縁が鋸と繋がっているのみで、宙に浮いた感じになっていたと思われる。その他にも僅かに器壁の残った深い窪み1ヶ所と浅い窪みが4ヶ所ある。

鑑 A面での幅は左肩で2.1cm、左裾で2.6cm、右肩で2.3cm、右裾で2.5cm、B面では左肩で2.4cm、左裾で2.6cm、右肩で2.3cm、右裾で2.6cmである。身上縁には半円形飾耳が1対ある。この半円形飾耳は脚部がなく、鑑の鋸歯文がそのまま外縁へと続くA1類(難波1991)である。

A面左鋸は鋸歯文R、右鋸は鋸歯文Lが、B面は鋸歯文Rがそれぞれ配列されている。この銅鐸では鋸歯文Lが使われるのはA面の右鋸だけで、その他の部位はB面鉢頂部の鋸歯文L Rを除くとすべて鋸歯文Rに統一されている。鋸歯文には下線が見られる部分があり、B面右鋸の半円形飾耳との境にも下線が見られる。また、A面左鋸には下端線が1条あり(20)、不鮮明だがB面右鋸にも下端線があった可能性がある。

内面突帯 内面突帯は1条である。裾からの距離は4.5cm、幅は1.3cm・高さ0.7cmを測る。A面の内面の中央から左側にかけては、鋸側に比べて高さが低くなっている。断面が台形状になり上端がやや面を持つようになっている。もともと鋸側が高く中央が低くなっていたと思われるが、ある程度使用されたものと思われる。

B面中央は突帯部分に及ぶ铸造欠陥があり(65)、鉛掛けによって突帯を復原している。また、B面左側の舞側斜面は「ひき」により窪んでいる部分や被っている部分がある。この面の内面突帯は全体に「ひき」のため幅が一定していない。

型持 舞の両面に1個ずつ、身の両面それぞれに上半2個ずつ、裾に2個ずつの計10個の型持による孔がある。ただし舞のそれについては铸造不良のため全形が鋳出されておらず、鉛掛けによっ

て穴を埋めると同時にこれを復原し、径1.3~1.5cmの円形の孔になっている。

身上半の型持は流水文の5ないし6段目に反転部を避けた位置にある。A面は左側の高さ1.7cm、右側の高さ1.75cmで幅は欠損しており不明である。B面では左が高さ1.4cm・幅1.6cm、右は高さ1.5cm・幅1.8cmではばば円形である。内面にはいずれも縁にリング状の凸部がある。舞と身の上側の型持はほぼ同形同大に統一されていたものと思われる。

裾の型持は頂部が丸く、A面左は幅不明・高さ2.0cm、A面右は幅1.4cm・高さ1.85cmで、B面左は幅1.5cm・高さ1.95cm、B面右は幅1.5cm・高さ1.55cmを測る。内面は縁が凸状になっている。身の型持孔は鋳造後に側面を加工し整えているようである。

鉄上がり 湯回りが悪く小穴として残った部分は現状ではA面で数ヶ所あるが、B面には鋲掛けが14ヶ所行われていることからもわかるように、この面の鉄上がりが特に悪く文様の不鮮明な部分も多い。文様の不鮮明な部分は縱方向に帯状に広がる傾向があり、軟X線によるとこれらの部分はやや大きめな気泡が多くなっている。また、「ひき」による窪みもこの面に顕著で、内面突帯を挟み上下に大きな窪みがある(64)。舞にも大きな鋳造欠陥の穴があるが、他に「ひき」による窪みもある。鉢A面右側の付け根の窪みの深さは0.3cmほどあり、僅かに器壁を残すのみで孔になる部分もある。

A面鐸身と鰐の付け根は左右とも文様不鮮明である。左鰐の上半分は色調が白っぽく脆弱な状態で厚さも薄くなっている。鰐耳も鰐との境がはっきりせず平坦な連続した面となっており、条線も鉄上がりが悪く孔の窪みもほとんど無い。

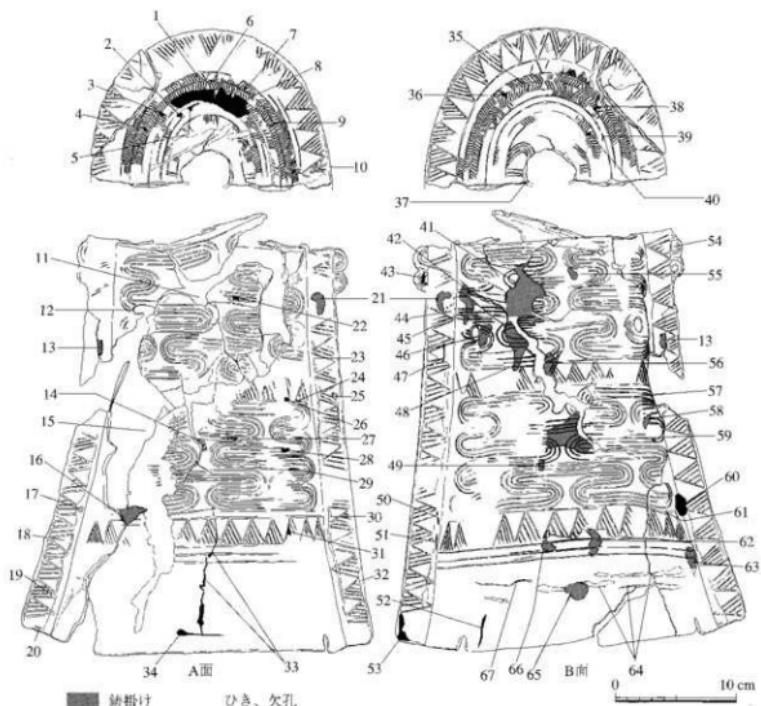
范傷 范傷は比較的多くA面に18ヶ所(1・2・3・4・5・7・8・9・22・24・25・26・27・28・29・31・33・34)、B面に11ヶ所(35・36・38・39・40・43・47・50・51・52・53・60・67)ある。

特にA面では鉢の菱環部には幅3.4cmにわたり盛り上がった部分(8)があり、文様が全く無いことから面的に鋳型が損傷したものと思われる。他にも鉢には綾杉文の斜線間や斜線が太くなった范傷がある(1・2・3・4・5・7・9)。菱環外斜面のDC綾杉文の接点にできる三角形の斜線間(6)がやや浅くなり、文様がやや不鮮明になりつつあることから鋳型の損傷が始まっているようである。同范の川島神後鐸ではこの部分が盛り上がって大きな范傷となっている。身にも流水文や锯歯文の条線間に范傷がある。裾中央部には下辺横帯を横切る垂直方向の細長い范傷がある(33)。

B面では下区流水文下端から下辺横帯下界線にかけての鰐付け根付近に、大きな盛り上がりがある(60)。左鰐下端のコーナーでも大きな范傷がある。鰐下端が一段低く見えるのはこのためである。また、左側半円形飾耳の下段の条線間に范傷がある(43)。

鋲掛け 表面観察及び軟X線調査によれば、鋲掛けは鰐に2ヶ所(13・21)、A面身に1ヶ所(14)、B面身に14ヶ所、舞に2ヶ所認められる。鋲掛けは計19ヶ所で徹底して行われている感がある。足掛けかりは設けられていない。

鰐の鋲掛けはB面の鰐付け根側に工具で叩いた痕がある(44)。舞の鈎付け根には2ヶ所の鋲掛けがあり、一つは6.5cm×5.0cm程度の大きなもので、補鋲と同時に型持孔の復原を行っている。鉢の両側の孔を一度に鋲掛けしているため、内面から見ると鉢付け根の内面に湯が被っている。このことから舞の鋲掛けは外側に型を当てて内側から補鋲したことがわかる。



第64図 11号鐸の铸造状態

A面身には幅1.5mm・長さ5mmの極めて小さい鋳掛けが、現在は1ヶ所あるのみで、これより大きな穴もあるがそのまま残されている。

B面身には14ヶ所(41・42・46・48・49・55・56・57・58・59・62・63・65・67)の鋳掛けがされており、残された穴はない。このうち据中央部では内面突帯に重なっており(65)、これも復原されている。また、これ以外に孔の両側に補刻がある部分が2ヶ所であることから(16・41)、現在は補鉢した部分は残っていないが、この部分も鋳掛けがあった可能性が高い。

補刻 鋳掛けの多いB面鐸身のみに行われている。基本的には鋳掛けが行われた部分とその周辺が補刻されている(41・42・48・49・56・59)。

x反転は正確に補刻されているが、B面上区3・4段目左端の反転部では、補刻が直線でそのまま終わっており文様が正確に表現されていない(42)。また、第1横帯の中央の鋸歯文と界線も補刻れている。

下辺横帯の下界線は不鮮明で3条とも補刻されている。この部分の補刻は他の部分より太い線で表現されている。

「×」の刻線 B面の菱環部には稜頂に交点がくる「×」の刻線がある。

(松山智弘)

12. 12号鐸 [図版87~91・写真図版95~98・300~302]

型式 外縁付鉢1式

文様構成 四区製姿櫻文

法量 総高 30.7cm 最大幅 18.9cm 重量 2.28kg

舞長径(A面) 10.8cm 舞長径(B面) 10.8cm 舞短径 8.5cm

裾長径(A面) 15.7cm 裾長径(B面) 16.0cm 裾短径 11.1cm

銚 菱環と外縁からなる外縁付鉢である。高さはA面7.9cm、B面8.1cmで、幅はA・B面ともに13.2cmを測る。鉢孔は高さ3.5cm・幅5.0cmで、鉢孔下端部にはA・B面間に鉢脚壁状になったバリが観察される。文様は、粒状になった鐸のため、A面の外縁左半とB面右半の一部及び菱環内斜面全域で不明瞭になっている。

外縁の文様はA面・B面とともに外向する鋸齒文である。A面では頂部中央より左側で文様が不明瞭になっているが、頂部及び左端鉢脚部で鋸齒文Rが観察される。頂部中央を境にして平行斜線文の方向が転換し、右側へ5単位は鋸齒文Lとなる。続く6単位目から右端鉢脚部への4単位はR鋸齒文である。幅は中央が1.65cm・左端部1.3cm・右端部1.2cmで、頂部付近でやや広くなっている。

B面は右半部に文様の不明瞭なところがある。頂部の2単位はL、これより左側はR鋸齒文であるが、中央より3単位目は平行斜線文の方向が確認できない。なお、この鋸齒文だけは他の鋸齒文に比べて底辺の幅が狭く細身である。また、右側鉢脚部に3単位の鋸齒文が観察できるが、R1単位の右側はL R鋸齒文となっており、そのまま鱗に続いている。幅は中央1.4cm・左端部1.1cm・右端部1.0cmを測る。外縁の厚さは、どの部位でもほぼ均等で0.3cm程度である。

菱環の文様はA・B面で異なっており、A面には菱環稜部を輪線とする綾杉文、B面には外斜面に輪線を持つ綾杉文が施されている。A面の綾杉文は中央で方向を転換し、左側が綾杉文C、右側が綾杉文Dとなる。幅は中央部2.8cm・左端3.0cm・右端2.9cmである。

B面では菱環内斜面の文様を確認することができない。外斜面の文様は綾杉文Cで、左側鉢脚部が幅1.0cm、右側鉢脚部が幅1.8cmと、左右で大きな開きがある。菱環の幅は中央部2.8cm・左端2.8cm・右端3.1cmである。A面を基準としたときの菱環稜部の厚さは、中央部で0.6cm・左端鉢脚部で1.1cm、右端鉢脚部で1.2cmを測る。

鐸身 高さはA面が22.7cm、B面が22.5cmで、厚さは0.3~0.4cmである。身は舞から裾部にかけて僅かに外反し、外反率（舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100）はA面で1.35%（0.3÷22.5×100）、B面側で1.36%（0.3÷22.0×100）である。

鐸身の主文様は、A・B面ともに綾・横帶が切り合った四区製姿櫻文である。左右の綾帶は鱗の付け根に密着せず、A面では0.5~0.75cm、B面では0.55~0.85cm程度の間隔をもって施文され、この界線は下辺横帯下界線にまで達している。綾帶と鱗の付け根の間隔は、鐸身上部ほど狭く、裾に近づくに従い広くなっている。第1~3横帯内の斜格子文は鱗の付け根までは施文されず、綾帶から延びた界線で止まる。

綾・横帶が切り合い、綾帶の界線が下辺横帯下界線に達するなどの特徴は、東大阪市の鬼虎川遺跡から出土した鐸型に見られる施文方法と酷似しており、12号鐸の製作地について河内北部の工房との関連が注目される。

A面の第1横帯は幅1.5cmで、横帯内に綾帶の界線が延びているものの、充填された斜格子は横

帶内で連続している。中上縦帯の延長界線は、右側で僅かに観察できる程度である。

第2横帯は幅1.5cmである。左縦帯との切り合い部では、斜格子が横帯優先で施文されている。中縦帯との切り合い部では、斜格子が横帯と食い違うように見えるが、文様が不鮮明ではっきりしない。また、縦帯内の斜格子との連続性も明らかでない。右縦帯との切り合い部では、一部、斜線文が右下縦帯へと突き抜けているが、基本的には横帯・縦帶いずれの斜格子文とも連続していないよう見える。また、縱方向の内側界線は、上下縦帯のいずれの内側界線とも食い違っており、連續していない。

第3横帯は幅1.75cmである。左下縦帯との切り合い部では斜格子文が横帯内で連続する。中下縦帯との切り合い部では斜格子文が観察できないため、文様の連続性については明らかでない。右下縦帯との切り合い部では、一部で文様が不鮮明になっており、斜格子の連続性は確認できない。ただ、少なくとも右下縦帯の斜格子文とは食い違うため連続していないことがわかる。

B面の第1横帯は幅1.45cmである。A面同様、横帯内に縦帯の界線が延びているものの、縦の界線が明瞭に見えるのは左右両端部に限られ、斜格子文も横帯優先で施文されている。

第2横帯は幅1.45cmである。左縦帯との切り合い部は、粒状の鋸に覆われているため判然としないが、斜格子文が左上縦帯と連続しているように観察される。

中縦帯との切り合い部では、斜格子が左右に分かれた横帯と食い違い、中上縦帯と連続している。右縦帯との切り合い部は文様が不鮮明のため、斜格子の連続性は確認できない。

第3横帯は幅1.7cmで、中下縦帯・右下縦帯との切り合い部では、斜格子文が横帯優先で施文されている。左下縦帯との切り合い部は文様が判然としない。

縦帯の幅は、A面では左上縦帯1.7cm・左下縦帯1.7cm・中上縦帯1.7cm・中下縦帯1.65cm・右上縦帯1.5cm・右下縦帯1.9cmである。B面では、左上縦帯1.55cm・左下縦帯1.8cm・中上縦帯1.65cm・中下縦帯1.8cm・右上縦帯1.5cm・右下縦帯1.8cmである。

縦・横帯内に充填された斜格子文は、全体的に目が粗い。

第2・第3横帯の位置が低いため、縦・横帯によって区画された各区は、かなり縦長の長方形になっている印象を受ける。各区の大きさは、A面では左上区が上辺4.1cm・下辺4.55cm・高さ5.8cm、上右区が上辺4.7cm・下辺4.9cm・高さ6.0cm、下左区が上辺4.9cm・下辺5.3cm・高さ7.5cm、下右区が上辺4.9cm・下辺5.4cm・高さ7.3cmで、B面では左上区が上辺4.5cm・下辺4.8cm・高さ6.3cm、上右区が上辺4.2cm・下辺4.7cm・高さ6.5cm、下左区が上辺4.9cm・下辺5.5cm・高さ7.6cm、下右区が上辺4.8cm・下辺5.4cm・高さ7.5cmである。

下辺横帯はA面が幅1.5cm、B面が幅1.2cmで、横帯内には鋸歯文Rが施されている。A面の鋸歯文はB面に対して大きく、輪郭線・平行斜線も太い。下辺横帯下界線はA・B面ともに3条で、3条線間の幅は1.0cmである。下辺横帯下界線から鋸端部までの距離は短く、A面で1.85~2.0cm、B面で1.2~1.6cmである。

鋸端部は概して丸みを帯びており、切断痕は顕著でないが、鱗片の周辺には切断面とおぼしき平坦面が残っている。

舞 舞は丸みの強い橢円形で、舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）は、A・B面ともに78.7%（ $8.5 \div 10.8 \times 100$ ）である。両面の間には鋸脚壁状に残ったバリがあり、A面では0.1~0.3cm、B面では0.25~0.55cmを測る。A・B面で上下にズレがあるため、このバリの高さにも差が生じてい

る。舞面の傾斜を示す肩下がりはA面が0.2cm、B面が0.45cmである。

鑄 鏈には鉢の外縁から続く外向鋸歯文が施されている。A面左鍔は、肩部から6単位がR、これより鍔幅に向かってはL方向の鋸歯文が並ぶ。左肩から1単位目は平行斜線文の入り方が直立的で、やや形の崩れた鋸歯文Rになっている。また、第2横帯左に位置する鋸歯文Lの2単位目は、鋸歯文の輪郭線内に独立した鋸歯文しが収まつた特殊な文様になっている。

右鍔には肩部から7単位がR、続く3単位がL R、これより鍔幅に向かってはRの鋸歯文が並ぶ。鍔幅は左肩1.2cm・左側1.7cm・右肩1.1cm・右側1.8cmである。

B面左鍔は、鉢に引き続いて肩部から6単位が鋸歯文Rで、これより鍔幅に向かってはL R鋸歯文が並ぶ。右鍔には鉢脚部から続いてL R鋸歯文が施文されている。鍔の下半部は文様が観察できない。鍔の幅は左肩1.2cm・左側1.6cm・右肩1.2cm・右側1.4cmである。

加茂岩倉銅鐸で鍔に外向する鋸歯文が解られるのは、この12号鐸と17号鐸だけで、17号鐸の場合A面左鍔のみに施文されている。A・B面ともに鉢の外縁から連続して外向鋸歯文が施されているのは12号鐸のみに見られる特徴である。

内面突帯 補端部から0.6cmのところに、幅0.9~1.0cm・高さ0.2cmの突帯が1条巡っている。断面はやや裾方向に傾斜した低い台形状を呈しており、突帯上面は面をなしている。鐸身中央部を中心にして磨滅した状況が窺える。

型持 舞の型持孔は、外面から見るとA・B面にそれぞれ一つずつ認められる。このうちA面側の孔は鋳造後に穿たれたもので、型持と外型が接触したことによる孔ではない。内面では型持痕が両面にひと続きとなっており、型持痕は長辺2.8cm・短辺1.6cmの長方形で、長辺は同じ幅を保ながら直線的にA・B面を跨いでいる。このことから内型には長方形を呈した一山の型持が施されていたと見られる。

鐸身上半の型持孔は、A面では左右ともに第2横帯と左右上縦帯の交点付近に位置し、右側の型持孔は下端が第2横帯上に掛かっている。舞との距離は左側が6.4cm、右側が6.5cmである。左側の型持孔は外面から見ると円形で、内面には高さ2.1cm・幅1.4cmの長方形を呈した型持の痕跡がある。右側型持孔の内面では型持痕の形状を留めていない。型持孔の大きさは、左側が高さ0.6cm・幅2.0cmで、右側が高さ0.5cm・幅1.7cmである。

B面では、湯向り不良によって左右の型持孔が不整形になっている。内面においても、辛うじて右側で高さ1.9cm・幅1.6cmの長方形を呈した型持痕の一部が観察できる程度である。いずれも第2横帯と左上縦帯の交点付近に位置し、左側の型持孔は下端が第2横帯上に掛かり、右側は界線に接している。舞との距離は、左側が5.8cm、右側が6.3cmである。型持孔の大きさは、左側が高さ2.1cm・幅1.1cm、右側が高さ1.6cm・幅1.5cmを測る。

裾の型持孔は、A・B面に2ヶ所ずつ台形状の食い込みが認められる。A面は左側が高さ0.6cm・幅2.0cm・左鍔との距離2.6cm、右側が高さ0.5cm・幅1.7cm・右鍔との距離3.45cmである。内面は型崩れによって型持の痕跡を留めていない。B面は左側が高さ0.5cm・幅2.2cm・左鍔との距離2.5cm、右側が高さ0.4cm・幅2.1cm・右鍔との距離2.8cmである。内面は、A面同様に型持の痕跡が認められず、本来の形状等を知ることはできない。

鑄型の食い違い 舞面の合わせ方を見ると、A面に対してB面が0.1~0.2cm程度左にズれており、横方向から観察すると、舞面はA面に対してB面が僅かに下がっている。このズレが、B面の鉢頂

部周縁と右鰭に段を生じさせる結果となった。

鋳上がり 湯回りが悪く欠孔が生じたところは、B面の舞に1ヶ所、B面鐸身に4ヶ所認められる。表面が瘤む「ひき」は、鈕や鰭の付け根のほか、鐸身では大小の瘤みが広い範囲で観察される。特にA面の右側型持孔上部やB面第3横帶右側付近の瘤みは大きい。

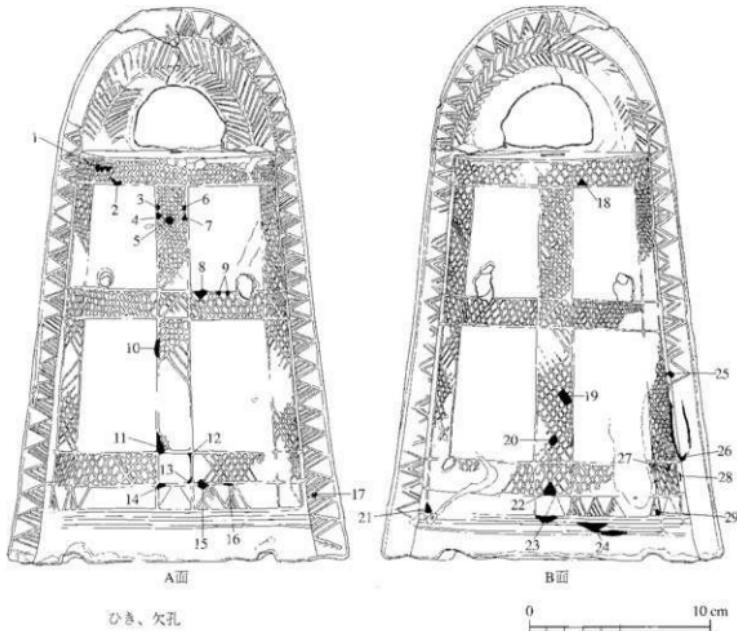
軟X線写真によれば、舞面の瘤み部分や鐸身A・B面の下半部でかなり薄くなっていることがわかる。また、全体的に鋳造時の気泡が多数の瘤となって残っており、決して鋳上がりが良かったとは言い難い状況である。

范傷 特に大きな傷は無いようであるが、A・B面とも細かい范傷が多く認められる。

A面には17ヶ所で范傷が観察できる。1・2は第1横帯左側にある傷で、1は斜格子文の目が潰れ、2は横帯の下界線から斜格子の平行斜線に延びている。3～7は中上綫帯に生じた傷である。

3・4・6・7は左右の界線に沿って膨らみを持ち、5は斜格子の目が潰れたものである。8・9は第2横帯の上界線に沿った膨らみで、斜格子の目が潰れている。

10・11は中下綫帯にある。10は左側の界線がふくらんだ傷、11は左側の界線と第3横帯上界線の交点で生じた膨らみである。12・13は第3横帯と綫帯が切り合った界線の隅にある。14～16は第3横帯と下辺横帯の界線に沿った傷で、下辺横帯側にやや膨らむ。17は右鰭の付け根近くに生じた傷



第65図 12号鋸の鋳造状態

で、隣接する鋸齒文の交点にある。

B面では12ヶ所で范傷が確認される。18は第1横帯の下界線付近に生じた傷で、斜格子文の目が潰れている。19・20は中下縦帯の斜格子文間にあり、20は特に盛り上がっている。21は左下縦帯から伸びた界線が下辺横帯下界線に達する部位に生じた傷である。22・27・28は第3横帯内にある傷で、22は特に大きくなっている。23・24は下辺横帯下界線間に生じた膨らみである。25は鱗の付け根で小さく膨らんでいる。26は右下縦帯の右側界線が膨らんで伸び、第3横帯の上界線付近でやや細くなっている。27は下辺横帯に伸びた右縦帯の内側界線と下辺横帯下界線の交点に生じた傷で、鋸齒文内に充填された平行斜線文の下端部を潰している。

(山崎 修)

13. 13号鐸 [図版92~99・写真図版100~104・303~305]

型式 外縁付鉢2式

文様構成 四区袈裟襷文

同范銅鐸 下坂鐸

法 量	総 高	44.5cm	最大幅	26.9cm	重 量	5.62kg
	舞長径(A面)	— cm	舞長径(B面)	— cm	舞短径	12.5cm
	裾長径(A面)	23.6cm	裾長径(B面)	23.0cm	裾短径	17.4cm

鉢 菱環と外縁よりなる外縁付鉢である。高さは13.0cm、幅と鉢孔の大きさは破損のため不明である。文様がはっきりせず破損もあるため各部の大きさは不明な点が多いが、菱環の厚さは中央部で0.8cm・左端1.3cm・右端1.2cmである。外縁はA面で幅1.7cm、B面で幅2.3cm、厚さは0.3~0.4cmである。A面では外縁の内側に三日月形文様帯があり、幅0.4~0.5cmである。

文様はA面では外縁左側に内向する鋸齒文Rが僅かに見られる。菱環外斜面は中央部に三日月形文様帯の界線があり、その内側にも外斜面を分割するように界線が入る。内斜面には綾杉文の軸線とも思われる界線が3~4条見られ、一番内側のものに僅かに平行斜線文しが観察できる。

B面は外縁中央部から右に内向する鋸齒文L、左に内向する鋸齒文Rが対称に配されているものと思われる。中央部の鋸齒文Lは、右辺に平行に線を加え平行斜線文Rを入れた変則的なもので、この左側から鋸齒文がRに変わる。菱環外斜面は綾杉文の軸線と見られる界線が2条あることがわかり、右側には綾杉文Dが入っているのが観察できる。

鐸身 高さはA面31.2cm、B面31.4cm、厚さは0.35~0.45cmである。身は舞から裾部にかけてやや外反する。外反率(舞・裾線からの最深点÷舞から裾の長さ×100)はA面側で1.97% (0.6÷30.5×100)、B面側で1.45% (0.45÷31.1×100)である。

A面の文様は、四区袈裟襷文で横帯が縦帯に優先するものである。文様は右上縦帯が大きな損傷を受けているが、その他は比較的良く残っており、第1横帯は幅2.5cm、第2横帯は幅2.5cm、第3横帯は幅2.6cm、左上縦帯は幅2.7cm、左下縦帯が幅2.8cm、中上縦帯が幅3.0cm、中下縦帯は幅3.15cm、右上縦帯が幅2.9cm、右下縦帯が幅3.2cmである。

各Xの大きさは、上左Xが上辺4.5cm・下辺5.5cm・高さ6.7cm、下左Xが上辺5.9cm・下辺6.5cm・高さ7.45cm、右下Xが上辺5.8cm・下辺6.5cm・高さ7.4cmである。横帯の界線は2または3条で縦帯や下辺横帯とは直接接していない。縦帯の界線は3条で、中上縦帯や右下縦帯では下向きの綾杉

文が入っている。

横帯・縦帯の中には斜格子文が充填されているが、両者で斜格子文が交差する角度に違いが見られる。また、下辺横帯は幅2.2cmで、中央部から左側に鋸歯文L、右側に鋸歯文Rが左右対称に配されている。下辺横帯下界線は3条である。

B面の文様は、四区袈裟摺文で横帯が縦帯に優先するものと見られる。文様左上縦帯と右下縦帯が損傷を受け観察できないが他の部分は良く残っている。第1横帯は幅2.6cm、第2横帯は幅2.5cm、第3横帯は幅2.5cm、左下縦帯が幅3.1cm、中上縦帯が幅2.9cm、中下縦帯は幅3.1cm、右上縦帯が幅2.7cmである。

各区の大きさは、上左区が上辺は不明だが、下辺は4.9cm・高さ6.7cm、上右区が上辺5.4cm・下辺5.7cm・高さ6.6cm、下左区が上辺5.3cm・下辺6.1cm・高さ6.9cmである。横帯の界線は2または3条で縦帯や下辺横帯とは直接接していない。

縦帯の界線は3条で、僅かに見られるものも含め、いずれも下向きの綾杉文が入っている。横帯・縦帯の中には斜格子文が充填されており、両者で斜格子文が交差する角度に違いが見られる。また、下辺横帯は幅2.4cmで、中央部から左側に鋸歯文L、右側に鋸歯文Rが左右対称に配されている。下辺横帯下界線は3条である。

裾端部はA面側中央部は丸くなっているが、その他の部分は外傾する面をなしている。また、A面右側鰐付近は下端が裾端部より窪んでいる。

舞 舞は短径が12.5cmとやや大きく、少し丸味のある印象を受けるが、舞の扁平率は破損が著しいため算出することができない。舞の中央部には僅かに0.1cm程のバリがあり、盛り上がっている。舞面が傾斜する肩下がりはA面が0.6cm、B面は0.3cmである。

鎧 幅はA面で左肩1.8cm・左縦2.0cm・右肩1.4cm・右縦2.0cm、B面は左肩1.5cm・左縦2.2cm・右肩1.9cm・右縦2.1cmである。文様はA面左側下部で鋸歯文R、B面右側下部で鋸歯文Lが僅かに観察できる。

内面突帶 鎧からの高さ2.7~3.3cmのところに、幅1.3~1.4cm・高さ0.55~0.6cmの突帶が1条巡っている。横断面形は台形状を呈している。

型持 舞は不明な点があるが1個は確認でき、鐸身上半にはA・B両面とも2個ずつ、裾部にもA・B両面とも2個ずつの現状で計9個の型持がある。

舞の型持孔はA面側は長さ1.4cm・幅1.2cmの方形である。B面は欠損のため不明である。

鐸身上半の型持孔はA・B両面とも左上区または右上区の下半部で、左右縦帯の界線に接するか近い位置にある。A面左側の型持孔は内面から見ると楕円形を呈しており、高さ2.0cm・幅1.5cmである。A面右側は変形しているが、楕円形を呈しており高さ1.8cm・幅2.3cmである。B面左側の型持孔は一部変形しており、高さ2.0cm・幅1.9cmの楕円形を呈する。B面右側は不整な円形を呈し、高さ2.3cm・幅2.1cmである。

裾部の型持はいずれも上辺がやや短い方形を呈しており、A面左側は高さ1.4cm・幅1.5cm、右側は高さ1.2cm・幅1.5cmである。B面左側は高さ1.1cm・幅1.5cm、右側は高さ1.0cm、幅は1.6cmである。

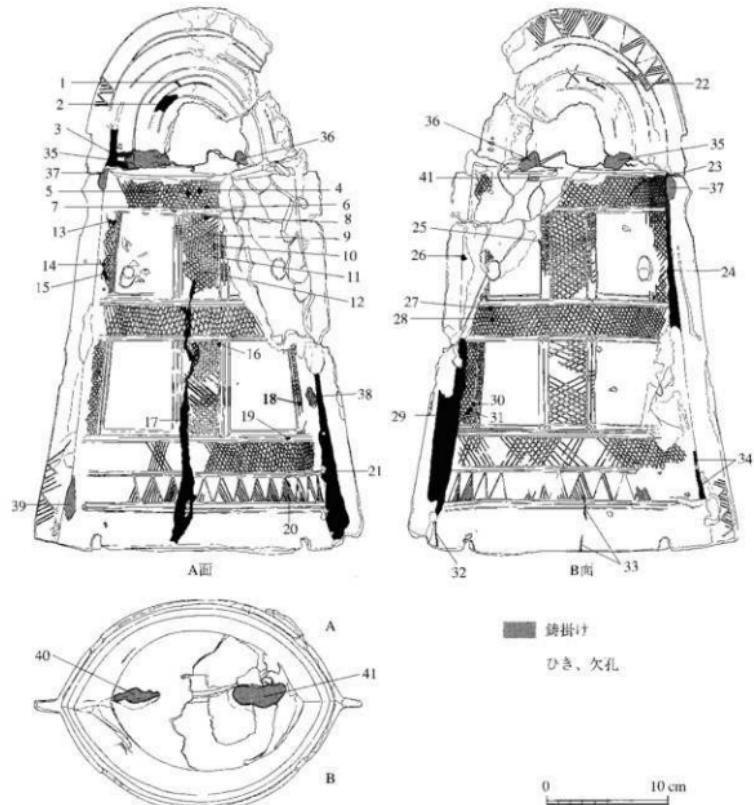
錆上がり 湯回りが悪く欠孔として残ったところは、舞のB面錆に3ヶ所ある。鐸身はA面に小さなものがあり、左上区・左上縦帯・右下縦帯・第3横帯右に合わせて5ヶ所が認められる。B面

は第1横帯右に小さいものが17ヶ所ある。

表面が窪む「ひき」は舞上面に現状で6ヶ所、A面は鉢に4ヶ所、鱗を含め鐸身に13ヶ所、B面は鉢に7ヶ所、鱗を含め鐸身に21ヶ所ある。これらは小さなものが多いが、A面右下縦帯やB面下辺横帯右から鱗にかけて比較的大きな「ひき」がある。また、後述するように左右の鉢脚部に鉄掛けがあることから、この部分にも「ひき」があったものと思われる。

また、軟X線写真によれば、厚さに不均等な部分はほとんど認められず、気泡状の鬆は細かいものが比較的多く見られる。

范傷 A面では鉢の菱環内斜面に2、鉢脚に3がある。鐸身は顯者なものとしては中上縦帯から下辺横帯を貫き裾に至る17があるが、この他にも斜格子文内(4~6・8~16)や界線(7・18・



第66図 13号鐸の铸造状態

19)・下辺横帯(20)にも見られる。また、21のように右側縫の付け根部分にも膨らみが認められる。

B面では鋸身の斜格子文内(23・27・28・30・31)、下辺横帯や裾部(32・33)に比較的小さい範囲がある。また、縫の付け根部分は左側に29、右側に24・34などの膨らみが認められる。

鋸掛け 鋸は左右の脚部(35・36)にあり、鋸脚が鋸身に取り付く舞内面の「ひき」(40・41)にも鋸掛けが行われている。

A面は鋸身第1横帯左に37、右下縫帶に38、下辺横帯左に39が見られる。このうち39は下辺横帯下界線部分に径0.4cmの足掛孔を持っており、縫部分には工具による刺突痕が見られる。この鋸掛けは内面突帯部分にも及び一部が盛り上がっている。

B面は第1横帯右側の縫の付け根部分にA面でも見られた37が覗いている。(角田徳幸)

14. 14号鋸 [図版100~104・写真図版106~109・306~308]

型式 外縁付鋸1式

文様構成 四区袈裟捺文

同范銅鋸 加茂岩倉33号鋸

法量	総高	31.1cm	最大幅	19.6cm	重量	1.98kg
舞長径(A面)	—cm	—cm	舞長径(B面)	—cm	舞短径	7.5cm
裾長径(A面)	16.5cm	裾長径(B面)	16.9cm	裾短径	11.4cm	

鋸 菱環と外縁よりなる外縁付鋸である。鋸は外縁の一部に欠損があり、高さは現状で8.0cm、幅13.8cmを測る。孔は高さは3.8cm、幅5.4cmで、舞側に不整形な大きな甲張りが残っている。菱環は界線がはっきりしないので不明な点もあるがA面で幅2.6~2.8cm、B面で幅1.9~2.4cm、厚さは中央部で0.5cm、右端0.9cm、左端で0.8cmである。外縁も不明な部分が多いが、A面右側で幅1.3cm・厚さ0.3cmである。

文様は全体に判然としないところが多いが、A面は外縁左側に内向する鋸歯文Rが僅かに見られ、菱環外斜面の中央部から左側には綾杉文Dの一部が観察できる。菱環内斜面については現状では全く文様を観察することはできない。B面では中央部付近に内向する鋸歯文Lが見られるが、現状では菱環には文様を見ることができない。

鋸身 高さはA面23.8cm、B面23.5cm、厚さは0.3~0.35cmである。身は舞から裾部にかけてやや外反する。外反率(舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100)はA面で1.54%(0.35÷22.8×100)、B面で1.72%(0.4÷23.2×100)である。

A面の文様は、四区袈裟捺文と思われるが、第2横帯・第3横帯・右上縫帶・右下縫帶と下辺横帯内に充填された斜格子文の一部が僅かに見える程度である。下辺横帯には鋸歯文しが入っていることがわかり、右側の縫付け根部分に下辺横帯下界線と見られるものが2条観察できる。

B面の文様は、四区袈裟捺文と見られるが、不明な部分が多い。文様は第1横帯・第2横帯・第3横帯・下辺横帯と、左下縫帶・中上縫帶・右下縫帶の一部が僅かに観察できる。第1横帯は幅2.0cm、第2横帯は幅2.1cm、第3横帯は幅2.1cm、第1横帯と第2横帯間の高さは4.6cm、第2横帯と第3横帯間の高さは5.4cmである。横帯と縫帶は斜格子文が充填されているが、見えない部分が多い。下辺横帯は中央部や左側で鋸歯文Rが施されていることが確認でき、下辺横帯下界線は3条で

ある。

損傷部 損傷部は欠損している部分が多く旧状を留めていないが、A面左鰐端部付近には「ひき」が見られる。

舞 舞はアーモンド形を呈しているが、扁平率は舞が損傷を受けているため算出できない。舞の中央部には高さ0.7~1.2cmの大きな甲張りがある。また、舞面が傾斜する肩下がりはA面が0.5cm、B面が0.4cmである。

籠 篦はA面で左肩1.6cm・左裾1.8cm・右肩1.2cm・右裾1.6cm、B面は左肩1.4cm・左裾1.4cm・右肩1.5cm・右裾1.5cmである。文様はA面の右側には内向する鉤歎文しRが入っているが、左側は不明である。B面は右側に内向する鉤歎文しが施されているが、左側は不明である。

内面突帯 篦からの高さ1.1~1.4cmのところに、幅0.6~0.9cm・高さ0.1~0.2cmの突帯が1条巡っている。横断面形は低い台形または頂部の丸い三角形状を呈しており、B面側では2ヶ所程途切れている部分がある。突帯上面は特にA面側で上面に平坦面ができる、使用に伴う磨滅と見られる。

型持 舞に1個、籠身上半にはA・B両面とも2個ずつ、裾部にもA・B両面とも2個ずつの計9個の型持がある。

舞の型持孔は1山である。内面より見るとA面右側、B面左側の長辺が不整形になっているが長方形を呈しており、長辺2.1cm・短辺1.4cmを測る。型持中央部には途切れてい張りが見られる。

籠身上半の型持孔の位置はA面では不明であるが、B面では第2横帯にかかっている。A面左の型持孔は湯回りが悪く不整形になっているが、内面では両短辺を僅かに留めており、高さ1.6cm・幅1.1cm程度であったと見られる。A面右は内面では長方形を呈しており、高さ1.7cm・幅1.1cmである。B面の型持孔は内面ではともに長方形で、左は高さ1.7cm・幅0.9cm、右は高さ1.5cm・幅1.3cmである。

籠部の型持は、A面左では内面に上辺が僅かに残っており幅0.9cmはあることがわかる。右は内面では長方形で高さ0.7cm・幅1.3cmである。B面は右側のものが不整形になっているが、内面ではともに長方形を呈しているものと見られ、左は高さ0.9cm・幅1.3cm・右は高さ0.5cm・幅1.2cmである。

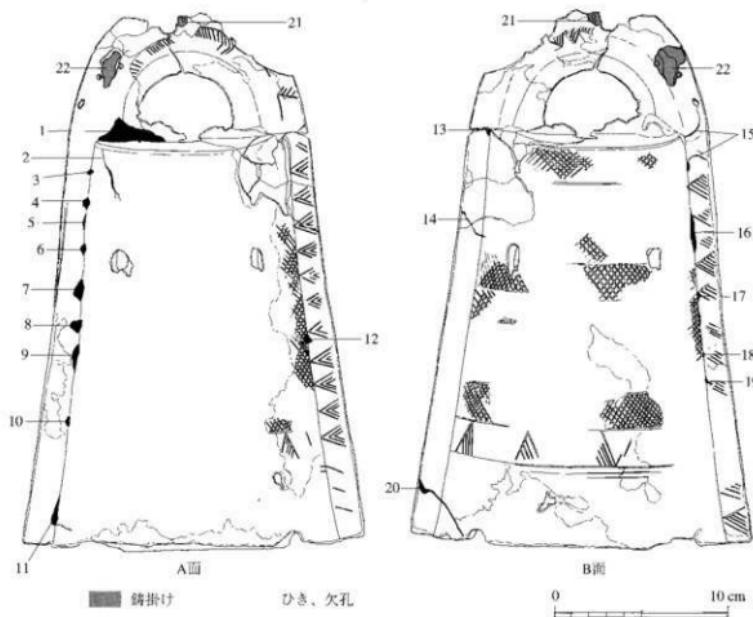
鑄上がり 湯回りが悪く穴として残ったところは、籠は欠損があり不明な点もあるが、現状で1ヶ所あり、軟X線写真によれば鑄掛けが2ヶ所に認められることから、鑄造時には計3ヶ所あったものと見られる。籠身も欠損のため不明な点があるが、現状ではA面で2ヶ所、B面では4ヶ所が確認できる。

表面が窪む「ひき」はA面右の籠脚部、B面左右の籠脚部や右鰐、籠身裾中央部などに見られる。

また、軟X線写真を見ると、A・B両面とも内面突帯より上の籠身中央部分に厚さが薄い部分が認められる他、気泡状の膨らみもさほど顕著ではないものの見られる。

范傷 A面では籠脚部左側に比較的大きな膨らみになっている1が認められる。籠身は左上部分に斜め方向に延びる2があり、左鰐籠の付け根部分には小さな膨らみ(3~11)が並び、右側籠の付け根にも12が見られる。

B面で顯著なのは、籠身籠左側の型持から左上方の籠にかけて延びる比較的深い范傷(20)である。この他には左側籠の上方に13・14、右側籠の付け根付近を中心にして15~19がある。



第67図 14号鐸の铸造状態

鉄掛け 軟X線写真によれば、鈕に2ヶ所が認められる。中央部にある21は破損により鉄掛け部が脱落しているが、湯回り不良により空いた穴が確認できる。これに隣接する位置には径0.3cmの足掛り孔が1つ残っており、周囲は鉄掛けによってやや盛り上がっている。22はA面から見ると鈕の左側にあるもので、铸造時の穴に隣接して足掛り孔が2つ確認できる。足掛り孔はともに径0.3cmの大きさである。

(角田徳幸)

15. 15号鐸 [図版105~112・写真図版111~115・309~310]

型式 外縁付鈕2式～扁平鈕1式

文様構成 二区流水文

同范銅鐸 伝淡路鐸（兵庫県尼崎市本興寺蔵）

法量	総高	最大幅	重量
舞長径(A面)	15.3cm	舞長径(B面)	15.2cm
裾長径(A面)	25.0cm	裾長径(B面)	24.3cm

鈕 文様構成は外縁・菱環文様帶・内縁からなる扁平鈕式である。高さ13.0cm・幅15.3cm・鈕孔は現状で高さ5.3cm・幅4.6cmを測る。菱環径高（舞から菱環後頂部までの高さ）はA面で8.0cmで、菱環稜頂の位置（菱環稜頂高÷鈕高×100）は61.5% ($8.0 \div 13.0 \times 100$) で、3対耳扁平鈕式流水文

では外縁付鉢2式横型流水文より低く50%とほぼ真中にくることが指摘されているが（難波1991）、むしろ外縁付鉢2式（例：川島神後鐸58.7%・氣比2号鐸54.1%・桜ヶ丘3号鐸51.2%）より高い位置にあることになる。鉢孔も本来の高さは不明だが、幅が広いことから比較的大きいものと思われる。

A面は、外縁第1文様帯は中央で幅1.7cm・厚さ0.35cm、左肩で幅2.0cm・厚さ0.3cmである。右下端より4番目から6番目までの3個は鋸歯文Lで、その他のは鋸歯文Rで飾る。外縁第2文様帯は中央で幅1.8cm・厚さ0.35cm、右肩で幅1.7cm・厚さ0.3cmで、連続渦文Sを飾る。連続渦文の単位文の端が、渦巻きの中心で連結している第II種のものとそうでない第I種があり、統一が取れていない。例えば右端から2番目は第I種（9）、3・4番目は第II種である（7・8）。右製錬型を用いてつくられた扁平鉢式四区製波捺文と流水文銅鐸を飾っている連続渦文は第I種であることが指摘されており（難波1984）、本鐸は例外的なものとなる。

菱環と外縁との間には三日月文様帯があり、ここから3条の中軸線が内縁まで達している。

菱環は中央が幅2.0cm・厚さ1.0cm、右端が幅1.9cm・厚さ1.4cmで、被杉文D||Cを飾る菱環文様帯として独立している。断面形は内・外縁との境は比較的明瞭で、稜頂の外側が垂直気味に立ち上がっている。

内縁には中央に双頭渦文2単位と鉢脚側には外向き鋸歯文を左右に2単位ずつ配していたようである。鋸歯文は右側が鋸歯文R、左側が鋸歯文Lで、内縁の文様は左右対称になっている。中央の双頭渦文の下端が切れていることから、鉢孔が本来より大きくなっていることがわかる。

B面は、鉢の周縁には1段下がった部分が巡るが、これは後述するように錫型の対応にズレが生じてできたものであり、錫型に彫り込まれたものではない。このため現状の鉢高は13.3cmであるが、本来は12.9cmと推定される。

B面では、外縁第1文様帯の幅が中央1.9cm・右端1.7cm・左端1.9cm、左側と中央部分は鋸歯文Lで右側は鋸歯文Rとなっている。外縁第2文様帯は幅1.7cmでS連続渦文を飾り、さらに内側には三日月文様帯があり、現状では僅かに残るだけであるが、三日月文様態には三角形が充填されていたようである。この面でも三日月文様帯から内縁までは4条の中軸が貫いている。

菱環文様帯は幅が中央1.7cm・左端1.7cm・右端1.9cmでD||C被杉文を飾る。断面形はA面と同じ特徴を持つ。内縁は右側鉢の付け根で幅1.2cmで内側に双頭渦文を6単位配していたと想定される。右側の鉢脚下端では双頭渦文の内側に幅0.5cmの無文の部分がある。鉢孔の現状の幅が本来の幅で、内縁の幅が均等であるとすれば鉢孔高は4.5cmとなる。鉢における比率は34%で、3対耳扁平鉢式流水文が22%と小さくなる傾向があるが（難波1991）、菱環部稜高と同様大きくなっている。鉢孔が大きいことと、菱環部稜高が高いことは連動したものである。

鐸身 鐸身の部分も破損が著しく破片となった部分や欠損した部分があり、特にB面では内側にめり込んでおり、表面の剥落した部分もある。鐸身は直上から押し潰され、断面形は本来の形状より扁平になり、幅が広くなっている。またA面左縁は「く」の字に折れ曲がり、本来の形態を失っている。

現状での身高はA面33.4cm・B面33.0cmで、裾幅はA面25.2cm・B面24.4cmで0.8cm異なっている。厚さは上半が0.2~0.3cmであるが、下半に下がるほど厚くなり、裾部分では0.5~0.7cmとかなり厚くなっている。A面下部では右側が左側より厚く、B面では左側が厚くなっている。これは

鋳型の対応がズレているため、外型と内型の対応もズレることとなり、下半ほど隙間が広くなつたものと思われる。また、A面の右側とB面の右側が厚いことから、内型がA面の左側にズレていたと推定される。

文様の鋳上がりがA・Bとも左右で極端に異なるのも、鋳型のズレによる厚みの違いが要因の一つであったものと思われる。

A面左側の側線は本来の形から大きく崩れているが、右側の側線は比較的原形を保っており、同範銅鐸などからも身は反りを持っていることがわかる。

A面文様構成は、横帯によって区画された二区横型流文文である。現状では上端の横帯が不鮮明で確認できないが、身上線と流水文とに幅1.3cmの間があり、同範銅鐸ではここに横帯があり、鋸歯文ないし三角形文のいずれかが飾られていたことから、15号も同様であったと考えられる。

流水文は上区・下区とも左半分が不鮮明になっているが左右対称とすれば、6c4x横型流文文の上段に、4c1x複合縦型流文文を左右に2個組み合わせた8段構成となる。また、3つを組み合わせて出来るx反転部の下端で中央のE反転から延びる線と繋ぐことで一体化しており、全体としてはx反転部が9個ある8c9xとなる。同様の流水文の型は兵庫県豊岡市氣比1号鐸の両面の上区でも使用されている。左右の反転部はE反転になっている。

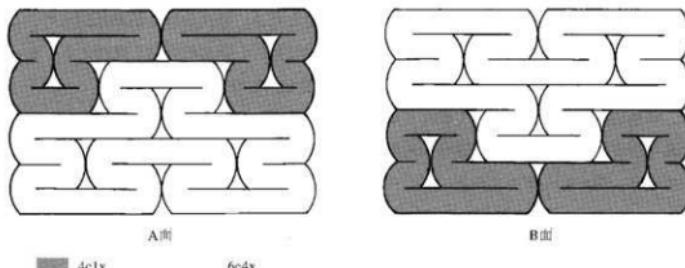
第2横帯は幅1.8cmで文様が見える部分は鋸歯文Rである。下辺横帯は流水文下端から0.6cm下に上界線があり、幅2.5cmで一部しか残っていないが鋸歯文Rが飾られる。下辺横帯の下には3条の界線がある。

B面の文様構成は、上端と中央に横帯をもつ二区流水文である。第1横帯は幅1.5cmで鋸歯文Rを飾る。第2横帯は幅3.3cmで連続渦文を2帶配しているようである。

流水文は上区・下区ともA面同様に6c4xに4c1xを2個組み合わせた8c9xであるが、天地が逆になつており4c1xが6c4xの下に配されている。

下辺横帯は幅2.5cmで、流水文の下端から0.55cm下に上界線がある。下辺横帯には鋸歯文が飾られるが、右半分が鋸歯文R、左半分が鋸歯文Lになっており、左右対称の配置になっている。下辺横帯の下には三角形文の上下に2条の界線を組み合わせている。

A・B面では第2横帯の上下幅に1.5cmの差があるが、文様部の上下高はほぼ同じで、文様構成も同じである、このため第2横帯幅の広いB面では、条線数はそのままで、流水文の上下幅を上下



第68図 15号鐸流文文の復原

区とも狭くすることで対応している。

舞 長さはA面15.3cm・B面15.2cmで、短径は10.1cmを測る。現状での舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）は、A面で66.01%（ $10.1 \div 15.3 \times 100$ ）である。

舞面には「ひき」による捺みがいくつか見られる。A面側に大きな捺みが集中している。これらの捺みには僅かに器壁がある程度で、孔になる寸前のものがある。このようにA面側に鋳造欠陥が見られるのは、鋳型の合わせ方がズレていたために、A面がB面に比べて厚くなつたことが影響したものと思われる。このため、鈎脚間に段ができるたり、A面の型持は外型との間に隙間ができる溶鋼がまわったため孔が小さくなっている。B面では左側の鈎の付け根に捺みがあり、ここには内面にも窪みがある。

鈎 A面では幅が左肩で2.2cm、左裾で2.4cm、右鈎耳は欠損しており右肩の現状1.2cm、右裾で2.0cmである。B面では右肩で1.8cm、右裾で2.7cm、左鈎耳は欠損しているが左肩の現状1.6cm、左裾で2.3cmを測り、左右で鈎幅が異なっていることがわかる。鈎耳は現状では残っていないが、脚部の条線が見られることから、身上端の位置には半円形鈎耳が1対あったと思われる。脚の条線は複線になっている。鈎耳の脚部と鈎の鋸歯文は重なっていないことから、鈎耳脚部を彫った後に重ならないように、鈎の鋸歯文を彫ったと考えられる。

A面左鈎耳の下に接する鋸歯文は半鋸歯文になっている。鈎の下端にはいずれも2条の下端線がある。左右とも鋸歯文Rが充填される。本鐸A面の鋸歯文は鉢外縁第1に鋸歯文しが2個あるが、それ以外では鋸歯文Rで統一されていた可能性がある。また、B面の鋸歯文は一部異なる部分もあるが、外縁第1・鈎・下辺横帯とも左右対称になるよう鋸歯文のR・Lを配置している。第1外縁と鈎の鋸歯文も鈎耳を境にRとLを切り替えており、ある程度の規則性を認めることができる。

内面突帯 1条突帯である。内面突帯は身下端から4.3cm上にあり、上下幅2.2cmで、高さ4~6mmで舞側が高い、断面がやや丸みのある台形である。上面には0.4cmほどの平坦面があり、舞側が高く、正立させると内傾していることになる。平坦面の稜線も下縁側がシャープな印象を受ける。この面は鈎の付け根付近を除いて広い範囲に見られるが、中央付近ほど幅広で明確である。この面が使用痕である可能性は高い。

型持 身の上半の型持孔は、流水文の5段目と6段目にまたがる位置にあり、反転部を避ける位置にある。内面からの観察ではすべて円錐台形で、A面左は幅1.6cm・高さ2.0cmである。また、いずれも鋳造後に線を加工している。身裾の型持はA面左側では幅2.0cm・高さ2.7cmで細長い。舞の型持は現状では小さな孔しか開いていないものもあるが、内面からの観察では2個あり、A面は幅1.4cm・長さ1.5cm、B面で幅1.6cm・長さ1.6cmで隅円方形である。

鋳型の食い違い 鋳型は鋳造時の合わせ方にズレがあり、舞の肩で上下に4mm程度、A面が高くなっている。前述したように、このためB面側が3mmに対し、A面側が5mmと舞のA面側が厚くなり、型持の孔になる部分にも溶鋼が回っている。A面舞の型持はほとんど浮いた状態になっていたことがわかる。また、鈎脚の間は軽い段が付く。また、左右にもズレがあり、舞ではA面が右側に0.3cm程度ズレている。

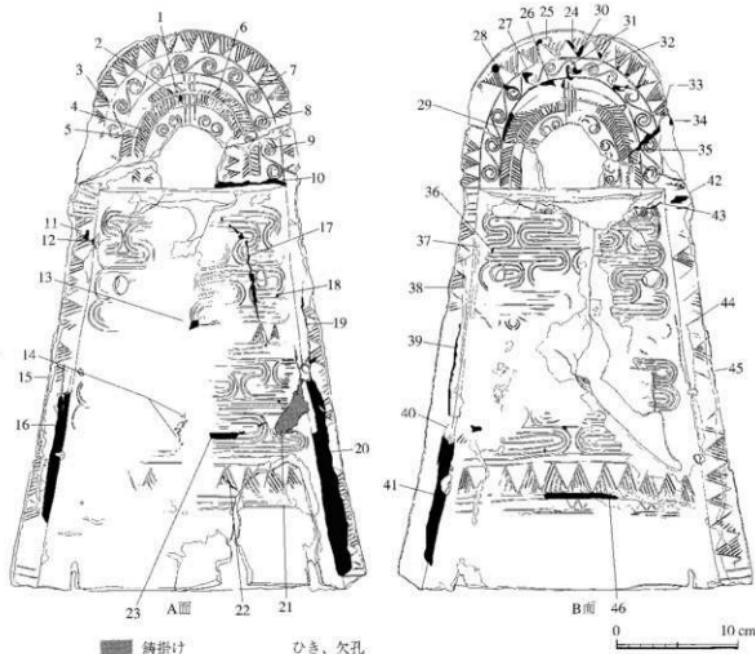
鏽上がり 文様の不鮮明な部分は、A面では身の左半分はほとんど文様が鋳出されていない状態である。B面では下区左半分とこの部分に接する鈎の文様はほとんど鋳出されていない。「ひき」による窪みは舞に多く見られる。前述のとおり、鋳型のズレによって舞のA面側は厚くなつてお

「ひき」による疵みが発生している、疵みの底は僅かに溶銅がまわったため、孔にならなかつたものもある。鋤でもA面の外縁の左端は面的に薄くなつており、B面でもこの面の裏にあたる部分は低くなり文様が鋲出されていない。

また、A面裾の下端の平坦面には「ひき」による疵みが見られる。このことから裾下端が鋳型には彫り込まれていなかつたことがわかる（難波1999・2000）。

范傷 鋳型の損傷による盛り上がりは、両面とも多く見られる。A面では鰐下半の身との付け根の部分に大きな盛り上がりが左右両方にある（16・20）。左鰐では身の方にも損傷が及んでいる。文様部にも上区には左側型持孔の内側に縱方向の范傷がある（17）。また、下区には流水文の条線間の欠損によって2.5cmの盛り上がつた部分がある（23）。鈕では綾杉文や鋸歯文の条線間（1～6）や右鈕脚の付け根が全体的に盛り上がつている（10）。

B面でも左鰐の身との付け根に大きな盛り上がりがある。右鰐にも同様の盛り上がりや段差があるが「ひき」によるものか范傷によるものか判断が難しい。右鰐鈎耳の脚の条線間も欠損して范傷となる（42）。第1横帯には右端に水平に延びる范傷があるが（43）、第1横帯は大半が破損しており、どの程度延びるか不明である。下辺横帯下界線の条線間にも幅5.7cmにわたり盛り上がりが見



第69図 15号鐸の铸造状態

られる(46)。錘B面には多くの范傷による盛り上がりがみられ、連続渦文や鋸歯文の条線や条線間の欠損によるものが多い(24・25・27・28・30・31・32など)、また、三日月文様帶の左端には大きな范傷となっている(29)。錘の右端から2個目の渦文から外縁まで達する盛り上がりがある。またこの傷の菱環部分には段差があり(35)、そこを境に綾杉文の条線がズレていることから、鋳型の補修があったものと思われる。

錘掛け A面に3ヶ所の錘掛けがある。下区文様部の錘側に比較的大きな錘掛けがある(21)、錘掛けに際しては足掛かりの孔を周辺に設けている。また中央部には極めて小さな錘掛けが2ヶ所並んでいる(14)。

補刻 3対耳扁平錘式流水文では補刻が頗るに見られるが、本鐸では錘掛けが行われている部分やそれ以外でも補刻が見られない。
(松山智弘)

16. 16号鐸 [図版113~117・写真図版117~120・311~313]

型 式 外縁付錘1式

文様構成 四区袈裟撲文

同范銅鐸 岐阜県 伝美濃國鐸(所在不明)

法 量	総 高	30.6cm	最大幅	18.55cm	重 量	2.26kg
	舞長径(A面)	10.6cm	舞長径(B面)	10.5cm	舞短径	7.7cm
	裾長径(A面)	15.4cm	裾長径(B面)	15.4cm	裾短径	11.8cm

錘 菱環と外縁で構成される外縁付錘である。A・B面とともに高さ7.8cm・幅13.2cmで、錘孔の高さは2.1cm・幅3.65cmを測る。菱環の幅はA面中央が2.6cm・左端2.8cm・右端2.6cm、B面中央が3.4cm・左端3.0cm・右端2.7cmである。

菱環内側の境界付近では錘孔端部にかけて段が生じ、A面では錘孔の周囲に幅広の押張りが巡っている。B面ではこうした張り出しが錘孔の右端脚部付近以外に認められない。これはA面とB面で菱環の幅が大きく異なることに起因しており、この部位について鋳型から湯のはみ出たバリでないことがわかる。こうした部分も含めて錘孔端部に整形・加工した痕跡は認められない。菱環後部の厚さは中央が0.6cm・左右錘脚部が1.0cmである。

A・B面の外縁には内向する鋸歯文しが充填されている。鋸や磨滅のため判定を確認することはできないが、A面の左右端部でいずれも鋸歯文Lとなっていることや、錘へと連続する鋸歯文の様子から、全てが鋸歯文Lとなっているものと思われる。

菱環の文様は、鋸や磨滅により不明瞭なところが多い。A面には稜を境にした内外斜面に、それ1段ずつ軸線を伴った綾杉文Cが施されている。B面外斜面は、軸線を境にして鋸歯文が対向して施されているように見える。ただ、外側が鋸歯文Rと認められるのみで、内側については判然としない。また、内斜面の文様は全く確認することができない。

錘身 高さはA面で22.1cm、B面で22.5cm、厚さはA面が0.15~0.3cm、B面が0.15~0.25cmである。側面から見ると舞から裾にかけて外反しているが、損傷のため外反率を計測できない。

錘身の主文様は、A・B面とも縦・横帯によって区画された四区袈裟撲文である。縦・横帯内に充填された斜格子文や界線は横帯が優先する。A面では磨滅等により上半部や左下端で文様の不明

瞭なところがある。B面は磨滅のほか損傷・欠損が著しく、右縦帯上、左縦帯下、第2・第3横帯の一部で文様が確認できるに過ぎない。

縦・横帯の幅は、A面の第1及び第2横帯が1.8~1.9cm、第3横帯が2.1cm、左上縦帯が1.35~1.4cm、左下縦帯が1.4~1.65cm、中下縦帯が2.2cm、右上縦帯が1.45~1.6cm、右下縦帯が1.6~1.7cmである。縦・横帯内に充填された斜格子は、横帯に比べ縦帯でその間隔が狭く、特に中央縦帯では左右の縦帯よりも密になっている。B面は、第2横帯が1.8~2.0cm、第3横帯が2.0~2.1cm、縦帯幅は左下縦帯が1.95cm、右上縦帯が1.9cmである。

縦横帯によって区画された各区の計測値は、A面上左区が下辺4.9cm・高さ5.5cm、上右区が高さ5.5cm、下左区が上辺5.0cm・下辺5.8cm、下右区が上辺5.2cm・下辺5.8cm・高さ6.0cm、B面下右区高さ6.3cmである。

下辺横帯は、A面が幅1.85~1.9cm、B面が1.8~1.9cmで、いずれも横帯内には鋸歯文Rが施されている。鋸歯文は、A面では右側に6つ確認できるが、B面では右端の1つが半うじて観察されるに過ぎない。鋸歯文に充填された平行斜線文は細く条数も多い。下辺横帯下界線は3条で、1~3条目の間隔はA・B面ともに0.5~0.6cmである。

裾端部は磨滅が著しく、特に中央付近ではA・B面ともに内面突帯との境界が不明瞭となるほどで、先端の断面が三角形状を呈している。

舞 舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）は、A面が72.64%（ $7.7 \div 10.6 \times 100$ ）、B面が77.33%（ $7.7 \div 10.5 \times 100$ ）である。A面とB面でのズレはほとんどない。両面の間には、鉢の内斜面から続く高さ0.9~1.3cmの鉢脚壁状のバリがある。鉢身内面裾端部の磨滅状況から見て、このバリに舌を吊した可能性が考えられたが、特に紐等によって擦れた痕跡は認められない。舞面の傾斜を示す肩下がりは、A面0.5cm、B面0.4cmである。

錐 錐の外線から連続する鋸歯文しが裾の端部まで施されている。錐幅はA面の左肩が1.2cm、左裾が1.65cm、右肩が1.6cm、右裾が1.6cm、B面左肩が1.4cm、左裾が1.6cm、右肩が1.1cm、右裾が1.6cmである。

内面突帯 据端部から0.3~1.0cmのところに、幅0.7~1.0cm・高さ0.15~0.35cmの突帯が1条巡っている。据端部までの距離が極めて短いのが特徴である。全体的に磨滅が著しく、A・B面の中央付近では特に薄くなっている。突帯は裾端部に向かって傾斜しており、断面形は三角形状を呈する。磨滅は舌によるものと見られ、かなり使い込まれた状況を示している。

型持 舞には1つ、鉢身上半にはA・B両面にそれぞれ2つずつの型持の痕跡が認められる。

舞の型持孔は、外面から見るとA・B面にそれぞれ1つずつの孔が認められるが、内面では型持痕が両面ひと続きとなった長方形を呈している。これは型持が1山であったことを示しており、鉢脚壁状に残ったバリによってA・B面が区分され、別々の孔に見えている。内面における型持痕の長辺は3.55cm、短辺は1.5cmである。

鉢身上半の型持孔は、A・B面ともに第2横帯と右上縦帯の交点付近にある。外面から見ると円形もしくは梢円形を呈しているが、内面では型持痕の長辺が概ね直線的になっている。孔の大きさは、A面左が高さ1.35cm・幅1.4cm、右が高さ1.3cm・幅1.4cmで、B面左が高さ1.3cm・幅1.2cm、右が高さ1.4cm・幅1.4cmである。内面における型持痕の大きさは、A面左が高さ1.5cm・幅1.3cm、右が高さ1.6cm・幅1.5cmで、B面左が高さ1.5cm・幅1.4cm、右が高さ1.5cm・幅1.5cmである。

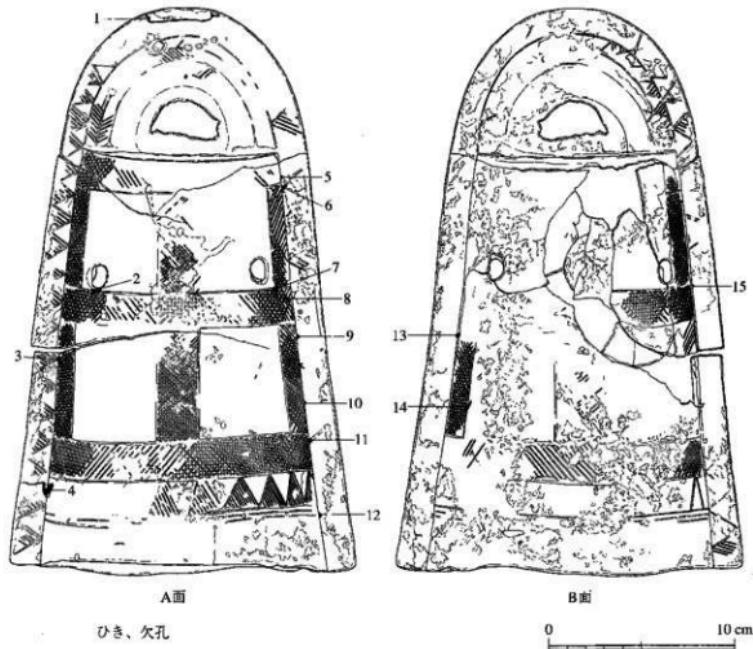
舞との距離は、A面左が5.85cm、右が5.55cm、B面左が5.3cm、右が5.75cmを測る。

鋤上がり 湯回りが悪く、鋤造時に欠孔が生じたところは、舞に2ヶ所とA面の鋤身に1ヶ所、B面の破損部分に1ヶ所その痕跡が認められる。

軟X線調査によると、鋤造時の気泡が小さな鱗となって器内に残っているものの、その数は比較的少ない。鋤掛けを施したようなところもなく、概して鋤上がりは良かったものと見られる。「ひき」は舞面のほか、紐の付け根やA面鋤身の上半部中央付近、内面突帯に当たる部位の外縁などに見られ、内面では内面突帯の付け根付近に認められる。また、横帯の界線に沿って浅く窪んだところがある。

範傷 範傷はA面の鋤に1ヶ所、鋤身に3ヶ所、鋤身と鱗の境に8ヶ所、B面鋤身に1ヶ所、鋤身と鱗の境に2ヶ所認められる。1は鋤の頂部で僅かに段となっている。2は型持孔直下にあり、7と同様に第2横帯の上界線が膨らんだ傷である。3～6・9～13・15は、鋤身から鱗にかけての傷で、3は綫帯の斜格子から鱗の鋸歯文頂部に至り、4は鱗の端部に及ぶ。5・6・9～13・15は鱗の付け根に生じた小さな傷である。

(山崎 修)



第70図 16号鋤の鋤造状態

17. 17号鐸 [図版118~122・写真図版121~124・314~316]

型式 外縁付鉢1式

文様構成 四区袈裟襷文

同范銅鐸 上牧鐸

法量	総高	30.0cm	最大幅	18.1cm	重量	2.10kg
	舞長径(A面)	11.1cm	舞長径(B面)	10.8cm	舞短径	7.7cm
	裾長径(A面)	15.7cm	裾長径(B面)	15.8cm	裾短径	11.6cm

鉢 菱環と外縁よりなる外縁付鉢である。高さは7.9cm、幅13.1~13.3cm、鉢孔の高さは3.75cm・幅5.3cmを測る。菱環はA面で幅2.4~2.8cm、B面で幅2.3~3.0cm・厚さは中央部で0.85cm・左右端1.3cmである。外縁は菱環との境が不明な部分があるが、A面で幅1.2~1.5cm、B面で幅1.3~1.6cm、厚さは中央部で0.6cm、左右端で0.5cmである。鉢孔部はA面左側・B面右側の鉢脚部にやや膨らみがある。

文様はA面の外縁中央から左側に内向する鋸歯文Lが見られる。菱環は外斜面の中央から左側に平行斜線文IとRを上に組み合わせた軸のない綾杉文C状の文様があり、内斜面には内向する鋸歯文Rが見られるが、その頂部から外形線が突き出し、恰も鋸歯文が対向しているかのような文様が施されている。

B面は外縁には内向する複合鋸歯文Lが入っており、菱環は外斜面中央から右側に外向する鋸歯文Lがあるが、内斜面では文様は観察できない。

鐸身 高さはA面21.4cm、B面22.1cm、厚さは0.35~0.4cmである。身は舞から裾部にかけてやや外反し、その外反率(舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100)はA面側で1.4% (0.3÷21.4×100)、B面側で1.38% (0.3÷21.8×100)である。

A面の文様は、四区袈裟襷文で横帯が縦帯に優先するものである。文様は全体によく観察できるが、第3横帯と下辺横帯の中央部に不鮮明な部分がある。第1横帯は幅1.7cm、第2横帯は幅1.8cm、第3横帯は幅1.9cm、左上縦帯は幅1.7cm、左下縦帯は幅1.75cm、中上縦帯は幅1.9cm、中下縦帯は幅1.95cm、右上縦帯は幅2.0cm、右下縦帯は幅1.8cmである。

各区の大きさは上左区が上辺4.2cm・下辺4.8cm・高さ5.8cm、下左区が上辺5.2cm・下辺5.9cm・高さ5.4cm、上右区が上辺4.3cm・下辺4.8cm・高さ5.8cm、下右区が上辺5.0cm・下辺5.7cm・高さ5.5cmである。横帯と縦帯の中には斜格子文が充填されているが、斜格子の交差角度は縦帯に対し横帯が鋭角になっている。

下辺横帯は幅1.7cmで、底辺の幅が2.0~2.5cmと大振りな鋸歯文Rが見られるが、左端には鋸歯文Rの半単位文が入っている。下辺横帯下界線は2条である。

B面の文様は、四区袈裟襷文で横帯が縦帯に優先するものである。文様は鐸身中央部が不鮮明になっており、中下縦帯と中上縦帯・第1~3横帯下辺横帯の一部は見えない。第1横帯は幅1.8cm、第2横帯は幅1.8cm、第3横帯は幅1.9cm、左上縦帯は幅1.9cm、左下縦帯は幅1.95cm、中上縦帯は幅1.8cm、右上縦帯は幅1.9cm、右下縦帯は幅1.9cmである。

横帯間の高さは第1横帯と第2横帯間が5.6cm、第2横帯と第3横帯間が5.5~5.6cmである。横帯・縦帯の中には斜格子文が充填されているが、斜格子の交差角度は縦帯に対し横帯が鋭角になっている。また、下辺横帯は幅1.6cmで、左右に鋸歯文Rが観察できるが、右端には半単位の鋸歯文

状に界線が僅かに見られる。下辺横帯下界線は2条である。

裾端部はA・B両面ともに丸みを帯びており、研磨痕などは見られない。

舞 舞はアーモンド形を呈しており、舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）はA面が69.4%（7.7÷11.1×100）、B面は71.3%（7.7÷10.8×100）である。舞の中央部には高さ0.2~0.5cm程のバリがある。また、舞面が傾斜する肩下がりはA・B両面ともほとんど見られない。

鰐 幅はA面で左肩1.1cm・左裾1.3cm・右肩1.3cm・右裾1.5cm、B面は左肩1.2cm・左裾1.3cm・右肩1.2cm・右裾1.4cmである。

文様はA面右側には鋸外縁と同様に内向する鋸齒文しが入っているが、これに対し左側には外向する鋸齒文Rが見られ、両者が接する左肩部の鋸齒文は複合鋸齒文状となる。B面は左側に外縁左脚部付近と同様に内向する鋸齒文Lが見られるが、右側には鋸齒文Rが入っている。

内面突帯 補からの高さ1.6~1.9cmのところに、幅0.9~1.1cm・高さ0.25cmの突帯が1条巡っている。横断面形は低い台形状を呈し、突帯上面は面をなしているおり、B面側中央の一部には铸造時に低く変形した部分がある。

型持 舞に1個、鐸身上半にはA・B両面とも2個ずつあり、裾部は湯回り不良のため、B右側内面に僅かに型持の痕跡がある。

舞の型持孔は1山である。A面側は湯が回り塞がっているが、内面より見ると本来はやや幅が広い長方形を呈しており、長さ3.0cm・幅2.4cmである。型持中央部には鉢脚壁状にバリがある。

鐸身上半の型持孔はA・B両面とも第2横帯上側界線にほぼ接する位置にある。外面から見ると、いずれも不整形になっているが、内面には長方形をした型持の形状が残っている。A面右側は高さ2.0cm・幅1.7cm、左側は高さは不明であるが幅1.5cm、B面右側は内面では高さ2.0cm・幅1.4cm、左側は高さ1.8cm・幅1.4cmである。

裾部の型持は、内面から見るとB面右側の隅部が僅かに残っており、高さは0.7cmである。

鉢上がり 湯回りが悪く孔として残ったところは、A面は鐸身左型持孔横に1ヶ所、B面は第3横帯、下辺横帯付近に2ヶ所、舞面に小さいものが1ヶ所見られる。

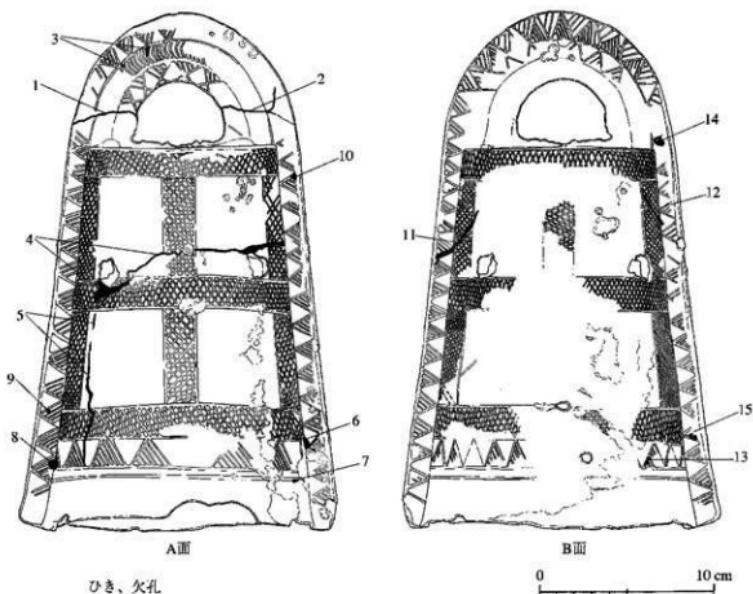
表面が窪む「ひき」は鉢にはA面両鉢脚部とB面左鉢脚部、舞は浅いものや小さいものを含めA面側に2ヶ所、B面側にとも7ヶ所ある。鐸身は内面突帯に当たる部分の外側がB面側で窪んでおり、この他にはA面左側鰐付け根部分や第1横帯、B面鐸身右下区に小さな「ひき」がある。

軟X線写真によれば、A面では内面突帯上の鐸身中央部から右側に厚さが薄くなっているところがあり、B面は鐸身第1横帯や下半部の中央部に薄い部分がある。舞はB面側が薄く、A面側が厚くなっているが、これは鑄型のズレによるものと見られる。気泡状の髒は比較的少ないが認められる。

范傷 A・B両面とも比較的多くの范傷がある。A面は鉢の左右に外縁から菱環に横方向に延びる1・2が認められる。菱環外斜面の文様内には3のような小さなものもある。鐸身には第2横帯左から右上縦帯に延びる4、下辺横帯左から左下区に縦方向に見られる5が大きく顯著である。鐸身と鰐の付け根部分には瘤状に膨らむ6・8が見られ、鰐の鋸齒文内にも、9・10のような小さなものがある。

B面では左上縦帯から鰐に延びる11、右上縦帯から鰐の付け根に至る12が顯著で、下辺横帯や鰐の鋸齒文内にも13~15のような小さなものがある。

(角田徳幸)



第71図 17号鐸の鋳造状態

18. 18号鐸 [図版123~130・写真図版127~133・317~319]

型式 扁平鉦 2式～突線鉦 1式

文様構成 四区製菱構文

法量 総高 47.7cm 最大幅 28.95cm 重量 4.50kg(土付)

舞長径(A面) 15.1cm 舞長径(B面) 15.1cm 舞短径 10.5cm

柄長径(A面) 23.2cm 柄長径(B面) 23.2cm 柄短径 16.7cm

鉦 菱環と外縁、内縁からなる扁平鉦もしくは突線鉦である。高さはA面が12.6cm、B面が12.55cm、幅はA面ともに17.8cm、鉦孔は高さ2.8cm・幅4.0cmを測る。

鉦の外縁端部及び鉦孔端部には研磨痕が観察できる。菱環の幅はA面が2.7~3.0cm、B面が2.8~3.1cmである。菱環稜部の厚さは中央部で0.75cm、左右鉦脚部で1.45cmを測る。

文様の構成はA・B面とも基本的にほぼ同じである。外縁は第1・第2文様帯に分かれ、外縁第1文様帯には内向する鋸齒文、外縁第2文様帯には外向する鋸齒文が充填されている。綾杉文が充填された菱環文様帯は、菱環を横断する2条の平行直線文によって、いずれも4つの区画に分割されている。綾杉文は、この平行直線文を境に対向しており、その配列はA・B面ともD||C||D||Cである。内縁には、菱環文様帯に沿って2本の条線が施文されている。

A面では外縁第1文様帯と第2文様帯の界線が複線となっており、その間隔は0.25~0.65cmを測る。B面では外縁第2文様帯と菱環文様帯の界線が複線で、界線の間隔は0.25~0.5cmである。

外縁第1文様帯は、A面の左端部で文様が確認できないが、左から6単位が鋸歯文しと見られ、7単位目から右端までが鋸歯文Rとなっている。幅はA面中央で2.1cm、右端で1.6cm、B面中央で2.4cm、左端で1.7cmとなっており、鉢の頂部と左右端部での間隔差が比較的大きい。

外縁第2文様帯の鋸歯文は、A・B両面とも中心軸に対して左右対称を意図した配置になっている。A面は中央にLRの鋸歯文を配し、左側へ2単位がR、次にLRを挟んで鋸歯文しが続く。右側は、2単位の鋸歯文しに続いてLRが配置され、そこから3単位の鋸歯文Rが並んでいる。

菱環文様帯の綵杉文が、直線文を境にして平行斜線文の方向を変えるのと同様に、外縁第2文様帯の鋸歯文もLRを挟んで方向を転換しているが、菱環を横断する直線文とLR鋸歯文はそれぞれ対応した位置関係にある。

B面も、A面と同様、中央に鋸歯文LRを配置する。LRより左側3単位が鋸歯文R、続く3単位が鋸歯文し、左端部が半施文の鋸歯文で、右側3単位が鋸歯文し、続く3単位が鋸歯文R、右端部が半施文の鋸歯文しとなっている。A面と同じように、菱環の直線文に対応する部位で平行斜線文の方向が転換している。文様帯の幅は、A面中央で2.0cm、右端で1.1cm、B面が中央で1.7cm、左端で1.1cm、右端で1.2cmである。

内縁に施文された条線の間隔は、A・B面ともに0.35~0.6cmである。

鉢の端部や鉢孔端部には研磨痕が認められ、全体的に整形・研磨が施されている。

鐸身 高さはA面が35.0cm、B面が35.15cm、厚さは0.25~0.5cmである。側面から見ると舞から裾にかけて緩やかに外反しており、その外反率（舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100）は、A面が1.75%（0.6÷34.3×100）、B面が1.9%（0.65÷34.3×100）である。

鐸身の主文様は、A・B面ともに横帯と縦帯によって構成される四区製装模文である。縦帯に対し横帯が優先する。文様の構成はA・B面で共通しており、側面から見たA・B両面の文様帯にはほとんどズレはない。

A面の第1横帯は幅2.6~2.7cm、第2横帯は幅3.0~3.1cm、第3横帯は幅3.7~3.8cm、B面の第1横帯は幅2.7cm、第2横帯は幅3.0~3.2cm、第3横帯は幅3.7~3.9cmである。横帯の幅は下に行くにしたがって広くなっているが、このことは縦帯の幅についても言える。A面の中上縦帯幅が2.75~3.0cm、中下縦帯の幅が3.3~3.6cm、中縦帯と第3横帯下界線が交わる部位が3.9cm、左上縦帯上端の幅が2.3cm、左下縦帯下端の幅が2.9cm、左縦帯と第3横帯下界線が交わる部位が3.0cm、右上縦帯の幅が2.15~2.3cm、右下縦帯の幅が2.45~2.8cm、右縦帯と第3横帯下界線が交わる部位が3.0cmである。B面の縦帯幅は、中上縦帯が2.9~3.05cm、中下縦帯下端3.55cm、中縦帯と第3横帯下界線が交わる部位が3.8cm、左上縦帯が2.3~2.5cm、左下縦帯が2.6~2.9cm、左縦帯と第3横帯下界線が交わる部位が3.1cm、右上縦帯が2.3~2.4cm、右下縦帯下端が2.85cm、右縦帯と第3横帯下界線が交わる部位が3.1cmを測る。

製装模文の横帯・縦帯内には斜格子文が充填されているが、その斜格子の間隔も鐸身上部ほど密で、裾に近づくにしたがって粗になっている。

この銅鋳に特徴的なのは、製装模文銅鋳に一般的に見られる横帯優先の原則が踏襲されず、A面・B面ともに縦・横帯の界線が切り合っていることである。縦帯及び横帯に充填された斜格子を観察

すると、この銅鐸は縦帯の方に連続性があり、横帯を断ち割るように斜格子が充填されていることがわかる。ただ、第2横帯だけは両面とも縦帯に遮断されることなく、斜格子が左端から右端まで連続して充填されている。

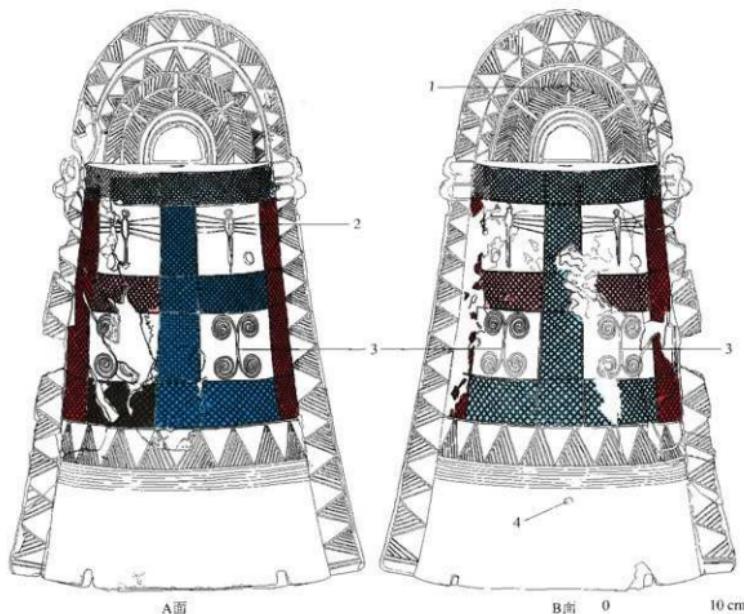
下辺横帯にはA・B面とともに8単位の櫛歯文が施文されている。A面は中央より左側がR、右側がL、B面は全てRの平行斜線文が充填されている。横帯の幅はA面が3.3~3.5cm、B面が3.4cmである。下辺横帯下界線はいずれも4条で、1~4条目の間隔はA・B面ともに1.5~1.6cmを測る。4条の下界線は、他の界線や文様の線に比べて太く、かなり突出しているのが特徴である。

縱・横帯によって区画された各区の大きさは、A面上左区が上辺6.05cm・下辺6.05cm・高さ5.75cm、上右区が上辺6.1cm・下辺6.4cm・高さ5.7~5.8cm、下左区が高さ5.65cm、下右区が上辺5.65cm・下辺6.8cm・高さ5.8cmである。B面は上左区が上辺6.0cm・下辺6.2cm・高さ5.85cm、上右区が上辺6.1cm・高さ5.9cm、下左区が上辺6.2cm・下辺6.75cm・高さ5.65~5.7cm、下右区が下辺7.0cm・高さ5.75cmとなっている。

裾の端部は平坦な面をなしており、所々に切断痕や研磨痕が観察できる。

絵画 A・B両面の鋏身には、横帯と縦帯によって区画された上区にトンボが、下区に四頭渦文が鋳出されている。これまで全国で出土している絵画銅鐸のトンボは単線で描かれているが、35号鐸同様、18号鐸のトンボは複線で写実的に描かれているのが特徴的である。

区画いっぱいに大きく描かれたトンボは、頭部・胸部・腹部の境がくびれ、各部位が明瞭に区別



第72図 18号鐸斜格子文の施文単位

されている。翅は4本線で描かれており、前翅・後翅の縁が表現されているものと見られる。翅を3本線で表した銅鐸の出土例はあるが、4本線で表現したものは加茂岩倉18・35号鐸以外にない。前肢・中肢・後肢は描かれていらないが、胸部から腹部にかけて条線が表現されており、こうした黒色条を背面に持つトンボが存在することから（石田ほか1988、井上・谷1999）、本銅鐸のトンボは背面を描いたものと考えられる（2）。B面上右区のトンボには、眼を表現したと見られる小さな点が2つ認められる。

左右下区に施された四頭渦文は、双頭渦文が背合わせに接する部位で線が一条化する⁽¹⁾（3）。

舞 舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）は、A・B面ともに69.54%（10.5÷15.1×100）である。A面、B面でのズレは認められない。両面の間には高さ0.2~0.25cmのバリがあり、鉢脚盤状を呈している。

舞面の傾斜を表す肩下がりはA面0.65cm、B面0.5cmである。

鎧 一対の飾耳によって鉢の外縁と区分された鎧は、幅がA面で左肩1.9cm・左裾3.0cm・右肩1.7cm・右裾2.9cm、B面は左肩1.8cm・左裾3.0cm・右肩1.9cm・右裾2.8cmと、裾に向かって幅広くなっている。飾耳及び脚部には、1山に対して1つずつの横「U」字文が施されている。

文様はA面左がすべて鋸齒文R、同面右は上から7単位が鋸齒文L、続く4単位が鋸齒文Rとなっており、B面左は全て鋸齒文R、同面右は最下端の鋸齒文がRのほかは全て鋸齒文Lである。A面、B面とも、鎧の幅に合わせるように文様が裾に向かって大きくなり、2本の条線によって鋸齒文列は終わる。A面左最下端及びB面右最下端の鋸齒文は、この2条の線に遮られるように半分しか施されていない。A面左最下端では斜線文のみの施文となっている。

端部には加工・研磨痕が認められる。

内面突帯 捩端部からの距離がA面では4.5~4.8cm、B面では4.35~4.5cmのところに、幅0.9~1.0cm、高さ0.25~0.4cmの突帯が1条、さらに捩端部からの距離がA面では5.7~5.9cm、B面では5.45~5.55cmのところに、幅0.65~0.8cm・高さ0.2~0.4cmの突帯が1条、計2条の突帯が巡っている。断面は上段が三角形に近い台形で、下段が台形状を呈している。

型持 舞にはA・B面に1つずつ、鐸身上半及び裾にはA・B両面にそれぞれ2つずつの型持孔がある。舞の型持孔は、A面が円形で長径1.2cm・短径1.2cm、B面が橢円形で長径1.2cm・短径0.9cmである。内面から見た型持痕は、A面が直径1.7cmの円形で、B面が長径2.1cm・短径1.9cmの橢円形を呈している。

鐸身上半の型持孔は、袈裟襟文によって区画された左右上区の下方鱗寄りにある。いずれもほぼ円形で非常に小さい。A面左は高さ1.4cm・幅1.25cm・舞との距離6.75cm、右は高さ1.1cm・幅1.0cm・舞との距離6.8cmで、B面左の型持孔が高さ1.1cm・幅1.0cm・舞との距離6.6cm、同面右が高さ1.0・幅1.1cm・舞との距離7.2cmである。内面から見た型持痕の大きさは、A面右が高さ1.7cm・幅1.8cm、B面左が高さ1.8cm・幅1.4cm、右が高さ1.8cm・幅1.6cmを測る。

裾の型持孔は内面から見ると台形状を呈している。孔の大きさは、A面左が高さ1.55cm・幅1.65cm、右が高さ1.35cm・幅1.3cm、B面左が高さ0.9cm・幅1.1cm、右が高さ1.1cm・幅1.3cmである。

内面における型持痕の大きさは、A面左が高さ1.8cm・幅1.8cm、右が高さ1.5cm・幅1.6cm、B面左が高さ1.2cm・幅1.7cm、右が高さ1.45cm・幅1.6cmである。鎧との距離は、A面左が4.9cm、右が5.5cm、B面左が5.1cm、右が5.9cmを測る。

鋳型の食い違い 錘の頂部や端部、鍔の端部を観察する限り、A・B面で鋳型のズレはほとんど認められない。錘の頂部で湯がはみ出したバリの部分が段となり、A・B面でその高さに僅かな差があるが、鋳型の組み合わせが大きくズレた形跡はないと言える。

錘上がり 湯回りが悪く欠孔が生じたようなところは認められない。B面の裾には、内面突帯にあたる部位に小さな窪みが認められるが(4)、このほかには「ひき」と思われるようなところは見受けられない。軟X線透過による調査においても、鋳造時の気泡が器内に懸となって残ったところは極めて少なく、全体的に錘上がりは良かったものと見られる。

范傷 現状を観察する限り、范傷は認められない。

「×」の刻線 B面の錘には、菱環中央の稜上にタガネ様工具によると見られる「×」の刻線が認められる。刻線の切り合い関係から、右下がりの刻線を先に施したものと見られる(1)。

(山崎 修)

19. 19号錘 [図版131~135・写真図版135~138・320~322]

型式 外縁付錘1式

文様構成 四区袈裟襷文

同范銅錘 加茂岩倉4号錘・加茂岩倉7号錘・加茂岩倉22号錘・太田黒田錘

法量	総高	31.3cm	最大幅	18.6cm	重量	2.14kg
	舞長径(A面)	11.0cm	舞長径(B面)	11.0cm	舞短径	7.7cm
	裾長径(A面)	16.2cm	裾長径(B面)	16.1cm	裾短径	11.6cm

鉢 菱環と外縁よりなる外縁付鉢である。高さは8.0cm・幅13.5cm、鉢孔の高さは2.0cm・幅4.2cmを測る。菱環はA面で幅3.3~4.0cm、B面で幅3.1~3.8cm、厚さは中央部で0.7cm・左右端部が0.95cmである。外縁は菱環との境が不明な部分があるが、A面で幅1.3~1.7cm、B面で幅1.5~1.95cm、厚さは中央部で0.3cm、左端で0.25cm、右端で0.3cmである。鉢孔部はB面では菱環内斜面の界線よりも0.2~0.5cm程度はみ出し、バリ状になっている。

文様は全体に判然としないところが多い。A面は外縁右側に内向する鋸歯文Rが見られる。菱環は外斜面の右側鉢脚付近に綾杉文Dが観察できるが、その他は内斜面を含め全く文様を見ることができない。

B面は鉢脚付近では文様が不鮮明であるが、外縁には内向する鋸歯文Rが施されている。菱環外斜面はこれを分割するように綾杉文の軸線が入っているが、綾杉文自体が見られる部分はない。内斜面には中央部から左側に外向する鋸歯文Rが観察できる。

錘身 高さはA面23.2cm、B面23.4cm、厚さは0.35~0.4cmである。身は舞から裾部にかけてやや外反し、その外反率(舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100)はA面側で1.78% (0.4÷22.5×100)、B面側で1.57% (0.35÷22.6×100)である。

A面の文様は、四区袈裟襷文で横帯が縦帯に優先するものである。文様は錘身上半部に不鮮明な部分があるが、中上縦帯付近を除きほぼ観察できる。第1横帯は幅1.9cm、第2横帯は幅2.0cm、第3横帯は幅2.4cm、左上縦帯は幅1.9cm、左下縦帯は幅1.9cm、中下縦帯は幅1.9cm、右上縦帯は幅1.9cm、右下縦帯は幅1.9cmである。

各区の大きさは上左区が上辺3.9cm・下辺4.9cm・高さ5.9cm、下左区が上辺4.9cm・下辺5.3cm・高さ5.7cm、下右区が上辺5.0cm・下辺5.7cm・高さ5.9cmである。横帯・縦帯の中には斜格子文が充填されているが、特に上半部は現状ではかなり見えにくい。左右の縦帯と鱗の間には界線が入っている。また、左下区内左上方には「I」字様の文様が僅かに観察できる。

下辺横帯は幅1.85cmで、右側に鋸齒文Rを僅かに見ることができる。下辺横帯下界線は2条である。

B面の文様は、四区製装模文で横帯が縦帯に優先するものである。文様は鐸身中央部から右側が不鮮明になっており、中上縦帯・中下縦帯・右下縦帯は見えない。第1横帯は幅1.7cm、第2横帯は幅1.7cm、第3横帯は幅2.5cm、左上縦帯は幅2.0cm、左下縦帯は幅2.2cm、右上縦帯は幅2.0cmである。横帯間の高さは第1横帯と第2横帯間が5.9cm、第2横帯と第3横帯間が5.8cmである。横帯・縦帯の中には斜格子文が充填されているが、鐸身中央部や右側など文様の見えない部分がかなりある。左右の縦帯と鱗の間には界線が入っている。

また、下辺横帯は幅1.9cmで、左右に鋸齒文Rが観察できる。

裾端部はA面右側鱗に接する部分を除いて、A・B両面とも外傾する面をなしている。

舞 舞はアーモンド形を呈しており、舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）はA・B両面とも70%（ $7.7 \div 11.0 \times 100$ ）である。舞の中央部には高さ0.4cm程の鈕脚駆のバリがある。また、舞面が傾斜する肩下がりはA面が0.5cm、B面は0.45cmである。

鱗 幅はA面で左肩1.4cm・左裾1.6cm・右肩1.2cm・右裾1.6cm、B面は左肩1.4cm・左裾1.4cm・右肩1.2cm・右裾1.7cmである。文様はA面右側には鉤外線とは鋸齒文内条線の方向が反対になる鋸齒文しが入っているが、左側は観察できない。B面は左側肩部付近を中心に鉤外線と同様に鋸齒文Rが見られるが、右側は見えない。

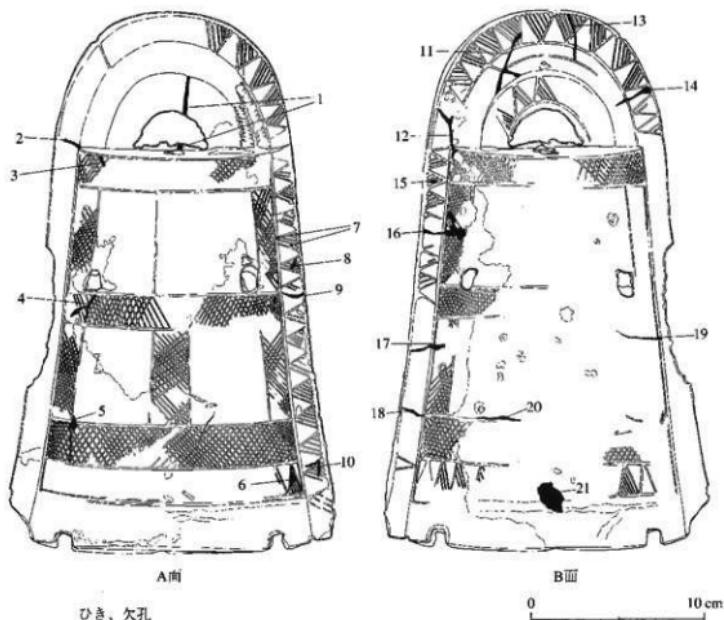
内面突帯 堀からの高さ1.8~2.1cmのところに、幅0.8~1.4cm・高さ0.2cmの突帯が1条巡っている。横断面形は低い台形状を呈しており、突帯上面は面をなしていることから使用に伴う磨滅と見られる。

型持 舞に1個、鐸身上半にはA・B両面とも2個ずつ、櫛部にもA・B両面とも2個ずつの計9個の型持がある。舞の型持孔は1山である。B面側短辺は湯回りが悪く不整形になっているが、内面より見ると本来は長方形を呈しており、長さ2.5cm・幅1.4cmである。型持中央部には鈕脚壁状のバリがある。

鐸身上半の型持孔は、A・B両面とも第2横帯上側界線にほぼ接する位置にある。A面左の型持孔は湯回りが悪く不整形であるが、内面では一隅が残っており本来は方形を呈していたと思われ、現状で高さ1.5cm・幅1.4cmである。右側は内面では隅丸長方形状になっており、高さ1.8cm・幅1.2cmである。B面左の型持孔は内面では高さ1.7cm・幅1.4cmと長方形で、右側はやや不整形であるが現状で高さ1.7cm・幅1.3cmである。

櫛部の型持は、内面から見るといずれも上辺がやや短い横長長方形を呈している。A面左は高さ0.9cm・幅1.8cm、右側は高さ1.4cm・幅1.9cmである。B面は左が高さ1.4cm・幅1.9cm、右は高さ1.1cm・幅1.8cmである。

錫上がり 湯回りが悪く孔として残ったところは、A面は鐸身右型持孔上に1ヶ所、B面は鐸身下半部に小さいものが3ヶ所見られる。



第73図 19号鐸の铸造状態

表面が瘤む「ひき」は鉦はB面に1ヶ所、舞は浅いものや小さいものを含めA・B両面とも4ヶ所ずつある。鐸身は内面突帯に当たる部分の外面が瘤んでおり、この他にはA面下半部に3ヶ所、B面も下半部に1ヶ所小さな「ひき」がある。また、A面裾端部の右側鰐付け根部分にも瘤みがあり、「ひき」と見られる。

軟X線写真によれば、A面では内面突帯より上の鐸身中央部に厚さが薄くなったところがあり、B面も鐸身上半部に薄い部分がある。気泡状の懸は比較的少ないが認められる。

範傷 A・B両面とも多数認められる。A面では鉦の菱環内斜面に縦方向に延びる1があり、1より延びると思われる範傷が鉦脚壁状のパリにも見られる。鐸身には3が第1横帯、4が第2横帯左、5が左下隅部から第3横帯、6が下辺横帯の鋸齒文にある。鉦では左肩部に2、鋸齒文内には7~10が認められる。

B面では鉦には鉦脚左側から外縁に延びる12、菱環外斜面から外縁の鋸齒文に伸びる11・13・14がある。鐸身には左上縦帯の斜格子文が潰れたようになった16、左下縦帯に17、第3横帯上界線左に18があり、いずれも鉦まで延びている。また、右下縦帯付近には19、第3横帯上界線には20、下辺横帯中央部には瘤状にやや盛り上がる21もある。鉦は既に述べたもの他に、鋸齒文内に15が見られる。

(角田徳幸)

20. 20号鏡 [図版136~143・写真図版140~144・323~325]

型式 扁平鉢2式

文様構成 六区袈裟襷文

法量	総高	45.4cm	最大幅	27.0cm	重量	3.80kg
	舞長径(A面)	15.0cm	舞長径(B面)	15.0cm	舞短径	10.6cm
	裾長径(A面)	22.3cm	裾長径(B面)	22.2cm	裾短径	16.7cm

鏡 菱環と外縁及び内縁からなる扁平鏡である。A・B面ともに高さ11.4cm・幅17.9cmで、鏡孔の高さは3.3cm・幅3.2cmを測る。菱環の幅はA面が2.1~2.2cm、B面が2.2cm、稜部の厚さは中央部が0.7cm、A面を基準とすると左端鏡脚部1.1cm・右端鏡脚部1.3cmを測る。

文様の構成はA面・B面とも基本的に同じである。鏡の端部付近には、他の界線と同じ太さの外周線を持つ。外縁は第1・第2文様帯に分かれ、いずれも内向する鋸歯文が施されている。綾杉文が充填された菱環文様帯は、中央のみを3条とする2条の平行直線文によって4つの区画に分離されている。綾杉文は、菱環を横断する直線文を境に対向しており、その配列はA・B面とも || D || C || D || C || である。菱環と内縁の界線は2条の複線で、鏡孔に沿って施された内側の界線との間には内向する重弧文が充填されている。

A面の外縁第1文様帯は、21単位の鋸歯文Rと半施文の鋸歯文で構成される。右端飾耳脚部に接する部分のみ半施文で、斜線文Rの下端に短いL方向の斜線文が接している。鋸歯文Lを意図した可能性がある。鋸歯文の外郭線及び平行斜線が外周線からはみ出でて施されている。

B面の外縁第1文様帯は20単位の鋸歯文Rである。B面では鋸歯文が外周線からはみ出でていない。幅はA面中央で1.4cm、左右端部で1.4cm、B面中央で1.5cm、左右端部で1.4cmとなっており、鏡の頂部と左右端部での間隔差はほとんどない。

外縁第2文様帯は、A面で中央にL Rの鋸歯文を配置するほかは鋸歯文Rとなっており、B面は全て鋸歯文Rである。右端部の1単位のみ半施文となっている。幅はA面中央で1.6cm、左端で1.5cm、右端で1.2cm、B面が中央部で1.5cm、左端で1.2cm、右端で1.4cmである。

内縁の重弧文はA・B面とともに9単位で、複線化した外側の界線に接している。重弧文の頂部と内側の界線は接することなく間隔が空く。A面の左端2単位の頂部付近では、内側の界線が複線化している。

鏡の端部には面を持つところが残っており、全体に整形・加工が施されていたものと見られる。

鏡身 高さはA・B面ともに34.0cm、厚さはほぼ均一で0.3~0.4cmである。側面から見ると舞から裾にかけて緩やかに外反しており、その外反率(舞・裾線からの最深箇所・舞から裾の長さ×100)は、A・B面ともに1.2% (0.4 : 33.4×100)である。

鏡身の主文様は、A・B面ともに横帯と縦帯によって構成される六区袈裟襷文である。一部に鏽痕や欠損したところがあるが、ほとんどの文様を確認することができる。文様の構成は基本的にA・B面で共通している。

縦・横帯には斜格子文が充填され、界線及び斜格子の施文は横帯が優先されている。ただ、縦帯と横帯が交わる部分には、横帯内に縦帯の界線が僅かに延びている。横帯の幅はほぼ均一で、A面の第1横帯が2.3cm、第2横帯が2.1cm、第3横帯が2.3cm、第4横帯が2.3cm、B面の第1横帯が2.2cm、第2横帯が2.1cm、第3横帯が2.2cm、第4横帯が2.3cmである。

B面第2横帯の右端には、下界線直上に界線と平行する微かな条線が認められる。この条線は割付線の痕跡と考えられる。

縦帯は横帯に遮断され、上・中・下段に分割される。幅はA面の中央の上縦帯が2.7cm、中縦帯が2.8cm、下縦帯が2.8cm、左上縦帯が2.5cm、左中縦帯が2.4cm、左下縦帯が2.3cm、右上縦帯が2.3cm、右中縦帯が2.4cm、右下縦帯が2.4cmとなっている。B面では、中央の上縦帯が2.7cm、中縦帯が2.8cm、下縦帯が2.8cm、左上縦帯が2.5cm、左中縦帯が2.5cm、左下縦帯が2.5cm、右上縦帯が2.4cm、右中縦帯が2.3cm、右下縦帯が2.4cmを測る。中央の縦帯が左右縦帯と比べてやや幅広だが、A・B面での縦帯幅にはほとんど差がない。

下辺横帯の幅はA・B面ともに1.9cmを測り、横帯内には鋸齒文Rが施されている。下辺横帯下界線は4条で、1~4条目の間隔はA面で1.4cm、B面で1.1cmを測る。

縦帯、横帯によって区画された各区の大きさは、A面上左区が上辺5.8cm・下辺6.4cm・高さ5.0cm、上右区が上辺6.3cm・下辺6.6cm・高さ4.8cm、中左区が上辺6.6cm・下辺7.3cm・高さ5.2cm、中右区が上辺6.8cm・下辺7.4cm・高さ5.2cm、下左区が上辺7.7cm・下辺8.6cm・高さ5.2cm、下右区が上辺7.6cm・下辺8.1cm・高さ5.3cmである。B面は上左区が上辺5.9cm・下辺6.6cm・高さ4.9cm、上右区が上辺5.8cm・下辺6.3cm・高さ4.9cm、中左区が上辺6.8cm・下辺7.5cm・高さ5.3cm、中右区が上辺6.5cm・下辺7.1cm・高さ5.2cm、下左区が上辺7.7cm・下辺8.6cm・高さ5.2cm、下右区が上辺7.4cm・下辺8.1cm・高さ5.2cmとなっている。

裾の端部は平坦で、切断痕や研磨痕が観察できる。

舞 舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）は、A・B面ともに70.67%（10.6÷15.0×100）である。A面とB面にズレは見られない。両面の間には0.1~0.2cmのパリがある。舞面の傾斜を示す肩下がりはA面が0.7cm、B面が0.6cmである。

鰐 鍔の外縁との境にあたる鰐の肩部には一对の飾耳がある。飾耳及びその脚部には、鍔の内縁に見られる重弧文に似た文様が施されている。飾耳とその脚部の境には条線が横断するが、これは鍔と鰐の外周線に対応するものと見られる。

鰐の外周には鍔と同様に外周線が施されている。文様は内向する鋸齒文で、A面左側では飾耳直下の1単位が鋸齒文L、続く12単位が鋸齒文Rである。右側は13単位全てが鋸齒文Rで、左右とも鋸齒文の外郭線と平行斜線が外周線からみ出しているところがある。B面は左右とも13単位の鋸齒文Rとなっている。左側の飾耳直下4単位では、鋸齒文の平行斜線が外周線からみ出た様子が窺えるが、そのほかの部位では認められない。

A面、B面とも、鰐の幅に合わせるように鋸齒文が裾に向かって大きくなり、3~4本の条線によって鋸齒文列は終わる。A面右裾及びB面左裾には、この条線に沿って外周線が回り込んでいる。鰐幅は、A面左飾耳に接する部位が1.6cm、左鰐2.4cm、右飾耳に接する部位が1.6cm、右鰐2.6cm、B面左飾耳に接する部位が1.6cm、左鰐2.7cm、右飾耳に接する部位が1.4cm、右鰐2.3cmである。

端部には部分的に整形・研磨痕が観察される。

内面突帶 裤端部からA面では5.1cm、B面では5.0cmのところに、幅1.4cm・高さ0.4cmの突帶が1条巡っている。断面は頂部にやや丸みを持つ台形状を呈しており、形状に大きな崩れはない。

型持 舞にはA・B面に1つずつ、鐸身上半及び裾にはA・B両面にそれぞれ2つずつの型持孔がある。

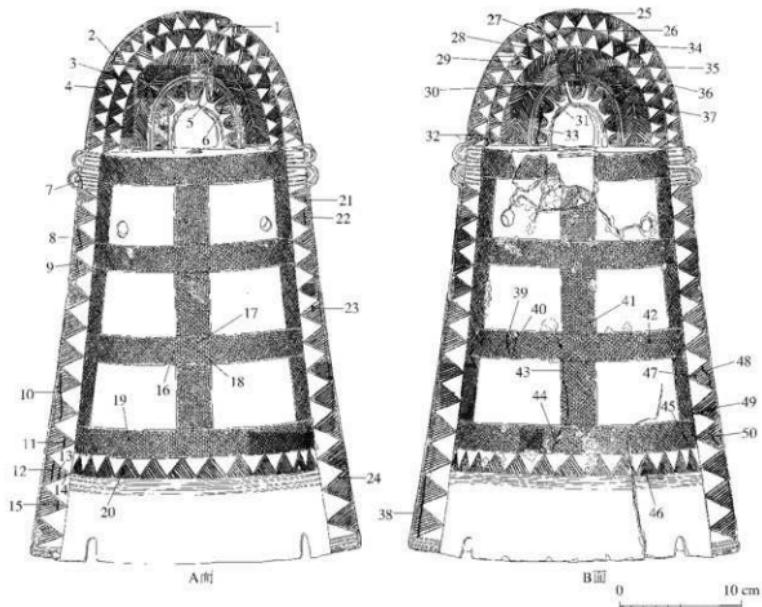
舞の型持孔は、A面が長径1.5cm・短径1.3cmのほぼ円形で、B面は孔の一部を欠損しているために明確でないが、直径1.5cm程度の円形の孔と思われる。内面を見ると、A面では長径1.9cm・短径1.8cmの楕円形となっており、型持の形状を残していると言える。

鐸身上半の型持孔は、左右の上区内の下方鱗寄りにある。いずれも縱・横帯と重なり合うことなく配置されている。内面における型持痕の大きさは、A面左が高さ1.7cm・幅1.7cm、同面右は高さ1.9cm・幅1.8cm、B面左が高さ1.7cm・幅1.7cm、同面右は高さ1.6cm・幅1.7cmで、いずれもほぼ円形である。舞との距離は、A面左が5.3cm、右が5.3cm、B面左が4.8cm、右が5.3cmを測る。

裾の型持孔は逆「U」字形を呈しており、内面における型持痕の大きさはA面左が高さ2.3cm、幅1.7cm、右が高さ2.2cm、幅1.9cm、B面左が高さ1.9cm・幅1.8cm、右が高さ2.0cm・幅1.7cmである。いずれも裾端部から深く入り込んでいる。鱗との距離はA面左が4.6cm、右が3.9cm、B面左が3.5cm、右が4.1cmである。

鋳上がり 鋳造時に湯回りが悪く欠孔が生じたところは認められない。軟X線透過による調査においても、鋳造時の気泡が器内に残となって残ったところは極めて少なく、全体的に鋳上がりは良かったものと見られる。

範傷 A面の鉢に6ヶ所、鱗に13ヶ所、鐸身に5ヶ所、B面の鉢に13ヶ所、鱗に5ヶ所、鐸身に8ヶ所の範傷が認められる。



第74図 20号鐸の鋳造状態

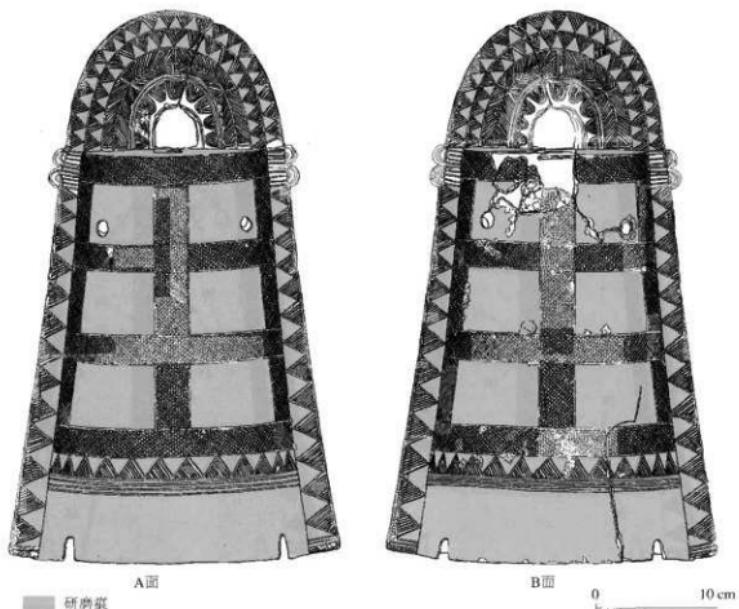
1～4・25～29・32・34は、外縁第1・第2文様帶の鋸歯文間に生じた傷である。そのうち3は無文部位にまで微かな傷が延びる。30・31・35～37は菱環文様帶の綾杉文間にある。微細な傷がほとんどだが、35は平行斜線間に貫くやや長めの傷である。5・6は内縁の重弧文内にあり、33は左端部3単位の重弧文を貫く細長い傷である。

7～15・21～24・38・47～50は鰐の鋸歯文間にあるが、鋳造時の破るように見えるものもある。11・13・15はもともと1本の傷であったものが、鋸歯文の無文部分を研磨したために切り離されたものと見られる。

綫・横帶の斜格子文間にある傷は、17～19・41・42・45のように平行斜線文の交差する角が欠けてできたような微細なものと、文様帶内を貫く細長い39・40・43・44がある。下辺横帶にある20・46は、鋸歯文の平行斜線間に生じた僅かな膨らみである。ほとんどの傷が各文様の中に収まっているのは、無文部位に研磨を施す過程で傷が消されているためと思われる。

研磨 A・B面とともに、鈕では外縁第1文様帶・第2文様帶の無文部分、舞面の全城、鰐では飾耳の脚部間や鋸歯文間の無文部分、鐘身では左右上区・左右中区・左右下区の各区内、下辺横帶の無文部分、下辺横帶下界線から柄部の全城に、丁寧な研磨が施されている。各部位において研磨方向を窺い知ることができるような痕跡が認められる。鋸歯文間の研磨は、その他の部位に比べてやや荒い。

(山崎 修)



第75図 20号鐸の研磨状態

21. 21号鐸 [図版144~151・写真図版146~151・326~328]

型 式 外縁付鉢 2式

文様構成 二区流文

同范銅鐸 伝福井鐸(明大1号鐸)・伝陶器鐸・氣比4号鐸

法 量	現存高	44.6cm	最大幅	28.0cm	重 量	4.18kg(土付)
	舞長径(A面)	15.0cm	舞長径(B面)	15.1cm	舞短径	10.7cm
	裾長径(A面)	23.9cm	裾長径(B面)	23.7cm	裾短径	17.3cm

鉢 鉢の頂部を欠損しているため、高さは残存高となり、A面が11.9cm、B面が11.6cmで、幅は19.1cmである。また、鉢孔の高さは2.75cm、幅は5.2cmを測る。

文様の構成はA・B面ともに同じで、外縁には内向する鋸歯文が充填されており、菱環の稜を境にして外斜面に綾杉文と無文帯、内斜面に綾杉文と左上がりの連続渦文Zが配置されている。連続渦文は隣接する単位文の端部が連結しない第1種である。

菱環後部の厚さは中央で0.9cm、A面を基準とすると左端鉢脚部で1.25cm、右端鉢脚部で1.3cmである。綾杉文は外斜面、内斜面ともに菱環中央部で方向を異にし、左側が綾杉文C、右側が綾杉文Dとなっている。綾杉文はいずれも輪線を持つ。

この21号銅鐸は、現段階における型式分類の上では外縁付鉢2式の範疇に含まれる。これは、次の段階となる扁平鉢式が、いわゆる菱環文様帶の成立を前提としているからに他ならない(難波1986)。菱環文様帶とは、菱環の稜を挟んでその内外に施された1つの文様帶を指す。したがって、軸線を持った綾杉文が、菱環の稜を境にした内外斜面にそれぞれ1段ずつ配置されたこの銅鐸は、この菱環文様帶が成立していないと見なされる。

ただ、この銅鐸の場合、綾杉文と外縁との間に無文帯が、内斜面の綾杉文の内側に連続渦文が配されたことにより、菱環の稜を挟んだ2段の綾杉文は隣接する文様帶と明確に区分されている。つまり、2段の綾杉文様帶は、菱環文様帶としては確立していないものの、独立した文様帶として菱環を飾っていると言える。視点を変えれば、複数の文様帶に分割された菱環のうち、外斜面の無文帯は外縁第2文様帶として、内斜面の連続渦文帯は内縁として捉えることもできなくはない。

確かに、外縁第2文様帶及び内縁は、菱環文様帶の成立によって初めて明瞭に区分できるとされている。したがって、綾杉文様帶が菱環文様帶として未成熟である以上、こうした捉え方は適当とは言えない。しかし、このように鉢の文様帶構成に限って言うならば、この銅鐸には次段階の扁平鉢式に見られる要素を多く含んでいると指摘でき、外縁付鉢から扁平鉢へと移行する過程の一様相を示したものと言える。

外縁の鋸歯文は、A・B面ともに左側が鋸歯文L、右側が鋸歯文Rとなっているが、頂部付近を大きく欠損しているためにLとRの変換点は確認できない。A面左側では、外縁鋸歯文帯の内側に界線と平行する線が確認できる。また、B面右端の鋸歯文は節耳の脚部にまで及ぶ。

A面の連続渦文のうち、左端の渦文は鉢孔により一部失われている。鉢孔端部には一部に面取りされた痕跡が認められ、鋳造後に整形したものと見られる。また、鉢の付け根は鋳造時の「ひき」によって大きく歪んでいる。

鐸身 高さはA面で32.2cm、B面で32.5cm、器壁の厚さは0.35~0.4cmである。側面から見ると舞から鰐にかけて外反し、その外反率(舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100)は、A面

が2.51% ($0.75 \div 32.3 \times 100$)、B面が2.74% ($0.8 \div 32.5 \times 100$) である。外反率はやや大きいと言える。A・B面での鑄型のズレはほとんど見られない。

鐸身のキ文様は、A・B面とも横帯によって区分された三区流水文である。構成は上区と中区を区分する第1横帯の文様がA・B面で異なるほかは基本的に共通しており、上区に8つのc反転部と7つのx反転部を持つ8c7xの流水文、中区・下区に6つのc反転部と4つのx反転部を持つ6c4xの流水文が配されている。流水文の直行部1段の条数は5本で、E反転となるため1本を共有し2段では9本となる。鐸身文様帶の下端には鋸齒文Lを充填した下辺横帯が配され、下界線によって鐸身裾と区分される。

A面の流水文は、部分的に乱れや不明瞭な箇所があるものの、直行部及びc反転部・x反転部などがほぼ観察でき、全体の文様構成を容易に知ることができる。

上区と中区の流水文様帶を区分する第1横帯は、幅が2.3cmで、左上がりの連続渦文Zが施されている。隣接する単位文の端部が連結しない第1種の連続渦文で、左側の2単位と右側の2単位が確認できるが、中央部付近では連続渦文や中区流水文の「重押しや鉛抜じ、磨滅等によりはっきりしない」。右から2番目の渦文は、直上に設けられた型持孔によって歪められて鋳出されている。

中区と下区の流水文様帶を区分する第2横帯は、幅が2.4cmで、左上がりの連続渦文Zが充填される。第1横帯内の渦文同様、第1種の連続渦文である。一部に二重押しや磨滅があるものの、ほとんどの渦文が観察でき、8単位の連続渦文であることがわかる。

下辺横帯は下区流水文の下界線から0.15~0.25cmの間隔を置いた1条の界線と下辺横帯下界線によって区画される。横帯の幅は1.9~1.95cmで、横帯内には鋸齒文Lが充填されている。鈕の外縁から鋸にかけて施された鋸齒文同様に比較的鋭角で、相対的に数が多い。下辺横帯下界線は4条で、内面突帯によって外面に生じた「ひき」の影響で線が途絶えたり、錐上がりの悪さから乱れている部分がある。

B面の文様は、鋸や剥離などによって判然としない部分が多い。ただ、鐸身右側に残っている流水文のc反転部・x反転部と横帯の位置関係から、A面と同様、8c7x、6c4x、6c4xの三区流水文であることがわかる。

第1横帯は、連続渦文が充填されたA面と異なりシカの絵が鋳出されている。右側から3頭までが観察でき、それより左側については、若干の痕跡は認められるものの、鋸や剥離・磨滅により不明瞭である。ここに描かれたシカは右向きで、同範録とされる気比4号録、伝陶器録、伝福井録と一致するが、表面の荒れが著しく、気比4号録で確認されているような弓を持つ人物の存在は確認できない⁽²⁾。

第2横帯は幅が1.8cmで、連続渦文Zが充填されている。連続渦文は鐸身右側で僅かに確認される程度で、隣接する渦文の端部も明瞭でないが、同範録との比較により、第1種の連続渦文が配置されていたものと見られる。

下辺横帯は、鐸身表面の荒れと内面突帯による「ひき」のためにはほとんど確認できないが、僅かに観察される痕跡により、鋸齒文Lが充填されていたものと見られる。下界線の条数は確認することができない。ちなみに同範録の対応する面で確認される下辺横帯下界線は4条である。

裾の端部は、鈕に近い部分で僅かに切断による面が認められるものの、磨滅によって全体的にやや丸くなっている。

舞 舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）は、71.3%（10.6÷15.0×100）、70.86%（10.6÷15.1×100）である。A面とB面でのズレは認められない。中央には僅かに鉢脚壁状の高まりが認められる。舞面には「ひき」による顯著な深い窪みはないが、鉢の付け根付近や鐸身へと屈曲する縁辺付近には、僅かに浅い窪みが認められる。

舞面の傾斜を示す肩下がりはA面が0.5cm、B面が0.4cmである。

鰐 左右の肩部に一对の飾耳があり、その脚部に条線が施されていることによって鉢の外縁と区分される。幅はA面左の飾耳に接する部分で1.9cm、左側で2.5cm、右の飾耳に接する部分で2.0cm、右側で2.0cmである。

B面は左飾耳に接する部分で2.0cm、左側で1.95cm、右の飾耳に接する部分で1.95cm、右側で2.7cmを測る。A・B面とも左鰐には内向する鋸齒文Lしが、B面右鰐には鋸齒文Rが充填されている。A面右鰐は文様をほとんど確認することはできないが、同範鐸との比較によりB面同様鋸齒文Rが施されていたものと見られる。

全体的に端部が薄く、鐸身に向かって厚くなるが、所々、貼り付けたように特に厚く盛り上がる部分が認められる。こうした範囲には文様が鋳出されていない。

鰐の裾部には面をなした切断痕が認められる。

内面突帯 柄の端部から4.4cmのところに、幅0.7~0.9cm・高さ0.55~0.6cmの突帯が1条巡っている。断面は丸みを持った台形を呈しているが、明瞭な使用痕は認められない。

型持 舞にはA・B面に1つずつ、鐸身上半及び裾部にはA・B両面にそれぞれ2つずつの型持孔がある。

舞の型持孔はいずれも形状が整っておらず、大きさも揃っていない。孔の大きさは、A面が長径1.4cm・短径1.25cm、B面が長径1.7cm・短径1.4cmである。内面における型持痕の大きさは、A面が1.7cm・短径1.5cm、B面が長径2.1cm・短径1.6cmを測る。

鐸身上半の型持孔は、A・B面ともに上区流水文の7~8段目にある。内面における型持痕の大きさは、A面左が高さ1.8cm・幅1.7cm、同面右が高さ1.8cm・幅1.5cm、B面左が高さ1.4cm・幅1.4cm、同面右が高さ1.35cm・幅1.4cmである。

裾の型持孔は頂部が丸みを帯びた逆「U」字形を呈しており、裾の端部から深く入り込んでいる。型持孔の大きさは、A面左が高さ2.0cm・幅1.3cm、右が高さ2.4cm・幅1.4cm、B面左が高さ2.3cm・幅1.2cm、右が高さ2.2cm・幅1.3cmである。内面における型持痕の大きさは、A面左が高さ2.2cm・幅1.55cm、右が高さ2.7cm・幅1.8cm、B面左が高さ2.5cm・幅1.4cm、右が高さ2.5cm・幅1.5cmを測る。

鉢上がり 湯回りの悪さによって欠孔が生じたところは、鉢に1ヶ所、飾耳に1ヶ所、鰐に2ヶ所、B面に4ヶ所認められる。軟X線透過の調査によると、貫通する穴とならないまでも、鑄造時の気泡が器内に数多くの脛となって空いていることもわかる。また、穴の空いてしまった部分に補鑄をした「鉢掛け」も数多く認められ、こうした状況を勘案すると鉢上がりはあまり良くなかったものと思われる。

表面が窪む「ひき」は前述した鉢の付け根部分のほか、内面突帯にあたる部分の外縁、鰐の付け根付近や裾まわりに見られる。内面では、特に内面突帯の付け根付近や鉢の付け根に当たる部位に認められる。

范傷 A面は鉢に7ヶ所、鐸身に14ヶ所、鐸身肩部から飾耳にかけての部位に1ヶ所、B面は鉢

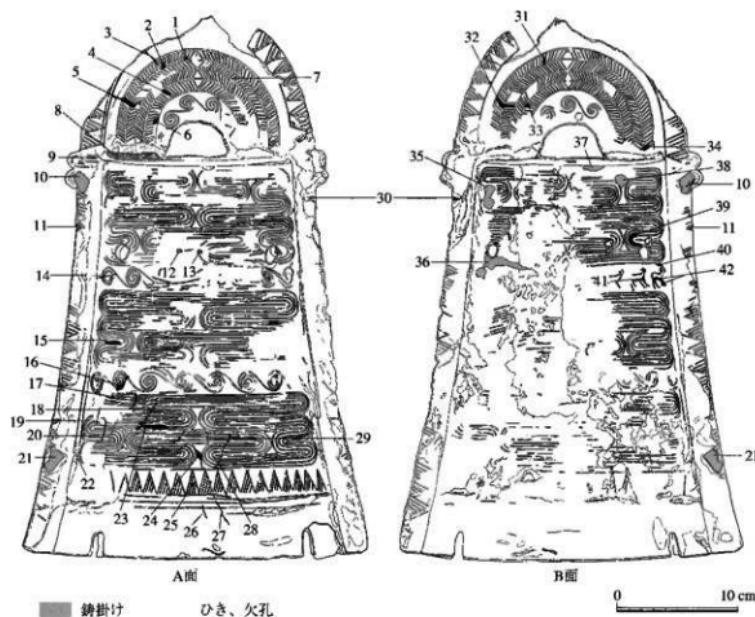
に4ヶ所、鋸身に4ヶ所の範傷が確認できる。B面鋸身は表面の剥離が著しいために観察できる範傷の数が少ない。

鉢の菱環に見える1・2・5～7は、綾杉文の平行斜線間にある。3は2から外縁に延びる傷で、5も同じように外縁の界線まで及ぶ。9は鋸身の肩部から飾耳に延びる細い傷である。14・16は連續渦文内、15・17～20・28・29・39は流水文の条線間にある。

A面の15やB面の39は、2本の条線が潰れて1本になった傷である。同じく流水文の条線間にある23は、傷とすればやや大きなものであるが、文様の流れによって傷の様に見えている可能性もある。24は下区流水文の中央下x反転部に認められる僅かな盛り上がりである。下辺横帯内の25は鋸歯文の平行斜線文間にある。26・27は下辺横帯下界線から裾にかけて延びる細い傷である。40はB面上区流水文の右下端にある小さな傷で、第1横帯に施されたシカ列の右端へ延びている。41・42は、シカの脚部に認められる傷である。

鉢掛け 表面観察と軟X線透過による調査で、飾耳に1ヶ所、鋸に3ヶ所、A面の鉢に1ヶ所、A面鋸身に2ヶ所、B面鋸身に4ヶ所の鉢掛けが確認された。これらの鉢掛けには、いわゆる「足掛り」は認められない。また、鉢掛けを施した部位に文様を補う「補刻」はなされていない。

このうち鉢A面左側の付け根に見られる8は、鋸造時の「ひき」によって大きく窪んだ部分に施



第76図 21号鋸の铸造状態

されており、鉄掛け部位の上には舞面に平行するように引っ搔いたような直線痕が見られる。またこの鉄掛け部位の周辺には、鉄掛けの後、鋭利な先端を持つ工具によって刺突したような痕跡が広範囲にわたって認められる。

飾耳の10、鐸の21、B面鐸身の35・36は比較的大きな鉄掛けである。特に36は型持孔の直下に施された鉄掛けであるが、内面には突起状に盛り上がっている部分が観察でき、内面から補錆したことが窺える。鐸の21や30は、実際に欠落した範囲よりも大きく鉄掛けが施されており、表面上はその部分がやや盛り上がっている。

B面の37は、舞との境にできた穴を埋めたものである。A面の12・13や鐸の11・30は、小穴や僅かな落部に鉄掛けを施したものだが、B面鐸身右の型持孔直上に穴が空いたままであることを考へると、どのような基準で鉄掛けが行われたものか判断し難い。

22には、8と同様に工具で刺突したような痕跡が認められる。ただ、軟X線調査によても明確に鉄掛けがあるとの結論は導き出されなかった。しかし、この部位から上におよそ6.5cmにわたって、鐸身と鐸の境界を区分するような線が見え、「ひき」によって窪んだ部分に鉄掛けを施した可能性もあり、今後の検討を必要とする。

(山崎 修)

22. 22号鐸 [図版152~156・写真図版153~156・329~331]

型式 外縁付鉢1式

文様構成 四区製姿櫻文

同范銅鐸 加茂岩倉4号鐸・加茂岩倉7号鐸・加茂岩倉19号鐸・太田黒田鐸

法量	総高	31.4cm	最大幅	19.1cm	重量	2.06kg
	舞長径(A面)	10.9cm	舞長径(B面)	10.9cm	舞短径	7.9cm
	裾長径(A面)	16.2cm	裾長径(B面)	16.4cm	裾短径	11.6cm

鉢 菱環と外縁よりなる外縁付鉢である。高さは7.9cm・幅13.4cm、鉢孔の高さは2.2cm・幅4.2cmを測る。菱環はA面で幅2.9~3.7cm、B面で幅3.3~3.8cm、厚さは中央部で0.7cm・左端1.0cm・右端0.9cmである。外縁はA・B両面とも幅1.3~1.8cm、厚さは中央部で0.35cm・左端で0.4cm・右端で0.3cmである。

文様は判然としないところもあるが、A面は外縁に向むける鋸歯文Rが見られる。菱環は外斜面を分割するように綾杉文の軸線が中央部付近に見られ、右側鉢脚付近に平行斜線文Sが僅かに観察できる。内斜面には中央部から左側に外向する鋸歯文Rが見られる。

B面は外縁に向むける鋸歯文Rが施されている。菱環外斜面はこれを分割するように綾杉文の軸線が入り、平行斜線文Rが中央部左側に観察できる。内斜面には外向する鋸歯文Rが施されている。

鐸身 高さはA面23.5cm、B面23.2cm、厚さは0.35~0.4cmである。身は舞から裾部にかけてやや外反する。外反率(舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100)はA面側で1.54%(0.35÷22.7×100)、B面側で1.56%(0.35÷22.5×100)である。

A面の文様は四区製姿櫻文で、横帯が縦帯に優先するものである。文様は鐸身中央部付近が不鮮明になっており、上中縦帯・下中縦帯は全く見えない。第1横帯は幅1.9cm、第2横帯は幅1.9cm、第3横帯は幅2.5cm、左上縦帯は幅2.0cm、左下縦帯は幅2.1cm、右上縦帯は幅1.9cm、右下縦帯は幅

2.0cmである。各横帯間の高さは第1横帯と第2横帯間が5.9~6.0cm、第2横帯と第3横帯間が6.0cmである。横帯・縦帯の中には斜格子文が充填されているが、鋸身中央部や左側縦帯は見えない部分が多い。左右の縦帯と鋸の間には界線が入っている。

また、下辺横帯は幅1.8cmで、鋸歯文Rが施されている。下辺横帯下界線は2条である。

B面の文様も四区菱波文で、横帯が縦帯に優先するものである。文様は鋸身中央部から右側の文様が不鮮明になっており、中上縦帯・右下縦帯は全く見えない。第1横帯は幅2.0cm、第2横帯は幅1.9cm、第3横帯は幅2.45cm、左上縦帯は幅1.95cm、左下縦帯は幅2.0cm、右上縦帯は幅1.9cmである。各横帯間の高さは第1横帯と第2横帯間が5.9~6.1cm、第2横帯と第3横帯間が6.0cmである。横帯・縦帯の中には斜格子文が充填されているが、鋸身中央部や右側などは文様がほとんど見えない。左右の縦帯と鋸の間には界線が入っている。

また、下辺横帯は幅1.9cmで、右側で鋸歯文Rが観察できる。下辺横帯下界線は2条である。

裾端部はA面の中央部は丸みを帯びており鋸放ちとも見られるが、鋸裾端部を除く他の部分は面をなしている。

舞 舞はアーモンド形を呈しており、舞の扁平率(舞短径÷舞長径×100)はA・B両面とも72.4%
(7.9÷10.9×100)である。舞の中央部には高さ0.2cm程の鋸脚壁状のバリがあり、端部には研磨痕が見られる。また、舞面が傾斜する肩下がりはA面が0.3cm、B面は0.5cmである。

鎌 幅はA面で左肩1.2cm・左裾1.55cm・右肩1.2cm・右裾1.6cm、B面は左肩1.2cm・左裾1.5cm・右肩1.2cm・右裾1.5cmである。文様はA面右側の裾部や左側の一部で鋸歯文Rが観察できる。B面は右側には鉢外縁と異なり鋸歯文しが入っているが、左側には外縁と同様に鋸歯文Rが施されていることがわかる。

内面突帯 補からの高さ1.6~1.7cmのところに、幅0.8~0.9cm・高さ0.15cmの突帯が1条巡っている。横断面形は低い台形状を呈し、使用に伴う磨滅によって突帯上面は面をなしている。

型持 舞に1個、鋸身上半にはA・B両面とも2個ずつ、裾部にもA・B両面とも2個ずつの計9個の型持がある。舞の型持孔は1山である。A面側短辺は湯回りが悪く不整形になっているが、内面より見ると本来は長方形を呈していたと考えられ、長さ3.4cm・幅1.8cmである。型持中央部には鋸脚壁状のバリがある。

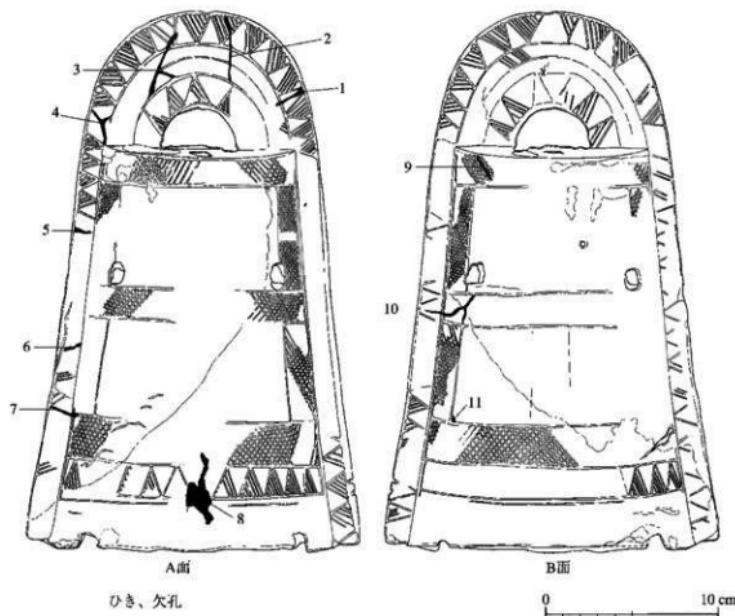
鋸身上半の型持孔はA・B両面とも第2横帯上側界線には接する位置にあるが、B面左のものは第2横帯から0.5cm程高い。A面左の型持孔は内面から見ると高さ1.6cm・幅1.4cm、右側は高さ1.8cm・幅1.5cmで、ともに長方形を呈している。B面左の型持孔は内面では高さ1.6cm・幅1.3cmと長方形で、右側は高さ1.6cm・幅1.5cmで、ともに長方形である。

裾部の型持は、内面から見るといずれも上辺がやや短い横長長方形を呈しているものと見られる。A面左は湯回りが悪く型持の一部だけ残るが、高さ0.9cm、右側は高さ1.1cm・幅1.7cmである。

B面は左が高さ1.0cm・幅1.5cm、右は上側に湯が回り型持が窪みとして残っているが、高さ1.0cm・幅1.5cmである。

鋸上がり 湯回りが悪く欠孔として残ったところは、A面は鋸身に小さいものが2ヶ所、B面は鋸身右上区と第3横帯右に2ヶ所見られる。舞はA面側の型持孔短辺の湯回りが悪く、B面側中央左には1ヶ所孔が空いている。

表面が窪む「ひき」は、舞には浅いものや小さいものを含めA・B両面に2ヶ所ずつある。鋸身



第77図 22号鋸の鋳造状態

にはA面第1横帯左に1ヶ所、左下区から下辺横帯にかけては綾状になったものを含め5ヶ所が見られる。B面は第1横帯と第2横帯に合わせて3ヶ所、裾部右下にも3ヶ所が認められる。鰐はA面左やB面左裾に1ヶ所ずつある。また、鰐下端は鋸身裾端部に対し両方とも窪んでおり、「ひき」と見られる。

また、軟X線写真によれば、A・B両面とも鋸身上半部に厚さが薄い部分が認められ、気泡状の懸は細かいものが僅かに見られる。

鉋傷 A面では鉋の菱環外斜面から外縁の鋸齒文に至る1～3、鉋脚から外縁の鋸齒文へ縦方向に延びる4が見られる。鋸身には下辺横帯中央部分に低く盛り上った8があり、第3横帯と裾部の方へ縦方向に延びている。鰐には左側に5～7があり、いずれも横方向に延びているが、7は第3横帯上界線へと続いている。

B面では鋸身の第1横帯左に9、第2横帯左に10、左下区隅部に11があり、10は左鰐に向かって伸びている。

「×」の刻線 B面菱環中央頂部やや左寄りには、鋳造後タガネ様の工具で刻まれた「×」の刻線がある。

(角田徳幸)

23. 23号鏡 [図版157~164・写真図版158~164・332~334]

型式 扁平鉢2式～突線鉢1式

文様構成 四区袈裟擗文

法量	総高	47.55cm	最大幅	28.7cm	重量	5.84kg
	舞長径(A面)	14.9cm	舞長径(B面)	14.8cm	舞短径	10.8cm
	裾長径(A面)	23.1cm	裾長径(B面)	23.1cm	裾短径	17.1cm

鏡 菱環と外縁、内縁からなる扁平鉢もしくは突線鉢である。高さはA面、B面とともに12.3cm、幅はA面が18.4cm、B面が18.3cm、鉢孔の高さは2.8cm・幅3.8cmを測る。鉢の外縁端部及び鉢孔端部には研磨痕が観察できる。菱環の幅はA面が2.6~2.8cm、B面が2.75~2.8cm、稜部の厚さは中央部で0.85cm、左右の鉢脚部で1.4cmを測る。

文様の構成はA面・B面とも基本的には同じである。外縁は第1・第2文様帯に分かれ、外縁第1文様帯には内向する鋸歯文、外縁第2文様帯には外向する鋸歯文が充填されている。外縁第2文様帯と菱環文様帯の界線は3条の複線で、その間隔はA面が0.3~0.6cm、B面が0.3~0.65cmである。綾杉文が充填された菱環文様帯は、A面では2条、B面では3条の平行直線文によって、いずれも4つの区画に分割されている。綾杉文は、菱環を横断する直線文を境に対向しており、その配列はA面がD||C||D||C、B面がD|||C|||D|||Cである。内縁には菱環に沿って外向する鋸歯文が施され、その界線から間隔を置いて1本の条線が施文されている。

A面の外縁第1文様帯は、中央の鋸歯文1単位がL Rであるほかはすべて鋸歯文Rだが、左右の鉢耳脚部に接する部分のみ半施文で、3条の平行斜線文となっている。B面の外縁第1文様帯は、中央の2単位を鋸歯文L Rとし、これを境とした左側が鋸歯文L、右側が鋸歯文Rである。幅はA面中央で2.05cm、左右端部で1.8cm、B面中央で2.1cm、左端で1.8cm、右端で1.6cmとなっており、鉢の頂部と左右端部での間隔差が比較的大きい。

外縁第2文様帯については、A面が中央を境にして左側4単位が鋸歯文R、続く4単位が鋸歯文L、右側4単位が鋸歯文L、続く5単位が鋸歯文Rとなっており、B面は中央より左側4単位が鋸歯文R、続く5単位が鋸歯文L、中央より右側4単位が鋸歯文L、続く5単位が鋸歯文Rとなっている。幅はA面中央部で1.85cm、左端で1.1cm、右端で1.0cm、B面が中央部で1.75cm、左右端部で0.9cmである。

内縁の鋸歯文は、中央部を境にして平行斜線文の方向を左右対称にする意識があったと思われる。B面は鋸歯文L Rを頂点にして、その左側にLを2単位、Rを4単位、右側には対称的にRを2単位、Lを4単位配列する。ただ、A面の場合、中央には鋸歯文Rが施文され、その左側にLが1単位、Rが6単位、右側にRが2単位、Lが5単位となっており、やや配列に乱れがある。

A面の外縁第1文様帯中央部付近と外縁第2文様帯の左端から右端にかけて、界線に沿った非常に細い条線が認められる。また、同じような線がB面では外縁第1文様帯の左から中央付近にかけての部位に観察される。この細い条線は、鑄型に文様帯の割付をする際、最初に彫り込まれた線と見られ、結果的にこの割付線は採用されず、現況のように彫られたものと考えられる(2)。

鉢及び鉢孔の端部には研磨痕が顕著に見られる。これは、鑄型の合わせ目から湯がはみ出でてバリ状になった部分を、整形・研磨したものである。

鐸身 高さはA面が35.1cm、B面が35.25cmと僅かにB面が長いが、厚さは0.45~0.5cmでほぼ均

一である。側面から見ると舞から裾にかけて外反しており、その外反率（舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100）は、A面が1.74%（0.6÷34.5×100）、B面が1.76%（0.6÷34.1×100）である。

鐸身の主文様は、A・B面ともに横帯と縦帯によって構成される四区製婆櫛文である。両面とも表面には筋によって膨らんだ部分があるが、いずれもほとんどの文様を確認することができる。文様の構成は基本的にA・B面で共通しており、側面から見た両面の文様帶にはほとんどズレはない。

A面の第1横帯は幅2.7cm、第2横帯は幅2.85cm、第3横帯は幅3.45cm、B面の第1横帯は幅2.7cm、第2横帯は幅2.8cm、第3横帯は幅3.4cmである。横帯の幅は下に行くにしたがって広くなっているが、このことは縦帯の幅についても言え、A面の中央縦帶上部で2.8cm・中程で3.0cm・下部で3.5cm、左縦帶上部で2.4cm・中程で2.6cm・下部で2.9cm、右縦帶上部で2.2cm・中程で2.4cm・下部で2.95cmとなっている。B面の縦帯幅は、中央縦帶上部で2.85cm・中程で3.2cm・下部で3.7cm、左縦帶上部で2.5cm・中程で2.6cm・下部で2.9cm、右縦帶上部で2.45cm・中程で2.55cm・下部で3.0cmを測り、A面と比較しても開きがない。製婆櫛文の横帯、縦帯内には斜格子が充填されているが、その斜格子の間隔も鐸身上部ほど密で、裾に近づくにしたがって粗となる。

第3横帯と下辺横帯の界線は複線で、その間隔は0.4cmである。下辺横帯の幅は3.5cmを測り、横帯内にはLRの鋸齒文が施されている。B面では左端から1単位のみ鋸齒文Rとなっている。下辺横帯下界線は3条で、1～3条目の間隔はA面で1.15cm、B面で1.2cmを測る。3条の下界線は、他の界線や文様の縁に比べて太く、突出しているのが特徴である。

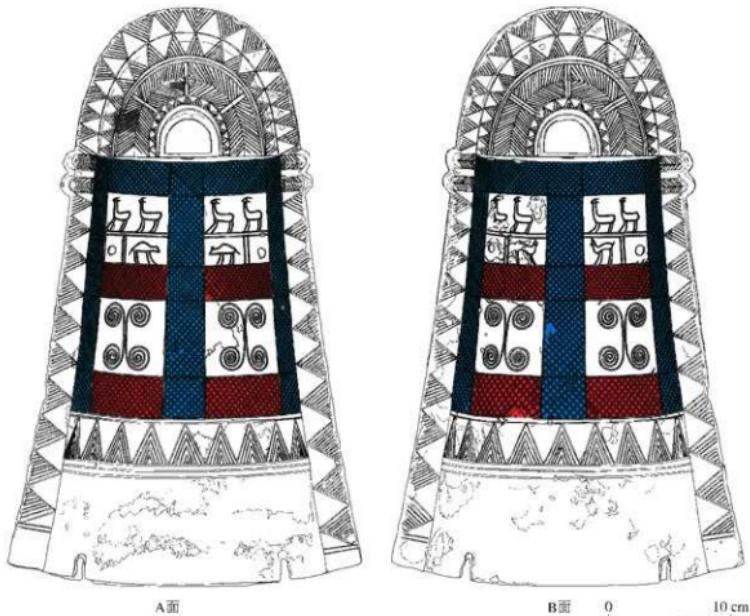
この銅鐸に特徴的なのは、製婆櫛文銅鐸に一般的に見られる横帯優先の原則が踏襲されていないことである。A面・B面ともに縦・横帯の界線が切り合っており、むしろ縦帯の界線が横帯の界線よりも明瞭である。このことは、縦帯及び横帯に充填された斜格子の連続性を観察すると一層明確になる。通常、横帯内の斜格子は縦帯を断ち割るように連続して充填されるが、この銅鐸においては、逆に縦帯の方に連続性があり、横帯を断ち割るように斜格子が充填されている。ただ、A面・B面ともに、第1横帯だけは中央、左右のいずれの縦帯にも遮断されず、充填された斜格子が連続していることがわかる（第78図）。

縦帯、横帯によって区画された各区の大きさは、A面上左区が上辺6.0cm・下辺6.3cm・高さ5.7cm、上右区が上辺6.15cm・下辺6.4cm・高さ5.7cm、下左区が上辺6.4cm・下辺6.9cm・高さ6.3cm、下右区が上辺6.2cm・下辺7.2cm・高さ6.2cmである。B面は上左区が上辺5.85cm・下辺6.1cm・高さ5.75cm、上右区が上辺5.9cm・下辺6.2cm・高さ5.75cm、下左区が上辺6.5cm・下辺6.9cm・高さ6.2cm、下右区が上辺6.3cm・下辺7.0cm・高さ6.2cmとなっている。

裾の端部は平坦で、所々に切断痕や研磨痕が観察できる。

絵画 A・B両面の鐸身には、横帯と縦帯によって区画された上区に絵画が、下区に四頭渦文が鋲出されている。A・B面ともに上段の左右2区画は、さらに2条の平行直線文によってT字状に3分割されており、その中に絵画と型持孔が配置される。

A面の上左区には、上半にシカが2頭、その下半右側にイノシシ、上右区には上半にシカが2頭、その下半左側にイノシシが描かれている。B面の上左区には、A面と同じく上半にシカが2頭、その下半右側に四足獸（イヌカ）、B面の上右区には、やはり同じく上半にシカが2頭、その下半左側に四足獸が描かれている。シカの頭部は「V」字を横にした表現になっており、A・B面とともに



第78図 23号鐘斜格子文の施文単位

上段2区画の上半に描かれたシカはすべて左向き、その下のイノシシ、四足獸は中央縦帶を軸に向かい合わせで配置されている。これらの図象は、いずれも単線の鋲出し線で表現された、いわゆる「突線画」である。

舞 舞の扁半率(舞短径÷舞長径×100)は、A面が72.48%(10.8÷14.9×100)、B面が72.97%(10.8÷14.8×100)である。A面、B面でのズレはほとんど認められない。画面の間には高さ0.3~0.35cmの鉢脚壁がある。舞面の傾斜を表す肩下がりはA面0.6cm、B面0.7cmである。

鰐 一対の飾耳によって鉢の外縁と区分された鰐は、幅がA面で左肩1.9cm・左裾3.05cm・右肩1.8cm・右裾2.9cm、B面は左肩1.9cm・左裾2.75cm・右肩2.0cm・右裾3.1cmと、裾に向かって幅広くなっている。端部には研磨痕が観察される。

文様はA面左がすべて鋸歯文R、同面右は飾耳直下のみ鋸歯文Lとなっており、B面左は裾から1単位が鋸歯文Lで、そのほかは鋸歯文R、同面右は飾耳から2単位が鋸歯文Lで、そのほかは鋸歯文Rである。A面、B面とも、鰐の幅に合わせるように鋸歯文が裾に向かって大きくなり、2本の条線によって鋸歯文列は終わる。B面右の最も裾に近い鋸歯文は、施文時における割付の失敗からか、この2条の線に遮られるように半分しか施文されていない。

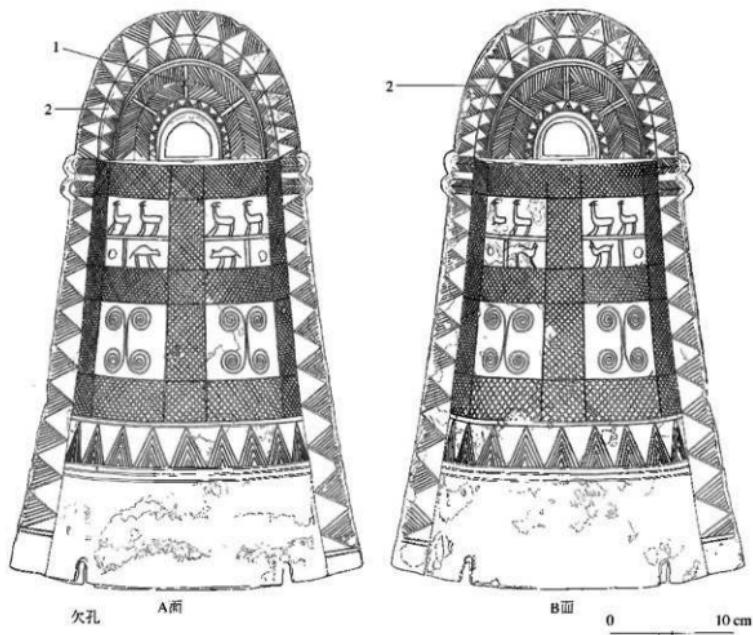
鰐の端部には、湯が鋳型からはみ出てパリ状になったところがあるが、こうした部位には整形・研磨の痕跡が認められる。

飾耳の脚部には縞杉文が施されている。A・B面とも左側が縞杉文C、右側が縞杉文Dである。
内面突帯 梓の端部から4.35~4.4cmのところに、幅0.9cm・高さ0.35cmの突帯が1条、さらに梓から5.4~5.5cmのところに、幅0.7~0.75cm・高さ0.3cmの突帯が1条、計2条の突帯が巡っている。断面は頂部がやや丸みを帯びた台形で、形状に大きな崩れはなく、顕著な使用痕は認められない。

型持 舞にはA・B面に1つずつ、鋒身上半及び梓にはA・B両面にそれぞれ2つずつの型持孔がある。舞の型持孔は、A面が円形で長径1.2cm・短径1.1cm、B面が梢円形で長径1.1cm・短径0.8cmである。

鋒身上半の型持孔は、袈裟擗文によって区画された上の2区画を、さらに2条の平行直線文でT字状に3区分した下方歸寄りの区画内にある。したがって、型持孔により文様や絵画が欠落するようなことはなく、鋳型製作の段階からきちんと計算されて造られていたと言える。いずれもほぼ円形で非常に小さい。A面左の型持孔は高さ0.7cm・幅0.9cm、同面右は高さ0.8cm・幅0.8cm、B面左の型持孔は高さ0.7cm・幅0.7cm、同面右は高さ0.8cm・幅0.85cmである。

梓の型持孔は逆「U」字形を呈しており、孔の大きさは、A面左が高さ1.8cm・幅1.3cm、右が高さ1.8cm・幅1.4cm、B面左が高さ2.3cm・幅1.45cm、右が高さ2.0cm・幅1.4cmを測る。内面における型持痕の大きさは、A面左が高さ2.2cm・幅1.7cm、右が高さ2.6cm・幅1.7cm、B面左が高さ2.6



第79図 23号鐸の铸造状態

cm・幅1.7cm、右が高さ2.5cm・幅1.7cmである。

鉢上がり 湯回りが悪く欠孔が生じたところは、A面鋤身の右縦帯の下半に1ヶ所、同面下辺横帯下界線の条線間に1ヶ所認められる。軟X線透過による調査においても、鋸造時の気泡が器内に残となって残ったところは極めて少なく、全体的に鉢上がりは良かったものと見られる。

「×」の刻線 A面の鉢には、菱環中央の稜上にタガネ様工具によると見られる「×」の刻線が認められる(1)。鋸造後に打ち込まれた刻線は、その切り合い関係から右下がりの刻線が後から施されたものと見られる。

(山崎 修)

24. 24号鉢 [図版165~169・写真図版166~169・335]

型式 外縁付鉢1式

文様構成 四区袈裟搏文

同范銅鉢 加茂岩倉38号鉢・加茂岩倉39号鉢

法量	総高	31.3cm	最大幅	19.0cm	重量	2.22kg(上付)
	舞長径(A面)	10.7cm	舞長径(B面)	10.6cm	舞短径	7.5cm
	裾長径(A面)	16.0cm	裾長径(B面)	16.3cm	裾短径	11.7cm

鉢 菱環と外縁よりなる外縁付鉢である。大きさはA面で高さ8.4cm・幅13.2cm、B面で高さ8.3cm・幅13.3cm、鉢孔の高さは2.5cm・幅2.8cmを測る。菱環はA面で幅2.2~2.9cm、B面で幅2.4~3.2cm・厚さは中央部で0.8cm・左端1.2cm・右端0.9cmである。外縁はA面で幅1.6~2.7cm、B面で幅1.0~2.0cm、厚さは中央部で0.4cm、左端で0.4cm、右端で0.3cmである。外縁の端部にはB面側で幅0.2cmまでの僅かな段があり甲張り状になっており、鉢孔部は菱環の内側にA面で幅0.5~0.9cm、B面で幅0.4~0.7cmで甲張りが残っている。

文様は表面が鋸に覆われているため見えない部分が多く、A面では全く観察できない。B面は外縁に内向する鋸齒文Rが中央部から左側に確認できるが、菱環の文様は不明である。

鋤身 高さはA面23.0cm、B面23.0cm、厚さは0.3cmである。身は舞から裾部にかけてやや外反している。外反率(舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100)はA・B両面とも1.3% (0.3÷23.0×100)である。

A面の文様は四区袈裟搏文で、横帯が縦帯に優先するものである。文様は鋤身上半部に不鮮明な部分があるが、第1横帯は幅1.9cm、第2横帯は幅1.9cm、第3横帯は幅2.3cm、左上縦帯は幅1.6cm、左下縦帯は幅1.9cm、中上縦帯は幅1.9cm、中下縦帯は幅2.1cm、右上縦帯は幅1.5cm、右下縦帯は幅1.7cmである。

各区の大きさは左上区が上辺4.3cm・下辺4.4cm・高さ5.3cm、左下区が上辺4.6cm・下辺4.8cm・高さ6.2cm、右上区が上辺3.6cm・下辺3.8cm・高さ5.3cm、右下区が上辺4.4cm・下辺4.9cm・高さ6.1cmである。横帯・縦帯の中には斜格子文が充填されているが、第1横帯第2横帯・左上縦帯・中上縦帯など鋤身上半部は見えない部分が多い。左右の縦帯と舞の間には界線が入っている。

また、下辺横帯は幅1.4cmで、右側には鋸齒文Rが施されていることがわかる。下辺横帯下界線は2条である。

B面の文様も四区袈裟搏文で、横帯が縦帯に優先するものである。文様は鋤身中央部から右側の

文様が不鮮明になっており、縦帯・横帯の界線すら見えない部分がある。

第1横帯は幅1.7cm、第2横帯は幅1.9cm、第3横帯は幅2.1cm、左上縦帯は幅1.7cm、左下縦帯は幅2.0cm、中上縦帯は幅2.0cm、中下縦帯は幅2.1cm、右上縦帯は幅1.7cm、右下縦帯は幅1.9cmである。各区の大きさは左上区が上辺3.7cm・下辺4.3cm・高さ6.0cm、左下区が上辺4.4cm・下辺5.2cm・高さ5.8cm、右下区が上辺4.1cm・下辺5.1cm・高さ5.7cmである。横帯・縦帯の中には斜格子文が充填されているが、鐸身中央部や右側などは文様がほとんど見えない。左右の縦帯と鰐の間には界線が入っている。

また、下辺横帯は幅1.4cmで、左側で鋸歯文しが観察できる。

柄端部はA・B両面ともやや丸みを帯び外傾する面をなしており、A面右側の鰐下端部分には段が付いている。

舞 舞はアーモンド形を呈しており、舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）はA面が70.1%（7.5÷10.7×100）、B面が70.8%（7.5÷10.6×100）である。舞の中央部には高さ0.5cm程の鉄脚軸状のパリがあり、舞面が傾斜する肩下がりはA面が0.3cm、B面も0.3cmである。

鰐 幅はA面で左肩1.3cm・左裾1.5cm・右肩1.3cm・右裾1.6cm、B面は左肩1.3cm・左裾1.6cm・右肩1.3cm・右裾1.6cmである。文様はA・B両面とも現状では観察することができない。

内面突帯 柄からの高さ1.3~1.5cmのところに、幅0.7~0.8cm・高さ0.1~0.2cmの突帯が1条巡っている。横断面形は低い台形状を呈しており、鐸身中央部では使用に伴う磨滅によって突帯上面がやや低くなっている。

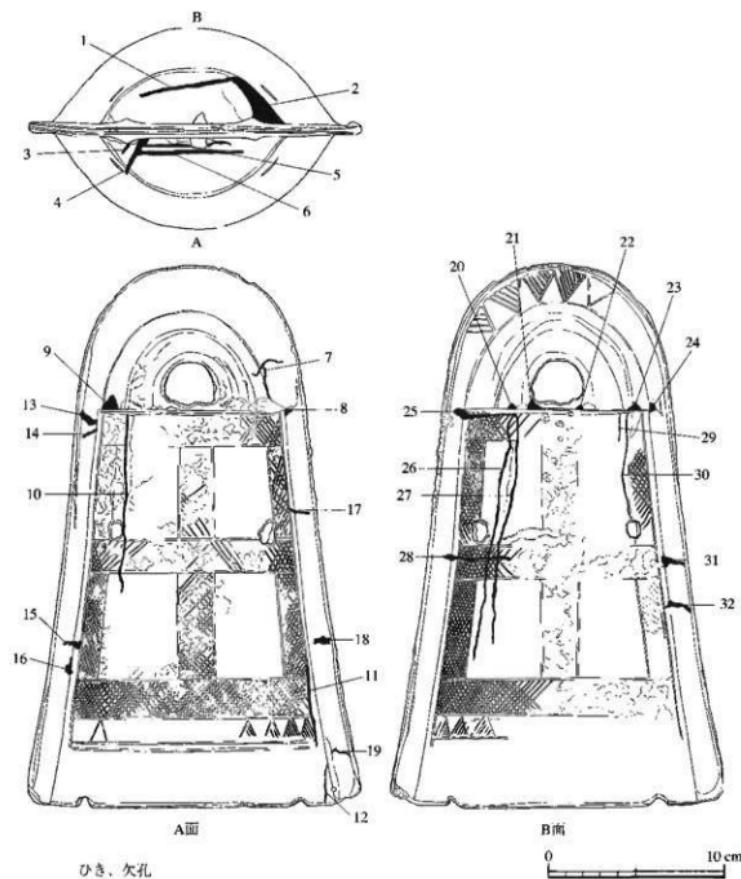
型持 舞に1個、鐸身上半にはA・B両面とも2個ずつ、柄部にもA・B両面とも2個ずつの計9個の型持がある。舞の型持孔は一山である。内面を見ると本来は長方形を呈していたことがわかり、長さ2.4cm・幅1.1cmである。型持孔を中心部には鉄脚軸状にパリがある。

鐸身上半の型持孔は、A面では第2横帯上側界線に左側は接し、右側は切り合う位置にあり、左右の上縦帯とは両者とも切り合っている。B面では第2横帯上側界線に左側は接し、右側はこれより0.5cm程高く、左右の上縦帯とは切り合う位置にある。A面左の型持孔は内面から見ると長方形を呈しており、高さ1.5cm・幅0.9cmである。右側は内面に型持の形状は残しておらず不整形になっており、現状で高さ1.5cm・幅0.9cmである。B面左側の型持孔は土が付着しているため内面の形状は分からぬが、現状では高さ1.2cm・幅1.2cmで、右側は内面から見ると長方形を呈し、高さ1.3cm・幅1.1cmである。

柄部の型持は、A面側では内面から見ると横長長方形の段として痕跡を留めており、左側は高さ0.8cm・幅1.3cm、右側は高さ0.8cm・幅1.6cmである。B面は内面に付着する土砂のため、型持本来の大きさ・形状は不明であるが、外面からは左が高さ0.5cm・幅1.2cm、右は高さ0.5cm・幅1.4cmである。

鰐上がり 湯回りが悪く欠孔として残ったところは、A面は鐸身左型持孔の下に小さいものが1ヶ所認められるのみである。表面が瘤む「ひき」は、A面では左右の鉄脚部や鐸身左上の範傷10に沿う位置にあり、B面では舞の範傷2や鐸身の範傷27・30に沿う部分、第2横帯左上などに浅いものが認められる。また、鰐ではA面左側下端でも「ひき」が観察できる。

軟X線写真は内部に土が残っているため、鐸身の密着撮影はできなかったが、気泡状の空隙は細かく、比較的少ない。



第80図 24号鐸の铸造状態

範傷 A面では鋤に左側鋤脚部が盛り上がる9、右側鋤脚部から延びる7があり、舞では鋤に平行する方向に5・6、これと鈍角に交わるように3・4が見られる。鋤身では上半部左側に縦方向に延びる10や第3横帯右側付近の界線が太くなった11、裾から鰐へと延びる12・19があり、鰐には左側に13~16があり、右側には8・17・18がある。

B面では鋤脚部が小さく盛り上がった20~21、舞には斜め方向に延びる1や左側の鋤脚部から範傷1までが僅かに盛り上がる2がある。鋤身は鰐の付け根から第1横帯・第2横帯に延びる25・28、縦方向に延びるものには左側に26・27、右側に29・30がある。右側鰐には鋤身付け根から延びる31・32がある。

(角田徳幸)

25. 25号鋤 [図版170~174・写真図版171~175・336~338]

型式 外縁付鋤1式

文様構成 四区袈裟搏文

法量	総高	30.5cm	最大幅	18.2cm	重量	2.20kg
	舞長径(A面)	10.8cm	舞長径(B面)	10.9cm	舞短径	7.6cm
	裾長径(A面)	15.9cm	裾長径(B面)	15.6cm	裾短径	11.7cm

鋤 菱環と外縁による外縁付鋤である。高さは7.25cm・幅12.2cm、鋤孔の高さは4.0cm・幅4.7cmを測る。菱環は外縁との境界に不明な点があるが、A面で幅2.6~2.9cm、B面で幅2.2~2.4cm・厚さは中央部で0.5cm・左端1.0cm・右端1.1cmである。外縁はわかるところでA面が幅0.8cm、B面は幅1.0cm、厚さは中央部で0.2cm、左右端で0.3cmである。

文様は判然としない部分が多いが、A面は外縁に内向する鋸齒文しが見られる。菱環は外斜面右側に平行斜線文R、左側に平行斜線文L、内斜面右側には平行斜線文L、左側には平行斜線文Rが観察できることから、菱環を1つの文様階として見ると、中央部を挟んで綾杉文CとDが対向するよう配置されているものと思われる。

B面は外縁に左側などで内向する鋸齒文Rしが確認できる。菱環外斜面では文様を確認することはできないが、内斜面には左側に平行斜線文R、右側に平行斜線文しが施されている。

鋤身 高さはA面23.0cm、B面23.3cm、厚さは0.3~0.45cmである。身は舞から裾部にかけて外反するが、僅かである。外反率(舞・裾部からの最深値÷舞から裾の長さ×100)はA面側で0.87% (0.2÷23.0×100)、B面側で0.65% (0.15÷23.2×100)である。

A面の文様は四区袈裟搏文と思われるが、文様は全体に不鮮明で、第1横帯、右下綾帯、第3横帯、下辺横帯の一部が見えるに過ぎない。第1横帯は幅2.4cm、第3横帯は幅2.3cmである。横帯・綾帯の中には斜格子文が充填されているが、見えない部分が多い。また、下辺横帯は幅1.4cmで、右側の鱗の付け根に鋸齒文しが半位文、その左に鋸齒文Rが施されている。下辺横帯下界線は現状では1条しか見えない。

B面の文様も不鮮明な部分が多く、第2横帯と僅かに第3横帯上の界線が見えるに過ぎない。第2横帯は幅2.3cm、内部には斜格子文が充填されている。

裾端部はA・B両面とも丸みを帯びているが、左右の鱗端部付近はやや厚くなっている、外側に張り出すように膨らんでいる。

舞 舞はアーモンド形を呈しているが、B面の欠孔に接する部分がやや窪んでいる。舞の扁平率(舞短径÷舞長径×100)は、A面で70.4% (7.6÷10.8×100)、B面で69.7% (7.6÷10.9×100)である。舞の中央部には高さ0.3~1.3cm程の大きな甲張りがある。また、舞面が傾斜する肩がりはA面ではほとんど見られないが、B面は0.2cmである。

鱗 幅はA面で左肩0.8cm・左裾1.4cm・右肩0.7cm・右裾1.3cm、B面は左肩0.6cm・左裾1.5cm・右肩0.8cm・右裾1.1cmである。文様はA面右側肩部に鋸齒文Rが2個分入っており、その下には鋸齒文しが並んでいる。また、鱗から9個めの鋸齒文は僅かに見える条線によってRであることがわかり、その2つ下からは鋸齒文しが並び観察できる。A面左側は確認できるものはみな鋸齒文しだ。B面は右側には鋸外縁と異なり確認できるものでは鋸齒文しが並んでいる。左側には外縁と同様に鋸齒文Rが施されていることがわかる。

なお、A面右側鋸端部は幅0.2cmほどの段になっており、裏側のB面左側鋸端部にも幅0.2~0.3cmほどの段が認められることから、甲張りが残っているものと思われる。

内面突帯 梔からの高さ1.2~1.4cmのところに、幅1.1~1.0cm・高さ0.2cmの突帯が1条巡っている。横断面形は低い台形状を呈している。

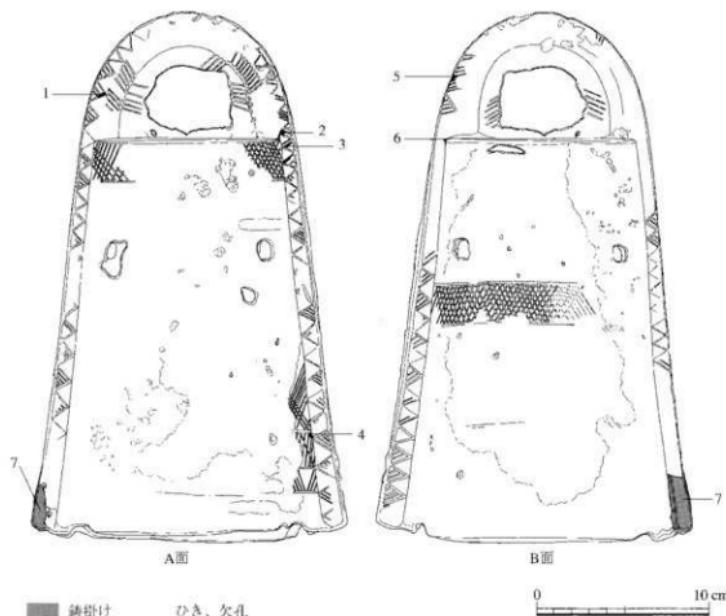
型持 舞に1個、鐸身上半にはA・B両面とも2個ずつ、梢部にもA・B両面とも2個ずつの計9個の型持がある。

舞の型持孔は一山である。内面より見ると長方形を呈しており、長さ2.1cm・幅1.3cmで、型持中央部には甲張りがある。

鐸身上半の型持孔はA面の位置ははっきりしないが、B面では第2横帯より1.4cm程高いところにある。A面左の型持孔は湯回りが悪く形状不明であるが、右側のものは内面から見ると長方形を呈しており高さ1.6cm・幅1.3cmである。B面の型持孔は内面から見ると左右ともに長方形で、左側は高さ1.6cm・幅1.3cm、右側は高さ1.5cm・幅1.3cmである。

梢部の型持は、内面から見るとA面左側は高さ0.5cm・幅2.1cmの長方形を呈しているが、A面右側は湯回りが悪く形状が不定形になっている。B面側は内面から見ると、左右ともに長方形を呈しており、左側が高さ0.7cm・幅2.1cm、右側は高さ0.7cm・幅2.3cmである。

鋳上がり 湯回りが悪く欠孔として残ったところは、鋸に1ヶ所、A面は鐸身右型持孔下に1ヶ



第81図 25号鐸の鋳造状態

所、B面は鐸身左上部に1ヶ所見られる。また、軟X線写真によれば、A面左・B面右鰐下端に鈎掛けがあることから、この部分にも鋳造欠陥があったことがわかる。

また、表面が窪む「ひき」は、舞ではA面側に1ヶ所、B面側に2ヶ所浅いものがある。A面は鉢頭部に1ヶ所、鐸身右型持孔上に1ヶ所、内面突帯に当たる部分の外側に3ヶ所、右側鰐に1ヶ所見られる。B面は鉢頭部と左右の鉢脚部に合わせて3ヶ所、鐸身左型持孔の上に1ヶ所、第3横帯上界線に1ヶ所、左側鰐の鋸歯文内にも1ヶ所が認められる。

范傷 銅鐸表面が錫に覆われ文様等が見えにくくなっているものもある。范傷も確認できるものは少ない。A面では鉢左側外縁の鋸歯文の1や舞右側の鋸歯文の2・3、第3横帯右側の鰐付け根部分の4が認められる。また、B面では鉢左側外縁の鋸歯文の5や舞左側の鰐付け根部分の6のような小さいものがある。

鈎掛け 軟X線写真によればA面左・B面右側鰐下端部の7に鈎掛けが認められる。鈎掛けは径約0.35cmの足掛り孔を2個設けてから行っており、周囲の鰐よりやや盛り上がっている。また、B面側には鈎掛けに際してられたものの痕跡が鐸身に沿って線状に残っている。(角田徳幸)

26. 26号鐸 [図版175~182・写真図版177~182・339~341]

型式 扁平鉢2式

文様構成 四区袈裟繩文

同范銅鐸 加茂岩倉1号鐸

法量	総高	46.9cm	最大幅	28.3cm	重量	5.32kg
	舞長径(A面)	15.2cm	舞長径(B面)	15.2cm	舞短径	11.4cm
	柄長径(A面)	23.2cm	柄長径(B面)	22.9cm	柄短径	16.5cm

鉢 菱環と外縁・内縁よりなる扁平鉢である。大きさはA面で高さ12.6cm・幅18.9cm、B面で高さ12.7cm・幅18.8cmである。鉢孔の高さは3.0cm・幅4.0cmを測る。菱環はA面で幅2.6~3.0cm、B面で2.4~3.1cm、厚さは中央部で0.9cm・左右端部で1.4cmである。菱環頂部の位置はB面がA面に対し0.2cm程度高くズレている。

外縁は2つの文様帯で構成されており、外縁第1文様帯はA面で幅1.6~1.7cm、B面で幅1.5~1.9cm、厚さ0.3~0.4cmで、外縁第2文様帯はA面で幅0.9~1.6cm、B面で幅1.0~1.7cm、厚さ0.3~0.4cmである。内縁はA面で幅1.1~1.4cm、B面で幅1.1~1.8cm、厚さ0.4~0.6cmである。鉢孔部は内縁より1段低く、パリ状になっている。

文様は内縁を除きA・B両面ともほぼ同じ構成である。A面は外縁は第1・第2文様帯とも内向する鋸歯文Rが施されているが、第1文様帯中央部には鋸歯文間に条線が充填された部分が1ヶ所ある。第1文様帯の右端に半鋸歯文の輪郭線のように斜線が2回に分けて入れられている。

第2文様帯左端にも同様な斜線が1条見られ、右端は鋸歯文と舞の間に少し空白部がある。菱環文様帯は中央部に3条の界線を入れ左右に向ける綾杉文を施したD||Cである。内縁は3条の界線が平行に施された重圓文になっている。

B面も外縁第1・第2文様帯とも内向する鋸歯文Rを入れている。第1文様帯の右端に半鋸歯文の輪郭線のように斜めに1条の線が入っている。菱環文様帯は中央部に3条の界線を入れ左右に対

向する綾杉文を施したD || Cである。内線は外線と同様に内向する鋸歯文Rが入っているが、左端には半鋸歯文状に斜めに1条の線が入る。鋸歯文内の条線は特にB面で輪郭線をはみ出したものが多い。

鐸身 高さはA面34.2cm、B面34.0cm、厚さは0.3cmである。身は舞から裾部にかけてやや外反し、外反率（舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100）はA面側で1.75%（0.6÷34.3×100）、B面側で2.07%（0.7÷33.8×100）である。

A面の文様は四区製装襷文で、横帯が縦帯に優先するものである。各区の大きさは上左区が上辺5.8cm・下辺6.2cm・高さ7.4cm、上右区が上辺5.9cm・下辺6.5cm・高さ7.4cm、下左区が上辺6.5cm・下辺7.1cm・高さ8.2cm、下右区が上辺6.7cm・下辺7.4cm・高さ8.2cmである。第1横帯は幅2.3cm、第2横帯は幅2.4cm、第3横帯は幅2.5cm、左上・左下縦帯が幅2.6cm、中上・中下・右上・右下縦帯が幅2.7cmである。製装襷文内には斜格子文が充填されている。また、下辺横帯は幅2.5cmで、鋸歯文Rが施されている。下辺横帯下界線は3条である。

B面の文様はA面と同様に四区製装襷文である。各区の大きさは上左区が上辺6.0cm・下辺6.2cm・高さ7.4cm、上右区が上辺5.7cm・下辺6.4cm・高さ7.4cm、下左区が上辺6.5cm・下辺7.1cm・高さ8.2cm、下右区が上辺6.4cm・下辺7.3cm・高さ8.2cmである。第1横帯は幅2.4cm、第2横帯は幅2.3cm、第3横帯は幅2.5cm、左上縦帯が幅2.5cm、左下・中上・中下縦帯が幅2.8cm、右上・右下縦帯が幅2.7cmである。第2横帯に右側に右上縦帯の界線とは少し食い違うが、斜格子内に縦線が入っている。また、下辺横帯は幅3.0cmで、鋸歯文Rが施されているが、左端には半鋸歯文状に斜めに1条の線が入る。下辺横帯下界線は3条である。

裾端部は欠損がある部分を除いて面をなしており、全体に研磨痕が残っている。

舞 舞はア・モンド形を呈しており、舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）はA・B両面とも75%（11.4÷15.2×100）である。A・B両面は同じ高さに揃っており、舞は中央に高さ0.2cmの鋸脚葉状のパリがある。また、舞面が傾斜する肩下がりはA面0.3cm、B面0.2cmである。

幡 幡はA面の左飾耳に接する部分で1.9cm・左裾で約3.2cm・右飾耳の部分で2.2cm・右裾2.4cm、B面は左飾耳部分で1.9cm・左裾2.7cm・右飾耳部分で2.0cm・右裾2.8cmである。文様はA・B両面とも基本的には内向する鋸歯文Rであるが、B面右飾耳に接するものののみ鋸歯文Lになっている。また、B面左下には半鋸歯文状に斜めに1条の線が引かれている。

飾耳は半円形で脚部を持つものが2個1組ずつ左右に付いている。飾耳頭部はやや厚くなっており、端部にかけて斜面を持つ。飾耳脚の中央にはこれを上に分割するように条線が入っており、A面の右飾耳には綾杉文Cが充填されている。

内面突帯 2条突帯である。裾からの高さ2.9cmのところに、上段で幅1.0~1.1cm・高さ0.3cm、下段で幅1.2cm・高さ0.4cmの突帯が巡っている。横断面形は頂部が丸みを帯びた三角形状または台形状を呈するが、使用に伴う磨滅はそれほど顕著ではない。

型持 舞に2個、鐸身上半にはA・B両面とも2個ずつ、裾部にもA・B両面とも2個ずつの計9個の型持がある。

舞の型持孔は内面より見ると、A面側、B面側とも円形を呈している。大きさは前者が径1.8cm、後者が径1.7cmを測る。

鐸身上半の型持孔はA・B両面とも左上区または右上区の下半にある。A面左の型持孔は内面で

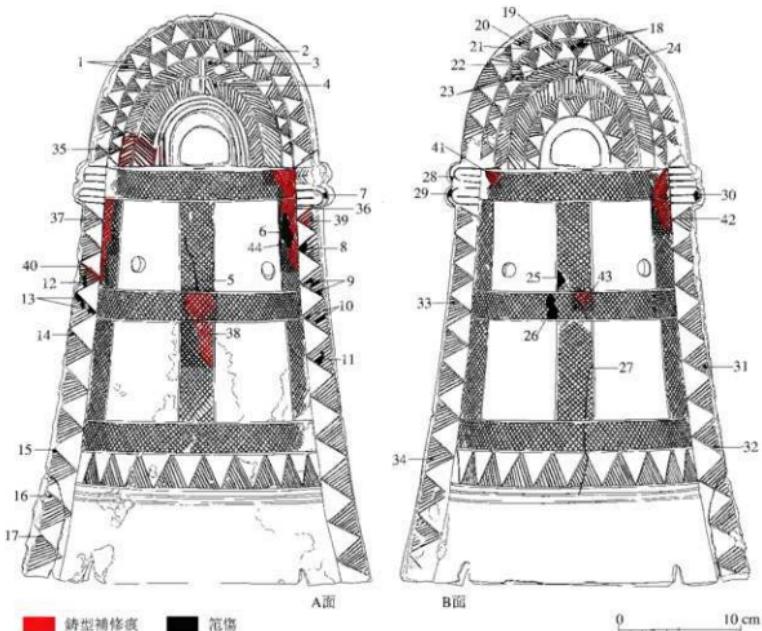
は高さ1.9cm・幅1.8cm、右は高さ2.1cm・幅2.2cmのほぼ円形を呈しており、両者とも型持孔の周囲が縁取りされたようにやや盛り上がっている。B面左の型持孔は内面では高さ1.8cm・幅1.8cm、右は高さ1.8cm・幅1.8cmの円形を呈し、前者は型持孔の上側が縁取りされたようにやや盛り上がる。

據部の型持は内面から見ると頂部の丸い台形状を呈しており、A面左は高さ1.9cm・幅1.9cm、右は高さ1.6cm・幅1.4cmである。B面左は高さ1.7cm・幅1.4cm・右は高さ1.6cm・幅1.4cmである。このうち、B面左の型持孔は鰐側の一部が鋳造後に半円形状に加工されている。

鋳型の食い違い A面鉢右側から右鰐耳付近にかけて端部付近に段があり、0.4~0.6cm程度の幅で甲張り状になっている。また、この裏面に当たるB面鉢左側の鋸歯文はそのまま端部に達している。舞面の高さに違いはないので、鋳型が左右にズレる形で固定されたものと見られる。

鋳上がり 鋳上がりは良好で、湯回り不良に伴う欠孔や表面が崖む「ひき」は見られない。

范傷 A・B両面とも紐・鉢身・鰐にかなりの数の范傷が認められる。A面は紐では鋸歯文内のI・2・綾杉文内の3・4がある。鉢身中央部には中上縦帯にあり比較的浅い5があるが、これに続く第2横帯、中下縦帯には鋳型補修痕の38があり、補修前はもう少し大きな范傷であったと思われる。また、6のように斜格子文が潰れやや盛り上がっている部分もある。鰐は右鰐耳頭部の7や鋸歯文内の8~17に范傷がある。



第82図 26号鐸の鋳造状態

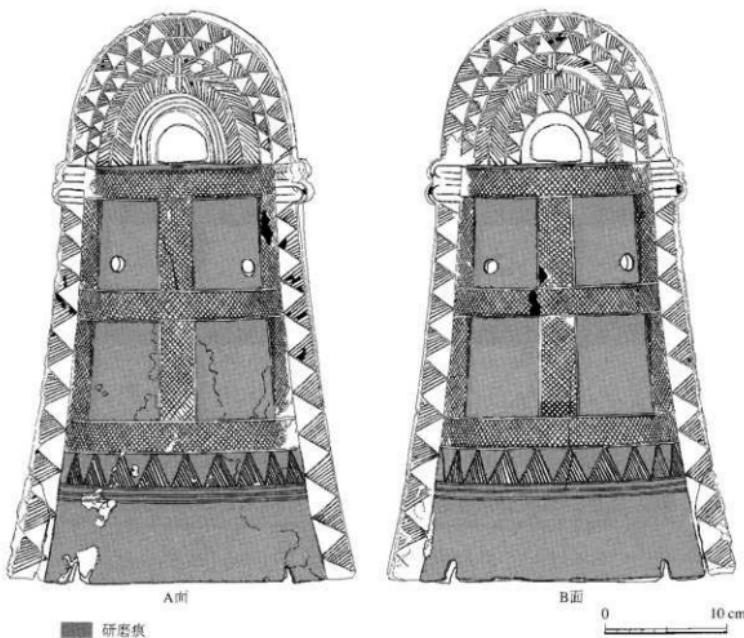
B面鉸では鋸歯文内の18~22、綾杉文内の23・24にある。鉸身中央部には中下縦帯から第3横帯・下辺横帯を貫く27があるが、比較的浅く細い。また、25・26のように斜格子文が潰れやや盛り上がっている部分もある。鉸は左右飾耳頭部の28~30や鋸歯文内の31~34に範傷がある。

鋸型の補修 A・B両面とも文様の書き直しや表面の盛り上がりなどから、鋸型を補修したと見られる部分が顕著である。A面は鉸脚左付近の35、鉸身の第1横帯右・右上縦帯の36、左上縦帯の37、第2横帯・中下縦帯の38がある。このうち35は内線の重圓文、36・37・38は斜格子文に食い違いが見られる。鉸は右上端の39と左上から3つ目にあたる40の鋸歯文内条線に食い違いがあり、補修が行われたことがわかる。

B面は第1横帯左の41、第1横帯右・右上縦帯の42、第2横帯の43があり、いずれも斜格子文が不整合になっている。

研磨・補刻 A・B両面とも舞面、袈裟襷文内の上左区・上右区・下左区・下右区、下辺横帯の鋸歯文間、及び裾に研磨を加えており、光沢をもっている。また、A面右上区の右上縦帯界線を縁取るように細い刻線(44)が認められる。

「×」の刻線 B面鉸菱環文様帯の頂部、中央の界線右側に、鋳造後タガネ様の工具で刻まれた「×」の刻線がある。
(角田徳幸)



第83図 26号鉸の研磨状態

27. 27号鐸 [図版183~187・写真図版184~187・342~344]

型 式 外縁付鉢1式

文様構成 四区袈裟摩文

法 量	総 高	31.4cm	最大幅	18.9cm	重 量	2.16kg
	舞長径(A面)	11.2cm	舞長径(B面)	11.4cm	舞短径	8.05cm
	裾長径(A面)	15.9cm	裾長径(B面)	15.9cm	裾短径	11.7cm

鉢孔の高さは4.0cm・幅4.9cmを測る。菱環の幅はA面中央で3.0cm・左端3.1cm、B面中央で2.9cm・左端3.3cm・右端3.1cmである。菱環の厚さは中央で0.7cm、A面を基準とした場合、左端鉢脚部1.3cm・右端鉢脚部1.2cmである。

文様は磨滅や銷等により不鮮明な部分が多く、A面では菱環の左端部と外縁頂部付近、B面では菱環中央部と外縁右端部で僅かに文様が確認できるに過ぎない。

外縁には、A・B面ともに内向する鋸歯文しが施されている。幅はA面中央で1.4cm・左端0.9cm、B面中央で1.4cm・左端0.85cm・右端0.9cmである。A面の菱環外斜面には綫杉文Dが施されていることがわかるが、B面ではほとんど文様を確認することができない。ただ、右側で僅かにR方向の平行斜線文が認められることから、内向する鋸歯文Rか、A面同様に綫杉文Dが施されたものと考えられる。

菱環内斜面はA・B面とも1条の界線によって二分されており、その外側には内向する鋸歯文Lが充填されている。A面の内斜面内側は文様が確認できない。B面では微かにL方向の平行斜線文が認められ、外側の鋸歯文に対向する鋸歯文Lしが施された可能性が考えられる。

鐸身 高さはA面で23.4cm、B面で23.45cmで、厚さは0.2~0.3cmである。側面から見ると外反しており、その外反率(舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100)は、A面が0.88% (0.2÷22.6×100)、B面が1.33% (0.3÷22.6×100)である。

鐸身の主文様は、左右及び中央の縦帯と3つの横帯によって区画された四区袈裟摩文である。縦帯及び横帯内には斜格子文が充填されているが、表面を覆う銷と磨滅のため、A・B面ともに文様が不明瞭となっているところが多い。縦・横帯の界線及び充填された斜格子文は横帯が優先されている。

縦・横帯の幅は、A面の第1横帯が1.9cm、第2・第3横帯1.8cmで、左上縦帯が1.8cm、中上縦帯が1.9cm、中下縦帯2.0cm、右上縦帯が1.8cm、右下縦帯1.8~1.9cmである。B面は第1・第2・第3横帯が1.9cmで、中上縦帯が1.8cm、中下縦帯1.9cm、右下縦帯1.7~1.8cmである。

A面左下区内には「I」字状に盛り上がった部分が認められる(4)。周辺が銷に覆われているため、端部が明瞭でなく、観察できるのは長さ0.8cmの上側水平部分と、長さ1.2cmの垂直線部分に限られる。区画内に施された記号もしくは絵画の一部として注目される。

下辺横帯はA・B面ともに幅が1.8~2.0cmである。A面には左と右側の一部で鋸歯文Rが認められ、右端のものは半単位文となっている。B面の文様は銷等により判然としない。

下辺横帯下界線は3条で、1~3条目の間隔はA面が0.6~0.8cm、B面が0.6~0.7cmである。A面の下界線は、磨滅のために中央付近で条線が潰れ、一部で境界が不明瞭になっているところがある。

舞 舞の扁平率(舞短径÷舞長径×100)は、A面が71.88%(8.05÷11.2×100)、B面が70.61%(8.05÷11.4×100)である。A・B面で僅かに横方向のズレが認められる。A面とB面の間には、高さ0.1~0.3cmのバリが残されている。舞面の傾斜を示す肩下がりは、A面が0.4cm、B面が0.3cmである。

鎧 A・B面とも、鉢の外縁から連続する鋸歯文しが施されている。

鎧の幅は、A面左肩1.0cm・左裾1.4cm・右肩1.05cm・右裾1.6cm、B面左肩0.9cm・左裾1.6cm・右肩1.0cm・右裾1.4cmである。

内面突帯 裙端部から1.0~1.3cmのところに、幅0.6~0.7cm・高さ0.15~0.3cmの突帯が1条巡っている。断面は、上辺が丸みを帯びて裙端部へやや傾斜した台形状を呈しており、全体的にかなり磨滅した状況が窺える。

型持 舞に1つ、鎧身上半にはA・B両面にそれぞれ2つずつの型持の痕跡が認められる。

舞の型持孔は、外向から見るとA・B面にそれぞれ1つずつの孔があるように見えるが、内面の型持痕はひと続きになった長方形を呈している。これは型持が1山であったことを示しており、鉢脚腰状に残ったバリによってA・B面が区分されたことによる。内面における型持痕の大きさは、長辺が4.1cm、短辺が1.7cmである。

鎧身上半の型持孔は、A・B面とも第2横帯と左右上綾帯の交点付近にある。いずれも孔が縦・横帯に重なっており、文様の一部が欠落している。型持の周辺で湯回りが悪かったためか、型持孔は概して不整形で、特にA面左側は、型持孔とその直下にできた穴が重なって「く」の字状を呈している。しかし、内面を見ると、いずれも部分的にではあるが隅丸方形状の痕跡が認められ、型持本来の形状を窺い知ることができる。内面における型持痕の大きさは、A面左が高さ1.5cm・幅1.4cm、右が高さ1.6cm・幅1.5cm、B面左が高さ1.5cm・幅1.5cm、右が高さ1.5cm・幅1.6cmである。

A面右側とB面左側の裾端部には型持孔の痕跡が認められる。

鑄型の食い違い B面左下半の端部には、A面との鑄型のズレによって段になっているところがある(9)。ただ、反対側のA面右鎧とB面左鎧には著しいズレが認められない。したがって、多少のズレはあるにせよ、もともとA面とB面では、鑄型に彫り込まれた幅に違いがあったのではないかと考えられる。

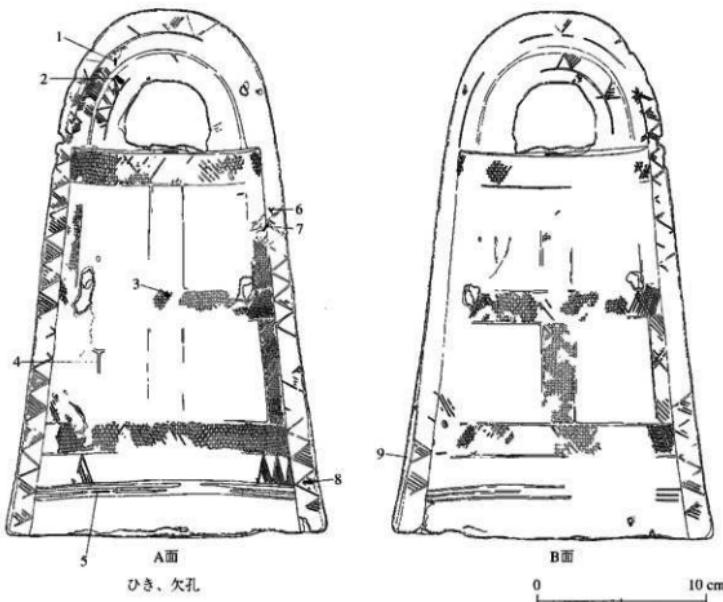
鎧上がり 湯回りが悪く穴として残ったところは、鉢に2ヶ所、A面には鎧身上部左側の型持孔直下に見られる部位を含めて4ヶ所、B面に2ヶ所認められる。また、軟X線調査によると、鎧掛けを施した形跡はないものの、铸造時の気泡が繋となって多数空いており、湯のまわり具合にもムラが認められることから、鎧上がりはあまり良くなかったものと思われる。

「ひき」は、舞では内外面ともに型持孔の周辺や鉢の付け根付近に見られる。また、A面右鎧の裾部や内面突帯の付け根付近、A面鎧身上面の左鎧近くにも認められる。

范傷 鎧と磨滅のため、范傷を押さえることは難しい。そのなかで、范傷の可能性があるところは、A面の鉢に2ヶ所、鎧に2ヶ所、鎧身上面に3ヶ所認められる。

1・2は綾杉文の平行斜線文間にあり、幅広の膨らみを持つ。7は鎧と鎧身の境にまたがる膨らみである。6と7の間には浅い窪みがあるため、これらが范傷でなく「ひき」によってできた可能性もある。3は第2横帯の斜格子文間にある。下辺横帯下界線間にある5は、界線が潰れたようになった傷である。

(山崎 修)



第84図 27号鋒の铸造状態

28. 28号鋒 [図版188~195・写真図版189~194・345~347]

型式 外縁付鉢2式～扁平鉢1式

文様構成 二区流水文

法量 総高 45.1cm 最大幅 28.7cm 重量 4.26kg

舞長径(A面) 15.0cm 舞長径(B面) 15.1cm 舞短径 10.6cm

柄長径(A面) 23.9cm 柄長径(B面) 23.9cm 裙短径 16.6cm

鉢 文様構成は外縁・菱環・内縁からなる扁平鉢式である。鉢は、高さがA面12.0cm・B面12.2cm、幅が19.0cmである。鉢孔は現状では高さ2.6cm・幅3.3cmである。鉢高のA面右側付け根の部分は(8)、B面では鉢の内縁と段差がつくがA面では段差が無いことから、バリないしはA面の鉢型が損傷し孔が小さくなつたものと思われる。本来の鉢孔は幅2.6cmの半円形と推定される。鉢孔高の鉢高における比率(鉢孔高÷鉢高×100)は21.7% ($2.6 \div 12.0 \times 100$)で、外縁付鉢2式横型流水文に比べて小さくなるとされる3対耳扁平鉢式流水文の平均値(22%) (難波1991)にあたる。

菱環後高(舞から菱環後顶部までの高さ)はA面で6.6cmとなり、菱環後頂の位置(菱環後高÷鉢高×100)は55% ($6.6 \div 12.0 \times 100$)の位置にあることになる。3対耳扁平鉢式流水文の菱環後頂の位置は50%と中央にくることが指摘されているが(難波1991)、本鋒はやや高く、むしろ外縁付鉢2式横型流水文と同じ位置にある。これは3対耳扁平鉢式流水文が全面一区の流水文が多いのに対して、本鋒は外縁付鉢2式と同じ二区流水文であり、外縁付鉢2式の特徴を残す段階と捉える

こととも可能であろう。

A面は、外縁第1文様帯が中央で幅2.6cm、左右の端は不鮮明になっているが幅2.1cm程度で、幅の差が大きい。このため鉢頂部の鋸歯文を鉢脚のものに比べて大きくすることで、幅の差を解消している。厚さは0.3~0.4cmで鋸歯文Lを充填している。外縁第2文様帯は幅が中央1.5cm、両側はやはり不鮮明だが左端0.95cm、右端1.2cmで、厚さは0.3~0.4cmである。外向きの鋸歯文Rを充填している。菱環は中央で幅1.8cm、左右の端は1.6cm前後と推定され、厚さは中央で0.65cm・左端1.1cm・右端1.15cmを測る。CD縦杉文を飾り、菱環文様帯として独立している。菱環文様帯の成立によって明確化する内縁は、中央で幅3.4cm・厚さ0.2cmで、渦文の渦巻部が2単位見られるが、全体としてどのような文様構成となるかはわからない。

B面は、外縁第1文様帯が中央で幅2.4cm、右端で2.2cmあり鋸歯文Rを充填している。鋸歯文は鉢頂部に比べて鉢脚側では細長くなっている。外縁第2文様帯は中央1.6cm・左端1.4cm・右端1.2cmの幅を持ち、内向きの鋸歯文Rを充填している。外縁第1文様帯の鋸歯文の条線は4ないし5条で鉢の付け根側の小さくなるものは数が少なくなるが、外縁第2文様帯では4から7条でばらつきがあり、配置の傾向も一定していない。菱環は幅が中央2.55cm・左端1.75cm・右端1.9cmで、CD縦杉文を飾り菱環文様帯として独立している。内縁にあたるのは中央3.0cm・左端1.75cm・右端1.9cmを測るが、文様はないようである。

籠身 身高はA面32.7cm・B面32.6cmで根幅は両面とも23.9cmを測る。厚さは0.3cmである。文様部の上下高はA面25.9cm・B面25.7cmである。身は反りを持っており、外反率（舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100）はA面1.69%（0.55÷32.6×100）・B面1.82（0.6÷32.9×100）である。A面では下区の流水文の6~7段目、B面では下区の4~5段目あたりが最も反りの深さが大きくなっている。

文様構成は両面とも横帶によって区画された上区横型流水文である。流水文は上区・下区とも8c7x横型流水文で、左右の反転部はE反転である。

A面は全体的に文様が不鮮明だが、流水文の上下幅は上区10.2cm・下区10.2cmを測る。条線が途切れたり、不自然な方向にズレたりしているのは「ひき」によって文様が動いたためと思われる(10・17)。第1横帯と思われる部分は幅1.3cmであるが、空Iで文様は現状では見ることができない。同様に下辺横帯は幅2.4~2.6cm程と思われるが、やはり文様が見られず詳細は分からぬ。下辺横帯の下界線は幅1.75cmの間に3条ある。

B面も全体的にやや不鮮明であるが、A面に比べると文様構成の全体が把握できる。この面でも「ひき」により文様が、途切れたりズレたりしている(28・32・35)。特に上区ではそれが顕著で、文様がスタンプされた後に完全に凝固する前に「ひき」によってズレが生じ、再度スタンプされたため文様が二重になっている部分がある(24)。

流水文は上区10.4cm・下区10.2cmを測りA面とはほぼ同じである。第1横帯は幅1.4cmで比較的狭く、鋸歯文のRとLを交互に配する意図が見えるが中央付近ではLとJ同じ鋸歯文が並んでいる。下辺横帯はまったく鏽出されていないが、幅2.0~2.3cmと推定される。下辺横帯下界線は幅1.75cmの間に3本ある。そのうち最下の線は「ひき」によって右側が下方に流れている。

また、身下縁の半坦面はほぼ全体が加工され面取りされている。

舞 舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）は70.6%（10.6÷15.0×100）である。B面には「ひき」

による窪みがある。B面の身との境には「ひき」による段差がある（22）。

鱗 A面では幅が左肩2.2cm・左裾2.6cm・右肩2.1cm・右裾2.55cmを測る。鰐耳は右鰐では鰐耳の脚部の条線が3ヶ所で確認できることから、鱗は3対耳であったことがわかる。条線は単線である。鰐耳の位置は上位が身の上端、中位が第1横帯の下、下位が下辺横帯下界線にあり、外縁付鉢2式3対耳横型流水文と同様である。鋸歯文しが飾られるが、文様の不鮮明な部分がありその数は明確でないが、右鰐では上区4個・中区4個・下区2個と推定される。

B面では幅が左肩で1.95cm・左裾2.8cm・右肩で2.1cm・右裾で2.4cmである。鰐耳は、身上端の鰐耳と右鰐下位の鰐耳脚部が確認できる。鋸歯文も僅かしか鋲出されていないが、左右とも鋸歯文Rが飾られているようである。下位の鰐耳の位置は下辺横帯下界線の位置である。左右とも鋸歯文Rが飾られるが、右上位の鰐耳の下は半鋸歯文（30）になっており、鰐耳を彫った後に鋸歯文が彫られたことがわかる。B面では鉢と鱗の鋸歯文は鋸歯文Rに統一されていることになる。

内面突帯 内面突帯は1条で、身の下端から2.9cmの位置にある。高さは0.4~0.5cmである。上面には幅0.3~0.4cmの平坦面があるがあまり明瞭なものでなく、稜線も丸みを持つ。B面では「ひき」により一部途切れる部分がある。

型持 身の上半の型持孔は上区流水文の7段目と8段目にまたがる、x反転の外側の位置にある。内面からの観察ではA面右側で高さ1.8cm・幅1.7cmで円錐台形であったことがわかる。B面では左側が高さ2.45cm・幅1.65cm、右側が高さ2.0cm・幅1.6cmである。

鉢の型持は、A面で左が幅1.4cm・高さ0.9cm、右が幅1.15cm・高さ1.1cm、B面左が幅1.15cm・高さ0.9cm、右が幅1.1cm・高さ0.8cmである。横型流水文の中では割り込みの浅いものである。

舞の型持部分は、鋳造直後には大きな鋳造欠陥の孔となっており、本来の大きさ等は不明である。現状ではA面が幅3.7cm・高さ2.1cm、B面が幅2.6cm・高さ1.9cmの孔に復原されている。

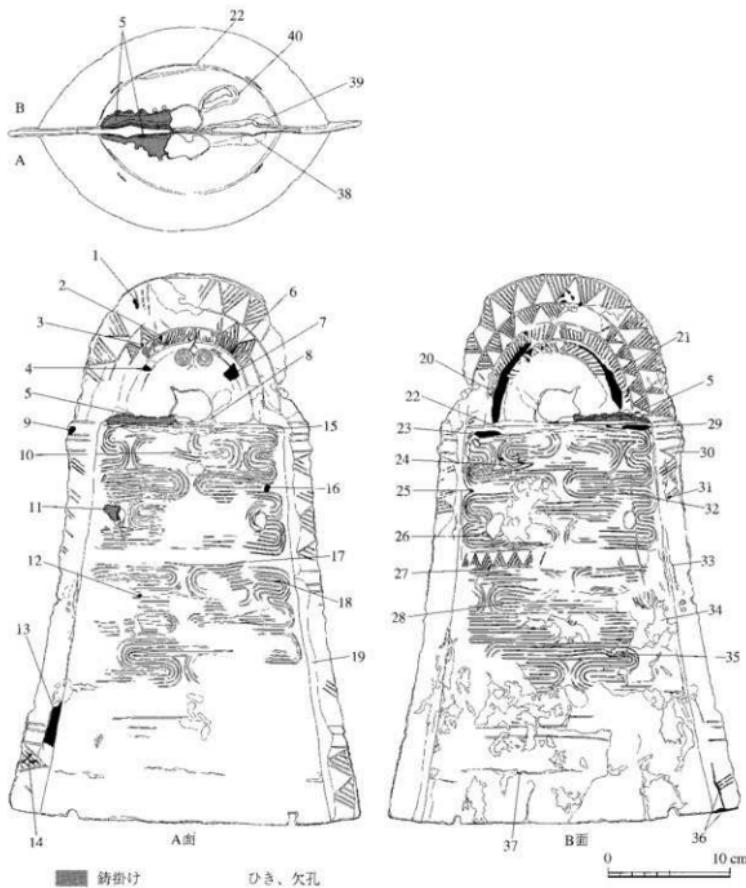
鋳型の食い違い 鋳型の対応のズレは無いようであるが、A面の鉢周縁には鉢頂からやや右側にかけて段になる部分があるが、これは鋳型に彫り込まれたものでない。鋳型のズレが無いとすれば、両面の鋳型が完全な相似形にはなっていなかったのかもしれない。

錙上がり 錙身は全体的に文様が不鮮明で特にA面で顯著である。鋳造欠陥にはなっていないがB面下区右端では「ひき」によって凹凸や皺ができる。また、内面突帯の表面にあたる部分では「ひき」による窪みが水平に延びており（37）、内面突帯も一部途切れる部分がある。鱗も文様が不鮮明で付け根には「ひき」によって皺が寄る部分（33）や、窪みになった部分（19）がある。

范傷 鋳型の損傷は両面ともに見られるが、目立ったところでは、A面左鰐下位の鰐耳の脚部付け根部分（13）とB面菱環部分に大きな盛り上がりがある。鉢ではB面菱環部分は付け根付近では文様がなく、稜頂も丸みがあり盛り上がっていることから、大きな范傷になっている（20・21）。菱環稜部は鋳造後の型ばらしにおいて負荷がかかりやすい部位であることが指摘されている（難波1991）。同じくB面内縁の左側付け根部分が厚くなっていることから、范傷による盛り上がりの可能性がある。

B面右鰐の下端では、上に伸びる細長い范傷がある（36）。その他にも文様の条線間の欠損等による盛り上がりが見られる。また、A面右鰐上半の鋸歯文の先端部が消えている部分も、若干盛り上がっていることから范傷の可能性がある。

鉢掛け 鉢掛けはA面錙身と舞に1ヶ所ずつある。A面身上半左側の型持孔の錙側に長軸2.2



第85図 28号鐸の铸造状態

cmの鉄掛けがある(11)。足掛かりの孔ではなく、型持と繋がった铸造欠陥となっているため鉄掛けによって型持の孔を復原している。また、舞から鈕御にかけては、舞の型持孔から続く大きな铸造欠陥がA面左側とB面右側と鈕の付け根にまたがっており、この部分を鉄掛けしている(5)。型持孔も含めた铸造欠陥は長軸8.8cmであるが、そのうち型持孔を残した5.8cm部分が補錆されている。補錆する周囲には舞と鈕に足掛かりの孔が11個設けられている。鈕の鉄掛けは足掛りの孔が埋まる前に残っている部分がある。

(松山智弘)

29. 29号錘 [図版196~203・写真図版196~201・348~350]

型式 扁平錘2式

文様構成 六区裂波捺文

法量	総高	46.9cm	最大幅	27.9cm	重量	4.40kg
	舞長径(A面)	15.0cm	舞長径(B面)	14.9cm	舞短径	10.7cm
	裾長径(A面)	23.2cm	裾長径(B面)	23.0cm	裾短径	16.7cm

錘 菱環と外縁及び内縁からなる扁平錘である。A・B面ともに高さ11.9cm・幅18.3cmで、錘孔の高さは3.2cm・幅4.5cmを測る。菱環の幅はA面中央が2.9cm、左右端部が2.5cm、B面中央が2.9cm、左右端部が2.5cmである。菱環後部の厚さは、中央部が0.8cm、A面を基準とすると左端錘脚部1.0cm、右端錘脚部0.9cmを測る。

文様の構成はA面・B面とも基本的に同じである。錘の端部付近には他の界線と同じ太さの外周線が巡っている。外縁は第1・第2文様帶に区分され、いずれも内向する鋸歯文が施されている。綾杉文が充填された菱環文様帶は、2条の平行直線文によって4つの区画に分割されており、綾杉文は、菱環を横断する直線文を境に對向する。その配列はA・B面とも||C||D||C||D||である。この平行直線文は、左右の錘脚部においてのみ菱環から外縁第2文様帶まで延びている。

A面では菱環外斜面の一部で斜格子文になっているところがある(1)。内縁には、A面のみ菱環の内側界線に平行する条線が施され、最も錘孔寄りには、両面とも錘孔の輪郭線のような線が認められる。錘孔端部に「ひき」が生じたことによってできた盛り上がりの可能性もある。

B面の頂部には、外縁第1から外縁第2文様帶にかけて、ハート形状の輪郭線を持つ人面が描かれている。人面は眉・瞳のない目・鼻・口を持ち、頬にあたる部位には入れ墨を表現したと見られる弧線が施されている。人面の輪郭線と隣接する外縁の鋸歯文が、輪郭線に遮断されることなく完結していることから、鋸歯文を割り付ける段階には、ここに人面を配置することが意識されていたものと見られる。

外縁第1文様帶は、A面が16単位の鋸歯文L、B面が人面を挟んだ14単位の鋸歯文Rと半施文の鋸歯文である。B面右端部の半鋸歯文に充填された条線は、直下の飾耳脚部に施された条線とほぼ平行している。部分的に鋸歯文に充填された平行斜線が外周線からはみ出している。幅はA面中央が1.9cm、左端が1.7cm、右端が1.5cm、B面中央は人面の輪郭線に接する部位が1.7cm、左右端部が1.5cmである。

A面の外縁第2文様帶は、中央より2単位右に寄った部位に鋸歯文Rを配置し、これを挟んで左側に10単位、右側に5単位の鋸歯文Lを配置する。さらに左右両端部には、菱環から延びる平行直線文によって遮断された半施文の鋸歯文が置かれている。左端の半鋸歯文には平行斜線文しが充填され、右端では外郭線のみとなっている。B面では人面を挟んで14単位の鋸歯文Rが施文されている。幅はA面中央が1.6cm・左端1.1cm・右端1.0cm、B面中央は人面の輪郭線に接する部位で1.6cm・左右端部1.2cmを測る。

錘の端部には面を持つところが残っており、全体に整形・加工が施されていたものと見られる。

錘身 高さはA面が34.8cm、B面が35.1cmである。厚さはA面が0.2~0.3cm、B面が0.2~0.35cmである。側面から見ると舞から裾にかけて外反しており、その外反率(舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100)は、A面が86.21% (0.3÷34.8×100)、B面が85.96% (0.3÷34.9×100)

である。

鐸身の主文様は、A・B面ともに横帯と縦帯によって構成される六区製造排文である。一部に鉛影が見られ、文様が不明瞭になっているところがあるが、ほとんどの文様を確認することができる。文様の構成は基本的にA・B面で共通している。

縱・横帯には斜格子文が充填され、界線及び斜格子の施文は横帯が優先されている。横帯の幅はA・B面ではほぼ同じで、A面の第1横帯が2.0cm、第2横帯が2.2cm、第3横帯が2.1cm、第4横帯が2.5cm、B面の第1横帯が2.0cm、第2横帯が2.2cm、第3横帯が2.1cm、第4横帯が2.5cmである。第1～第3横帯に比べて、第4横帯の幅がやや広くなっている。

縦帯は横帯に遮断され、上・中・下段に分割される。幅はA面の中央の上縦帯が2.3cm、中縦帯が2.5cm、下縦帯が2.7cm、左上縦帯が2.2cm、左中縦帯が2.4cm、左下縦帯が2.5cm、右上縦帯が2.2cm、右中縦帯が2.4cm、右下縦帯が2.8cmとなっている。B面では、中央の上縦帯が2.5cm、中縦帯が2.5cm、下縦帯が2.7cm、左上縦帯が2.2cm、左中縦帯が2.1cm、左下縦帯が2.2cm、右上縦帯が2.2cm、右中縦帯が2.1cm、右下縦帯が2.1cmを測る。

下辺横帯の幅はA・B面ともに2.0cmで、横帯内には鋸歯文が施されている。A面は12単位の鋸歯文L、B面は14単位の鋸歯文Rである。下辺横帯下界線は4条で、1～4条目の間隔はA面で1.2cm、B面で1.3cmを測る。

縦帯、横帯によって区画された各区の大きさは、A面上左区が上辺6.5cm・下辺6.9cm・高さ4.8cm、上右区が上辺6.2cm・下辺6.5cm・高さ4.8cm、中左区が上辺7.1cm・下辺7.7cm・高さ5.3cm、中右区が上辺6.6cm・下辺7.1cm・高さ5.4cm、下左区が上辺7.9cm・下辺8.5cm・高さ5.4cm、下右区が上辺7.3cm・下辺7.9cm・高さ5.4cmである。B面は上左区が上辺6.4cm・下辺6.8cm・高さ4.9cm、上右区が上辺6.2cm・下辺6.7cm・高さ4.9cm、中左区が上辺7.1cm・下辺7.7cm・高さ5.4cm、中右区が上辺7.1cm・下辺7.7cm・高さ5.3cm、下左区が上辺8.0cm・下辺8.6cm・高さ5.4cm、下右区が上辺8.0cm・下辺8.7cm・高さ5.4cmとなっている。

鋸の端部は平坦で、切断痕や研磨痕が観察できる。

舞 舞の扁平率(舞短径÷舞長径×100)は、A面が71.33%($10.7 \div 15.0 \times 100$)、B面が71.81%($10.7 \div 14.9 \times 100$)である。舞のA面とB面にズレは見られない。両面の間には0.2～0.4cmのバリがある。舞面の傾斜を示す肩下がりはA面が0.2cm、B面が0.3cmである。

鑓 鑓の外縁との境にあたる鑓の肩部には一对の飾耳がある。A面を基準とすると、右側の飾耳を欠損する。A面の飾耳及びその脚部には、1山に対し大小の横「U」字を2つ重ねたような文様を施す。B面では1本の条線を内包する横「U」字文が施されている。

鑓の外周には鉢と同様に外周線が施されている。文様は内向する鋸歯文で、A面左側には飾耳直下が半施文の鋸歯文R、続く13単位が鋸歯文L、最下端に半施文の鋸歯文しが並ぶ。右側は飾耳直下付近を欠損しているため判然としないが、確認できる全てが鋸歯文Rである。左右とも鋸歯文の外郭線と平行斜線が外周線からはみ出ているところがあり、特に左側で顕著である。

B面は左側が欠損部を除き全てが鋸歯文Lとなっている。最下端は半施文である。右側は13単位の鋸歯文Rと最下端に半施文の鋸歯文が配置されている。右側では鋸歯文の平行斜線が外周線からはみ出た様子がほとんど見えないが、左側では著しい。

鑓の下端には外周線が回り込んでおり、この外周線を含めてA面では3条、B面では4条の平行

直線文が施されている。A面左側、B面の左右で最下端の鋸歯文が半施文となるのは、この直線文に遮られるように割り付けされているからである。B面右下端の半鋸歯文には、斜線文ではなく、この直線文に平行する条線が2本充填されている。

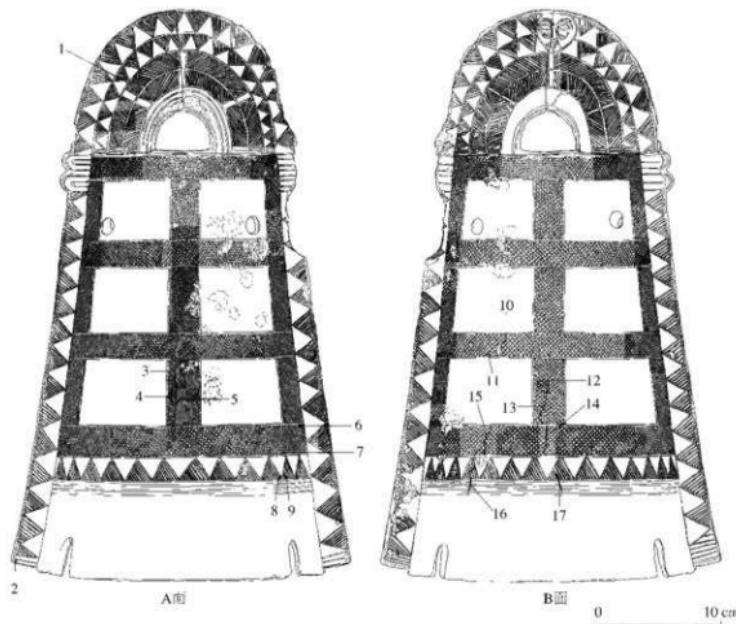
A面、B面とも、鱗の幅に合わせるように鋸歯文が柄に向かって大きくなっている。鱗幅は、A面左鈞耳に接する部位で1.5cm、左裾が2.3cm、右裾が2.3cm、B面左裾が2.4cm、右鈞耳に接する部位が1.9cm、右裾が2.4cmである。

鱗幅は、鐸身の裾よりもやや高い位置にある。端部には部分的に整形・研磨痕が観察される。

内面突帯 極端部からA面では4.7cm、B面では4.8cmのところに、幅1.1cm・高さ0.3~0.4cmの突帯が1条巡っている。断面は頂部がやや丸みを帯びた台形状を呈しており、形状に大きな崩れはない。

型持 舞にはA・B面に1つずつ、鐸身上半及び裾にはA・B両面にそれぞれ2つずつの型持孔がある。舞の型持孔は、A面が長径1.5cm・短径1.0cm、B面が長径1.5cm・短径1.1cmの橢円形を呈している。内面を見ると、A面が長辺2.1cm・短辺1.6cm、B面が長辺1.9cm・短辺1.4cmの長方形を呈した型持痕が認められる。

鐸身上半の型持孔は、左右上区内の下方鱗寄りにある。いずれも縦・横帶と重なり合うことなく配置されている。A面左の型持孔は高さ1.4cm・幅1.4cm、同面右は高さ1.5cm・幅1.6cm、B面左は



第86図 29号鐸の鋳造状態

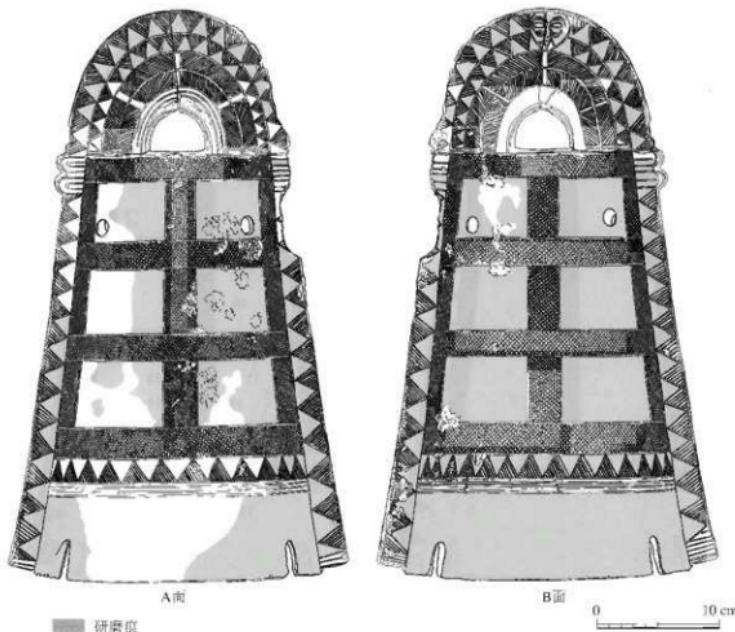
高さ1.3cm・幅1.3cm、同面右は高さ1.4cm・幅1.4cmで、A面右側がやや隅丸方形を呈するほかはいずれもほぼ円形である。内面における型持痕の大きさは、高さ1.8cm・幅1.8cm、同面右は高さ1.6cm・幅1.8cm、B面左は高さ1.7cm・幅1.6cm、同面右は高さ1.6cm・幅1.6cmを測る。舞との距離は、A面左が1.9cm、右が5.0cm、B面左が5.2cm、右が4.5cmである。

鋲の型持孔は逆「U」字形を呈しており、いずれも縫端部から深く入り込んでいる。孔の大きさはA面左が高さ3.4cm・幅1.0、右が高さ2.9cm・幅1.4cm、B面左が高さ3.0cm・幅1.5cm、右が高さ3.1cm・幅1.2cmである。内面における型持痕の大きさは、A面左が高さ3.7cm・幅1.4、右が高さ3.1cm・幅1.8cm、B面左が高さ3.3cm・幅1.6cm、右が高さ3.6cm・幅2.0cmを測る。鑄との距離はA面左が4.2cm、右が3.4cm、B面左が3.8cm、右が3.9cmである。

鋳上がり 鋳造時に湯回りが悪く欠孔が生じたようなところは認められない。軟X線透過による調査においても、鋳造時の気泡が器内に残となって残ったところは極めて少なく、全体的に鋳上がりは良かったものと見られる。

範傷 A面の鑄に1ヶ所、鋳身に7ヶ所、B面の鋳身に8ヶ所の範傷が認められる。

2は鱗網に施された外周線と平行直線文の間にある小さな傷である。3～5・10～15は、縦・横帶の斜格子文間を貫く細長い傷で、15は枝分かれしてやや膨らんだ部位を持つ。6・7も横帶内の傷であるが、比較的微細な傷である。16・17は下辺横帯の鋸歯文から下界線へと延びる。



第87図 29号鐘の研磨状態

傷は各文様の中に収まっているが、これは無文部位に研磨を施す過程で傷が消されているためと思われる。

研磨 銘に覆われた部位については明確ではないが、A・B面ともに、鉢では外縁第1文様帶・第2文様帶の無文部分、舞面の全域、鱗では箭耳の脚部間や鋸齒文間の無文部分、鐸身では左右上区・左右中区・左右下区の各区内、下辺横帶の無文部分、下辺横帶下界線から櫛一部帯に、それぞれ研磨の痕跡が認められる。全体の施術状況から見て、鏡によって確認できない部分についても同様に研磨が施されていたものと思われる。

(山崎 修)

30. 30号鏡 [図版204~208・写真図版202~205・351~353]

型式 外縁付鉢1式

文様構成 四区裂姿櫛文

同范銅鏡 加茂岩倉3号鏡

法量	総高	32.3cm	最大幅	18.2cm	重量	2.38kg
舞長径(A面)	10.9cm	舞長径(B面)	10.9cm	舞短径	7.5cm	
裾長径(A面)	16.3cm	裾長径(B面)	16.2cm	裾短径	11.6cm	

鉢 菱環と外縁からなる外縁付鉢である。高さはA面が7.7cm、B面が7.8cm、幅13.2cm、鉢孔の高さは3.3cm、幅4.6cmを測る。全体的に鏡に覆われており、文様や界線の不明瞭な部分が極めて多い。菱環の幅はA面左端で3.1cm、右端で2.8cm、B面中央部で3.1cm、左端で3.0cm、右端で3.2cmを測る。菱環稜部の厚さは中央部で1.1cm、A面を基準とすると左端鈕脚部0.65cm、右端鈕脚部0.95cmである。

外縁にはA・B面ともに内向する鋸齒文しが施されており、幅はA面の左端、右端が1.3cm、B面は左端、中央頂部、右端がいずれも1.2cmで、最大部位が1.3cmである。

菱環の文様はA面では観察できないが、B面では外斜面の外縁寄りに鋸齒文Rの一部と見られる斜線文が認められる。斜線文の位置関係から、内向する鋸齒文は菱環外斜面の中央付近に頂点を持つと見られ、外斜面は2段の文様帶に区分されているものと考えられる。内斜面の文様は、A面の鉢孔寄りにし方向の平行斜線文が認められ、ここに綾杉文Dが施されていたと見られる。B面の菱環内斜面では文様は確認できない。

鐸身 高さはA面が24.4cm、B面が24.5cmである。厚さはA面が0.3~0.4cm、B面が0.25~0.3cmで、A面がやや厚い。側面から見ると舞から裾にかけて外反しており、その外反率(舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100)は、A面が1.28% (0.3÷23.5×100)、B面が1.06% (0.25÷23.5×100)である。

A・B面の主文様は、左右及び中央の縦帶と3つの横帶によって区画された四区裂姿櫛文である。縦・横帶には斜格子が充填されているが、全面的に鏡に覆われ、文様の確認できる部分は非常に限られている。特にA面は、表面の鏡が粒状に浮き出たようになっており、第1横帶及び右下縦帶の一部を除いて文様を確認することはほとんどできない。

観察可能な部位の縦・横帶幅は、A面の第1横帶が2.0~2.2cm、第3横帶が2.1cm、左上縦帶が2.1cm、左下縦帶が1.9~2.0cm、中上縦帶が2.1cm、B面の第1・第2横帶が2.0cm、第3横帶が2.2cm、

左下縦帯が2.0cm、中上縦帯が2.1cm、中下縦帯が2.2cmである。

△面の第1横帯下界線は、中央縦帯と接する部分を中心にやや太くなっている（1）。

舞 舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）は、A・B面ともに68.81%（ $7.5 \div 10.9 \times 100$ ）である。舞のA面とB面にズレは見られない。両面の間には僅かにバリが残されている。鋤の付け根付近や縁辺部には「ひき」による瘤みが認められる。舞面の傾斜を示す肩下がりは、A面が0.7cm、B面が0.6cmである。

籠 文様は、△面左側、B面右肩及び右下半に認められるに過ぎない。僅かに観察される平行斜線文により、鉢の外縁に続く鋤南文しが充填されていたものと見られる。裾付近には、鋳造時に湯がまわり切らざる欠落したところがある。

幅は、A面左肩が1.3cm、左裾付近が1.4cm、右肩が1.3cm、右裾付近が1.4cmで、B面左肩が1.2cm、左裾付近が1.3cm、右肩が1.2cm、右裾付近が1.4cmである。

内面突帯 補端部から1.0~1.3cmのところに、幅0.7~0.9cm・高さ0.2~0.4cmの突帯が1条巡っている。断面はやや丸みを帯びた台形状で、上辺が補端部へ向けてやや傾斜している。全体的にやや磨滅した状況を呈している。

型持 舞に1つ、鋤身上半と裾にはA・B面にそれぞれ2つずつの型持の痕跡が認められる。

舞の型持は1山で、外面から見るとA・B面に1つずつの孔が認められるが、内面では型持痕が面向にわたってひと続きとなった長方形を示している。型持の周辺に湯がまわり切らなかったために、型持孔に接して穴が空いている。内面における型持痕の大きさは、長辺が3.7cm、短辺が1.3cmである。

鋤身上半の型持孔は、外面から見ると非常に小さく不整な孔に見えるが、内面の型持痕は比較的形状の整った長方形を呈している。内面における型持痕の大きさは、A面の左側が高さ1.5cm・幅1.2cm、右側が高さ1.3cm・幅1.0cm、B面の左側が高さ1.4cm・幅1.0cm、右側が高さ1.3cm・幅1.1cmである。

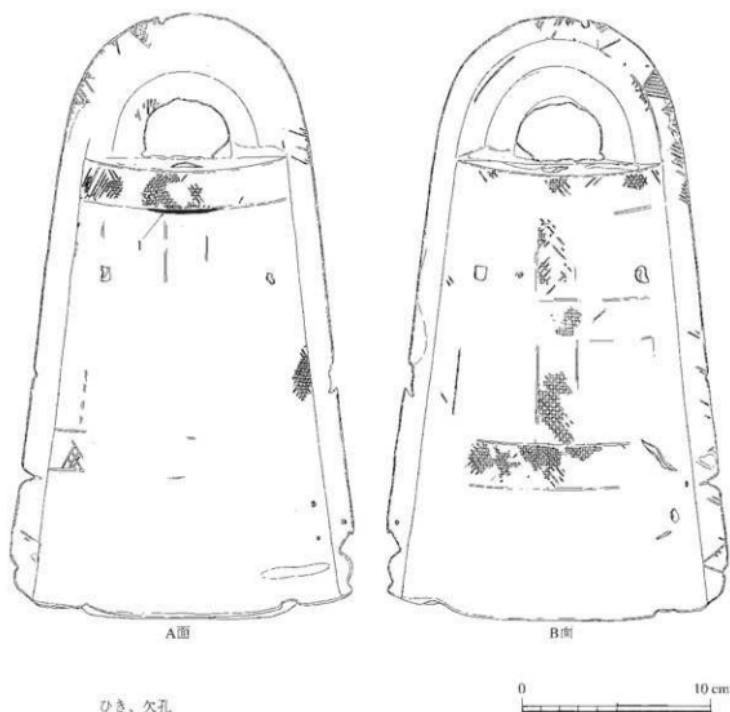
裾の型持孔は、A面で比較的その形状を留めており、内面から外面に向かって傾斜する台形状を呈している。孔の大きさは、A面左側が高さ0.7cm・幅1.6cm、右側が高さ0.5cm・幅1.7cmである。B面は欠損や磨滅のため、左側が高さ0.5cm程度、右側が高さ0.6cm程度の痕跡として認められるに過ぎない。

鋤上がり 鋳造時に湯がまわらず欠孔が生じたところは、舞に2ヶ所、鋤に1ヶ所、A面鋤身に3ヶ所、B面鋤身に5ヶ所認められる。また、同様の理由で欠落したところが鉢や鋤の端部にも見受けられる。軟X線調査によれば、全般的に気泡状の懸が多数空いており、鋤上がりはあまり良くないと言える。

表面が瘤む「ひき」は、鉢の付け根のほか、内面突帯にあたる外面や内面突帯の付け根付近に認められる。

范傷 全面に覆う鋤により范傷の有無は判然としない。范傷と言えるかどうかはわからないが、A面第1横帯下界線の中央付近が、他の文様の線や界線よりもやや太くなっている（1）。これは、同范鋤とされる30号銅鋤にも見られる特徴で、注目すべき点と言える。

（山崎 修）



第88図 30号鐸の鋳造状態

31. 31号鐸 [図版209~216・写真図版207~212・354~356]

型式 外縁付鐸 2式

文様構成 二区流水文

同范銅鐸 加茂岩倉32号鐸・加茂岩倉34号鐸・上屋敷鐸・桜ヶ丘3号鐸

法量 総高 45.3cm 最大幅現 28.0cm 重量 4.54kg

舞長径(A面) 15.2cm 舞長径(B面) 15.2cm 舞短径 10.6cm

柄長径(A面) 24.0cm 柄長径(B面) 24.0cm 柄短径 17.0cm

鉢 菱環と外縁からなる外縁付鉢である。ただし、鉢の断面形を見ると、菱環と外縁への移行は漸移的である。鉢の高さ12.0cmに対し、横幅が19.0cmとなっており、やや横長の半円形を呈する。また、鉢孔の高さは3.6cmに対し、幅が5.3cmを測り、やや縱長の半円形となる。同范銅鐸の中では鉢孔が最も大きい。菱環の内斜面の幅は2.6cmである。鉢の外周や鉢孔の端部は、鋳造後に面取り整形され、端面を持つ。

外縁文様帶は、A面・B面ともに内向鋸歯文Rである。外縁の幅はA面でみると、左鉢脚付近で

1.7cm、右鉢脚付近で2.1cmを測るのに対し、鉢頂付近では2.7cmと幅広となる。その一方で、B面では、左鉢脚付近で1.9cm、右鉢脚付近2.0cmであり、鉢頂の2.1cmと大きな差がない。

菱環の外斜面は綾杉文で飾る。このうち、A面側では2段の綾杉文CDを施し、B面では2段の綾杉文DCが施されている。B面中央部左側には、この綾杉文の鉢孔寄りにR方向の平行斜線文が見える。また、菱環の内斜面は△面・B面ともに重圓線が認められるが、本来は綾杉文の輪線であった可能性がある。菱環の幅は頂部で0.9cm・左鉢脚付近で1.1cm・右鉢脚付近で1.1cmを測り、鉢脚に近づくにつれて若干厚くなっている。

鐸身 鐸身の高さはA面33.1cm、B面33.0cmを測る。舞と裾との距離は、A面で33.1cm、B面で33.0cmである。器壁の厚さは0.3cmである。鐸身を側面から見ると反りが認められ、その外反率(舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100)は、A面側で2%(0.6÷33.1×100)、B面側で2%(0.5÷33.0×100)である。

鐸身の主文様は二区流水文である。流水文は、A面・B面上下区ともに8c7xで飾る、いわゆる横型流水文である。4条を1束とし、反転方法はいずれもC反転である。このうち、△面上区流水文の左肩にあたる1では、鋸に向かって伸びる直線が鋲出される。これは、流水文を施す際の割り付け線であったか、横帶の界線に倣ったものと見られる。鐸身中央のx反転部や右肩のc反転部にも同様の線が存在した可能性があるものの、周辺の鋲出しが悪いために判然としない。また、B面上区右肩の2でも鋸に向かって伸びる直線が観察できる。

上区と下区は横帶によって隔てられる。A面側の第1横帶は山形文で飾られ、B面では鯨齒文Rとなる。なお、山形文を構成する4条の線のうち、外側の2条は頂部が丸みを帯びるのに対し、内側の2条は頂部が「へ」字状に屈曲する。

A面側の下辺横帶は2段に複帯化し、上段が斜格子文、下段が鯨齒文Rとなる。下辺横帶の下側の界線は3条である。なお流水文銅鐸の下辺横帶が複帯化する現象は、31号鐸とその同範銅鐸に限られた特徴のようである。これは、製造工程の下辺横帶とその直上の横帶との組合せと共にしており、製造工程の構成を意識した可能性がある。

また、B面の下辺横帶は鯨齒文帯である。複帯構成にこそならないものの、上側の界線が3条で、しかもその3条間の幅が1.3cmとなっている。これは下辺横帶下側の界線3条間の幅や、△面の斜格子文帯の幅とはほぼ同じであり、文様構成上の均整に配慮したとも見られる。

裾の端部は面取り整形されて平滑となるが、鋸に覆われた現状では研磨痕は観察できない。左右の鋸の下端と鐸裾との間で僅かな段差が生じており、面取り整形の研磨する工程の違いと見られる。また、B面右側の裾の梨持孔には工具痕が確認できるが、バリを除去する整形工程で付いたのである。

舞 舞はアーモンド形を呈する。舞の扁平率(舞短径÷舞長径×100)は△面で69.3%(10.6÷15.3×100)、B面で69.7% (10.6÷15.2×100)である。△面・B面の型ズレは特に認められない。鉢脚壁状のバリが認められ、その高さは約0.1cmである。舞面が傾斜する肩下がりは、A面で0.1cm、B面で0.2cmを測る。

鋸 鋸の幅は△面側の左肩で1.9cm、左裾2.5cm、右肩1.9cm、右裾は現2.4cmである。B面側は左肩で1.9cm、左裾で現2.4cm、右肩1.9cm、右裾2.5cmとなる。裾付近に近づくにつれて鋸の幅が広くなり、鯨齒文も大型化する傾向が窺える。左右の鋸は△面・B面ともに内向鯨齒文Rで飾る。鋸の

端部は、鋳造後に面取り整形されて端面を持つ。

また、左右の肩に対応して1対の飾耳が付く。本来、飾耳は「B」字形であったと見られるが、鋳造後の面取りによって上半の突出部分が切除される。飾耳の突出部は斜線をなす。また、飾耳の脚は延びて鐸身に接し、脚の中には鋸歯文等は認められない。

鰐の厚さは、肩付近では0.25~0.3cm、幅付近で0.35~0.4cmを測る。端部と基部との厚さはほぼ同じである。

内面突帯 内面突帯は1条で、A面の裾からの距離は4.0cm、幅1.3cm、高さは0.6cmを測る。一方、B面では距離3.7cm、幅1.3cm、高さ0.5cmとなる。断面形は台形状を呈する。鐸身中寄りに近くにつれて上面の稜線がシャープとなり、舌との接触によって磨滅した可能性がある。

型持 型持孔は、舞で2ヶ所、鐸身上半A面・B面で各2ヶ所、裾A面・B面で各2ヶ所の計10ヶ所で確認できる。舞の型持孔はA面で長径1.6cm、短径1.0cmである。B面で長径1.4cm、短径1.1cmである。型持孔は不整円形であるものの、本来の型持は正円形（截頭円錐）であったと見られる。

次に鐸身上半の型持孔を見ると、いずれも重な円形を呈する。A面左側で高さ1.4cm、幅1.4cm、舞からの距離は6.6cmである。右側の型持孔は高さ2.4cm、幅1.9cm、舞からの距離6.5cmである。B面の型持孔は、左側で高さ1.4cm、幅1.6cm、舞からの距離6.5cmを測る。右側は高さ2.0cm、幅1.7cmである。いずれの型持も本来は正円形（截頭円錐）であったと見られる。

裾の型持孔は、A面左側で高さ1.1cm、幅1.6cmである。右側の型持孔は高さ1.1cm、幅1.5cmである。B面は、左側で高さ0.7cm、幅1.6cmを測る。右側は高さ0.8cm、幅は現状で2.8cmとなる。いずれの型持も、裾の切削部から内側部分の形状は逆「U」字形であったと見られる。

鋳型の食い違い 鋳型の食い違いは僅かである。鋸A面側の右上の外縁端部で約0.1cmの段差が生じるほか、A面左側の鰐の外縁でも0.1cm未満の段差が認められる。これらの部位の観察から、鰐や鋸には外周界線があったことがわかる。

鋸上がり 文様の不鮮明な箇所や「ひき」、欠孔が所々で認められる。

鉢は、3で鋳造欠陥による欠孔が生じる。また、鉢脚で比較的大きな「ひき」が発生するほか、外縁でも僅かな「ひき」が観察できる。

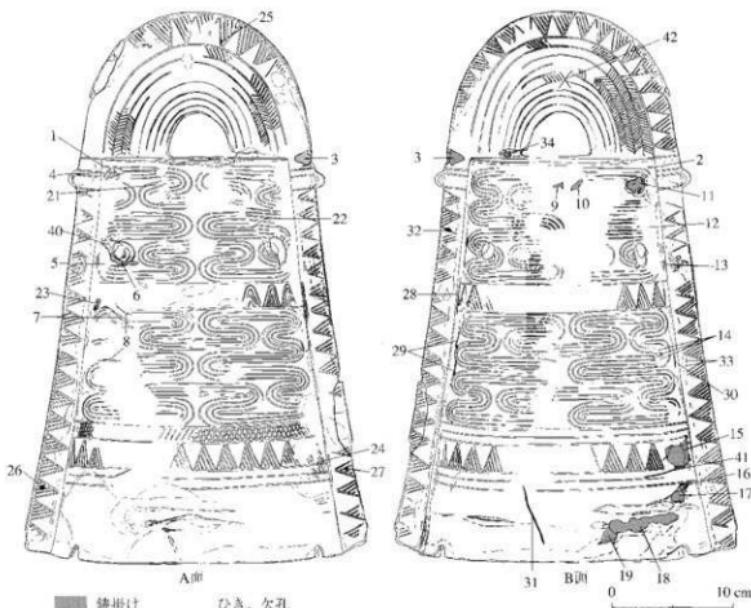
舞には、鋳造欠陥による欠孔が1ヶ所認められるほか、「ひき」によって外表面が僅かな凹凸が生じている。内面を見ると、鉢脚に対応する部分では比較的大きな「ひき」が観察できる。

鐸身では、鋳造欠陥による欠孔がA面の4~8、B面の9~19で生じる。このうち、8~14は亀裂状の欠孔となる。また、内面突帯に対応する裾外面では比較的大きな「ひき」が生じる。同様に、A面側の内面突帯の一部が幅狭で低くなる箇所があるが(20)、「ひき」によるものと見られる。また、軟X線写真を観察すると、A・B面とともに鐸身中寄り部分は器壁が薄く、気泡も比較的多い。

文様の流れはA面鐸身の21~24で認められる。このうち21・22は流水文の一部が流れたとみられ、周囲の文様と不連続となっている。また23は山形文、24は鋸歯文が流れたのであろう。

なお、裾の型持孔内面の周縁が隆起するかのように見える。ただし、そのさらに外周は浅く窪んでいるため、「ひき」によって生じた現象と見られる。

範傷 A面側の範傷は鉢の25、左鰐の26、右鰐の27で認められる。また、B面鐸身の28~31、左鰐の32、右鰐の33で認められる。このうち、鐸身B面の28~30、B面右鰐の33は、本来の鋳型とその破損を補う補修材との隙間に溶銅がまわった結果鋳出された可能性がある。その一方で25~27・



第89図 31号鐸の鋳造状態（外面）

31・32は、鋳型本体に生じた亀裂が反転された範傷であろう。

現在知られる同範銅鐸のなかでは範傷が最も少なく、最も早く鋳造されたと見られる。ただし、範傷が既に存在するので、31号鐸に先立って鋳込みが行われた可能性が高い。

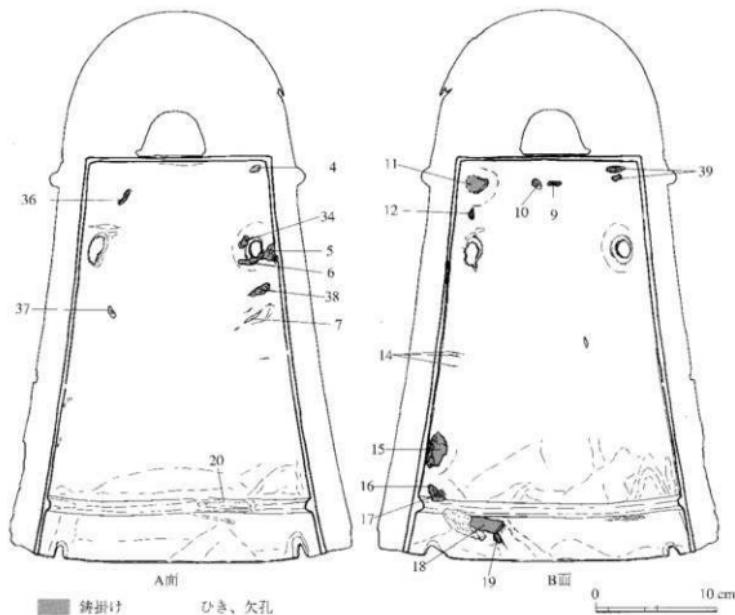
鉄掛け 鉄掛けは、鉢に2ヶ所（3・34）、△面鐸身に5ヶ所（4～7・35）、B面鐸身に8ヶ所（9～12・15～19）の計16ヶ所で行われる。このほか、鐸身内面をみると、A面の36～38とB面の39で鉄掛けに特徴的な盛り上がりを見せるが、外表面での肉眼観察や軟X線写真による限り鉄掛けと認定することはできなかった。鉢の3・34は、銅鐸の外面から鉄掛けしたと見られるが、周囲には工具による刺突痕が観察できない。また、それ以外の部位では鋳造欠陥で生じた欠孔に補修用の鉄型を当てがい、銅鐸の内側から溶銅を注いだものと見られる。

鉈身B面の15は、複数回にわたって鉄掛けしたと見られる。11・15～17は鉄掛け後に銅鐸の外側から工具による刺突を施す。このうち15・17では内面にも刺突痕が認められる。

捕刻 捕刻は2ヶ所で施される。A面鐸身の40は、5の鉄掛けに対応するものである。B面では下辺横帯下界線を補刻した41の1ヶ所のみであり、15の鉄掛けに対応するものと見られる。

「×」の刻線 銅鐸を鋳造後、B面の菱環頂部中央に「×」字形の刻印が施される（42）。加茂岩倉銅鐸の刻印のなかでは比較的大ぶりである。その切りあいをみると、右下がりの刻線が先で左下がりの刻線の方が後のようにある。

（北島大輔）



第90図 31号鋤の铸造状態（内面）

32. 32号鋤 [図版217~224・写真図版215~220・357~358]

型式 外縁付鋤2式

文様構成 二区流水文

同范銅鋤 加茂岩倉31号鋤・加茂岩倉34号鋤・上屋敷鋤・桜ヶ丘3号鋤

法量 総高 45.3cm 最大幅現 28.9cm 重量 4.16kg(土付)

舞長径(A面) 15.1cm 舞長径(B面) 15.1cm 舞短径 10.6cm

裾長径(A面) 24.1cm 裢長径(B面) 24.1cm 裢短径 16.8cm

鋤 菱環と外縁からなる外縁付鋤である。ただし、断面形で見ると、菱環と外縁への移行は漸移的となる。鋤の高さ11.9cmに対し、鋤の横幅は現18.5cmであり、やや横長の半円形を呈する。また、鋤孔は高さ2.3cm、幅4.2cmを測り、やや横長で歪な半円形を呈する。鋤孔の端部は丸みを帯びている。

外縁文様帶は、A面・B面ともに内向鋸齒文Rである。A面の外縁の幅は、左鋤脚付近で現1.9cm、右鋤脚付近で現1.7cmとなり、破損による欠失を考慮すれば、鋤頂の2.0cmとほとんど変わらない。その一方で、A面は左鋤脚付近で現1.6cm、右鋤脚付近で現1.8cmを測るのに対し、鋤頂付近では2.7cmと幅広となる。また、外縁文様帶の外周界線がA面・B面ともに観察できる。

菱環の外斜面は綾杉文で飾る。このうち、A面側は綾杉文D Cの下に綾杉文Z Sを重ねている。

一方、B面側の鈎の外斜面は綾杉文CDを2段重ねる。また、菱環の内斜面を見ると、A面・B面ともに綾杉文CDを2段重ね、さらにその下は無文帯となる。菱環頂部の厚さは鉢中央で0.9cm、左鉢脚で1.2cm・右鉢脚で1.1cmを測り、鉢脚に近づくにつれて若干厚くなる。

鐸身 鐸身の高さはA面32.4cm、B面32.4cmである。舞と裾との距離はA面で32.2cm、B面で32.3cmを測る。器壁の厚さは0.3cmとなる。鐸身は側面から見ると反りが認められ、その外反率（舞・裾線からの最深値：舞から裾の長さ×100）はA面側で1.9%（ $0.6 \div 32.2 \times 100$ ）、B面側で1.9%（ $0.6 \div 32.3 \times 100$ ）である。

鐸身の主文様は「区流水文」である。流水文の型は、A面・B面上下区ともに8c7xで飾る、いわゆる横型流水文である。4条を1束とし、反転方法はいずれもC反転である。このうち、B面の1・2では上区流水文の両肩から筋に向かって伸びる直線が説出されている。また、3のように上区中央上段のx反転部の上側で接する直線も認められる。その一方で、A面側にはこのような線が認められない。

上区と下区とは横帶によって隔てられる。このうちA面側の横帶は鋸齒文Rで飾られ、B面では山形文となる。なお、山形文を構成する4条の線のうち、外側の2条では頂部が丸みを帯びるのに對して、内側の2条は頂部が「へ」字状に屈曲する。

A面側の下辺横帶は鋸齒文Rを配しており、上下の界線は各3条である。一方、B面の下辺横帶は2段に複合化し、上段は斜格子文帯、下段は鋸齒文Rとなる。下辺横帶の下側の界線は3条を数える。

裾の端部は、剥離部分を除けば、面取り整形されて平滑となる。ただし、現状では研磨痕が観察できない。A面向かって左側の鰭の下端と鋸轂との間で僅かな段差が生じる。その一方で右側の鰭付近では段差は認められず、同一面をなしている。

舞 舞の平面形はアーモンド形を呈する。舞の扁平率（舞短径：舞長径×100）はA面で70.2%（ $10.6 \div 15.1 \times 100$ ）、B面で70.2%（ $10.6 \div 15.1 \times 100$ ）である。A面・B面の型ズレは特に認められない。鰭脚壁状のパリが残っており、その高さは約0.1cmである。舞面が傾斜する肩下がりは、A面で0.4cm、B面で0.2cmを測る。

鰭 鰭はA面側の左肩で現1.9cm、左裾2.7cm、右肩で現1.7cm、右裾で2.6cmである。B面側は左肩で現1.7cm、左裾で2.6cm、右肩で現1.9cm、右裾で2.7cmとなる。また、鰭の厚さは肩付近で0.3cm、裾付近で0.4cmを測り、基部と端部の厚さはほぼ同じである。

左右の鰭はA面・B面ともに内向鋸齒文Rで飾る。裾付近に近づくにつれて鰭の幅が若干広くなり、鋸齒文も大型化する傾向が観れる。またB面では左右両側の鰭の外周に界線が観察できる。

鰭の両肩の部分には、本来、「B」字形の飾耳が付くはずであったと見られる。しかし、A面左側にあたる飾耳の突出部は上半分が出土時の破損によって消失し、下半分が鑄造後の面取り整形によって切除される。また、右側の飾耳の突出は破損によって消失する。ただし、飾耳の脚はA・B面とともに観察でき、鐸身と接している。脚の内側には鋸齒文などは認められない。

内面突帯 内面突帯は1条である。裾からの距離はA面側で3.6cm、幅は1.2cm、高さ0.3cmを測る。B面側は距離3.7cm、幅1.0cm、高さ0.2~0.3cmを測る。その断面形は角の取れた台形状を呈し、鰭付近ではカマボコ状となる。幅は0.9cm、高さ0.2~0.3cmである。1・5では突帯が低くなり幅も狭くなるが、「ひき」のためと見られる。

型持 型持孔は舞で2ヶ所、鐸身上半A面・B面で各2ヶ所、裾A面・B面で各2ヶ所の計10ヶ所で認められる。舞の型持孔は、A面で長軸2.4cm、短軸0.8cmを測る。B面で長軸5.0cm、短軸1.3cmである。いずれの型持孔も「ひき」によって歪な形になる。しかし、舞を内面から観察すると、本来の型持の形状は正円形（截頭円錐）に復原できる。

また、鐸身上半の型持孔は不整円形を呈する。A面左側で高さ1.3cm、幅1.7cm、舞からの距離7.1cmである。右側の型持孔は高さ1.5cm、幅1.8cm、舞からの距離7.1cmである。B面の型持孔は、左側で高さ1.3cm、幅1.3cm、舞からの距離7.3cmを測る。右側は高さ1.4cm、幅1.6cm、舞からの距離7.3cmである。いずれの型持も本来は正円形（截頭円錐）であったと見られる。

裾の型持孔は、A面左側で高さ0.8cm、幅1.4cmである。右側の型持孔は高さ0.9cm、横幅で1.2cmである。B面は、左側で高さ1.1cm、幅1.5cmを測る。右側は高さ1.0cm、幅1.2cmである。内面から観察する限り、裾の型持は、切断部から内側部分の形状がすべて逆「U」字形であったと見られる。しかし、鋳造後にバリを除去する工程で整形され、台形状に近い型持孔となる。また、裾の型持孔を銅鐸内面から観察すると、型持孔の周開が隆起しているかのように見える。しかし、そのさらに外周が「ひき」によって僅かに窪んだためと考えられる。

鑄型の食い違い A面とB面との舞の高低差はほぼ同じであり、左右のズレもほとんど認められない。鉢B面側では、外縁文様帶の外側の界線からさらに外側で0.1cmほどの段差が生じるが、A面では段が認められない。同様に、B面の鉢孔では0.2~0.3cmの段が生じるが、A面ではこれが認められない。菱環の内斜面の幅は4.0cmを測り、これにB面の段差を差し引けば3.6cmとなる。

ちなみに加茂岩倉31号鐸のB面では、菱環稜部から鉢孔までの距離が3.6cmを測ることから、加茂岩倉32号鐸B面の段は鑄型の鉢孔のラインを示す可能性がある。

このほか、B面の左右の鱗でも0.1cmほどの段差が確認できる。

鉢上がり 文様の不鮮明な箇所が所々で認められ、とりわけ鐸身B面の下区左側の文様が不鮮明となる。また、器壁が肉厚な部位の周辺などで鋳造欠陥の「ひき」が発生する。鉢は、鉢脚で「ひき」が生じるほか、菱環の内斜面や外縁など器壁が薄い個所でも僅かな「ひき」が認められる。

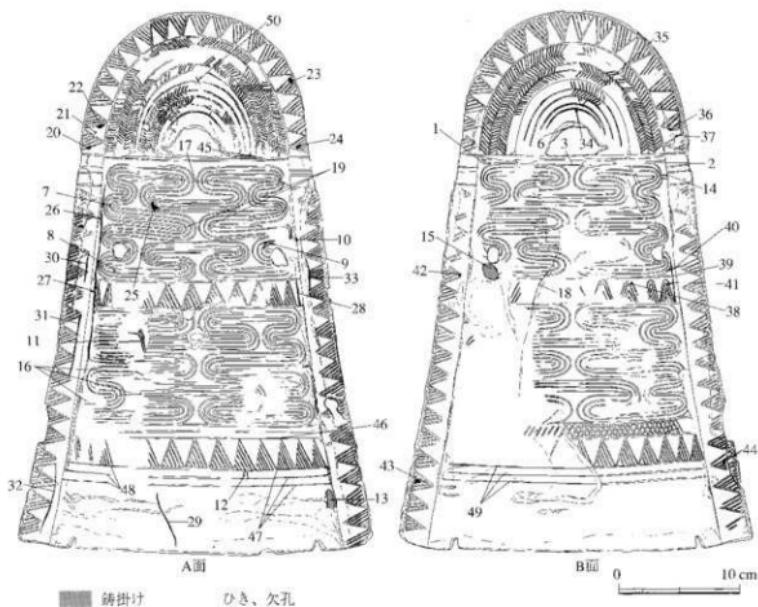
舞は、「ひき」によって各所で窪んでおり、鋳造欠陥による欠孔が3ヶ所で認められる。

鐸身では、鋳造欠陥による欠孔がA面の7~13、B面の14~15で確認できるほか、亀裂状の鋳造欠陥がA面16で認められる。また、A面上区の17を境に上側部分は、他の部分に比べて器壁が直角に厚くなる。これは、滑らかな鉢肌の状況から推して鉢型の手直しや範傷とは考えがたく、溶銅の回り具合の違いと見られる。18を境に左側では器壁が若干薄くなるのも同様の原理であろう。このほか、鐸柄の外表面では、内面突堤と対応する部位や鱗の付け根付近でも「ひき」が発生する。また、鐸身A面では、上区流文水の中央中段のX反転部周辺が下方にたわんでいるように見える(19)。加茂岩倉32号鐸よりも先に鋳造されたと見られる31号銅鐸や、32号鐸よりも後に鋳造されたと見られる34号鐸・上屨敷鐸・桜ヶ丘3号鐸にはこのような特徴が認められないことから、鉢型の彫り直しとは考えがたく、文様の筋流れの可能性が高い。

範傷 同鉢銅鐸のなかでは加茂岩倉31号鐸に次いで範傷が少ない。

まずA面では、鉢の20~24、鐸身の25~29、左鱗の30~32、右鱗の33で範傷が確認できる。一方、B面では鉢の34~37、鐸身の38~41、左鱗の42~43、右鱗の44で範傷が発生する。

このうち、20~25・29~34・38~42~44は、鉢型本体に生じた範傷が転写されたものであろう。



第91図 32号鐸の铸造状態（外面）

また、鐸身の側縁から鰐の付け根にかけて生じた26・28・30～33・39は、本来の鉄型とその破損を補う袖修材との隙間に溶銅がまわった結果鋳出された可能性がある。そうすると、27・40・41は袖修材に生じた亀裂に溶銅がまわって鋳出されたものと見られる。

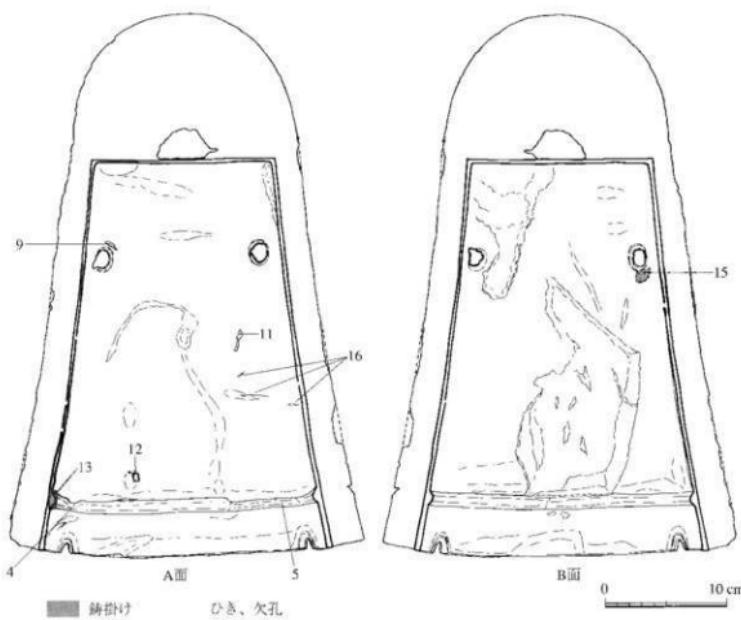
鉄掛け 鉄掛けは、錘A面で1ヶ所(45)、錘身A面で3ヶ所(9・11・13)、錘身B面で1ヶ所(15)の計5ヶ所で確認できる。

錘A面の45は、右側の鈎脚に生じた「ひき」を鉄掛けしたものである。鈎脚表面に補修用の鉄型を当てがって舞の内側から溶銅を注いだと見られ、鉄掛け後に工具によって刺突した痕跡が認められる。また、A面の9・11・13や、B面の15は、錘身の外表面に補修用の鉄型を当てがい、内面から鉄掛けしたものと見られる。錘身の鉄掛けに際しては、円形の足掛かりを造り付けてはいないようであり、工具による刺突の痕跡も現状では認められない。

補刻 錘身A面で3ヶ所(46～48)、B面錘身B面の1ヶ所(49)の計4ヶ所で補刻が確認できる。このうち、46は下辺横帯の上側の界線を補刻したものであり、47～49は下側の界線を袖刻したものである。横型流文水式銅鐸は鉄掛けの部位に補刻する場合が多いが、この銅鐸には補刻に対応する鉄掛けが見当たらない。

「×」の刻線 A面の菱環頂部中央に「×」字形の刻印が施される(50)。加茂岩倉銅鐸の刻印のなかでは比較的小ぶりである。

(北島大輔)



第92図 32号鋤の铸造状態（内面）

33. 33号鋤【図版225～229・写真図版222～226・359～361】

型式 外縁付鉢1式

文様構成 四区製装瓣文

同范銅鋤 加茂岩倉14号鋤

法量	総高	31.6cm	最大幅	19.6cm	重量	1.94kg
	舞長径(A面)	10.2cm	舞長径(B面)	10.4cm	舞短径	7.4cm
	柄長径(A面)	16.5cm	柄長径(B面)	16.5cm	柄短径	11.4cm

鉢 菱環と外縁よりなる外縁付鉢である。高さは8.0cm・幅13.4cm、鉢孔の高さは3.1cm・幅4.4cmを測る。菱環は幅2.9~3.2cm・厚さは中央部で0.6cm・右端0.8cm・左端で0.9cmであるが、菱環頂部の位置はB面がA面に対し0.3cm程度高くズれている。外縁は菱環との境が不明な部分もあるが、幅1.2~1.3cm・厚さ0.3~0.4cmである。

文様は全体に判然としないところが多いが、A面は外縁左側に内向する鋸歯文Lが見られ、右側にも僅かに鋸歯文Lがあることがわかる。菱環については、現状では全く文様を観察することはできない。B面では全く文様を確認することができない。

鉢身 高さはA面23.6cm、B面23.8cm、厚さは0.3cmである。身は舞から裾部にかけてやや外反する。外反率(舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100)はA面側で1.76% ($0.4 \div 22.7 \times 100$)、B面側で1.31% ($0.3 \div 22.9 \times 100$)である。

A面の文様は四区製波櫛文で横帯が縱帯に優先する。文様は第1・第2・第3横帯・下辺横帯の一部と、縱帯は中央上段のものが観察できる。

第1横帯は幅2.0cm、第3横帯は幅2.1cm、縱帯中央上段は幅2.5cmである。第1横帯と第2横帯間の高さは1.8cmである。第1～3横帯と縱帯は斜格子文が充填されているが、第1・第2横帯は僅かにその一部が見られるに過ぎない。下辺横帯は幅2.0cmで、鋸歯文Rが中央付近で観察できる。下辺横帯下界線は2条であることが僅かに確認できる。

B面の文様は四区製波櫛文と思われるが、第2・第3横帯と下辺横帯の一部が見える程度である。第3横帯は幅2.4cmで斜格子文が充填されており、下辺横帯には僅かに鋸歯文Rが見られる。

文様はA・B両面とも磨滅が著しく凹凸がほとんどなくなっており、文様のある部分とない部分に色調差があることから、肉眼で観察できる程度になっている。

裾端部は外傾する面をなしており、切断痕と見られるが、鱗の両端部とその付近の裾端部に「ひき」も見られ、一部は鋸放ちの可能性がある。

舞 舞はアーモンド形を呈しており、舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）はA面は72.5%（7.4÷10.2×100）、B面は71.2%（7.4÷10.4×100）である。舞はA面・B面で左右に0.3cm程度のズレがあり、中央には高さ0.2cm程の低い鉤脚壁状のバリがある。また、舞面が傾斜する肩下がりはA・B両面とも0.7cmである。

籠 幅はA面で左肩0.8cm・左裾1.7cm・右肩1.5cm・右裾1.6cm、B面は左肩1.3cm・左裾1.7cm・右肩1.6cm・右裾1.6cmである。文様はA面の左下半部が不明であるが内向する鋸歯文L、B面は左側が明らかでないが右側は内向する鋸歯文L Rを主体とし、現状で下から2個分が鋸歯文Rとなっている。また、鋸造後に施された刻みが各々2個ずつ左肩・右肩・左裾・右裾付近の計4ヶ所に見られる。刻みは幅0.3cm・深さ0.2cm程のもので、その間隔は左肩・右肩が0.9cm、左裾が1.0cm、右裾が1.3cmである。

内面突帯 裾からの高さ1.7cmのところに、幅0.8～1.1cm・高さ0.3～0.4cmの突帯が1条巡っている。横断面形は台形を呈するが、A面側では不整形になる部分もある。突帯上面は平坦面をなすが、使用に伴う磨滅はそれほど顕著ではない。

型持 舞に1個、鱗身上半にはA・B両面とも2個ずつ、裾部にもA・B両面とも2個ずつの計9個の型持がある。舞の型持孔は1山である。内面より見るとA面側は隅部がはっきりしているが、B面側は隅部が丸くなったりや不整な長方形を呈しており、長辺2.7cm・短辺1.7cmを測る。型持中尖部には鉤脚壁状のバリがある。

鱗身上半の型持孔は第2横帯よりやや高い位置にある。A面左の型持孔は内面では高さ1.6cm・幅1.4cm、右は高さ1.7cm・幅1.5cmの長方形を呈しているが、外面はともにほぼ円形に整形されている。B面左の型持孔は内面では高さ1.8cm・幅1.5cmの長方形になっている。右の型持孔は内面に隅部が残ることから方形であったことはわかるが、湯回りが悪かったため不整形になっており本来の形は不明である。しかし、不整形な型持孔の左下一部には端部が丸みを帯びたところがあり、整形しようとしたものと思われる。

襟部の型持は内面から見ると台形状を呈しており、A面左は高さ1.5cm・幅1.1cm・右は高さ0.9cm・幅1.5cmである。B面左は高さ1.1cm・幅1.4cm・右は高さ1.0cm・幅1.5cmである。

鎧型の食い違い A面の鉤右側から鱗右上部、B面の鉤右上半部に鎧型の食い違いによる段が認

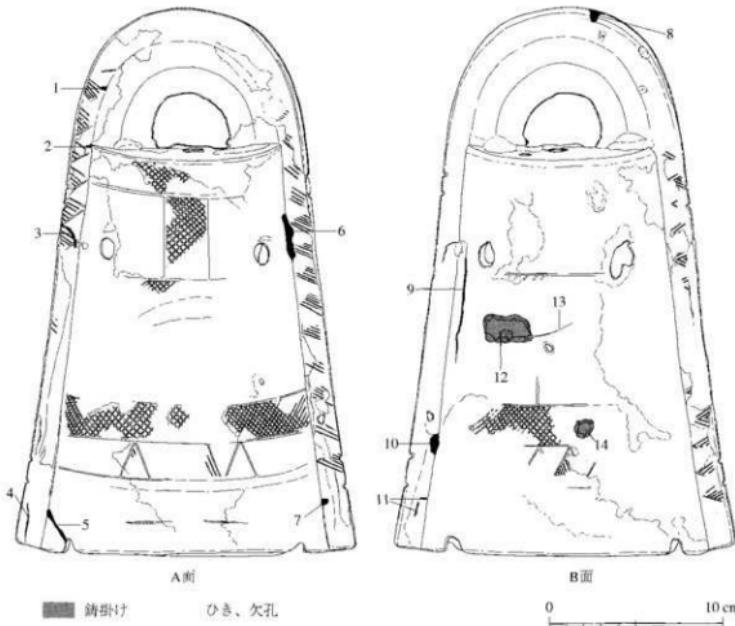
められる。A・B面両面とも0.3cm程度の幅で甲張り状になっており、前述した舞面のズレもこれに対応したものである。舞面の高さには大きな違いは認められないので、鋳型が左右にややズレる形で固定されたものと見られる。

鋳上がり 湯回りが悪く欠孔として残ったところは、舞に1ヶ所、鰐に1ヶ所ある。B面では鰐身右上部型持孔が不整形になっており、孔も現状で1ヶ所認められる他、軟X線写真によれば鋳掛けが2ヶ所見られることから鋳造時には欠孔が3ヶ所あったことがわかる。

また、表面が座む「ひき」がA・B両面の鋸脚や鰐の付け根などに見られ、A面の鋸身中央部や内面突帯に当たる部分の外面にもある。

范傷 范傷は比較的少ない。5はA面左下の型持から左上方にかけて延びる浅い傷である。A面では他に左側鰐から鰐下部に1~4がある他、鋸身右側の鰐の付け根にも6・7がある。B面は鋸身左側に縦方向に入る9があり、この他には鋸頂部の8や鰐左側下方と付け根に10・11がある。

鋳掛け B面鋸身に2ヶ所認められる。12は中央部やや左下に生じた長さ2.6cm・幅1cm程度の孔を補修したもので、孔に接して、または周囲に径0.2cmと小さい円孔8個を足掛かりとして設けた後、鋳掛けしている。鋳掛けとの関わりは不明だがこの左側に続くよう銳利なもので彫刻された線である13が見られる。14は第3横帶中央部付近に生じた径0.7cm程度の孔を補修したもので、孔に接して径0.2cmと小さい円孔5個を足掛かりとして鋳掛けしている。鋳掛け部分は深緑色を呈しているのに対し、銅鐸本体は淡深緑色と色調が異なっている。



第93図 33号鐸の鋳造状態

赤色顔料 B面鐸身第3横帯左側の位置には小さな窪みがあり、やや赤みのある付着物があった。分析の結果、赤色顔料であることが判明したが、詳細は第6章第3節に譲りたい。（角田徳幸）

34. 34号鐸 [図版230~237・写真図版227~233・362~364]

型式 外縁付鉢 2式

文様構成 二区流水文

同範関係 加茂岩倉31号鐸・加茂岩倉32号鐸・上尾敷鐸・桜ヶ丘3号鐸

法量	総高	44.6cm	最大幅	現	26.9cm	重量	3.92kg
----	----	--------	-----	---	--------	----	--------

舞長径(A面)	15.2cm	舞長径(B面)	15.2cm	舞短径	10.7cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

裾長径(A面)	24.2cm	裾長径(B面)	24.1cm	裾短径	16.7cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

鉢 出土時の破損によって鉢外縁の外周が欠失する。鉢は高さ現11.5cmに対し、鉢脚の幅が現18.7cmとなる。また、鉢孔は半円形を呈し、高さ2.7cmに対し、幅が4.4cmを測る。外縁と菱環からなる外縁付鉢であるが、断面形では菱環から外縁への移行が漸移的となる。菱環後部の厚さは、鉢の中寄り付近で1.0cm、A面左鉢脚付近で1.1cm、右鉢脚付近で1.2cmを測り、鉢脚に近づくにつれて若干厚くなる。また、外縁の厚さは0.3~0.35cmである。

外縁文様帶は、A面・B面ともに内向鋸齒文Rである。また、外縁文様帶の外周界線がB面右側で認められる。

菱環の外斜面は綾杉文で飾る。このうち、A面側は綾杉文DCの下に綾杉文ZSを重ねている。一方、B面側の鉢の外斜面は綾杉文CDを2段重ねる。また、菱環の内斜面をみると、A面・B面ともに綾杉文CDを2段重ね、さらにその下は無文帶となる。

鐸身 鐸身の高さはA面33.1cm、B面33.1cmを測る。舞と裾との距離はA面33.0cm、B面33.0cmである。器壁の厚さは0.3cm前後で、A面とB面とでは厚さの違いが特に認められない。鐸身は舞から裾部にかけて外反し、その外反率はA面側で1.8% ($0.6 \div 33.0 \times 100$)、B面側で1.8% ($0.6 \div 33.0 \times 100$) である。

鐸身の主文様は二区流水文である。流水文の型は、A面・B面上下DIXとともに8c7xで飾る、いわゆる横型流水文である。4条を1束とし、反転方法はいずれもC反転である。このうち、A面の1、B面の2では上区流水文の肩から鳍に向かって伸びる直線が鋒出されている。

上区とDIXとは横帯によって隔てられる。このうちA面側の横帯は鋸齒文Rで飾られ、B面では山形文となる。なお、山形文を構成する4条の線のうち、外側の2条では頂部が丸みを帯びるのに對して、内側の2条は頂部が「へ」字状に屈曲する。

A面側の下辺横帯は鋸齒文Rを配しており、上下の界線は各3条である。一方、B面の下辺横帯は2段に複帯化し、上段は斜格子文、下段は鋸齒文Rで飾られる。下辺横帯の下側の界線は3条を数える。

裾の端部は面取り整形されて平滑となるが、剥離が進んでおり、研磨痕は観察できない。A面向かって左側の鳍の下端と鐸裾との間で僅かな段差が生じる。

舞 舞の平面形はアーモンド形を呈する。舞の扁平率(舞短径 ÷ 舞長径 × 100)はA面で70.4% ($10.7 \div 15.2 \times 100$)、B面で70.4% ($10.7 \div 15.2 \times 100$)である。A面・B面の型ズレは特に認め

られない。鉢脚壁状のバリが残っており、その高さは約0.1cmである。舞面が傾斜する肩下がりは、A面で0.2cm、B面で0.2cmを測る。

鱗 鱗はA面の左肩で2.0cm、左裾2.5cm、右肩で現1.7cm、右裾で現0.1cmである。B面は左肩で1.6cm、左裾で現0.1cm、右肩2.1cm、右裾2.6cmとなる。また、鱗の厚さは肩付近で0.35cm、裾付近で0.4cmを測る。「ひき」の部分を除けば、鱗の基部と端部とでは厚さがほぼ同じである。

左右の鱗はA面・B面ともに内向鋸齒文Rで飾られる。裾付近に近づくにつれて鱗の幅が若干広くなり、鋸齒文も大型化する傾向が窺える。また鋸齒文の頂角付近が不鮮明である場合が多い。

鱗の両肩の部分には、本来、「B」字形の飾耳が付くはずであったと見られる。しかし、A面左側に当たる飾耳の突出部は鋳造後の面取りによって切除される。また、右側の飾耳は、出土時の破損によって欠失する。ただし、飾耳の脚はA・B面ともに観察でき、鐸身と接している。脚の内側には鋸齒文などは認められない。

内面突蒂 内面突蒂は1条である。櫛からの距離はA面側で4.2cm、幅は1.1cm、高さ0.35cmを測る。B面側は距離4.3cm、幅1.1cm、高さ0.4cmを測る。

鐸身中央の断面形は角の取れた台形状を呈するが、鱗に近づくにつれてカマボコ形となる。A面側では、上面の下側の稜線が比較的明瞭となるが、B面側では上面の稜線がそれほど明瞭でない。

型持 舞に2ヶ所、鐸身上半にA面・B面とも2ヶ所ずつ、裾もA面・B面ともに2ヶ所ずつ計10ヶ所に型持との接触痕が確認できる。

舞の型持は2山であり、正円形（截頭円錐）であったと見られる。ただし、鋳造欠陥によって型持孔は歪な形を呈しており、特にB面側では大きな欠孔となる。型持孔はA面で長軸1.4cm、短軸1.2cm、B面で長軸3.6cm、短軸2.1cmを測る。

また鐸身上半の型持孔は、A面左で高さ1.0cm、幅1.0cm、舞からの距離7.2cmであり、右は高さ1.4cm、幅1.1cm、舞からの距離6.5cmを測る。B面左側の型持孔は高さ0.8cm、幅1.2cm、舞からの距離7.5cmであり、右は高さ1.1cm、幅1.2cm、舞からの距離7.2cmを測る。型持孔は「ひき」などによって不整円形を呈する。ただし、本来の型持はいずれも円形（截頭円錐）と見られる。

裾部の型持孔は逆「U」字形を呈することから、いずれの型持も、櫛の切端部から内側部分の形状は逆「U」字形であったと見られる。A面左の型持孔は高さ1.6cm、幅1.4cmを測り、右は高さ1.6cm、幅1.3cmである。また、B面左は高さ1.5cm、幅1.4cmで、右は高さ1.8cm、幅1.0cmとなる。

鉢型の食い違い A面とB面とでは鉢型の大きな食い違いは認められない。ただし、B面の鉢孔の左側で0.2cmの段が生じる（3）、A面側ではこの部位に段が認められない。菱環稜部から鉢孔までの距離が3.6cmを測る。ちなみに加茂岩倉32号鐸のB面では、菱環の内斜面の幅は4.0cmを測り、これに鉢孔付近の段差部分を差し引けば3.6cmとなる。したがって、鉢型の段階では34号鐸と32号鐸の鉢孔の大きさにはほとんど差がなかったと見られる。

また、A面左鱗の下端では段が生じる（4）。これは、A面側の鉢型の鱗下端がB面側に対しても若干短かったことを示すと見られる。同範銅鐸のなかでは34号鐸の裾の型持が比較的細長く見えるのは、同範銅鐸間で裾の型持の位置がほぼ同じであること、34号鐸の裾丈が比較的長いことに起因するのであろう。

鉢上がり 鉢上がりが悪いために文様が不鮮明な箇所が所々に認められる。また、湯回りが悪いために孔として残ったところは、鉢に1ヶ所（5）、舞に2ヶ所、鐸身A面に8ヶ所（6～13）、A

面右（B面左）側の鋒に2ヶ所（14・15）、鋒身B面に18ヶ所（16～33）の計31ヶ所で認められる。このうち、23は亀裂状の鋳造欠陥である。

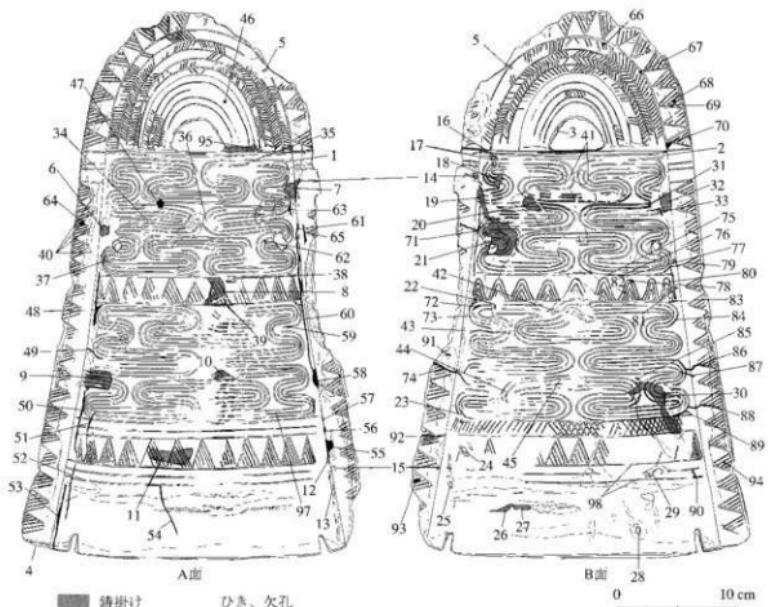
また、内面突帯や鉢脚などを中心に「ひき」が認められる。内面を観察すると、型持孔の周辺が隆起しているかのように見えるが、さらにその外周が「ひき」によって窪んだためと考えられる。

文様の鋳流れは、A面で7ヶ所（34～40）、B面で5ヶ所（41～45）の計12ヶ所で認められる。同范銅鐸のなかでは文様の鋳流れが多い。このうち、A面鋒身の34～37は流水文が流れたものと見られる。その結果、36～38では流水文の条線が掛け違いになったように見える。また、39は第1横帯の鋸歯文が流れたのである。A面左鋒の40では、鋸歯文の頂角付近が鉢方向に向かって流れている。B面の41～45は流水文の鋳流れと考えられる。

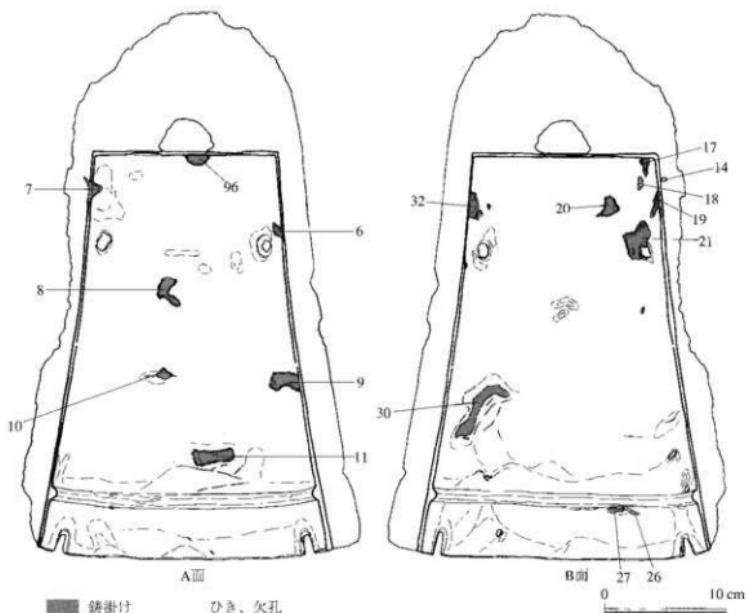
範傷 範傷は、A面側で鉢の1ヶ所（46）、鋒身の17ヶ所（47～63）、左鋒の1ヶ所（64）、右鋒の1ヶ所（65）で認められる。また、B面では鉢の5ヶ所（66～70）、鋒身の20ヶ所（71～90）、左鋒の3ヶ所（91～93）、右鋒の1ヶ所（94）で確認できる。

このうち、鋒身の側縁から鋒の付け根にかけて生じた48・51・53・60・61・63・71・79は、本来の鋳型とその破損を補う補修材との隙間に溶鋼が回った結果鋳出された可能性がある。また、B面の71・74・79・81・86～88は、鋒身から鋒にまたがって範傷が発生する。

鋳掛け 鋳掛けは舞に2ヶ所（95・96）、A面鋒身に6ヶ所（6～11）、B面鋒身に9ヶ所（17～



第94図 34号鐸の鋳造状態（外面）



第95図 34号鋸の鋸状態（内面）

21・26・27・30・32) の計17ヶ所で確認できる。鋸掛け部分は、現状では黒褐色を呈しており、鉄鋸本体とはスズや鉛の配合比が異なるためと見られる。肉眼観察や軟X線写真による限り、足掛かりは設けられていないようである。

また、鋸掛け後の工具による刺突痕が6・7・9・14・21・32・95で見られる。このうち、鉢の95はA面右鉗脚から舞にかけて生じた鋸造欠陥に対して行われる。外表面をふさいで舞の内面から溶鋼を注いだものと見られる。

また、A面鉢身の7は、一部右鉗まで及んでおり、その裏側にあたるB面でも工具による刺突が施される(14)。B面鉢身の20は2回にわたって鋸掛けを行っている。

補刻 A面鉢身で4ヶ所(8・9・11・97)、B面鉢身で5ヶ所(19~21・30・98)で補刻が施される。鋸掛け部分での補刻がほとんどだが、A面の97とB面の98では対応する鋸掛けが認められない。

補刻のうち、A面の8は第1横帯の鋸歯文を補刻する。また9では、本来は上区流文のc反転にあたる部位でありながら、平行線を刻んでいる。B面の19も同様である。11は下辺横帯の鋸歯文と上下の界線を補刻している。B面の30は、下区流文の右下端と下辺横帯の斜格子文を比較的忠実に補刻する。そして、98は下辺横帯の下側の界線を補刻したものである。 (北島大輔)

35. 35号鋤 [図版238~245・写真図版236~242・365~367]

型 式 篦平鋤 2式～突線鋤 1式

文様構成 四区裂波紋文

法 量	総 高	47.35cm	最大幅	28.7cm	重 量	5.38kg
	舞長径(A面)	15.2cm	舞長径(B面)	15.1cm	舞短径	10.8cm
	裾長径(A面)	23.0cm	裾長径(B面)	23.1cm	裾短径	16.4cm

鋤 菱環と外縁、内縁からなる扁平鋤もしくは突線鋤である。高さはA面が12.3cm、B面が12.3cm、幅はA・B面ともに18.5cmで、鋤孔の高さは2.8cm・幅3.8cmを測る。鋤の外縁端部及び鋤孔端部には研磨・加工痕が観察できる。菱環の幅はA面が2.9~3.0cm、B面が2.8~3.0cmである。

A面を基準としたときの菱環稜部の厚さは、中央部0.7cm・左端鋤脚部1.6cm・右端鋤脚部1.4cmである。

文様の構成はA・B面とも基本的にはほぼ同じである。鋤の端部付近には外周線が認められる。外縁は第1・第2文様帯に分かれ、外縁第1文様帯には内向する鋸歯文、外縁第2文様帯には外向する鋸歯文が充填されている。綾杉文が充填された菱環文様帯は、A面では2条もしくは3条、B面では2条の平行直線文によって、いずれも4つの区画に分割されている。綾杉文は、菱環を横断する直線文を境に対向しており、その配列はA・B面ともD||C||D||Cである。内縁は、菱環文様帯に沿って2本の条線が施された重團文となっている。

A面では外縁第1文様帯と第2文様帯の界線が複線となっており、その間隔は0.2~0.5cmを測る。B面では外縁第2文様帯と菱環文様帯の界線が複線である。この界線の間には1本の条線が入るため、部分的には界線が3条あるように見えるが、条線の左右両端部は外縁第2文様帯に接して途切れたり、三日月形文様帯として独立しているように見える。複線となった外縁第2文様帯と菱環文様帯の界線間隔は0.2~0.6cmである。

外縁第1文様帯は、A・B面ともに左端から4単位の鋸歯文がLで、そのほかは全て鋸歯文Rである。幅はA面中央で2.7cm、左端で1.9cm、右端で1.7cm、B面中央で2.7cm、左右端部で1.9cmとなっており、鋤の頂部と左右端部での間隔差が比較的大きい。

外縁第2文様帯の鋸歯文は、A・B面とも中心軸に対して左右対称を意図した配置になっている。A面は、中央にL Rの鋸歯文を配し、左側へ2単位がR、次にL Rを挟んで続く4単位が鋸歯文L、右側は、2単位の鋸歯文Lに続いてL Rが配置され、そこから3単位の鋸歯文Rが並んでいる。左端付近ではLが4単位割り付けられているのに対して、右端付近ではRが3単位しか配置されていない。左右両端部には半施文の鋸歯文がある。

菱環の綾杉文が直線文を境にして平行斜線文の方向を変えるのと同様に、外縁第2文様帯の鋸歯文もL Rを挟んで方向を転換しているが、菱環を横断する直線文とL R鋸歯文はそれぞれ対応した位置関係にある。

B面は中央より左側4単位が鋸歯文R、続く4単位が鋸歯文L、中央より右側4単位が鋸歯文L、続く4単位が鋸歯文Rとなっている。A面とは異なりL Rの鋸歯文は施されていないが、菱環の平行直線文に対応する部位で平行斜線文の方向が転換するという共通点がある。文様帯の幅は、A面中央部1.6cm・左端1.0cm・右端1.2cm、B面が中央部1.7cm・左端1.2cm・右端1.1cmである。

内縁に施文された条線の幅は、A面が0.3~0.4cm、B面が0.3~0.5cmである。内縁と鋤孔の端部

の間には段が付いており、内縁とバリの境界が明瞭である。鉢孔端部には工具による加工痕が認められる。

鉢の側端部には損傷を受けて削られたところがあるが、原形を留める部分には研磨痕が認められることから、もともとは全体的に整形・研磨が施されていたものと見られる。

鐸身 高さはA面が34.9cm、B面が34.5cm、厚さは0.3cmを測る。側面から見ると舞から裾にかけて外反しており、その外反率（舞・裾線からの最深点÷舞から裾の長さ×100）は、A面が2.05%（0.7÷34.1×100）、B面が1.78%（0.6÷33.8×100）である。

鐸身の主文様は、A・B面ともに横帯と縦帯によって構成される四区袈裟模文である。文様の構成は基本的にA・B面で共通しており、側面から見た両面の文様帶にズレはほとんど見られない。

A面の第1横帯は幅2.6cm、第2横帯は幅2.9cm、第3横帯は幅3.4cm、B面の第1横帯は幅2.6cm、第2横帯は幅2.8cm、第3横帯は幅3.4cmである。横帯の幅は下に行くにつれて広くなっているが、このことは縦帯の幅についても言え、A面の中上縦帯が2.7cm、中下縦帯が3.0cm、左上縦帯が2.3cm、左下縦帯が2.6cm、右上縦帯が2.2cm、右下縦帯が2.5cmとなっている。B面の縦帯幅は、中上縦帯が2.7cm、中下縦帯が3.0cm、左上縦帯が2.2cm、左下縦帯が2.5cm、右上縦帯が2.2cm、右下縦帯が2.5cmを測り、A面と比較してもほとんど差がない。

袈裟模文の横帯、縦帯内には斜格子が充填されているが、その斜格子の間隔も鐸身上部ほど密で、裾に近づくにつれて粗となっている。第2横帯と中縦帯が重なり合う部位には斜格子は充填されず、A面では1つ、B面では4つの重画文が施されている。

この銅鐸の袈裟模文は、A面・B面とともに縦・横帯の界線が切り合っている。縦・横帯内の斜格子文を観察すると、A・B面とも第3横帯を除いて横帯内の斜格子に連続性が認められ、縦帯を断ち割るよう充填されている。第3横帯だけは中縦帯が優先され、切り合い部分で横帯の斜格子が断ち切られている。B面の第3横帯上界線は、縦帯と切り合う部分が細く弱々しい。

第3横帯と下辺横帯の界線は複線で、その間隔はA面が0.3~0.4cm、B面が0.4~0.5cmである。下辺横帯の幅はA面が3.5cm、B面が3.6cmで、横帯内にはL Rの鋸歯文が施されている。

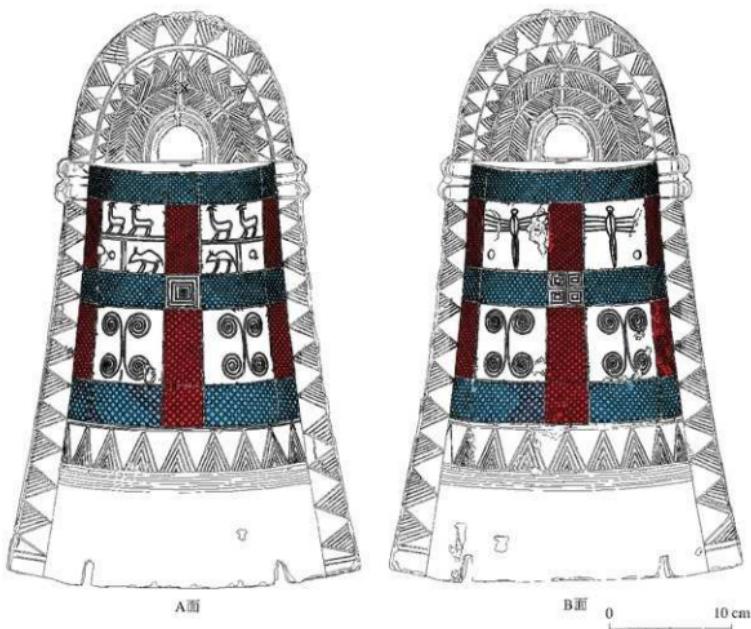
A・B面ともに左端の鋸歯文1単位が半施文となっており、A面では平行斜線文Rが充填されている。下辺横帯下界線は4条で、1~4条間の幅はA面が1.6cm、B面が1.7cmである。4条の下界線は、他の界線や文様の線に比べて太く、突出しているのが特徴である。

縦・横帯によって区画された各区の大きさは、A面上左区が上辺6.1cm・下辺6.3cm・高さ5.7cm、上右区が上辺6.1cm・下辺6.3cm・高さ5.7cm、下左区が上辺6.4cm・下辺6.8cm・高さ6.2cm、下右区が上辺6.4cm・下辺6.9cm・高さ6.2cmである。B面は上左区が上辺6.1cm・下辺6.3cm・高さ5.6cm、上右区が上辺6.1cm・下辺6.6cm・高さ5.7cm、下左区が上辺6.5cm・下辺6.8cm・高さ6.2cm、下右区が上辺6.5cm・下辺6.9cm・高さ6.1cmとなっている。

裾の端部は平坦な面をなしており、所々に切断痕や研磨痕が観察できる。

絵画 A・B両面の鐸身には、横帯と縦帯によって区画された上区に絵画が、下区に四頭渦文が鉛出されている。A面の上段左右2区画は、さらに2条の平行直線文によってT字状に3分割されており、その中に絵画と型持孔が配置されている。上区内の区割り方法は、23号鐸における上区の区割りと共通している。

A面の上左区には、上半にシカが2頭、その下半右側にイノシシが1頭、上右区には上半にシカ



第96図 35号鐸斜格子文の施文単位

が2頭、その下半左側にイノシシが描かれている。シカやイノシシは全て左向きである。B面の左右上区画には、A面と異なりトンボが1匹ずつ描かれている。

これまで全国で出土している絵画銅鐸のトンボは単線で描かれているが、18号鐸同様、35号鐸のトンボは複線で写実的に描かれているのが特徴的である。区画いっぱいに大きく描かれた本銅鐸のトンボは、頭部・胸部・腹部がくびれによって明瞭に区別され、胸部から腹部にかけて条線が表現されている。トンボの翅を3本線で表した絵画銅鐸はあるが、4本線で表現したものは18・35号鐸以外にない。4本の線は前翅・後翅の縁を表現したものと考えられる。

舞 舞の扁平率(舞短径÷舞長径×100)は、A面が71.1% (10.8÷15.2×100)、B面が71% (10.8÷15.1×100)である。A面、B面でのズレは認められない。両面の間には高さ0.2~0.25cmのバリがある。舞面の傾斜を表す肩下がりはA面1.1cm、B面0.9cmである。

鰯 一对の飾耳によって鰯の外縁と区分された鰯は、幅がA面で左肩1.9cm・左裾3.0cm・右肩1.7cm・右裾2.9cm、B面は左肩1.8cm・左裾3.0cm・右肩1.9cm・右裾2.8cmと、裾に向かって幅広くなっている。飾耳の下端から裾にかけて、端部付近に外向線状の線が認められる。端部には加工・研磨痕が残っている。

文様はA面左鰯がすべて鋸歯文R、右鰯は上から7単位が鋸歯文L、続く4単位が鋸歯文Rとなっており、B面左鰯は全て鋸歯文R、右鰯は最下端の鋸歯文がRのはかは全て鋸歯文Lである。A

面、B面とも、鰐の幅に合わせるように文様が据に向かって大きくなり、2本の条線によって鋸歯文列は終わる。A面左最下端及びB面右最下端の鋸歯文は、この2条の線に遮られるように半分しか施文されていない。A面左最下端では斜線文のみの施文となっている。

A面の左右鰐には、裾から約11cm程度のところに短い条線が確認できる(8・11)。鰐の付け根に微かに見えるこの線は、ほぼ左右対称の位置にあり、左側では隣接する鋸歯文のちょうど中間に位置することから、削付線の痕跡とも考えられる。また、同じくA面左鰐の最下端部には、鋸歯文の斜線文に平行する微かな線が認められ(10)、右鰐には一部に鱗端部に平行する線が確認できる。

鰐や飾耳の端部には、湯が鉄型からはみ出てバリ状になったところがあるが、こうした部位には整形・研磨の痕跡が認められる。

「B」字状の飾耳とその脚部には、「U」字を横にしたような文様が施されている。ここには綾杉文などの文様は充填されていない。

内面突帯 裾の端部から4.3~4.5cmのところに、幅1.0~1.4cm・高さ0.3~0.4cmの突帯が1条、さらに裾から5.5~6.0cmのところに、幅0.7cm・高さ0.2~0.3cmの突帯が1条、計2条の突帯が巡っている。

断面は頂部が丸みを帯びた台形で、下段の付け根部分には「ひき」が生じたため、部分的にオーバーハング状になったところがある。

型持 舞にはA・B面に1つずつ、鐸身上半及び裾にはA・B両面にそれぞれ2つずつの型持孔がある。舞の型持孔は、A面が円形で長径1.2cm・短径1.0cm、B面が椭円形で長径1.1cm・短径1.0cmである。内面から見た型持痕は、A面が直径2.1cmの円形で、B面は長径2.0cm・短径1.8cmの隅丸方形を呈している。

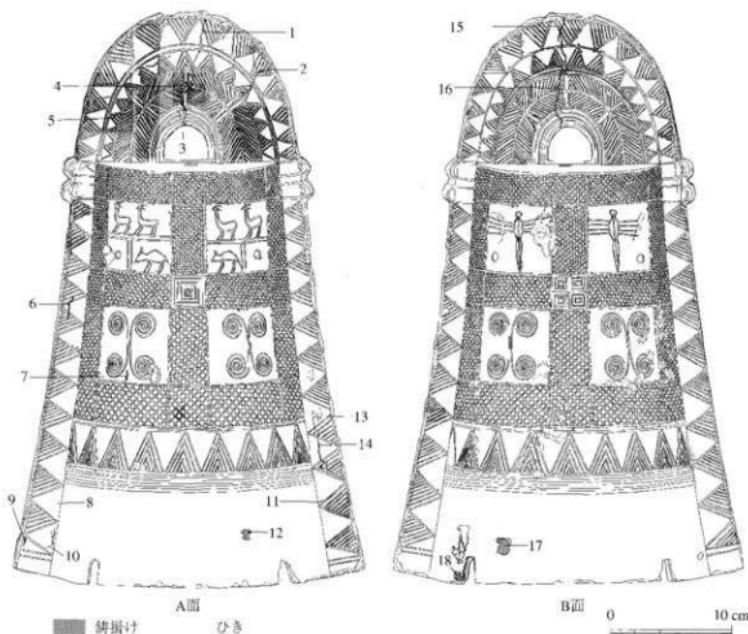
鐸身上半の型持孔は、袈裟襷文によって区画された左右上区の下方寄せりにある。いずれもほぼ円形で非常に小さい。A面が左とも高さ0.7cm・幅0.7cm、舞との距離6.8cmで、B面左の型持孔が高さ0.7cm・幅0.7cm、舞との距離6.8cm、同面右が高さ0.8cm・幅0.8cm、舞との距離6.9cmである。孔の端部は外面側から加工・整形され、内側に向かってすり鉢状にやや傾斜している。

内面から見ると、型持痕はいずれも円形で、A面左が高さ1.9cm・幅1.8cm、右が高さ1.75cm・幅1.6cm、B面左が高さ2.0cm・幅1.8cm、右が高さ2.0cm・幅1.7cmである。

裾の型持孔は長方形もしくは台形状を呈しており、裾の端部から深く入り込んでいる。また、内面から見ると、全ての型持痕の上辺直上に、やや盛り上がった直線痕が認められる。型持の基部に沿って直線状の溝があり、これが鋳出されたことによって生じたものと見られる。

孔の大きさはA面左が高さ2.2cm・幅1.1cm、右が高さ2.1cm・幅1.5cm、B面左が高さ2.3cm・幅1.4cm、右が高さ1.7cm・幅1.3cmである。内面における型持痕の大きさは、A面左が2.3cm・幅1.6cm、右が高さ2.5cm・幅1.8cm、B面左が高さ2.6cm・幅1.7cm、右が高さ2.3cm・幅1.75cmを測る。鰐との距離はA面左が5.6cm、右が5.5cm、B面左が3.3cm、右が5.6cmである。

錫上がり 湯回りが悪く欠孔が生じたようなところは認められない。B面の裾には、左右寄せりに陥没したような大小の溝みが認められるが、このほかに外面には「ひき」によって済んだようなところは見受けられない。軟X線透過による調査においても、鋳造時の気泡が器内に残となって残ったところは極めて少なく、全体的に錫上がりは良かったものと見られる。内面では裾まわりや錫の付け根、内面突帯の付け根に「ひき」が観察される。



第97図 35号鐸の铸造状態

鎚傷 A面では鉢に3ヶ所、鉢身に1ヶ所、鈴に3ヶ所、B面では鉢に2ヶ所に認められる。

1・2は、いずれも外縁第1文様帯の菱形文平行斜線間にある微かな傷である。3は菱環文様帯から内縁に至る。5は外縁第2文様帯にある微かな傷である。15は鉢の頂部から外縁第2文様帯にかけて延びる傷で、16は菱環から鉢孔端部を貫く。いずれも極細い傷である。7はA面下右区の中央下端にある膨らみで、四頭渦文下側の2つの渦文間に延びる縱方向の傷である。鈴には縱方向に波状の傷がある(6・9・14)。

鉄掛け 表面観察及び軟X線調査によると、A面据に1ヶ所、B面据に2ヶ所の計3ヶ所に鉄掛けが認められる。

12・17は内面突帯の直下にあたる部位にある。この2つの鉄掛けには、欠孔の周囲にこれと繋がるようにして穿たれた円形の足掛り孔を観察することができ、補鋲したところを外れにくくする工夫が窺える。また、鉄掛け部分の表面には研磨が加えられており、周囲と比べてかなり色調が異なっている。18はB面帽型持孔の付近にある小さい欠孔を埋めたもので、12・17とは異なり特に足掛りを設けていない。

「×」の刻線 A面の鉢には、菱環中央の稜上にタガネ様工具によると見られる「×」の刻線が認められる(4)。刻線の切り合ひ関係から、左下がりの刻線を打った後、右下がりの刻線が施されたものと見られ、さらに右下がりの刻線がもう一度打ち込まれている。

(山崎 修)

36. 36号鐸 [国版246～250・写真図版244～247・368～370]

型式 外縁付鉢1式

文様構成 四区袈裟摺文

同范銅鐸 念仏壇鐸

法量	総高	30.3cm	最大幅	17.8cm	重量	2.12kg
	舞長径(A面)	10.4cm	舞長径(B面)	10.4cm	舞短径	7.5cm
	裾長径(A面)	15.5cm	裾長径(B面)	15.4cm	裾短径	11.8cm

鉢 鍔は高さ7.6cm、横幅が12.7cmで、やや綫長の半円形を呈する。また、鍔孔は高さ3.1cmに対し、幅が4.3cmあり、やや綫長の半円形となる。いわゆる外縁付鉢に属し、菱環と外縁の境界が断面形・文様帶とともに明確である。菱環底部の厚さは、中央付近で0.7cm、A面左側鉢脚で1.2cm、右側鉢脚で1.2cmとなり、鉢脚に近づくにつれて厚くなる。また外縁の厚さは0.3～0.4cmを測る。

A面の文様を見ると、外縁文様帶には12個の内向鋸歯文Lを配する。鑄の鋸歯文に比べると、鉢の鋸歯文は大ぶりで横長である。菱環の外斜面は、「X」字形の凹形を連ねた結果、上下に向きあう三角形が17単位形成されるが、これに斜線を充填して対向鋸歯文帯とする。このうち、内向鋸歯文の充填線には、斜線Lの場合とRの場合の両者がある。また、外向鋸歯文の充填線は斜線Lの箇所が認められるが、大半は不明である。菱環の内斜面は綾杉文C Dで飾るが、鋲出しが悪いために輪線の有無はわからない。

B面は外縁文様帶に内向鋸歯文を配する。充填する斜線の方向が不鮮明な箇所が多いものの、LとRの両者があるようである。また、菱環の外斜面は対向鋸歯文帯である。このうち、内向鋸歯文は斜線Rで充填し、外向鋸歯文は斜線Lを施すようである。菱環の内斜面は綾杉文Dで輪線を持つ。

鐸身 鐸身の高さはA面22.0cm、B面21.5cmを測る。舞と裾との距離はA面22.2cm、B面21.5cmである。器壁の厚さは0.2～0.3cm前後で、B面に較べてA面側の方が薄い。鐸身は、舞から裾部にかけて僅かに外反し、その外反率(舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100)はA面側で1.4% (0.3÷22.0×100)、B面側で1.6% (0.35÷21.6×100)である。

A面の主文様は四区袈裟摺文である。横帶優先の原則が守られており、左右の縦帶はいずれも鱗から離れて一定の距離をとる。この銅鐸が個性的なのは第2横帶が複帯化する点である。上段には斜格子文を充填し、下段は上下に対向した鋸歯文を「II」字形の平行線で挟みつつ連接させる。この対向鋸歯文のうち、上側の鋸歯文の充填は斜線Lで飾るようだが、下側の鋸歯文はLとRの両者が確認できる。下辺横帯には鋸歯文Lが11個配される。また下辺横帯の下の界線は3条を数える。

B面も四区袈裟摺文である。横帶が優先し、左右の縦帶が鱗から距離をおく点ではA面と同じだが、第2横帶は斜格子文帯の単帯である。下辺横帯は鋸歯文Lを配する。下辺横帯の下側の界線は3条を数える。この3条間の幅がA面側で0.6cmを測るのに対し、B面側では1.0cmであり、幅広となる。B面では、第3横帯や下辺横帯の中央付近が下方にたわんでいる。

B面の裾外表面のIには条線状の削痕が観察できるが、削痕が付いた時期は不明である。

また、鐸裾を見ると、下端が面取りされた部分が大半である。ただしA面の2は端部が外斜面を形成するのは、摩滅によって器壁の結晶構造が表出した可能性がある。また3では、端部に段差が認められるが、鋳造後に鐸裾を整形した際の工具痕と見られる。さらに、B面の4では、鐸裾の外表面が肥厚するように見える。これが鋳型の裾を反映するのか、周囲が「ひき」によって延んだた

めの見せかけなのかは不明である。

舞 舞の平面形はアーモンド形を呈する。舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）は、A面72.1% ($7.5 \div 10.4 \times 100$)、B面72.1% ($7.5 : 10.4 \times 100$) である。A面・B面の型ズレは特に認められない。舞の肩ドギリはA面で0.6cm、B面で0.6cmとなる。また、鉢脚駆状のバリが高さ0.2cm程度生じている。

鑑 鑑の幅は、A面側の左肩で1.1cm、左裾1.2cm、右肩1.2cm、右裾1.3cmである。B面側は左肩1.1cm、左裾1.3cm、右肩1.1cm、右裾1.3cmとなる。また、鋳造後に施された刻みが各々2個ずつ、左肩(5)・右肩(6)・左裾(7)・右裾(8)付近の計4ヶ所に認められる。刻みは幅0.2cm、深さ0.15cm程度のものである。その間隔は、A面左肩で1.8cm、右肩1.9cm、左裾1.6cm、右裾1.7cmである。飾耳を持たない。

この銅鐸の鑑が個性的なのは、鐸身の側縁に沿った直線を引き、その線の外側に内向鋸歯文を並べる点である。このうち、A面向かって左側の鑑には鋸歯文Lがほとんどであるものの、一部で鋸歯文Rが確認できる(9)。そして右側の鑑は鋸歯文Lで構成されるようである。また、B面向かって左側の鑑は、鋸歯文Lを17個確認できる一方で、右側の鋸歯文帯は不鮮明なため、鋸歯文の数や充填斜線の方向は不明である。

内面突帯 堀からの距離1.2~1.8cmのところに、幅約0.8cm、高さ約0.2cmの内面突帯が1条巡る。その断面形は台形を呈するが、鐸身に近づくにつれて上面の稜線がシャープとなり、平坦面も幅広となる。内面突帯が舌との接触によって磨り減った結果と見られる。なお、B面の一部で突帯が途切れる箇所(10)があるが、鋳造欠陥によるものと見られる。

型持 舞に1ヶ所、鐸身上半にA・B面とも2ヶ所ずつ、裾もA・B面とも2ヶ所ずつの計9ヶ所に型持との接触痕が確認できる。

このうち、舞の型持は1山である。鋳造欠陥によって型持孔のA面側が一部で不整形となるものの、長辺は2.2cm、短辺が1.6cmを測る。本来の型持は長方形（截頭四角錐）に復原でき、その長軸は舞の長軸に対して直交する位置関係にある。

鐸身上半の型持孔はA面では第2横帯の上段と交わり、B面では第2横帯よりもやや高い位置にある。これは第2横帯がA面では複帯化し、B面では単帯であるためであり、型持の位置自体に大きな差はない。A面左側の型持孔は高さ1.0cm、幅1.0cm、舞からの距離5.8cmを測り、右側は高さ1.3cm、幅1.1cm、舞からの距離5.8cmである。B面向かって左側の型持孔は貫通していないが、銅鐸内面には型持との接触痕が残っている。また、右側の型持孔は高さ0.9cm、幅0.7cm、舞からの距離5.9cmを測る。本来、鐸身上半の型持はいずれも方形（截頭四角錐）に復原できる。

裾部の型持孔を内面から観察すると、本来の型持は、裾の切断部から上の形状が方形であったと復原できる。A面左は高さ0.7cm、幅0.9cmを測り、右は高さ0.6cm、幅2.1cmである。B面左は高さ0.5cm、幅2.0cmで、右は高さ0.1cm、幅1.0cmとなる。なお、B面右側の型持孔の高さが低いのは、その周辺の裾の長さ自体が「ひき」によって短いためであろう。

鑄型の食い違い A面の鉢外縁の端部を見ると、左側(11)で最大0.3cm、右側(12)で最大0.2cmの幅の段が生じる。これに対し、B面では右側で最大0.4cmの幅で段が認められる。これは、鉢型のズレが0.2cm程度あるのに加えて、バリの除去処理が不完全であったためと見られる。また、鉢孔に沿ってバリが発生する。

鋲についてもA面右側の外周に0.2cm、B面左側に0.2cmの段が生じるが、バリの除去処理が不完全であったためであろう。

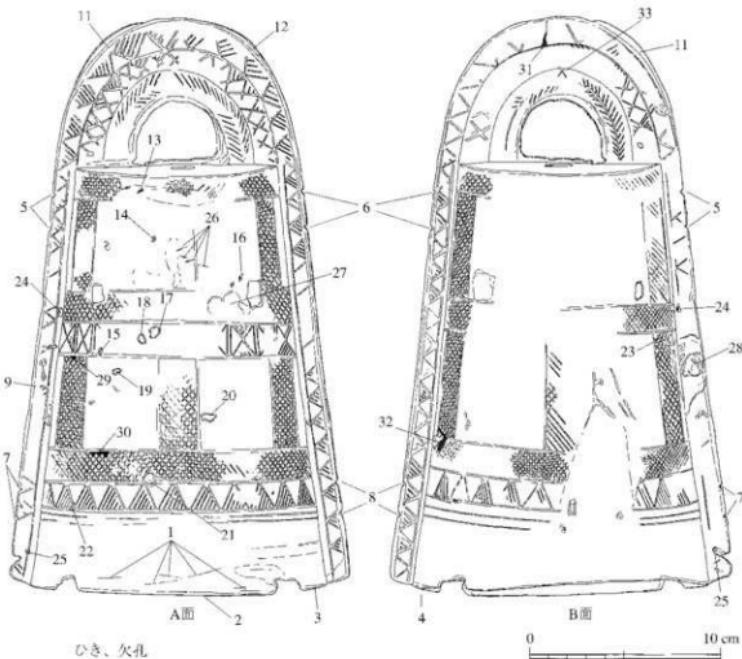
鋳上がり 錫上がりが悪いために文様が不鮮明な箇所が所々で認められる。このうちA面では、第2横帯と中央縦帯の上区付近が不鮮明となる。またB面では、左右の縦帯を除いて上区の文様が不鮮明である。

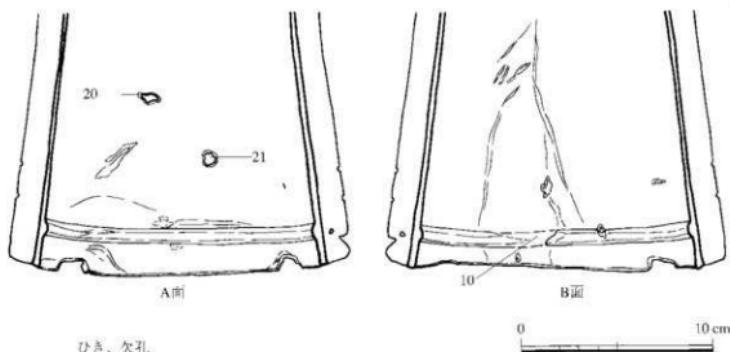
鉄造欠陥による欠孔が、錫身A面で10ヶ所(13~22)、錫身B面で1ヶ所(23)、A面左(B面右)側の錫で2ヶ所(24・25)で認められる。また、A面錫身上区中央の縦帯付近の26で亀裂状の鉄造欠陥が生じる。右側型特孔付近の27は、溶銅が舞に向かって流れる途中で凝固したものと見られる。さらにB面右側の錫をみると、中位付近の28で器表面がケロイド状に乱れている。

范傷 明確に范傷と判断できる箇所は少ない。ただし、A面錫身左縦帯の29や第3横帯の30に加え、錫B面の外縁中央の31やB面錫身の左縦帯と第3横帯が接する部分の32は僅かに盛り上がっており、范傷と見られる。

「X」の刻線 B面の鉈菱環の稜部に「X」印の刻印が施される(33)。加茂岩倉銅錫のなかでは比較的小ぶりである。

(北島大輔)





第99図 36号鐸の鋳造状態（内面）

37. 37号鐸 [図版251~258・写真図版249~254・371~373]

型式 外縁付鉢 2式

文様構成 四区菱彫棒文

法量	総高	45.4cm	最大幅	27.7cm	重量	4.16kg(上付)
舞長径(A面)	15.0cm		舞長径(B面)	15.1cm	舞短径	10.6cm
裾長径(A面)	23.5cm		裾長径(B面)	23.5cm	裾短径	17.4cm

鉢 文様構成は菱環と外縁で構成される外縁付鉢である。高さはA面12.8cm・B面12.9cmで、幅は現状で18.3cmを測り、推定18.9cmである。外形は隅九台形状を呈しており、これは外縁ないし菱環内斜面の幅の差が大きいため、外縁付鉢2式擬型流文でも同様の形状をしている(難波1991)。鉢孔は現状で幅3.4cm・高さ3.1cmを測る。孔の頂部と鉢脚間にパリ状になっている部分がある。鉢孔は本来幅3.3cm・高さ3.4cmを測る逆「U」字形を呈していたと思われる。鉢孔高の鉢高における比率はA面で26.6% ($3.4 \div 12.8 \times 100$) である。

菱環後高(舞から菱環後顶部までの高さ)はA面7.2cm・B面6.7cmで、鉢高における位置(菱環後高÷鉢高×100)はA面56.3% ($7.2 \div 12.8 \times 100$) の位置にあり真中より高く、B面では51.9% ($6.7 \div 12.9 \times 100$) でほぼ鉢の真ん中にあることがわかる。鉢型に上下のズレがないことから、稜頂の位置に6mmの差があることになる。

A面は、外縁幅が頂部で2.4cm、付け根で1.9cmと幅に差があり銀歯文Lを飾る。菱環外斜面は左端2.5cm・右端2.9cm・中央3.4cmと幅の差が大きい。この部分には連続渦文Z第I種を飾るが、幅広の頂部付近には隙間ができるため、もう1帯小さ目の連続渦文Z第I種を菱環後側に配置し矛盾を解消している。いずれの渦文も4周で外縁付鉢2式横形流文の渦文などに比べて巻数が多い。また、この渦文を挟むようにして左右両側にシカと思われる浮き彫りの獸を、2頭ずつ内側を向かせて配置している。小さい連続渦文と獸が菱環の稜部に、外側の渦文は菱環部でも平坦な部分に飾られている。

内斜面にも満文乙第I種でその内側に2条の平行線がある。内斜面は傾斜が緩いが平坦な部分はない。菱環内斜面の鉢脚付け根の満文が半分しかないが、これはこの部分が「ひき」によって窪んでおり、文様が鋳出されていないためである。

B面は、外縁・菱環ともすべて内向きの鋸歯文Rで統一している。外縁幅は左端2.1cm・右端1.6cm、中央で1.6cmを測る。菱環外斜面は2帯からなりA面同様に幅の差が大きい、このため外斜面の2帯の鋸歯文は鉢頂側でかなり大きくなっている。右鉢脚付け根から数えて6番目の鋸歯文(32)は頂角が文様帯の途中にあるため正三角形となり、その頂角から直線が界線まで延びている。

菱環内斜面の鋸歯文と鉢孔との間には無文の部分がある。この部分は特に状態が悪く表面が残っていないので、もう一帯鋸歯文があった可能性がある。鋸歯文は全体的に線が太くシャープさを欠き、三角形のバランスが悪く流麗さを欠く。

錠身 身高はA面32.6cm・B面32.4cm・厚さ0.2cmを測る。身の反りは僅かで直線的に開く。外反率(舞・鋸歯からの最深値÷舞から鋸の長さ×100)はA面で1.24% ($0.4 \div 32.3 \times 100$) で下区の中央あたりが最深となる。

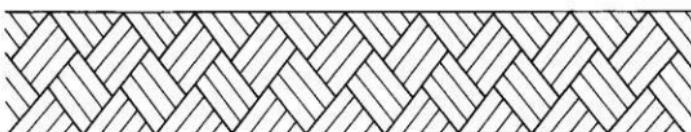
A面は文様上下高26.5cmで、文様構成は四区製姿擇文である。縦横帶には斜格子文が充填されている。また、縦横帶の界線が複線化しているが、第1横帯の上界線は舞との境に隙間があるが複線にはなっていない。左右縦帶の界線のうち鉢側の線は下辺横帯まで達している。縦横帶の関係は横帯が優先であるが、左右縦帶の外周線(12)は横帯の端にも続いており、身の装飾部分の両側を画すことになっている。全体としては下辺横帯の下界線とともに「四辺X画装饰面」(佐原1972)が設定された形になっている。鉢の鋸歯文の下端が下辺横帯で終わっていることも合わせると装飾面の区画が強く意識されていたのかもしれない。

斜格子文は横帯の斜線は傾斜がきつく、縦帯の斜線は傾斜が緩くなっている。これは文様を彫るときに縦帯と横帯では鋳型の方向を変えて行ったためである。また、左縦帯下半には角度の異なるR斜線があることから、文様の彫り直しが行われた可能性がある。

下辺横帯は連続満文乙第I種が飾られている。下辺横帯下界線は3条で、条線が文様の線と同じ太さである。

B面は文様部上下高26.4cmで、文様構成は四区製姿擇文である。第3横帯は複合鋸歯文を2段、その他には網代文が飾られている。縦横帶の界線はA面同様に複線になっている。

網代文は、上下向い合わせの鋸歯文の頂角を上に鋸歯文1／2個分空け、さらに左右に半分ずらして配置し、その間に平行四辺形を作りそれぞれのX画を作っている。つまり複合鋸歯文を鋸歯文の高さ1.5個分離した状態にし、その間に平行四辺形を作りそれぞれの空間に隣と反対の斜線を



第100図 網代文模式図

入れている。これによって通常の網代文と異なり、同じ方向の斜線の端が描わずに複雑化する。網代文は複合鋸歯文をベースに複雑化させたものと考えられる。網代文が飾られる銅鐸には恩智垣内山鐸・桜ヶ丘12号鐸・山田セント鐸などがある。

中縦帯は文様が不鮮明で界線も「ひき」により流れている。

第3横帯は複合鋸歯文を2段飾るが、左鰐付近では平行R斜線が見える。不鮮明なためはっきりしないが、鋳型の彫り直しによって斜格子文を施した可能性もある。下辺横帯はR鋸歯文を飾る。下辺横帯下界線は3条である。

舞 長さはA面15.0cm・B面15.1で、短径は10.6cmを測る。舞扁平率（舞短径：舞長径×100）は、A面70.7%（ $10.6 \div 15.0 \times 100$ ） A面側に型持孔に接するようにして引きによる細長い孔があるが、それ以外には目立った鋳造欠陥はない。

鰐 鰐はA面では左肩で1.9cm、左裾で2.2cm、右肩1.9cmで、右裾で2.2cmを測る。鰐の下端は水平にならず斜めになっている。鰐にはL鋸歯文を配置している。右耳と切り合う部分の鋸歯文は、鋸歯文中の条線が斜線に平行していないものがあり、左右とも最下段は半鋸歯文で頂角が下辺横帯下界線の下端線の高さにある。つまり鰐においても身の裾と対応する部分には文様がない。また、右下端の半鋸歯文の条線は斜線に平行していない。半円形飾耳との関係は、飾耳に脚がなくそのまま外縁へと連続している。

飾耳は身の上端の位置に1対あるが、B面では左の飾耳は鉄出されていない。B面右の飾り耳は幅がやや長くなっているが、これは鋳型がズレた関係で溶鋼が回ったものと思われる。

内面突帯 内面突帯は1条で、裾から5.5cmから5.8cm上にあり、幅1.2~1.4cm・高さ0.4cmである。鰐側に比べて中央付近では内面突帯の高さが低くなり、平坦面が明確化している。特にA面側でそれが顕著である。

型持 型持は舞の両面に1個ずつ、身の両面それぞれに、上半に2個、裾に2個の計10個の型持孔がある。舞の型持はB面では孔が空いていないが、これは外型と型持とに僅かに隙間ができ溶鋼が回ったためである。外型は左右にズレを生じていることから、外型と中型の対応がズレた可能性もある。また、このことから型持が内型に造られていたことがわかる。A面の型持も完全には開いておらず鰐側にはバリ状に残っている。

舞内面からは両面の型持の全体がわかる。A面は幅1.6cm・長さ1.8cm・高さ0.2cm、B面では幅1.9cm・長さ1.75cm・高さ0.2cmを測る。A面は正方形を呈するがB面はやや丸みを持っている。

身の上半の型持は、すべて左右の縦帯に重なる位置にある。A面左のみ型持の全形が残っているが、その他については型持より大きな孔になっている。A面左の型持の孔は幅1.3cm・長さ1.2cmを測るが、内面からの観察では幅1.6cm・長さ1.7cmのほぼ正円形の型持であったことがわかる。身の上半の型持孔は鋳造後の加工を施したものはない。

身下縁の型持は、全体のわかるのはA面左側で幅1.5cm・高さ1.2cmを測る隅円の台形である。側面がすべて平坦になっていることから、鋳造後に整形されているようである。A面の右側はその先端しか残っておらず全形はわからないが、高さが推定1.8cmでくり込みが深いことがわかる。B面も先端しか残っていないが、高さは左が1.0cm、右が1.35cmと推定され、下縁の型持の高さにはばらつきがあったようである。

鋳型の食い違い 鋳型は左右に2mmズレている。このためB面右鰐から外縁にかけて、バリ状に

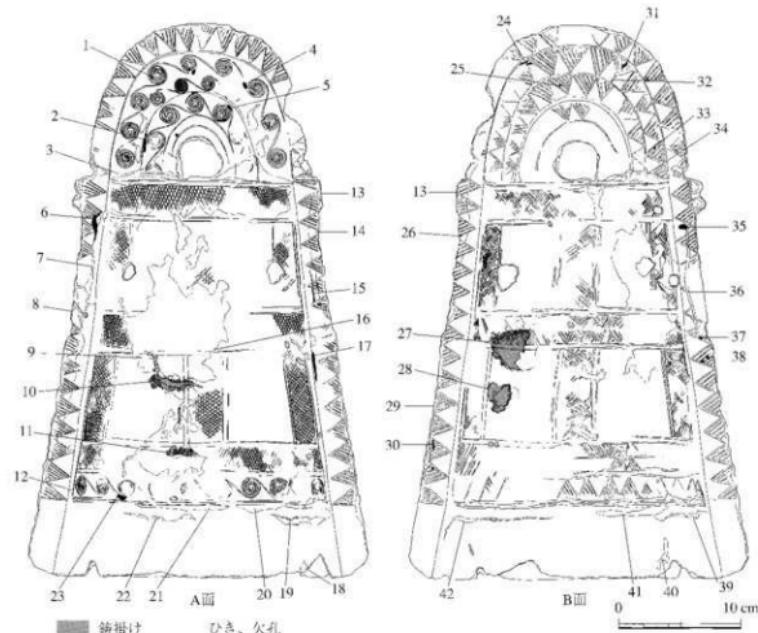
1段下がった部分が周縁に所々見られる。しかしながら裏面のA面ではこの部分に鋸歯文があることから、この部分はバリでなく鋲型がズレたことによってできた部分であることがわかる。A面右の半円形飾耳の先端(13)が、裏側のB面では鋸歯文の下端になっている。これも鋲型のズレと鋲幅が2mm B面の方が長くなっているためである。またA面左縁の飾耳よりも裏面になるB面右縁飾耳の方が長くなっているのも、明瞭な段はないが鋲型のズレによるものと思われる。

鋲上がり 現状では表面が脆弱な状態になっている部分が多く見られる。A面では中縦帯と下辺横帯の中央部分の文様が不鮮明で、右半分は表面がざらざらした感じで凹凸が多く穂が表面化したような状態になっている。

B面では左半分特に左下区周辺の文様が不鮮明で、下辺横帯も左側が右に比べて不鮮明で、下左区の左縦帯や第3横帯・下辺横帯はほとんど文様がない。右縦帯は比較的文様が見えるが、その他の部分は全体にはやっとした感じである。

A面下辺横帯下界線の下には内面突帯をヒドに挟む位置に、B面下辺横帯の下には内面突帯の褪側の付け根に対応する位置に、ほぼ全体的に「ひき」の窪みがある(19・20・21・22・39・41・42)。また、紐の付け根にもA面・B面とも大きな「ひき」による窪みがある(3・34)。さらに、A面鋤身には鋲掛けを行った部分以外にも湯回り不良による孔がいくつか空いている。

范傷 A面鋤の渦文の条線間(1・4・5)や菱環接部と内斜面の渦文の間(2)には盛上りが



第101図 37号鋤の铸造状態

多く見られる。A面右縁に下から11番目の鋸歯文の前後に2.7cmの細長い傷（15）が、右縁の真ん中辺りにも付け根に細長い範囲がある。左縁にも飾耳に接する鋸歯文からその下の鋸歯文にかけて比較的大きな傷がある（6）。また、下辺横帯左から3番目の渦文の下にも傷が見られる（23）。下辺横帯や下界線は文様が不鮮明で若干盛り上がりしているように見えるが、湯回り不良や「ひき」によるものか鋳型の損傷によるものか判断が難しい。B面でも鉢や縁の鋸歯文の条線間に傷が見られる（30・37・38）。

鋲掛け A面に3ヶ所（9・10・11）、B面に2ヶ所（27・28）の鋲掛けがある。A面では下左区上部に2ヶ所（9・10）、第3横帯中央部に1ヶ所（11）行われている。（10）は幅3~4mmで、3.8cmに渡り行われている。この孔の周囲には径2mmほどの足掛りの孔が10個設けられている。9は幅2mm・長さ2.2cmの小さな鋲掛けであるが、やはり孔の周囲には9個の足掛りが設けられている。

B面では左縦帯と第2横帯が交差する辺りに1ヶ所（27）、その下の縦帯付近に1ヶ所（28）鋲掛けがなされている。27は一辺3.0cm程の比較的大きい一角形状の鋲掛けである。足掛りは左側のみ5個設けられている。

補刻 A面では第2横帯の下界線と第3横帯の上界線、中縦帯の左界線に補刻が施されている。第2横帯の補刻の左端は、鋲出された複線の下側界線と補刻の上側界線とを結んでおり、ズレが生じている。B面では下左区を囲む左縦帯と第2・3の横帯の界線と第2横帯の鋲掛けがされている部分と周辺の網代を補刻している。網代は下向きの鋸歯文3個と上向きの鋸歯文4個とその間の平行四辺形部分の補刻を行っている。界線も網代も同じ太さで補刻されている。(松山智弘)

38. 38号鏡 [図版259~263・写真図版256~259・374~376]

型式 外縁付鉢1式

文様構成 四区製装博文

同范銅鏡 加茂岩倉24号鏡・加茂岩倉39号鏡

法量	総高	31.0cm	最大幅	18.6cm	重量	1.92kg
-----------	-----------	--------	------------	--------	-----------	--------

舞長径(A面)	10.5cm	舞長径(B面)	10.5cm	舞短径	7.4cm
---------	--------	---------	--------	-----	-------

裾長径(△面)	16.1cm	裾長径(B面)	16.1cm	裾短径	11.8cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

鉢 菱環と外縁よりなる外縁付鉢である。大きさはA面で高さ8.1cm、B面で高さ8.2cm・幅12.8cmで、鉢孔の高さは3.2cm・幅3.8cmを測る。菱環と外縁は界線が不明瞭で判然としない部分もあるが、菱環はA面で幅2.7~3.1cm、B面で幅2.6~3.2cm・厚さは中央部で0.7cm・左端1.2cm・右端1.1cmである。外縁はA面で幅1.2~1.7cm、B面で幅1.1~1.8cm、厚さは0.3cmである。鉢孔部は菱環の内側下半部に0.7cmくらいまでの幅で甲張りが残っている。

文様は表面が鏡に覆われていることもあり見えない部分が多い。A面は外縁中央から左側に内向する鋸歯文Rが観察できるが、菱環は文様が見られない。B面は外縁と菱環の間の界線が部分的に確認でき、内部の文様は外縁右端に内向する鋸歯文の輪郭が僅かにわかる程度である。

鐸身 高さはA・B両面とも22.9cm、厚さはA面0.4cm・B面0.3cmである。身は舞から裾部にかけてやや外反している。外反率（舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100）はA面で1.32%（ $0.3 \div 22.7 \times 100$ ）、B面で1.77%（ $0.4 \div 22.6 \times 100$ ）である。

A面の文様は四区裂波捺文と思われるが、見えない部分が多く第1横帯・第3横帯・下辺横帯の一部が観察できるに過ぎない。第1横帯は幅1.9cm、第3横帯は幅2.0cmで、横帯の中には斜格子文が充填されている。第2横帯は下側の界線が中央部やや右寄りで僅かに見られ、第3横帯上界線との間隔は5.7cmである。

また、下辺横帯は幅1.5cmで、右側には鈕齒文の輪郭が一部残っている。下辺横帯下界線は2条と見られる。

B面の文様はほとんど見えず、第1横帯の一部と第3横帯・下辺横帯の界線が僅かに観察できるにすぎない。第1横帯は幅1.9cm、第2横帯は幅1.9cm、第3横帯は幅2.2cmで、第1横帯で斜格子文の一部が見られる。

下辺横帯は幅1.6cmであることがわかる程度で文様は観察できない。下辺横帯下界線は2条と見られる。

裾端部は一部欠損しているが、A・B両面とも丸みを帯びている。左右の鱗下端部は鋸み、裾端部から段が付いている。

舞 舞はアーモンド形を呈しており、扁平率（舞短径÷舞長径×100）はA・B両面とも66.7%（ $7.4 \div 10.5 \times 100$ ）である。舞の中央部には高さ0.3~0.7cm程の鉢脚壁状のバリがあり、舞面が傾斜する肩下がりはA面には見られず、B面は0.2cmである。

鎧 幅はA面で左肩1.1cm・左裾1.4cm・右肩1.0cm・右裾1.3cm、B面は左肩1.1cm・左裾1.4cm・右肩1.2cm・右裾1.6cmである。文様はA面では左肩部に外縁と同様に鈕齒文Rが入っていることがわかるが、B面を含めその他の部分では観察することができない。

内面突帯 裾からの高さ1.5~1.8cmのところに、幅0.6~0.7cm・高さ0.2cmの突帯が1条巡っている。横断面形は低い台形状を呈しているが、鐸身中央部を中心に使用による磨滅が見られ突帯の高さがやや低くなっている。

型持 舞に1個、鐸身上半にはA・B両面とも2個ずつ、裾部にもA・B両面とも2個ずつの計9個の型持がある。舞の型持孔は1山である。内面より見ると本来は長方形を呈していたことがわかるが、長辺の方向は鉢の方向に対し斜めに振れている。大きさは長さ2.4cm・幅1.1cmで、型持孔中央部には鉢脚壁状のバリがある。

鐸身上半の型持孔の位置は、文様がほとんど見えないため横帯・縫帯との関係は明らかにできないが、その位置から見てA・B両面とも第2横帯に近いところにあるものと思われる。鐸身上部の型持孔は内面から見ると、いずれも方形または長方形を呈している。A面左側の型持孔は高さ1.4cm・幅1.3cm、右側は高さ1.4cm・幅1.2cm、B面左側の型持孔は高さ1.4cm・幅1.2cm、右側は高さ1.3cm・幅1.3cmである。

裾部の型持は内面から見ると、いずれも横長長方形の段として痕跡を留めている。A面左側は高さ0.7cm・幅1.5cm、右側は高さ0.9cm・幅1.5cmで、B面は左側が高さ0.6cm・幅1.4cm、右は高さ0.7cm・幅1.5cmである。

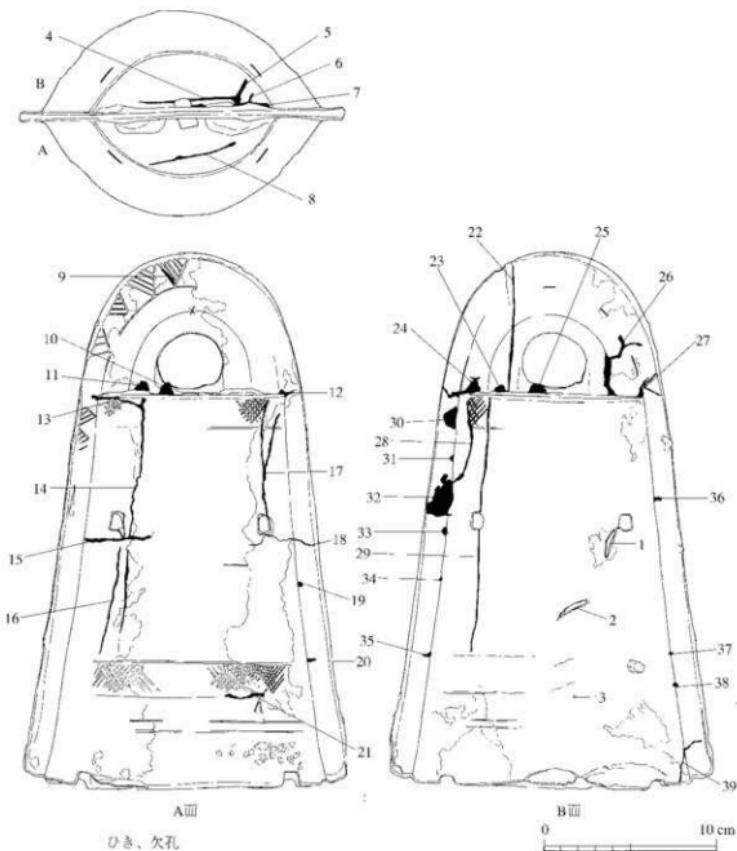
鎧上がり 湯回りが悪く欠孔として残ったところは、B面は鐸身に大きなものが2ヶ所（1・2）見られ、その下にも小さなもの（3）が1ヶ所認められる。

表面が窪む「ひき」は、A面の鉢脚部から舞、B面の舞にそれぞれ2ヶ所が見られる。A面鐸身の範囲14・17、B面鉢の範囲22に沿う部分では浅い「ひき」が認められ、B面鐸身中央部下半では

欠孔（3）の上が皺状になっている。また、左右の鱗下端部にも「ひき」があり、窪んでいる。

范傷 A・B両面ともに范傷が多く、特に鱗や鉢の付け根が盛り上ったものや、縦方向に大きく延びるもののが目立つ。A面は鉢では外縁鋸歯文の9、左右の鉢脚部と鉢脚壁状のバリが盛り上がる10～12があり、舞には鉢に対しやや斜め方向に延びる8が見られる。鱗身は鱗付近から横方向に延びる13・15・18、縦方向に大きく延びる14・16・17、第3横帶下界線が太くなつた21があり、鱗には右側の付け根に19・20が見られる。

B面では鉢に縦方向に延びる22・26、鉢脚部や鉢脚壁状のバリが小さく盛り上った23・24・27、舞では鉢に平行する方向に4・7、これと鈍角に交わるように5・6が見られる。鱗身は左側で縦方向に大きく延びる28・29、右下裾から鱗に延びる39、鱗は左鱗に大きく瘤状に盛り上った30・



第102図 38号鐸の铸造状態

32、鰐の付け根が小さく盛り上がったものには31・33~38がある。

「×」の刻線 A面鉄菱環の中央頂部には、鋳造後タガネ様の工具で浅く刻まれた「×」の刻線が認められる。
(角田徳幸)

39. 39号鐸 [図版264~268・写真図版260~263・377~379]

型式 外縁付鉢1式

文様構成 四区製姿櫛文

同范銅鐸 加茂岩倉24号鐸・加茂岩倉38号鐸

法量	総高	31.0cm	最大幅	19.0cm	重量	2.10kg
舞長径(A面)	10.6cm		舞長径(B面)	10.5cm	舞短径	7.4cm
裾長径(A面)	16.0cm		裾長径(B面)	16.1cm	裾短径	11.5cm

鉢 菱環と外縁よりなる外縁付鉢である。大きさはA面で高さ8.3cm・幅13.0cmで、B面で高さ8.2cm・幅12.9cmで、鉢孔の高さは3.0cm・幅3.2cmを測る。菱環と外縁は界線が不明瞭で判然としない部分もあるが、菱環はA面で幅2.4~2.7cm、B面で幅2.6~3.0cm・厚さは中央部で0.7cm・左端1.1cm・右端0.8cmである。外縁はA面で幅1.3~2.6cm、B面で幅1.3~2.2cm、厚さは中央部で0.4cm・左右端で0.5cmである。鉢孔部は菱環の内側下半部に0.8cm位までの幅で甲張りが残っている。

文様は表面が鏡に覆われていることもあって見えない部分が多い。A面は外縁中央から左側に向する鉢齒文Rが観察できるが、菱環には文様が見られない。B面も外縁中央から左側に向する鉢齒文Rが確認できるが、菱環の文様は観察できない。

鉢身 高さはA面が22.7cm、B面が22.8cm、厚さはA面0.5cm・B面0.3cmである。身は舞から裾部にかけてやや外反している。外反率(舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100)はA面で1.33% (0.3÷22.6×100)、B面で1.32% (0.4÷22.6×100)である。

A面の文様は四区製姿櫛文と思われるが、鏡に覆われて見えない部分が多い。第1横帯は幅2.0cm、第2横帯は幅1.9cm、第3横帯は幅2.2cm、左上縦帯1.7cm、左下縦帯が幅1.9cm、中上縦帯2.0cm、中下縦帯2.1cm、右上縦帯1.6cm、右下縦帯が幅1.9cmである。

各区の大きさは上左区が上辺4.2cm・下辺4.4cm・高さ5.4cm、上右区が上辺3.6cm・下辺3.8cm・高さ5.3cm、下左区が上辺4.6cm・下辺5.2cm・高さ6.2cm、下右区が上辺4.4cm・下辺4.8cm・高さ6.1cmである。横帯・縦帯の中には斜格子文が充填されているが、鉢身左側や上半部は見えない部分が多い。左右の縦帯と鰐の間には界線が入り、間隔が空いている。

また、下辺横帯は幅1.5cmで、中央より右側では鉢齒文Rが観察できる。下辺横帯下界線は2条である。

B面の文様は四区製姿櫛文と思われるが、やはり鏡に覆われて見えない部分が多い。第1横帯は幅1.7cm、第2横帯は幅2.0cm、第3横帯は幅2.1cm、左上縦帯1.8cm、左下縦帯が幅2.0cm、中上縦帯2.0cm、中下縦帯2.2cm、右上縦帯1.7cm、右下縦帯が幅1.9cmである。

各区の大きさは、上左区が上辺3.7cm・下辺4.3cm・高さ6.0cm、上右区が上辺3.5cm・下辺4.0cm・高さ6.0cm、下左区が上辺4.4cm・下辺5.2cm・高さ5.7cm、下右区が上辺4.1cm・下辺5.1cm・高さ5.8cmである。横帯・縦帯の中には斜格子文が充填されているが、鉢身左半部は見えない部分が多い。

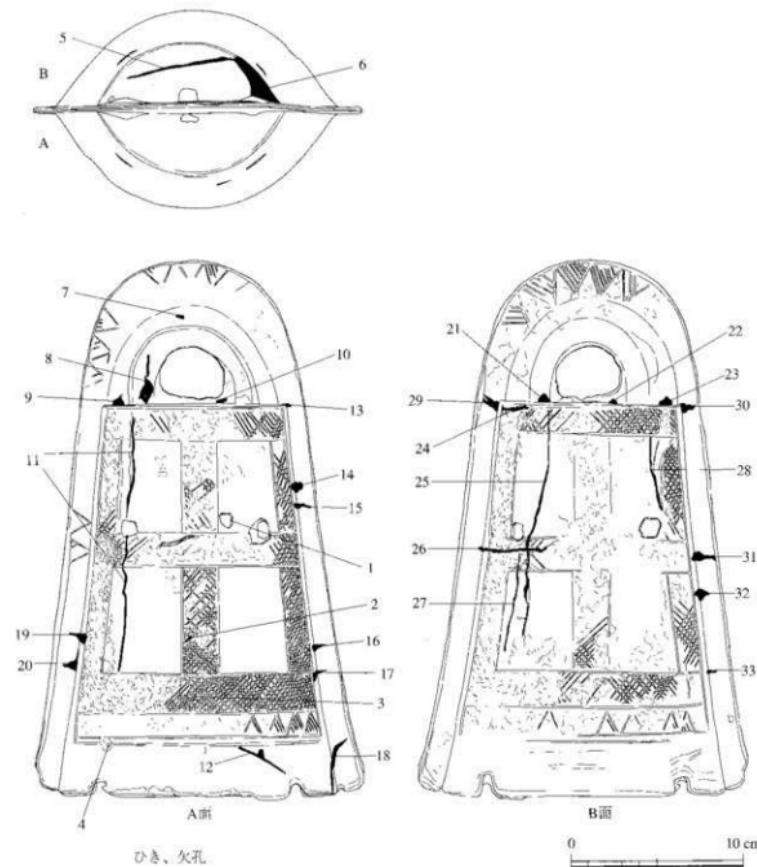
左右の縦帯と舞の間には界線があり、間隔がある。

また、下辺横帯は幅1.7cmで、中央から右側で鋸歯文Rが綴察できる。下辺横帯下界線は2条である。

裾端部は一部欠損しているが、外傾する面をなしており、左右の幡下端部は窪み、裾端部から段が付いている。

舞 舞はアーモンド形を呈しており、扁平率（舞短径÷舞長径×100）はA面が72% ($7.7 \div 10.5 \times 100$)、B面が72% ($7.7 \div 10.6 \times 100$) である。舞の中央部には高さ0.2~0.9cm程の鉢脚壁状のバリがあり、舞面が傾斜する肩下がりはA・B両面とも0.2cmである。

幡 幡はA面で左肩1.3cm・左裾1.6cm・右肩1.0cm・右裾1.7cm、B面は左肩1.4cm・左裾1.7cm・



第103図 39号鏡の鋳造状態

右肩1.1cm・右裾1.6cmである。文様はA面左側中央部に外縁と同じ鋸歯文Rが入っていることがわかるが、その他の部分やB面では観察することができない。

B面右側の中程より上の端部には幅0.2cm程の甲張りが段状に残っている。

内面突帯 補からの高さ1.8~2.0cmのところに、幅0.9~1.0cm・高さ0.2cmの突帯が1条巡っている。横断面形は低い台形状を呈しているが、B面右側の一部に「ひき」のためか低くなつた部分が認められる。使用に伴う磨滅はさほど顕著ではないが、B面中央部では突帯の上面に面ができる。

型持 舞に1個、鐸身上半にはA・B両面とも2個ずつ、裾部にもA・B両面とも2個ずつの計9個の型持がある。

舞の型持孔は1山である。内面より見ると本来は長方形を呈しており、長さ2.5cm・幅1.3cmで、型持孔中央部には鉤脚壁状にバリがある。

鐸身上半の型持孔の位置は、A面は第2横帯と切り合っており、B面は第2横帯と左右の上縦帯には接するところにある。鐸身上部の型持孔は一部不整形になっているが、内面から見るといずれも方形または長方形を呈している。A面左側の型持孔は高さ1.5cm・幅1.4cm、右側は高さ1.5cm・幅1.2cm、B面左側の型持孔は高さ1.6cm・幅1.3cm、右側は高さ1.5cm・幅1.4cmである。

裾部の型持は、内面から見ると現状ではいずれも横長長方形の段として痕跡を留めている。A面左側は高さ1.0cm・幅1.5cm、右側は高さ1.3cm・幅1.5cmで、B面は左側が高さ1.3cm・幅1.8cm、右は高さ1.2cm・幅1.4cmである。

錫上がり 湯回りが悪く欠孔として残ったところはA面に認められ、鐸身右型持孔横に1、鐸身下半部に2~4がある。

表面が痩む「ひき」は、A面では第2横帯や范傷11に沿うように認められる。また、B面では鐸身の范傷25・28に沿う部分で浅い「ひき」が認められるほか、内面突帯に当たる位置の外面に顕著に見られる。

范傷 A・B両面とも范傷は比較的多く、特に鈎や鉤の付け根が盛り上がったものや、縦方向に大きく延びるもののが目立つ。A面は鉤の巻環に7~9、鉤脚壁状のバリに10があり、鐸身は縦方向に大きく延びる11、裾部に斜めに入る12、鈎の付け根には14~20が認められる。

B面では鉤脚部や鉤脚壁状のバリが小さく盛り上がった21~23、舞には鉤に対しやや斜め方向に延びる5や、左鉤脚部から舞の輪郭に沿って盛り上がった6が見られる。鐸身では左側で縦方向に延びる25・27、右側で縦方向に延びる28、第1横帯に沿って横方向に延びる24、第2横帯に沿って横方向に延びる26、鈎は左肩部に29、右側に30~33がある。

(角田徳幸)

第3節 同范銅鐸

1. 上屋敷鐸 [図版269~276・写真図版406~410]

出土地 烏取県岩美郡岩美町大字新井字上屋敷482 (旧岩美町本庄村上屋敷481-2)

出土年 1952 (昭和27) 年 1月13日⁽³⁾

所有者 京都国立博物館

収蔵先 京都国立博物館

出土状況 山腹傾斜面の果樹園で二十世紀梨の施肥のために、土地所有者の平野重蔵氏が溝を掘っていたところ、銅鐸1個が出土した (鳥取県教育委員会1960)。銅鐸は地表下約60cmのところに水平に横たわっていたという。土砂や鏽の付着状況からは埋納状況を復原することができないものの、発見者の記憶どおりに銅鐸が水平方向に埋納されていたとするならば、鐸身上部が破損するA面が上側を向いていた可能性がある。

大字名にちなんで「新井鐸」と呼ぶ場合もあるが (田中1986ほか)、ここでは小字名を探って「上屋敷鐸」と呼ぶこととする。

型式 外縁付鉢2式

文様構成 上区流水文

同范銅鐸 加茂岩倉31号鐸・加茂岩倉32号鐸・加茂岩倉34号鐸・桜ヶ丘3号鐸

法量 総高 売 43.3cm 最大幅 現 25.3cm

舞長径(A面)	15.1cm	舞長径(B面)	15.0cm	舞短径	10.7cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

裾長径(A面)	24.0cm	裾長径(B面)	23.8cm	裾短径	16.4cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

鉢 出土時に受けた破損によって外縁の大部分が消失する。鉢の高さは現高で10.8cm、幅は現17.3cmである。また、鉢孔の高さは2.7cm、幅が4.5cmあり、ほぼ半円形を呈する。鉢は外縁と菱環からなる外縁付鉢である。ただし、その断面形を見ると、菱環と外縁の境界が漸移的となる。菱環頂部の厚さは、鉢の中寄り付近で1.0cm、A面左鉢脚付近で1.2cm、右鉢脚付近で1.2cmである。また、外縁の厚さは0.35cmを測る。

A面の文様帯を見ると、外縁の文様は欠損のために不明である。菱環の外斜面は綾杉文Z Sの下にC Dを重ねる。菱環の内斜面も綾杉文帶である。その単位数は不明だが、上から順に綾杉文C Dを重ねている。

B面を見ると、外縁文様帶は内向鋸歯文Rで飾る。菱環の外斜面は綾杉文C Dを2段重ねる。菱環の内斜面も綾杉文帶である。

鐸身 鐸身の高さはA面で33.0cm、B面が32.3cmを測る。舞と裾との距離はA面で32.6cm、B面が32.3cmである。器壁の厚さはA面側で約0.25~0.3cm、B面は0.15~0.3cmであり、全体的にA面側の方が薄めとなる。鐸身を側面から見ると反りが認められ、その外反率 (舞・裾線からの最深値 ÷ 舞から裾の長さ×100) は、A面側で1.2% (0.4÷32.6×100)、B面側で1.9% (0.6÷32.3×100) である。

A・B面ともに二区流水文を主文様とする。いずれの面も上下区ともに流水文の型が8 c 7 xとなり、いわゆる横型流水文である。反転方法はC反転で、4条を1束とする。なおB面の上区流水文の左肩からは鱗に向かって伸びる直線が観察できる(1)。上段のx反転部や左肩のc反転部や

A面にも同様の線が存在する可能性があるものの、周囲の鏽出しが悪いために判然としない。

A面を見ると、出土時に受けた破損によって上区の中寄り付近が欠失する。第1横帯が鋸歯文帯となる。充填する斜線はRである。下辺横帯も鋸歯文帯で、充填する斜線はRとなる。下辺横帯の界線は上側・下側とともに3条を数える。

一方、B面は第1横帯を山形文帯で飾る。このうち、鐸身中寄り付近が不鮮明なもの、山形文のままであることが確認できる。下辺横帯は複帯化し、上段が斜格子文帯、下段は鋸歯文Rとなる。下辺横帯の下側の界線は3条を数える。

裾は剥離部分を除けば端部が面を持っており、裾を切断する際に面取り整形したものと見られる。ただし、現状では研磨痕などは観察できなかった。

舞 舞の平面形はアーモンド形を呈する。その扁平率は（舞短径÷舞長径×100）、A面で71.3%（ $10.7 \div 15.0 \times 100$ ）、B面で71.3%（ $10.7 \div 15.0 \times 100$ ）である。A面・B面の型ズレは特に認められない。舞面が傾斜するいわゆる肩上がりは、A面で0.2cm、B面で0.2cmとなる。

鰐 鰐は、A面から見て右側の縁辺が肩から裾にかけて欠失するほか、左肩付近の縁辺が破損する。左右の飾耳の突出も失われているが、飾耳の脚が鐸身と接する。鰐の幅は、A面左側の肩で現1.8cm、左裾は現0.5cm、右肩は現0.7cm、右裾は現0.2cmである。

B面側は左肩で現0.7cm、左裾で現0.2cm、右肩で現1.5cm、右裾で現0.5cmとなる。現存する箇所を観察する限り、いずれの鰐も内向鋸歯文Rで飾られるようである。A面右側の鰐の中ほどに工具による刺突痕が認められる。

また、本来は舞付近に「B」字形の飾耳が付くはずであったと見られるが、破損によって失われ、現状では飾耳の脚線のみが観察できる。

鰐の厚さは肩付近で0.3cm、裾付近で0.4cmを測る。「ひき」の部分を除けば、鰐の基部と端部の厚さはほぼ同じである。

内面突帯 内面突帯は1条である。A面側の内面突帯は、裾からの距離が4.8cm、幅が1.0cm・高さが0.45cmである。B面側では、裾からの距離が3.9cm、幅が1.0cm・高さは0.5cmとなる。

A・B面ともに内面突帯の断面形は、角の取れた台形状を呈するが、鐸身に近づくにつれて上面の稜線が明確となる。これは、内面突帯が舌と接触した結果の摩滅とも考えうるが、内面突帯の表面が鰐で覆われており、現状では光沢等は認められない。なお、B面で突帯の高さが一部で低くなり、断面形も不整形となるのは、「ひき」に伴う現象と見られる。

型持 舞に2ヶ所、鐸身上半にA・B両面とも2ヶ所ずつ、裾もA・B両面とも2個ずつの計10ヶ所に型持との接触痕が確認できる。

舞の型持は円形に復原でき、その型持孔はA面側で長径1.6cm、短径1.4cm、B面側で長径1.4cm、短径1.2cmとなる。後述するように、A面側の型持は鋸掛けの際に擬似的に作り付けられたものである。

A面鐸身の上半左側の型持孔は、円形を呈するが、破損のために高さ・幅が不明である。また右側は、高さ1.3cm、幅1.3cm・舞からの距離5.8cmで、いずれも円形を呈する。一方、B面も円形であり、左が高さ1.1cm・幅1.2cm・舞からの距離6.4cm、右が高さ1.4cm・幅1.4cm・舞からの距離6.0cmを測る。A・B面とともに、鐸身上半の型持孔は、上区の流水文のうち上から3段目のc反転部付近に位置する。

幅の型持は逆「U」字形を呈する。このうち、A面左は高さ2.1cm・幅1.3cm、右は高さ1.6cm・幅1.3cmを測る。B面左は高さ2.1cm・幅0.9cmで、右は高さ1.3cm、幅1.2cmとなる。

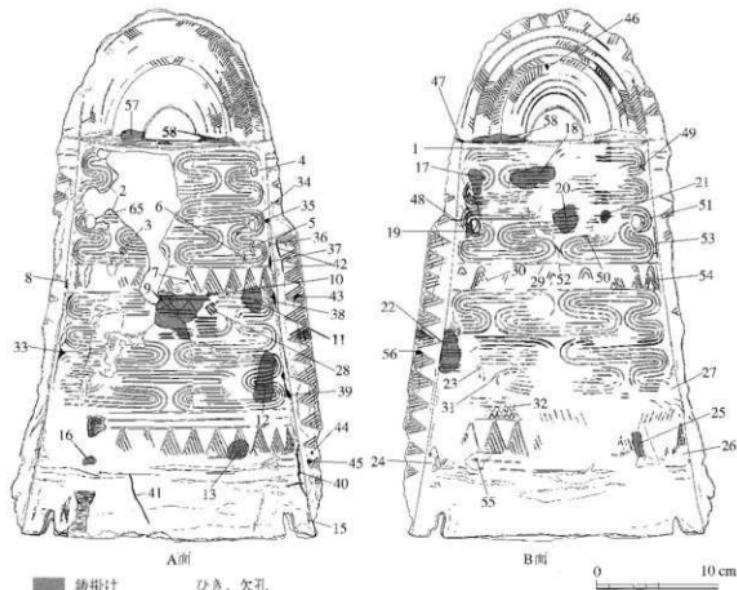
鋳型の食い違い 鰐の縁辺部が欠損するため、外形線での鋳型のズレは検討できない。ただし、舞や柄を見ると、鋳型が食い違うことは特にならないようである。

鋳上がり 鋳造欠陥によって欠孔となった箇所は、舞で2ヶ所、A面鐸身で15ヶ所（2～16）、B面鐸身で11ヶ所（17～27）で認められる。このうち、2では周囲の欠損部分とは異なり、端部が鋳造時の面と同じであることから、鋳造欠陥による欠孔と判断した。

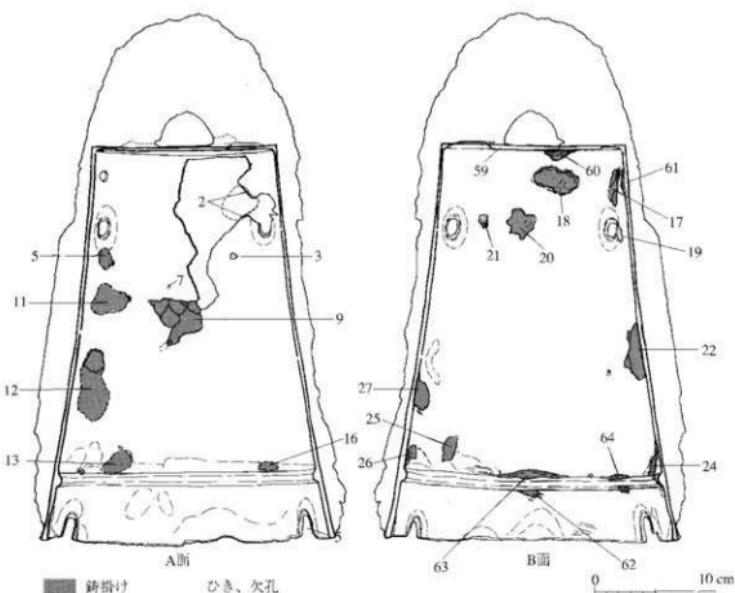
また、文様の鋳流れが5ヶ所で確認できる（28～32）。このうち、鐸身A面下区の28は流水文の一部であろう。また、B面の29は、第1横帯の上側の界線が流れたと見られる。30は山形文の一部が流されている。下区流水文の31は、左側2段目のx反転部の鋳流れであろう。さらに、32は下辺横帯の斜格子文と鋸歯文が流された結果、下区の流水文と重なっているかのように見える。

このほか、内面を観察すると、各部位の型持孔の周囲が僅かに隆起するかのように見える。ただし、そのさらに外側の縁辺が僅かに窪んでいるため、これらの隆起は「ひき」によって周囲が窪んだ結果生じた現象と見られる。

范傷 范傷を探すと、A面側では鐸身の9ヶ所（33～41）、右鋒の4ヶ所（42～45）で確認できる。また、B面では鉢2ヶ所（46・47）、鐸身の8ヶ所（48～55）、左鋒の1ヶ所（56）で范傷が発生する。



第104図 上巻數鐸の鋳造状態（外面）



第105図 上屋敷鐸の鋳造状態（内面）

このうち、鐸身の側縁に近い35~40・42・53・54は、本来の型持とその破損を補う補修材との隙間に溶銅がまわった結果鋳出された可能性がある。そうすると、これらは桜ヶ丘3号鐸でも共有されたり拡大する傾向が認められるため、桜ヶ丘3号鐸を鋳造し終わる段階まで補修材が外されることがなかった可能性もある。

鋳掛け 肉眼観察によって、26ヶ所で鋳掛けが確認できた。また、鋳掛けに伴う補刻がA面で5ヶ所・B面で6ヶ所の計11ヶ所で行われる。

錘の鋳掛けは2ヶ所ある(57・58)。いざれも錘脚部分に生じた鋳造欠陥を補うものである。このうちA面左錘脚の57には工具による刺突痕が認められる。

舞の鋳掛けは2ヶ所ある(59・60)。まず内面から見ると、錘脚に対応する部位から舞の中央附近にかけて大きな鋳造欠陥が生じる。とくにA面側では本来の型持の位置よりもさらに外側まで欠孔が及んでいる。この鋳造欠陥を埋めるため、銅鐸の外面に補修用の型持を当てがい、内側から溶銅を流し込んだものと見られる(59)。なお、錘脚の鋳掛けも舞の鋳掛けと一体のものである可能性がある。また、舞A面側の擬似型持孔の端部は丸みを帯びており、研磨痕などの面取りが認められない。そのため、鋳掛けにあたって、型持を模した突起が補修用の型持に設けられていたと考えられる。この部位の鋳掛けを銅鐸の外面から肉眼観察するかぎり、鋳掛けの範囲や工具による刺突痕・研磨痕などは見出しがたい。

舞のもう1ヶ所の鋳掛けは、B面の舞と鐸身の境界上に施される(60)。外側から見ると、鋳掛け

けの範囲を確認でき、その表面は平滑である。これに対し、内面では鋤掛け部分が隆起するので、内側から溶銅を流したと見られる。また、内面に限って工具による刺突痕らしき凹凸も確認できる。

次に鐸身では、A面で8ヶ所(2・3・5・9・11~13・16)、B面で14ヶ所(17~22・24~27・61~64)の鋤掛けを確認できる。

このうち、A面の2で鋤造欠陥による欠孔が存在した可能性をすでに指摘した。その傍らの65には補刻が認められる。横型流水文銅鐸の補刻は鋤掛け箇所に施される場合が多いので、本来、2の箇所には鋤掛けがあり、出土時に受けた衝撃によって鋤掛け部分が外れた可能性が高い。

鋤掛けのほとんどは、銅鐸の内側から溶銅を注いだと見られる。また、9・12・17のように複数回に分けて溶銅を注ぐ場合もある。また20は、鋤掛けに先立って欠孔部に円形の足掛かりを作り付けた可能性がある。

内面が土砂や錆で覆われるために工具痕を観察することが難しいが、62の内面側には刺突痕が明瞭に残っている。63や64とともに内面突堤周辺の鋤造欠陥を補ったのであろう。

補刻 A面で5ヶ所(9・11~13・65)、B面で6ヶ所(17~22)で補刻が確認できるが、いずれも鋤掛け部分に限定される。

まずA面を見ると、鐸身の9は、本来、下区流水文の中央上段のx反転部が鋤出されるはずであるのに、補刻では誤って平行線で繋いでいる。また、12では下区流水文の右下部分を比較的忠実に補刻する。その周辺では、流水文の反転部が断片的に鋤出されているため、これらを手がかりに補刻したのであろう。また13は、下辺横帯の鋤南文を刻む。

一方、B面では、18は、本来はx反転部に相当するにもかかわらず、平行線で結んでいる。また、22はc反転部に位置するにも関わらず、平行線を引いて鰐の基部に当てる。(北島大輔)

2. 下坂鐸 [図版277~284・写真図版411~415]

出土地 鳥取県八頭郡郡家町下坂東梶平

出土年 1912(大正元)年9月26日

所有者 鳥取県立博物館

収蔵先 鳥取県立博物館

出土状況 平野の南側に位置する丘陵の小さな谷間で偶然出土したものである。

銅鐸は草刈りを行っていた地元の人が山崩れにより崩落した赤土の中に2分の1ほど出ているのを発見しており、埋納姿勢等詳細は不明である(鳥取県教育委員会1960)。

型式 外縁付鉢2式

文様構成 四区袈裟博文

同范銅鐸 加茂岩倉13号鐸

法量	総高	44.2cm	最大幅	26.4cm
-----------	-----------	--------	------------	--------

舞長径(A面)	14.9cm	舞長径(B面)	15.4cm	舞短径	12.2cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

裾長径(A面)	23.3cm	裾長径(B面)	22.6cm	裾短径	17.0cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

鉢 菱環と外縁よりなる外縁付鉢である。高さは13.2~13.4cm・幅18.3cm、鉢孔の高さは5.6cm・幅5.6cmを測る。文様がはっきりしないため各部の大きさは不明な点が多いが、菱環はA面で幅4.0

~4.4cm、B面で幅4.3~4.4cm・厚さは中央部で0.8cm・左端1.3cm・右端1.2cmである。外縁はA面で幅1.4~1.6cm、厚さは0.3~0.4cm程度である。

文様はA面では外縁右側に内向する鋸歯文しが僅かに見られる。菱環外斜面は右側に三日月形文様帶の一部のような界線があり、内斜面には綾杉文の軸線とも思われる界線が微妙に2条観察できる。B面には現状では文様は全く認められない。

錠身 高さはA面30.8cm、B面31.2cm、厚さは0.3cmである。身は舞から裾部にかけてやや外反しており、外反率は(舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100)はA面側で1.68% (0.5÷29.8×100)、B面側で1.3% (0.4÷30.8×100)である。

A面の文様は、四区袈裟模文で横帯が縦帯に優先するものである。文様は左上縦帯、左下縦帯、右下縦帯は全く確認できず、その他も見えない部分がかなりある。

第1横帯は幅2.5cm、第2横帯は幅2.5cm、第3横帯は幅2.5cm、中下縦帯は幅3.2cm、右上縦帯は幅3.0cmである。各横帯間の高さは第1横帯と第2横帯間が7.9~8.0cm、第2横帯と第3横帯間が8.2cmである。横帯の界線は2または3条で縦帯や下辺横帯とは直接接していない。縦帯の界線は3条で、同范品である13号錠の例からすれば、綾杉文になっていたものと思われる。横帯・縦帯の中には斜格子文が充填されているが、第3横帯や右上縦帯では全く観察することができない。

また、下辺横帯は幅2.0cmで、文様は鋸歯文Rが中央の一部で僅かに観察できる程度である。下辺横帯下界線は3条である。

B面の文様は不明な部分が多いが、四区袈裟模文で横帯が縦帯に優先するものと見られる。文様は第1横帯、左上縦帯、中上縦帯の一部と第3横帯と下辺横帯の界線が確認できる程度である。

第1横帯は幅2.4cm、左上縦帯は幅3.0cm、中上縦帯は幅3.0cmである。横帯の界線は第1横帯は2条、第3横帯上では3条確認することができ、中上縦帯の界線も2条はあることがわかる。横帯・縦帯の中には斜格子文が充填されているが、第3横帯では全く観察することができない。

また、下辺横帯は幅2.5cmであるが、文様は現状では確認できない。下辺横帯下界線は3条である。

裾端部はA・B両面とも遺存状態が悪く、丸みを帯びている。

舞 舞はアーモンド形を呈しているが、舞短径が12.2cmとやや大きめの印象を受ける。舞の扁平率は(舞短径÷舞長径×100)はA面で81.9% (12.2÷14.9×100)、B面で79.2% (12.2÷15.4×100)である。舞の中央部には僅かにバリがあり、盛り上がりがついている。また、舞面が傾斜する肩下がりはA面が0.5cm、B面は0.3cmである。

鑑 幅はA面で左肩1.9cm・左裾1.9cm・右肩1.7cm・右裾1.6cm、B面は左肩1.7cm・左裾1.9cm・右肩1.3cm・右裾2.1cmである。文様はA面左側下部で鋸歯文Rが僅かに観察できる他は文様は見られない。

内面突帯 裾からの高さ2.2~3.3cmのところに、幅1.2~1.4cm・高さ0.4~0.5cmの突帯が1条巡っている。横断面形は台形状を呈しており、B面左側内面稜付近では裾に向かって盛り上がりが見られる。

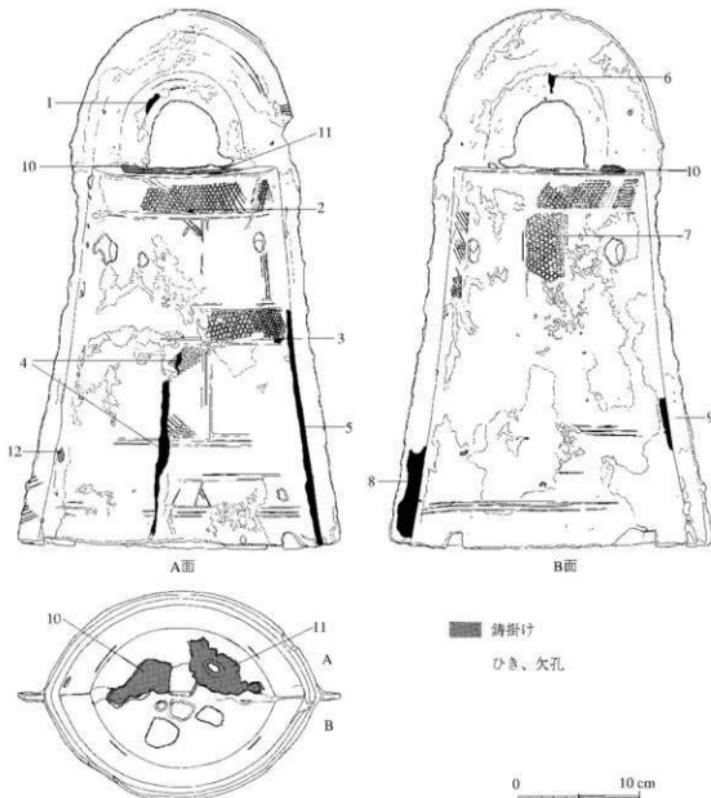
型持 舞に2個、鑑身上半にはA・B両面とも2個ずつ、裾部にはA面右側に1個、B面に2個の計9個の型持がある。

舞の型持孔はA面側は湯回りが悪く大きな穴になっていたものと思われ、その両長辺側に鉛掛けが認められる。B面側は不整形であるが、長さ2.0cm・幅1.5cmである。

鐸身上半の型持孔はA・B面両面とも左上区または右上区の上半部で、左右縫合の界線に接する位置にある。A面左侧の型持孔は内面から見てもその形状を留めず不整形で、現状で高さ2.4cm・幅3.1cmである。A面右侧は長楕円形を呈しており高さ2.1cm・幅1.7cmである。B面左侧の型持孔は内面から見ると上部は方形を呈しており高さ2.1cm・幅1.7cm、右侧は外面と同じ楕円形で高さ2.2cm・幅2.0cmである。

裾部の型持はA面左侧には見られず、右侧は頂部が丸みを帯びた不整形なもので高さ1.0cm・幅2.3cmである。B面左侧は台形状を呈しており高さ1.3cm・幅2.1cm、右侧は高さ1.1cm、幅は欠損のため不明である。

鋳型の食い違い A面鉢右上の端部には鋳型の食い違いと見られる段が認められる。これはB面側には見られないが、幅0.2~0.3cm程度で甲張り状になっている。



第106図 下坂鐸の鋳造状態

鑄上がり 湯回りが悪く穴として残ったところは、舞が顯著で6ヶ所あり、後述するように大きな鑄掛けが行われている。

鉢にはB面側で4ヶ所あり、舞内面からの鑄掛けがあるものもある。A面では鐸身左上区・下刃横帯などに小さいものを含め計8ヶ所あり、鐸身左型持孔も湯回りが悪く不整形になっている。B面は小さいものが多いが7ヶ所が認められ、鰐にはB面右側で3ヶ所ある。

また、表面が窪む「ひき」は舞上面に5ヶ所、A面は鉢に6ヶ所、鰐を含め鐸身に9ヶ所、B面も鰐を含め鐸身に8ヶ所ある。これらは小さなものが多いが、比較的大きな「ひき」は鉢脚部分やB面右側の鰐の付け根などに見られる。

範傷 全体に表面の遺存状態が良くないため細かい範傷はよくわからない。

A面では顯著なものとしては、中下縦帯界線付近から下刃横帯を貫き樹に至る4があげられる。この他には鉢の菱環内斜面の界線にそって膨らむ1、第1横帯斜格子文内の2、第2横帯とその下の界線間に3がある。鐸身右側鰐の付け根部分には、第2横帯から樹にかけて広い範囲がやや膨らむ5が認められる。

B面では鉢の菱環内斜面に6、中上縦帯に7がある。また、左側鰐下部には全体が膨らむ8、右側の鰐の付け根にはやや膨らんだ9がある。

鑄掛け 舞面に大きなものが2ヶ所、A面鐸身第3横帯左に1ヶ所が認められる。

舞面の鑄掛けは型持孔の両側にともに内面から溶鋼を注いで行われたもので、10は型持孔側の端部が直線的に成形されている。11は外面に半貫通の足掛りをもっており、現状で表面からは4個が観察できる。足掛り孔は上端径0.3cm・下端径0.1cm・深さ0.25~0.3cmで、断面形は先端の丸い円錐形を呈する。10・11とも鑄掛けの後、外面が研磨されており工具痕が残っている。12はA面鐸身第3横帯左にあるもので、内側から鑄掛けが行われている。

(角田徳幸)

3. 念仏塚鐸 [図版285~289・写真図版416~419]

出土地 岡山県勝田郡勝央町植月北

出土年 1950(昭和25)年

所有者 津山市郷土博物館

収蔵先 津山市郷土博物館

出土状況 念仏塚銅鐸の名称は、出土推定地付近一帯の小字に由来する。近くには「念仏塚」と呼ばれる古墳があり、石室もしくは石棺の一部と思われる板石が露出している。

この「念仏塚」は「日本原」と呼ばれる北方の山稜から派生した低丘陵上に位置する。この低丘陵は開墾によってなだらかな平坦面となっており、現在も畑地として利用されている。念仏塚銅鐸は、この畑を耕作中に川原石とともに発見された。詳細な出土状況は不明であるが、出土後、地元の小学生が鉢に紐を付けて引きずりまわしたため、鐸身の広範囲に著しい磨滅・損傷の痕跡が認められる。また、本銅鐸は後に古物商の手に渡り、その時点で鉢の頂部が削られたと言われている(近藤1951)。

この低丘陵上及びその周辺には、弥生時代中期後葉の遺跡が多く見られることから、その立地から見て集落内に埋納されていた可能性も考えられる。

型式 外縁付鉢1式

文様構成 四区袈裟擗文

同范銅鐸 加茂岩倉36号鐸

法量	総高	29.6cm	最大幅	16.9cm	
	舞長径(A面)	10.5cm	舞長径(B面)	10.5cm	舞短径 7.5cm
	裾長径(A面)	15.4cm	裾長径(B面)	15.4cm	裾短径 11.5cm

鉢 菱環と外縁からなる外縁付鉢である。鉢の頂部は出土後に削られたと見られ、やや水平になっている。高さはA面が7.15cm、B面が6.9cmで、幅は12.5cmである。鉢孔は高さ3.3cm、幅4.6cmを測る。菱環の幅はA面中央が2.5cm・左端3.0cm・右端2.9cm、B面中央が2.8cm・左端2.7cm・右端2.8cmである。

外縁にはA・B面ともに内向する鋸歯文しが充填されている。一部に剥離や磨滅、表面の荒れが認められ、特にB面では中央頂部付近の文様が不明瞭となっている。幅は、A面が中央頂部で1.0cm、左端で0.9cm、右端で1.2cm、B面が中央頂部で0.7cm、左端で1.0cm、右端で1.1cmである。

菱環の文様は、A・B面とも外斜面には「X」状に対向する2段の鋸歯文、内斜面には綾杉文が施されており、基本的な構成はA・B面で共通していると言える。ただ、内斜面の文様は、A面では中央を境に左側が綾杉文C、右側が綾杉文Dとなるよう対向して施文されているのに対し、B面では綾杉文Dのみを施している点が異なる。

菱環外斜面の鋸歯文は、中央付近や斜面内側で文様がはっきりしないため、充填された平行斜線文の方向を確認できる部位が極めて限られる。

A面では、外側の左端から6単位がL・R・L・L・L・R、右端から5単位がRで、内側は右端から3単位がLとなっている。また、B面では外側左右両端のそれぞれ4単位がR、内側は左から3単位がLである。

菱環稜部の厚さは、A面を基準とした場合、中央で0.7cm、左端で1.3cm、右端で1.4cmである。

鐸身 高さはA・B面とともに22.3cmである。厚さはA面が0.15~0.25cm、B面が0.25~0.4cmで、両面の厚さの違いが顕著である。側面から見ると僅かに外反しており、その外反率（舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100）は、A面が1.38%（0.3÷21.8×100）、B面が1.4%（0.3÷21.4×100）である。

鐸身の主文様は、横帯と縦帯によって区画された四区袈裟擗文である。縦・横帯には斜格子文が充填され、横帯が縦帯に優先する。A面のみ第2横帯が複帯化し、下段には「II」字状の平行直線文を挟みながら「X」状に対向する鋸歯文が配されている。また、左右の縦帯はA・B面とも鐸の付け根と接することなく間隔を置いて施文されている。

全体的に磨滅や損傷が著しく、A・B面とも鐸身上部から下部にかけての中央付近では、ほとんど文様を確認することができない。特にB面の中央付近では、銅色の地金が露出するほど損傷が著しい。

A面の横帯幅は、第1横帯が1.3~1.5cm、第2横帯上段が1.6~1.8cm、下段が1.7~1.8cm、第3横帯が1.5~1.6cmである。縦帯の幅は、左上縦帯が1.6cm、左下縦帯が2.0cm、右上縦帯が1.6cm、右下縦帯が1.6~2.0cmである。B面の横帯幅は、第1横帯が1.5cm、第2横帯が1.5cm、第3横帯が1.5~1.6cmである。縦帯の幅は、左上縦帯が1.5~1.6cm、左下縦帯が1.6cm、右上縦帯が1.5cm、右

下縦帯が1.7cmである。

下辺横帯の幅はA面が1.4cm、B面が1.5~1.6cmである。横帯内には鋸歯文が充填されており、A面が鋸歯文L、B面が鋸歯文Rとなっている。下界線は3条で、1~3条目までの間隔はA面が0.7~0.75cm、B面が0.9cmである。

舞 舞の扁平率（舞短径÷舞長径×100）は、A・B面ともに71.43%（7.5÷10.5×100）である。A面とB面では上下にズレが認められ、両面間には0.25cmの段差が生じている。このズレはそのまま厚さの違いとなり、A面に比べB面がかなり厚くなっている。舞面の傾斜を示す肩下がりは、A面が0.4cm、B面が0.6cmである。

鎧 幅はA面の左肩で0.9cm、左裾は欠損、右肩で1.2cm、右裾で1.2である。文様はA・B面で共通しており、鎧の付け根に沿って1本の条線が施され、この条線と鎧端部の間に内向する鋸歯文Lが充填されている。これによって鎧の鋸歯文は鉢の外縁に施された鋸歯文より小さくなり、鉢と鎧の区分が明確になっている。

鋸歯文の頂部に接する条線と鎧の付け根との間隔は、A面左側が0.25~0.3cm、右側が0.3~0.35cm、B面左側が0.25~0.35cm、右側が0.2~0.25cmである。

内面突帯 補から距離が、A面で1.0~1.4cm、B面で0.9~1.0cmのところに、高さ0.2~0.3cm・幅0.8~0.9cmの突帯が1条巡っている。断面形は上辺が裾に向かってやや傾斜した台形状を呈しており、端部が丸みを帯びることなく稜が際立っている。A・B両面の中心軸付近は特に上辺の幅が広くなっていること、かなり磨滅した状況が窺える。

型持 舞に1つ、鎧身上半にはA・B両面にそれぞれ2つずつ型持の痕跡が認められる。また、両面の右裾には僅かに型持孔の痕跡が残っている。

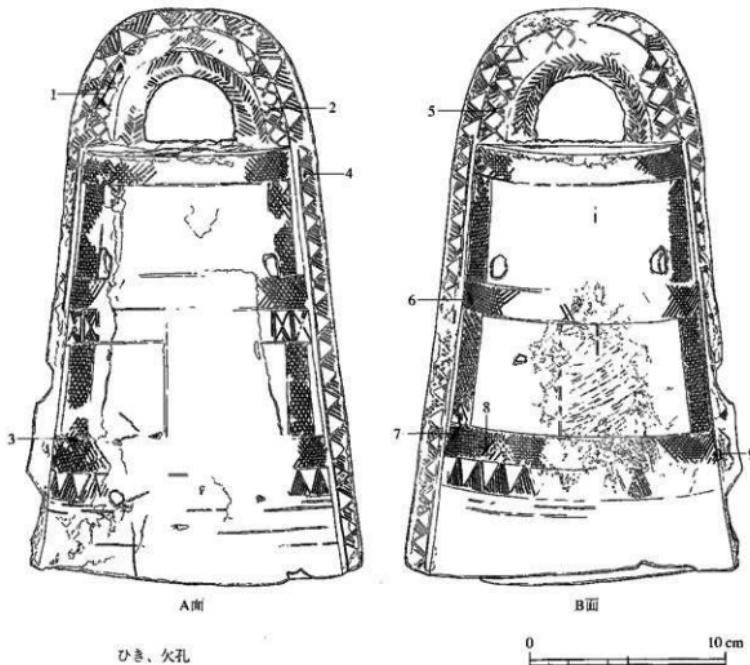
舞の型持孔は、外面から見るとA面に1つの孔が認められるが、内面では型持痕が両面に跨る長方形を呈しており、内型の型持は1山であったことがわかる。舞がA・B面で上下にズレたことによってB面側が厚くなり、B面側では貫通する孔とならなかったものと見られる。内面における型持痕の長辺は2.7cm、短辺は1.7cmである。

鎧身上半の型持孔は、A面では第2横帯と左右上縦帯の一部に重なっており、舞との距離は左側が4.7cm、右側5.1cmである。B面では左右上縦帯と第2横帯の交点付近にあり、舞との距離は左側が5.5cm、右側5.1cmを測る。

内面における型持痕の大きさは、A面左側が高さ1.7cm・幅1.2cm、右側が高さ1.5cm・幅1.2cm、B面左側が高さ1.5cm・幅1.1cm、右側が高さ1.4cm・幅1.3cmである。補の型持孔はA面右側が高さ0.7cm、B面右側が高さ0.3cmを残す程度である。

鋳型の食い違い 倒面から見るとA・B面の舞の位置に上下のズレが認められ、両面間には0.25cm程度の段差が生じている。舞の位置はB面の方が高いが、A面舞の型持孔がB面に比べて僅かしか残っていないのは、こうした鋳型のズレによりA面側の舞の厚さが薄くなり大きな欠孔が生じたことに起因するものと見られる。

鎧上がり 湯回りが悪く铸造時に欠孔が生じたところは、舞に1ヶ所、A面鎧身に3ヶ所、B面鎧身に1ヶ所認められる。舞の欠孔部は型持孔と繋がっており、この欠孔のほかにも「ひき」による深い窪みが3ヶ所ある。鉢の文様はシャープな線ではなく、湯が淀んでヨレた様になっていることから見ても、決して鎧上がりは良くなかったと思われる。



第107図 念仏塚鐸の鋳造状態

范傷 全体に磨滅・損傷が著しいため、范傷を確認することは非常に難しい。また、鉢には文様が流れて皺状になったようなところもあり、铸型の傷との区別が付きにくくなっている。こうした状況のなかで范傷の可能性が認められる部位は、A面では鉢に2ヶ所、鐸身に1ヶ所、右鋒に1ヶ所、B面では鉢に1ヶ所、鐸身に3ヶ所、右鋒に1ヶ所である。

1は菱環外斜面の鋸齒文間に細長く延びる傷で、2・5は「X」字状に對向する鋸齒文の頂部にある。この2・5は、铸型に文様を彫り込んだ際の微細な欠けとも考えられる。3は第3横帯の上界線がやや膨らんだ傷である。

横帯内にある6～8は、斜格子文の平行斜線が潰れて広がったような傷で、そのうち7は、継帯にまで延びている。4・9は、いずれも僅かな盛り上がりであるが、范傷か湯の回り具合によるヨレかどうかはつきりしない。

また、内面にはA面からB面の裾にかけて内型の范傷と見られる痕跡が認められる。

(山崎 修)

4. 気比2号鐸 [図版290~297・写真図版420~424・430-1]

出土地 兵庫県豊岡市氣比字溝谷

出土年 1912(大正元)年

所有者 東京国立博物館

収蔵先 東京国立博物館

出土状況 出土地は氣比川河口部に突出する尾根の先端山裾に位置する。銅鐸は高さ4mほどの巨岩裏側に他の2つの岩とによって構成された岩穴の中にあったとされる。岩穴は奥行5~6尺(150~180cm)、南北幅2尺4~5寸(72~75cm)で東に開口しており、天井石はなかったという。床面には径1~2寸(3~6cm)の河原石と貝殻(牡蠣及び螺の一種)を敷き、その上に3個の銅鐸は横列に1個は縦列に置かれていたとされている。

出土状況については弥生時代にはこうした造構に銅鐸を埋納した例が他にないことが、H岩に「南無阿弥陀仏」の文字や小仏が刻まれていることなどから、他の場所で発見された銅鐸を岩窟内に二次的に再埋納したものである可能性も指摘されている(井上1982)。

出土した銅鐸は1号鐸と2号鐸が外縁付鉢2式二区流文水、3号鐸が外縁付鉢1式四区流文水、4号鐸が外縁付鉢2式三区流文水の計4個である。銅鐸の内部には、土が入らず空洞になっていたことによって生じたと考えられる鮮やかな縁筋が見られ、1号鐸はA面左側を下に鋸を立てた状態、2号鐸はA面左側を下に鋸をA面側にやや傾けた状態、3号鐸はA面右側を下にA面側に鋸を大きく傾けた状態、4号鐸はB面鋸身中央部を上に寝せた状態で埋納されたことが想定されている。

型式 外縁付鉢2式

文様構成 1区流文水

同范銅鐸 加茂岩倉5号鐸

法量	総高	44.2cm	最大幅	29.6cm	重量	4.94kg ⁽⁴⁾
----	----	--------	-----	--------	----	-----------------------

舞長径(A面)	14.7cm	舞長径(B面)	14.8cm	舞短径	10.1cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

裾長径(A面)	24.0cm	裾長径(B面)	24.0cm	裾短径	17.7cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

鉢 菱環と外縁による外縁付鉢である。ただし、鉢の断面形を見ると外縁から菱環へ緩やかに移行し、菱環部がかなり扁平な印象を受ける。鉢の高さは12.5cm・幅は現状で19.2cmである。鉢孔の高さは2.5cm・幅4.0cmで、隅部の丸い三角形状を呈している。菱環は幅5.2~7.6cm・厚さは中央部0.9cm・右端1.3cm・左端1.3cmであるが、菱環頂部の位置はB面がA面に対し0.3cm程度高い。外縁はA面で幅2.0~2.2cm、B面で幅1.9~2.1cm、厚さは0.25~0.35cmである。

文様はA面は外縁に内向する綾文Sが巡る。菱環は外斜面左側に綾文Cを2段に配し、右側にはこれと対向するように綾文Dを2段に入れたものである。菱環内斜面も外斜面とよく似た構成で、左側に綾文S、右側に綾文Zを向き合うように配している。また、綾文Cと鉢孔部の間には頭を右に向けたシカと見られる動物が2頭描かれている。

B面は中央部付近の鋸上がりが悪く、文様が不鮮明になっているところがあるが、外縁には内向する綾文Rを配する。菱環外斜面は左側に綾文Dを2段に配し、右側にこれと対向するように綾文Cを2段に入れたものと見られる。菱環内斜面も外斜面とよく似た構成で、左側に綾文Z、右側に綾文Sがこれと向き合うように入っている。また、綾文Cと鉢孔部の間にはA面と同様に頭を右に向けたシカのような動物が描かれており、左側に1頭分が確認できる。

錫身 高さはA面33.0cm、B面32.7cmである。厚さは中子がズレていたためかA・B両面で違いがあり、A面側が0.25cm、B面側が0.45cmである。身は舞から裾部にかけてやや外反する。その外反率は（舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100）はA面側で1.81%（0.6÷32.5×100）、B面側で1.82%（0.6÷32.8×100）である。

A面の文様は中央に中横帯を配した二区流水文である。流水文は上区・下区とも8段で、8つのc反転部と7つのx反転部をもつ8c7xの構成をとる。条線は5条1束で、流水文の反転は上段直行部最下端の線が下段直行部最上端の線と共通するE反転である。流水文は上区中央部上や下区中央部から右側に文様が流れたところがある。

中横帯は幅1.9cmで、3本を1単位として0.5cm程度の間隔をあけながら、綾杉文乙が施されている。下辺横帯は幅2.1cmで、鋸歯文Rの左上に1線を加えた特殊な鋸歯文で充填されている。下辺横帯の下には3条の界線がある。

B面の文様は、中央に中横帯を配した二流水文である。流水文は上下区とも8c7xの構成を取り、流水文の反転はE反転である。流水文は上区は中央部の一部や、下区左側に文様が流れたような状況を示すところもある。

中横帯は幅1.6cmで、左側に綾杉文D、右側にこれと向き合う綾杉文Cを配しており、上下の流水文との間に0.6cmほどの間隔があけられている。左側の綾杉文Dは文様の一部が流れたように乱れている。下辺横帯は幅2.3cmで、鋸歯文Rが充填されている。下辺横帯左側にある鋸歯文の一部は文様が流れて二度押しされたところがある。下辺横帯下界線は3条である。

裾はA面に横方向の顯著な研磨痕が残っている。また、裾端部は明瞭な面をなしてお研磨されている。

舞 舞はアーモンド形を呈しており、B面側に大きなひきがあることもあってやや扁平な印象を受ける。舞の扁平率は（舞短径÷舞長径×100）はA面で68.7%（10.1÷14.7×100）、B面で68.2%（10.1÷14.8×100）である。舞の高さはA面に対し、B面が0.3cm程高く、鉄型のズレが認められる。舞の中央部には鈎脚墜状のバリが僅かに認められるが、研磨によって落とされている。また、舞面が傾斜する肩ドガリはA面は0.6cm、B面では0.3cmである。

鈎 幅はA面の左飾耳に接する部分で2.2cm・左裾2.8cm・右飾耳に接する部分で2.1cm・右裾2.7cmである。B面は左飾耳に接する部分で2.1cm・左裾2.8cm・右飾耳に接する部分で2.1cm・右裾2.8cmである。

文様はA面右側は内向する鋸歯文L、A面左側とB面は内向する鋸歯文Rである。A面右上・B面右上の飾耳に接する部分の鋸歯文は半单位文となっているが、内部の条線はともにしで、後者は周囲の鋸歯文と逆向きである。また、B面左側鈎には下端に界線が2条入っているが、他の部分には認められない。

飾耳は半円形で2個1組になったものが、左右に3つずつ計6個認められる。飾耳の脚は左右の肩に付く飾耳にのみ付いており、中位・下位のものには脚は見られない。また、飾耳頭部の条線はA面では2条であるのに対し、B面では1条である。

内面突帯 A面では裾から4.4cm、B面では4.2cmのところに、幅1.3~1.6cm・高さ0.4~0.5cmの内面突帯が1条巡っている。横断面形は頂部が丸みを帯びた台形を呈しているが、使用痕はそれほど顯著ではない。

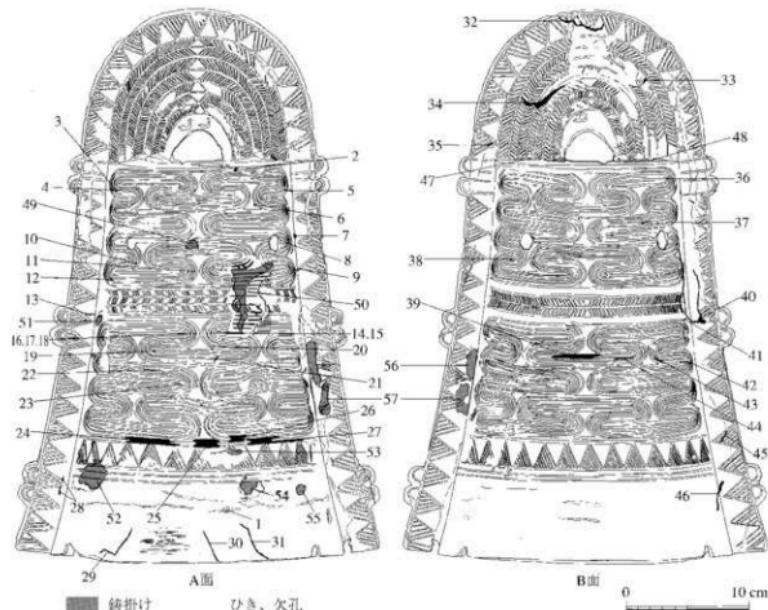
型持 舞のA・B両面に1個ずつ、鐸身上半にはA・B両面とも2個ずつ、裾部にもA・B両面とも2個ずつの計10個の型持がある。

舞の型持孔のうち、A面側は湯回りが悪く大きな穴になっているため、本来の形状や大きさは不明である。B面はやや不整な円形を呈しており、内面で径1.5cmである。B面型持孔の端部には工具による加工痕も認められる。

鐸身上半の型持孔は、A・B両面とも上区流文の下から3~4段目付近にある。A面の型持孔は、内面ではほぼ円形または橢円形で、周囲にやや突出した稜を持っている。大きさは左側が高さ1.7cm・幅1.6cm、右側は高さ1.8cm・幅1.5cmである。B面の型持孔内面はともに橢円形を呈し、周囲にやや突出した稜を持っている。大きさは左側が高さ2.0cm・幅1.5cm、右側が高さ2.0cm・幅1.6cmである。

裾部の型持は、いずれも端部に鋳造後に削り取ったような加工痕を残しており、台形状を呈している。大きさはA面左が高さ0.8cm・幅1.2cm・右は高さ0.9cm・幅1.5cmで、B面左は高さ0.9cm・幅1.1cm・右は高さ0.9cm・幅1.25cmである。

錫型の食い違い 錫型の食い違いはさほど顕著ではないが、A面の紐右上に段が認められ、0.1~0.2cm程度の幅で甲張り状になっている。また、既に述べたように菱環頂部や舞の位置もA面に対しB面が0.3cm程度高いことから、錫型が上下方向に僅かにズレた位置で固定されたまま鋳造が



第108図 気比2号鐸の鋳造状態（外観）

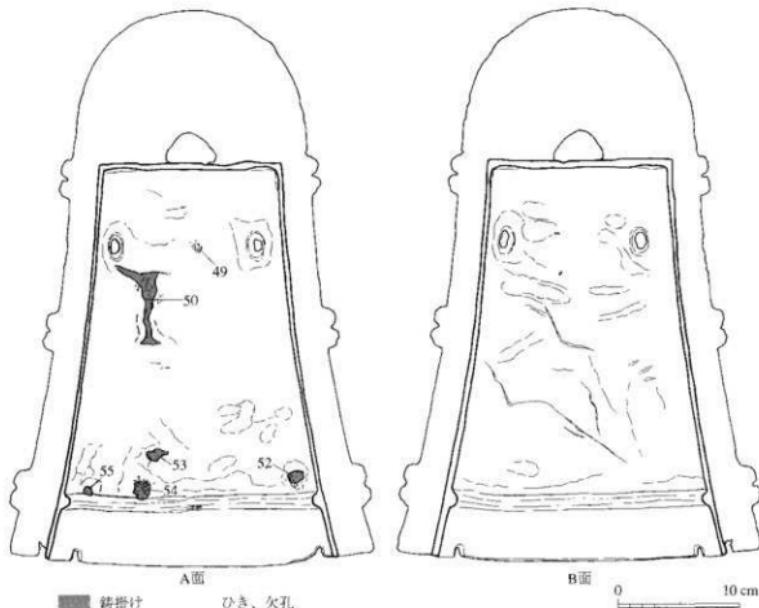
行われたものと見られる。

銘上り 湯回りが悪く欠孔として残ったところは、舞に2ヶ所あり、A面側型持孔は大きく不整形になっている。鑄はA面右側下端に湯回り不良の部分があり、鐸身ではA面に6ヶ所、B面に3ヶ所認められる。このうち、鐸身A面裾にある1は外面から穴を加工した痕跡が残っている。また、後述するように鉢掛けが舞・鐸身・鑄に多数認められ、かなり大きな鉢掛けもあることから、銘上りはあまり良くなかったものと思われる。

表面が窪む「ひき」は舞と鉢脚部分面が顕著で、浅いものを含めてA面側に5ヶ所、B面側に7ヶ所ある。特に舞B面側には輪郭線沿って大きな「ひき」があり、段状になっている。この他にはA・B両面とも内面突帯に当たる部分の外面や鑄の上半部などを中心に「ひき」が見られる。また、内面ではやはり内面突帯付近にあるのをはじめ、身型持孔の周囲にも見られる。

范傷 A面は鐸身に27ヶ所、鑄に2ヶ所の計29ヶ所に確認できる。鐸身にあるもののうち、流水文の条線間（2～4・8・10～12・16～23）にあるものや、流水文から鑄の付け根部分（5・7・9）に見られるものなどは比較的小さい范傷が多いが、下辺横帯上の界線付近にあるもの（24～27）は顕著で盛り上がっている。また、裾にも縱方向に延びる范傷（29～31）が見られる。

B面は鑄に4ヶ所、鐸身に8ヶ所、鑄または鑄から鐸身にかけて3ヶ所が確認できる。鉢に見られるもののうち、32と34は比較的大きなもので、菱環外斜面に見られる後者は段になっている。鐸



第109図 気比2号鐸の鉢造状態(内面)

身では流水文の条線間などに(36~38・41~44)に比較的小さい範囲が多いが、下区中央部にある39のように大きく盛り上がった顯著なものも認められる。鱗から鋒身にかけては、鋒身の右側縁に沿って縦方向に延びる40や、右裾から鱗にかけて46が見られる。

鉢掛け 表面観察によれば、鉢掛けは紐脚部に2ヶ所、鋒身ではA面に7ヶ所、鱗に2ヶ所が認められる。このうち、紐脚部(47・48)はB面側の「ひき」または欠孔に施したもので、48は舞内面にも及ぶが僅かに一部が小欠孔として残っている。ともに鉢掛け部分には研磨痕が残っており、鉢掛けの周囲に当たる両者の紐脚部や47の舞面には工具による刺突が見られる。

鋒身では上区から中横帯・下区に至る50が大きく、上区中央下の49、下区左上の51、下辺横帯から裾上半部にかけて52~55が見られ、50・53~55は鉢掛けの後丁寧な研磨が加えられている。また、49は鉢掛け部分に、53・54は鉢掛け部分の周間に工具による刺突が見られ、49・50・52・54には内面からも工具による刺突が行われている。

鱗はA面右側・B面左側の中位に56・57が縦方向に少し間隔をあけて並んでいる。A面側は研磨痕が顯著に残り、鉢掛けの周囲には工具による刺突も見られる。

補刻 補刻は鋒身A面に2ヶ所、鱗はA面に2ヶ所・B面に3ヶ所が認められ、いずれも鉢掛けの後、文様を刻み直したものである。このうち、50に見られる補刻は上区流水文の中にこれとは関わりのない平行斜線文Rを補つたり、中横帯では綾杉文Sに綾杉文Cを入れたりと鉢込まれた文様と整合しない部分が認められる。また、鱗の56・57に見られる補刻ではA面57の下側の鋸歯文のように本来1条の線を3条で引いている部分もある。

(角田徳幸)

5. 気比4号鐸 [図版298~305・写真図版425~429・430-2]

出 土 地 兵庫県豊岡市氣比字溝谷

出 土 年 1912(大正元)年

所 有 者 東京国立博物館

収 獲 先 東京国立博物館

型 式 外縁付鉢2式

文様構成 三区流水文

同范銅鐸 伝福井鐸(明大1号鐸)・伝陶器鐸・加茂岩倉21号鐸

法 量	残存高	44.85cm	最大幅	29.15cm	重 量	6.11kg ⁽⁵⁾
------------	------------	---------	------------	---------	------------	-----------------------

舞長径(A面)	15.2cm	舞長径(B面)	15.2cm	舞短径	10.7cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

裾長径(A面)	23.7cm	裾長径(B面)	24.0cm	裾短径	17.3cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

鉢 菱環と外縁からなる外縁付鉢である。鉢の頂部を欠損しており、高さは残存高でA面が11.45cm、B面が11.4cm、幅は19.4cmである。また、鉢孔の高さは2.65cm、幅3.45cmである。

文様の構成はA・B面とも共通しており、外縁には内向する鋸歯文が施され、菱環頂部を境にして外斜面に綾杉文と無文帶、内斜面に綾杉文と左上がりの連続渦文乙が配されている。連続渦文は隣接する単位文の端部が連結しない第I種である。

菱環稜部の厚さは中央部で0.9cm、A面を基準とすると左端紐脚部で1.5cm、右端紐脚部で1.4cmである。綾杉文は菱環中央部で方向を異にし、外斜面、内斜面ともに左側が綾杉文C、右側が綾杉

文Dとなる。被杉文はいずれも軸線を持つ。

この銅鐸の型式は、同范銅鐸とされる21号鐸の項で述べたように、分類上は外縁付鉢2式であるが、鉢の菱形に施された被杉文様帶と、無文帶、連続渦文帶の配置から、外縁付鉢の範疇にありながらも扁平鉢へと移行する過程の一様相を示したものと考える。

外縁の鋸齒文は、A・B面ともに左側が鋸齒文L、右側が鋸齒文Rとなっているが、頂部の欠損が大きいため、LとRの変換点は現状では確認できない。B面左側では、外縁鋸齒文帶の内側に界線と平行する細い線が確認でき、A面右端の鋸齒文は飾耳の脚部にまで及ぶ。こうした点は、加茂岩倉21号鐸と共に通する点として重要である。

鐸身 高さはA面で33.4cm、B面で33.2cm、器壁の厚さは0.3~0.4cmを測る。側面から見ると舞から裾にかけて外反し、その外反率（舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100）は、A面が2.18%（ $0.71 \div 32.6 \times 100$ ）、B面が2.41%（ $0.8 \div 33.15 \times 100$ ）である。A・B面での铸型のズレは認められない。

鐸身の主文様は、A・B面とも横帶によって区分された三区流文で、上区は8つのc反転部と7つのx反転部を持つ8c7xの流文様帶、中区・下区は6つのc反転部と4つのx反転部を持つ6c4xの流文様帶となっている。上区と中区を区分する第1横帶の文様がA・B面で異なるほかは両面の文様構成に違いはない。

流文の直行部1段の条数は5本で、E反転となるため1本を共有し2段では9本となる。鐸身文様帶の下端には鋸齒文を充填した下辺横帶が配され、下界線によって鐸身裾と区分される。

A面の上区流文は、右側2段目に文様の不整合が見られ、同じく右側の5~6・8段目では一部に文様が流れたような状況を示すところがある。上区文様帶の最下端となる8段目の乱れは、部分的に文様が不鮮明となっていることも相まって、直下にある第1横帶との境界を不鮮明にしている。中区文様帶の右側4~6段目では文様が大きく流れしており、その周辺には文様の不鮮明なところもある。また、下区の左側8段目にも、やや文様が流れたところがある。

上区と中区の流文様帶を区分する第1横帶は、幅が2.35cmで、右向きのシカと弓を持つ人物の絵画列である。横帶の中央より左側には、铸型の傷と重なりながらも4頭のシカが鮮明に铸出されており、その先頭のシカが横帶の中央付近で弓を持つ人物と対峙している。横帶の右端には2頭のシカが認められるが、この2番目のシカと弓を持つ人物の間にはおよそシカ1頭分の間隔が空いている。ここに微かながらシカの脚と見られる線が認められることから、第1横帶の絵画は、シカ列の先頭となる右端より「シカ3、弓を持つ人物1、シカ4」という構図で描かれたものと見られる。シカ列の最後尾は、上区と中区流文のc反転部を結んだラインよりも内側に位置し、同范の伝福井鐸で観察されるシカの位置とは異なる⁽⁶⁾。また、シカの脚部は、爪先が枝分かれして表現されている。

弓矢を持つ人物は頭部が円形に表現され、胸部が逆「ハ」字状に描かれている。弓と胸部は2条の線で結ばれており、弓は直近左のシカに向かっている。逆「ハ」字で表現された胸部は二重線で铸出されているように観察され、直上の流文が下方に向かって流れていることから、この部分は二重押しになっていると考えられる。

中区流文様帶と下区流文様帶を区分する第2横帶は、幅が1.8~2.0cmで、左上がりの連続渦文Zが充填されている。渦文は隣接する単位文の端部が連結しない第I種である。一部に文様が二

重押しとなっているところも見られる。また、横帯左端の渦文は「ひき」によって半分しか鋳出されていない。

下辺横帯は、下区流水文の下界線から0.15~0.3cm離れた1条の界線と4条の下辺横帯下界線によって区画されている。幅は2.4cmで、横帯内には鋸歯文Lが充填されている。内面突帯による「ひき」の影響や鋲掛けのために、下界線が途切れで見えなくなつたところが見受けられる。下界線の1~4条目の間隔は0.95~1.0cmである。

B面の流水文は、上区と下区の一部に文様の不鮮明なところがあり、上区では一部文様が流れたような状況を示すところもある。また、95ではx反転部付近で条線のつながり方に食い違いが認められる。上区文様帯下端から下区文様帯にかけては、流水文の条線上に剥離したところが認められる。また、下区流水文の2~3段目中央付近には、表面がえぐり取られて地金が露出した箇所があり、その表面には擦痕状の線が数条観察される。

上区流水文様帯と中区流水文様帯を区分する第1横帯、中区流水文様帯と下区流水文様帯を区分する第2横帯には、いずれも左上がりの連続渦文Zが充填されている。渦文は隣接する単位文の端部が連結しない第I種に属する。幅は第1横帯が2.05~2.15cm、第2横帯が2.15~2.2cmで、第2横帯には一部に文様の二重押しが見られる。

下辺横帯は、下区流水文の下界線から0.15~0.3cm離れた1条の界線と4条の下辺横帯下界線によって区画されている。幅は1.9~2.0cmで、横帯内にはA面と同じく鋸歯文Lが充填されている。下界線に大きな乱れはないが、鋲掛けや内面突帯による「ひき」の影響で、条線が途切れたところがある。下界線の1~4条目の間隔は、1.1~1.3cmを測る。

鋲の端部は、切断によって平坦面をなしており、所々に工具痕が残っている。

舞 舞の扁平率(舞短径÷舞長径×100)は、A面が70.4%($10.7 \div 15.2 \times 100$)、B面が70.4%($10.7 \div 15.2 \times 100$)である。A面とB面でのズレはない。鋲の付け根付近や舞身へと屈曲する縁付近には、「ひき」による深い窪みがいくつか見られるが、なかには鋲脚壁状の高まりを断ち割ってA・B両面にわたるものもある。浅い窪みも数ヶ所あるため、舞面は全体的に凹凸が著しいと言える。

舞面の傾斜を示す肩下がりは、A面で0.5cm、B面で0.6cmである。

鑓 肩部に飾耳があり、その脚となる条線によって鉢の外縁と区分される。幅はA面左肩で2.2cm、左裾で2.7cm、右の飾耳に接する部分で2.3cm、右裾で3.2cmである。B面は左飾耳に接する部分で2.25cm、左裾で2.9cm、右肩で2.2cm、右裾で2.8cmを測る。A・B面とも左鑓には内向する鋸歯文Lが、B面右鑓には鋸歯文Rが充填されている。全般的に鑓の付け根付近では文様が鋳出されておらず、概して鋸歯文は内向する先端部を欠く。文様が見える部分と見えない部分の境には範囲状の線が入り、特にB面左鑓の鋲付近では、鑓の付け根がえぐれて段が生じている(80)。

飾耳は「B」字状に半円を2つ並べたような形状を呈している。A面左の飾耳は欠損しており、その痕跡を留めるのみである。飾耳の脚部には1山に対して3本の条線が施文されている。鋸歯文の最も裾寄りには3本の条線が認められ、飾耳を持たないまでもその脚を意識したものと見られる。また、鑓の裾には切断・研磨痕が認められる。

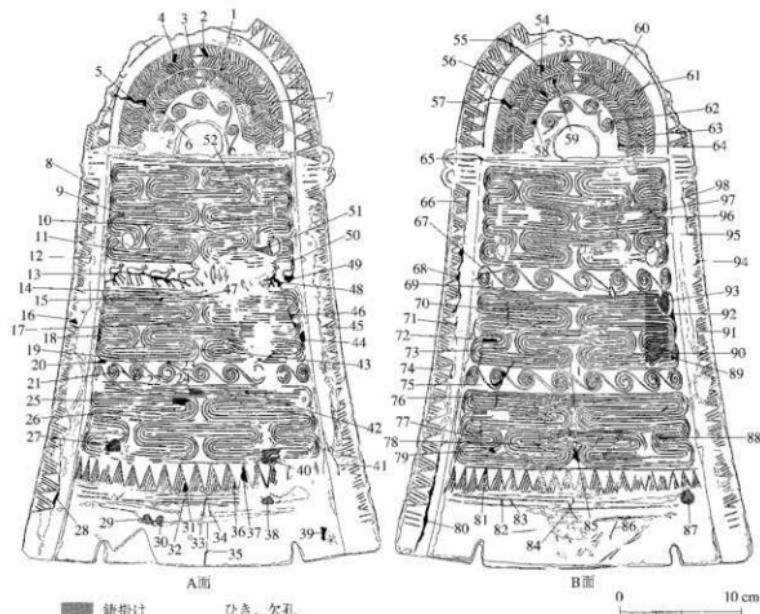
内面突帯 鋲の端部から3.8~4.45cmのところに、A面では幅1.0~1.1cm・高さ0.55~0.6cm、B面では幅0.9~1.1cm・高さ0.5~0.6の突帯が1条巡っている。断面は丸みを持った台形を呈しているが、特に使用した痕跡は認められない。

型持 鐸にはA・B面に1つずつ、鐸身上半及び裾部にはA・B両面にそれぞれ2つずつの型持孔がある。

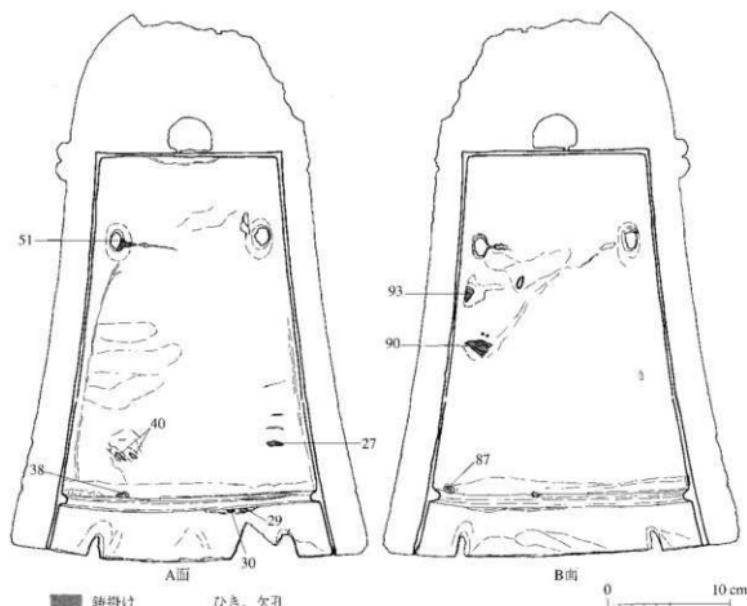
鐸の型持孔はいずれも形状が整っておらず、A面は崩れた楕円形、B面は楕円を2つ横に重ねたような形をしている。孔の大きさは、A面が長径1.45cm・短径1.3cm、B面が長径1.6cm・短径1.4cmである。内面における型持痕の大きさは、A面が長径1.7cm・短径1.6cm、B面が長径1.85cm・短径1.65cmを測る。

鐸身上半の型持孔は、A・B面ともに上区流水文の下端部にあり、A面左側が6～7段目、右側が概ね7段目、B面はいずれも7～8段目に位置する。孔の大きさは、A面左側が高さ1.45cm、幅1.4cm、同面右側は高さ1.55cm・幅1.55cm、B面左側は高さ1.4cm・幅1.3cm、同面右側は高さ1.5cm・幅1.4cmを測る。内面における型持痕の大きさは、A面左が高さ1.8cm・幅1.7cm、同面右は高さ1.7cm・幅1.7cm、B面左は高さ1.8cm・幅1.7cm、同面右は高さ1.9cm・幅1.8cmである。

裾の型持孔は逆「U」字形を呈しており、裾の端部から深く入り込んでいる。A面左の型持孔付近には大きな欠損がある。孔の大きさはA面左側が高さ1.8cm、右側が高さ1.8cm・幅1.3cmで、B面左側が高さ1.75cm・幅1.15cm、右側が高さ1.7cm・幅1.15cmである。内面における型持痕の大きさはA面左側が高さ2.3cm、右側が高さ2.0cm・幅が1.6cmで、B面左側が高さ1.8cm・幅1.4cm、右側が高さ1.9cm・幅1.5cmである。



第110図 気比4号鐸の铸造状態（外観）



第111図 気比4号鐸の鋳造状態（内面）

鋳上がり 湯回りが悪く欠孔が生じたところは、A面に1ヶ所、B面に4ヶ所と比較的少ない。表面を観察した限りでは安定した状況を呈しており、文様の残りも極めて良好と言える。ただ、欠孔部に補強する「鍛掛け」が所々に見られるほか、表面が窪む「ひき」が各部位に観察されることから、決して鋳上がり良かったとは言い難い。

「ひき」は鉤や鰭の付け根付近のほか、舞面、内面突帯に当たる部分の外面に見られる。内面では、鐸身の所々や鋸までで観察できるが、特に内面突帯の付け根付近に顕著である。

範傷 A面は鉢に7ヶ所、鐸身に33ヶ所、鰭に6ヶ所、B面は鉢に12ヶ所、鐸身に21ヶ所、鰭に9ヶ所の範傷が認められる。全体的に範傷は多く、一見して進行した傷が目立つ。

鉢の傷は菱環の綾杉文内に多く、2・4・5・56・57など、隣接する平行斜線間に膨らみを持つものが目に付く。5・55・57・61は、菱環から外縁に向けて延びている。

鐸身の流水文様帶には、14・24・43・52・96・97などのように、流水文の条線間にできた極小さな傷のほか、これよりやや大きい42・79・89、また9・46・70・73・76～78などのように、複数の条線間を貫く細長い傷となったものがある。そのほかには25・72のように条線間が潰れて大きな膨らみとなったものも認められる。18・44・92はc反転部に見える膨らみであるが、これらは鋳造時の「ひき」によって生じた可能性もある。85は下区流水文中央最下端のx反転部にある。

横帯の範傷としては、A面第1横帯のシカ列を貫く13や、シカの脚部に見られる48・49、B面第

1・第2横帯の渦文を貫く67・75がある。13は左側4頭のシカの脚部や頸部を貫き、左鰐の付け根付近まで延びている。75は渦文の一部に膨らみを持ち、中区流冰文の条線間にまで延びる。50はc反転部からシカの頭部に延びる傷である。

下辺横帯には31・36・37・81のように、範歯文の平行斜線間に膨らみを持つものがある。また、下界線から縦にかけては、33～35・84・86のように縦方向に細長く延びる傷がある。

鰐には、鋸歯文内の平行斜線間に膨らみを持つ16・94のほか、鰐の上端から縦にかけて長く延びる傷がある。8・12・41・45・71・74・91・98は縫状に延びるやや細い傷であるが、28・66・68・80は部分的に太くなっている。80のようにこの傷を境にして鰐の付け根へ向けて段が生じるものもある。

鉄掛け 軟X線による調査を行っていないため一部正確さを欠くが、外面及び内面の観察によりA面鋒身に6ヶ所、B面鋒身に3ヶ所の鉄掛けが認められる。これらの鉄掛けは、すべて内面に突起状の膨らみを持ち、内面から補強されたことを示す。

A面鋒身上部の右型持孔に接する51は、半円状の突起を削り出した足掛けを持つと見られる。A面下区流冰文左下端の27には、その表面に鉄掛け後の施術と見られる極めて細い擦痕状の線が認められる。また、A面下区流冰文右下端の40は、表面が平滑でなく窪みや小穴が残る。27や40の内面を観察すると、表面に比べて鉄掛けの痕跡が小さいことから、これらの鉄掛けは欠孔とともにその周囲にできた窪みを埋めるように施されたものと見られる。

A面の29・30・38やB面の87は、内面突帯による「ひき」の影響で発生した小穴を補強したものである。87及びB面中区流冰文の右上端c反転部に見られる93には、鉄掛けの表面やその周囲にじ具による細かな刺突の痕跡が認められる。90は内面を観察すると、突起状の膨らみが重なり合っているように見え、数回に分けて鉄掛けを施した可能性がある。

(山崎 修)

6. 桜ヶ丘3号鐸 [図版306～313・写真図版431～435]

出土地 兵庫県神戸市灘区桜ヶ丘町18番地

出土年 1964(昭和39)年12月10日

所有者 神戸市立博物館

収蔵先 神戸市立博物館

出土状況 桜ヶ丘遺跡は、六甲山から派生した丘陵の東斜面に立地する。建材店員が壁土用の土を探取していたところ、14個の銅鐸と7本の銅戈が出土した。遺跡の周辺は通称「神岡(かみか)」であったという。

埋納坑はすでに失われていたものの、発見によると、銅鐸の多くは身を横たえ鰐を立てた状態で埋納されていたようである(兵庫県教育委員会1966・1969)。桜ヶ丘3号鐸の破損状態を観察すると、A面向かって右側にあたる鰐の外周が剥離し、しかもその鰐下端が欠失することから、A面右側の鰐を上に向けていた可能性が高い。

型式 外縁付鉗2式

文様構成 二区流冰文

同范銅鐸 加茂岩倉31号鐸・加茂岩倉32号鐸・加茂岩倉34号鐸・上屋敷鐸

法 量 総 高	45.2cm	最大幅 現	28.8cm
舞長径(A面)	15.4cm	舞長径(B面)	15.3cm
裾長径(A面)	24.0cm	裾長径(B面)	24.1cm

鋤 鋤の高さ12.2cmに対し、鋤の横幅が19.4cmとなっており、やや横長な半円形を呈する。また、鋤孔は高さ2.3cm、幅4.9cmを測り、やや平な半円形となる。菱環と外縁からなる外縁付鋤である。ただし、鋤の断面形を見ると、菱環から外縁への移行は漸移的となる。菱環の頂部の厚さは中央付近0.9cm、左鋤脚付近1.1cm、右鋤脚付近1.1cmを測り、鋤脚に近づくにつれて若干厚くなる。外縁の厚さは0.3cmである。

A面の文様構成を見ると、外縁文様帯は内向鋸齒文Rである。外縁の幅はA面の左鋤脚付近は不鮮明のため不明、右鋤脚付近で2.3cmを測るのに対し、鋤頂付近では2.9cmと幅広となる。鋸齒文も鋤頂に近づくにつれて大型化する傾向が窺える。菱環の外斜面は綾杉文CDを2段重ねる。いずれも軸線を持つ。菱環の内斜面も綾杉文帯と見られるが、軸線のみが鋤出される。

B面の文様構成は基本的にA面と同じである。外縁の幅はB面左鋤脚付近で2.3cmを測り、鋤頂の2.4cmとほとんど変わらない。また、菱環の外斜面では綾杉文CDのドが綾杉文ZSとなる。

鐸身 鐸身の高さはA面で32.1cm、B面が33.0cmを測る。舞と裾との距離はA面で32.2cm、B面が32.6cmである。器體の厚さは0.2~0.3cmで、A面・B面で大きな差はない。また、鐸身を側面から見ると、反りを持つことがわかる。その外反率(舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100)はA面側で1.6% (0.5÷32.2×100)、B面側で1.5% (0.5÷32.6×100)である。

鐸身の主文様はA・B面ともに二区流文であり、上下区が横帯によって隔てられる。流文の型はすべて8c7xであり、いわゆる横型流文に属する。流文は4条を1束とし、その反転方法はいずれもC反転である。このうち、B面の上区流文の右肩からは鱗に向かって伸びる直線が鋤出される。B面の左肩や上段のx反転部、そしてA面にも同様の線が存在した可能性があるものの、周辺の鋤出しが悪いために判然としない。

A面の第1横帯は、左右両端に各3単位の山形文を配し、その間に挟まれた中央付近には鋸齒文R3単位が飾られる(1)。同範銅鋤のうち、中央が鋸齒文となるのは桜ヶ丘3号鋤に限られた特徴であり、鋤型の補修に伴って文様が変更されたと見られる。また、A面の下辺横帯は2段に複帯化し、上段が斜格子文帯、下段が鋸齒文帯Rを配する。下辺横帯の下側の界線は3条である。

一方、B面を見ると、第1横帯には鋸齒文Rが配される。下辺横帯は鋸齒文帯であり、その界線は上側・下側とも3条を数える。

裾の長さはA面側よりもB面側の方が全体的に長く、最大で0.9cmの差がある。A面裾の中央付近が「ひき」によって短くなっていることから(2)、この「ひき」が目立たないよう A面側の裾を全体的に短めに切断した可能性がある。また、この「ひき」以外の箇所では、裾端部が鋤造後に面取りされる。A面向かって左側に当たる鱗の基部付近で僅かな段差が生じ、鐸身に対して鱗の方が若干低くなる。その一方で、右側の鱗の基部付近は段を持たず、同一面をなす。

舞 舞の平面形はアーモンド形を呈する。舞の扁平率(舞短径÷舞長径×100)はA面で69.5% (10.7÷15.4×100)、B面で69.9% (10.7÷15.3×100)となる。A面・B面の型ズレは特に認められない。舞面が傾斜する肩下がりは、A面で0.2cm、B面で0.3cmとなる。また、0.1cmの高さを持った鋤脚壁状のバリが認められる。

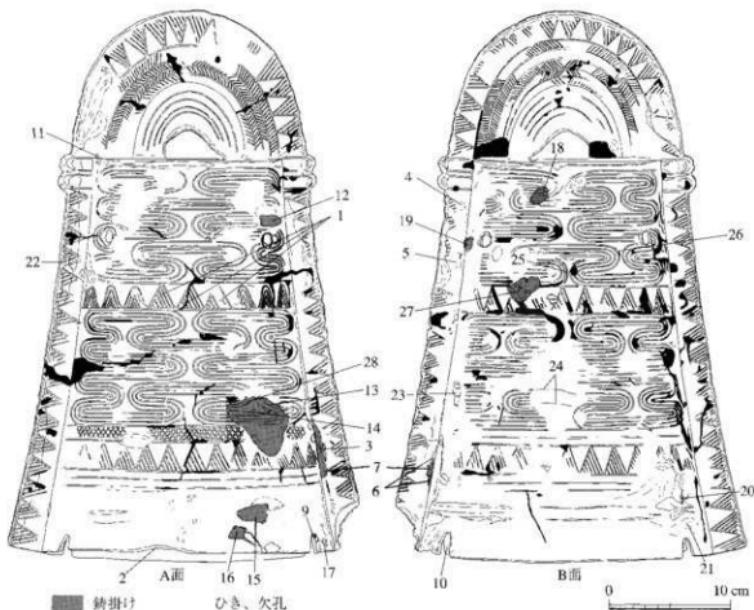
鰭 鰭の幅はA面側の左肩で1.9cm、左裾2.9cm、右肩2.3cm、右裾現0.5cmである。B面側は左肩2.2cm、左裾は現0.4cm、右肩2.0cm、右裾2.9cmとなる。いずれの鰭も裾に近づくにつれて幅が広くなる傾向が窺える。A面向かって右裾部分が出土時の破損によって欠失する。

また、鰭の舞付近には「B」字形の飾耳が付く。飾耳の突出部は斜線となる。飾耳の脚が鐸身と接するまで伸びており、脚内には鋸齒文等は見当たらない。鋸齒文はA面左側で17個を数える。いずれの鋸齒文も充填斜線はRであり、裾に近づくにつれて長大化する傾向が窺える。細かい条線状の工具痕がA面右鰭の3とB面左鰭の4-6で観察できる。このうち、3と6は、7の鑄掛け部分に対処したものである。

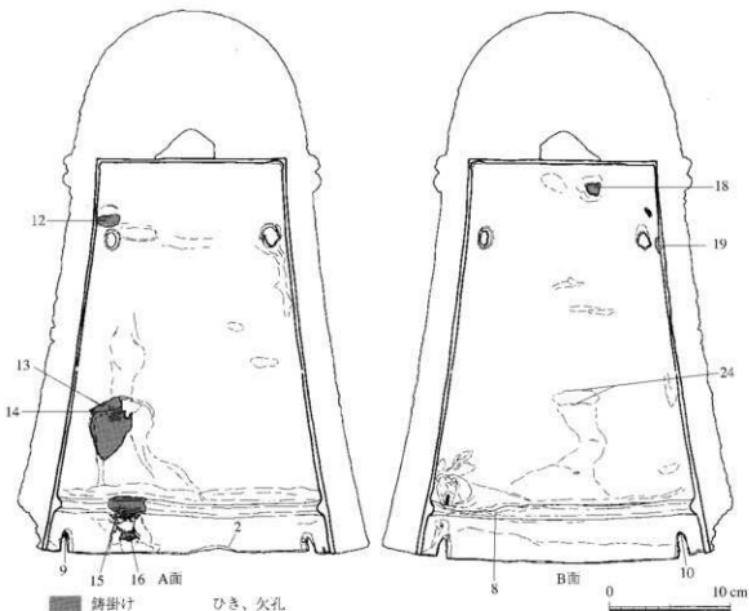
鰭の厚さは、肩付近で0.35~0.4cmであり、基部と端部で大きな差が認められない。同様に、A面向かって左側の鰭の下端では、基部も端部も0.45cmを測る。

内面突帯 内面突帯は1条である。A面側では幅1.2cm、高さ0.5cm、裾からの距離3.5cmを測る。一方、B面では幅1.2cm、高さ0.5cm、裾からの距離3.0cmである。その断面形は、角の弱い台形を呈するが、鐸身に近づくにつれて上面下側の稜線がシャープとなる。B面の8で内面突帯の形状が不整形となるのは「ひき」によるものと見られる。これは内面突帯が舌と接触して磨滅した可能性がある。ただし、稜線間の幅は中央と鰭付近で大きな差はない。

型持 型持との接触痕が舞に2ヶ所、鐸身上半にA・B両面とも2ヶ所ずつ、裾もA・B両面と



第112図 桜ヶ丘3号鐸の铸造状態（外面）



第113図 桜ヶ丘3号鐸の鋳造状態（内面）

も2個ずつの計10ヶ所で確認できる。

舞A面側の堅持孔は長径2.2cm、幅1.3cmであり、B面側では長径2.3cm、短径1.2cmを測る。本来、舞の堅持は2点で、いずれもU形（截頭円錐）である。

鐸身上半の型持孔はいずれも不整円形を呈するが、元來の型持は円形（裁痕円錐）であったと見られる。このうち、A面左側の型持孔は高さ1.5cm、幅1.7cm、舞からの距離5.5cmを測る。また、右側が高さ1.2cm、幅1.2cm、舞からの距離5.7cmとなる。B面左側の型持孔は高さ1.3cm、幅1.2cm、舞からの距離5.9cm、右側が高さ1.1cm、幅1.0cm、舞からの距離5.6cmを測る。

裾部の型持孔は内面から見ると逆「U」字形を呈する。A面左は高さ3.4cm、幅1.0cm、右は高さ1.5cm、幅1.2cmである。B面左は高さ2.0cm、幅1.3cm、右は高さ1.6cm、幅1.5cmを測る。A面右側（9）とB面左側（10）の型持孔には、バリを除去する際に付いたと見られる工具痕が観察できる。

鑄型の食い違い 菱環の内斜面の端部を見ると、A面側で約0.2cm幅の段が生じているのに対し、B面側では段が認められない。

錆上がり 文様の不鮮明な箇所が所々で認められる。錆回りが悪いために欠孔として残ったところは、A面左（B面右）側の錆脚付近に1ヶ所（11）、舞A面側で3ヶ所、錆身A面に6ヶ所（12～17）、A面右側（B面左）の鱗に1ヶ所（7）、錆身B面に4ヶ所（18～21）で確認できる。このほか、A面左鱗の22と錆身B面の23・24では亀裂状の铸造欠陥が生じている。

器壁が肉厚となる部位を中心に「ひき」が見られる。A面左鉢脚（B面右鉢脚）付近の外縁に「ひき」が発生して文様が不鮮明となる。また、鑄の外周に沿って「ひき」が生じ、浅い窪みが生じている。下辺横帯のやや右寄りの箇所でも「ひき」が発生する。

さらに舞を内面から見ると、左右の鉢脚に対応する箇所で「ひき」が認められる。また裾の外表面では、内面突帯と対応する部位で2筋の「ひき」が発生する。

このほか、鐸身B面の上区流水文では、中央最下段のx反転部周辺（25）と右側下段のx反転部（26）で鉄流れが生じ、文様が二度押しされた状態となっている。

范傷 同范銅鐸と比べても范傷が目立つ。范傷と認定した箇所は、鉢A面で9ヶ所、B面19ヶ所、鐸身A面で36ヶ所、B面95ヶ所、A面右側の鑄で6ヶ所、右鑄で10ヶ所、B面右側の鑄で7ヶ所、右鑄で16ヶ所を数える。范傷が同范銅鐸間で共有される場合でも拡大する傾向が認められるほか、新たな范傷が確認できる場合も多い。また、文様として鉄出される線でも幅や厚みに乱れが生じ、鉄型の傷みを窺わせる。

鉄掛け 鉄掛けは、A面鐸身で5ヶ所（12～16）、A面右（B面左）鑄で1ヶ所（7）、B面鐸身で2ヶ所（18・19）の計8ヶ所で認められる。このうちA面鐸身の15は、鉄掛けによって内面突帯の鉄造欠陥部分を補うものである。また、A面鐸身の鉄掛け13～16では、内側から工具による刺突が施される。A面右（B面左）鑄の鉄掛け（7）の周囲には削痕状の工具痕が観察できる（前述）。肉眼で観察する限り、鉄掛けの際の足掛かりは確認できない。また、鉄掛けのほとんどは、銅鐸の外表面を窓いで銅鐸の内側から溶鋼を注いだと見られる。

このほか、27では器表面が0.1cm弱の盛り上がりをみせている。内面を観察する限り、この部位では欠孔が生じていないものの、銅鐸の外側に生じた窪みを鉄掛けによって埋めた可能性がある。

補刻 補刻はA面鐸身で1ヶ所（28）、B面鐸身で1ヶ所（18）の計2ヶ所で観察できる。このうちA面の28は、下区流水文の右側下段のx反転部を補刻する。また、B面の18は上区流水文の中央上段のx反転部を補刻する。

（北島大輔）

7. 伝淡路鐸（本興寺蔵）【図版314～321・写真図版436～440】

出土地 伝兵庫県淡路島

出土年 不明

所有者 兵庫県尼崎市本興寺

収蔵先 兵庫県尼崎市本興寺

出土状況 不明

型式 外縁付鉢2式～扁平鉢1式

文様構成 二区流水文

同范銅鐸 加茂岩倉15号鐸

法量	総高	46.0cm	最大幅	25.2cm
-----------	-----------	--------	------------	--------

舞長径（A面）	15.1cm	舞長径（B面）	15.2cm	舞短径	10.4cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

裾長径（A面）	23.8cm	裾長径（B面）	23.9cm	裾短径	16.1cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

鉢 文様構成は菱環と外縁2帯・内縁で構成される扁平鉢式である。高さ12.6cm、幅19.3cmを測

り、鉢孔は高さ4.2cm・幅5.5cmを測る。鉢孔はA面の右下半が内縁に食い込んでいるが、その他は本来の形状をある程度保っていると思われる。

鉢孔高の鉢における比率は33% ($4.2 \div 12.6 \times 100$) である。3対耳扁平鉢流水文では22%と小さくなる傾向が指摘されているが(難波1991)、それらに比べると大きいことがわかる。菱環後高はA面7.4cm・B面7.3cmである。鉢高における位置(菱環後高 ÷ 鉢高 $\times 100$)はA面58.7% ($7.4 \div 12.6 \times 100$)・B面57.9% ($7.3 \div 12.6 \times 100$)で真中より高いことがわかる。菱環稜頂の位置は、3対耳扁平鉢式流水文では外縁鉢2式横型流水文より低く、鉢の真中に来ることが指摘されており(難波1991)、それらに比べるとかなり高い位置にあることになる。同范銅鐸の加茂岩倉15号鐸でも同様であり、菱環稜頂の位置が高く鉢孔が大きくなるのがこのタイプの特徴といえる。

A面では、外縁第1文様帯が幅1.9cm(中央)・2.0cm(左端)・2.1cm(右端)・厚さ0.3cmを測り、確認できる文様はR鋸齒文である。外縁第2文様帯は右端で幅1.7cmあり、連続渦文Sが飾られるが、連結部の繋がる第II種と離れている第I種の両方がある。右端から2番目(4)は第I種、3・4番目(2・3)は第II種で同范の加茂岩倉15号鐸と一致している。なお、外縁第2文様帯に連続渦文を飾るは3対耳扁平鉢式銅鐸の特徴とされる(難波1991)。菱環の外側の区画線と連続渦文の間には空間があることから、三日月文様帯が形成されていたと思われる。

菱環は幅1.8cm(左端)・1.9cm(右端)、厚さ0.8~1.3cmで、左側がD、右側がCの綾杉文を飾り菱環文様帯として独立している。加茂岩倉15号鐸に見られる中軸線は鋳出されていない。菱環文様帯の成立によって明確化した内縁ではあるが、本鐸では文様は鋳出されていない。

B面も、A面同様の文様構成をとる。中央部分はほとんど文様が残っておらず不鮮明である。外縁第1文様帯は幅が1.8cm(右端)・2.2cm(左端)で僅かに鋳出された鋸齒文は右側では鋸齒文R、左側は鋸齒文Lである。外縁第2文様帯は左端1.5cm・右端1.8cmで連続渦文を飾るが、第I種かII種かは明確でない。

外縁と菱環との間には三日月文様帯が形成されており、この上端から内縁下端まで中軸線4条が貫いている。この軸線の存在から菱環文様帯はD III C綾杉文となっている。菱環は幅1.8cm(左端)・1.7cm(右端)で独立した文様帯となっている。内縁には中軸線と双頭渦文が3個のみ見ることができる。また、菱環右側では范傷(19)からの延長上に段差を持っており、この段を境に綾杉文の条線が食い違っている部分がある(20)。これは鑄型の損傷部分の文様を彫り直したためと思われる。

舞身 現在はA面2ヶ所、B面2ヶ所に大きな穴が開いているが、これらは二次的なものである。また、B面には穴の周辺に表面が剥離した部分がかなり広がっている。また、表面は擦痕が多く見られ、本鐸は本興寺にて再利用されていたとされることから(直良1927)、文様が不鮮明になっているのは、二次的な手擦れ等の影響もあると思われる。

鐸身は、高さA面33.4cm・B面33.0cm、厚さ0.4cmである。身は全体に外反気味になっており、外反度(舞・裾線からの最深値 ÷ 舞から裾の長さ $\times 100$)は2.45% ($0.8 \div 32.6 \times 100$)で、下区の下半が最深となる。

A面は、文様部上下高25.9cmで文様は全体的に非常に不鮮明であるが、文様構成は1区流水文で身の上端と中央に横帯を持っていたと思われる。第1横帯は幅1.3cmで、ほとんど文様は分からないうが、一部に三角形文ないし鋸齒文と思われる斜線が確認できる。第2横帯はまったく不明である。

加茂岩倉15号では部分的ではあるが鋸歯文Rが見られる。

流水文は加茂岩倉15号鐸では6c4xの上に4c1x複合綫型流水文を2個のせて8段構成にしており、全体としてはx反転部の9個ある8c9xとなっている。本鐸では上区で4c1xが確認できるが。その他は両側のE反転部が見える程度である。

下区の流水文は右端のc反転部とx反転部と左端最下段の反転部が確認できる程度である。下辺横帯もほとんど文様が見えず一部に鋸歯文Rの斜線が確認できる。加茂岩倉15号鐸では鋸歯文Rが充填されている

B面は文様部の上下高26.1cmで、比較的文様が鋳出されており全体の構成がわかる。第1横帯は身の上端にあり、幅1.5cmで文様が見える部分ではR鋸歯文が飾られる。第2横帯は幅3.4cmで連続渦文第1種が1単位のみ確認できる。加茂岩倉15号鐸同様に連続渦文が2帯飾られていたようである。

流水文は上区では6c4xの下に4c1xを2個組み合わせている。また、両側の反転部は繋いでE反転とし、3つを組み合わせてできるx反転部の上端は両側のE反転から延びる線を繋ぐことで一体化している。これにより全体としてはx反転部が9個できる8c9xとなる。A面と同じ型の流水文ではあるが上下が逆になっている。下区も同様の流水文が飾られる。

本鐸のc反転部は中軸線1条に対して3条の平行線が周るが、下区右端c反転部の1段目では4条の線が周っている。このため2段目のE反転の軸線に2本の線を繋ぎ、全体としてはC反転にすることによって矛盾を解消している(28)。

下辺横帯は幅2.5cmで文様の残っている右半分はR鋸歯文である。さらに下には2条の条線で三角形文を挟んだ文様帯がある。加茂岩倉15号鐸では左半分はL鋸歯文になっており、鋸歯文が左右対称になっている。

舞 長さはA面15.1cm・B面15.2cmで、短径は10.4cmである。舞の幅平率(舞短径÷舞長径×100)はA面で68.9% (10.4÷15.1×100)である。舞面には「ひき」による深みが数ヶ所見られる。

鑄 鏑幅はA面の左肩で2.3cm、右肩で2.2cm、B面左肩で2.2cm、右肩で2.1cmである。筋耳は残っていないが、脚部がA・B面ともに見られることから、身の上端の位置には半円形筋耳が1対あったと思われる。脚部の条線は複線になっている。

鑄の鋸歯文はA面では左右ともにR鋸歯文が、B面では左鑄がR鋸歯文で右鑄ではL鋸歯文が飾られている。B面右鑄下端の鋸歯文のみ鋸歯文Rになっている。鑄の下端は欠損しているが、同范の15号では2条の下端線がある。なお、本鐸の全体的な鋸歯文の配置は不鮮明な部分が多く明確ではないが、加茂岩倉15号鐸ではある程度の規則性が見られるようである。

型持 型持は舞の両面に1個ずつ、身の両面にそれぞれに上半に2個ずつ、裾に2個ずつの計10個の型持による孔がある。

身上半の型持孔は上区流水文の下から3段目にx反転部の鑄側にある。A面左側が幅2.0cm・高さ1.6cm、右側が幅1.4cm・高さ2.0cm、B面左側が幅2.0cm・高さ1.5cm、右側が幅2.0cm・高さ1.4cmで梢円形を呈する。

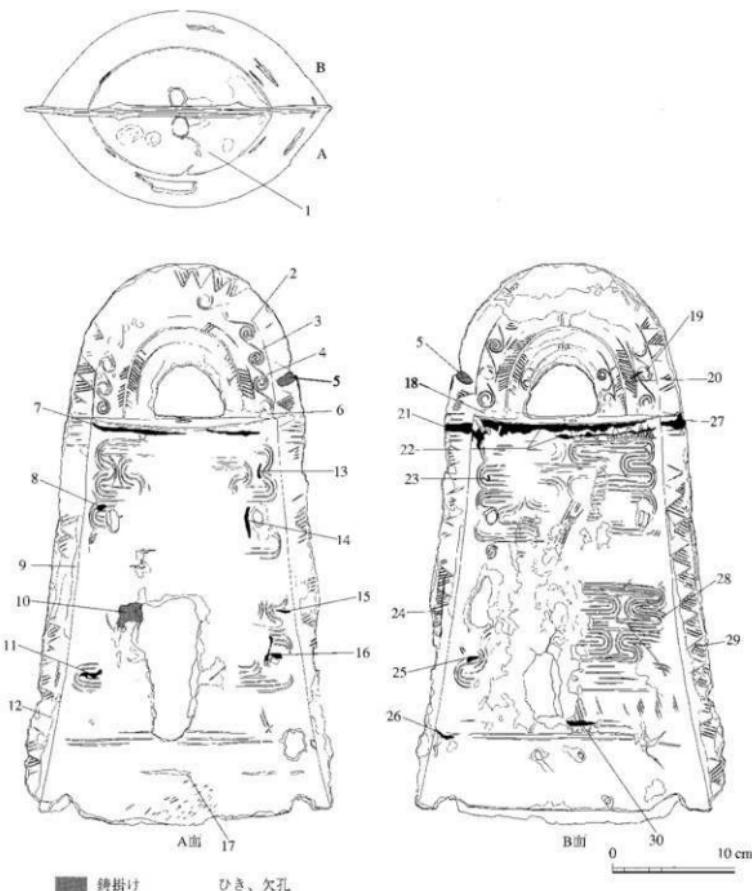
身裾の型持孔は欠損しており、僅かに先端が残るのみで全体がわかるものはないが、幅1.4~2.0cm・高さ1.6~2.7cm程と推測され、細長い型持であったようである。

舞の型持はA面で高さ1.9cm・幅1.4cm、B面で高さ1.9cm・幅1.3cmで梢円形を呈し、身上半の型

持とほぼ同じである。

内面突帯 身下縁から4cm~4.4cm上にあり、幅1.1cm・高さ5mmを測る。断面台形で上面に平坦面を持つ。また鰭付け根付近より中央部の方が低くなる傾向にある。また、内面突帯の外面に当たる部分ではA面で「ひき」が見られる(17)。

鈎上がり 本撈は二次的にかなり磨滅しているため、本来の鈎上がりについては判断しがたい。特に大きな鈎掛けや孔は無く目立った鈎造欠陥はないが、A面では身の中央部分と第2横帯ならび



第114図 伝淡路撈の鈎造状態

に下辺横帯、B面では鉢頂付近と身の第2横帯の文様がほとんど出ていない。また、鉢の付け根や鰐の付け根には「ひき」による窪みが見られる（6・9・18）。

范傷 A面では第1横帯に水平に延びる大きな盛り上がりがある（7）。その他にも流水文の条線間が欠損してできた盛り上がりが見られる（8・11・13・15・16）。身上半右側の型持の左側に比較的大きな縱方向の盛り上がりがある（14）。また、左鰐下部の付け根の鉢齒文先端が消えている部分が盛り上がっており、この部分も范傷の可能性がある（12）。

B面では第1横帯に水平方向の盛り上がりがあり、鉢齒文の左半分は失われている（18）。また、第1横帯の延長上に当たる鰐の鰐耳脚部の条線間は左右とも欠損し盛り上がっていている（21・27）。A・B面とも第1横帯に大きな范傷が生じていることがわかる。

また、流水文の条線間や下辺横帯下界線の条線間の欠損による盛り上がりがいくつかある（23・25・30）。下辺横帯下界線の范傷は比較的大きなものである（30）。左鰐中央辺りにも縱方向の細長い范傷がある。また、鉢の右側に菱環から外縁第2文様帶に延びる盛り上がりがある（19）。舞の上面にも范傷による細長い盛り上がりがある（1）。

鉢掛け 鉢掛けは肉眼観察で2ヶ所確認できる。1つは鉢にあり、A面で見ると外縁第1文様帶の付け根やや上に（5）、1つはA面鉢身下区の左上部にある（10）。足掛かり等は肉眼では確認できない。

補刻 鉢掛けが行われているが、文様部の中心部分に鉢掛けが無いこともあってか補刻は行われていない。

（松山智弘）

8. 川島神後鐸 [図版322~327・写真図版441~445]

出土地 徳島県麻植郡川島町神後

出土年 1868（明治初）年

所有者 財団法人辰馬考古資料館

収蔵先 財団法人辰馬考古資料館

出土状況 出土地は吉野川中流域右岸に張り出した丘陵上であったと考えられており、候補地として川島城址・上桜城・長楽寺の3ヶ所があり、現在は川島城址域内に『銅鉢出土地』の石碑が建っている。

型式 外縁付鉢2式

文様構成 :区流水文

同范銅鐸 加茂岩倉11号鉢

法量	総高	45.8cm	最大幅	28.2cm	重量	3.28kg
-----------	-----------	--------	------------	--------	-----------	--------

舞長径(A面)	15.0cm	舞長径(B面)	14.8cm	舞短径	10.6cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

裾長径(A面)	25.0cm	裾長径(B面)	24.9cm	裾短径	14.7cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

裾長径(A面)	24.0cm	裾長径(B面)	24.1cm	裾短径	16.5cm
---------	--------	---------	--------	-----	--------

鉢 文様構成は菱環と外縁で構成される外縁付鉢である。高さ12.5cm・幅19cmを測り、鉢孔は現状で高さ3.9cm・幅5.7cmである。孔が文様帶の中まで及んでおり、本来の形状より大きくなっていることがわかる。このため、孔の大きさと菱環の本来の幅は不明である。菱環後高はA面7.2cm・

B面7.4cmで、B面での菱環稜頂の位置（菱環稜高：鋤高×100）は58.7%（ $7.4 \div 12.6 \times 100$ ）で真中より高い位置にある。外縁鉢2式横形流水文の菱環稜頂の位置は真中より高くなることが指摘されているが（難波1991）、本鋤はその中でもより高い位置にあり外縁鉢1式と2式の中間にある。これは本鋤が鱗の飾耳と鋸歯文との関係から外縁付鉢2式の中でも古相に位置付けられる（難波1991）ことと関係する可能性がある。

菱環部のうち断面が厚肉の菱形を呈するのは幅3.0cm程度である。断面菱形の圧肉部分は外斜面では稜頂側の斜線文1帯分と内斜面の文様のある部分である。

A面は外縁中央が現状で幅2.2cm・厚さ0.3cmで、鋸歯文Rが飾られるが、右端のみ変形した鋸歯文L Rとなっている（13）。右鱗には鋸歯文Lが飾られており、この部分がLとRの鋸歯文のぶつかる部分となる。

菱環は、文様構成が綾杉文を複数重ねて一つの文様帶を構成していることから、現状でも幅6.3cmと広くなっている。かなり不鮮明になっているが、文様構成は外斜面にD C 綾杉文とZ S 綾杉文とが上下に2帯配置され、内斜面にもS Z 綾杉文が1帯と平行線で6分割された区画に重弧文を挟む文様帶が1帯ある。鉢の幅は頂部で広く脚部で狭いため、菱環外斜向の綾杉文を頂部で幅広くすることで整合をとっている。

B面は、外縁には鋸歯文Rを飾るが鋤頂とその両側の3個は、鋸歯文L Rになっている。菱環は、中央での幅が現状6.4cmで幅広い文様帶となっている。菱環外斜面は、外側に中央の幅の広い部分に鋸歯文R、その両側の幅の狭い部分に平行斜線を入れる文様帶、稜頂側にZ S Z S Z S 綾杉文の2帯を配する。内斜面もS Z S Z S Z 綾杉文、その内側には頂部に右半分が綾杉文となる4条の中軸線とその両側に弧状の平行線、さらに鉢の付け根に3条の平行線を入れる文様帶の2帯からなる。B面も頂部が脚部より幅が広くなっているため、菱環外斜面最外周の文様帶の頂部を鋸歯文に変え幅を広くして矛盾を解消している。

鐸身 表面が剥落した部分や残っている部分も磨滅や二次的な擦痕があるなど、出土後にかなり改変を受けているようである。身高はA面33.3cm・B面32.8cmを測る、厚さは0.2~0.35cmを測る。身は全体的に外反気味に反っており、外反度（舞・据線からの最深値÷舞から据の長さ×100）は、A面で1.83%（ $0.6 \div 32.7 \times 100$ ）、B面で2.14%（ $0.7 \div 32.7 \times 100$ ）である。

A面の文様構成は中央に横帶を配した1区横形流水文で、文様部の上下高は26.1cm・裾上下高7.1cmである。流水文は上区・下区とも8段構成で、8つのc反転部と7つのx反転部からなる8 c 7 xである。x反転部は中央に3個、左右に2個ずつある8 c 7 xである。反転部はC反転である。上区の上下高10.4cm・下区の上下高9.2cmである。第1横帶は幅2.1cmで、確認できるのは鋸歯文Rである。下辺横帶は幅2.5cmで、流水文下端より0.4cm下に上界線1条があり、鋸歯文Rを飾る。下辺横帶の下には上下幅1.4cmの間に3条の下界線がある。

B面もA面と同様の文様構成をとる。文様部の上下高は26.2cm・裾上下高6.6cmで、上区10.3cm・下区10.1cmで、下区がA面に比較して上下に広くなっている。このため流水文下端と下辺横帶との隙間がなくなり、下辺横帶鋸歯文の頂角が流水文下端に接している、このため文様部の上下高は変わらない。第1横帶は幅2.0cmで鋸歯文Rを充填する。下辺横帶の幅は2.6cmで鋸歯文Rが充填される。下辺横帶の右側の鋸歯文は下に長くなってしまい、下界線も左右で大きくズレを生じている。下界線の下に引きによる窪みがあることから、文様が流れたものと思われる。下辺横帶の下には3条

の下界線がある。

下区右端のc反転部は2段目下端と3段目上端が重なっている(42)。2段目のc反転部に乱れがあることから、鋳型の補修が行われ、その時に条線の繋ぎ方に誤りが生じた可能性が考えられる。

舞 長さはA面15.0cm・B面14.8cmで、短径10.6cmを測る。舞の扁平率(舞短径÷舞長径×100)は、A面70.1% ($10.6 \div 15.0 \times 100$)・B面71.6% ($10.6 \div 14.8 \times 100$)である。鉢の付け根から続く筋掛けが1ヶ所(14)あり、B面側に型持孔から続く大きな孔がある(15)。この孔は一部破損したと思われる部分もあるが、側面が表面張力により丸くなっていることから、大部分は湯向不良による孔である。この孔と接する筋掛けの湯境の上下が張り状にはみ出している(14)。この部分は補鋳時に湯境の上下に被った部分であることから、この孔の部分は筋掛けをする時はすでに埋まっていたことになり(15)、先に補鋳が行われていたことになる。

本鋳でも鋳造直後は舞の1/3は孔が空いていたことになり、同范の加茂岩倉11号鋳同様に舞の部分は湯向不良による孔である。

鐘 幅は、A面の左側は大半が欠損しており不明、右側は飾耳で幅2.3cm、下端で2.35cmである。身の上端には半円形飾耳が一对あったと思われる。右側の飾耳は2条の条線からなっており、脚がなく鰐の鋸歯文がそのまま外縁へと続くA1類(難波1991)であることから、鰐の鋸歯文を鋳型に彫った後に飾耳を彫っている。

A面左鰐には鋸歯文Rが、右鰐には鋸歯文Lが充填されている。B面は左右とも鋸歯文Rが飾られる。この銅鋳では鋸歯文Lが飾られるのは、A面の右鰐だけでその他の部位はB面鉢頂部の鋸歯文L Rを除くとすべて鋸歯文Rが使われる。下位の鋸歯文L Rと鰐下端にはA面右鰐で1.8cm、B面左鰐で2.4cmの空間がある。

内面突帯 内面突帯は身の下縁から5.2~5.6cm上にあり、高さ0.4cm・幅1.2cmである。上面は幅0.5cmほどの平坦面があり断面は台形になっている。

型持 舞の両面に1個ずつ、身の両面それぞれに上半に2個ずつ、裾に2個ずつの計10個の型持孔がある。ただし、舞のそれについては鋳造不良のため全体が残っていないが、筋掛けによって復原されている。B面側も現状は孔になっているが、前述のとおり筋掛けがなされていた可能性が高く、型持孔も復原されていたものと思われる。A面の復原された型持孔は幅1.9cm・長さ2.2cmである。

身上半の型持は、A面では5段目と6段目にまたがる位置にあり、反転部を避けている。左で幅2.1cm・高さ1.9cm、右は幅1.7cm・高さ1.6cmである。身裾の型持は、A面は左で幅1.1cm・高さ3.8cm、右が幅1.4cm・高さ2.5cm、B面左が幅1.6cm・高さ3.0cm、右が幅1.75cm・高さ2.7cmで、細長い繰り込みになっている。

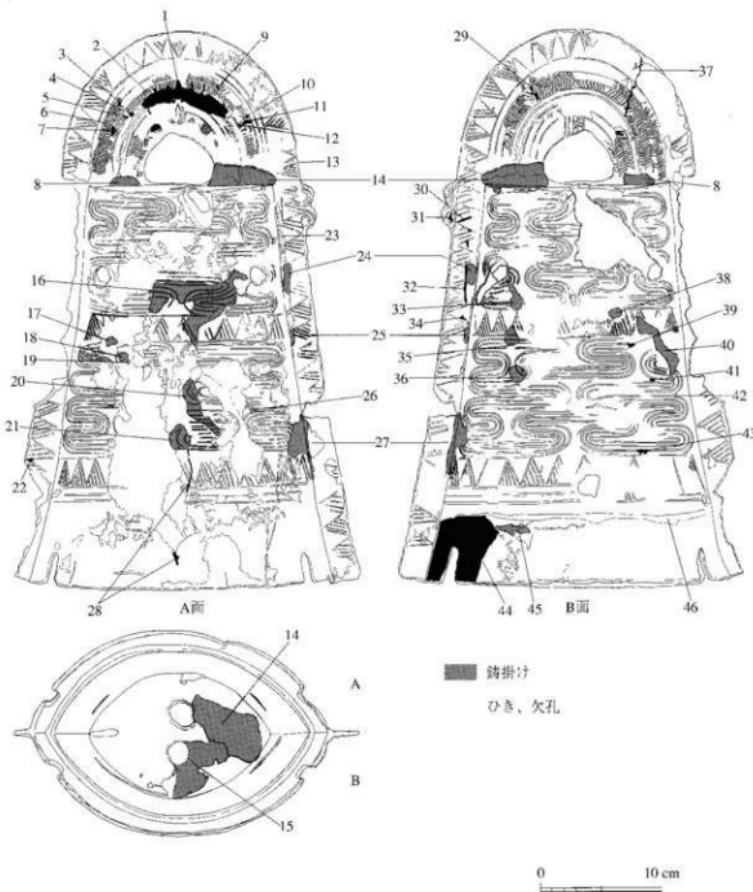
鋳型の食い違い 鋳型の大きな食い違いはないようである。

鋳上がり 多くの部分で筋掛けが行われ、これ以外にも小さな孔がいくつかあることから、多くの鋳造欠陥があったことがわかる。A・B両面とも鋳造欠陥があるが、A面に大きな鋳造欠陥が目立っている。前述のとおり舞にも大きな欠陥がある。B面裾には内面突帯外面に当たる部分に引きによる窪みが幅20.5cmにわたってできている(46)。

范傷 鉢の練杉文条線間の欠損により盛り上がる部分が多く見られる(3・4・5・6・7・9・10・11・12)。また、B面では流水文の条線間の欠損による盛り上がりもある(39・41・43)。

A面菱環後部の中央には文様がまったくなく盛り上がった部分がある(2)。これは加茂岩倉11号にもあった范傷であるが、その範囲は広がっている。また、外斜面綾杉文のL斜線とR斜線で出来る三角形の条線間が大きく盛り上がっている(1)。このように菱環後部の盛り上がりから外側の条線間に派生するような盛り上がりが増えている。

鉢のB面では綾杉文の条線間の欠損による盛り上がりや(29)、右側に斜めに延びる細長い盛り上がりがある(37)。また、鉢の文様は加茂岩倉11号と比較して、綾杉の斜線と界線とでできるカドが丸みを持つようになるなど、全体的にシャープさを欠くようになっている。また、B面右鰐では、鰐耳や右鰐鋸齒文の条線の欠損による盛り上がりや(30・31)、縱方向の細い盛り上がりがあ



第115図 川島神後鐸の鋳造状態

る(32)。A面裾と下辺黄帯の縦方向の盛り上がり(28)は、表面剥離のため途切れているが、加茂岩倉11号鐸では一連の范傷である。

B面裾の左型持の周辺が他の部分に比べて厚みを持っていることから、向的に鋳型が損傷した可能性がある(44)。加茂岩倉11号鐸では、この盛り上がりの右端に当たる部分に縦方向の范傷があることから、傷を境に右側が損傷したものと思われる。

鋳掛け 表面観察では鉢1ヶ所(8)・鉢から舞にかけて1ヶ所(14)・舞1ヶ所(15)・鱗2ヶ所(24・25)・△面7ヶ所(16・17・18・19・20・21・26)・B面6ヶ所(33・35・36・38・40・45)とA・B面両側にまたがる鱗の付け根に1ヶ所(27)で、計19ヶ所で行われている。3mmほどの小さな孔でも行われていることから、ほとんどの孔は塞がれている。足掛かりを設けるものはない。△面では身の中央に入きな鋳掛けがあるが(16・20・21)、B面では小さな鋳掛けが多い。

A面の下区右端の鋳掛けは、A・B両面と鱗にまたがる孔を一度の鋳掛けで塞いでいることから、内側から補鍛したと考えられる(27)。舞の鋳掛けは舞と鈕脚部を一度に行っていることから、内側から補鍛したことがわかる(14)。

補刻 鋳掛けが行われた部分を中心に補刻がなされている。A面では上区流文の下段から横帯にかけての鋳掛け部分とその上部において、流文の条線を補刻している(16とその周辺)。また、下区でも中央の鋳掛け部分で流文の条線を補刻している(21)。この補刻による反転部の最外周は身の中軸よりも左側に入り込んでいる。

B面では下区の鋳掛けに流水文の条線の補刻がある(36)。同範の11号鐸では下辺横帯下界線を補刻によって表すが、川島神後鐸ではB面の下辺横帯は不鮮明であるが補刻は行われていない。

(松山智弘)

9. 伝陶器鐸 [図版328~333・写真図版446~450]

出土地 大阪府堺市陶器

出土年 不詳

所有者 平泉為藏(平泉澄香旧蔵)

収蔵者 大阪市立美術館

出土状況 大阪府に在住した平泉澄香氏が旧蔵した銅鐸4個のうち、大阪府堺市陶器出土と伝えられる流水文銅鐸1個が知られる(梅原1927)。出土した年月日や地点など詳しい経緯は不明であるものの、銅鐸内面に付着する土砂や破損状況によって埋納状況を窺い知ることができる。

まず、舞内面には、キメが粗い明褐色の土砂がB面右側で厚く付着する(1)。それ以外の部分では明褐色の土砂が薄く付着するが、土砂のキメは細かい。鐸身内面に付着する土砂も舞内面と同じ状況であり、A面向かって右側に近づくにつれて土砂のキメが粗くなり、左側に近づくほどキメが細くなる。また、鐸内では暗褐色を呈する土砂の筋がA・B面で1筋ずつ観察できる(2・3)。これらの筋は鐸身内面を上方向に並行して走っており、A面では右側の型持孔の左側で接し、B面では左側の型持孔と右側で接している。おそらく銅鐸埋納後、鐸内の土砂が水気を帯びて泥状になった時期があり、その水面に含まれた有機物が沈着したために他の部位の土砂と色調が異なるのであろう。

また鉢や鋸をみると、A面に向かって右側部分の破損が著しいのに対し、左側の損傷は軽微である。以上の点を考え合わせると、銅鐸は、鉢と裾を結ぶ中軸線がほぼ水平になるように身を横たえ、A面右側の鋸がほぼ鉢直上に向けて埋納されていたと推定できる。

型式 外縁付鉢2式

文様構成 三区流水文

同范銅鐸 伝福井鐸（明大1号鐸）・加茂岩倉21号鐸・氣比4号鐸

法量 総高現 44.9cm 最大幅現 27.8cm

舞長径（A面） 15.3cm 舞長径（B面） 15.3cm 舞短径 11.0cm

裾長径（A面） 24.1cm 裾長径（B面） 24.0cm 裾短径 17.5cm

鉢 菱環と外縁からなる外縁付鉢である。外縁の端部が破損するが、鉢の高さ現11.9cm、鉢の横幅は現19.3cmを測る。鉢の元来の形状はやや横長の半円形と見られる。また、鉢孔は高さ2.7cmに対し、幅が3.9cmあり、やや縱長の半円形となる。断面形で見ると、菱環と外縁の境界は漸移的である。菱環の厚さは、中央付近で0.9cm、A面左側で1.3cm、右側で1.3cmを測る。外縁の厚さは0.2cmを測る。

A面の文様を見ると、外縁第1文様帯は内向鋸齒文である。このうち、鉢の左半分は鋸齒文Lであり、右半分は鋸齒文Rとなる。内縁との界線が左鉢脚付近で2条化する（4）。外縁第2文様帯は無文帯である。菱環の外斜面は綾杉文CDである。この綾杉文CとDが向き合う鉢の中央付近の5では、縱方向に伸びる鋸出し線が1条微かながらも観察できる。これは、鋸型に文様を彫りこむ際の割付線である可能性がある。菱環の内斜面は、綾杉文CDの下に連続渦文Zを描く。その渦文の数は6個を数え、単位渦文の端部が接続しない第1種に分類できる。

B面の文様構成はA面と基本的に同じであるが、外縁第1文様帯と第2文様帯の間を走る界線が2条化する現象は認められない。菱環中央の6には縱方向の鋸出し線が僅かに確認できる。また、菱環の内斜面の連続渦文Zには5個の渦文が確認できるものの、本来はその左端と右端にさらに1個ずつ渦文が存在した可能性がある。

鐸身 鐸身の高さはA面33.2cm、B面33.1cmを測る。舞から裾までの距離はA面で32.6cm、B面で32.5cmである。器壁の厚さはA面で0.3cm、B面で0.3cmとなる。側面から鐸身を見ると、舞から裾部にかけて外反しており、その外反率（舞・裾線からの最深値÷舞から裾の長さ×100）はA面側で2.5%（ $0.8 \div 32.6 \times 100$ ）、B面側で2.8%（ $0.9 \div 32.5 \times 100$ ）である。

A面の文様構成を見ると、三区流水文を主文様とする。流水文は上区が8c7x、中区と下区が6c4xである。反転方法はいずれもE反転であり、1本の軸線をおいて4本の線が反転する。

A面の第1横帯は連続渦文Zである。渦文は7個を数え、端部が繋がらない第1種である。第2横帯も連続渦文Zである。端部が繋がらない第1種であるが、渦文数は不明である。下辺横帯は鋸齒文Lであり、その下側の界線は4条である。

B面の第1横帯ではシカ列などの絵画が鋸出し線で表現される。いずれの図象も対象が鋸出し線で表現される「凸線画」である。横帯の左半分で4頭のシカが確認できるが、鋸出しが不鮮明な現状では、爪先が枝分かれするかどうか定かでない。シカ列のうち左側の2頭は脚のみである。最後尾のシカの尻は、上区と中区の流水文のc反転部を結んだラインよりも内側に位置すると見られる。また、左から3頭目と4頭目のシカの頭は「V」字形で表されるようであり、現状では角が認められない。

このほか第1横帯の中央からやや右側付近の7では、シカとは異なる図象が不鮮明ながらも観察できる。同範銅鐸の気比4号鐸を参考にするならば、弓を持つ人物の可能性がある。また横帯の右側部分にも絵画が本来鋳出されるはずであったと見られるが、伝陶器鐸では確認できない。

第2横帯は連続渦文Zである。渦文の頭数は不明だが、端部が繋がらない第I種に分類できる。

下辺横帯は鋸歯文Lである。下辺横帯下の界線の本数は不明である。

A面右側の8では、裾の丈が他の部位に較べてやや短くなり、端部も丸みを帯びる。「ひき」のためであろう。その他の部位では平滑な面を持ち、裾を切断する際に面取り整形したものと見られる。現状では研磨痕は観察できないがA面裾端部の9では工具痕らしき凹凸が認められる。また、錐裾B面錐裾内面の10では、工具痕と見られる条線が確認できる。

舞 舞の平面形はアーモンド形を呈する。舞の扁平率(舞短径÷舞長径×100)は、A面で71.9% ($11.0 \div 15.3 \times 100$)、B面で71.9% ($11.0 \div 15.3 \times 100$)である。A面・B面の型ズレは特に認められない。舞面が傾斜する肩下がりは、A面で0.7cm、B面で0.7cmを測る。錐脚間で錐脚駆状のバリが僅かに生じるが、0.1cm以下である。

鱗 鱗の幅はA面側の左肩で2.1cm、左裾2.6cm、右肩で現1.8cm、右裾は現2.1cmである。B面側は左肩で現1.8cm、左裾で現2.1cm、右肩で2.1cm、右裾で2.6cmとなる。

A面・B面ともに、左側の鱗は鋸歯文Lであり、右鱗は鋸歯文Rを配する。鋳出しの不鮮明なB面右鱗を除くと、鱗の下端から約2.0cm離れた位置に3条の平行線が引かれ、鋸歯文帯の停止線とする(11~13)。また、文様とは異なる鋳出し線が錐身のラインと並行して走っている(14~17)。この鋳出し線から内側では鋸歯文の線が太くなり、しかも頂角の外郭線だけで、充填斜線は認められない。

A面左肩には「B」字形の筋耳が認められる。右側にも飾耳があったと見られるものの、破損によって失われており、基部が破面となっている。飾耳の脚線は錐身と接するまで伸びる。A面側では、飾耳の脚線の間にさらに各1本の線が認められるが(18・19)、鋳出しの悪いB面では確認できない。また錐B面外縁の右端の鋸歯文は、錐と鱗との境界にまたがっており、飾耳の脚線が観察できない(20)。

鱗の厚さは肩付近の端部で約0.4cm、基部で約0.2cmである。しかし、鱗の下方に向かうにつれて厚みが増し、A面左の鱗下端では端部で0.8cmに対して基部で0.3cmを測る。

内面突帯 内面突帯は1条である。鰹からの距離はA面4.5cm、B面4.4cmのところに、幅0.8~1.2cm、高さ0.2~0.5cmの突帯が1条巡る。その断面形は台形を呈するが、錐身に近づくにつれて上面の稜線がシャープとなる。内面突帯が舌との接触によって摩滅した可能性がある。ただし、A面の21・22やB面の23・24で一部不整形となるのは、铸造欠陥と見られる。

型持 舞に2ヶ所、錐身上半にA・B両面で各2ヶ所、裾もA・B両面で各2個の計10ヶ所で型持との接触痕が確認できる。

このうち舞の型持は2山と見られる。錐脚から舞中央にかけて铸造欠陥が生じ、大きな穴孔となっており、A面側の一部を除いては、錐掛けの際に作出した擬似的な型持孔である。A面側で長径1.5cm、短径1.1cmである。また、B面側では長径1.5cm、短径1.3cmを測る。型持孔は不整円形であるが、擬似型持の形状は正円形(截頭円錐)であったと見られる。

錐身上半のA面左型持孔は高さ1.2cm、幅1.5cm、舞からの距離5.9cmである。またA面右では高

さ1.5cm、幅1.4cm、舞からの距離5.6cmを測る。B面に向かって左側の型持孔は高さ1.4cm、幅1.3cm、舞からの距離5.6cmである。右側の型持孔は高さ1.4cm、幅1.3cm、舞からの距離5.8cmである。いずれの型持孔も不整円形を呈するものの、鋤身内面から観察するかぎり、鋤身上半の型持は、本来はいずれも正円形（截頭円錐）であったと見られる。

鋤部の型持孔は、いずれも逆「U」字形を呈する。A面左側は高さ2.5cm、幅約3.9cmを測り、右側は高さ1.8cm、幅1.4cmである。B面左側は高さ2.0cm、幅1.2cmで、右側は高さ2.7cm、幅1.0cmとなる。

鋤上がり 鋸造欠陥による欠孔は、舞で1ヶ所(25)、鋤身A面で3ヶ所(26~28)、鋤身B面で5ヶ所(29~33)で認められる。文様の不鮮明な箇所もところどころで認められる。また、器壁が肉厚となるために溶鋼の凝固が遅れやすい部位を中心に「ひき」が発生する。

銅鋤の外表面で「ひき」が発生する箇所では、その裏側部分でも「ひき」が発生する場合が多い。例えば、内面突帯の位置する内・外表面でも「ひき」が観察できる。またB面鋤付近では、横長の「ひき」が幾筋も認められる。このほか、鋸と鋤身の境界近くが「ひき」のために僅かに窪むのに加え、B面鋤板の34・35も「ひき」と見られる。

文様の鋸流れが6ヶ所で確認できる(36~41)。鋤身A面の36は下区流文の一部が流れたのであろう。鋤B面の37と38は連続渦文の一部と見られる。また、鋤身B面の39~41は流文の一部であろう。

范傷 范傷は、鋤A面で8ヶ所(42~50)、鋤身A面の12ヶ所(51~62)、A面左鋸の2ヶ所(14・63)、右鋸の5ヶ所(15・64~67)、鋤B面の7ヶ所(68~74)、鋤身B面の10ヶ所(75~84)、B面左鋸の1ヶ所(16)、右鋸の2ヶ所(17・85)で確認できる。

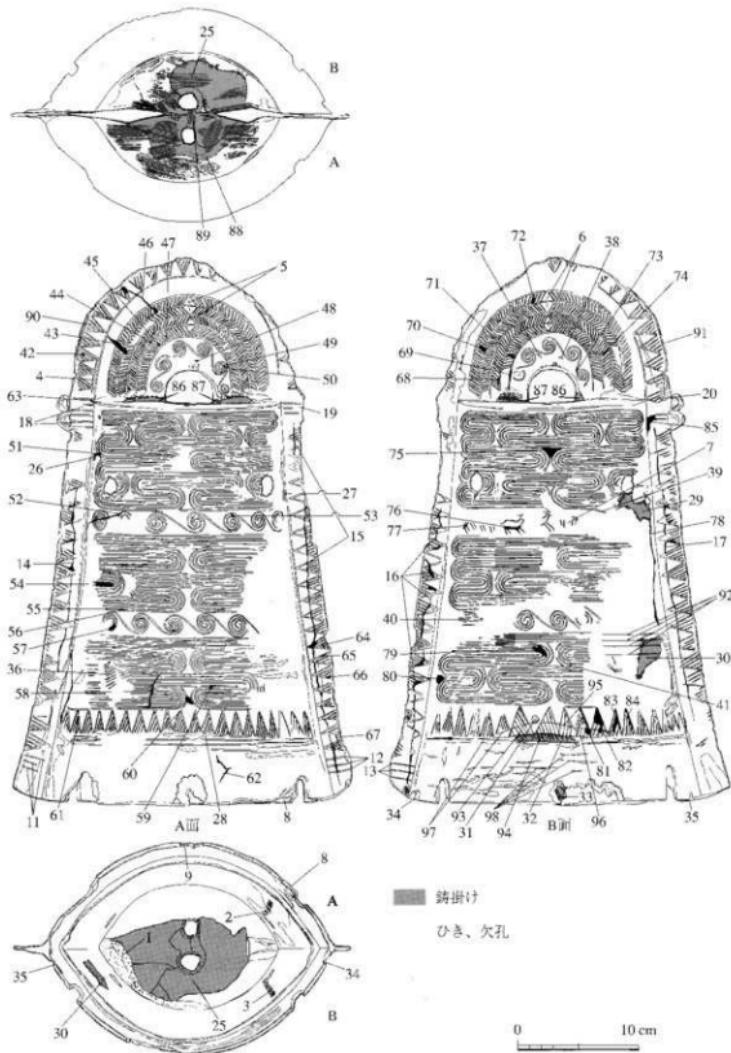
このうち14~17・78は、鋤型の鋸の付け根付近で発生した鋤型の破損を補うため、鋤型に補修材を貼った結果と見られる。すなわち、鋤型の欠損部分を補う補修材と本来の鋤型との間に生じた隙間に溶鋼がまわり、製品では鋤出し線として表出したと見られる。鋸の鋸齒文の頂角が、この鋤出し線を境に外郭線だけとなるのは、補修材に鋸齒文の外郭線のみを彫り込んだためであろう。

鋤掛け 鋤掛けは、鋤で2ヶ所(86・87)、舞で1ヶ所(25)、鋤身B面で5ヶ所(29~33)の計8ヶ所で認められる。

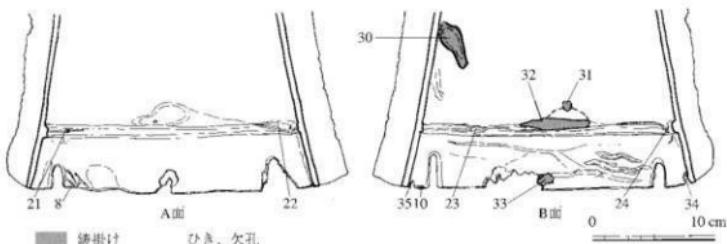
このうち、鋤の鋤掛けは、鋤脚に生じた「ひき」に対して行われる。これらの鋤掛けと本来の銅鋤との境界部分には工具による刺突痕が観察できる。外表面に鋤掛け用の鋤型を当てがい、銅鋤の内面から鋤掛けしたと見られる。

舞の鋤掛けは、鋤脚付近で生じた鋤造欠陥を埋めるためのものであり、少なくとも5回にわたって溶鋼を注いでいる。銅鋤の内面から見ると、この鋤掛け部分の表面は平滑であり、各単位間でも面が揃う。その一方で、外表面では僅かな凹凸が生じている。しかも舞外表面の一部では、鋤掛けの際の溶鋼が鋤造欠陥部から溢れた結果、銅鋤の器表面に覆い被さる箇所が認められる(88)。このことから考えると、舞の内面に鋤掛け用の鋤型を当てがい、外側から溶鋼を流したのであろう。また、舞の持孔が擬似的であることを既に指摘したが、型持孔の外周には研磨による面取りが認められず、内面に近づくほど裾広がりとなる。そのため、鋤掛け後に穿孔した可能性は低く、鋤掛け用の鋤型に型持が設けられていたと見られる。

鋤掛けの外表面に工具による刺突が施されるほか、工具痕や研磨痕が観察できる。また、89では、



第116図 伝陶器鐸の鋳造状態（外面）



第117図 伝陶器鐸の铸造状態（内面）

2つの型持孔とを結ぶ溝状の溝みが認められる。

補刻 補刻は、鉢A面に1ヶ所(90)、鉢B面に1ヶ所(91)、鋒身B面7ヶ所(92~98)の計9ヶ所で確認できる。

鉢A面の90と鉢B面の91では、外縁文様帯の外周界線が補刻される。また、鋒身B面の92は鋲掛け30に対応する。流水文を補ったと見られるが、本米の流水文と比べて線の間隔が広く、反転もしていない。また、93~96の補刻は下辺横帯の不鮮明部分を補刻するが、鋲掛けの31や32に対応する。このうち左2つの鋸歯文を充填する斜線はRであるのに対して(93・94)、右の2つはLとなっている(95・96)。本来の鋸歯文を充填する斜線はLであるので、左の鋸歯文から順に補刻に着手し、途中で誤りに気付いて斜線の方向を変えた可能性がある。

下辺横帯下の界線も補刻されるが(97)、「ひき」や鋲掛けとの境界で生じたくぼみに沿った形となっている。また、下辺横帯よりもさらに下の部分で水平方向に「ひき」が発生しており、この「ひき」に対しても補刻が行われている(98)。下辺横帯下の界線と誤認したのであろうか。(北島大輔)

10. 上牧鐸 [図版334~338・写真図版451~454]

出土地 奈良県北葛城郡上牧町上牧字觀音山

出土年 文化年間初め(1804~1817年)以前

所有者 静岡大満宮

収蔵先 静岡市立登呂博物館

出土状況 銅鐸の箱書きに「大和葛下郡上牧村觀音山出土」と記されていることから、出土地が判明したもので、出土状況の詳細は不明である。銅鐸が譲渡された経緯により文化年間初め(1804~1817年)以前に出土したことが知られている(梅原1927)。

型式 外縁付鉢1式

文様構成 四区裂波櫛文

同范銅鐸 加茂岩倉17号鐸

法量	總高	30.0cm	最大幅	17.8cm	重量	2.0kg
	舞長径(A面)	10.9cm	舞長径(B面)	10.9cm	舞短径	7.8cm
	裾長径(A面)	15.6cm	裾長径(B面)	15.8cm	裾短径	11.8cm

鋤 菱環と外縁よりなる外縁付鋤である。高さは7.9cm、幅13.2~13.3cm、鋤孔の高さは3.5cm・幅5.1cmを測る。菱環はA面で幅2.45~2.8cm、B面で幅2.5~3.0cm・厚さは中央部で0.9cm・左右端1.4cmである。外縁はA面で幅1.2~1.5cm、B面で幅1.0~1.65cm、厚さは中央部で0.4cm、左右端で0.65cmである。A・B両面とも外縁右側に鋤型のズレによる段が顕著に認められ、幅は最も大きいところでA面0.8cm、B面0.4cmである。

文様はA面の外縁左側や右側の一帯に内向する鋸歯文Lが見られる。菱環は外斜面の中央に平行斜線文LとRを上下に組み合わせた軸のない綾杉文C状の文様があり、内斜面には中央に内向する鋸歯文Rが僅かに見られる。

B面は外縁には内向する複合鋸歯文Lが入っており、菱環は外斜面中央付近を中心に外向する鋸歯文Lがあるが、内斜面では文様は観察できない。

鐸身 高さはA面22.2cm、B面21.9cm、厚さは0.3~0.4cmである。身は舞から裾部にかけてやや外反し、その外反率(舞・横線からの最深値÷舞から裾の長さ×100)はA面側で1.39% (0.3÷21.5×100)、B面側で1.38% (0.3÷21.2×100)である。

A面の文様は、四区袈裟擗文で横帶が縦帶に優先するものである。出土後に左縦帶付近以外は研磨されていることから、第1~3横帶、下辺横帶、中上縦帶などに文様が不鮮明になった部分が認められる。第1横帶は幅1.75cm、第2横帶は幅1.8cm、第3横帶は幅1.8cm、左上縦帶は幅1.65cm、左下縦帶は幅1.7cm、中上縦帶は幅1.8cm、中下縦帶は幅1.8cm、右上縦帶は幅1.9cm、右下縦帶は幅1.8cmである。

各区の大きさは、上左区が下辺5.1cm・高さ5.9cm、下左区が上辺5.2cm・下辺5.9cm・高さ5.7cm、上右区が下辺5.0cm・高さ5.8cm、下右区が上辺5.1cm・下辺5.8cm・高さ5.6cmである。横帶と縦帶の中には斜格子文が充填されているが、斜格子の交差角度は縦帶に対し横帶が鋭角になっている。下辺横帶は幅1.85cmで、一部に鋸歯文Rが見られるが、左端には鋸歯文Rの半単位文が入っている。下辺横帶下界線は2条である。

B面の文様は、四区袈裟擗文で横帶が縦帶に優先するものである。出土後に右側縦帶付近以外が研磨されており、第1横帶と下辺横帶、中下縦帶などに文様が一部見えない部分がある。第1横帶は幅1.8cm、第2横帶は幅1.85cm、第3横帶は幅1.8cm、左上縦帶は幅1.8cm、左下縦帶は幅1.9cm、右上縦帶は幅1.9cm、右下縦帶は幅1.9cmである。

各区の大きさは、上左区が上辺4.7cm・下辺5.2cm・高さ5.6cm、下左区が上辺5.3cm・下辺6.0cm・高さ5.7cm、上右区が上辺4.5cm・下辺4.8cm・高さ5.6cm、下右区が高さ5.9cmである。横帶・縦帶の中には斜格子文が充填されているが、斜格子の交差角度は縦帶に対し横帶が鋭角になっている。また、下辺横帶は幅1.75cmで、中央付近から右側に鋸歯文R、右端には半単位の鋸歯文状の界線が僅かに見られる。下辺横帶下界線は2条である。

櫛端部はA・B両面ともほとんど欠損しており、原状を留めていない。

舞 舞はアーモンド形を呈しており、舞の扁平率(舞短径÷舞長径×100)はA・B両面とも71.5% (7.8÷10.9×100)である。舞の中央部には高さ0.1~0.3cm程のバリがある。また、舞面が傾斜する肩下がりはA・B両面ともほとんど見られない。

上面から見ると、A面に対しB面が左側に0.8cmも片寄った位置にあり、鋳造時に鋤型が大きくズれていたことがわかる。

鍾 幅はA面で左肩1.1cm・左裾1.7cm・右肩1.2cm・右裾1.1cm、B面は左肩1.1cm・左裾1.3cm・右肩1.2cm・右裾1.3cmである。

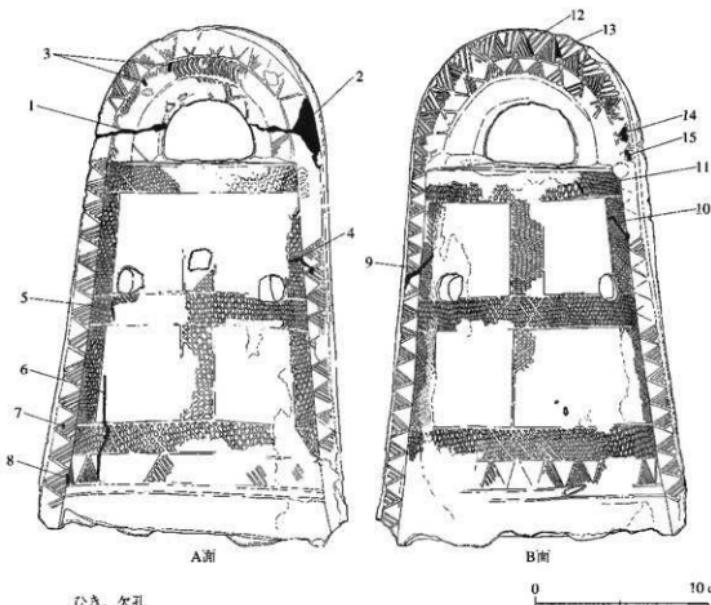
文様はA面右側には鉢外縁と同様に内向する鋸歯文しが入っているが、これに対し左側には外向する鋸歯文Rが見られ、両者が接する左肩部の鋸歯文は複合鋸歯文状となっていることが僅かに観察できる。B面は左側に鉢外縁複合鋸歯文の方向と揃えるように内向する鋸歯文しが見られるが、右側は反対に鋸歯文Rが入っていることがわかる。

内面突帯 鍾からの高さ1.5~1.6cmのところに、幅1.1~1.2cm・高さ0.25~0.3cmの突帯が1条巡っている。横断面形は低い台形状を呈しており、A・B両面の中央部を中心に突帯頂部が面をなすほど、使用痕が顕著である。A面左側の一部には鋳造時に低く変形した部分がある。

型持 舞 に1個、鐸身上半にはA・B両面とも2個ずつあり、裾部は欠損があることもあって、型持ちはほとんど観察できない。

舞の型持孔は1山である。A面側は湯が回りほとんど塞がっているが、内面より見ると本末はやや幅が広い長方形を呈しており、長さ3.5cm・幅2.5cmである。

鐸身上半の型持孔はA・B両面とも第2横带上界線をやや切る位置にある。型持孔の形状は正面から見ても判然としないが、ほぼ方形に近いものと思われ、A面右側は高さ1.6cm・幅2.1cm、左側は高さ1.8cm・幅2.0cm、B面右側は高さ2.0cm・幅2.0cm、左側は高さ2.0cm・幅2.1cmである。



第118図 上牧鐸の铸造状態